

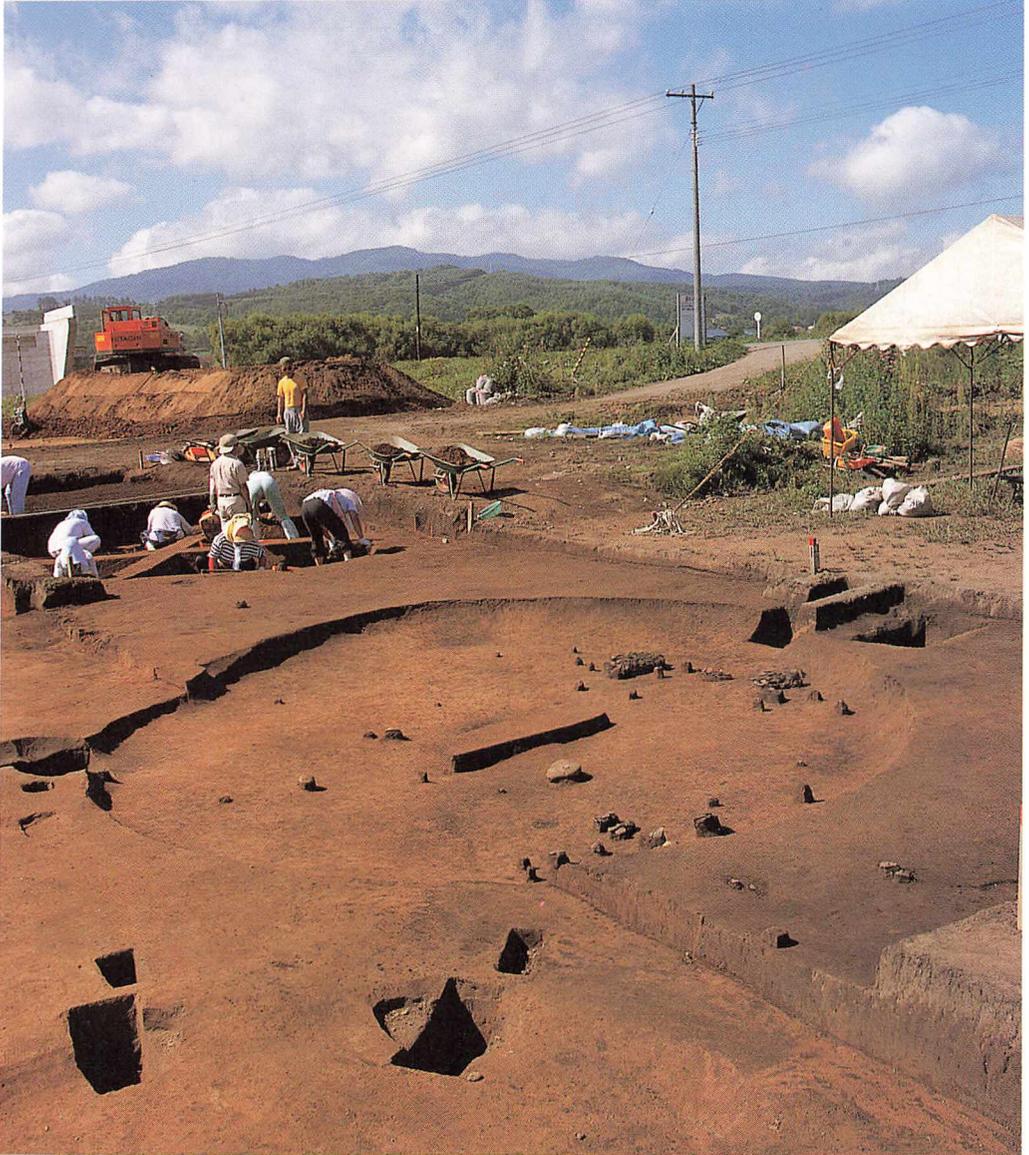
深 川 市

納内 6 丁目付近遺跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和 62・63 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 遺構調査状況



2. 遺物集中③ 出土の土器



3. 遺物集中⑥ 出土の土器



4. 納内6丁目付近遺跡、周辺の空中写真 (1948年8月撮影)

(これは国土地理院発行の約15,860分の1を複製したものである。)

例 言

- 1 この報告書は、北海道縦貫自動車道建設用地内のうち、深川市における納内6丁目付近遺跡の昭和62年度、昭和63年度発掘調査に関するものである。
- 2 本書の作成は、調査員全員の討議のもとに次のように分担執筆した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ-1・2・3・4・6、西田 茂、Ⅲ-2、Ⅳ-3・4・5・7・8・9、和泉田毅、Ⅳ-5・7・8、立川トマス、Ⅳ-5・7・8・9、石川 朗、Ⅳ-7、田中哲郎。編集は西田 茂が担当した。
- 3 Ⅴ章の執筆は、つぎの方々をお願いした。
Ⅴ-1 山田悟郎、Ⅴ-2 佐藤孝則、Ⅴ-3 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏
- 4 遺構・遺物等の写真は、主に立川トマス・田中哲郎、測量・製図は和泉田毅が担当した。
- 5 本文・図表中では、以下の略号を使用した。
H：住居跡 P：ピット TP：Tピット F：焼土 HP：住居跡の小ピット
HF：住居跡の焼土
遺物分布図で、とくに明示のないのは以下のとおりである。
覆土遺物 ○：土 器 △：剥片石器 ▽：礫石器 □：礫
床面遺物 ●：土 器 ▲：剥片石器 ▼：礫石器 ■：礫
- 6 遺構の規模は、確認面における大きさを、単位mで示した。
- 7 石器等の大きさは、長さ×幅×厚さ、単位cm、破損品は()で示した。
- 8 調査にあたっては、下記の機関および人々の指導・助言をいただいた。(順不同、敬称略)
深川市教育委員会、斉藤 傑、瀬川拓郎、川内谷 修、杉浦重信、氏江敏文、鈴木邦輝、因幡勝雄、佐藤和利、佐藤訓敏、北沢 実、磯部敏也、上野秀一、羽賀憲二、藺部真幸、直井孝一、上屋真一、松谷純一、藤田光一、渡辺俊一、宮夫靖夫、工藤 肇、横山英介、林 謙作、木村英明、大貫静夫、野村 崇、赤松守雄、山田悟郎、平川善祥、卜部信臣、中谷良弘、福岡イト子、江尻真誠、池田輝海、田中利一、中井清治、小西昇一、宮田正雄、塩崎欣作、東 千平、川中純一、竹中 実、前田清一、矢野光計、菅原正盛、谷岡 武、壺田正太郎、金川幸次郎、橘 博、森 裕、福岡 孝、吉留秀敏。

目 次

例 言

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 調査の概要	2
II 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡	10
1 位置と環境	10
2 周辺の遺跡	11
III 調査の方法、土層の区分と遺物の分類	17
1 調査の方法	17
2 土層の区分	24
3 遺物の分類	36
IV 遺構と遺物	39
1 はじめに	39
2 VIII層（砂礫層）の遺物	49
3 ハ層の遺構と遺物	54
4 ロ層の遺構と遺物	57
5 イ層の遺構と遺物	72
6 VI層・VII層（洪水砂層）の遺物	90
7 V層の遺構と遺物	93
8 III層・IV層の遺構と遺物	182
9 I層・II層の遺構と遺物	226
10 遺構・遺物の説明表	234
写真図版	255
V 成果と問題点	341
1 旧河道跡の埋積土から産出した花粉・孢子について(山田悟郎)	341
2 納内6丁目付近遺跡のTピットについて(佐藤孝則)	346
3 納内6丁目付近遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析 (中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏)	353

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
 事業委託者 日本道路公団札幌建設局
 事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名 ^{おきひない} 納内6丁目付近遺跡（北海道教育委員会登録番号：E-10-40）
 所在地 深川市納内町字納内 6133 ほか
 調査年度・調査面積及び調査期間

調査年度	調査面積	調査期間（発掘期間）
62	5175 m ²	昭和62年4月1日～昭和63年3月31日（7月27日～10月30日）
63	8350 m ²	昭和63年4月1日～平成元年3月31日（5月6日～10月28日）

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 植村 敏（昭和62年6月25日まで）

澤 宣彦（昭和62年6月26日から）

専務理事 山本 慎一（昭和63年5月31日まで）

永田 春男（昭和63年6月1日から）

常務理事 藤本 英夫（昭和63年2月3日まで）

竹田 輝雄（昭和63年6月1日から）

業務部長 間宮 道男（昭和63年4月18日まで）

伊藤 庄吉（昭和63年4月19日から）

調査部長 中村 福彦

昭和62年度 調査第3課長 鬼柳 彰

文化財保護主事 西田 茂（発掘担当者） 田中 哲郎

嘱 託 和泉田 毅

昭和63年度 調査第2課長 鬼柳 彰

文化財保護主事 西田 茂（発掘担当者） 立川トマス

嘱 託 和泉田 毅 石川 朗

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～稚内）のうち滝川から旭川については、北海道教育委員会により昭和54年10月と昭和60年8月に埋蔵文化財所在確認調査がおこなわれた。そして、昭和59年から昭和62年にかけて財団法人北海道埋蔵文化財センターが、事前発掘調査を実施した。これらの調査結果にもとづき、北海道教育委員会と日本道路公団札幌建設局との間で埋蔵文化財の保護に関する事前協議がおこなわれ、工事区域にかかる遺跡のうち路線の変更が不可能であることが判明した部分の発掘調査を、昭和60年9月から、財団法人北海道埋蔵文化財センターがおこなうことになった。

深川市納内6丁目付近遺跡は、昭和60年8月の所在確認調査によってその一部が道路工事予定地にかかることが明らかになったもので、翌昭和61年10月と昭和62年10月の二回にわたって遺跡の性格・範囲を知るための事前発掘調査がおこなわれた。発掘調査は、昭和62年7月～10月および昭和63年5月～10月に実施した。

遺跡名の「納内6丁目付近」は、1918年（大正7）刊行の『北海道史』に約30の堅穴がみられると紹介されたとき以来の呼称である。そのとき図示された堅穴群の位置は、今回の調査区域からはいくぶん西北に位置しているが、ひと続きの遺跡として納内6丁目付近遺跡の呼び名を使用している。

4 調査の概要

発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道縦貫自動車道工事予定図1,000分の1平面図を使用した。発掘区の設定は、昭和61年10月の試掘調査で設定したグリッドにならって、以下のようにおこなった（図I-3・4）。まず、工事予定地センターラインのSTA164、STA165をそれぞれM-40、M-50とする。これを基軸線として、10mの方眼を設定する。この10mの方眼は、南西端の交点のアルファベットと数字との組み合わせで呼称される（例：N-35）。さらにこの10mの方眼は、5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計回りの南西端からa、b、c、dと呼ぶ（例：N-35-b）。

なお、基軸線に用いた点の平面直角座標は第Ⅷ系で、STA164：X=-31248,125、Y=-6481,586、STA165：X=-31148,190、Y=-6478,551である。

地 形

図I-3は、工事予定図をもとに作成した地形図である。これによれば、調査予定地は石狩川に面した河岸段丘で、標高66m～70mのところにあたる。南北に走る幅広い道路は市道納内6丁目線、これに直行するのは市道南3条乙線である。その周囲は広い区画の耕地で、民家は点在している。矩形の耕地は図の印では水田となっているが、調査時には、水田減反政策を反映してか4分の1程は麦・小豆・タマネギ・メロン・カボチャなどの畑であった。耕地の縁に直

行して延びているのは用水路である。

地区・沢の名称

調査予定地が道路により寸断されているので、この市道を境として東地区、西地区、南地区と呼ぶこととし、市道部分は道路地区とした。発掘調査は道路の切り替え工事と並行しながら行なったので、小区域の調査の繰り返しになった(図 I-4)。図 IV-1-1・2 は、調査時に作成した地形図である。1 はⅣ層(南半)やⅤ層(北半)を掘り終えたときのもの、2 はⅦ層のなかのⅠ層に相当する。Ⅲ層とⅣ層は縄文時代前期・中期の包含層、Ⅴ層は縄文時代早期の包含層であり、Ⅰ層は縄文時代早期の包含層である。1・2 はともに未調査区域と削平部分とがあって、地形判読は容易でないが、共通する特徴は見て取れる。すなわち、東西に走る沢地形が3本みとめられることである。これを北側のものから順に北の沢、中の沢、南の沢と呼ぶこととした(図 I-4)。

遺跡の概要

竪穴住居跡 16、土壌 6、Tピット 23、焼土 23 が検出された。竪穴住居跡は、縄文時代早期後半のもの 13、縄文時代前期のもの 1、縄文時代中期前半のもの 2 である。このうち縄文時代早期後半のものは、東釧路Ⅲ式土器との関係が推定されるもの 2、中茶路式土器の時期のもの 10、東釧路Ⅳ式土器の時期のもの 1 である。中茶路式土器の時期のものは、狭長な台地状のところに密集したものと、比較的低い場所に散在して検出されるものがある。これらの平面形は長径 5~8 m の隅丸長方形で、中心部近くに焼土のあるものが 9 ある。

Tピットは、22 基が南端近くに集中しており、残り 1 基は北東端にある。大きさは長さ 1.10 m~2.15 m で、墳底平面の長幅比が 5:1 よりも大きな細長い形態がほとんどである。集中して検出されたものなかには、掘り込まれた土層から判断すると、縄文時代中期よりも新しい時期と推定できるものがある。

遺物は 50,000 点余出土している。このうち、土器が 15,900 点余を占め、その 7 割以上が中茶路式土器である。ほかにそれぞれ少量ではあるが、東釧路Ⅲ式土器、東釧路Ⅳ土器、縄文尖底土器、平底押型文土器(押し引き文土器)、円筒上層式土器、北筒式土器、擦文式土器などがある。器形を復元できたものは、中茶路式土器 37 個、東釧路Ⅲ式土器 1 個、東釧路Ⅳ式土器 3 個を含む 46 個である。また、中茶路式土器の文化層から 1 m 以上も下層にある砂礫層から検出された縄文や燃糸文の土器、組紐匠痕の土器、無文の土器などが 47 点ある。

石器は石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・砥石・たたき石・石皿・台石などである。これらの多くは中茶路式土器に伴う良好な石器群をなすものであり、それぞれに特徴的な形態を指摘できる。石狩川の川原に近いこともあって、砂岩製の大きな石皿・台石が目につく。

調査区の北端近くに、縄文時代早期の泥炭層があり、ここから中茶路式土器のほかクルミ・キハダ・ブドウなどの種子、昆虫などが検出されている。

I 調査の概要

出土遺物点数一覧

種類	遺構					小計	包含層	合計
	住居跡	土 壙	Tピット	焼 土	遺物集中			
縄文早期土器	1,345				3,074	4,420	8,159	12,579
縄文前期土器							44	44
縄文中期土器	69		40		213	322	2,018	2,340
擦文土器							11	11
不明・その他	44				7	51	933	984
小計	1,458		40	1	3,294	4,793	11,165	15,958
石 鏃	13				28	41	79	120
石 錐	3				1	4	5	9
槍先・ナイフ	2				2	4	17	21
つまみ付ナイフ	4				8	12	34	46
スクレイパー	18		1		19	38	84	122
石 斧	11		2		4	17	318	335
たたき石	8		2		9	19	60	79
すり石	4				5	9	21	30
砥石	129				84	213	576	789
台石・石皿	62				1	63	105	168
石 錘	2					2	1	3
石 核	2					2	7	9
フレイク	8,927	1	1	510	2,011	11,450	15,701	27,151
礫	630		4		313	947	4,939	5,886
小計	9,815	1	10	510	2,485	12,821	21,947	34,768
土・石製品					6	6	5	11
金属製品								
合計	11,273	1	50	511	5,785	17,620	33,117	50,737

京都産業大学山田治氏に依頼した放射性炭素年代測定の結果は、以下のとおりである。

K S U-1558	6210±40 B P	O-30-d 区Ⅰ層木炭
K S U-1668	5490±35 B P	H-4 床面木炭
K S U-1841	6460±40 B P	H-7 床面焼土(H F-2) 木炭
K S U-1842	6340±60 B P	H-11 床面焼土木炭
K S U-1843	6300±25 B P	N-38-b 区Ⅴ層木炭(遺物集中3)
K S U-1844	4620±40 B P	I-42-b 区木炭(北の沢の中、Ⅱ~Ⅲ層)
K S U-1845	6390±35 B P	H-7 焼土(H F-1) 木炭
K S U-1846	6090±45 B P	H-16 床面焼土木炭
K S U-1847	5060±35 B P	K-24-d 区Ⅳ層木炭(H-9)
K S U-1848	6190±35 B P	J-34-d 区Ⅰ層木炭
K S U-1849	6380±50 B P	N-41-c 区泥炭層の木炭
K S U-1850	6480±25 B P	N-41-c 区泥炭層の木片

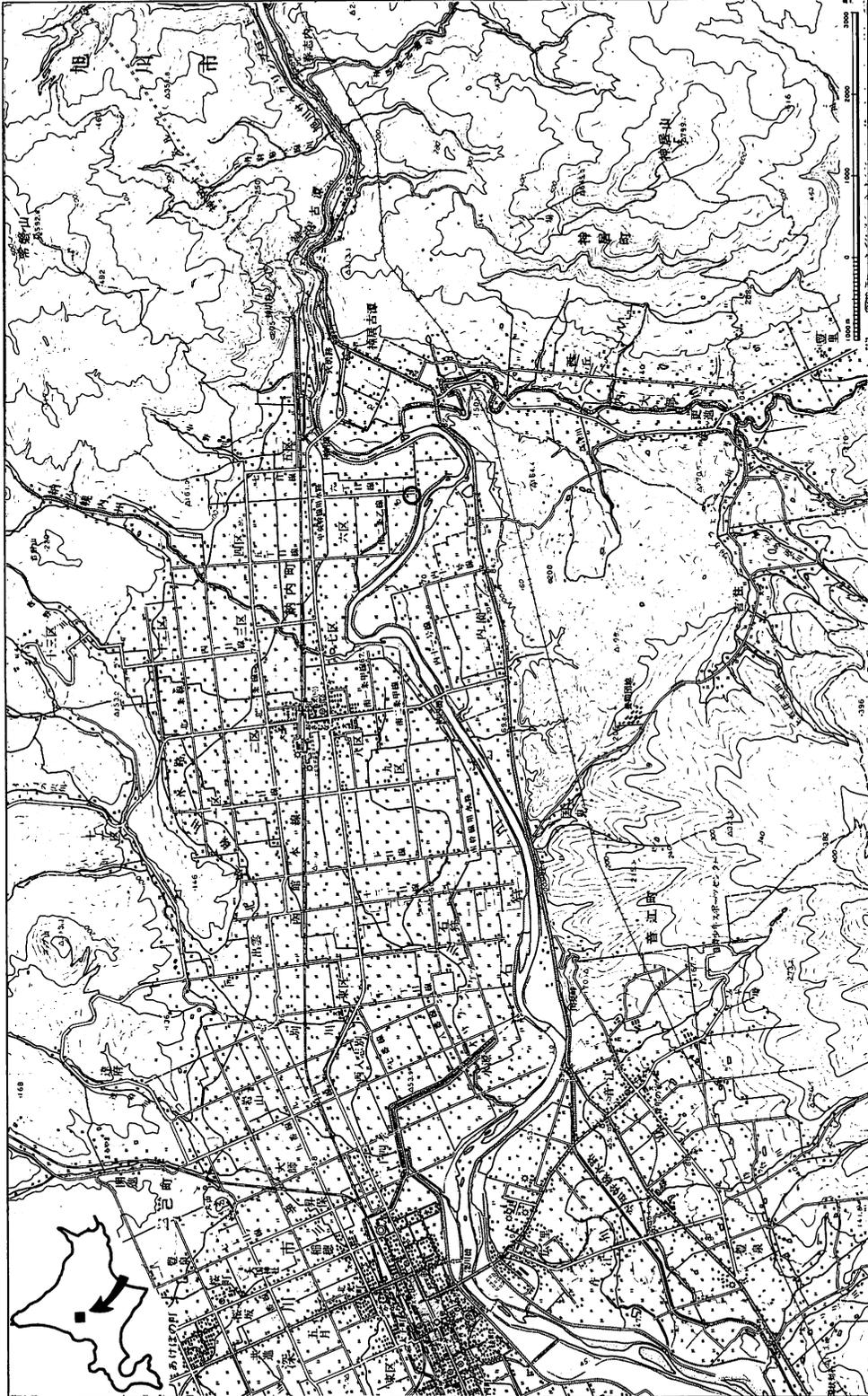


図 I-1 納内 6 丁目付近遺跡の位置 (この図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図 (「深川」を複製・縮尺したものである。)

I 調査の概要

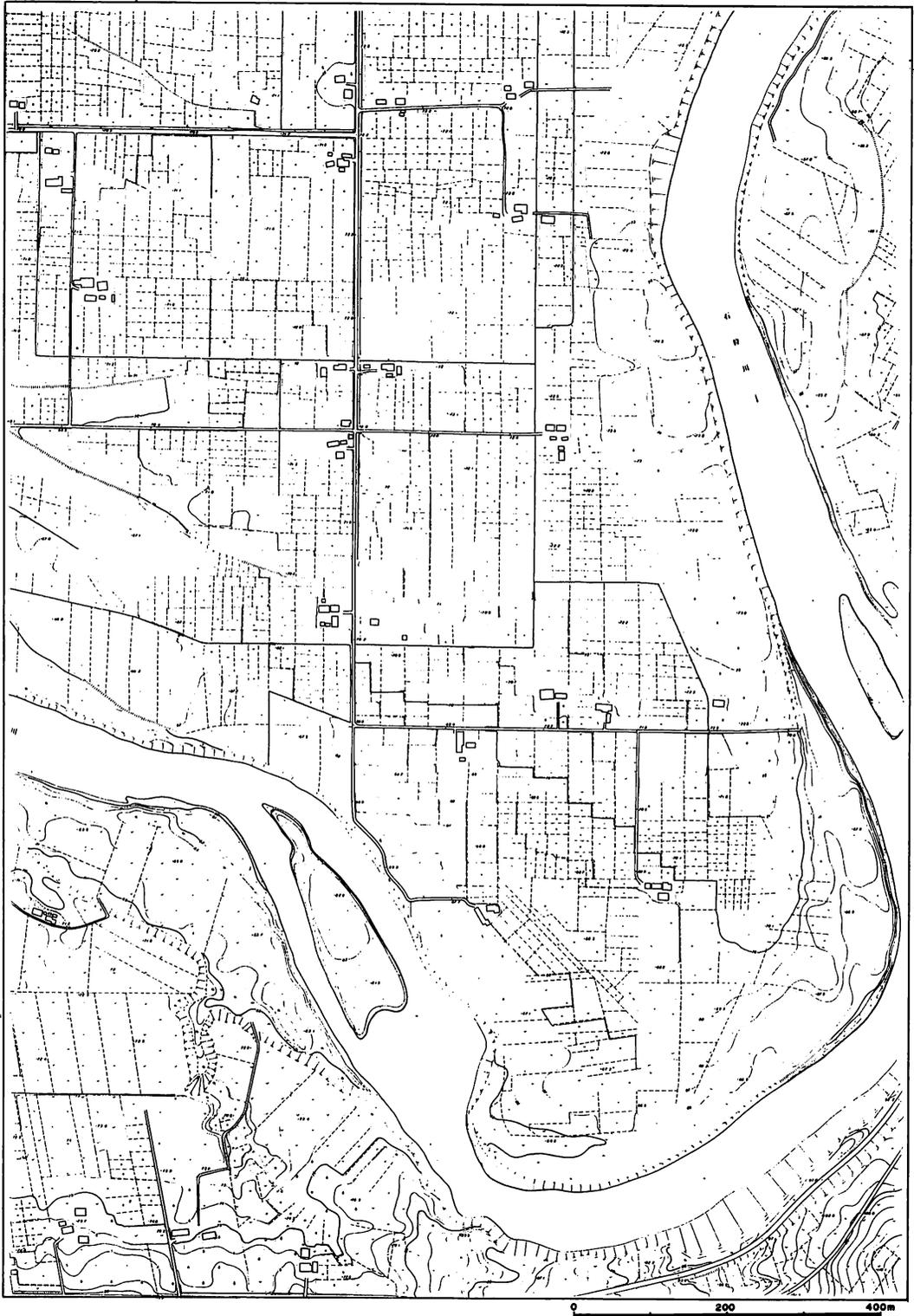
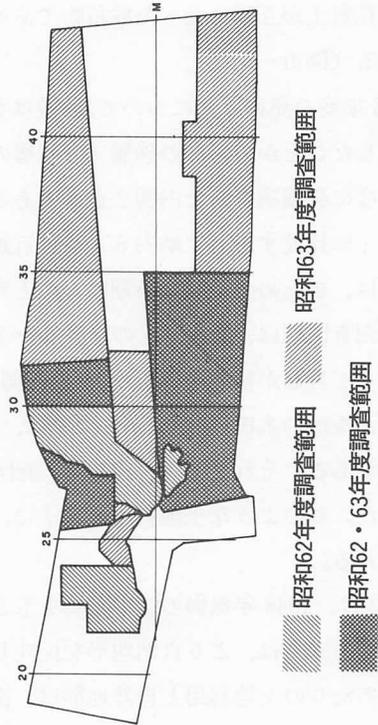
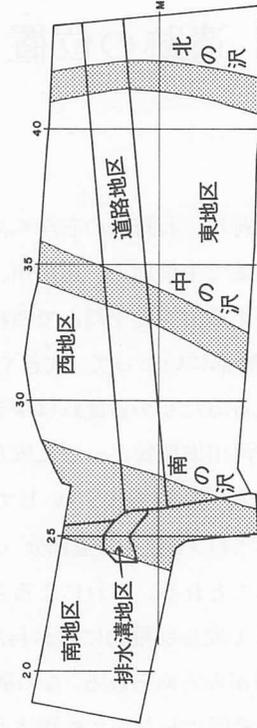
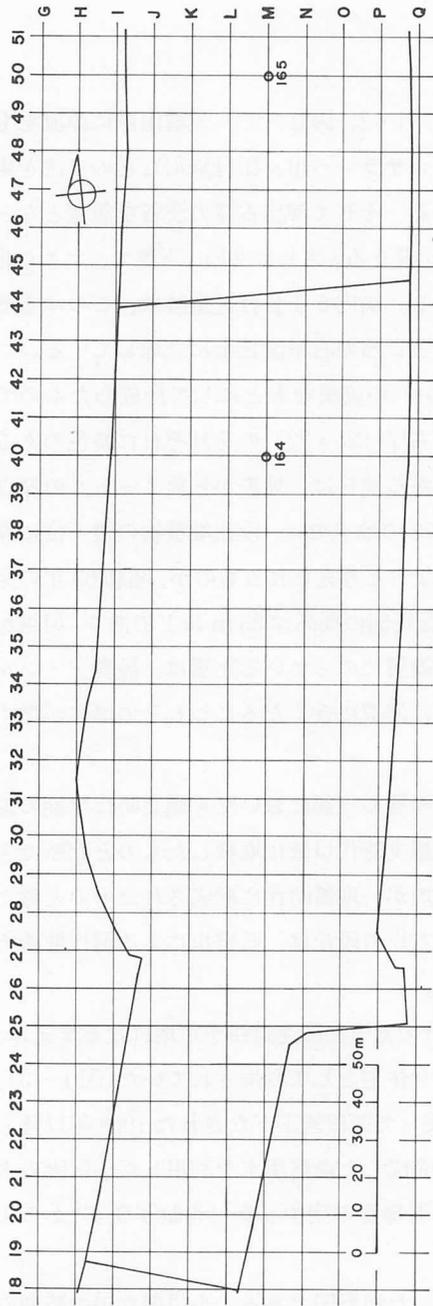


図 I-2 納内6丁目付近遺跡周辺地形図 (この図は、1948年撮影の国土地理院発行) 空中写真をもとに作成したものである。)



図I-4 調査区域とグリッド設定、地区・沢の名称

II 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

1 位置と環境

納内6丁目付近遺跡は、石狩川の右岸にある(図I-1・2、図II-2)。大雪山系に源流をもつ石狩川は、上川盆地で牛朱別川、忠別川、美瑛川、オサラッペ川、江丹別川などの支流を集め、盆地西側にそびえる山並をを刻んで西に流れている。そして神居古潭の溪谷を急流となつてくんだり、深川の平野部にいたって、大きく南に向きを変える。さらに2km下流で、大きく北西方向へ向きを変えるあたりから流れはゆるやかとなる。納内6丁目付近遺跡は、このゆるやかな流れがもたらす河川堆積物が一面に広がり始めるところの右岸段丘上に立地している。

図II-1の柱状図は、道路建設にさいしてのボーリングの成果をもとにして作成したものである。石狩川の左岸(11・23)、河道部分(15・17)、右岸(21・22)のそれぞれに特色のある土層堆積の様子がみてとれる。これによると、遺跡のある段丘は、地表から数メートルの深さ(標高63mほど)まで段丘堆積物におおわれている。22の地点では、段丘堆積物の最下位に厚さ1mほどの砂礫層がみとめられる。この砂礫層と連なると考えられるものが、昭和63年の発掘調査において広い範囲にわたって検出された。砂礫層底部の標高は63mほどであり、河道から遠ざかるにつれその厚さは増すようである。この砂礫層にのっている土層は、砂質土・シルト質土・粘質土が互層になった堆積物であるが、これは河道に近くなるにつれその厚さが増すようである(図III-5~8)。

昭和63年度の発掘調査において、砂層はもとより砂礫層の一部においても縄文時代早期の遺物が出土したことから、この砂層・砂礫層の一部は、縄文時代以降に堆積したものと判断できる。前年度に発掘調査した内園2遺跡のある左岸の台地が、地質時代に形成されたものと考えられることに比較すると、納内6丁目付近遺跡のある右岸の段丘は、石狩川による河川堆積物のうちでは、きわめて新しい時期のものと考えられる。

今回の調査区域は、河岸段丘の標高68~70mの部分である。高速道路予定地になるまえは、市道納内6丁目線が南北にはしり、その両側は水田・畑や住宅として利用されていた(図I-3)。広々とした矩形の水田・畑が広がったのは、機械力を使って造田施工がなされた1968年以降ということである。それまでは、1927年(昭和2年)に完成した灌漑用水を利用した小区画の水田であった。このような土地利用の様子は、1948年8月撮影の空中写真(巻頭写真4)からよく読み取れる。

図I-2は、1948年撮影の空中写真をもとにして作った地形図である。小規模水田の時期の土地利用のあり方は、より自然地形を反映したものとなっている。この地形図によると、今回調査したあたりの土地利用と自然地形は、次のようにとらえられる。

①周辺はゆるい傾斜の平坦地であり、納内兵村明治28年(1895)入殖兵にたいする屯田追給

地である。南北に走る6丁目通りは、改良拡幅以前であるが位置は現在と同じである。土地は、『殖民区画』をもとに東西50間(90m)、南北105間(190m)の短冊形に地割されている。②この短冊形の大区画の中は、起伏にそって方形に小さく分けられ、高いところに宅地、より低くて用水利用可能なところは水田になっている。用水不可能なところは畑地、果樹園である。③500mほど北西には明瞭な段丘崖と沢があるが、このような地形は6丁目通り近くではほとんど消滅している。しかし、71mの等高線の湾入した様子や、東西方向に長い小区画水田が多いことは、段丘崖と沢地形を反映したものと理解される。

2 周辺の遺跡

図II-2・3は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『旭川市埋蔵文化財包蔵地分布調査報告』(1983、旭川市教育委員会)をもとにして作った深川市内の周辺遺跡の分布図である。これによると、丘陵斜面や河川付近に遺跡がみつまっている。石狩川の川沿いの遺跡のほとんどは、すでに明治時代から知られていたが、耕地の造成に伴う種々の工事によって、一部が消滅したり、表面が消失したものも多い。

これらの遺跡の時代・時期・立地の特色は、発掘調査等によりその内容が比較的あきらかなものをもとに推定すると、次のようになる。

旧石器時代の遺物は、1988年の発掘調査において納内3遺跡から少量出土している。

縄文時代早期の遺跡には丘陵上の国見2遺跡、石狩川沿いの納内6丁目付近遺跡などがある。縄文時代前期の遺跡は、丘陵上の内園峠遺跡、納内3遺跡、丘陵斜面の神居古潭8遺跡、川沿いの納内6丁目付近遺跡など。縄文時代中期の遺跡は、丘陵上の内園峠遺跡、向陽2遺跡、国見2遺跡、納内3遺跡、丘陵斜面の音江2遺跡、神居古潭8遺跡などのほかに、川沿いの納内6丁目付近遺跡、納内5丁目付近遺跡がある。

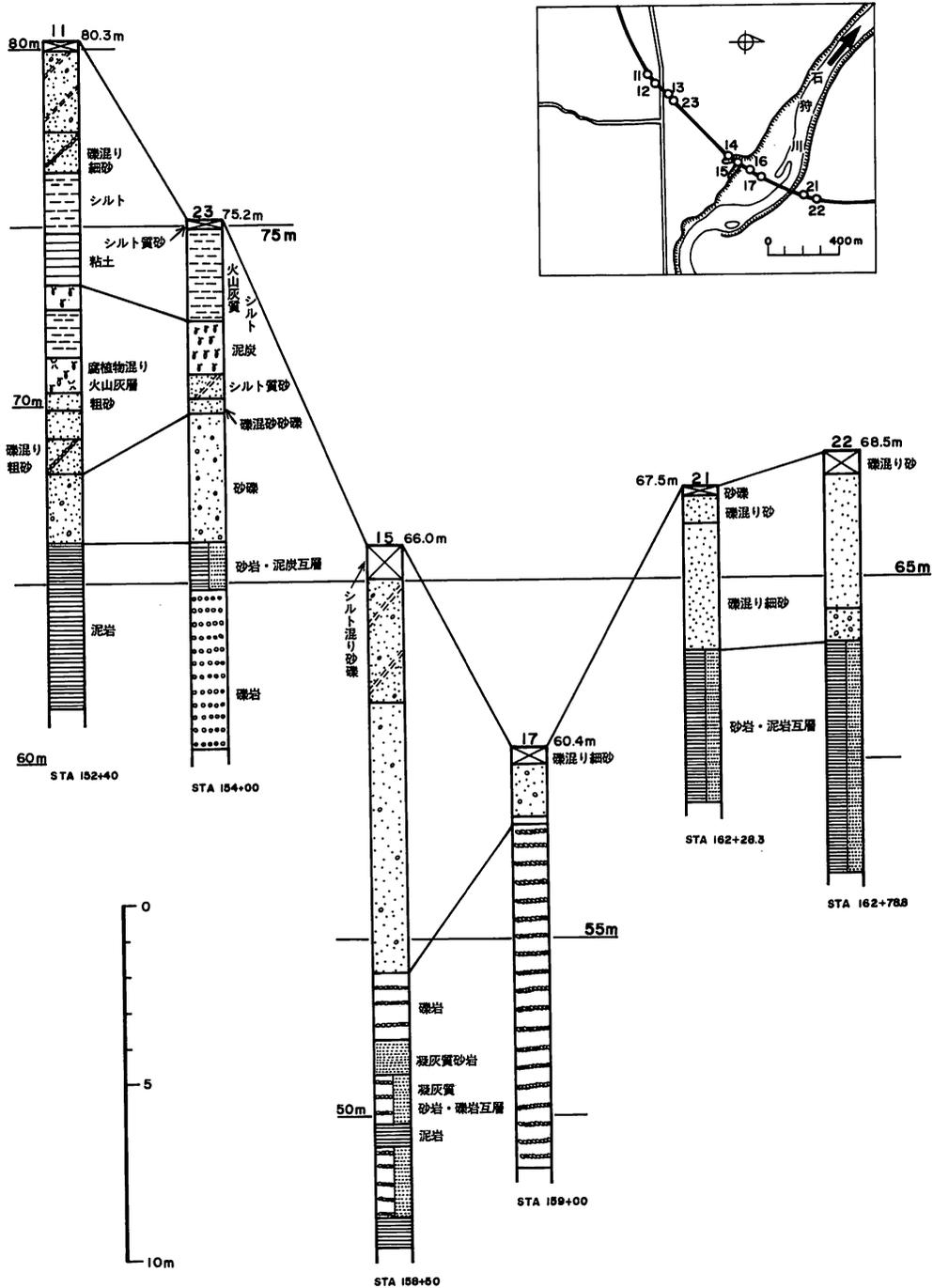
縄文時代後期の遺跡は、丘陵上の音江の環状列石、神居古潭5遺跡のほか、川沿いの東納内2遺跡、納内5丁目付近遺跡、納内4丁目付近遺跡などである。縄文時代晩期の遺跡は東納内2遺跡、神居古潭C遺跡、内園2遺跡、納内4丁目付近遺跡、メム川遺跡など川沿いに多い。続縄文時代の遺跡は、縄文時代晩期の遺跡と同じように川沿いに多いと推定されるが、明らかなものは少ない。東広里遺跡、内園2遺跡、納内4丁目付近遺跡、大排水遺跡などがこの時期の遺跡である。

擦文時代の遺跡は、石狩川沿いの竪穴群が多い。東納内遺跡、神居古潭B遺跡、東広里遺跡、納内遺跡、一巳水源遺跡、納内6丁目付近遺跡、納内5丁目付近遺跡、納内4丁目付近遺跡、納内3丁目付近遺跡、納内2丁目付近遺跡、一巳12丁目付近遺跡、神居古潭1遺跡など。このうち納内6丁目付近遺跡では、円墳から蕨手刀が出土したという記録がある。また、納内3遺跡では1988年の調査において須恵器壺が検出されている。

チャン跡は、丘陵上の内園チャン跡、独立大岩塊上の神居岩チャン跡、台地端部の音江のチャン跡のほかは石狩川に面している。北内園チャン跡、納内5丁目チャン跡、納内4丁目チャン

II 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

跡、出会沢チャシ跡、納内3丁目チャシ跡、納内北チャシ跡、納内南チャシ跡などがこれにあたる。1987年夏に当埋蔵文化財センターの発掘調査により明らかになった内園2遺跡のチャシ跡もまた石狩川に面している。



図II-1 機械ボーリングによる土層柱状図

深川市の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概観	要
1	国見遺跡	音江町国見2-1		円形土まじゅり型墳墓の記録あり。現状は水田。縄文時代中期の北筒式土器、尖頭器も出土している。藤文時代かと考えられる竪穴があり、土器、釘、マキリなどが出土した記録あり。造土工事・耕作のために大部分消滅か。
2	中島遺跡	音江町瓜里河川用地557		中央に炉のある竪穴があり、余土式土器が出土している。石核、石斧、砥石破片も出土している。
3	向陽遺跡	音江町向陽75の2		河岸段丘に竪穴の凹みがたくさん見られたが、造土工事により大部分は消滅か。藤文式土器、土師器、砥石などが出土。
4	内園遺跡	音江町内園175		北にのびる七石を東西に切った竪穴がある。チャンのなかには竪穴が認められる。昭和50年地形測量。
5	内園のチャン跡	音江町音江227		縄文時代前期・中期・後期・晩期・統縄文時代の遺物が出土している。道路工事のために一部消滅。
6	内園峠遺跡	音江町内園431		竪穴があったという。縄文時代中期とみなされる土器、石器が出土している。
7	旧スママナイ川遺跡	音江町稲田		国指定史跡。明治時代から広く知られている。縄文時代後期・晩期の墓。昭和26年～31年発掘調査。
8	音江の環状列石	音江町向陽171の1、		藤文時代の墓跡。土師器、須恵器も出土している。造土工事により大部分消滅。一部は深川市指定文化財の史跡。
9	菓納内遺跡	菓納内町5区4168		国指定史跡「音江の環状列石」の南約300mのところ。
10	音江Bの環状列石	音江町向陽164の1		内園遺跡のなかに二条の墓が半円形に残る。
11	内園チャン跡	音江町内園175		標高140mの段丘上。二条の墓がある。
12	内園チャン跡	音江町内園440		二条の墓がある。自然崩壊により一部消滅。内耳鉄鍋も出土している。昭和31年調査。
13	神居岩チャン跡	菓納内町		墓と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
14	菓納内5丁目チャン跡	菓納内町5丁目		三條の墓と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
15	菓納内4丁目チャン跡	菓納内町4丁目		道路工事により先端の一部は消滅。耕作のため表面消失か。墓の痕跡らしきものがわずかに認められる。
16	出会沢チャン跡	菓納内町7号		竪穴あり。藤文式土器、須恵器のほかに石斧、砥石、石鏝なども出土している。用水路工事等により一部消滅。
17	神居古潭B遺跡	菓納内町7号		竪穴の記録あり。耕地造成・耕作のため表面消失か。
18	北瓜里遺跡	音江町瓜里125		多数の竪穴があり、日本刀、鏝、鍬等も出土した記録あり。統縄文時代、藤文時代の遺物が出土。昭和62・63年発掘調査。
19	東瓜里遺跡	音江町瓜里19-9 ほか		多数の竪穴の石器多数出土。遺構については判然とらず。
20	中川台地チャン跡	菓納内町3902		縄文時代の遺物出土。
21	菓納内2遺跡	菓納内町7号		昭和51年発掘調査。配石のある土壌墓検出。縄文時代後期・晩期、統縄文時代、藤文時代の遺物出土。
22	中の沢A遺跡	一巳町中の沢1281		石斧、剝片が出土している。
23	中の沢B遺跡	一巳町中の沢1280		近くに湧水があり、丸のみ形石斧が出土している。
24	湯内遺跡	多度志町湯内5985ほか		昭和10年頃の造土工事とき、多数の土器片や石斧が出土したという記録あり。
25	東尚武山遺跡	菓納内町12区		湧水があり、縄文時代の石器が多数出土している。
26	神居古潭C遺跡	菓納内町7号		縄文時代中期・後期。晩期の遺物が出土している。
27	神居古潭D遺跡	菓納内町7号		土器が出土している。
28	内園2遺跡	音江町内園674ほか		縄文時代後期・晩期、統縄文時代の遺物、チャンの墓、炭焼窯。耕地造成・耕作のため表面消失。昭和62年一部発掘調査。
29	向陽2遺跡	音江町向陽171ほか		昭和61年発掘調査。縄文時代中期・後期の遺物が出土している。
30	国見2遺跡	音江町音江567ほか		昭和61・62・63年発掘調査。縄文時代早期・中期・後期の遺物が出土している。
31	菓納内遺跡	菓納内町菓納内5937ほか		約200の竪穴との記録あり。耕作・河川浸食のため一部消失か。縄文時代、藤文時代の遺物のほかに鉄刀、兜が出土。
32	一巳水源遺跡	一巳町水源		110余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のため表面消失か。藤文式土器、剝片等が出土。
33	内園3遺跡	音江町内園433ほか		耕地造成・耕作のために表面消失か。剝片等出土。
34	更進1遺跡	音江町更進140		耕地造成・耕作のために一部消失か。剝片等出土。
35	更進2遺跡	音江町更進140		耕地造成・耕作のために一部消失か。剝片等出土。
36	ヒラタンネ遺跡	音江町		昭和34年国道拡幅工事のとき、石斧7点がまとも出土した。道路工事、河川工事のために消滅か。
37	菓納内3丁目チャン跡	菓納内町菓納内		二条の墓と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
38	菓納内北チャン跡	菓納内町菓納内		半円形一列の墓の記録があるが、河川浸食のため崩壊消失か。
39	菓納内南チャン跡	菓納内町菓納内		半円形一列の墓の記録があるが、河川浸食のため崩壊消失か。
40	菓納内6丁目付近遺跡	菓納内町菓納内		約30の竪穴と、護手刀出土の円墳の記録あり。東端の一部を昭和62・63年発掘調査。縄文時代早期の住居跡など。本書。

表II-1 周辺の遺跡（その1）

41	納内5丁目付近遺跡	納内町納内6083ほか	50余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文時代中期・後期の土器、石器も出土している。
42	納内4丁目付近遺跡	納内町納内6315ほか	20余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文時代後期・晩期、続縄文時代の土器、石器が出土。
43	納内3丁目付近遺跡	納内町納内737ほか	200余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文式土器などが出土している。
44	納内2丁目付近遺跡	納内町納内160ほか	30余の竪穴、チャレンケジャンの記録あり。大正3年人骨、太刀の検出あり。察文時代の紡錘車も出土している。
45	一已12丁目付近遺跡	一已町一已6918ほか	50余の竪穴の記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文時代の土器、石器も出土している。
46	納内2遺跡	納内町納内5232ほか	石鏃、剥片が採集されている。
47	納内3遺跡	納内町納内1196ほか	昭和02・63年発掘調査。旧石器時代、縄文時代前期・中期・後期の遺物が出土している。須恵器壺もある。
48	音江1遺跡	音江町音江474ほか	縄文時代の丸のみ形石斧などが採集されている。
49	音江2遺跡	音江町音江419ほか	昭和02年発掘調査。縄文時代中期・後期の土器、石器が出土。竪穴住居跡を3か所検出している。

妹背牛町の遺跡

M1	メム川遺跡	妹背牛4978	昭和44年発掘調査。縄文時代晩期の土器、石器が出土している。水田の基礎整備事業のため表面消失。
M2	大排水遺跡	妹背牛258	造田工事のとき、炉跡が見つかったという。古い小川の近くから縄文時代、続縄文時代の土器、石器が出土している。
M3	メム川2遺跡	妹背牛	土器片あり。

秩父別町の遺跡

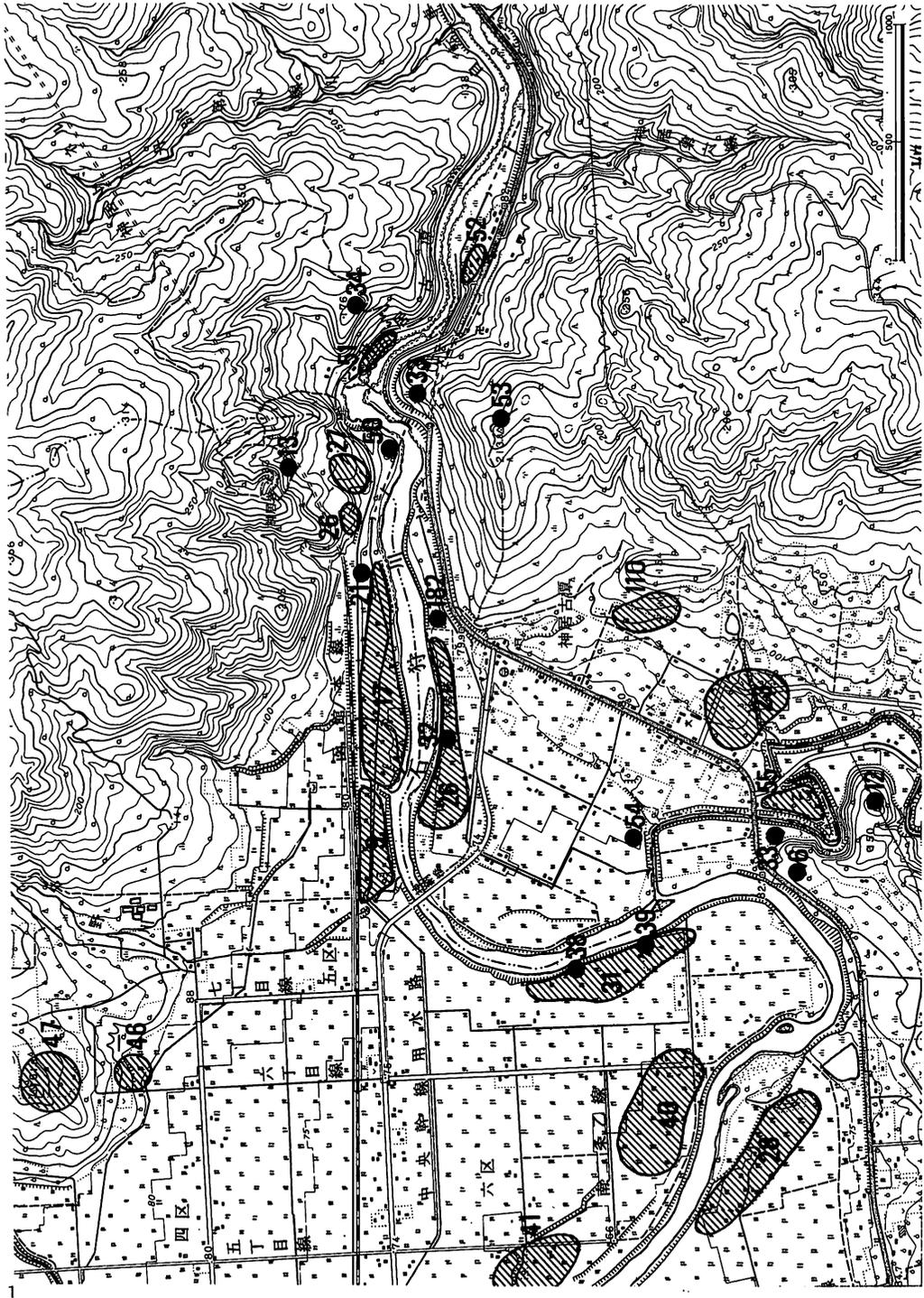
T1	中山1遺跡	中山109の101ほか	畑から石器が多数出土したという。
T2	中山2遺跡	中山109の61ほか	縄文時代の石斧、石鏃が出土したという。
T3	中山3遺跡	中山4199	縄文時代の石斧、石鏃が出土したという。
T4	秩父別1遺跡	秩父別1571	石鏃が出土している。
T5	秩父別第2遺跡	秩父別1204	石鏃が出土している。
T6	滝の上遺跡	中山109の776ほか	察文時代の住居跡があったという。

旭川市の遺跡

23	神居古潭8遺跡	神居町神居古潭70	昭和53年発掘調査。縄文時代前期・中期の土器、石器が出土している。
26	神居古潭1遺跡	神居町神居古潭112地先	北海道指定の史跡。200以上の竪穴群。察文式土器、紡錘車、鉄器などが出土している。
32	神居古潭チャーン跡	神居町神居古潭113地先	北海道指定史跡内にある。一条半円形の塚が認められる。
33	神居古潭左岸チャーン跡	神居町神居古潭19	チャンコツとの地名が伝えられているところ。昭和48年確認された。
34	神居古潭右岸チャーン跡	江丹別町春日199地先	チャンコツとの地名が伝えられているところ。昭和48年確認された。
50	神居古潭2遺跡	江丹別町春日197地先	昭和41年発掘調査。石符川の川べりに竪穴が残っている。
51	神居古潭3遺跡	江丹別町春日201地先	昭和55年範囲確認調査。縄文時代の土器、石器などが出土している。
52	神居古潭4遺跡	神居町神居古潭15	縄文時代の土器が採集されている。
53	神居古潭5遺跡	神居町神居古潭89	昭和27年発掘調査。標高213mの山頂にストーン・サークルがある。
54	神居古潭6遺跡	神居町神居古潭150	縄文時代の土器、石器などが採集されている。
55	神居古潭7遺跡	神居町神居古潭74	
110	神居古潭9遺跡	神居町神居古潭49	
182	神居古潭10遺跡	神居町神居古潭	縄文時代の石斧、石鏃などが採集されている。

表II-2 周辺の遺跡（その2）

II 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡



図II-3 周辺の遺跡 (その2)

III 調査の方法、土層の区分と遺物の分類

1 調査の方法

遺跡に対する認識が調査途中で大きく変更をせまられたため、ここには調査の経過をふまえながら、調査の方法について記す。

(1) 事前発掘調査の成果

昭和61年10月、次のような方法で事前発掘調査（以下、試掘調査という）が行なわれた。調査予定地の全域に10m方眼を設定し、その方眼のなかで、2m×2mあるいは2m×4mの試掘溝を掘開して遺物・遺構の検出を行なった。調査予定地は耕耘を受けており、遺物が二次的に移動していることが予想されたので、もともとの遺物包含層と推定される土層の残存状態の把握につとめた。また、建設用重機を使用して掘開作業を行なったところもある。

この試掘調査によって知り得た遺跡の状態は、次のようなものであった（図Ⅲ-1）。

試掘調査の範囲は、南北500m東西80mである。試掘溝は民家・ビニールハウス・道路などを避ける位置に設けたが、すべての試掘溝から河川の氾濫原堆積物と推定される土層が検出された（図Ⅲ-2）。遺物はシルト質土・砂質土・黒色土と識別したところから出土した。出土遺物の数は少なく、その分布は川岸から150mほどの範囲であった。遺物の内訳は、片岩の石斧片、安山岩の石器・剝片、砂岩の砥石、黒曜石の剝片、珪岩の剝片、亜円礫のたたき石などである。これらの遺物は、ほとんどが縄文時代のもものとみなされるが、共伴する土器の出土がないので、詳細な時期の推定はできない。

また、調査区域は、1918年（大正7年）刊行の『北海道史』に約30の堅穴が認められるとして紹介されたところのほぼ東端にあたるので、これらの堅穴に関連する遺物の検出を予想していたが、良好な成果は得られなかった。納内地区では、1894年以降多数の堅穴が報告されているが、石狩川の氾濫や農地造成等によって消失したり埋没したりして、現在では地表面観察で確認できるものはごく少数である。今回の試掘調査は、可耕地のみについて行なったので、不陸ならしや耕作によって不明瞭になってしまった堅穴を見逃したこともあるかもしれない。

以上のような試掘調査の成果からは、つぎのような理解が得られた。

繰り返される氾濫の合間に、縄文時代以降の遺跡が形成されたと考えられるが、遺物・遺構は比較的少ないものと予想される。発掘調査の必要な範囲は、遺物が検出された調査溝の周囲約10,600m²（35ラインよりも川側）と決定した。

(2) 昭和62年度の調査

発掘調査は、7月27日から9月12日までの予定で行われた。

Ⅲ 調査の方法、土層の区分と遺物の分類

試掘調査の成果からは、どの土層が遺物包含層なのかを把握することはできなかったので、まず調査区域の各所に幅1m長さ20m～50mのトレンチを掘り、土層のつながりを確認することとした。このトレンチは合計10本、総延長360mにおよんだ。

調査初日の7月27日、N-33区から縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器が検出された。1個体分が横倒しになった状態であり、周囲の土層に乱れはない。したがって、この土器の出土する面は、良好に包含層が残存していると判断された。7月31日までのトレンチ調査によって、ほぼ東西方向に走る幅15～20mの沢地形が3本あること、そしてこの沢地形部分には縄文時代前期・中期・後期の包含層が、不陸ならしによる消失を免れて良好に残っていることなどが明らかになった。これらの調査結果により、類似した土層が多いなかで鍵となる連続した土層の把握が容易になった。耕作表土から最下層の砂礫層までの土層は、Ⅰ層～Ⅷ層に分けられた。詳細は「2 土層の区分」で述べる。

8月は、東地区と西地区の調査を行なった。

道路建設工事の進行にともなって、調査区域・日程の部分変更がおこなわれ、南地区の畑地の一部は9月前半に、市道部分の一部は道路切り替え後の9月後半に調査することになった。

9月1日、南地区の調査をはじめて間もなく、Tピットの検出が相次いだ。長軸1～2m、墳底の幅10～30cm、深さ1m弱の大きさで、掘り込まれたのは縄文時代中期あたりの土層からである。結局、700m²の範囲から22のTピットを検出できた。

また、東地区で縄文時代早期の包含層調査終了と判断し、旧石器時代の遺物の有無を確認するために、さらに深く掘り下げていた試掘溝から安山岩の石器・剝片・焼土・炭化物の検出があった。厚さ1mほどの砂層の下に3～5cmほどの灰褐色粘質土が面をなしており、遺物はさらにその下の暗茶褐色シルト質土にみとめられる。これらの遺物は、砂層堆積時の攪乱を被ることなく、きわめて安定した状態で残存していることが理解できた。そこで、この遺物包含層を、これまでの土層区分とは別に「Ⅰ層」と呼ぶことにした。このⅠ層は、土器が検出されなかったこと、安山岩を素材とした石器には、円盤状のものや横長の連続剝離を示すものがあること、しかも縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器の検出面よりもはるかに下位にあることなどから、旧石器時代の包含層としての可能性があるものと推定した。

道路切り替え工事が遅れたために、市道部分の調査は10月に行なった。この市道は、盛土によって作られており、ほとんど削平を受けていないことが幸いして、自然状態の土層の堆積を観察することができた。調査終了間際の10月15日、Ⅰ層から縄文時代早期とみなされる撚糸文土器1個体分が検出された。したがって、Ⅰ層は縄文時代の包含層であり、旧石器時代のものではないことがこの時点で判明した。さらに、Ⅰ層よりも深い土層に焼土を検出したが、調査範囲が狭いこともあって、どのような遺物があり、どのような広がりを示すのか明らかにできなかった。

以上のような発掘調査の成果は、前年の試掘調査にもとづいて推定した遺跡の様子とは大きく異なるものであった。すなわち、遺物包含層の残り具合がきわめて良好な縄文時代の遺跡で

あることがわかり、重複した包含層が、さらに広く延びていることが予想されることになったのである。

(3) 2回目の試掘調査の成果

発掘調査によって、縄文時代の包含層が良好に残っていることが判明したので、遺跡の北側の限界を明らかにするための試掘調査を、10月20日～22日に行なった。今回の試掘調査は、自然地形のなかで遺跡の広がりを理解し、重複するであろう生活面の把握につとめることにした。したがって、実際の遺物出土はもちろんのこと、推定される遺物包含層の有無にとりわけ留意して作業を行なった(図Ⅲ-1)。

結果的には、縄文時代早期の遺物包含層は、北側へ90mほど延びていることが明らかになった。この遺物包含層のとぎれるあたりは、河岸段丘の崖をなしており自然地形としてもひとつの区切りを成すところである。これにより、発掘調査の必要な範囲は、7,250m²増加した。

(4) 昭和63年度の調査

発掘調査は5月6日から10月28日までの予定で行なわれた。道路建設工事進行上の要請から、前半は西地区、後半は東地区の調査を行なった。西地区・東地区は、さらにそれぞれ3つに分けられ、ひと月毎に調査終了予定の区域を設定した。

5月・6月。西地区の中央部分の発掘。不陸ならしを免れた場所のⅡ層から擦文式土器の破片3点が検出された。砂層のなかからコッタロ式土器・東釧路Ⅲ式土器などを検出。これよりも下位にあるⅠ層から、中茶路式土器の検出があいつぎ、さらに焼土の検出、黒曜石剥片の集中などから、住居跡の存在が推定された。

黒色土(Ⅱ層)の東西方向への広がりでもとらえられ、開拓初期にもかすかな凹地としてあった「中の沢」の地形は、その基本的な構造を砂礫層(Ⅷ層)の地形に影響されていることが明らかになった。6月下旬、J-37区の深堀りトレンチにおいて、砂礫層(Ⅷ層)の中から土器・安山岩剥片が検出された。以後9月まで、砂礫層の中から土器・石器等の検出が続いた。この明らかな洪水堆積物である砂礫層の中から出土した土器・石器等は、土層堆積の層位的関係から判断して、今回の調査における最も古い遺物と指摘できる。

7月。西地区の南端・北端、それに追加調査範囲となった南地区の一部を掘る。I-40区で縄文時代早期・中茶路式土器の時期の住居跡を検出。黒色土(Ⅱ層)の東西方向への広がりによって、6月から推定されていた「北の沢」の存在が確実になる。北の沢もその基本的な構造は、中の沢と同様に砂礫層(Ⅷ層)の地形に影響されていることが明らかになった。また南地区の調査では、押型文土器・押し引き文土器の出土位置と、焼土の広がりをもとに、住居跡が存在したものと推定した。

8月。東地区の北半分を発掘。土器・石器等が集中して出土するところがあり、その近くから中茶路式土器の時期の住居跡が検出された。黒色土(Ⅱ層)の広がりを手がかりにして、北の

Ⅲ 調査の方法、土層の区分と遺物の分類

沢の延長部分を検出した。北の沢は、その斜面が底部に中茶路式土器がみられることから、縄文時代早期には深みのある溝であったことを推定できた。北の沢の北側肩部のP-43区に、Tピットを検出した。

9月。北の沢と東地区の南半分を掘る。北の沢の溝底から、泥炭層が検出された。次年度の調査予定地に延びているこの泥炭層は、幅3m長さ7m、厚さは最大で40cmほどである。このなかには、草木の枝葉とともにクルミ・キハダ・ブドウなどの種子、甲虫類の羽根があり、器形を復元できる中茶路式土器もあった。

東地区の南半部では、I層から住居跡・焼土などが検出された。

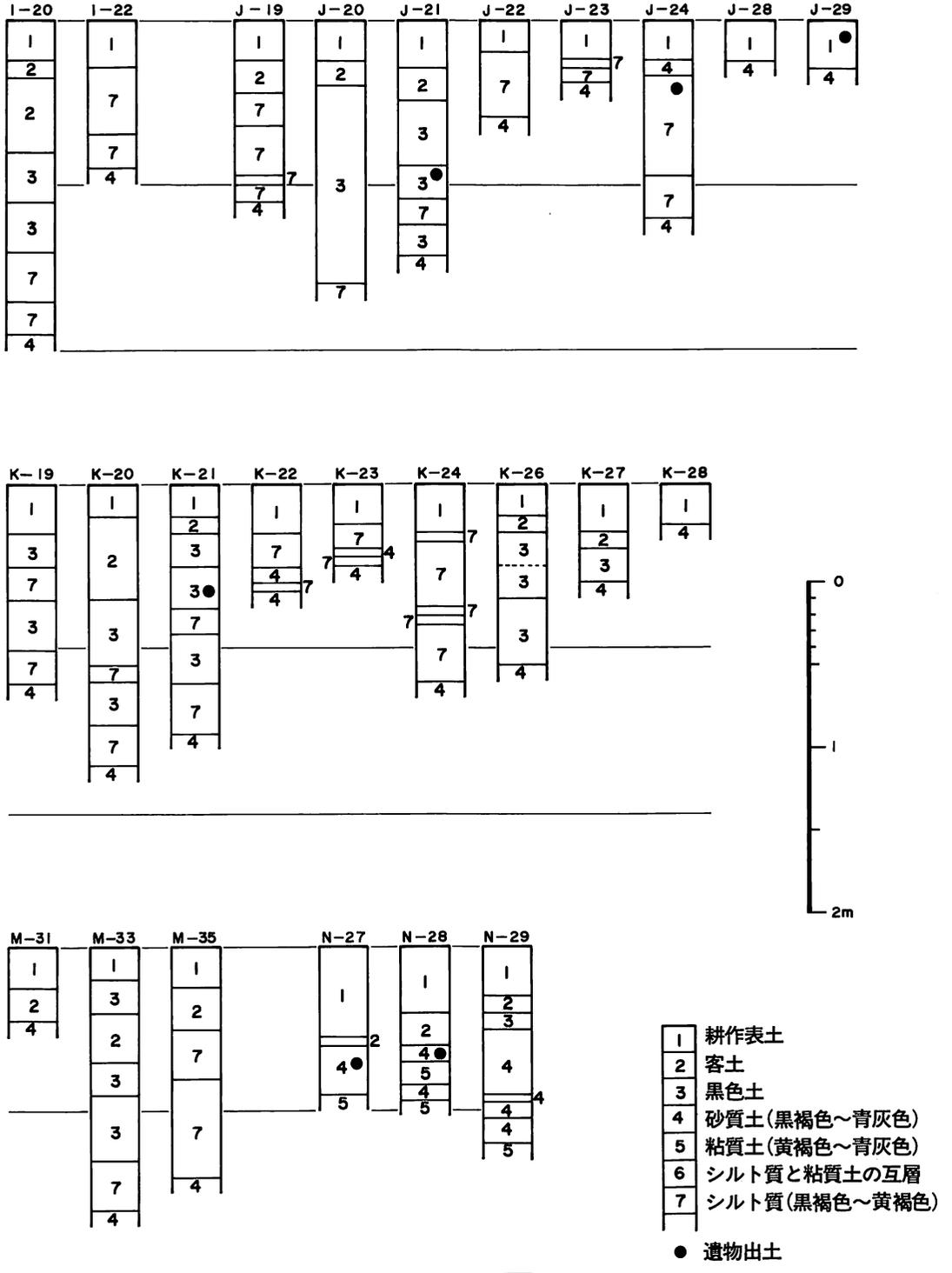
10月。東地区南端の仮設道路部分と市道廃止部分を掘る。市道部分で、自然状態の土層の堆積を観察できたのは、前回の調査と同じである。東地区南端の洪水砂層のなかに、I層よりも下位に土器・石器・焼土の検出があり、これを「ロ層」とした。さらにロ層よりも下位から土器・石器・焼土が出土したので、これを「ハ層」と呼ぶことにした。ロ層、ハ層ともに中茶路式土器が出土している。

(5) 発掘の手順と遺物の取り上げ

遺物の出土状態は、土層により大きく異なることが予想された。耕地造成に伴う明らかな客土は、重機を使って搬出した。その後、スコップ、山鋏、草掻きホー、移植ゴテ、竹ヘラなどで掘り下げた。掘り下げは5m四方の小発掘区ごとおこない、遺物の多寡、土層の変化をみきわめながら作業を進めた。遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録化してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。微細遺物の密集部では、水洗いによって取り上げたところもある。

(6) 遺物整理の方法

出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層を注記した。遺物台帳作成、遺物の分類の後、土器の接合・復元作業、石器や砂岩・片岩類の接合、土器・石器の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。



図III-2 試掘調査時の土層柱状図

2 土層の区分

土層の区分は、昭和62年7月のトレンチ調査によって得られた観察結果をもとに、同8月上旬、N-34-d区にもうけた深掘り試掘溝の断面を標識としておこなった。耕作表土から最下層の砂礫層までを、I層～Ⅷ層に区別した(図Ⅲ-3)。

この段階では土層と遺物・遺構との関係を、つぎのようなものとして理解していた。

I層：表土、盛土、耕作土。調査直前までの耕作土のみならず、耕地造成にもなう客土も含むもので、土器・石器の本来的な包含層ではない。不陸ならしによる切り盛りの結果は、耕地の小部分毎に特色がある。

II層：黒色土。沢地形部分に良好に残存している。縄文時代中期以降の遺物を含む。擦文時代の遺物が検出されるとすれば、この土層からであろう。

III層：淡黒褐色土。沢地形部分のみならず平坦部にもみられる。シルト質層であり、その色調は、沢部分の暗いものから平坦部分の淡いものまで、水分の多寡も影響して、微妙に移り変わる。II層との境界は、漸移的であるが、色彩は明瞭に区別できる。東・西・南地区ともに、その上半部から円筒上層式土器が出土する。押型文土器・押し引き文土器は、全体にわたって出土するが、どちらかといえば下半部により多い。縄文時代前期・中期の本来的な遺物包含層である。

南地区では、黄褐色土層の挟在により上下に3～5枚の土層として細分できるところもある。ここから検出されたTピットは、押型文土器・押し引き文土器の出土層よりも明らかに上位の土層から掘り込まれている。

IV層：黄褐色土。削平を受けた西地区の一部を除き、調査予定区域のほぼ全体にある。シルト質層であり、沢地形部分では粘性が増す。III層とV層とを完全に分離する間層であり、比較的短期間のうちに堆積したものと推定される。

V層：黒色土。東地区の北半分では厚さ5～10cmのきわめて明瞭な土層であるが、そのほかのところでは色調が褐色になっており上下の土層との区別は容易でない。したがって、発掘作業のとき、明瞭な場所では平面的に検出することができるが、痕跡的にしかみられないところでは、土層断面において確認出来るにすぎない。シルト質砂層で炭化物粒が入っている。縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器、中茶路式土器の本来的な包含層である。

VI層：黄色粘質土。削平を受けた西地区の一部を除き、調査予定区域のほぼ全体にある。粘質層であり、上下の土層と比べると堅緻である。

VII層：砂。粒子の細・中・粗の違いによって分けられる幾枚かの砂層を、ひとまとまりとして捉えたものである。水成堆積物と考えられ、なかには明らかな洪水堆積物とみなされる大きな粒子のものもある。調査予定区域の全体にあるが、ひとつの砂層が連続しているのではなく、数多くの砂層の集合したものである。土器・石器の本来的な包含層とは考えられない。

Ⅷ層：砂礫。標識地のN-34区では、耕作面の下1.5mほどの深さにあるが、南地区のK-20区では、3.5mの深さまで掘ったがみとめられなかった。礫は径5cmほどの円礫が多く、大きなものでは10cmほどの重円礫もある。洪水時の堆積物であり、数多くの礫層の集合体と考えられる。

そして、9月の調査において、洪水砂層を1mほど掘り下げた深さから安山岩製石器や焼土の検出があったことは、「1 調査の方法」に記したとおりである。この洪水砂層と呼んだものは、実は1枚の粗粒砂層ではなく、砂質土、シルト質土、粘質土などが繰り返し堆積しているものである。したがって、遺物の出土した土層は、土層の区分からすればⅧ層のなかに含まれるものである。

遺物は、ある時期のひとつの地表面を思わせるような状態で検出されており、このような出土状態は、その上位にある粘質土が保護膜のはたらきをして、砂層堆積時の水流による影響を免れているものと理解される。この良好な遺物包含層は、その面的な広がりや層位的な連続性において、ほかの遺物包含層との直接対比がきわめて困難なこともあって「イ層」と呼ぶことにした。そして、このイ層から10月の調査で終了間際に縄文時代早期の燃糸文土器が検出されたことも、先に記したとおりである。

それにしても、Ⅶ層は本来の遺物包含層と考えていなかっただけに、ひとつの面をなして遺物が出土する状態は、調査員一同にとって驚きであった。

昭和63年度の調査によって得られた、土層の区分に関する知見の追加は、次のとおりである。

Ⅱ層：ごく少量ではあるが北の沢と西地区から、擦文式土器が検出された。北の沢の6点は、本来の包含層とみなされる凹地から、西地区の5点は、不陸ならしを免れたところのⅡ層と耕作土からである。

Ⅲ層：北の沢から、北筒式土器や縄文尖底土器が出土している。

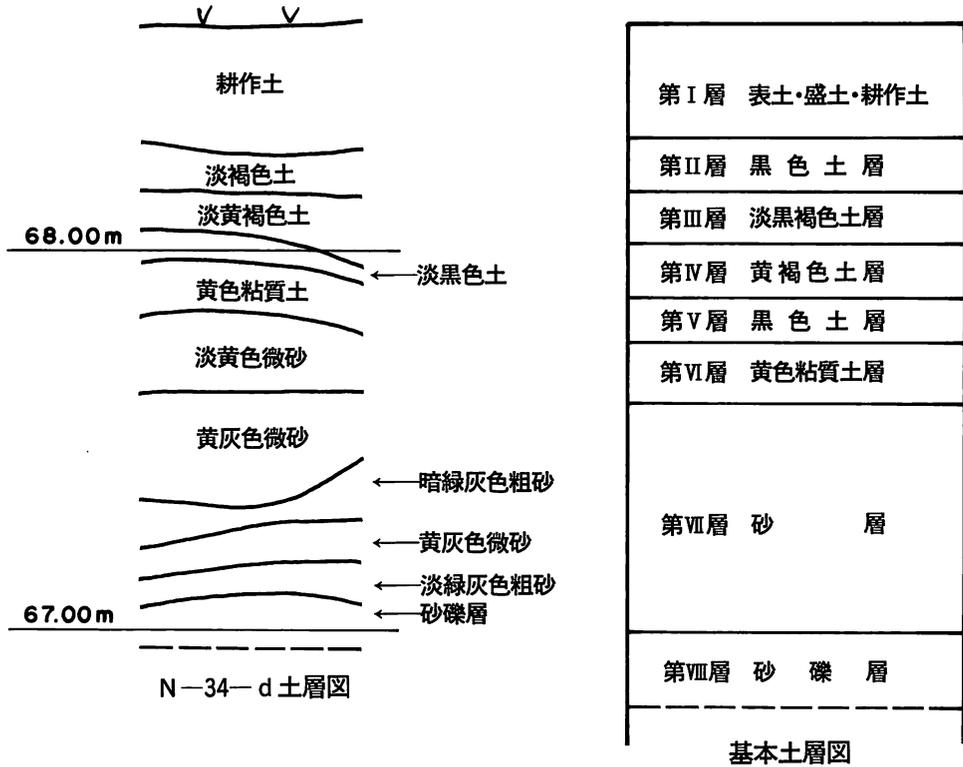
Ⅳ層：南の沢では、この層の上半部に押型文土器・押し引き文土器がみられるところがある。

Ⅴ層：35区よりも北側において、縄文時代早期の住居跡を9検出した。すべて中茶路式土器の時期のものである。この場所は、開拓期以降の若干の深掘り穴を除けば、後世の自然的あるいは人為的改変を受けることなく安定的な土層を保っており、きわめて良好な包含層といえる。

Ⅵ層：北の沢よりも北側の大部分は、耕地造成のとき、この層の上下あたりまで削平を受けている。

Ⅶ層：イ層よりも上位の洪水砂層から東釧路Ⅲ式土器、コッタロ式土器、中茶路式土器とみなされるものが少量出土している。ほとんどが破片の点在として検出されていることから、本来の包含層とは考えられない。大多数の破片が、水流運搬による表面摩擦が少ないことから推定すると、上流近距離の場所から流されてきたものであろう。I-35区では最上部の砂層から東釧路Ⅳ式土器の1個体分が出土している。

III 調査の方法、土層の区分と遺物の分類



図III-3 N-34-d 区の土層と基本土層模式図

I層からは、住居跡、焼土、炭化物、中茶路式土器などが検出された。

さらに、東地区の南端付近において、I層よりも深いところでロ層、このロ層よりも深いところでハ層を検出した。ロ層、ハ層は、I層と同じように直上にある粘質土の存在によって、後世の水流による破壊を免れたものである。ロ層、ハ層ともに中茶路式土器が出土している。昭和62年度の調査でI層よりも深いところで検出した焼土は、ロ層やハ層と関連するものだったのかもしれない。

VIII層：礫層を部分的に掘ってみたところ、土器・石器が出土した。この砂礫層の堆積は、砂層とは比較にならないくらい強力な水流によるものと考えられるだけに、土器・石器の出土は予想外のことであった。作業上の安全確保のこともあって、限られた範囲を深さ1.5mまでしか掘り下げられなかったが、土器47点、石器・剝片15点を検出した。土器・石器ともに水流運搬による表面摩耗が少ないことは、VII層の洪水砂層の遺物と同じであり、上流の近距離から流されてきたことをうかがわせる。

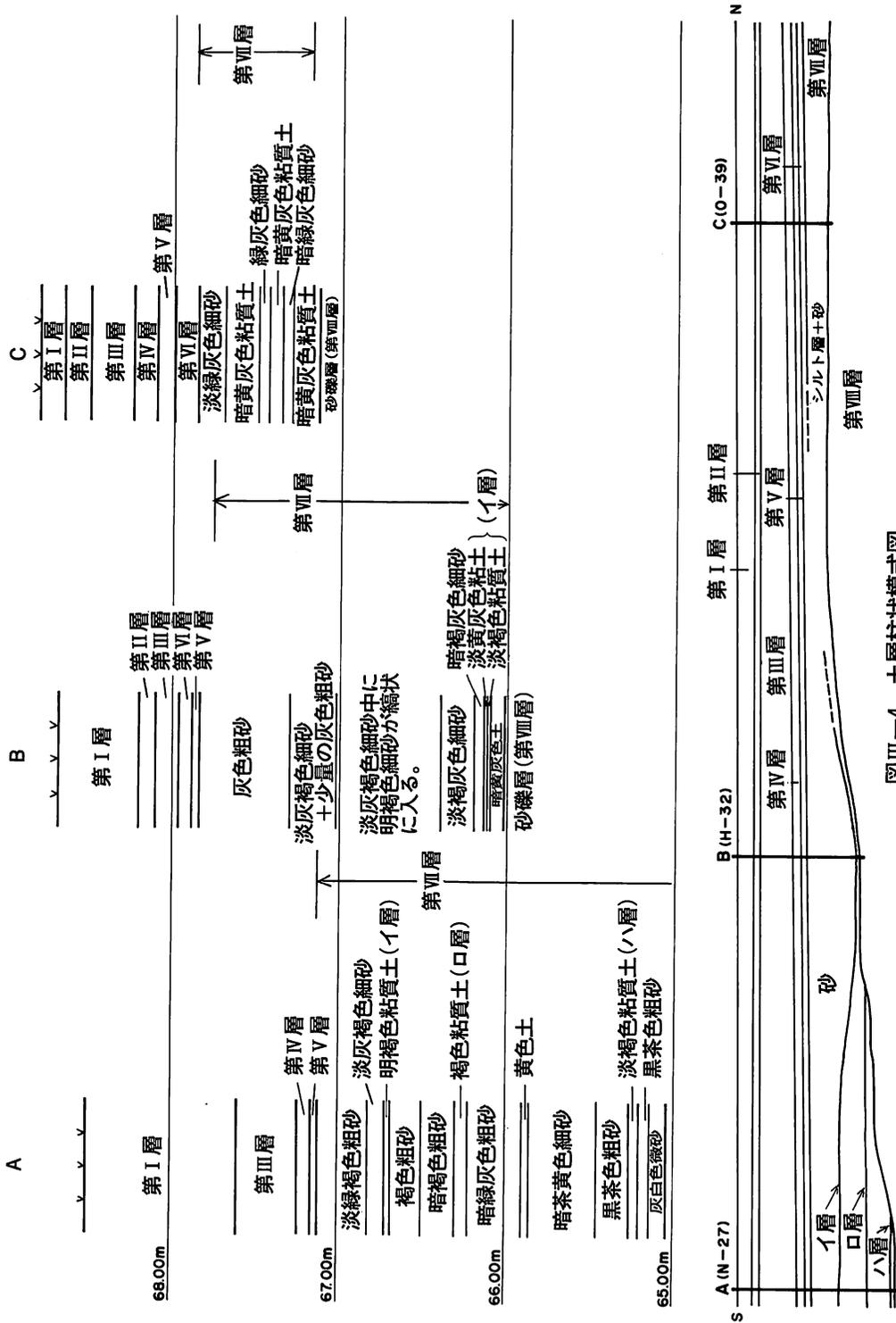
土器は縄文、組紐圧痕文など特徴が鮮明に残るもののほかに無文土器が3種みとめられる。検出される層位から判断して、すべて縄文時代早期のもののみとみなされる。

もちろん、この砂礫層が数多くの砂礫層の集合体であることは、言うまでもない。礫の大小、砂の多少・精粗などによってその上下のものと区別できる場所もあるが、ある砂礫層を連続的に追跡してひとつの砂礫層として認定することは困難である。I—38区とO—38区で、建設用重機を使って一部深く掘り下げてみたところ、この砂礫層自体の厚さは4mほどであることが分かった。その下は、岩盤である。

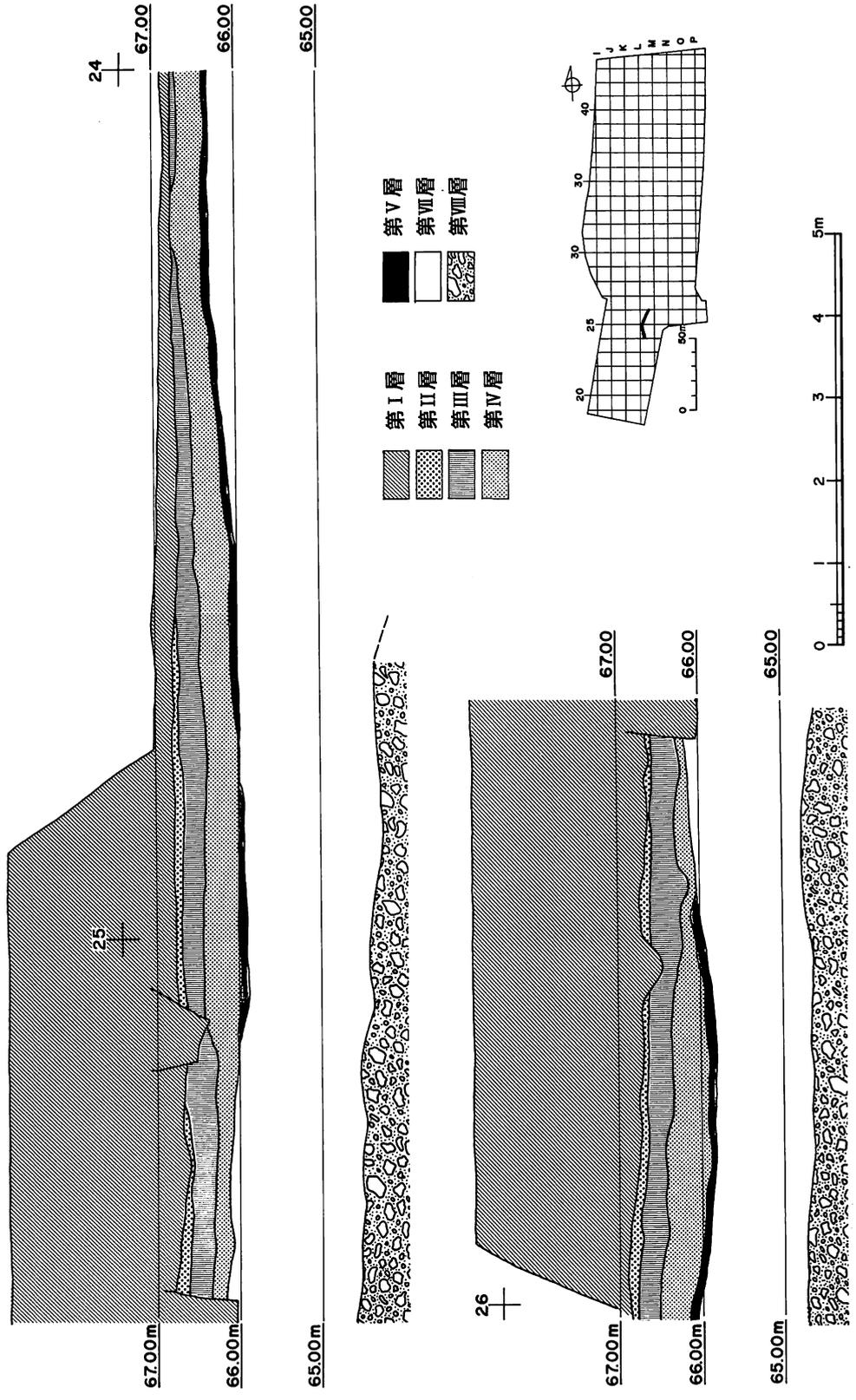
泥炭層：北の沢から泥炭層が見つかった。次年度の調査予定区域に接した位置で、沢の底に長さ7m幅3mの広がりがある。泥炭層の上部は粘質土・シルト質土・砂質土等で密封された状態である。今回検出したのは、沢の流れからみると泥炭層のもっとも上流域のところにあたる。40mほど下流の西地区では、その痕跡すらみとめられなかったことは、この泥炭層が局所的なものであることを示している。また、なかから中茶路式土器が出土しているので、形成時期は縄文時代早期と推定できる。

V層とI層の先後関係について：本来的な包含層として中茶路式土器が出土したのは、V層とI層・ロ層・ハ層である。これらの土器の検出される土層のそれぞれの先後については、VII層に含まれるI層・ロ層・ハ層については明らかであるが、V層との関係は、いまひとつ決定的なものとしては言い切れない。それは明瞭なV層とI層とが直接に接すると考えられたあたりが削平のため消失しており、間層として意義をもつべきVI層やVII層にしても粒子の大小・色調の変化などを詳細にみると、ただひとつの連続体と認定するには躊躇せざるをえないからである。確実な土層の上下関係を欠くが、V層とVII層の関係をもとに、I層のほうがV層よりも古いものとしてとらえておきたい。

III 調査の方法、土層の区分と堆物の分類



図III-4 土層柱状模式図



図III-8 土層断面図(排水溝地区東壁西面) その4

3 遺物の分類

遺物は、出土の状況や形態的な特徴などをもとに、縄文時代と擦文時代に分けた。

縄文時代、擦文時代の遺物の分類は、従来、当埋蔵文化財センターが使用しているものによつた^(註1)。このうち土器については、縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期をⅡ群、Ⅲ群とし、擦文時代のものをⅣ群とした。

石器等については、定形的な石器をⅠ群～Ⅷ群に分け、石器の作り方にかかわる石核、剝片類をⅨ群とし、定形的な石器として認定しがたいものを、加工痕や使用痕のある剝片、礫としてⅩ群をもうける。その他の礫、石製品などには分類記号はない。

(註1) 北海道埋蔵文化財センター編 1982『吉井の沢の遺跡』

土 器

<Ⅰ群> 縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類される。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文、指頭圧痕等のある土器群

a-1類：暁式に相当するもの

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

b-1類：東釧路Ⅱ式に相当するもの

b-2類：東釧路Ⅲ式に相当するもの

b-3類：コッタロ式に相当するもの

b-4類：中茶路式に相当するもの

b-5類：東釧路Ⅳ式に相当するもの

<Ⅱ群> 縄文時代前期に属する土器群

胎土に植物性繊維を多量に含むもので、a、bの2類に分類される。

a類：縄文尖底土器群

a-1類：縄文土器に相当するもの

a-2類：中野式に相当するもの

b類：押型文尖底土器群

<Ⅲ群> 縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類される。

a類：押型文平底土器群および円筒土器上層式に相当するもの

a-1類：押型文平底土器および刺突文土器に含まれるもの

a-2類：円筒土器上層式に相当するもの

b類：北筒式に相当するもの

<Ⅳ群> 擦文時代の土器群

石 器

<Ⅰ群> 石鏃・槍先類

A：石鏃

- 1：石刃鏃
- 2：細身で薄いもの、基部が内湾するもの
 - a：柳葉形のもの
 - b：五角形になるもの
 - c：大きめのもの
- 3：三角形のもの
(基部にえぐりのあるものを含む)
- 4：茎が明瞭にみられないもの
(ひし形のもの、基部が丸くなるもの)
- 5：茎をもつもの
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

B：槍先・ナイフ

- 1：茎をもつもの
- 2：茎が明瞭にみられないもの
(ひし形のものも含む)
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

<Ⅱ群> 石錐類

A：石錐

- 1：刺突部をつくりだしたものの
(刺突部が複数のももある)
- 2：棒状のもの
- 3：棒状のものにつまみ部がつくりだされたもの
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

<Ⅲ群> ナイフ・スクレイパー類

A：つまみ付きナイフ

- 1：二次加工が片面全体に施され、その面の右側縁に急角度の刃部をもつもの
- 2：二次加工が片面全体に施されるもの
- 3：二次加工が周辺に施されるもの

4：両面加工のもの

5：横形のもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：スクレイパー

- 1：石べらと称されるもの
- 2：まる形のもの(ラウンド・スクレイパー)
- 3：エンド・スクレイパー
- 4：幅広い茎をもつもの
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

<Ⅳ群> 石斧類

A：石斧

- 1：擦り切り手法によって製作されたもの
- 2：敲打痕(ベッキング)のみられるもの
- 3：打ち欠きによる整形がみられるもの
- 4：素材を大きく変形することなく、刃部のみ磨きのみられるもの
- 5：全面磨製のもの
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

B：石のみ

- 1：刃部が直線的なもの
- 2：刃部が弧状のもの(丸のみ形石斧)
- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

<Ⅴ群> たたき石、台石類

A：たたき石

- 1：棒状の一端、もしくは両端にたたき痕がみられるもの
- 2：扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの
- 3：扁平礫の腹、背面にたたき痕がみられるもの
(くぼみ石と称されるものを含む)
- 4：円状のもの
- 8：破片など

III 調査の方法、土層の区分と遺物の分類

9：今後分類を必要とするもの

B：台石（石器製作、その他の作業でテーブルとなったもの、出土状態などの状況証拠を重視）

1：平坦面に使用痕があるもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<VI群> すり石、石皿類

A：すり石

1：断面がすみまる三角形の礫の稜をすったもの

2：扁平礫の側縁をすったもの

3：扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦をすったもの

4：北海道式石冠と称されるもの

5：円礫状で、すり面が曲面のもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：石皿（すり面のあるもの）

1：平坦面に広くすり面がみられるもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<VII群> 石鋸、砥石類

A：石鋸

1：石鋸（刃部が直線状になるもの）

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：砥石

1：研磨面に溝があるもの

2：板状のもの（破損したものが多）

3：角柱状のもの（4面を使ったものが多）

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<VIII群> 石錘類

A：石錘

1：打ち欠きを4カ所にもつもの

2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの

3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<IX群> 石核・剝片類

A：石核（剝片石器の素材となる原石等も含む）

B：剝片・碎片

<X群> 加工痕、使用痕のみられる剝片・礫など

A：加工痕、使用痕のみられる剝片

1：剝片に加工痕がみられ、今後、分類を必要とする

もの（定形的な石器としては認定されていないもの。彫器、ピエス・エス・キーユと呼称されるもの。それらの削片などを含む。）

2：剝片に使用痕のみられるもの

B：に加工痕、使用痕がみられ、今後、分類を必要とするもの。

IV 遺構と遺物

1 はじめに

遺構は、竪穴住居跡 16・土塋 6・Tピット 23・焼土 23 が検出された。位置は図Ⅳ—1—1・2の地形図に示してある。

縄文時代早期後半の中茶路式土器の時期の住居跡は、Ⅴ層、Ⅰ層、Ⅱ層にあるH—7・8・10・11・12・13・14・15・16・17の10か所である。Ⅴ層の住居跡は、北の沢と中の沢とで区切られる台地の平坦面に密集しており、Ⅰ層、Ⅱ層のものは比較的低い位置に散在している。このうちH—8は平面形がほぼ円形で焼土がないが、そのほかのものは隅丸長方形で、中心部近くに焼土がある。この時期の住居跡は、土器・石器等の残存状態が良好なものが多い。

Ⅴ層には台地の南縁の位置に住居跡H—1・2があるが、ともに時期をあきらかにできる良好な遺物は出土していない。H—1は竪穴に接するところから出土した東釧路Ⅲ式土器に関連する住居跡、H—2もほぼそれに近い時期のものかと推定できる。

縄文時代中期前半の押型文平底土器の住居跡はH—9である。南の沢のⅣ層最上部に焼土が面をなして検出され、その周囲から多数の土器・石器等が出土している。同じ様な深さのⅣ層中にH—3があるが、中央部を試掘溝により破壊されていたので焼土の有無は明らかでない。Ⅳ層中であることや周囲の遺物から、H—9とはほぼ同じ時期と推定される。

H—4は中の沢のⅦ層上面で検出されているが、このあたりはⅤ層が消失した沢地形の傾斜地でありⅣ層から掘り込まれた遺構と考えられる。土層や周辺の遺物から判断すると縄文時代前期のものとして推定できる。

Tピットは22個が南地区に、1個が東地区の北端にある。南地区のものは、東西に延びる自然堤防の微高地に列をなしており、東地区のものは北の沢の北側肩部にある。Tピットの壙底などにあつて構築時期を明らかにできる遺物はないが、TP—1の埋積土のなかから縄文時代中期前半の縄文土器が出土している。これは穴が埋まっていく過程で近くにあつた土器が流れ込んだものと判断される。南地区のTピットのうち高い位置にあつたものは、農地造成のときに上部が削平されているが、南の沢寄りの傾斜地にあつて削平を免れたもののなかには、掘り込まれた土層が縄文時代中期前半の押型文土器の出土する面よりも明らかに上位であることが確かめられたものがある（TP—1・5・9）。

土塋はⅣ層の時期と考えられるもの3基、Ⅴ層の時期と考えられるもの3基があるが、詳細な時期を推定しうる遺物は出土していない。

焼土は、Ⅱ層、Ⅴ層、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層にあり、加熱により赤色化した状態が良く残っている。北の沢のなかに帯状に広がっているⅡ層の焼土は、縄文時代中期の土器よりも上位、擦文時代の土器よりも下位である。

Ⅳ 遺構と遺物

以上に述べた遺構のある土層からは、土器・石器等が多量に出土している。なかでも縄文時代早期後半の中茶路式土器の時期の遺物包含層であるⅤ層、Ⅰ層、Ⅱ層は、良好な状態で土器・石器等が出土する。Ⅴ層では、堅穴住居跡の密集する周囲に、土器・石器等がまとまりをもって出土するところが6か所あり、これを「遺物集中」と呼ぶことにし、それぞれ番号を付して区別した。この遺物集中の大きさは、小さなものは長径5m、大きなところは長径20mをこす。器形を復元できた土器には、遺物集中から出土したものが多い。

Ⅲ層・Ⅳ層にも、南の沢に接するところに径約4mの円形をなす遺物集中を1か所みとめた。縄文時代中期前半の時期と考えられるが、道路地区にあたるため農地造成による削平を免れたものであり、断片的な土器と少量の石器である。

散在的に出土し、遺物集中としてはみとめ難い遺物は、包含層の遺物としてそれぞれの土層ごとに図示した。Ⅱ層からは、ごく少数である擦文土器が出土している。また石器は、Ⅰ層・Ⅱ層のものをとりまとめて図示した。このなかには、その形態的な特徴から縄文時代早期、前期、中期、後期などの時期を推定できるものがある。

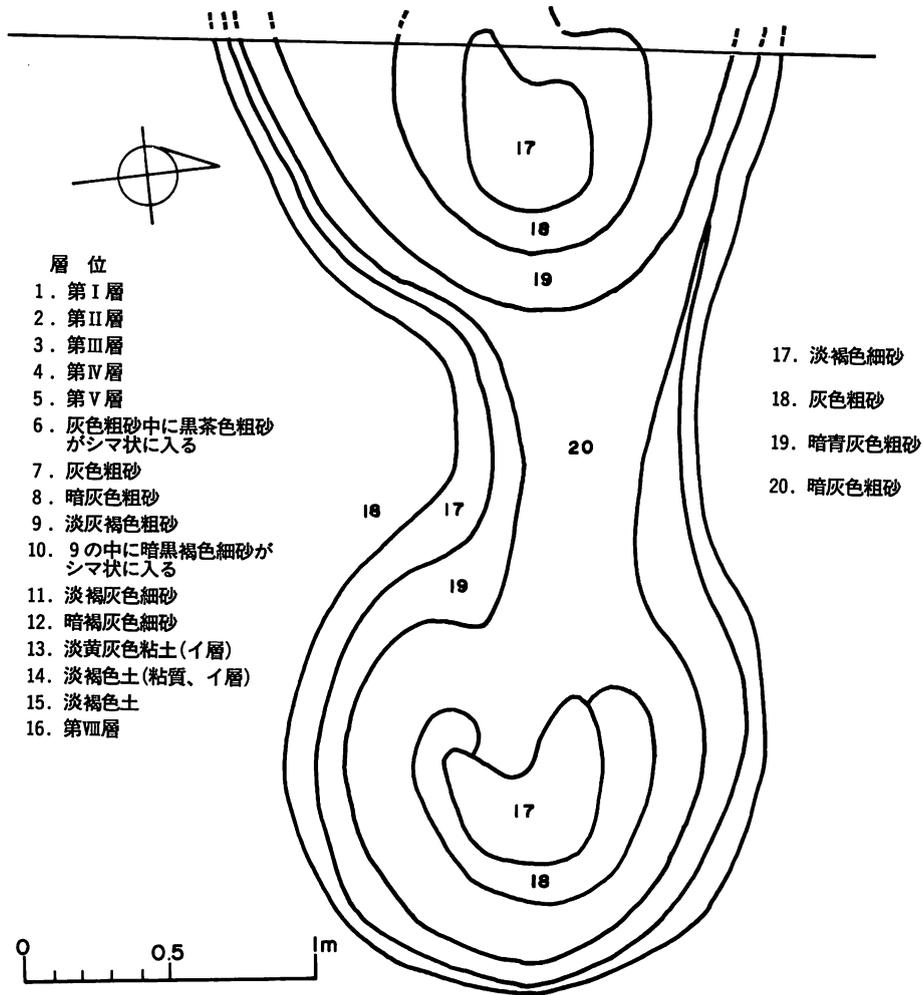
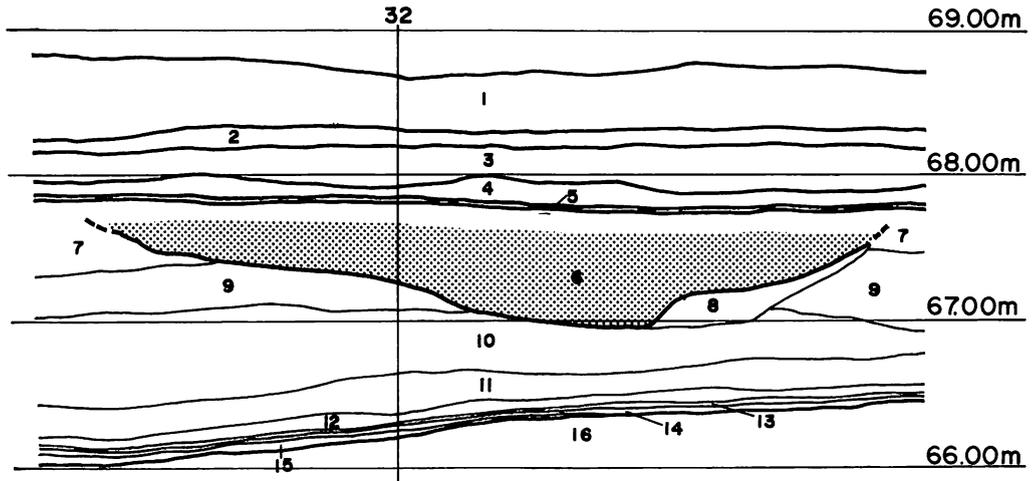
以上に述べたのは、本来的な遺物包含層である。これとは異なり、二次的な遺物包含層と称すべきものがⅠ層、Ⅵ層・Ⅶ層、Ⅷ層の計3枚ある。耕作表土を含むⅠ層からは、縄文時代早期から現代までの遺物が出土する。Ⅵ層・Ⅶ層は、石狩川の氾濫時の洪水砂層とみなされるもので、縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器、コッタロ式土器、中茶路式土器、東釧路Ⅳ式土器がある。これらの土器は、表面摩耗が意外と少ないことから、比較的近接したところから流されてきたものと推定される。

繰り返された洪水のうちで明瞭にその痕跡を残しているのは、図Ⅳ-1-3に示した流水による模様であろう。これは砂の粗密により模様が見てとれるもので、渦巻状の模様二つが連結している。このような渦巻状の砂のなかからも土器が出土している。

Ⅷ層は砂礫層と呼称するが、その大部分は紛れもない礫層であり、あきらかに洪水堆積物である。この砂礫層のなかから、縄文時代早期の土器が出土している。縄文や撚糸文、組紐匠痕文を特色とする東釧路Ⅱ式土器に比定されるもの、無文の土器などである。

北の沢から泥炭層が検出された(図Ⅳ-1-4・5)。Ⅰ層に相当するものと考えられる粘質の淡褐色土を掘り下げたところ、N-41-b・c、N-42-b、O-41-a・d区で泥炭層を確認した。沢の底に長さ7m幅3mの広がりをもち、中央付近の厚さは20~40cmである。泥炭層は、種子などの微細遺物の検出を目的として、悉皆採取した。発掘区の方眼にそって1m×1mの小区画を設定し、この小区画を単位として泥炭を取り上げた。総量は、20×32cm大のポリ袋に計1472個である。採取した資料は、一袋ごと水に浸し泥炭の沈殿浮遊による泥と炭化物の分離の後、ふるい作業を経て乾燥を待った。ふるい作業では、網目1mmを使用した。また、最大のもので径15cmほどの樹木片も多数出土したので、詳細な観察を行なったが、人為的な加工痕を持つものはなかった。

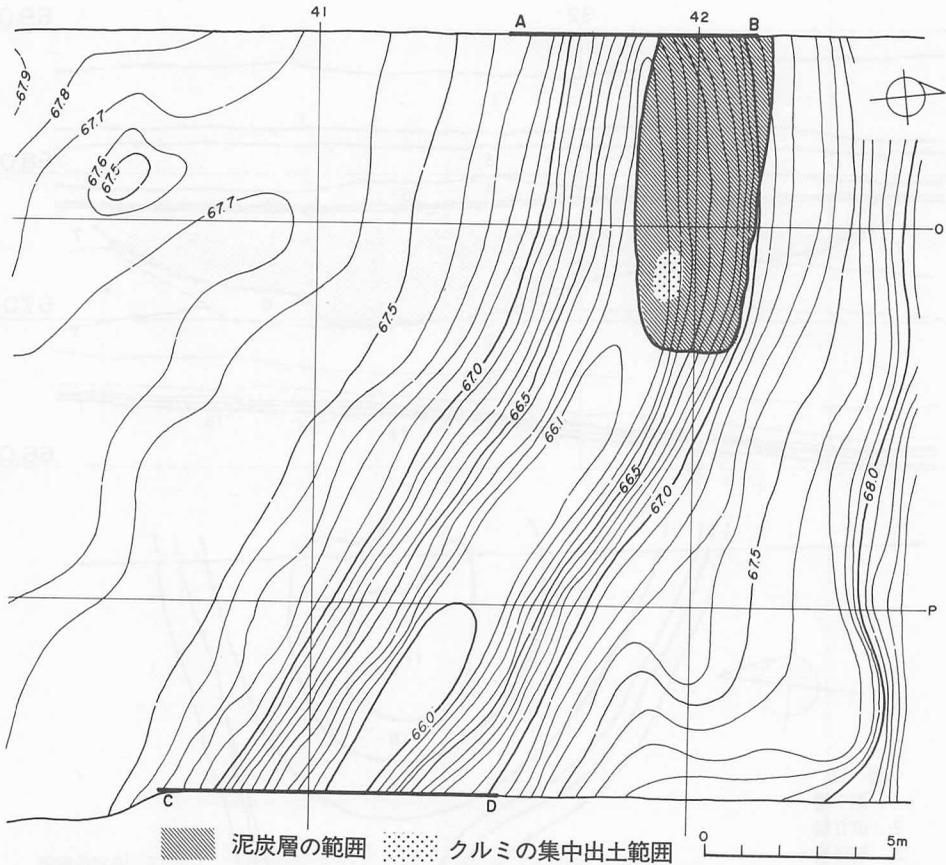
泥炭層からは中茶路式土器とともに、草木の枝葉のほかクルミ、キハダ、コクワ、ブドウな



- 層位
1. 第I層
 2. 第II層
 3. 第III層
 4. 第IV層
 5. 第V層
 6. 灰色粗砂中に黒茶色粗砂がシマ状に入る
 7. 灰色粗砂
 8. 暗灰色粗砂
 9. 淡灰褐色粗砂
 10. 9の中に暗黒褐色細砂がシマ状に入る
 11. 淡褐灰色細砂
 12. 暗褐灰色細砂
 13. 淡黄灰色粘土(イ層)
 14. 淡褐色土(粘質、イ層)
 15. 淡褐色土
 16. 第VIII層

17. 淡褐色細砂
18. 灰色粗砂
19. 暗青灰色粗砂
20. 暗灰色粗砂

図IV-1-3 流水模様の図



図IV-1-4 泥炭位置

どの種子、打ち割られたクルミの殻、昆虫などが検出されている。この中茶路式土器は、遺物集中6としたまともに含まれるもので、密集する住居跡群から出土する土器とほぼ同じものである。縄文時代前期の土器が泥炭層のなかにはみられず、間層を挟んだ上位の土層から出土することから、泥炭層の形成は縄文時代早期であったといえる。

形成時期を限定しうる泥炭層は、古環境の復元にあたって良好な資料である。このため花粉分析用として、上下の土層はもとより、泥炭層の場合は色調のちがいにより三つの区分して土壌を採取した。これの成果は、山田悟郎氏に速報的なものとして報告していただいた（V章、341ページ）。これによると、縄文時代早期はオニグルミ林の卓越繁茂する景観だったという。

なお、この泥炭層のものとして、次のような年代測定値が得られている。

6380±50 yBP (KSU-1849)、6480±25 yBP (KSU-1850)

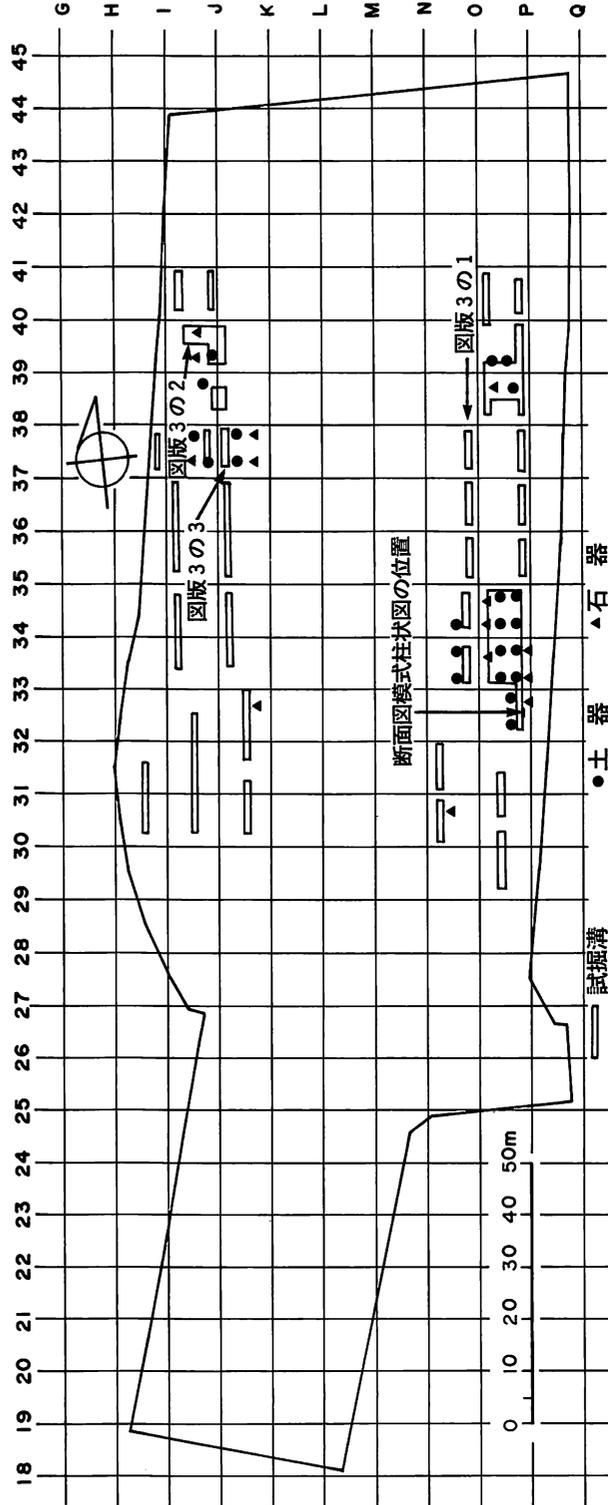
2 VIII層（砂礫層）の遺物

VIII層（砂礫層）の調査は、
 図IV-2-1に示したように
 行なった。幅1mの試掘溝を
 発掘区に沿う形で深さ1.2m
 ほど掘り下げ、遺物の有無を
 確かめた。遺物が検出され
 たところは、さらに深く掘り下
 げるとともに、周囲に調査範
 囲を広げた。VIII層（砂礫層）
 の調査面積は、513m²であ
 る。建設用の重機を使って、
 I-38区とO-38区を深く
 掘り下げてみところ、砂礫層
 の厚さは4mほどであるこ
 とが分かった。

図IV-2-2は、P-33-d
 区の土層断面である。繰り返
 し堆積した砂礫層の中から土
 器が出土した様子がみられ
 る。

遺物は図示した場所から土
 器47点、石器・剝片15点が
 出土している。土器・石器と
 もに水流運搬による表面摩耗
 が少ないことは、これらの土
 器・石器が上流の近距離のと
 ころから流されてきたことを
 示すものであろう。

土器（図IV-2-3・4）縄文、
 組紐瓦痕文など特徴が鮮明に
 残るもののほかに無文土器が
 3種ある。出土した層位から



図IV-2-1 VIII層（砂礫層）の遺物分布と写真撮影方向

判断して、すべて縄文時代早期のものと考えられる。

組紐圧痕文のもの (1~7) 外面に組紐圧痕文があり、内面は無文またはかすかな横方向の擦痕があるもので、すべて表面の摩耗は少ない。組紐圧痕文は、東釧路Ⅲ式土器に特徴的にみられる堅固な撚糸の典型的な3本組紐とは異なり、緩い撚糸かあるいは面をもつ紐を使った組紐である。

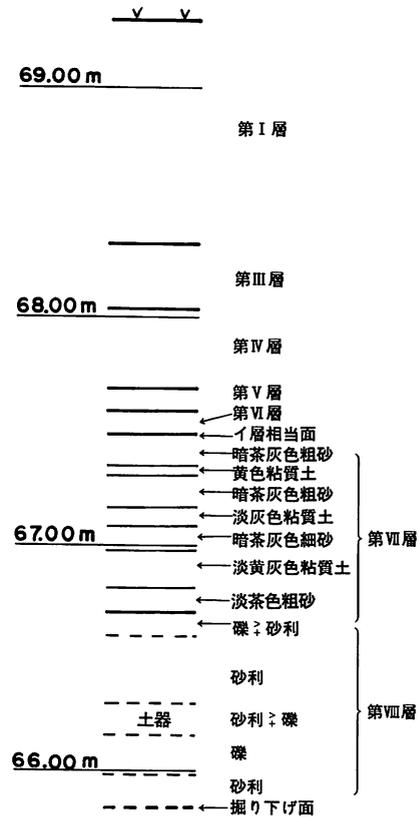
1は直立する口縁部である。平たい口唇部には、細い糸状の平行する刻みがある。組紐圧痕を平行または羽状に走らせたあとに、列点様の幅3mmほどの刺突痕が施されている。刺突は2か所を一組としているようにも見えるが、破片が小さいので明らかでない。2~7は胴部破片である。組紐圧痕は平行するものが多いが、2・6には明らかな羽状のものが認められる。2・5の文様がつぶれて不鮮明なのは、胎土が柔らかいときの施文かと思われる。12もつぶれた文様のために不鮮明であるが、組紐圧痕文の仲間であろう。

縄文のもの (8~11, 13~16) すべて胴部破片である。8~11, 13, 14はLRの縄文である。内面は、8に横方向の条痕があるほかは、無文またはかすかな擦痕である。15は、あらく大きな斜行縄文のあとに、幅5mmほどの押し引き文様が施されている。16は、4本の平行する縄線文がある。1~16は組紐圧痕や縄文の特徴などから、東釧路Ⅱ式に比定される。

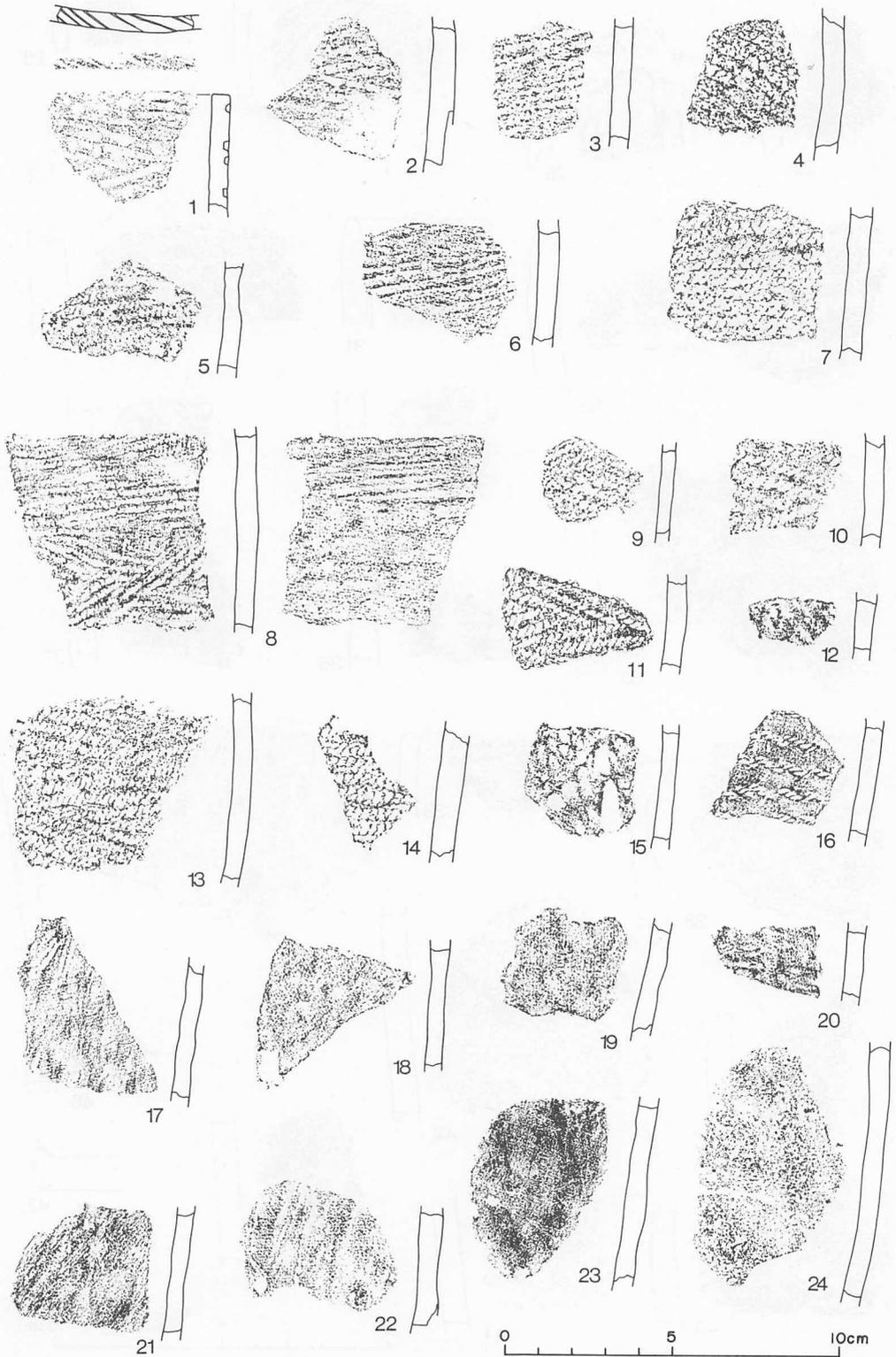
無文のもの (17~47) 器壁の厚さ、胎土の微妙な違いなどから17~29, 30~37, 38~47の3種に分けられる。17~29はうすいもので、表面が摩耗した27や小破片の28・29の他は内面・外面ともに指頭によるなで痕がよく残っている。17~19・21・23や22・26はそれぞれ同一個体の可能性がある。26は、胎土に黒曜石破片を含むもので、特徴的な破断面をなしている。

30~37は、口縁部破片30に類似した胎土・表面調整・厚い器壁のもの。すべて内面・外面ともに指頭によるなで痕かとみなされる緩い凹凸がある。30・31は直立した口縁部で、その口唇断面は丸みのある尖りを示す。表面摩耗が著しいのは、32のみである。

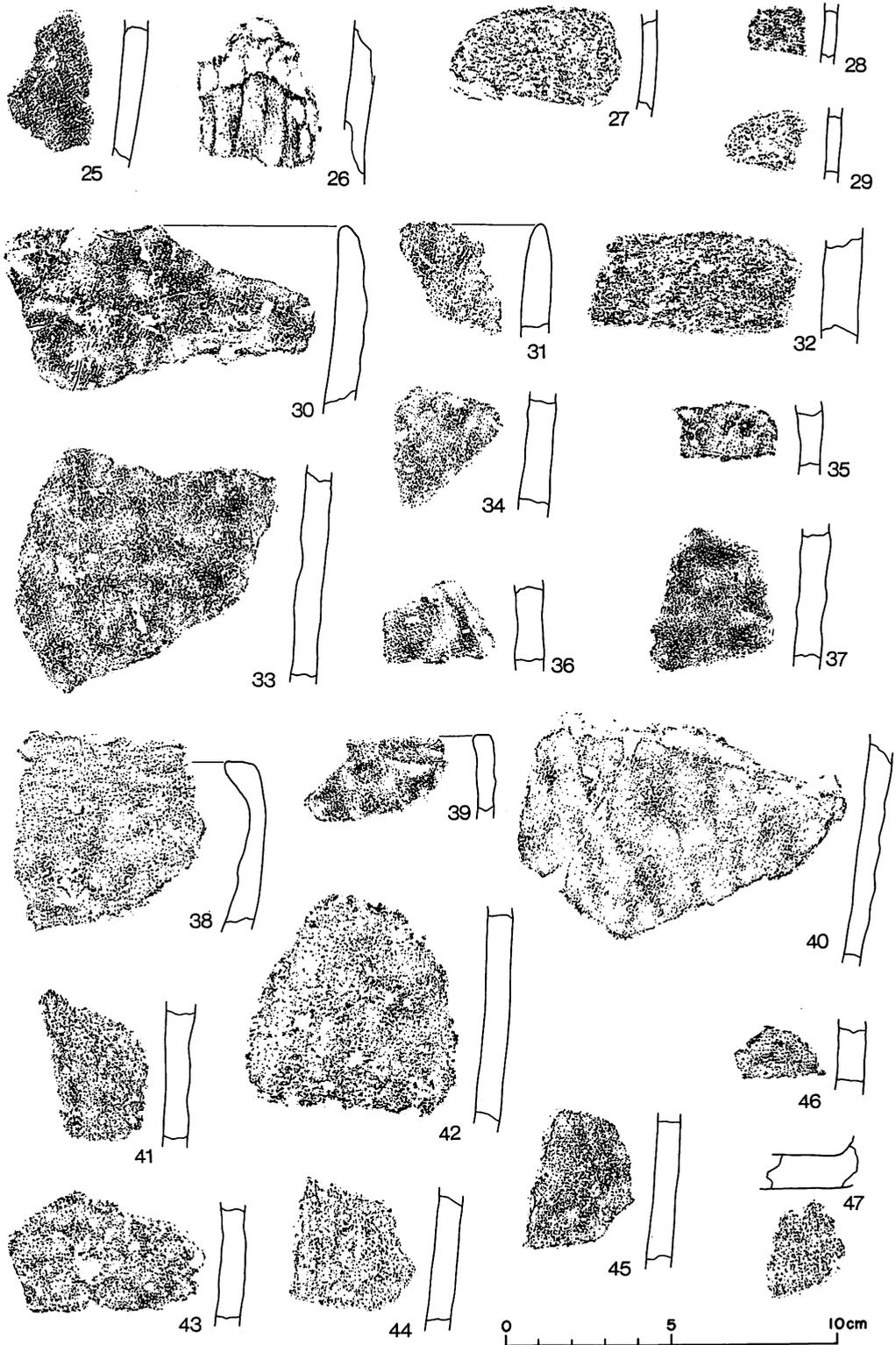
38~47は、口縁部破片38に類似した胎土・器壁のもの。表面摩耗の著しい41のほかは、内面・外面ともに指頭によるなで痕の緩い凹凸がある。38は直立した口縁部で、平たい口唇部分



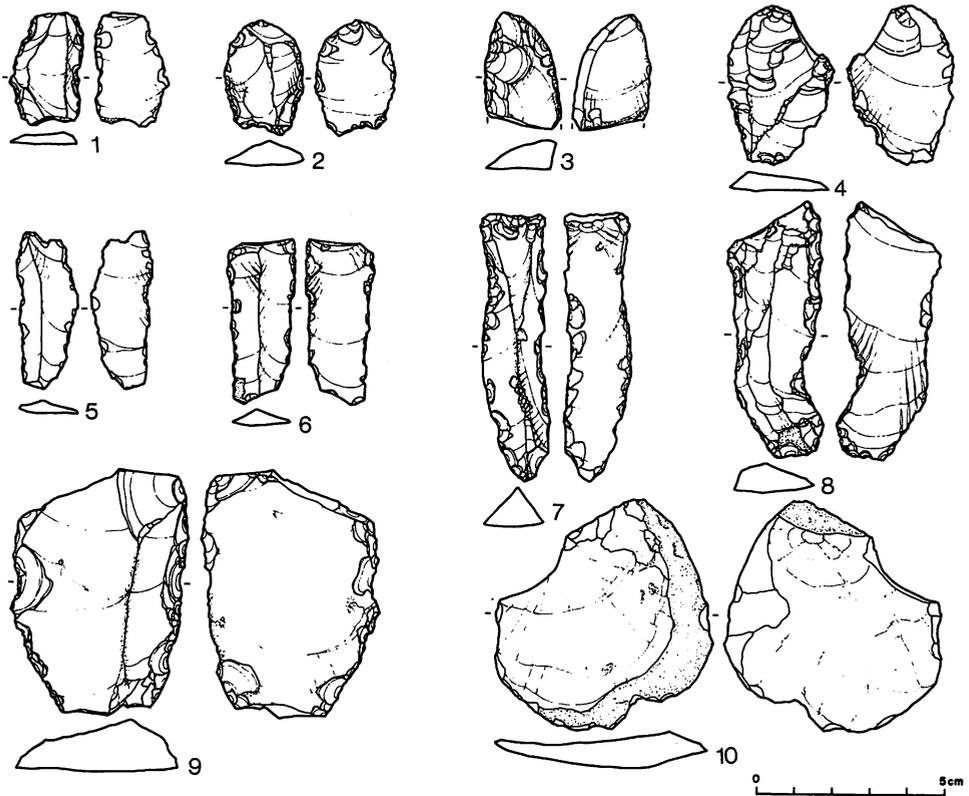
図Ⅳ—2—2 P—33—d区の土層模式図



図IV-2-3 VIII層(砂礫層)の土器(その1)



図IV-2-4 VIII層(砂礫層)の土器(その2)



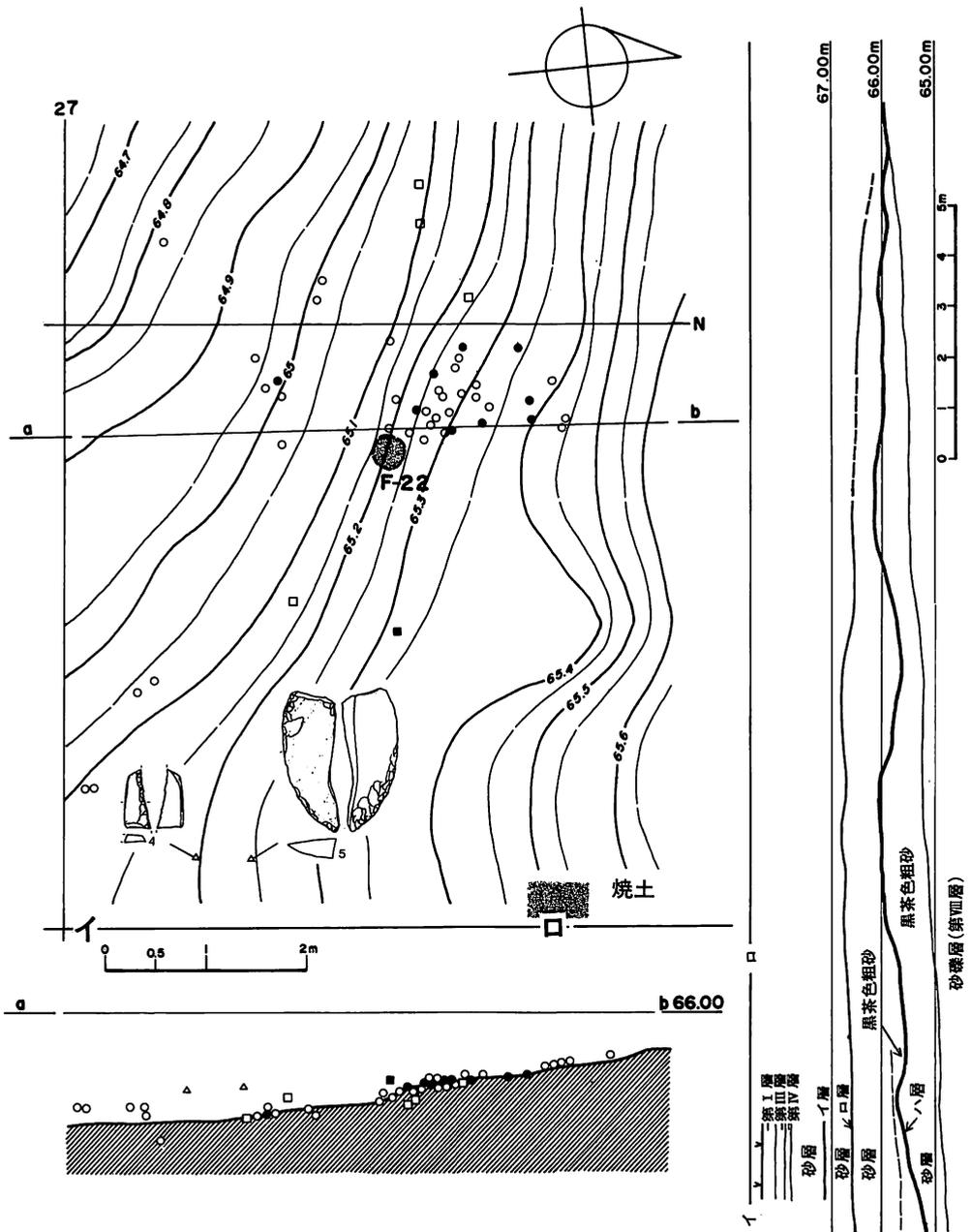
図IV-2-5 VIII層（砂礫層）の石器

は内側に厚くなっている。39は直立した口縁部で平たい口唇になっている。47は、底部破片と見なされるものである。

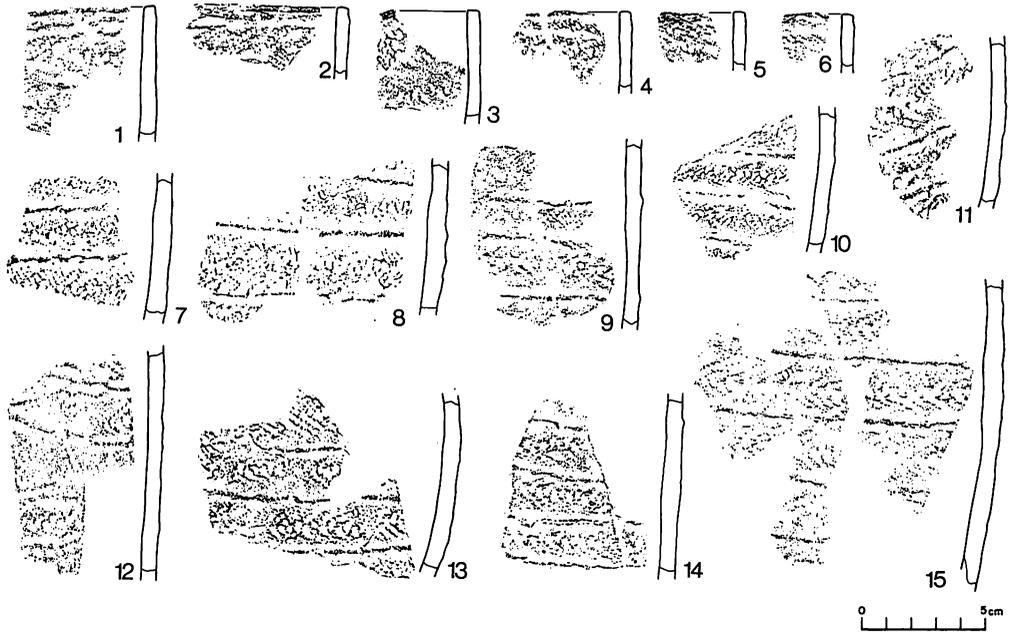
17～47の無文土器は、表面摩耗や出土の状況は1～16と類似しており、同一の場所から流れてきたものと推定できる。この無文土器は東釧路II式に比定した土器とほぼ同じ時期のものと考えられるが、ただ指頭なで痕を特色とすることから、曉式土器に類似したものかとりえておく。

石器（図IV-2-5）1～9は、黒曜石の縦長剥片の側辺に刃部があるスクレイパーである。このうち2・7・8は暗紅茶褐色の縞模様のある花十勝と呼ばれるもの、3・6・9はざらついた表面から鮫肌とよばれるものである。10は安山岩の円礫を連続的に剝離したような寸詰まりの剥片である。

すべてに水流運搬時の傷かとみられるものが稜線に多少あるが、砂礫層のなかにある剥片としては、回転摩耗による丸味は、意外に少ない。



図IV-3-2 八層の地形・遺物分布図



図IV-3-3 ハ層の土器

物は検出されていない。ハ層からは中茶路式土器が出土していることから、焼土の時期は、縄文時代早期と思われる。

焼土を検出した周囲から土器・石器等が出土した。土器は、中茶路式土器1個体分であるが、小さな破片が多くて器形を復元するにはいたらなかった(図IV-3-3)。1~6は、直立する口縁部で、平たい口唇である。7~15は、胴部である。文様は、2cm前後の間隔をもって横に走る微隆線のあいだを、結束羽状縄文で埋め尽くしたものである。

石器は、焼土からいくぶん離れた位置から出土した(図IV-3-2)。図は、図IV-4-9にある4・5である。ともに漆黒の黒曜石を素材にしたスクレイパーの破片である。剥片剥離や刃部形成時のすどい稜線が良く残っている。

4 ロ層の遺構と遺物

VII層の深掘り作業時に、I層よりも深いところから焼土を検出したので、この土層をロ層と呼び、その周囲を調査した。ロ層を検出したのは、図IV-4-6に地形図のある3か所である。図IV-3-2の土層断面図をみると、ロ層はほぼ平坦であり、図III-4の模式図に示したように、VIII層(砂礫層)に接して消滅する。

ロ層はその下位にあるハ層と同じ様な環境のもとで形成されたと考えられる。したがって、洪水の影響が及ばないある短い期間に、人間の生活の場となったところといえる。住居跡(H-16)、焼土、土器・石器等が検出された。

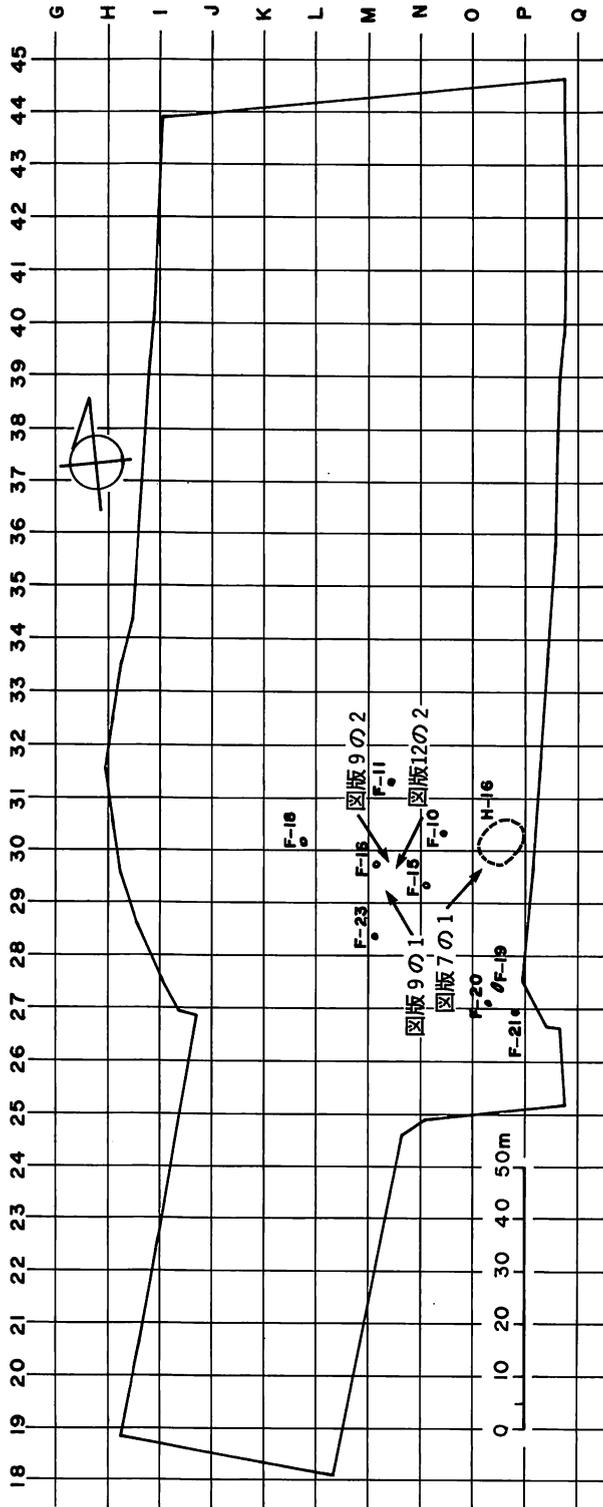
H-16

位置：O-29-c・d、O-30-a・b・c・d 東地区の南寄りに位置している。標高は66.30m~66.50mである。

規模・平面形・床面積：不明

確認・調査：O-30-c・dの包含層調査中、第七層中のロ層（褐色粘質土）より多量の炭化物がまとまって検出された。またO-30-dでは褐色粘質土（土層図2）から石皿が出土した。この周辺を精査し、黄灰色微砂層（土層図3）上面まで掘り下げたところ、土器細片がまとまって出土し、たたき石なども出土した。このためO-30-a・b及びO-29-c・dも黄灰色微砂層上面まで掘り下げたところ、O-30-a・bの北側では礫層が露出し、O-30-bの南側では黄灰色微砂層上に焼土が検出された。焼土周辺を精査し、ピット、壁の立ちあがりなどの検出につとめた結果、柱穴状の小ピットが検出されたため、住居跡とする。

床：第七層中のロ層下の黄灰色微砂層直上が床面である。北から南へゆるやかに傾斜する斜面で、皿状に浅く凹



図IV-4-1 ロ層の遺構位置と写真撮影方向

IV 遺構と遺物

んでいる。礫層上に砂が堆積し、わずかに凹んだところを一時期生活の場としたものと考えられる。

壁：立ちあがりはない。

炉跡：黄灰色微砂上に3か所の地床炉が検出された。HF-1は約0.5m×0.36mの広がりを持ち、砂上に数cmの暗橙色の焼土が認められた。掘り込みはない。HF-2、HF-3は、砂が火を受けて赤色化しているものである。3か所とも同一砂上にあり、時間差はほとんど見られない。HF-1は6090±45yBP (KSU-1846)である。

付属ピット：焼土を取りかこむように9個の小ピットが検出された。これらは径10cm内外で、すべて直立し、杭状の小ピットである。長円形状に配列している。

遺物出土状況：出土遺物総数は86点余りである。その内訳は土器が50点余り、石器などが36点である。遺物はすべて床面出土である。土器はO-30-cの北側の斜面上より細片となつて一括出土したものである。石器は石槍(図IV-4-3の石器2)、スクレイパー(図IV-4-3の石器3)、石斧片(図IV-4-3の石器5)、石斧未製品(図IV-4-3の石器4)、石皿(図IV-4-3の石器8)、砥石(図IV-4-3の石器8)、三角すり石(図IV-4-3の石器6、7)などが出土している。HF-2の焼土中から黒曜石のフレイク・チップが7点、頁岩のフレイク・チップが1点出土している。

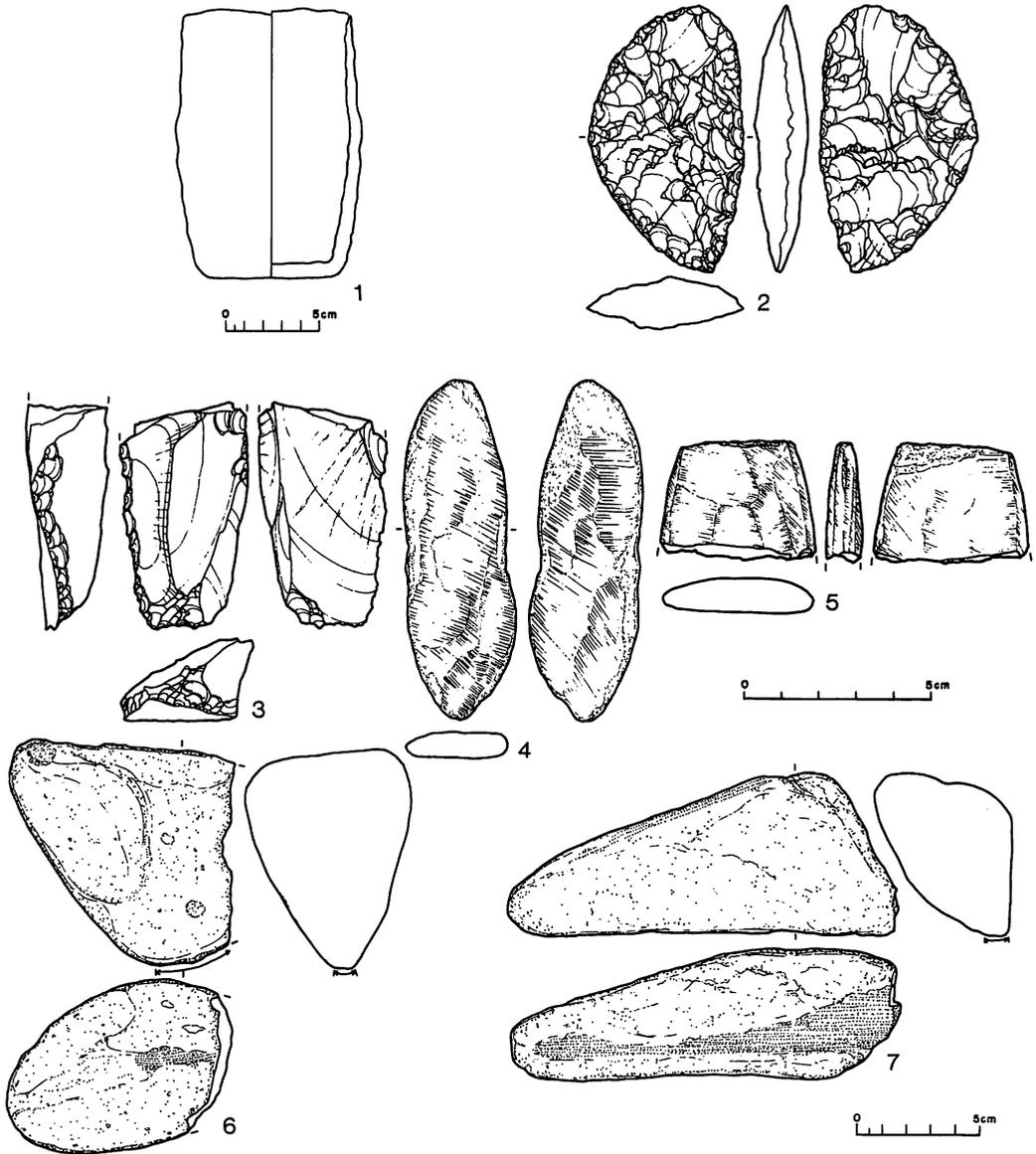
遺物：図IV-4-4の土器1は、口径8.9cm、底部径6.2cm、器高14.2cmの小形の土器である。胴部下半部はほぼ垂直的に外傾し、上半部は直線的に内傾している。口縁部は薄く、断面は鋭角的な三角形を呈し、ゆるやかな波状口縁である。器厚は7mm内外で、胎土は堅く緻密である。色調は暗橙色。内外面は指頭痕が残って、凹凸がはなはだしい。色調は暗橙色。文様は施文されておらず、非常に粗雑なつくりである。

時期：周辺出土の土器は中茶路式土器に比定されるものであり、縄文時代早期後半の住居跡と考えられる。

焼土

口層の焼土は、調査区中央部のO-26・27グリッドから3か所、M・N-28~31グリッドから4か所、K-30グリッドから2か所の合わせて10か所が確認された。焼土中からは、遺物は検出されていない。これらのうち、O-27グリッドのF-19とK-29グリッドのF-16については、ほかの8か所の焼土周辺からはほとんど遺物の出土がみられないのに対し、その周辺から多くの遺物が検出されている。

F-16は、焼土のそばから砂岩製の台石が1個、南東2~3mほどのところに土器が2個体出土している。2個の土器のうち、1個は推定口径34.5cm・器高40cmの深鉢で、体部中位から底部を欠損している。微隆起線間に結束羽状縄文が施されている。もう1個は推定口径25cm器高40cmの深鉢で、体部下位から底部を欠損している。隆起線間にRL短縄文が施されている。いずれも、縄文時代早期に属するものである。また、黒曜石のフレイク・チップがまとまって焼土のそばから確認された。

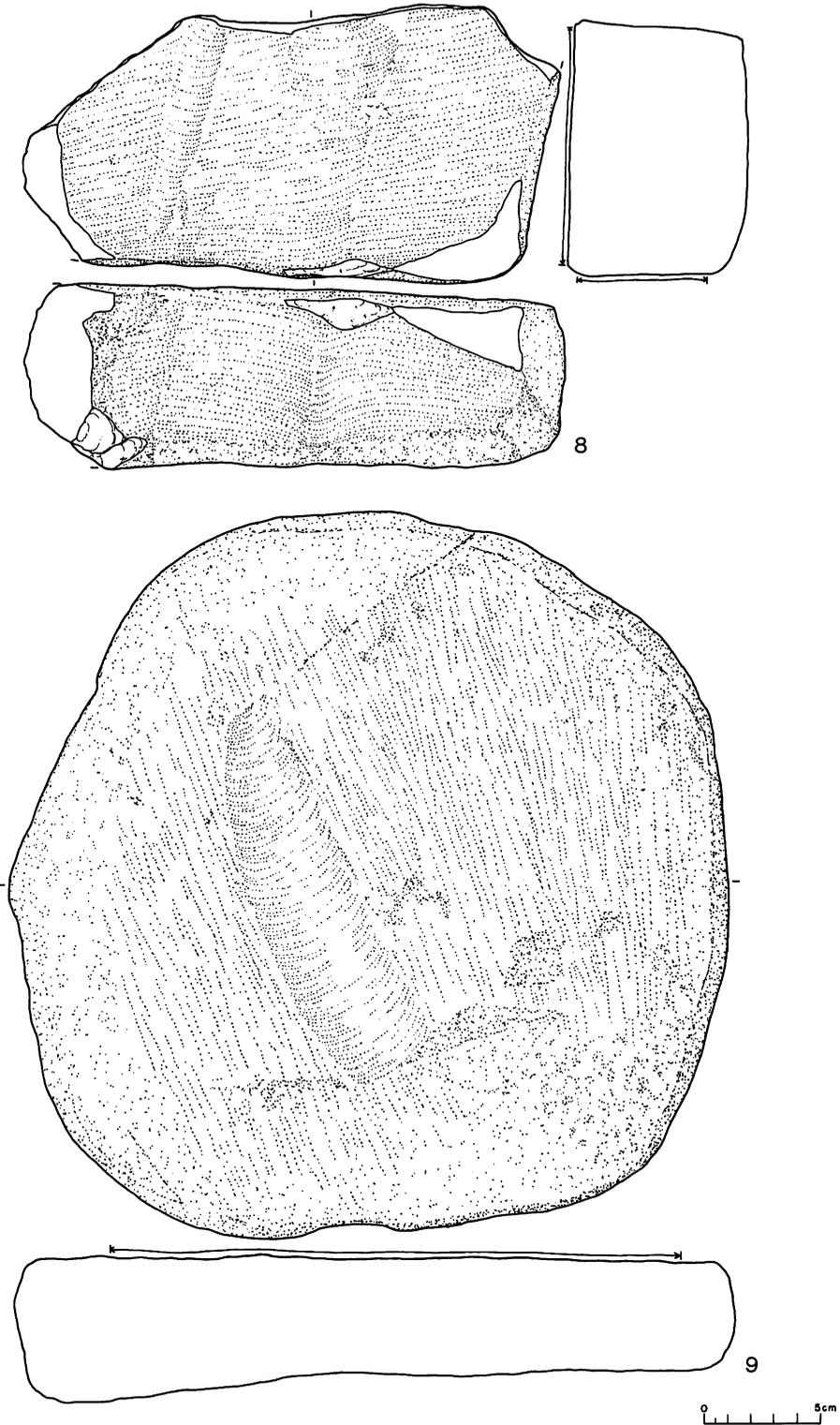


図IV-4-4 住居跡 H-16の土器・石器

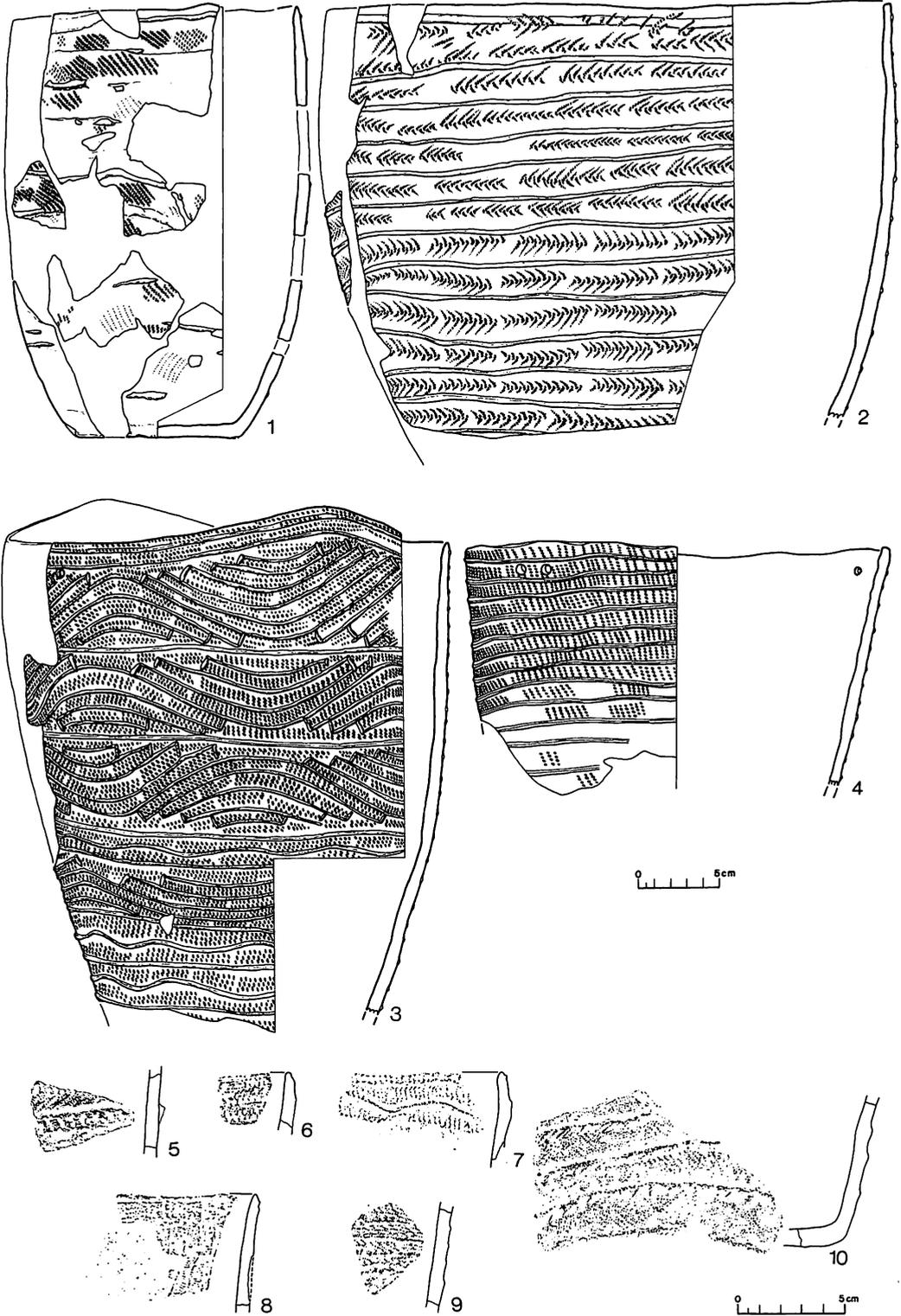
F-19は、焼土の周辺から黒曜石製のスクレイパー・安山岩製のたたき石などが出土している。

両者とも焼土の堆積は薄く、中から何も検出されていないことから見ても長時間使用されていたとは考えられない。

焼土F-16・F-19は、これらの周辺から柱穴などの小ピットは確認されなかったが、上記のことから見て同層で確認されたH-16と同じように住居跡に伴う焼土と考えられる。

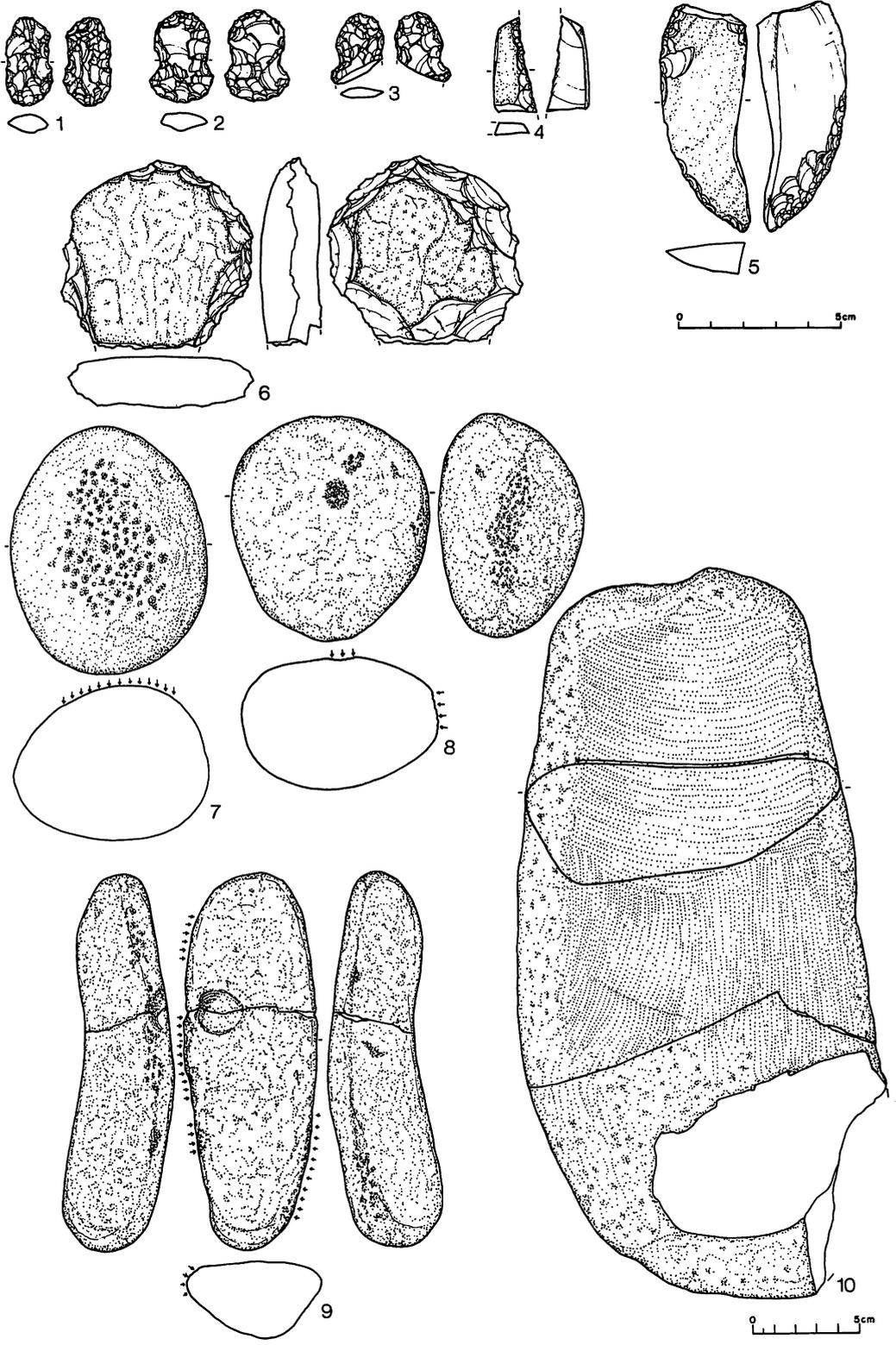


図IV-4-5 住居跡 H-16 の石器

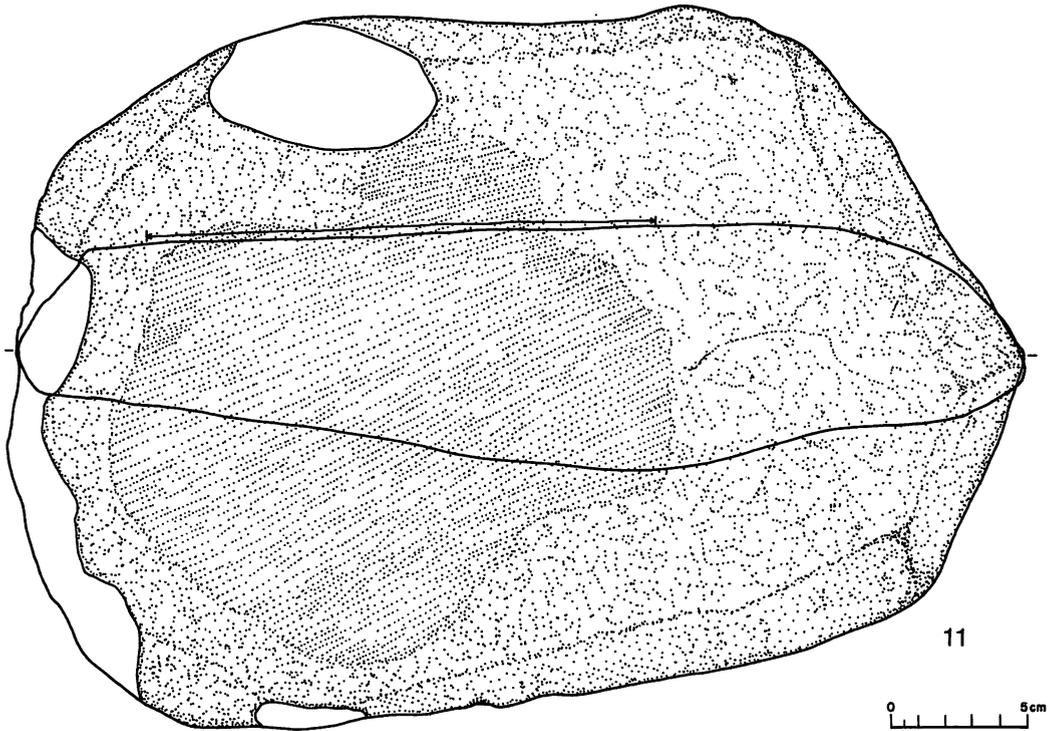


図IV-4-8 口層の土器

IV 遺構と遺物



図IV-4-9 八層・口層の石器



図IV-4-10 口層の石器

時期は、これら焼土の確認された同じ層から縄文時代早期の遺物が出土していることや、F-16の周辺から同じ早期に属する土器2個体が出土していることなどから見て、いずれも縄文時代早期のものと考えられる。

口層の土器

1は口径17.2cm、器高10.1cmをはかる。微隆起線間にはRL斜行縄文が施される。2は口径34.5cmをはかる。微隆起線間には結束羽状縄文が施される。3は口径26.7cmをはかる。口縁はゆるやかな2個の波頂をもつものと考えられる。文様構成は胴部上半で横走隆起線によって幅広く上下3段に区画しその内側の隆起線は弧状に貼り付け、下半では1段だけ上半とおなじ隆起線の組合せがみられるほかは、横走と蛇行隆起線が交互に貼り付けられている。隆起線間にはRL短縄文が施される。4は口径25cmをはかる。隆起線間にRL短縄文が施される。5は結束縄文を施文した後、断面が三角形をなす太い隆起線を貼り付けその上に縄で刻みを入れている。10は底部破片隆起線間にはRL縄文が施される。5はIb3類土器、このほかはすべてIb4類土器である。

口、八層の石器

1~3、6~10、11は口層下出土。このうち1~3、6~10はF-19、20、21周辺から出土したものである。4、5は八層出土。1~5はスクレイパー。1~3は両側縁中央にノッチがいられている。6は扁平礫の周辺に荒い剥離がみられるもので、スクレイパーか石斧と考えられる。7~8は

IV 遺構と遺物

たたき石。10、11は石皿。石質は1～5が黒曜石、6が片岩、7～9が安山岩、10、11が砂岩である。

5 イ層の遺構と遺物

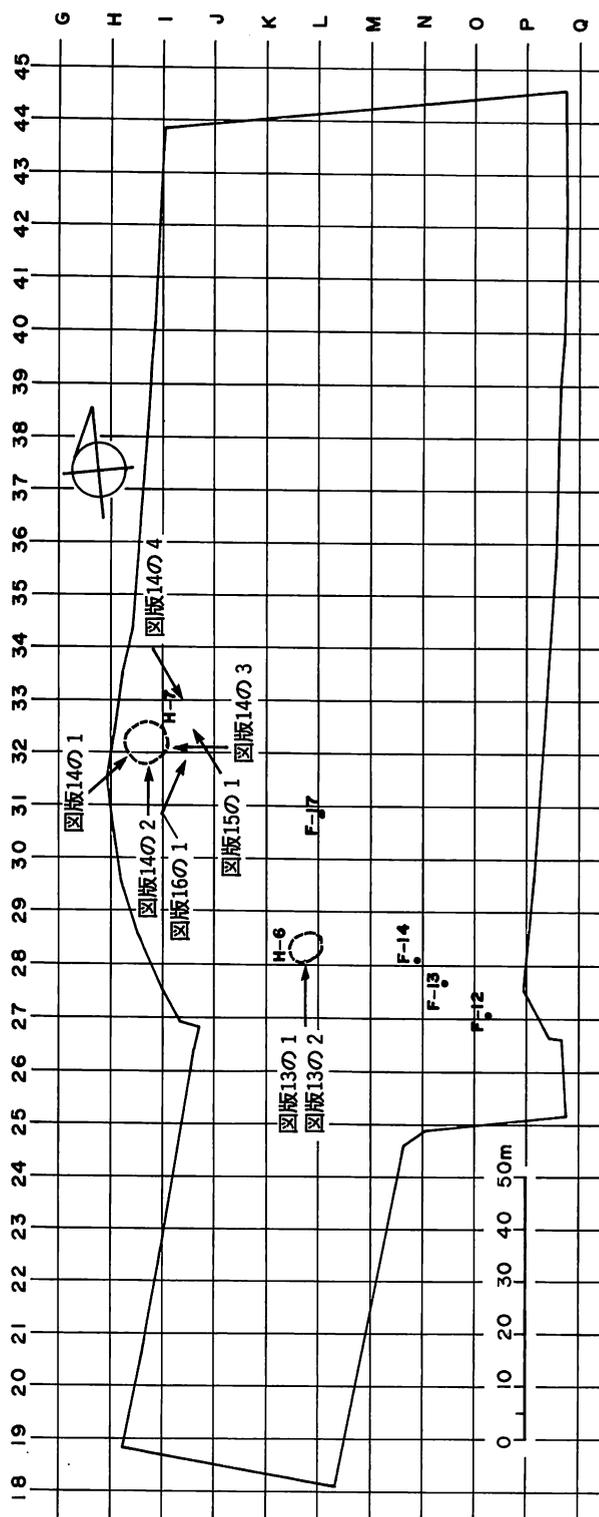
イ層は、Ⅶ層の中にあり、ロ層、ハ層と同じ様な環境のもとで形成されたものである。したがって、石狩川の流路の脇にあって、洪水の影響が及ばないある短い期間に、人間の生活の場となったところとみなせる。イ層はH-37とP-33を結ぶ線の南側に広がって、その地形は図IV-1-2に見るように、南の沢と中の沢との基底部をなす沢地形を示している。北側は、図Ⅲ-4の模式図のようにⅦ層中で消滅するものと考えられるが、あいにく今回の調査区域では、消滅を推定される付近が削平されていたので、どのような上下関係でⅤ層と接するのかは明らかにできなかった(図Ⅲ-6)。

住居跡(H-6・7)、焼土と土器・石器等が検出された。

H-6

位置：K-28-b・c L-28-a・d 道路地区の中央部に位置している。標高は66.00m～66.60mである。

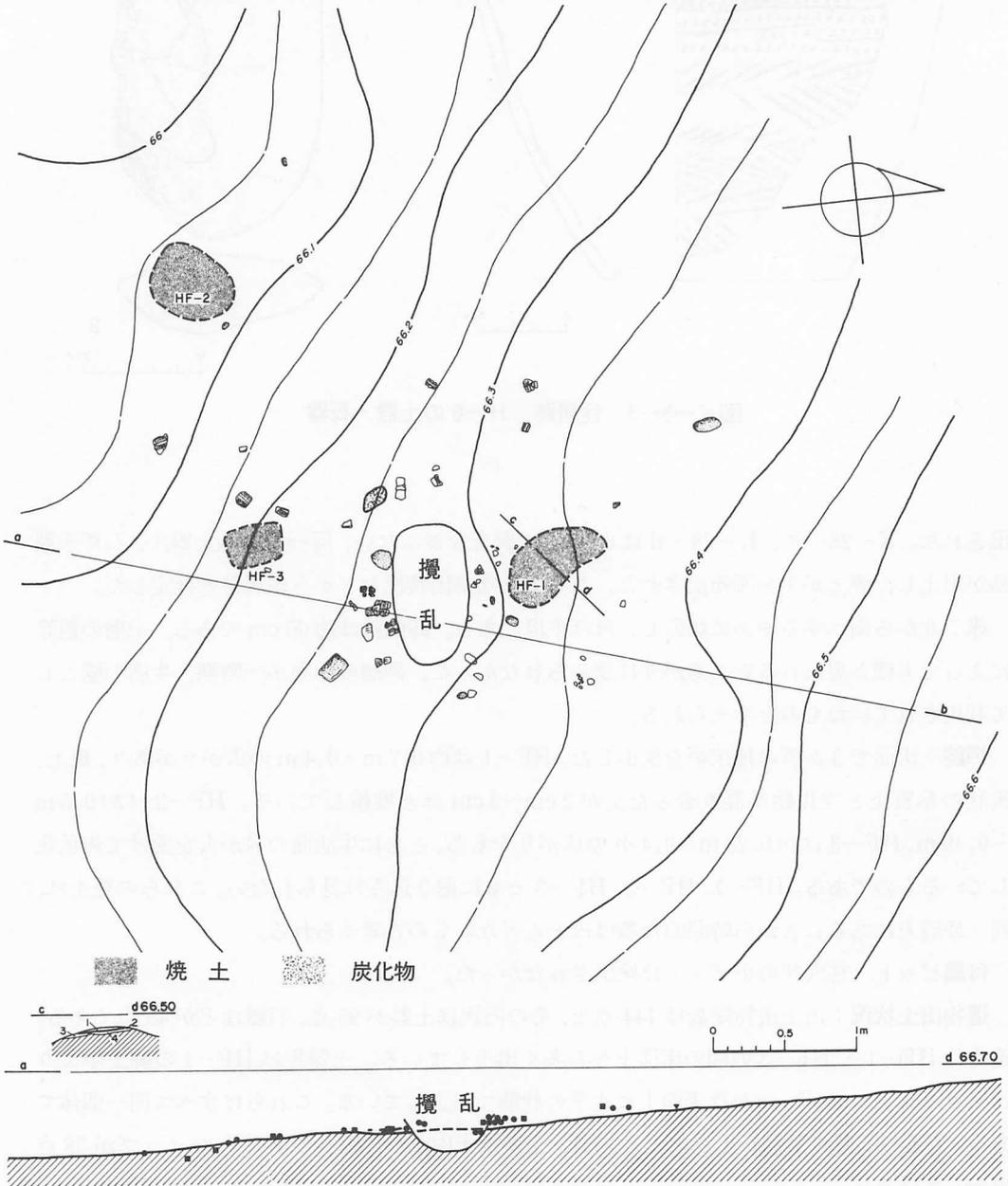
規模：不明



図IV-5-1 イ層の遺構位置と写真撮影方向

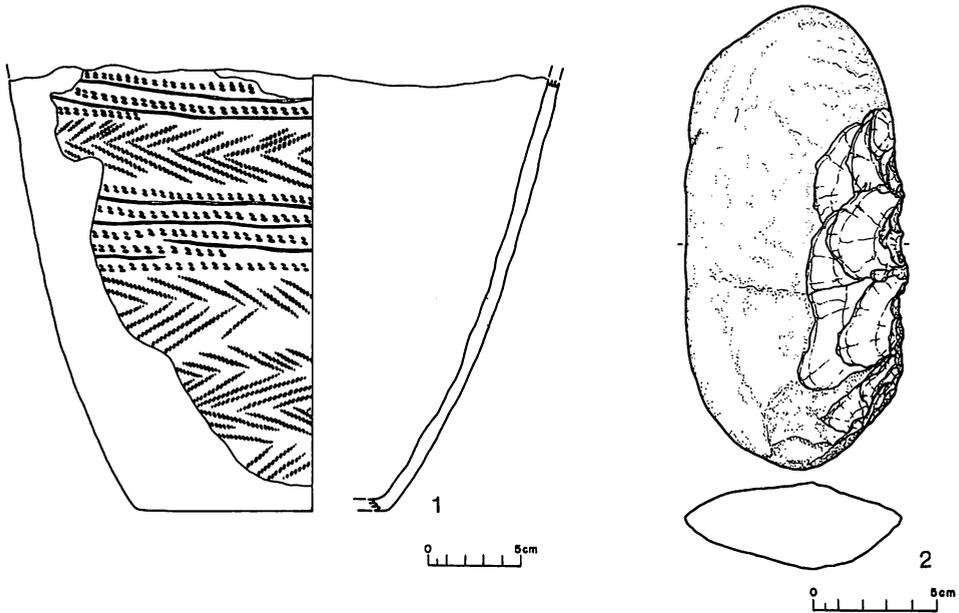
平面形：不明

確認・調査：K-28-bの包含層調査中、第VII層中のイ層を除去し、砂層を10cm~15cmほど掘り下げたところ、土器片が2点出土した。またそのすぐ南側からまとまって炭化物が検出された。このためこれらの周辺及びL-28-aを土器片が出土した面まで掘り下げ、遺物、炉跡、小ピットなどの検出につとめた。この結果、多数の土器片、礫が出土し、焼土が2か所検



- 層位
- | | |
|---------------------------------|--------------|
| 1. 晴黄灰色土(粘質)+暗赤橙色土(焼土、炭化物を少量含む) | 3. 暗黄灰色土(粘質) |
| 2. 暗赤褐色細砂(4が赤色化している) | 4. 暗緑灰色細砂 |

図IV-5-2 住居跡 H-6



図IV-5-3 住居跡 H-6の土器・石器

出された。K-28-c、L-28-dは63年度に調査をおこない、同一面から土器片、石斧未製品が出土し、焼土が1か所検出された。このような検出状況などから住居跡と推定した。

床：北から南へゆるやかに傾斜し、ほぼ平坦である。高低差は約60cmである。土層の観察によっても壁と思われる立ちあがりは認められなかった。砂層の一面が一時期、生活の場として利用されていたものと考えられる。

炉跡：床面で3か所の地床炉を検出した。HF-1は約0.7m×0.4mの広がりがあり、焼土、灰状の粘質土と炭化物が混り合った土が2cm～3cmほど堆積している。HF-2は約0.6m～0.46m、HF-3は約0.28m×0.4mの広がりをもち、ともに生活面の砂が火を受けて赤色化しているものである。HF-1、HF-2、HF-3ともに掘り込みは見られない。これらの焼土は、同一砂層上にあることから時間的な差はほとんどないものと考えられる。

付属ピット：柱穴状の小ピットは検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物総数は144点で、その内訳は土器が95点、石器などが49点である。遺物はHF-1とHF-3の間の床面上から多く出土している。土器片はHF-1の焼土中より20点出土しているが、ほかは床面上に水平の状態出土している。これらはすべて同一個体である。石器は石斧未製品が1点出土し、HF-1の焼土中から黒曜石のフレイク・チップが38点出土している。

遺物：図IV-5-3の1は、現存最大径29cm、底径部13.3cm、現存器高23.1cmの深鉢形土器である。胴部はほぼ直線的に外傾している。底部は平底と思われる。文様は撚り糸圧痕文と

IV 遺構と遺物

しつぶされた状態で一括出土している。また HP-1 の覆土中 (図 IV-5-7 の 33) からは流れ込んだ状態で一括出土している。図 IV-5-7 の 32 と図 IV-5-7 の 33 とは同一個体である。H-32-b・c、I-32-a・d、I-33-a の礫及び砂層上から H-7 と同じような状態で土器や石器などが出土している。土器は図 IV-5-7 に示すように H-7 の出土土器と接合関係にある。これらの一括出土の土器はほとんど摩耗は見られず、廃棄時の位置を保っていると考えられる。HF-2 周辺の凹地のみを生活面ととらえるのではなく、より広い範囲を生活面と考える方が妥当のようである。H-7 とその周辺出土の遺物総数は 1478 点で、その内訳は土器が 509 点で、石器などが 969 点である。石器は、石鏃 1 点、石錐 1 点、台石片 15 点、たたき石 1 点、砥石 1 点、スクレイパー 1 点、フレイク・チップ 949 点出土している。石鏃 (図 IV-5-5 の 1)、フレイク (図 IV-5-5 の 4) は床面上、石錐 (図 IV-5-5 の 2)、スクレイパー (図 IV-5-5 の 5)、フレイク (図 IV-5-5 の 3) は炭化物中、たたき石 (図 IV-5-5 の 7)、フレイク (図 IV-5-5 の 6) は暗黄灰色細砂層中より出土している 5 のスクレイパーと 6 のフレイクは、漆黒の黒曜石とともに礫表皮に凹みが見られることから判断すると同一母岩と考えられる。黒曜石のフレイク・チップは HF-2 周辺、とくに、西・東側の床面上から出土し、HF-2 の南東側の暗黄灰色細砂中からもまとまって出土した。HF-1 は、 6390 ± 35 yBP (KSU-1845)、HF-2 は、 6460 ± 40 yBP (KSU-1841) である。

遺物：図 IV-5-6 の土器 1 は、口径 28.1 cm、底部径 10.5 cm、器高 31 cm の深鉢形土器である。胴部はやや丸味をもち、内湾しつつ立ちあがっている。口縁端部断面は丸味をもつ三角形形状である。口縁は対角線上に二つの山形をもつゆるやかな波状口縁である。底部はわずかに揚げ底になっている。文様は口縁部から底部まで直線的な隆帯とゆるやかな波状の隆帯が約 1.5 cm~3.5 cm の間隔で横環し、その間に二つ折りの原体による端縄文を押圧している。器厚は 6 mm~7 mm で、胎土には長石粒、小石を含み、やや軟質であるが緻密である。色調は灰色。内面は粗いヨコナデ調整で、色調は黄灰色である。外面色調は暗灰色で、全体に軟質であるが、安定感があり、ていねいにつくられている。

図 IV-5-6 の土器 3 は、口径 32.2 cm、現存器高 21.5 cm の深鉢形土器である。胴部は直線的に外傾し、口縁端部断面は鋭角的な三角形形状である。口縁はわずかに波状を呈するが、平縁である。文様は幅約 3 mm~4 mm の隆帯が 1 cm~4 cm の間隔で横環している。無文である。器厚は 8 mm 内外で、胎土には長石粒を少量含み、軟質であるが緻密である。内面はていねいなヨコナデ調整である。胎土・内・外面の色調は暗灰色である。

図 IV-5-6 の土器 2 は、胴部現存最大径 25 cm、底部径 10.3 cm の深鉢形土器である。胴部下半部は直線的に外傾する。底部は平底である。文様は幅約 3 mm~4 mm の隆帯が約 2 cm の間隔で横環する。その間に二つ折りの原体による端縄文を押圧している。器厚は 6 mm 内外で、胎土は軟質で、緻密である。色調は明灰色。内面は粗いヨコナデ調整で、色調は暗灰色である。外面色調は明灰色で、火を受けて赤色化している部分がある。全体に軟質で、つくりは粗雑である。

2種の原体を用いた羽状縄文に施文されている。器厚は8mm内外で、胎土に少量の石英粒を含み、緻密で堅い。色調は明灰色。内面はていねいなヨコナデ調整が施され、色調は明褐色。外面色調は淡黒褐色。全体にていねいなつくりで、焼成は良好である。図IV-5-3の2は、緑色片岩の石斧末製品で、一部に打ち欠き痕がある。

時期：床面からの一括出土土器は東釧路IV式土器に比定されるものであり、本住居跡は縄文時代早期後半の時期のものと考えられる。

H-7

位置：H-31-c・d、H-32-a・b 西地区の南側、最西端に位置している。標高は66.20m~66.60mである。

規模：不明

平面形：不明

確認・調査：H-32-bの包含層調査中、第VII層中のI層を除去したところ、北東側にこぶし大の垂円礫の層が露出し、その直上や礫中から土器片や石器などが出土した。このためH-32-a、H-31-c・dも同様にI層下まで掘り下げたところ、H-31-c・dの北側にH-32-bと同様の状態で礫層面が確認された。この礫層露出部分にかこまれた砂層上に炭化物混りの焼土(HF-1)が検出された。さらにこの砂層(暗黄灰色細砂層=土層図 1)を5cm~10cmほど掘り下げたところ、HF-1の南側に約2.4m×0.8mの長方形に炭化物の広がりが出された。この炭化物の中央部に土層観察用のセクションを設定し、礫にかこまれた砂層部分を掘り下げた。炭化物を除去すると南西側より焼土(HF-2)が良好な状態で検出された。HF-2の周辺よりフレイク・チップのまとまりが検出され、またHF-2の東側及び西側から土器が一括出土した。このため住居跡を想定し、遺物、床面、柱穴などの検出につとめ、調査をおこなった。

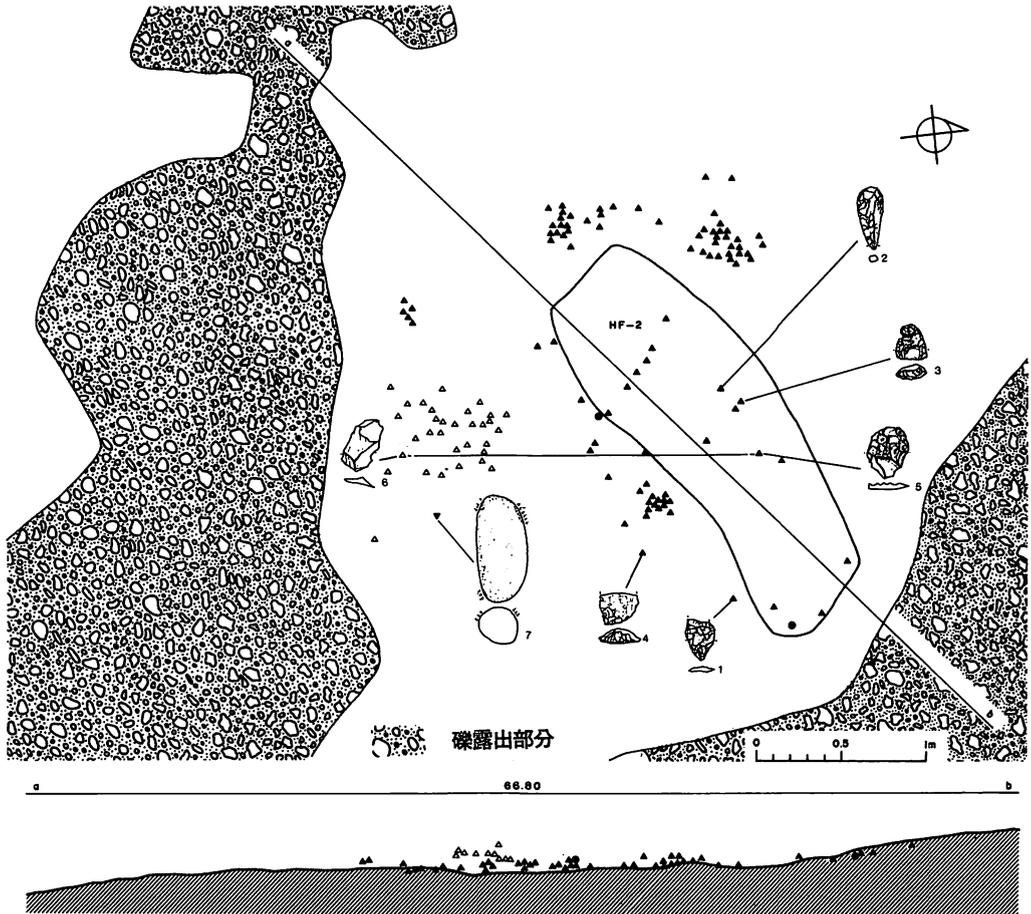
覆土：HF-1とHF-2を覆う炭化物の間には暗黄灰色細砂層が5cm~10cmほど堆積している。礫と暗黄灰色細砂層の間には黄灰色細砂(土層図 6)が10cm~15cmほど堆積し、炭化物及び暗黄色細砂はこの層上に堆積している。

床：HF-2下の黄灰色細砂層上面が火を受けて赤色化していることから、この黄灰色細砂層上面が床面と考えられる。北東から南西にゆるやかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁と思われる立ちあがりなどは見られず、凹地の砂上を利用した床面である。

炉跡：砂層のほぼ中央部に約0.9m×0.3mのひょうたん形の広がりをもつ地床炉である。焼土の厚さは約3cmで、掘り込みは見られない。

付属ピット：床面上より2か所に柱穴状の小ピットが検出された。HP-1は径約0.42m×0.31mの円形のプランで、深さは約0.15mである。先端部が細く、わずかに内側に傾いている。

遺物出土状況：出土遺物総数は1059点で、その内訳は土器が118点、石器などが941点である。土器はHF-2の東側床面上(図IV-5-7の32)と西側床面上(図IV-5-7の34)から押



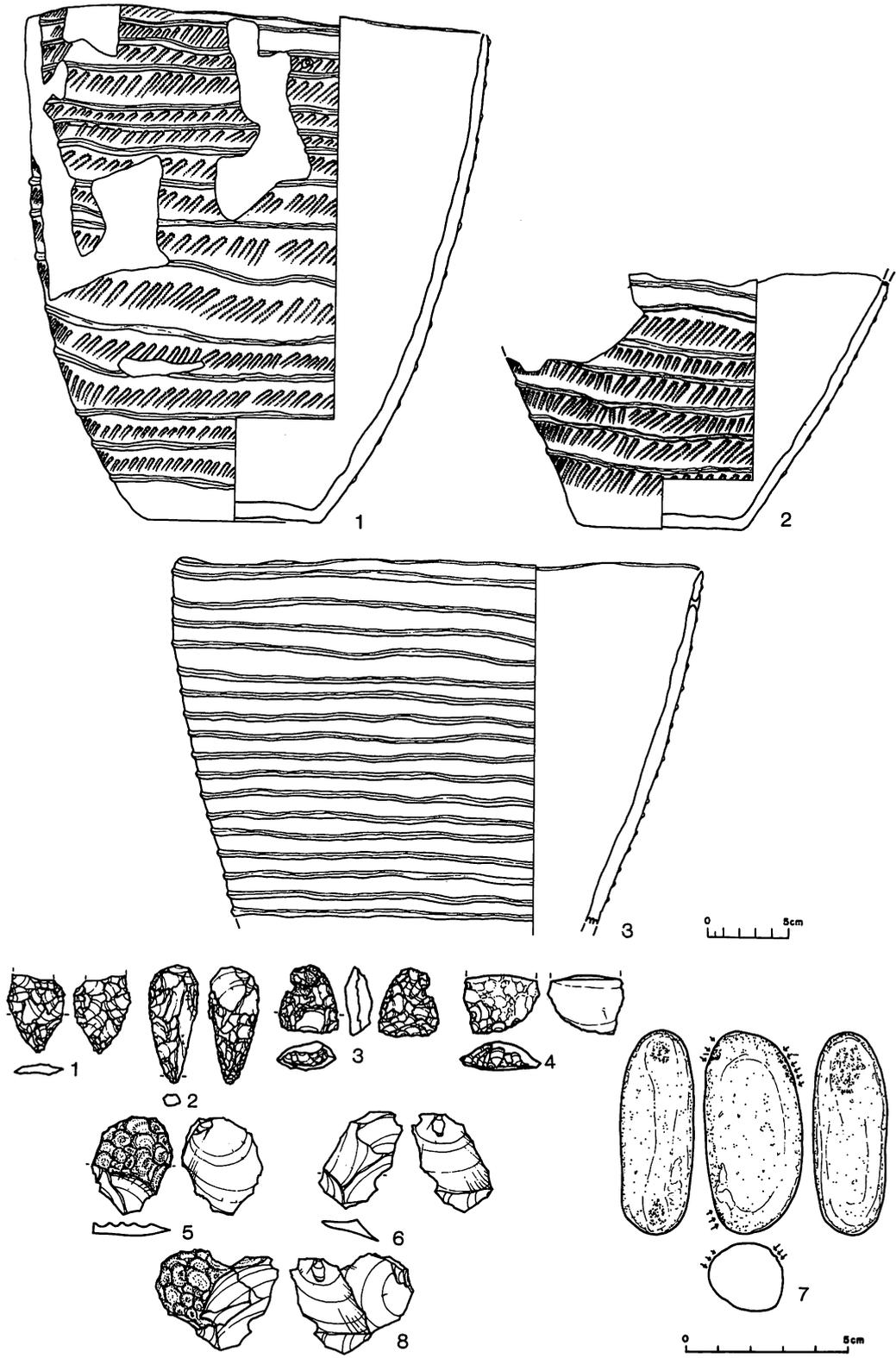
図IV—5—5 住居跡 H—7の遺物分布

時期：床面及び周辺から出土している土器は中茶路式土器に比定されるもので、本住居跡は縄文時代早期後半のものである。

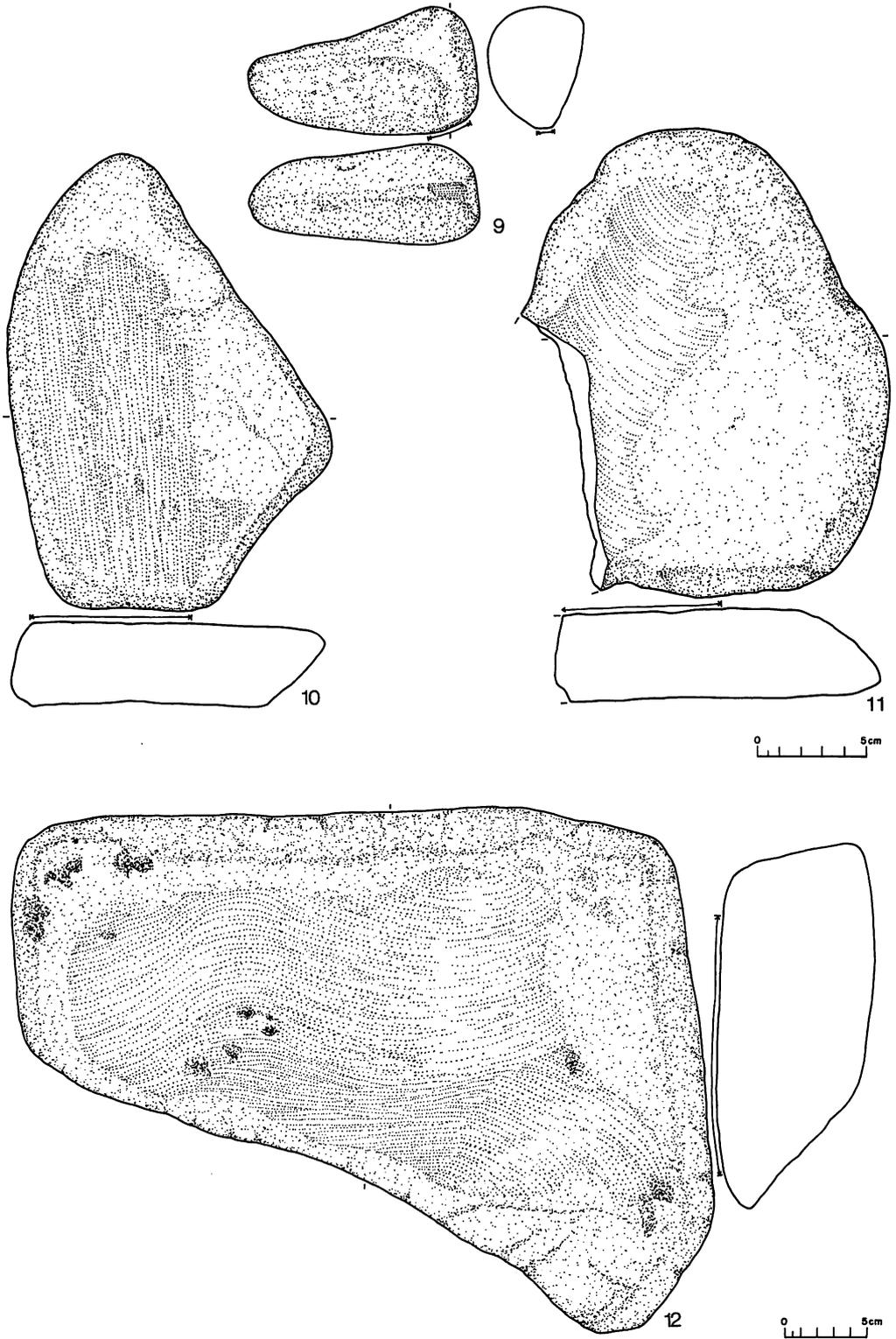
焼 土

イ層の焼土は、調査区中央部のK—30グリッドから1か所、L—30グリッドから1か所、L・M—27・28グリッドから9か所の合わせて11か所が確認された。焼土中からは、遺物は検出されていない。

時期は、焼土の確認された層から縄文時代早期の遺物が出土していることから見て、同時期と思われる。



図IV-5-6 住居跡 H-7の土器・石器



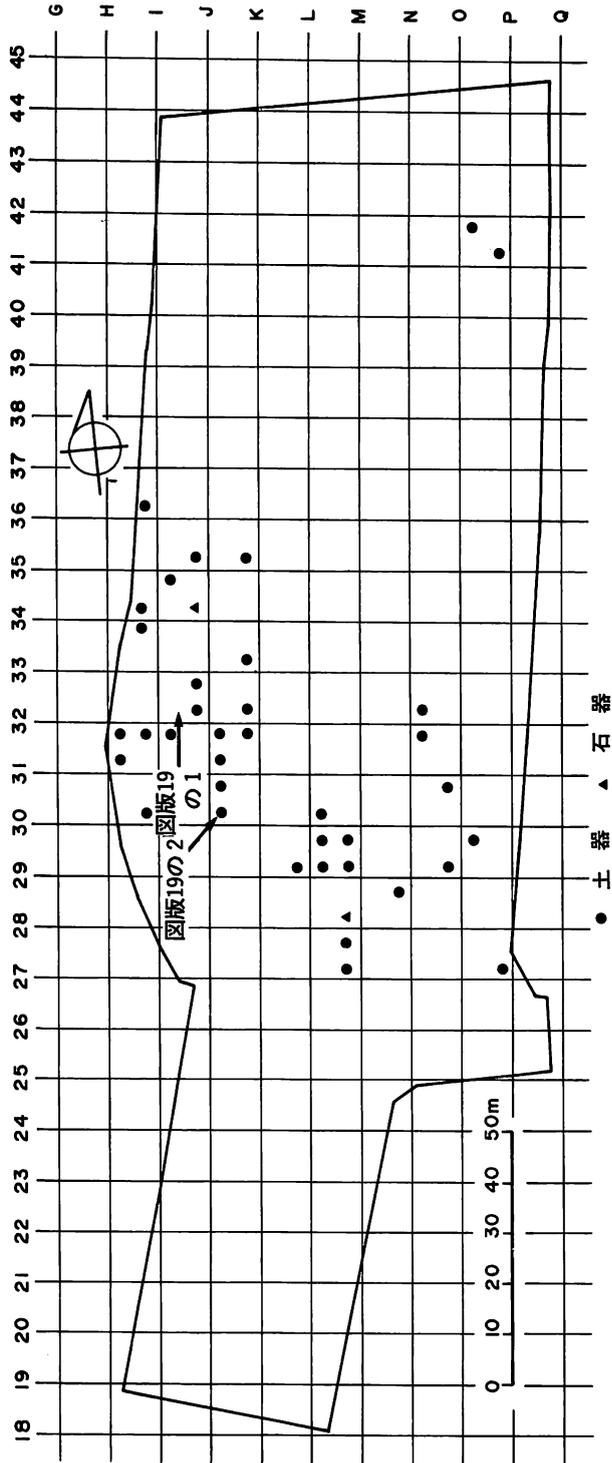
図IV-5-11 イ層の石器 (その2)

6 VI層・VII層（洪水砂層）の遺物

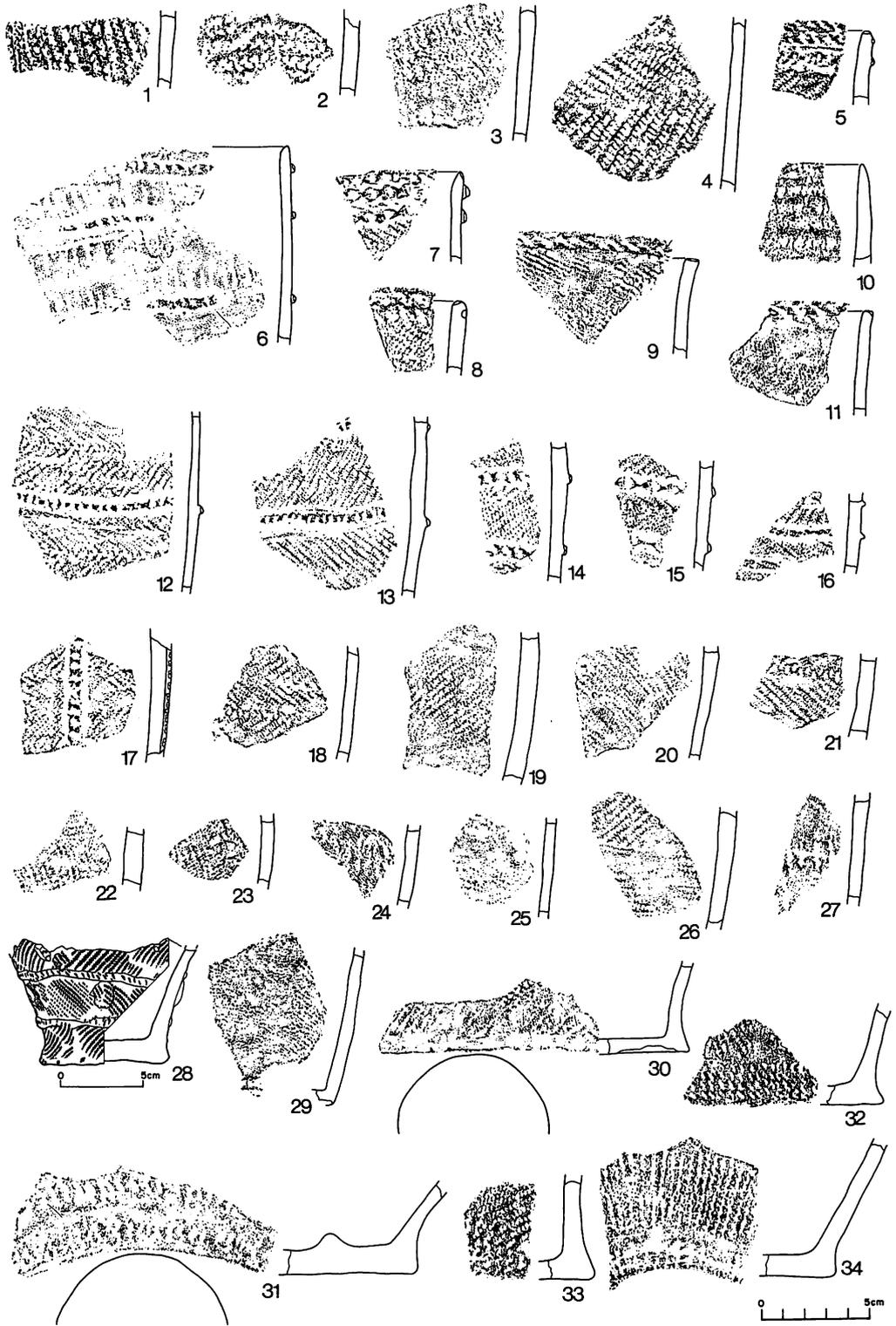
洪水砂層と考えられるVI層・VII層から土器・石器等が出土した。その分布状態は、図IV-6-1に示したとおりであり、南の沢と中の沢とにわたる場所である。すべてI層よりも上位から出土しているが、その下半部から東釧路Ⅲ式土器・コッタロ式土器、上半部から中茶路式土器、最上部から東釧路Ⅳ式土器が出土している。O-41区のもの、北の沢の溝底部から出土したものである。

土 器

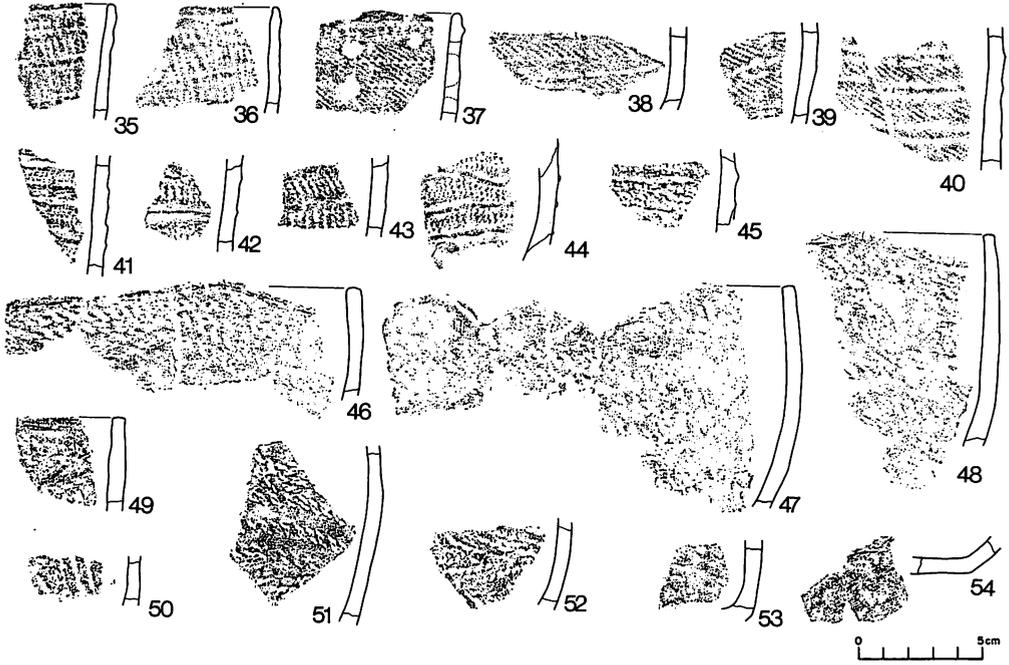
1、2、3は平組紐圧痕文が施されたもの。5~11は口縁部破片。5、7は口縁部直下に幅広の隆起線が2条貼り付けられ、隆起線上と口唇部に刻みが施されている。8、9、10は平坦な口唇上に縄による刻みがある。12~27は胴部破片。12~15、27は幅広の隆起線上に刻みがあるもの。刻みは12~14、27が縄、15は棒状の工具によるものである。24~34は底部破片。28にはボタン状の貼り付けがある。31は底部内面の中央に小突起がある。35~45は細い隆起線間に短縄文、斜行縄文がほどこされたもの。46~49は同一個体で波状口縁をなすものと考えられる。52は羽状の燃糸文が施されている。1~4、17、19、20、22~28、32~34が



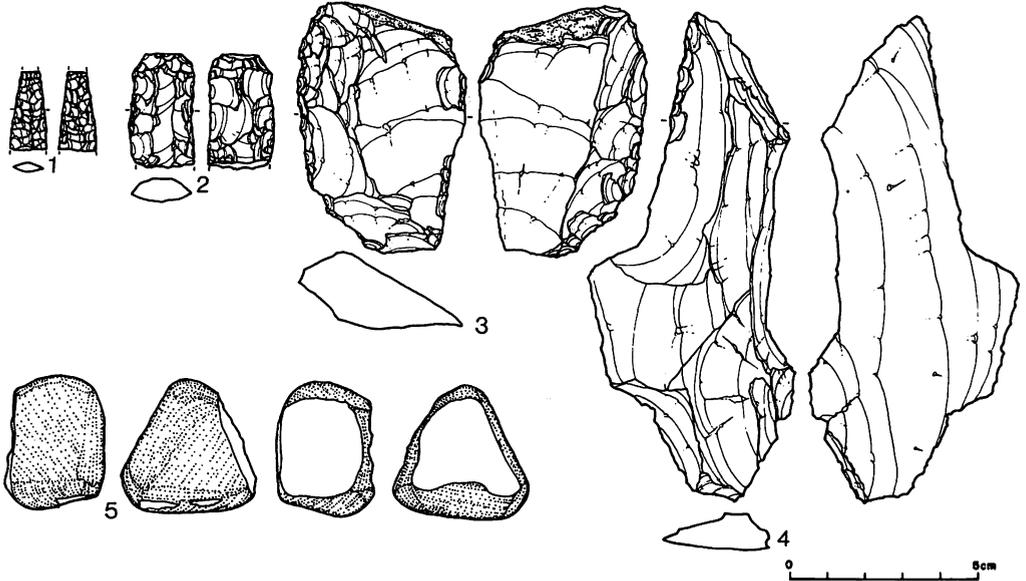
図IV-6-1 VI層・VII層（洪水砂層）の遺物分布と写真撮影方向



図IV-6-2 VI層・VII層（洪水砂層）の土器（その1）



図IV-6-3 VI層・VII層（洪水砂層）の土器（その2）



図IV-6-4 VI層・VII層（洪水砂層）の石器

Ib2 類土器、5~9、11~15、18、21、30 が Ib3 類土器、10、16、35~45 が Ib4 類土器、46~54 が Ib5 類土器である。

石 器

1 は柳葉形石鏃の破片。2~4 はスクレイパー。5 は小型の砥石。石質は1、2 が黒曜石、3、4 が安山岩、5 が砂岩である。

7 V層の遺構と遺物

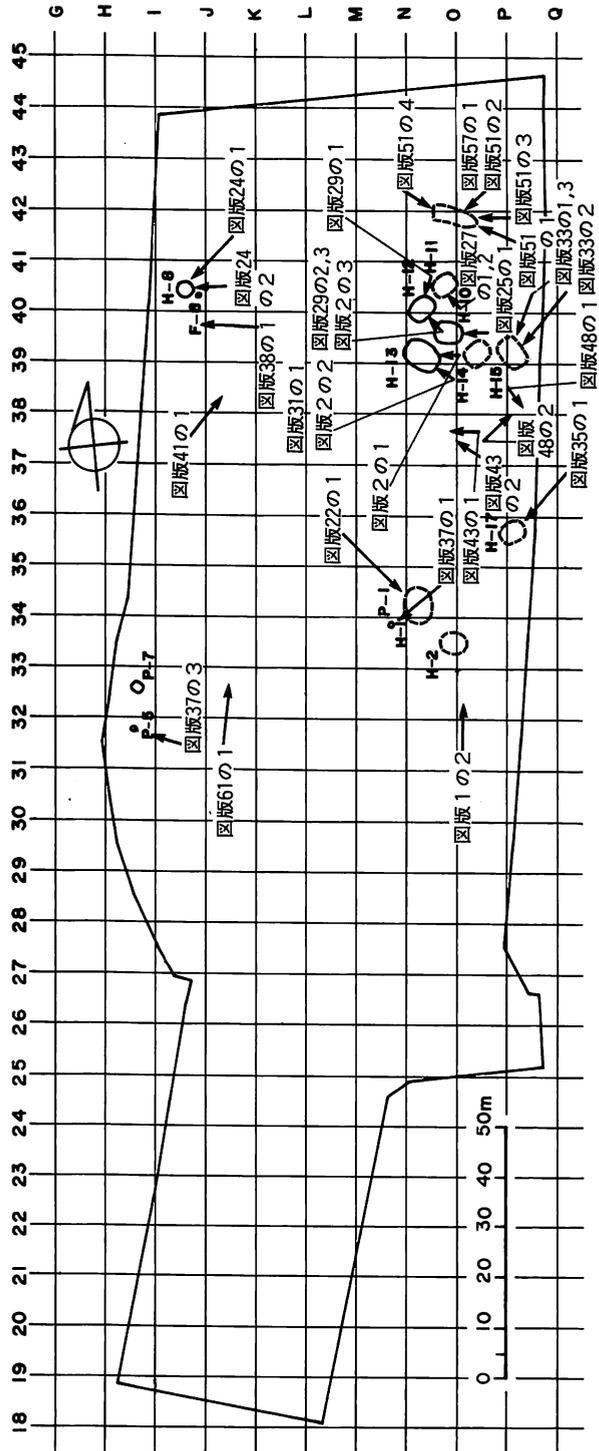
V層からは多くの遺構・遺物が検出された(図IV-7-1)。縄文時代早期の文化層であるV層が良く残っているのは、中の沢よりも北側である(図IV-1-1)。中の沢と北の沢とで区切られる台地状のところに、住居跡10か所があり、その周囲から多量の土器・石器等が出土した。このうち東釧路Ⅲ式土器の時期の住居跡と考えられる2か所(H-1・2)は中の沢に接する位置に、中茶路式土器の時期の7か所(H-8・10・11・12・13・14・15)は北の沢の近くにある。土器・石器等がまとまりをもって出土した「遺物集中」は、この中茶路式土器の時期の住居跡周辺にある。

土器は、東釧路Ⅲ式・コッタロ式・中茶路式・東釧路Ⅳ式などが出土している。圧倒的に多いのは中茶路式である。

H-1

位置：N-34-a・b・c・d 東地区の中央部、中の沢の北側平坦面上に位置する。標高は67.90m~68.00mである。

規模：不明



図IV-7-1 V層の遺構位置と写真撮影方向

平面形：不明

確認・調査：Nラインの南側に土層観察用のトレンチを入れたところ、N-34-a付近の黒色土（土層図 1）中より土器片が出土した。この周辺を精査し、N-34-b・c・dも黒色土を掘り下げたところ、黒色土中から多量のフレイク・チップがかたまっていた。また焼土、小ピットも検出されたため住居跡とする。

覆土：土器片の出土した黒色土（土層図 1）は当初第V層としたけれども、63年度の調査結果から見ると、住居跡の覆土と考えるのが妥当である。この黒色土は、第V層より粘質で、黒味が強く、黄色砂と炭化物が混入している。

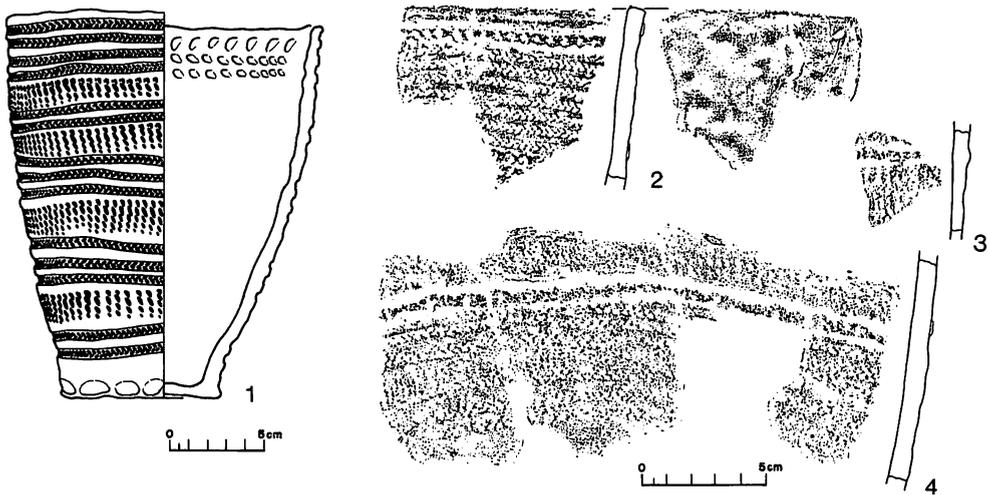
床：第VI層をわずかに掘り込んでつくられている。平坦であるが、浅い皿状である。

壁：掘り込み面、立ちあがりなどは不明である。

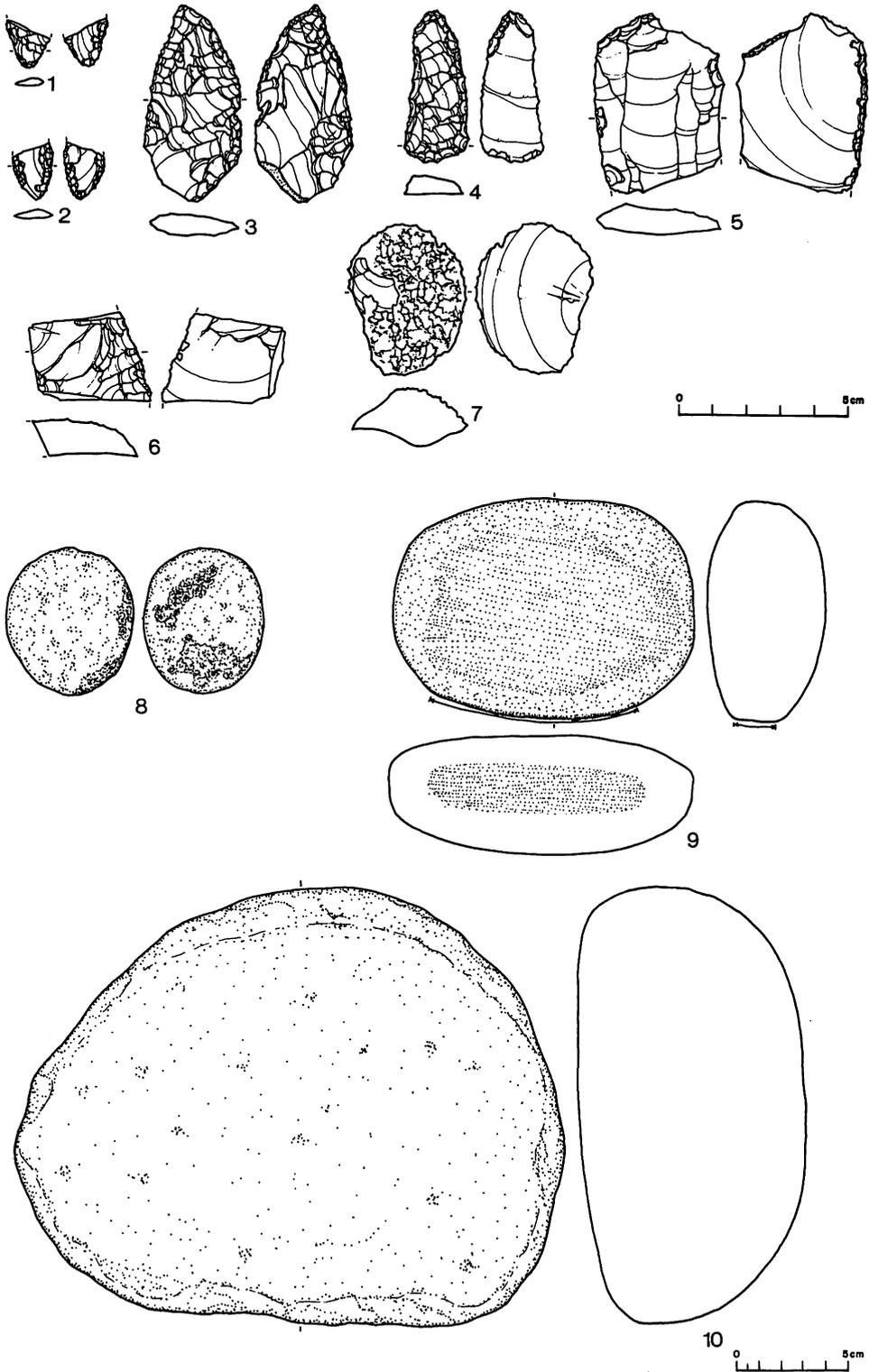
炉跡：床面の中央部に、約1.1m×0.8mの広がりをもつ地床炉(HF-1)が検出されている。HF-1の北西側からも焼土(HF-2)が検出されているが、これは黒色土の上層からの検出であり、本住居跡よりも新しい時期のものである。

付属ピット：小ピットは5個検出された。HP-1が柱穴状の小ピットと考えられる。先端部が尖る円錐状のもので、覆土はしまりのない暗茶褐色である。ほかの小ピットは浅く、シミ状のもので明確でない。

遺物出土状況：出土遺物総数は9862点で、その内訳は土器が21点、石器などが9641点である。遺物の大半はHF-1の周辺の黒色土中から出土している。石器などは、石鏃、石皿、すり石、スクレイパー、フレイク・チップが出土している。このうち黒曜石のフレイク・チップは9168点、頁岩のフレイク・チップは629点である。HF-1の北東側では黒曜石のフレイク・チップがなく、北西側では頁岩のフレイク・チップが多く、2種類の原材のブロックが認められた。H-1は石器製作の作業場と考えられる。さらにHF-1の南側、N-33-c・d付近の同一面



図IV-7-2 住居跡 H-1の土器



図IV-7-5 住居跡 H-1の石器

IV 遺構と遺物

上からも多数の遺物が出土している。とくに土器は2か所から、押しつぶされた状態で一括出土(図7-4)している。石器は、石槍、スクレイパー、たたき石、砥石などが出土している。これらがHF-1(H-1)に伴う遺物かどうかは、検討を要すると思われる。

遺物(土器)：1は口径16cm、器高20cmをはかる。胎土はきめが細かく、砂粒をわずかに混入している。裏面には器面調整の指頭圧痕がみられる。文様は横位の平組紐圧痕文とRL短縄文が交互に施されている。底部から立ち上がる部位には棒状工具による刻みがある。2は幅広い隆起線が2条貼り付けられその間に横位の平組紐の圧痕が施されている。隆起線上には縄の刻みがある。3、4は同一個体片。隆起線上には縄の刻みがある。体部には平組紐圧痕文とRL短縄文が交互に施されている。Ib2類土器。

(石器)：1、2は石鏃破片。3は槍先・ナイフ。4、6はスクレイパー。7はフレイク。礫皮面はゴルフボール状をなす。8はたたき石。9は扁平な円礫を素材としたすり石。平坦面と側縁にすり面がある。10は台石。石質は1~3、5~7が黒曜石、4が珪岩、8~9が安山岩である。

時期：覆土の状況、周辺の出土遺物などから縄文時代早期後半(Ib2類土器)のものと考えられる。

H-2

位置：N-33-b・c、O-33-a・d 東地区の中央部、中の沢の北側平坦面に位置する。標高は68.15m~68.26mである。

規模：(4.20m)×(3.50m) 最大深0.36m(現存)

平面形：長円形

床面積：11.4m²

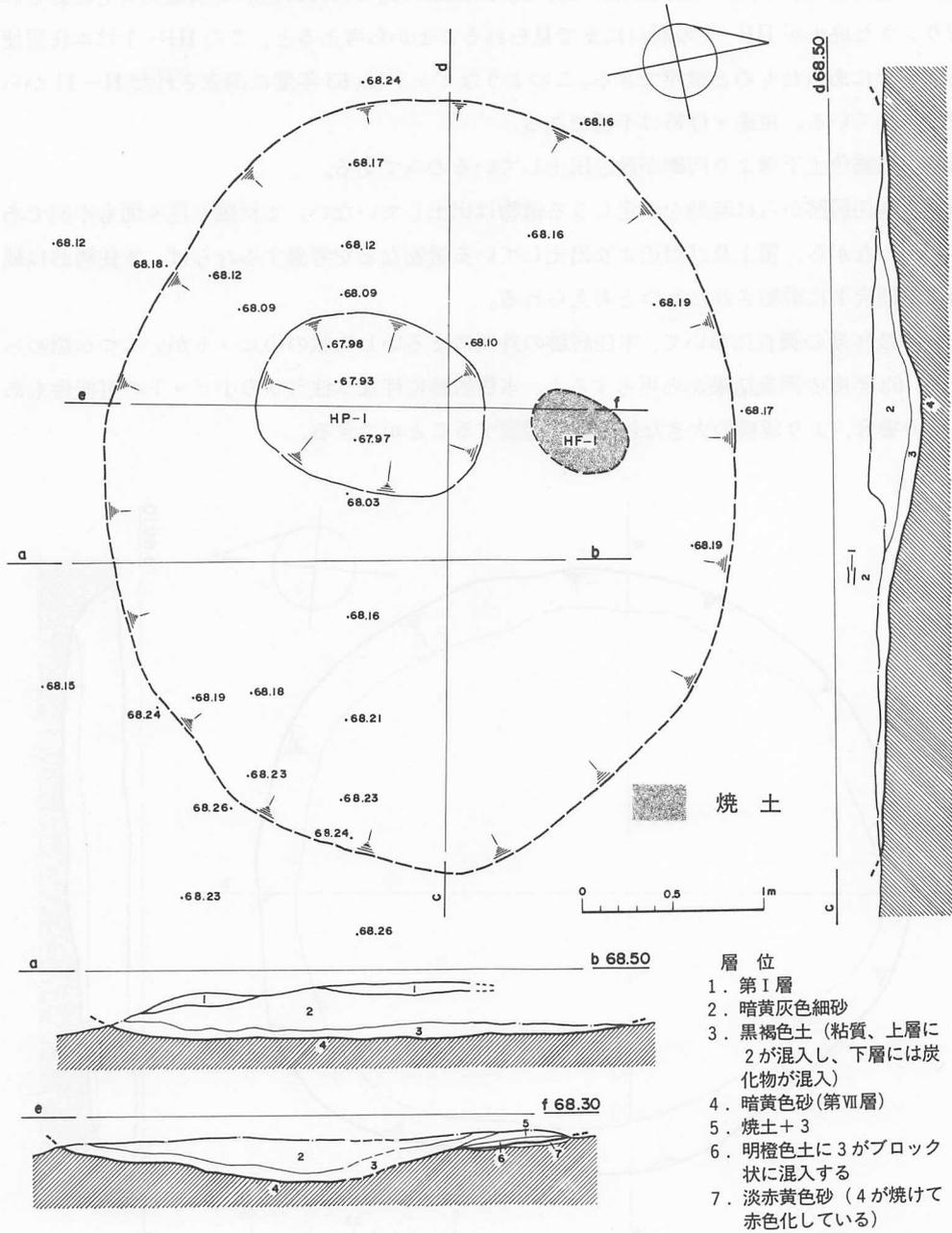
確認・調査：N-33-cの包含層調査中、黒褐色土(土層図 3)下層より焼土が検出された。このため隣接するN-33-b、O-33-aにて遺構の掘り込み面の確認を目的として焼土検出面まで掘り下げたが、明確な壁の立ちあがり確認できなかった。床面と想定される暗黄色砂層(土層図 4)上面を精査したところ、焼土(HF-1)の南側に約1.25m×0.95mの長円形の落ち込み(HP-1)を検出した。

覆土：耕作土の下には暗黄灰色細砂層(土層図 2)が約20cmほど堆積し、その下に黒褐色土が6cm~8cmほど堆積している。黒褐色土は第V層に酷似しているが、第V層よりは粘質で、黒味が強い。全体に暗黄色砂が混在し、下層には炭化物が混入している。HP-1の覆土も黒褐色で、炭化物を多量に混入している。黒褐色と暗黄色砂の間に黄色砂が薄く、全体的に見られた。この黄色砂は土層図6の上面からも確認された。

床：床面は第VII層を掘り込んでつくられている。ほぼ平坦であるが、HP-1の方向にわずかに傾斜している。

壁：明確な立ちあがり不明である。

炉跡：床面の中央部北側に約0.55m×0.4mの広がりをもつ地床炉がある。厚さ約8cmの焼土が残存し、床面は火を受けて赤色化している。掘り込み面は認められない。



図IV-7-6 住居跡 H-2



図IV-7-8 住居跡 H-8の土器

H-8

位置：I-40-a・b・c・d

規模：3.20 m×2.90 m/2.88 m×2.55 m/0.30 m

平面形：円形

床面積：5.7 m²

調査・確認：遺物集中1の調査終了後にVI層上面で平面形を確認した。

床：VI層中に作られている。西側が5~8 cm 深い。

壁：立ち上がりは明瞭で高さは22 cm ある。

炉跡：なし

付属ピット：なし

覆土：1層 茶褐色土でIV層よりもやや暗色調をなす。2層 V層に類似した黒褐色土であるが、黄褐色土を少量混じえる。3層は壁際にみられる粘質の黄褐色土。4層は暗黄褐色土。

重複：遺物集中1と重複する。

遺物出土状態：覆土出土が80点あり、その内訳は土器77点、剝片2点、礫1点である。これらの遺物は垂直分布から住居廃絶後のくぼみに周辺から流れ込んだものと考えられる。

遺物：1、2、3は同一個体片で、遺物集中1の出土土器と接合している。文様は口縁部下最初の隆起線文間にはRL斜行縄文が、それ以下ではRL短縄文が施されている。4は遺物集中2出土土器と同一個体と考えられるものである。隆起線文間にはRL短縄文が施されている。出土土器はすべてIb4類である。

時期：縄文時代早期後半と考えられる。

H-10

位置：N-39-b・c、O-39-a・d

規模：5.40 m×4.41 m/5.30 m×3.86 m/0.31 m

平面形：隅丸長方形

床面積：18.3 m²

調査・確認：VI層上面の検出作業中に茶褐色土の落ち込みがみられ周辺を精査したところ、長軸をほぼ東西方向とする隅丸長方形の平面形が確認された。掘り込み面はV層中にある。遺構の実測、写真撮影などの作業がすべえ終了した後、床面を5 cm ずつ二つに分け掘り下げ付属ピットの検出をおこなった。

床：VI層中に平坦に作られている。

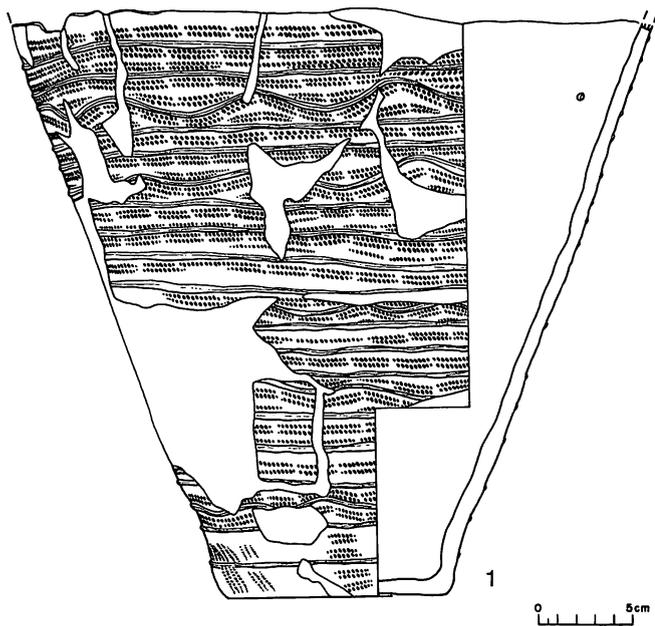
壁：西辺から南辺にかけて掘り込み面が確認されており高さは22~25 cm ある。

炉跡：竪穴中央に浅い込みをもつ地床炉が2個ある。

付属ピット：10個ある。位置や規模からみてHP-4、6、9は柱穴を構成するものと考えられる。

遺物出土状態：床面出土が24点、覆土出土が31点ある。またHF-1、2の焼土を水洗いした結果、火熱を受けた黒曜石のフレイク・チップがそれぞれ29点、59点検出された。

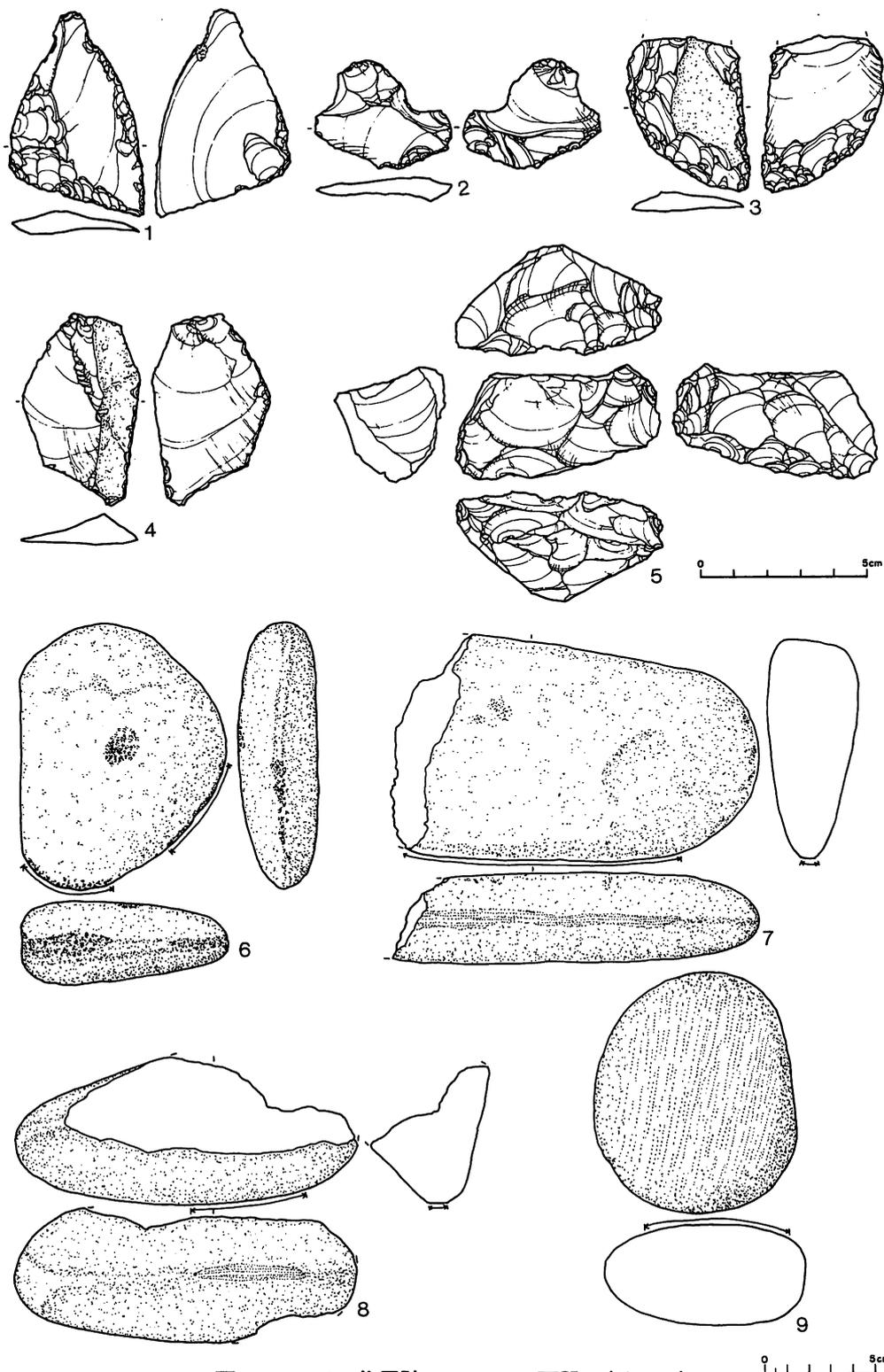
遺物(土器)：1は器高30.5 cmをはかるもので、口縁部を欠く以外ほぼ全周が復元された。この個体のうちH-10の破片は11点で、それ以外は隣接するN-29-b区V層から出土したものである。色調は暗橙色で、胎土には石英粒が多量に混入している。器形は口縁から底部へ直線的にすぼまる。文様は隆起線貼り付け→縄文の順でおこなわれ、隆起線は2ないし4条ごとに波状に貼り付けられ、その間には底部の2段は斜行縄文が、それ以外は短縄文が施されている。Ib4類土器。



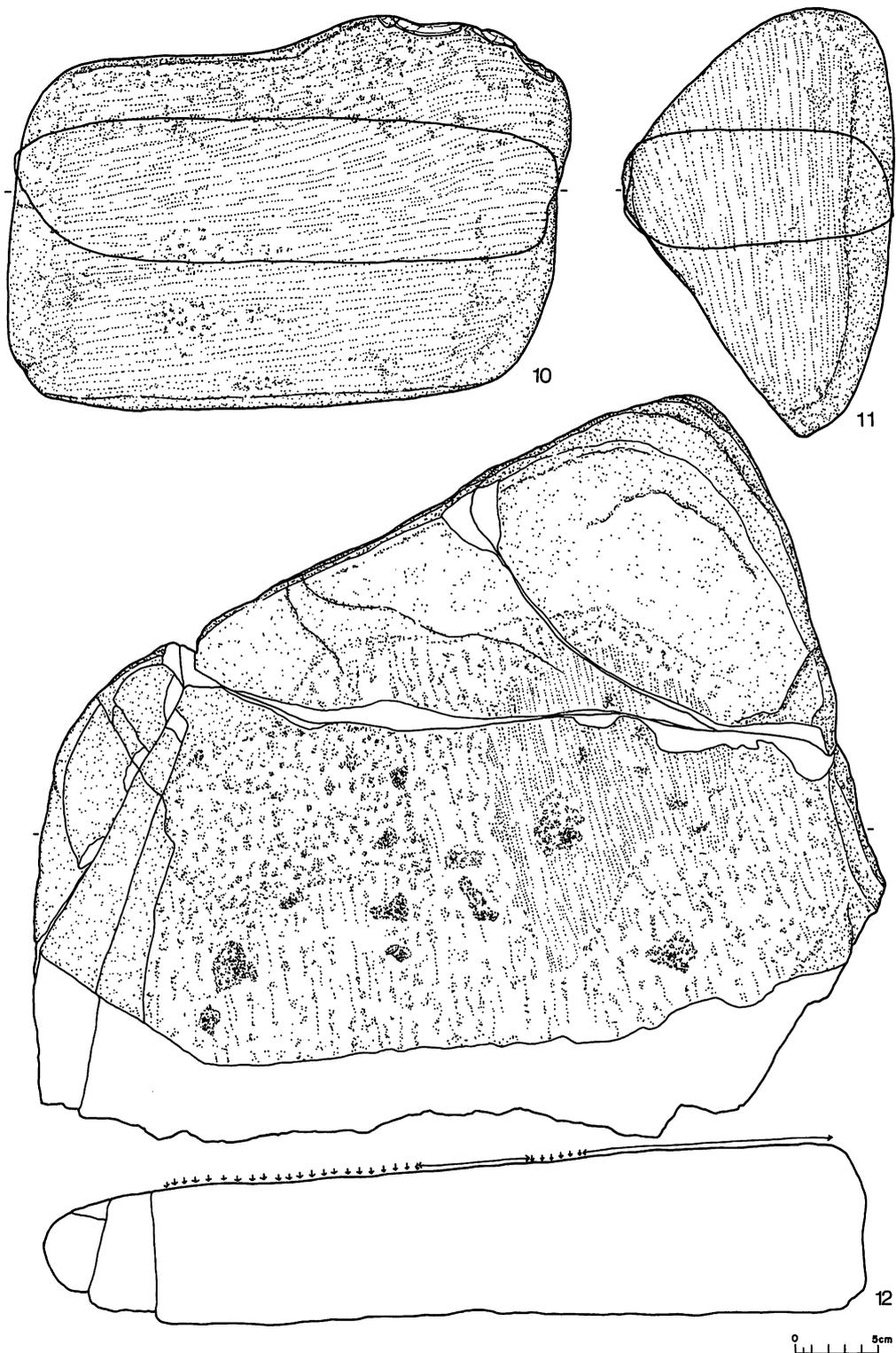
図IV-7-9 住居跡 H-10の土器

線的にすぼまる。文様は隆起線貼り付け→縄文の順でおこなわれ、隆起線は2ないし4条ごとに波状に貼り付けられ、その間には底部の2段は斜行縄文が、それ以外は短縄文が施されている。Ib4類土器。

(石器)：1は周辺加工のつまみ付きナイフ。2~4はスクレイパー。5は石核。6~9はすり石。6、7は扁平礫、8は断面が三角形の礫を素材としている。10~12は石皿。12はHF-1の直上から出土したものである。石質は1が頁岩、



図IV-7-12 住居跡 H-10の石器 (その1)



図IV-7-13 住居跡 H-10 の石器 (その2)

2～5が黒曜石、6、7、9が安山岩、8が輝緑岩、10～12が砂岩である。5の石材は色調が緑がかり光沢のないもので、ほかの3点と区別される。

時期：縄文時代早期後半と考えられる。

H-11

位置：N-40-b・c 東地区の北側、北の沢のすぐ南側に位置している。標高は67.75m～67.85mである。

規模：(6.0m)×(4.5m)

平面形：隅丸長方形

床面積：11.7m²

確認・調査：N-40-b・cの包含層調査中、第V層を除去したところ、約4.40m×3.70mの長形状の落ち込みが確認された。またこの落ち込みの西側から土器が一括出土した。このため住居跡を想定し、調査をおこなう。落ち込みの東側に見られた径約1.3mの円形状の暗灰色微砂を除去すると、全体に黒褐色土が堆積し、これを5cm～10cmほど掘り下げたところほぼ中央部から焼土が検出された。また東側の暗灰色微砂の下は、ほかの面より落ち込んでいることが確認された。

覆土：第V層と酷似している黒褐色土(土層図 4)が全面に堆積している。この層は第V層より黒味が強く、粘質である。黒褐色土の下層には、第VII層の砂質土と炭化物が多く混入しており、とくに東側の落ち込み内は多量の炭化物が混入している。

床：第VII層を浅く掘り込んでつくられている。中央部がやや凹み、南側が若干高く、段状になっている。

壁：西側の壁はやや急傾斜で立ちあがっている。ほかは不明である。

炉跡：床面のほぼ中央部に約1.0m×0.75mの広がりをもつ地床炉が検出されている。わずかに凹んでいる。焼土(土層図 6)は約4cmほどの厚さで、これを焼土と炭化物の混り合った土(土層図 5)が2cm～5cmほどの厚さで覆っている。この土にはフレイク・チップが多数混入している。この焼土中の木炭の放射性炭素年代測定値は、6340±60 BP (KSU-1842)である。

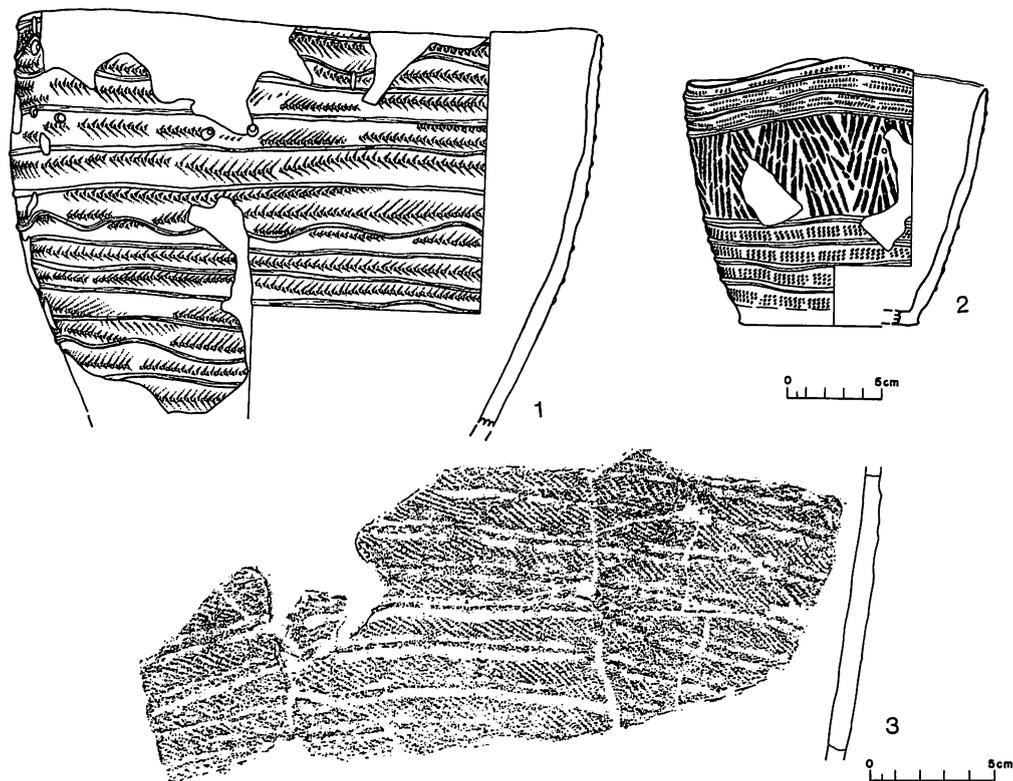
付属ピット：柱穴状の小ピットは全部で11個検出された。このうちHP-1～HP-8はほぼ直立し、覆土は淡褐色土(第VII層の砂が混入する)である。HP-10、HP-11は浅く、わずかに内側に傾いている。HP-9は先端が細く、直立している。この直上に礫がのっていた。柱穴状の小ピットの配列などから考えると壁際の床面は若干高くなっていた可能性がある。HP-12は径約1.7m深さ約20cmの浅い鉢状の落ち込みである。覆土は黒褐色土で、炭化物が多量に混入している。西側肩口には焼土と黒褐色土の混じり合った土が流れ込んだ状態で見られた。また墳底直上からは多量の炭化物が検出されていることから考え、本住居跡と同時期のものと考えてよいだろう。用途・性格などは不明である。

遺物出土状況：出土遺物総数は4,400点で、その内訳は土器が106点、石器などが4,334点

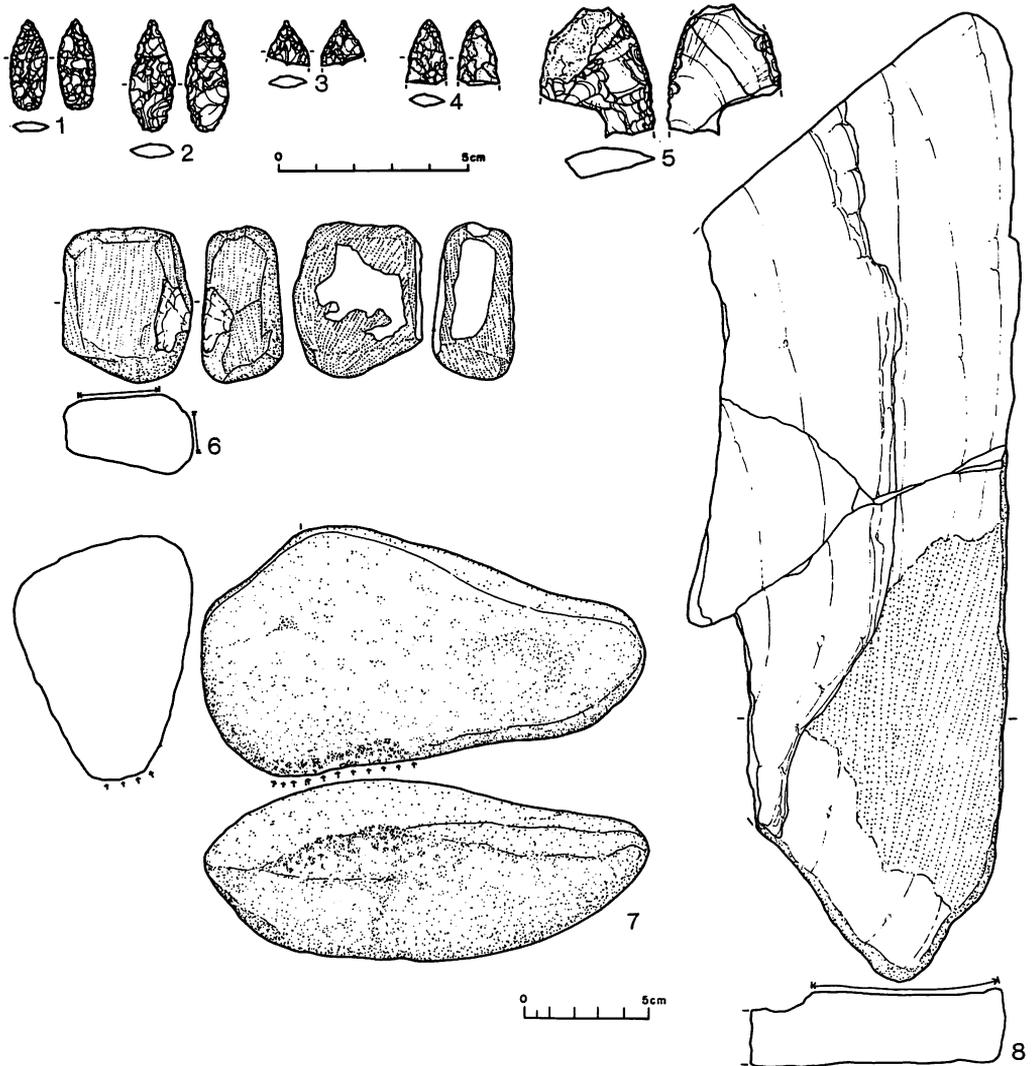
である。床面出土は石器などが9点、HF-1（土層図 5、6）出土は土器が8点、石器などが3,744点である。覆土より一括出土している土器はすべて西側に集中しており、とくに西壁肩口より一括出土した土器（図IV-7-16の土器1）は流れ込みの状態を示している。石器は床面上より砥石（図IV-7-16の石器8）1点、スクレイパー（図IV-7-16の石器5）1点、HF-1より石鏃（図IV-7-16の石器2、3、4）が3点、砥石1点、黒曜石のフレイク・チップ3,650点出土している。図IV-7-16の石器1は石鏃、図IV-7-16の石器6は砥石片、図IV-7-16の石器7はたたき石で、ともに覆土中からの出土である。また床面出土の砥石片（図IV-7-16の石器8）は、P-38-d、O-38-bの第V層（遺物集中 4）出土の砥石片2点と接合した。

遺物：図IV-7-14の1は、口径30.6 cm、現存器高21 cmの深鉢形土器である。胴部は直線的に外傾し、口縁部は垂直的に立ちあがっている。口縁端部断面はやや厚く、丸くなっている。口縁は平縁である。文様は直線、波状の隆帯がほぼ1.5 cm~2 cmの間隔で横環し、口縁部付近には縦方向の貼付帯が見られる。地文は結節のある羽状縄文である。器厚は5 mm~8 mmで、胎土には長石粒や小石を多く含み、堅く緻密である。色調は暗橙色。内面はていねいなヨコナデ調整で、色調は暗黒褐色である。外面色調は暗黒褐色で、全体に堅く、ていねいにつくられている。焼成は良好である。

図IV-7-14の2は、口径16 cm、底径部9.3 cm、器高14 cmの小型の鉢形土器である。胴



図IV-7-14 住居跡 H-11の土器



図IV-7-17 住居跡 H-11 の石器

部はほぼ直線的に外傾する。口縁は対角線上に二つの山形をもつ波状口縁である。底部は平底である。文様は三段で構成されている。一段目は三本の隆帯が横環し、その間に横位の絡条帯圧痕文を施文する。二段目は撚り糸による絡条帯圧痕文をV字状に施文している。三段目は四本の隆帯が横環し、その間には縦位の短縄文を施文している。器厚は5mm内外で、胎土には微小の石英粒、砂粒を含み、堅く緻密である。色調は黒褐色。内面はていねいなヨコナデ調整で、色調は暗褐灰色である。外面色調は暗灰色で、底部から5cm~10cmの部分はいねいなナデ調整を施している。全体に堅く、ていねいにつくられている。

時期：掘り込み面は不明であるが、覆土の堆積状況、覆土出土の土器が中茶路式土器に比定されることから、本住居は縄文時代早期後半のものと考えられる。

Ⅳ 遺構と遺物

H-12

位置：N-39-c・d、N-40-a・b 東地区の北寄り、北の沢の南側の平坦地に位置する。標高は68.10m～68.20mである。

規模：5.75m×4.80m/5.50m×4.50m 深さ0.28m

平面形：丸味をもつ隅丸長方形

床面積：21.0m²

確認・調査：N-39-c、N-40-bの包含層調査中、第Ⅵ層上面まで掘り下げたところ、西壁際に三角形の落ち込みが検出された。壁面観察の結果、第Ⅴ層上面よりの掘り込みと、第Ⅴ層に酷似する淡黒褐色土（土層図 6）が確認されたため、住居跡を想定してN-39-d、N-40-aの調査をおこなう。第Ⅳ層を除去したところ、暗黄灰色微砂（土層図 4）が円形状にあり、それをめぐるように淡黒褐色土が隅丸形状（約5.60m×4.50m）に確認された。東西、南北にそれぞれ小トレンチを設定し、北・南・西の壁の立ちあがりを確認する。また西壁際から土器が一括出土し、淡黒褐色土を除去したところ中央部に焼土を検出した。

覆土：第Ⅳ層下にやや粒子の粗い暗黄灰色微砂が厚く堆積している。淡黒褐色土は粘質で、暗灰色土がブロック状に混入している。この下には第Ⅵ層と淡黒褐色土の混り合った汚れた土があり、壁際には砂質の暗黄褐色土の三角堆積が見られる。また淡黒褐色土の下層には炭化物が混入している。

床：第Ⅵ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅い。北西壁中央部に、約0.8m×0.5mの隅丸長形状で、高さ約0.1mほどの段状のものが検出された。2か所に凹みが見られ、堅くしまっている。

壁：全体に急傾斜である。

炉跡：床面のほぼ中央部に約0.83m×0.7mの広がりをもつ地床炉が検出された。約10cmほどの掘り込みが見られる。焼土（土層図 14）の上には堅い灰状のものがあり、床面は火を受けて赤色化し、非常に堅くなっている。

付属ピット：床面と壁面に29個の小ピットが検出された。このうちHP-3、6、10、11、12は直立し、杭状である。HP-5、7は浅い皿状である。HP-1、4、9、13は深さ12cm～20cmで、直立している。壁面のHP-16～29はすべて内側に傾いている。HP-2、14、15は浅い皿状のピットで、覆土は淡黒褐色土である。用途・性格は不明であるが、本住居と同時期のものと考えられる。HP-1が中心柱で、HP-3、4、5、7、8、9、12が支柱穴を構成するもので、一辺約3m、各辺3本ずつの8本柱を想定することができるだろう。

遺物出土状況：出土遺物総数は436点で、その内訳は土器が326点、石器などが110点である。このうち床面、焼土中出土として取り上げたのは土器3点、石器など87点である。遺物は北西壁側に多く出土している。とくにHF-1の西側覆土中からは2個体分の土器片が押しつぶされた状態で出土している。またHF-1の北側出土の土器片は流れ込んだ状況を示している。石器は床面より石鏃（図Ⅳ-7-19の石器3）、石皿（図Ⅳ-7-19の石器8）、板状の片岩

部上半部は垂直的に立ちあがり、口縁はゆるやかな波状口縁である。文様は三段に分かれる。一段目と三段目は約 1.5 cm 間隔に隆帯が横環し、その間に縦位の絡条帯圧痕文を施文する。二段目は鋸歯状に隆帯を配し、その間に斜めに交差した絡条帯圧痕文で、縦・横位に施文している。器厚は 7 mm 内外で、胎土には石英粒、砂粒を多く含み、軟質である。色調は暗黒灰色。内面は粗いヨコナデ調整で、色調は暗灰色である。外面色調は明褐色で、全体につくりは粗雑で、強いゆがみが見られる。

時期：掘り込み面は第 V 層上面で、覆土より出土の土器は中茶路式土器に比定されるものであり、本住居跡は縄文時代早期後半のものである。

H-13

位置：N-38-c・d、N-39-a・b

規模：7.58 m×5.50 m/7.11 m×5.05 m/0.31 m

平面形：隅丸長方形

床面積：31.3 m²

調査・確認：N-39-b 区 V 層上面で黒褐色土の落み込みが見られ、西側に拡張したところ、長軸を北西～南東とする大形のプランが確認された。土層観察から本住居跡は V 層上面から掘り込まれたもので、南東隅の一部を除けば良好な状態にあることが判明した。遺構の実測、写真撮影などの作業がすべて終了した後に床面をさらに 10 cm ほりさげ、付属ピットの検出をおこなった。

床：VI 層中に作られている。中央やや東寄りが径 1.5 m の範囲で 8 cm くぼんでいる。

壁：立ち上がりは明瞭で、高さは 25～30 cm ある。

炉跡：竪穴中央に浅い込みをもつ地床炉が 1 個ある。

付属ピット：4 個が住居跡南半で検出されている。これらは大きさが 20～32 cm、深さ 8～12 cm で柱穴を構成するものと考えられる。床面下ではピットは検出されなかった。

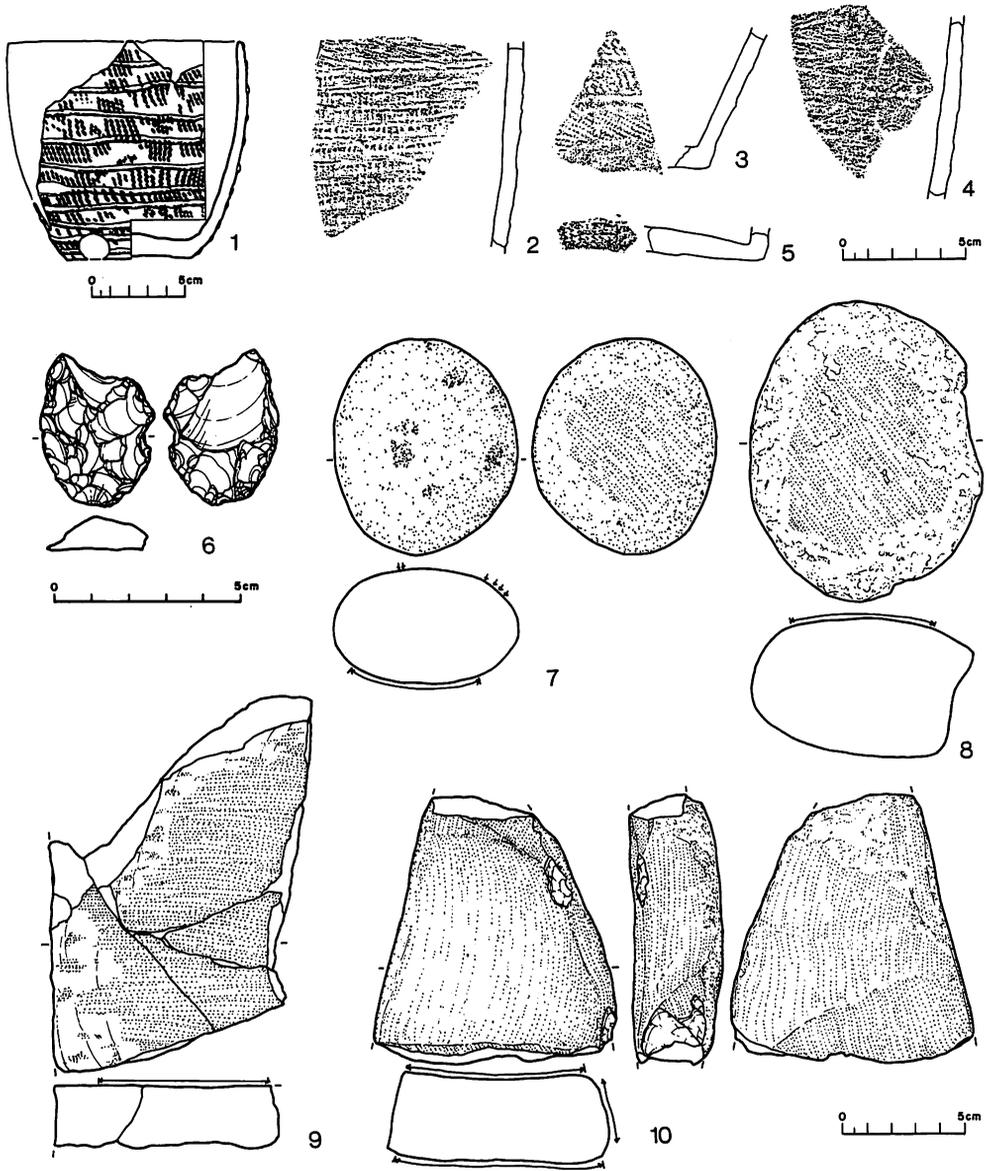
遺物出土態：覆土から出土したものが 77 点ある。北東隅で土器、礫がまとまって出土した。台石様の大形の礫は竪穴中央にむかって傾いた状態で検出されており、周辺から流れ込んだものと考えられる。石皿には遺物集中 3、4 の遺物と接合するものがある。

遺物(土器)：1 は器高 11.3 cm をはかり、底部も含めほぼ半周が接合している。色調は暗褐色で、胎土には砂粒、石英粒が混入する。器形は口縁から緩やかな曲線を描いている。文様は隆起線貼り付け後、RL 短縄文が施される。破片も含めすべて Ib4 類土器。

(石器)：6 は両面加工のスクレイパー。7、8 は円礫の平坦面を利用したすり石。9 は砥石。これは遺物集中 3 の 2 点、遺物集中 4 の 1 点と接合している。10 は石皿。表裏面のほか側面も擦られている。石質は 6 が黒曜石、7、8 が安山岩、9、10 が砂岩である。

時期：縄文時代早期後半 (Ib4 類土器) と考えられる。

IV 遺構と遺物



図IV-7-22 住居跡 H-13の土器・石器

H-14

位置：O-38-c・d、O-39-a・b 東地区の北寄り、北の沢の南側に位置している。

規模・平面形・床面積：不明

層位：1、第Ⅰ層 2、第Ⅲ層 3、第Ⅳ層 4、第Ⅴ層 5、第Ⅵ層 6、暗灰色微砂 7、暗黒灰色土(粘質) 8、暗黄灰色微砂 \supseteq 7、9、8 \supseteq 暗灰色微砂 10、8 \supseteq 暗灰色土(砂質) 11、第Ⅶ層 12、暗灰色土(粘質) 13、淡緑灰色微砂 14、褐色土 \supseteq 淡緑灰色細砂 15、褐色土 \supseteq 暗灰色細砂 16、暗緑灰色細砂 17、淡緑灰色細砂 18、暗灰色細砂+少量の褐色土 19、暗灰色細砂 20、=17 21、淡褐色土(粘質) 22、淡灰褐色土(粘質で堅い) 23、=19

確認・調査：本住居跡は39ラインのセクション観察の結果確認されたものである。第Ⅴ層上面を掘り込み面とする落ち込みがあり、第Ⅴ層と酷似する暗黒灰色土、汚れた土などが覆土として見られたため住居跡とする。すでに包含層調査によって39ラインの北・南側は第Ⅶ層上面まで掘り下げていたけれども、全体に精査し、炉跡、柱穴状小ピットの検出につとめた。

覆土：39ラインのセクションで見ると、第Ⅳ層下にはほかの住居跡でも見られた暗灰色微砂(土層図 6)が5cm~15cmほど堆積し、その下に第Ⅴ層に酷似する粘質で砂の混じり合った暗黒灰色土(土層図 7)が約10cmほど堆積している。床面と暗黒灰色土の間には暗黒灰色土と暗褐色土の混じり合った汚れた土が薄く見られる。

床：39ラインのセクションで見ると、第Ⅶ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。

壁：39ラインのセクションで見られる壁の立ちあがり、ゆるやかな傾斜である。

炉跡：床面のほぼ中央部に、火を受けて赤色化した部分が確認された。地床炉である。

付属ピット：浅い小ピットが9個検出された。配列から見るとすべて支柱穴と考えられる。これら9個の柱穴状の小ピットの配列から、一辺に4本、全部で12本の柱を用いた上屋を想定することができる。また小ピットの位置関係から、長軸を南西—北東とする隅丸長方形のプランを推定することができる。

遺物：床面と思われる面から、土器片と石器などが数点出土しているだけである。

時期：掘り込み面は第Ⅴ層上面であり、周辺から中茶路式土器に比定される土器が多く出土していることから、本住居跡は、縄文時代早期後半のものと考えられる。

H-15

位置：O-39-b・c、P-38-d

規模：3.20m×2.90m/2.88m×2.55m/0.30m

平面形：隅丸長方形

床面積：30.1m²

調査・確認：O-39-b区Ⅴ層で遺物の集中がみられ、下位に遺構の存在が想定された。平面形は明確に把握できなかったが、遺物取り上げ後Ⅵ層で焼土が検出され、39ラインの土層にⅤ層から掘りこまれる浅い落ち込みがみられたことから住居跡と判断した。

床：遺物の分布状態やVI層の汚れの度合いから推定した。

壁：立ち上がりは緩やかで、高さは22 cm ある。

炉跡：竪穴中央に掘り込みをもつ地床炉が2個検出された。これらは重複しており HF-2 が HF-1 よりも新しい。

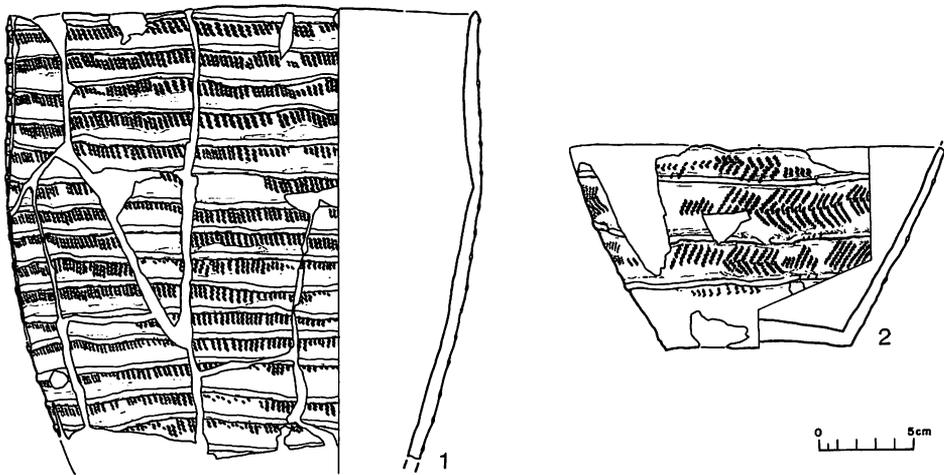
付属ピット：7個が検出された。HP-2、3、4、5、6、7 は大きさが壙口で18 cm~26 cm、深さが10 cm~20 cm のもので柱穴と考えられる。HP-1 は長径42 cm をはかる長円形のピットで、断面は皿状をなす。

遺物出土状態：床面から出土したものが3点、覆土からのものが373点ある。2個体分の土器が HF-2 上面とその北側の床面から5 cm ほど上面から押し潰された様な状態で検出された。石器では HP-1 覆土から擦り切り石斧未製品とすり石がセットで出土しているほか、南東隅付近の4層には黒曜石のフレイク・チップの集中箇所がある。また HF-2 焼土を水洗いした結果、土器4点、火熱を受けた黒曜石のフレイク・チップ88点が検出された。

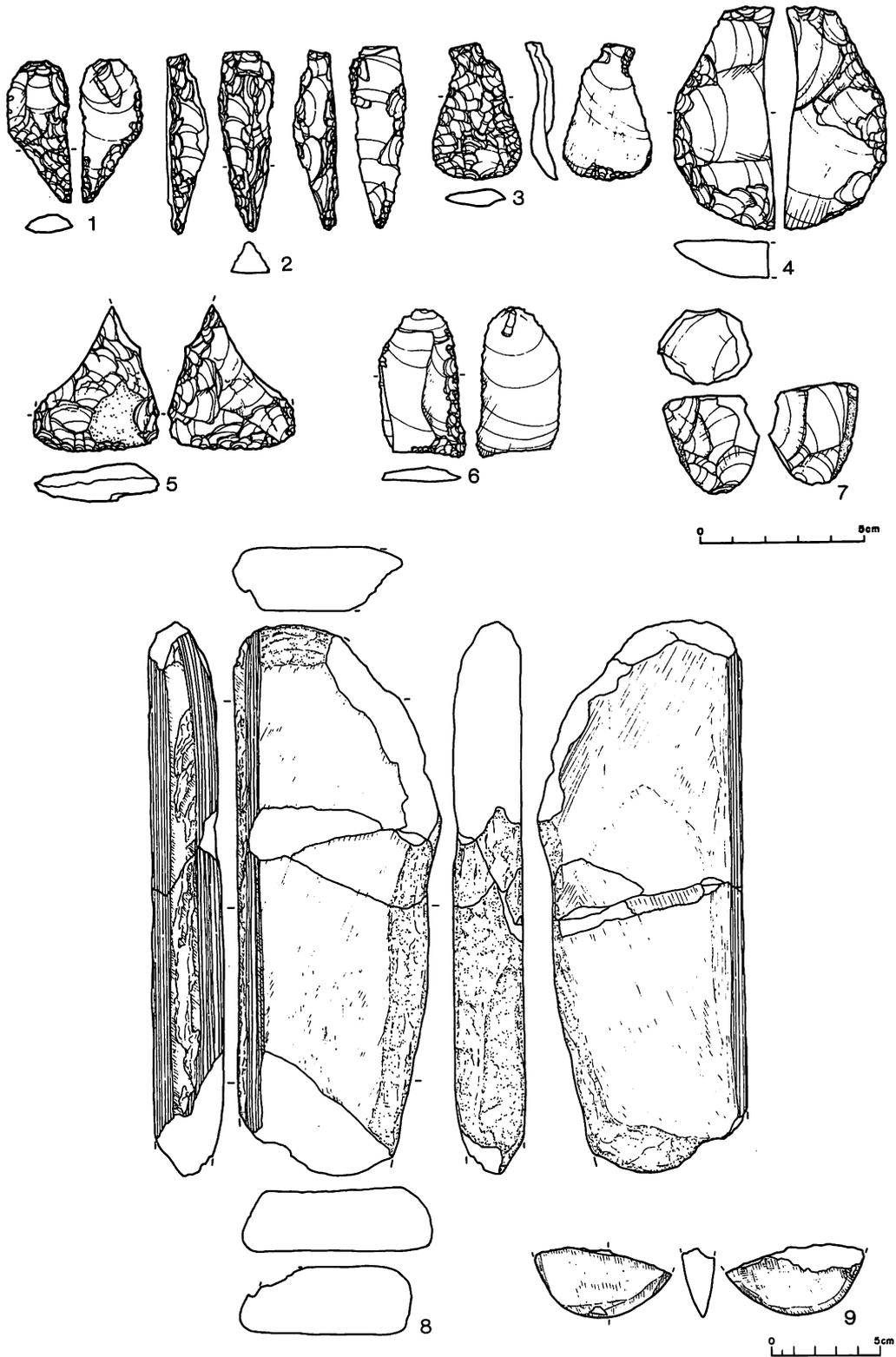
遺物(土器)：1は器高24.7 cm をはかり、底部を除き全周が復元されている。色調は暗褐色をなし、胎土には石英粒が混入している。器形は口縁部では直立し、次第に緩やかな曲線を描き底部に移行している。文様は隆起線文を貼り付けその両脇をなぞった後、RLの短縄文が施される。2は現高10.7 cm をはかる底部個体。施文順序は1とおなじで隆起線間には結束羽状縄文が施される。いずれも Ib4 類土器。

(石器)：1、2は石錐。2は角錐状をなすもの。7はつまみ付きナイフ。裏面の加工はつまみ部と先端部にみられる。4、5、6はスクレイパー。7は石核。背面に自然面を残す。8は擦り切り石斧の未製品。凶中右側面には表裏両面からの擦り切り痕があり、母材からの割り取り後さらに研磨されている。これは15のすり石と HP-1 からセットで出土し、さらに同じピット壙口付近床面出土のもの、HF-2 南側の覆土15層出土のものと接合している。9は磨製石斧の刃部

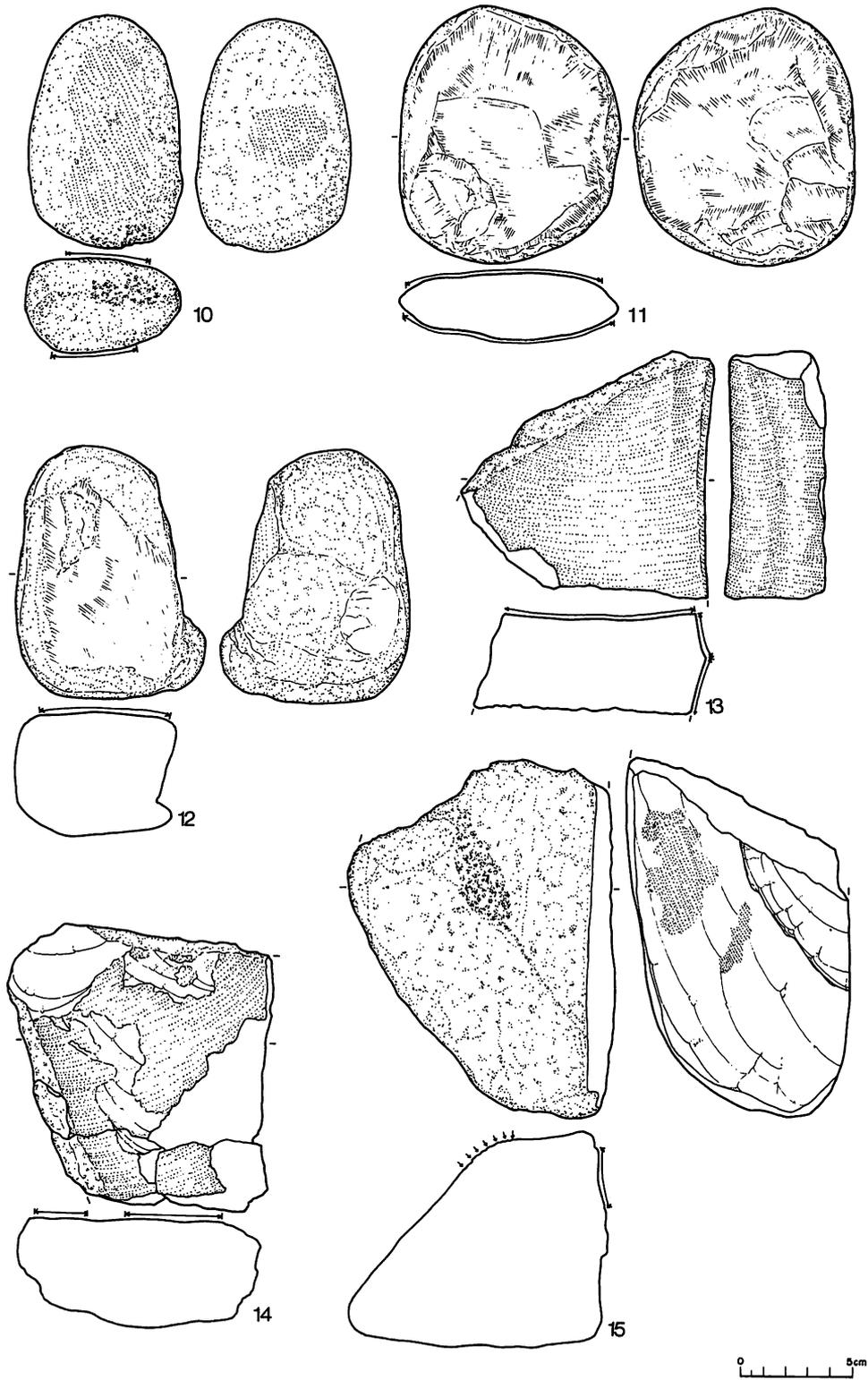
(143ページへつづく)



図IV-7-26 住居跡 H-15 の土器



図IV-7-29 住居跡 H-15の石器 (その1)



図IV-7-30 住居跡 H-15の石器 (その2)

破片。火熱を受け白く変色している。6は楕円礫素材のたたき石。11、12はすり石。13、14、15は砥石。14、15は割れ面が擦られている。石質は1～2、4～7が黒曜石、3が珪岩、8、9、11が蛇紋岩、10が安山岩、12～15が砂岩である。黒曜石のうち5と7の石材はくすんだ光沢感のないものである。

時期：縄文時代早期後半（Ib4類土器）と考えられる。

H-17

位置：O-35-c、O-36-a、P-35-d、P-36-a

規模：—/5.50 m×4.30 m/—

平面形：不明

床面積：不明

調査・確認：P-35-d区V層で焼土（HF-1）が確認されたため、Pラインにセクションベルトを設定し、土層観察と並行して周辺の精査をおこなった。V層は周辺から焼土にむかってわずかに落ち込む様子が窺えたが、明確な掘り込みは確認できなかった。床面の範囲は焼土を中心とした遺物の分布から推定したものである。

床：V層中にある。 **壁：**なし。

炉跡：地床炉が1個ある。

付属ピット：なし。

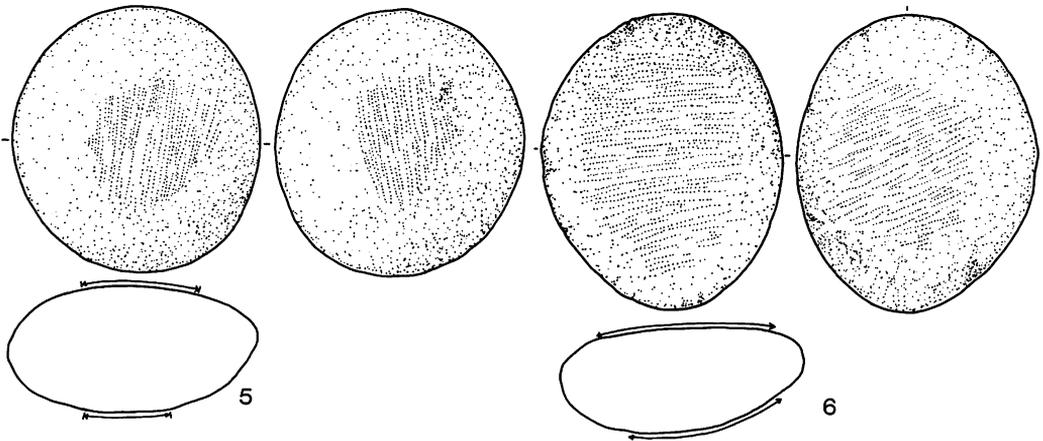
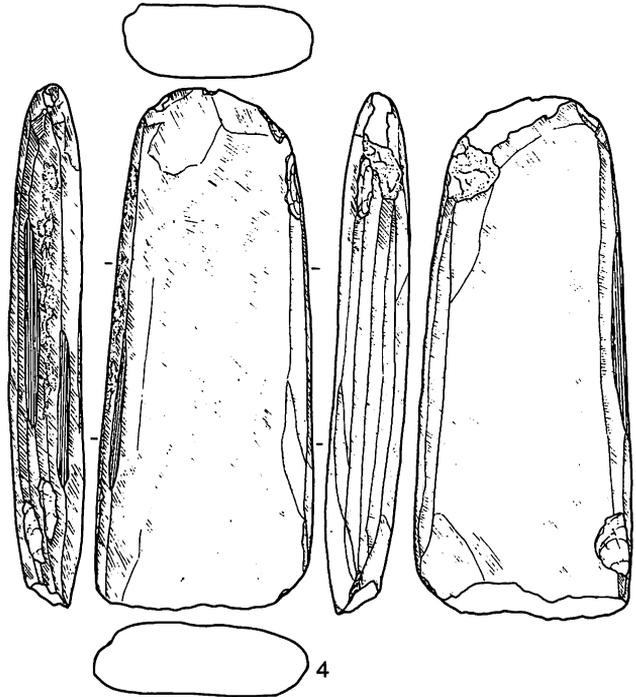
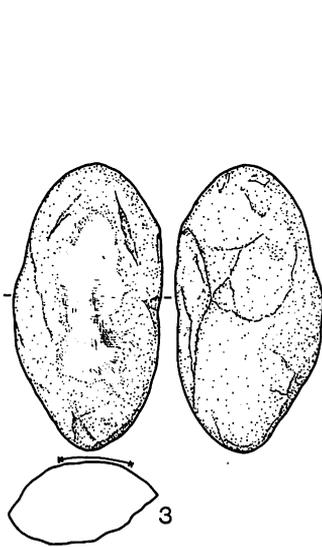
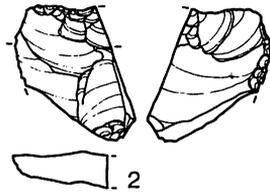
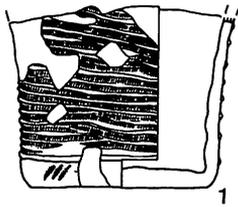
遺物出土状態：総出土遺物点数は25点で、これらはHF-1と同レベルないし5cmほど上位から出土した。HF-1から2m北東の位置からは石斧未製品、すり石、砥石が一括出土している。

遺物(土器)：1は現高8.5cmをはかり、底部付近の3分の1周が接合している。色調は暗黄色をなし、胎土にはわずかに石英粒を混入している。器形は筒状をなし、口縁にむかってわずかに広がるものと考えられる。文様は隆起線間に2条1組の絡条体圧痕文が施される。Ib4類土器。

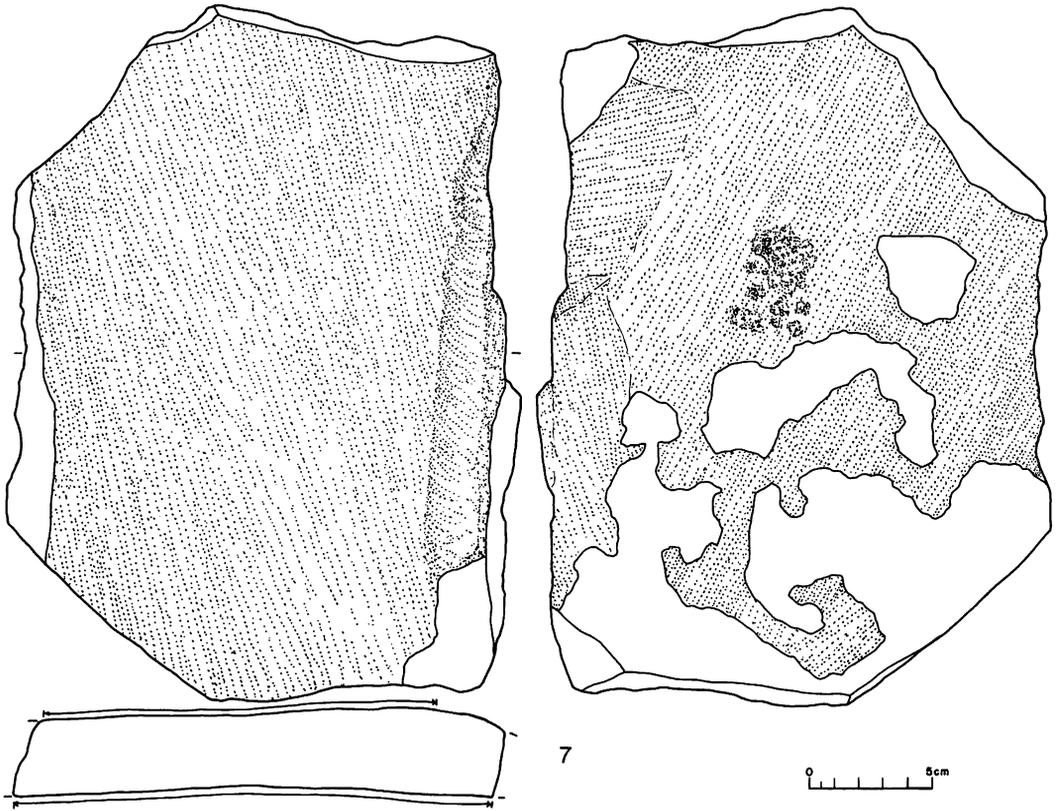
(石器)：2はスクレイパー。4は擦り切り石斧の未製品。左右両側面とも擦り切られたものと考えられるが、その痕跡や母材との割り取り面が看取できないほど研磨がほどこされている。また研磨作業がかなり進行しているため擦り切り面で接合はしないが、石材の特徴や厚さからH-15から出土した擦り切り石斧と同一母材である可能性が高い。3、5、6は円礫素材のすり石。7は砥石。このうち一括出土したものは4、5、7である。石質は2が黒曜石、3、4が蛇紋岩、5が安山岩、6、7が砂岩である。

時期：縄文時代早期後半（Ib4類）と考えられる。

IV 遺構と遺物

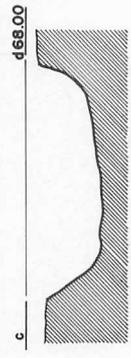
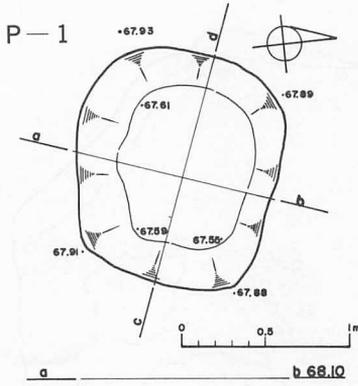


図IV-7-32 住居跡 H-17の土器・石器



図IV-7-33 住居跡 H-17の石器

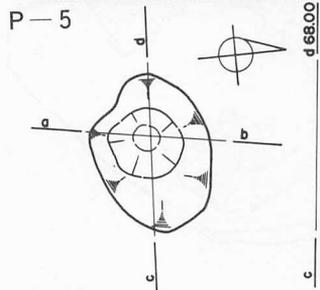
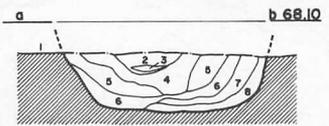
IV 遺構と遺物



- 層位
1. 第Ⅴ層
 2. 茶褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 黒色土
 5. 茶褐色土 (黄色土を若干含む)
 6. 黄褐色土 (黒色土が斑点状に入る)
 7. 褐色土
 8. 暗黄褐色土 (黒色土が斑点状に入る)

P-1
 位置：M-34-a
 規模：(1.40 m)×(1.20 m) / 0.95 m×0.72 m 深さ 0.36 m
 平面形：隅丸長方形

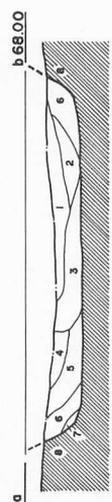
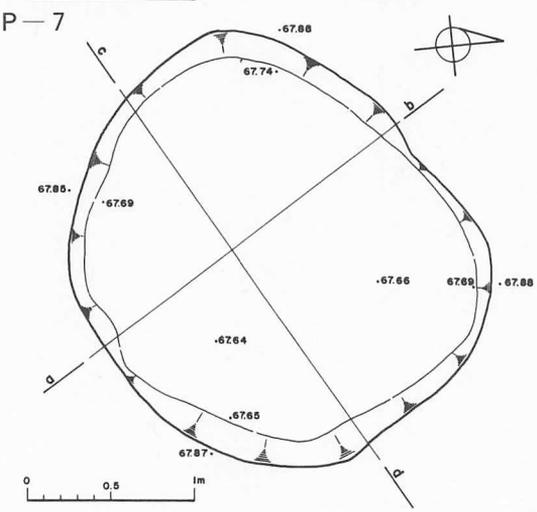
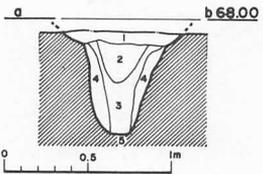
第Ⅴ層上面で検出する。墳底はほぼ水平で、壁はゆるやかに立ちあがっている。覆土は茶褐色土から黒色土へと腐植土の入りが多くなったあと、墳底にいくにしたがって腐植土のまじりの少ない砂質からシルトとなる。遺物の出土はない。時期・用途・性格などは不明である。



- 層位
1. 明褐色土(砂質)
 2. 暗褐色微砂(堅い)
 3. 2 ≧ 第Ⅶ層
 4. 2 ≦ 第Ⅶ層
 5. 第Ⅶ層

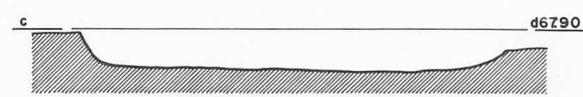
P-5
 位置：H-31-c
 規模：(0.95 m)×(0.68 m)
 深さ 0.61 m

平面形：長円形
 第Ⅶ層上面で検出する。断面形は杭状である。遺物は出土せず、時期・用途・性格は不明である。



P-7
 位置：H-32-b・c
 規模：(2.55 m)×(2.18 m) / 2.30 m×2.0 m 深さ 0.2 m
 平面形：隅丸長方形

第Ⅳ層上面で検出する。墳底は第Ⅶ層を掘り込んでつくられており、平坦である。壁は急傾斜で立ちあがっている。覆土は砂質土で、自然堆積状のものである。遺物は出土せず、時期・用途・性格などは不明である。覆土の堆積状態、墳底、壁の立ちあがりなどP-6



図IV-7-34 土坑 P-1・5・7

とよく似ている。

焼 土

V層の焼土は、調査区北部から中央部にかけての範囲から数か所確認された。これらの焼土は、それぞれ遺物集中にともなうため、各項で記述する。

遺物集中1

位置：I-39-c・d、I-40-a・b・c・d、北の沢に面した微高地に位置する。

規模：遺物の広がり南北4.8m、東西5.6mで垂直分布は15cmの厚さがある。

重複：集中域にはF-8、H-8がある。F-8は遺物出土レベルほぼ同一面で検出されたもので、時期差はないと考えられる。H-8は遺物取り上げ後、VI層上面で確認したため、層位的には集中1の遺物群との関係を明確に捉えられなかった。

遺物出土状態：総遺物点数は1,291点で、その内訳は土器1,220点、剥片石器7点、礫石器18点、剥片45点、礫1点である。平面分布の特徴としてH-8上面で極端に遺物が少なく、これを取り囲むように出土していること、H-8を中心にしてその東西で遺物状態が異なることがあげられる。H-8西側では土器の分布が濃い(図IV-7-35、スクリーントーン部)ところがみられるが、いずれも細かく砕けた破片で、2~3個体があると考えられるが接合するものは少ない。これに対し東側では分布は散漫であるが、大形破片が押し潰されたような状態で出土するものがあつた。石器類もF-8周辺にまとまる傾向がある。

接合：土器にH-8、遺物集中2の遺物と接合するものがある。

遺物(土器)：1~19、22はH-80西側から出土したもの。いずれも色調は灰褐色で胎土には砂粒が混入している。文様は横走する隆起線とそれをつなぐ縦の隆起線を貼り付けた後、羽状縄文を施している。20、21はH-8東側から出土したもので同一個体と考えられる。21はH-8出土遺物と接合している。胎土には石英粒が混入している。文様は横走、蛇行する隆起線文間にRLの回転縄文と短縄文が施されている。Ib4類土器。

(石器)：1は片面全面加工のつまみ付きナイフ。2~4はスクレイパー。4は集中域内から出土した3点が接合している。5~8はすり石、5は扁平な円礫を、6~8は断面三角形の礫をそれぞれ素材としている。9、10、11は砥石。石質は1が珩岩、2~4が黒曜石、5、6が安山岩、7~11が砂岩である。

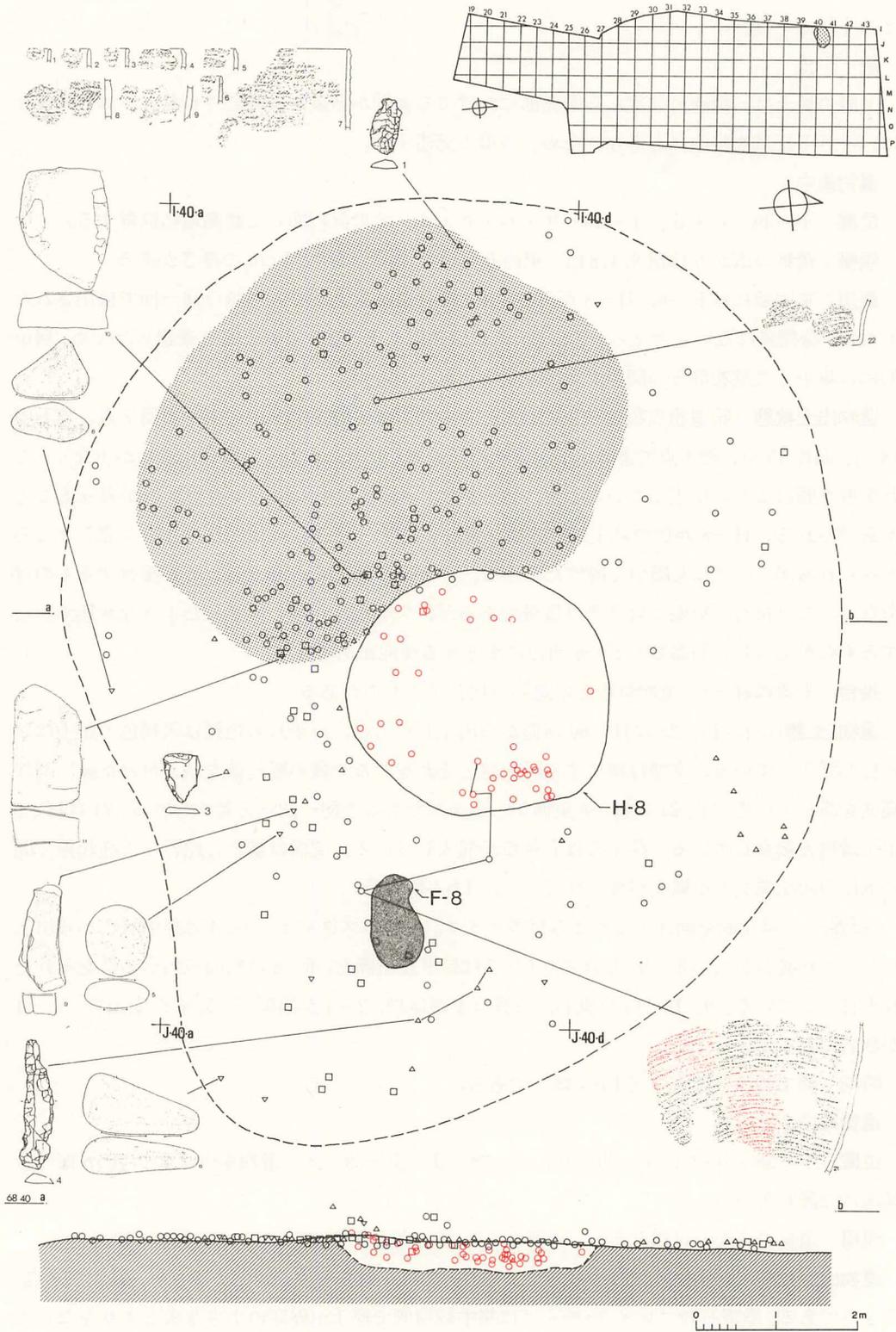
時期：縄文時代早期後半(Ib4類)である。

遺物集中2

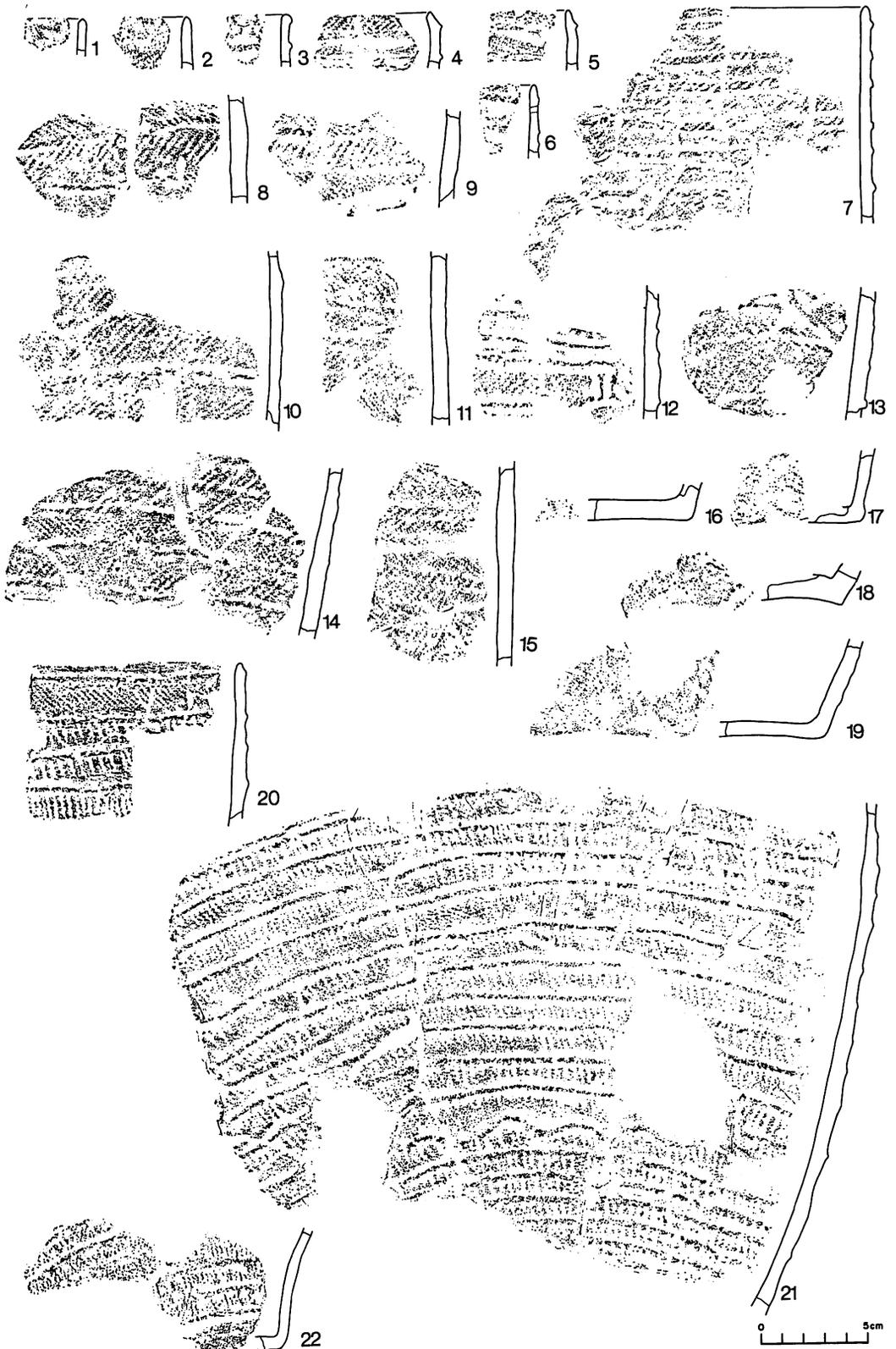
位置：I-38-b・c、I-39-b、J-38-d、J-39-a、遺物集中1より10m南の微高地に位置している。

規模：遺物の広がり南北5m、東西2.5mで、垂直分布は8~12cmの厚さがある。

遺物出土状態：総遺物点数は850点で、その内訳は土器638点、剥片石器8点、剥片370点、礫3点である。黒曜石のフレイク・チップは集中域南側で径1m程度の小さなまとまりをなしていた。このままとまりからは土壌水洗後の遺物とあわせ356点が検出された。土器に、H-8覆

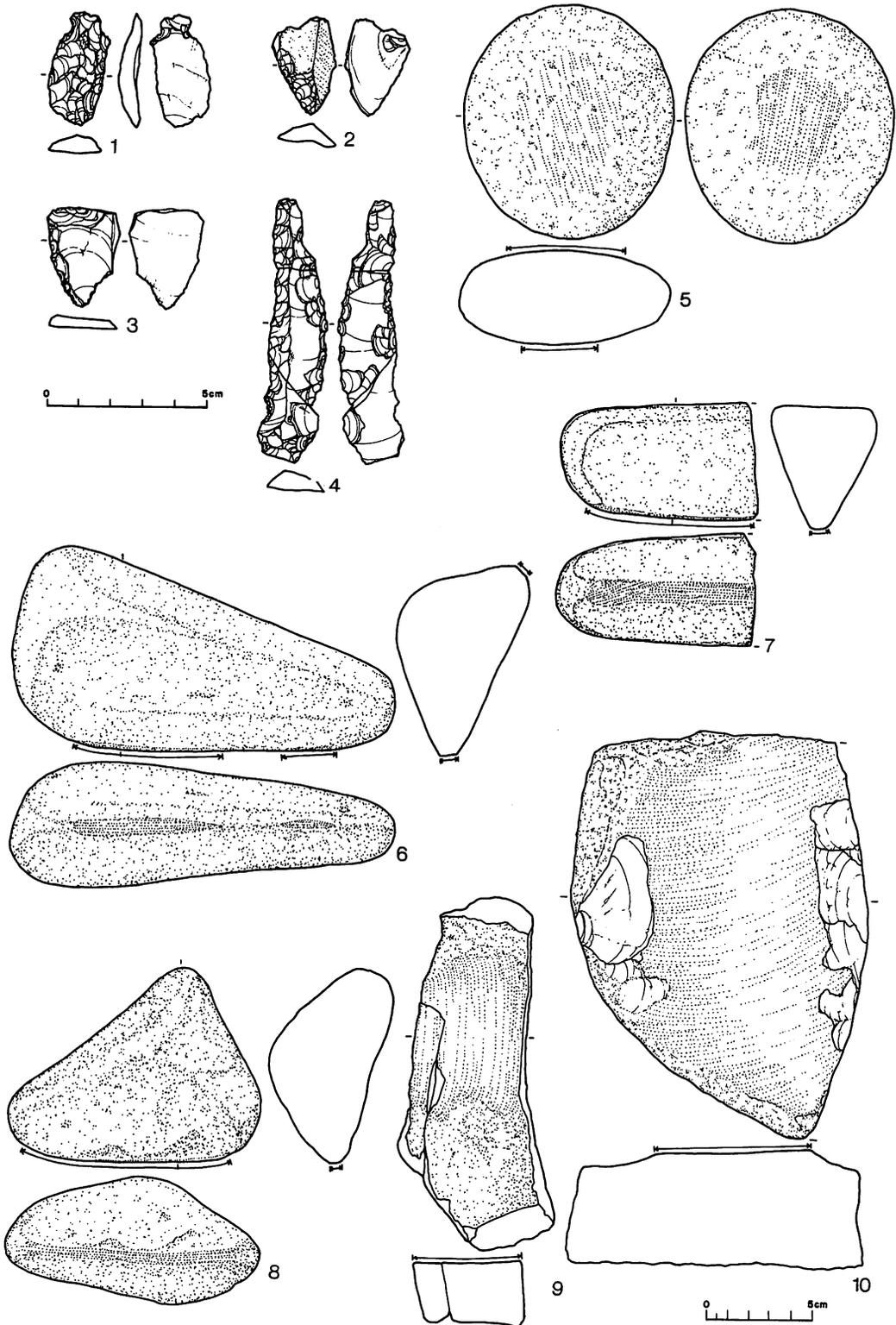


図IV-7-35 遺物集中1の分布

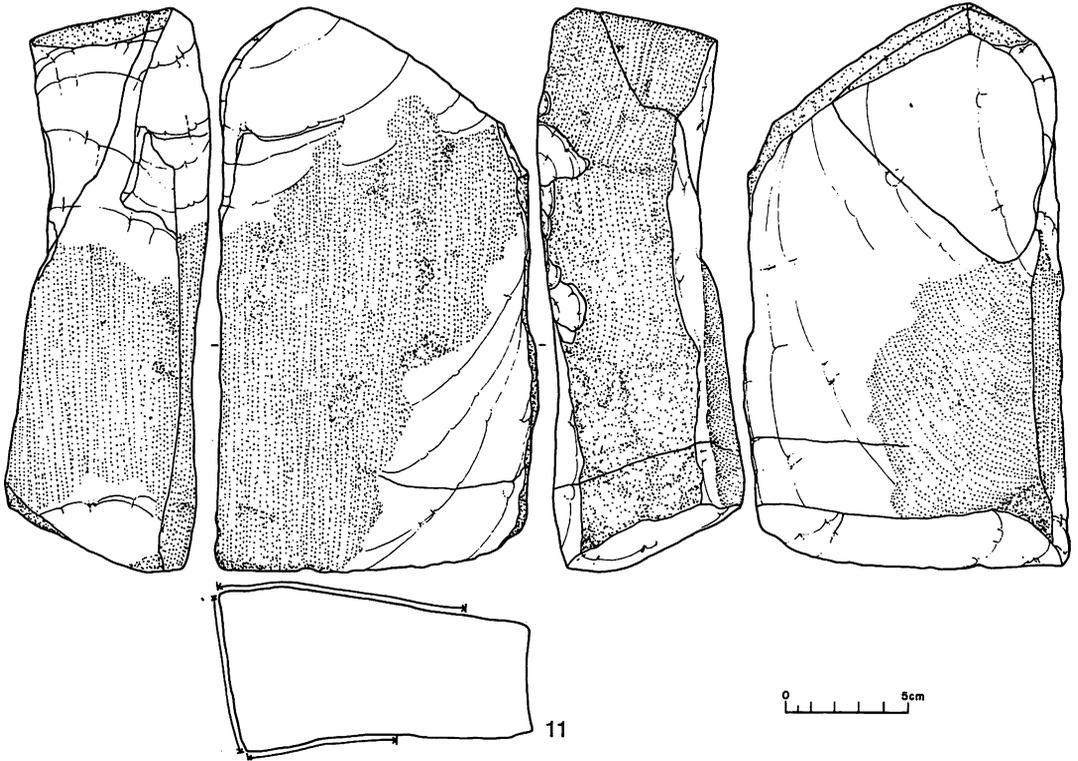


図IV-7-36 遺物集中1の土器

IV 遺構と遺物



図IV-7-37 遺物集中1の石器 (その1)



図IV-7-38 遺物集中1の石器（その2）

土と遺物集中1の遺物と接合するものがある。

遺物(土器)：1は口径35.9cm、現高31.8cmをはかる。ほぼ半周が復元された。色調は灰橙色で胎土には砂粒が少量混入している。器形は口縁から緩やかな曲線を描きながら底部にすぼまる。文様は隆起線の貼り付け→縄文の順で施される。隆起線は口縁部直下のものがはかと比べやや太く、胴部では4条ごとに羽状に貼り付けられている。隆起線間にはRLの斜行縄文が施されている。2～6は同一個体で、隆起線間にはRLの短縄文が施されている。3はH-8覆土から出土したものである。7～14も同一個体である。胎土には石英粒が混入している。隆起線文間には1段ごとにRLの短縄文が施されている。図示したほかの破片も含めすべてIb4類土器。

(石器)：19、20は上半部を欠損する柳葉形の石鏃。21は周縁加工の槍先・ナイフ。22、23はスクレイパー。石質はすべて黒曜石。

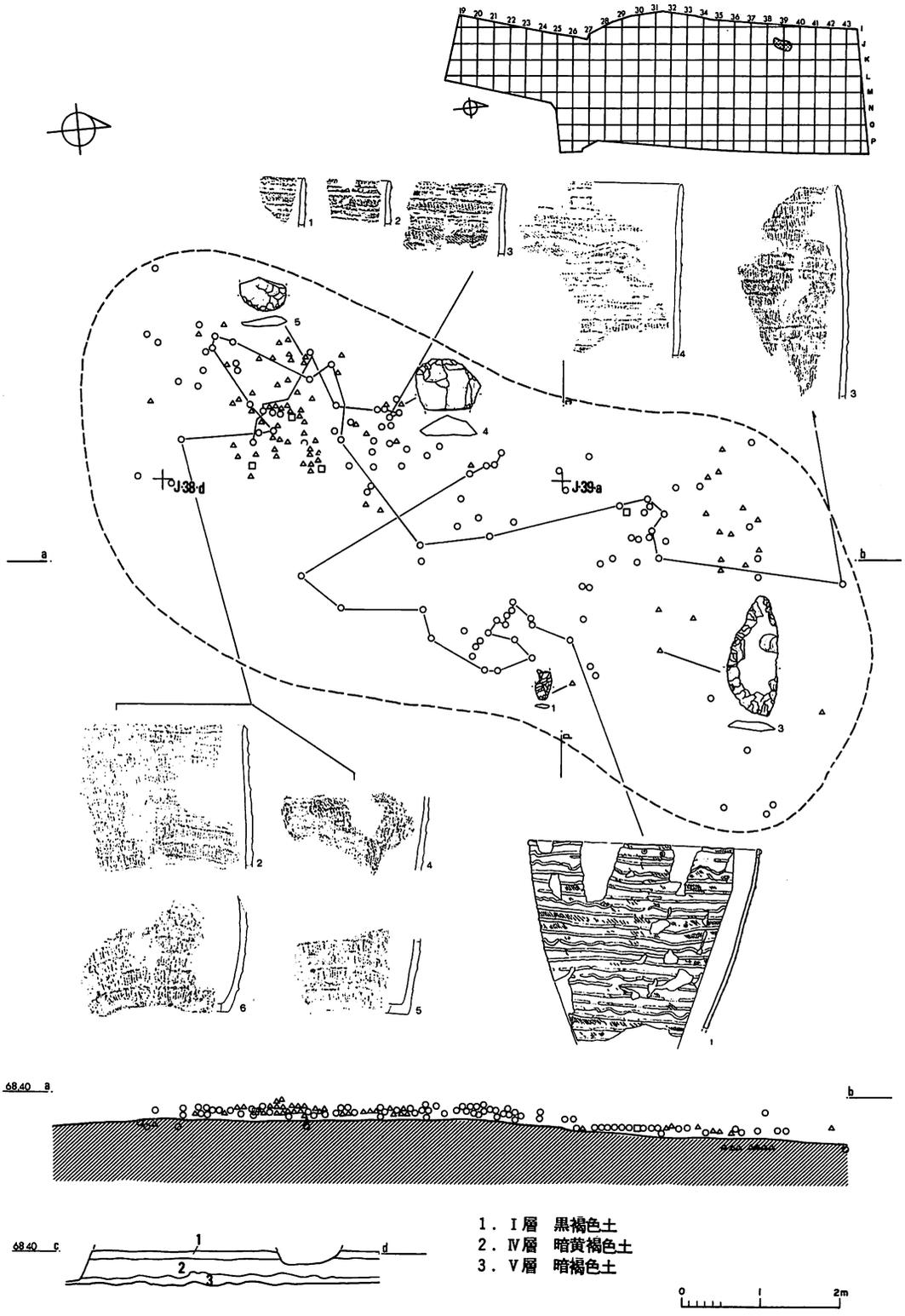
時期：縄文時代早期後半（Ib4類）である。

遺物集中3

位置：N-37-b・c、N-38-b、O-37-a・d、O-38-a、H-13より10m南のくぼ地に位置する。

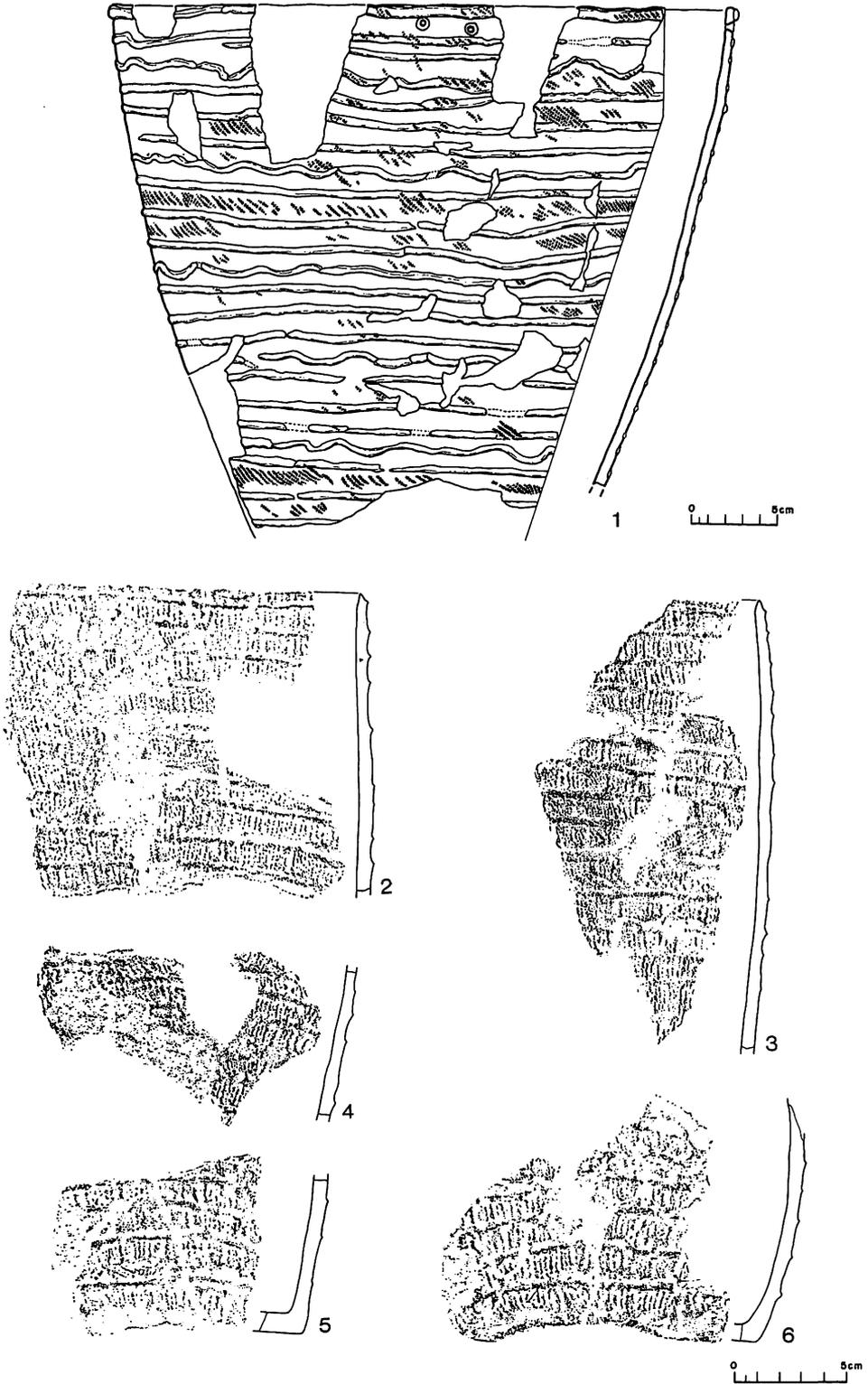
規模：西側は次年度発掘予定地区にまたがるため、全容は不明である。今回の調査で確認さ

IV 遺構と遺物



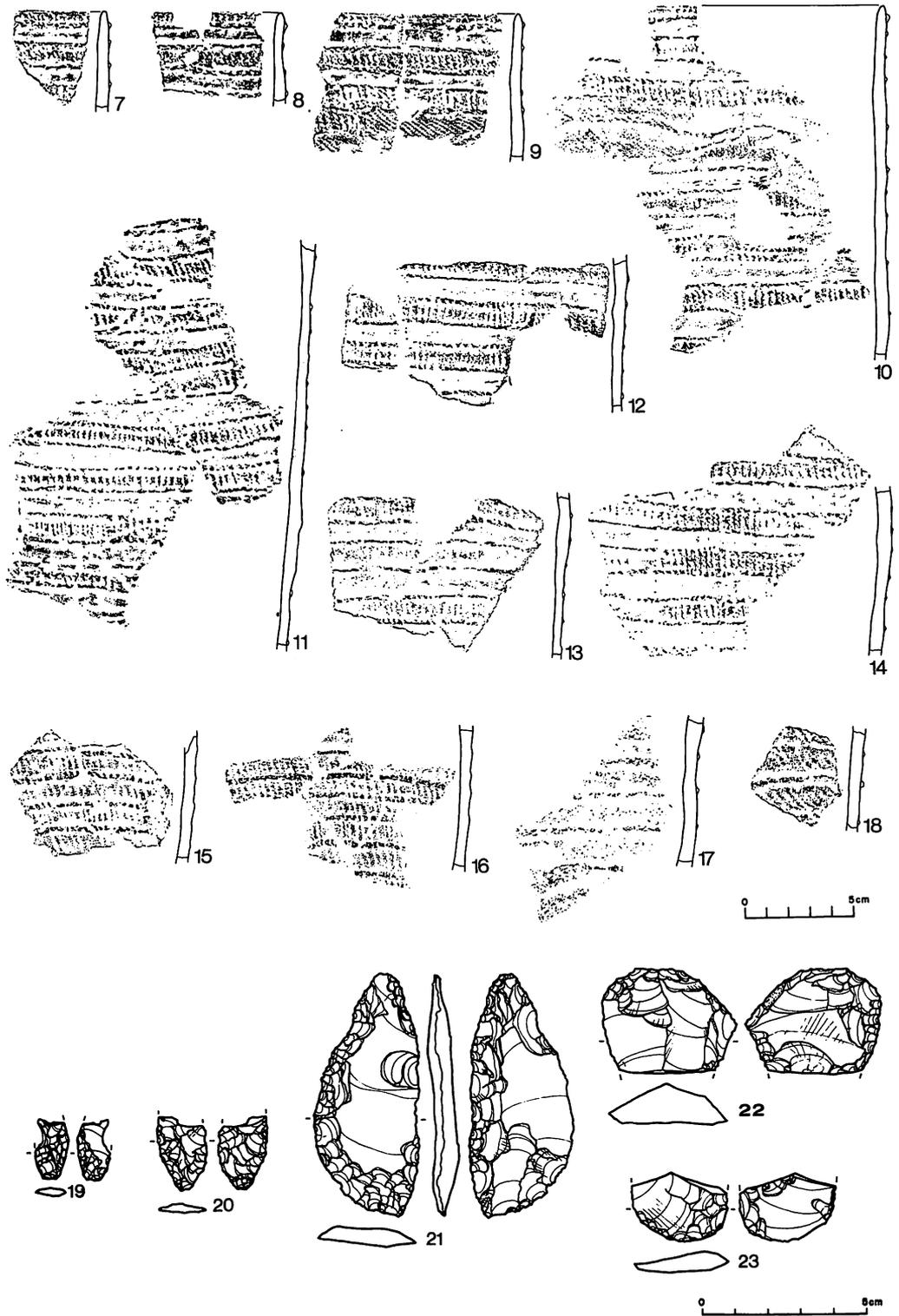
- 1. I層 黒褐色土
- 2. IV層 暗黄褐色土
- 3. V層 暗褐色土

図IV-7-39 遺物集中2の分布



図IV-7-40 遺物集中2の土器

IV 遺構と遺物



図IV-7-41 遺物集中2の土器・石器

れた遺物の広がり、南北 4.9 m、東西 4.3 m で、垂直分布は 20 cm の厚さがある。

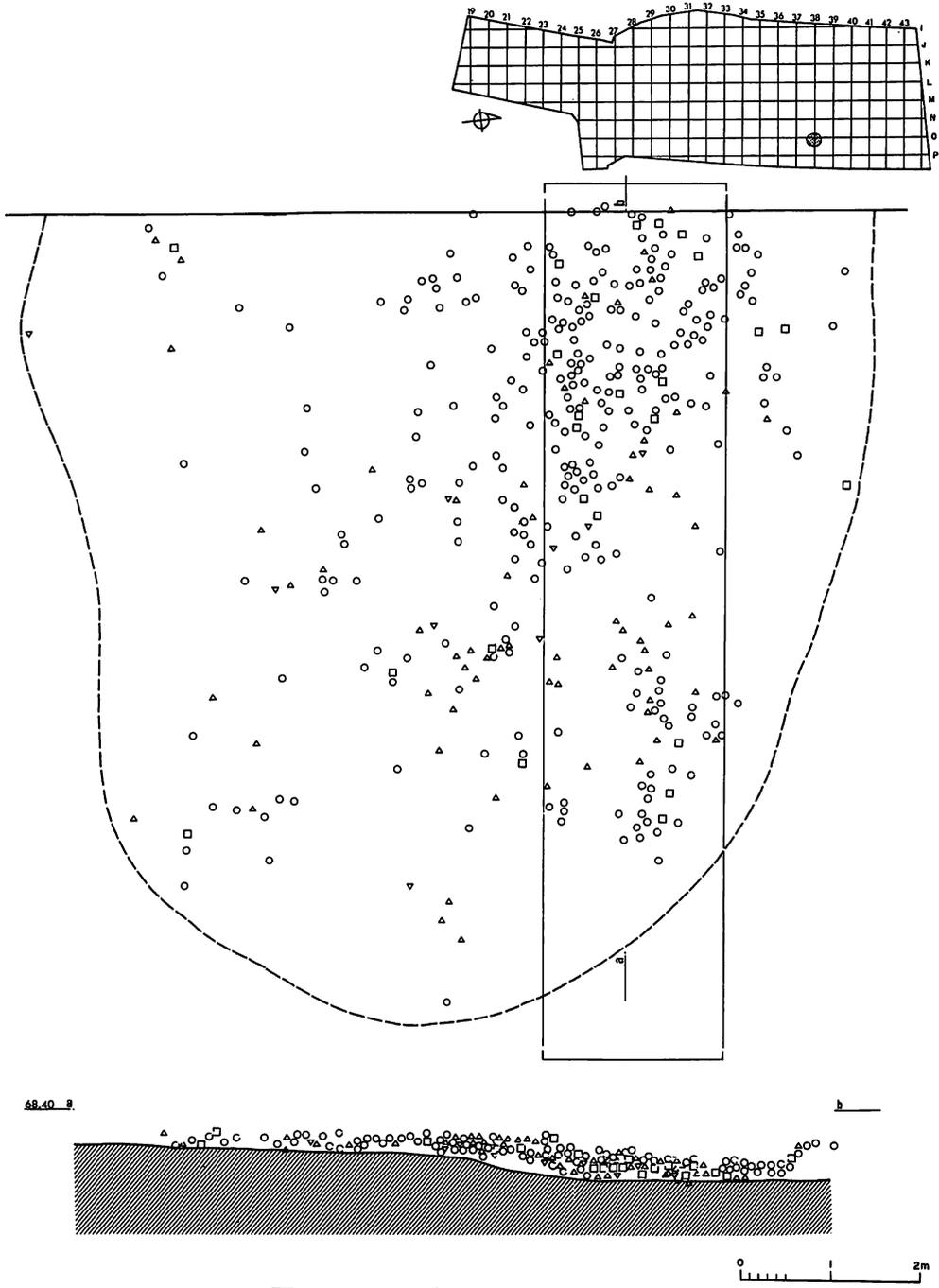
遺物出土状態：総遺物点数は 1,176 点で、その内訳は土器 1,023 点、剥片石器 15 点、礫石器 13 点、剥片 89 点、礫 33 点である。これらは遺物集中 2 などのみられたような、土器、石器ごとのまとまりはない。土器は復元されたものないしそれに準ずる大形破片が 9 個体検出された。これらはその場で押し潰されたような状態で出土している。ここから出土した木炭の放射性炭素年代測定値は、 6300 ± 25 BP (KSU-1843) である。

接合：土器は周辺の V 層出土遺物と接合するものがみられるが、大部分は集中域内で閉じられている。石器のうち砥石に H-13 および遺物集 4 の遺物と接合するものがある。

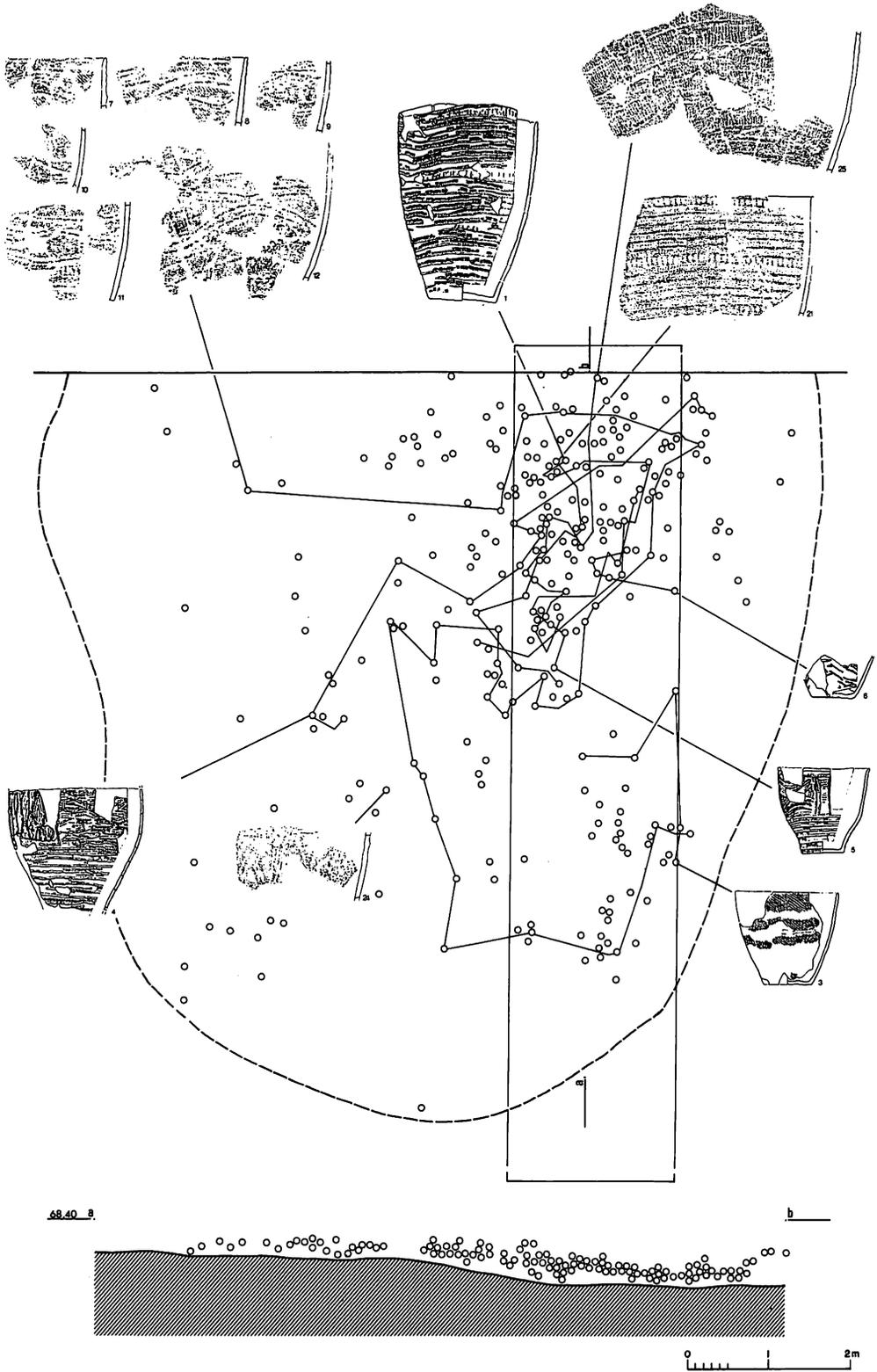
遺物(土器)：1 は口径 21.4~23.3 cm、器高 33.6 cm をはかる。色調は暗褐色で、胎土には砂粒、石英粒が混入されている。口縁部には 2 個の波状があり上面観は楕円形をなす。隆起線には横走するものと、縦にそれをつなぐ短いものがあり、これらを貼り付けた後、RL 短縄文を施している。2 は口径 22.6 cm、現高 17.8 cm をはかる。輪積み痕が観察された。粘土紐の幅は 3~4 cm である。文様は隆起線間に LR 短縄文が施される。3 は口径 17.8 cm、器高 15.7 cm をはかる。胎土には石英粒が混入されている。文様は隆起線はなく RL 斜行縄文のみが施されている。4 は最大径 23.1 cm をはかる。器形は口縁部から胴部上半は直立気味であるが、それ以下では急に底部にむかってすぼまる。文様は器形の傾きが移行する胴部中位をさかいにして上半では隆起線で縦長と横長の蜂の巣状に区画し、そのなかに細い絡条体圧痕文を、下半では横走隆起線間に LR 短縄文をそれぞれ施している。5 は口径 15.9 cm、器高 14.7 cm をはかる。口唇は外反する。器形と文様構成は 4 と類似しており、胴部上半では X 字状に貼り付けた隆起線間に絡条体圧痕文を、下半では横走隆起線間に LR 短縄文をそれぞれ施している。6 は現高 7.2 cm をはかる底部破片。絡条体圧痕文が斜位に施されている。7~18 は同一個体である。隆起線は胴部中央で波状を描き、横長の楕円区画を作っている。文様はこの区画内では縦位の絡条体圧痕文が、それ以外では RL 斜行縄文が施されている。19 は口縁部直下に幅広の隆起線が 2 条貼り付けられている。文様は隆起線上には絡条体圧痕文が胴部には RL 短縄文が施されている。21、22 は同一個体片。24 は交差する絡条体圧痕文が施されている。19 は Ib3 類土器。それ以外は Ib4 類土器。1 と 4 の破片に関する残存脂肪の分析結果は、353 ページに示してある。

(石器)：1~6 は柳葉形の石鏃、2 と 5 は火熱を受けている。7~10 はつまみ付きナイフ。11~14 と形態、加工のありかた、石質からみてつまみ付きナイフの破片と考えられる。15、16 はスクレイパー。17 は集中域内から出土した 2 点が接合したもので円礫の一部が平坦に研磨されている。18 は扁平礫の両面と側縁の一部が研磨されている。石質からみていずれも石斧製作にかかわる遺物と考えられる。19 はすり石。20 は砥石で板状に割れた面を利用している。これは本遺物集中出土の 2 点、H-13 覆土 4 層出土の 1 点、遺物集中 4 出土の 1 点と接合したものである。石質は 1~7、9、15、16 が黒曜石、8、10~14 が珩岩、17 が蛇紋岩、18 が緑色泥岩、19 が安山岩、20 が砂岩である。

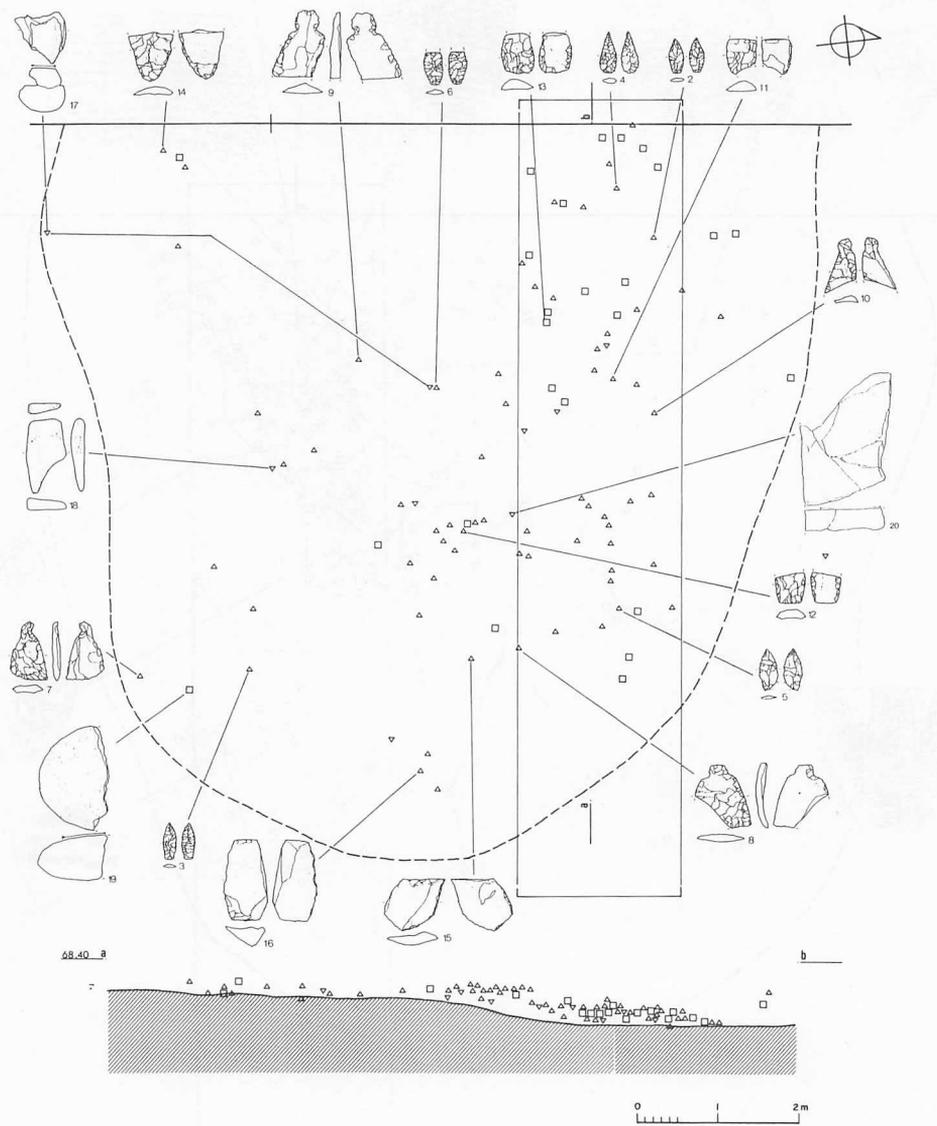
時期：縄文時代早期後半 (Ib4 類) である。



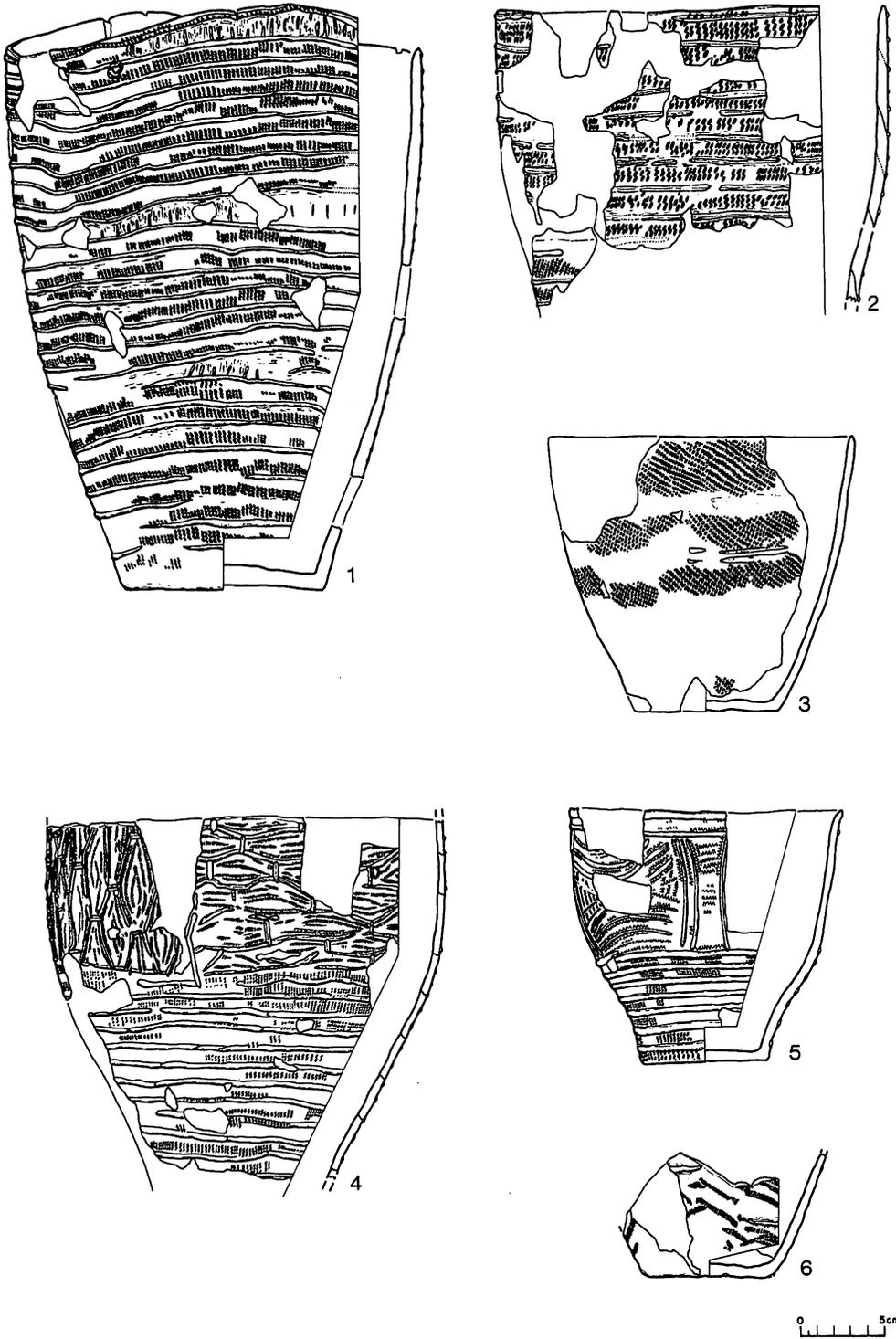
図IV-7-42 遺物集中3の分布



図IV-7-43 遺物集中3の土器分布



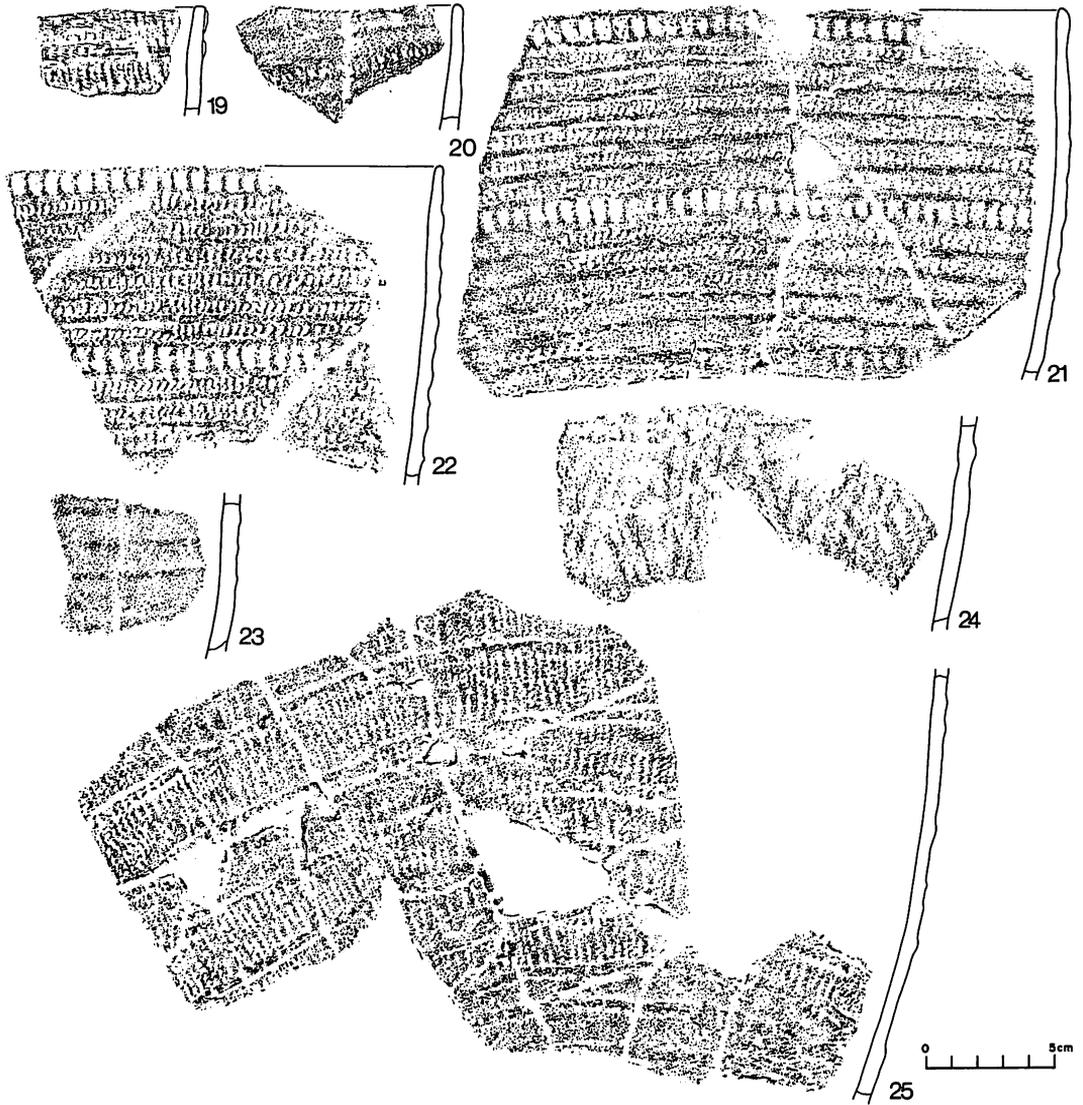
図IV-7-44 遺物集中3の石器分布



図IV-7-45 遺物集中3の土器（その1）

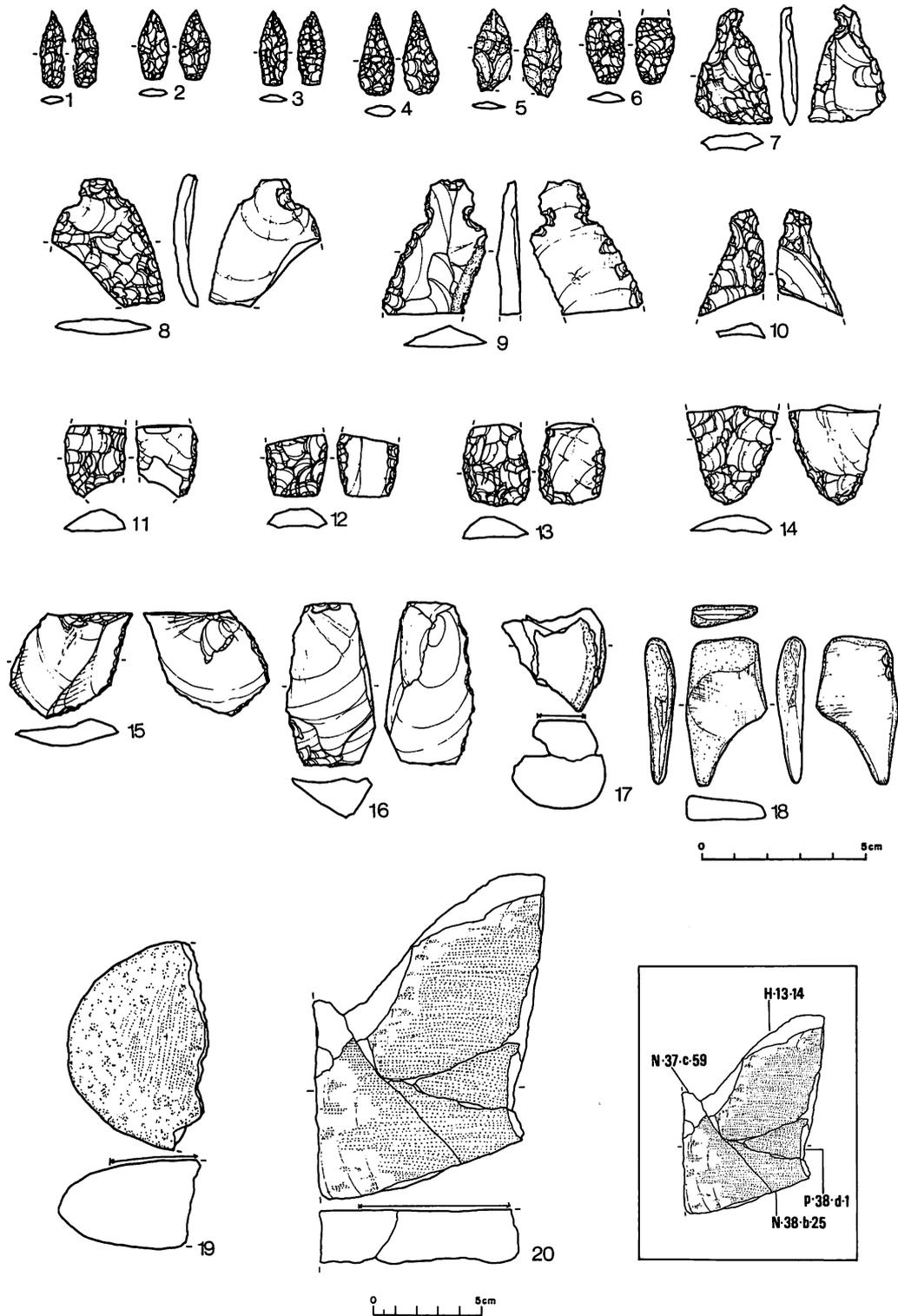


図IV-7-46 遺物集中3の土器 (その2)



図IV-7-47 遺物集中3の土器（その3）

IV 遺構と遺物



図IV—7—48 遺物集中3の石器

遺物集中4

位置：O-38-b・c、P-37-d、P-38-a・d、H-13より5m南の平坦面に位置する。

規模：東側は調査区域外にまたがるため全容は不明である。今回の調査で確認された遺物の広がり、南北8.2m、東西8.4mで垂直分布は20cmの厚さがある。

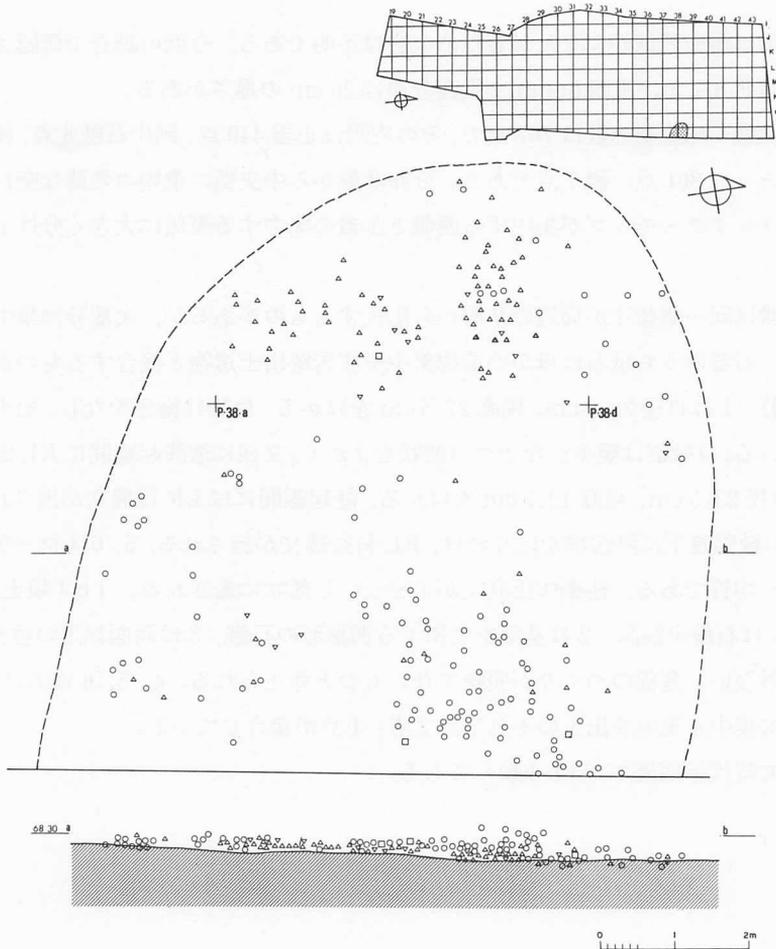
遺物出土状態：総遺物点数は767点で、その内訳は土器440点、剥片石器8点、礫石器11点、フレイク・チップ301点、礫7点である。分布状態から中央部に遺物の希薄な空白部をはさんで黒曜石のフレイク・チップが集中する西側と土器の集中する東側に大きく分けることができる。

接合：土器は同一個体片が周辺のV層から出土するものがあるが、大部分は集中域内で閉じられている。石器のうち砥石にほかの遺物集中や住居跡出土遺物と接合するものが2例ある。

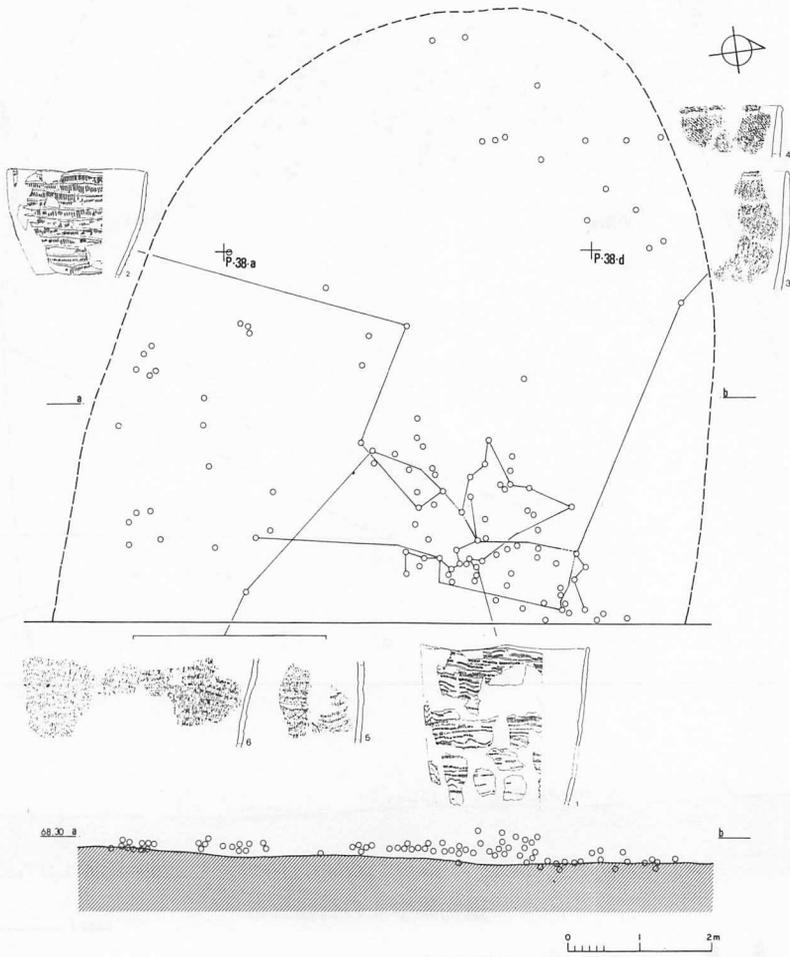
遺物(土器)：1は口径28.9cm、現高27.6cmをはかる。色調は褐色をなし、胎土には石英粒が混入している。口縁部は緩やかな4つの波状をえがく。文様は微隆起線間にRL短縄文が施される。2は口径23.5cm、現高12.7cmをはかる。隆起線間にはLR短縄文が施される。3、4は同一個体。口縁部直下に隆起線を貼り付け、RL斜行縄文が施される。5、6も同一個体、胎土はきめが細かく均質である。絡条体圧痕文が水平ないし孤状に施される。Ib4類土器。

(石器)：1は石鏃未製品。2は基部を欠損する柳葉形の石鏃。3は両面加工の槍先・ナイフ。平面形は菱形ないし茎部のつくりが明瞭でないものと考えられる。4、5、6はスクレイパー。7は砥石で、本集中と集中6出土のそれぞれ2点、1点が接合している。

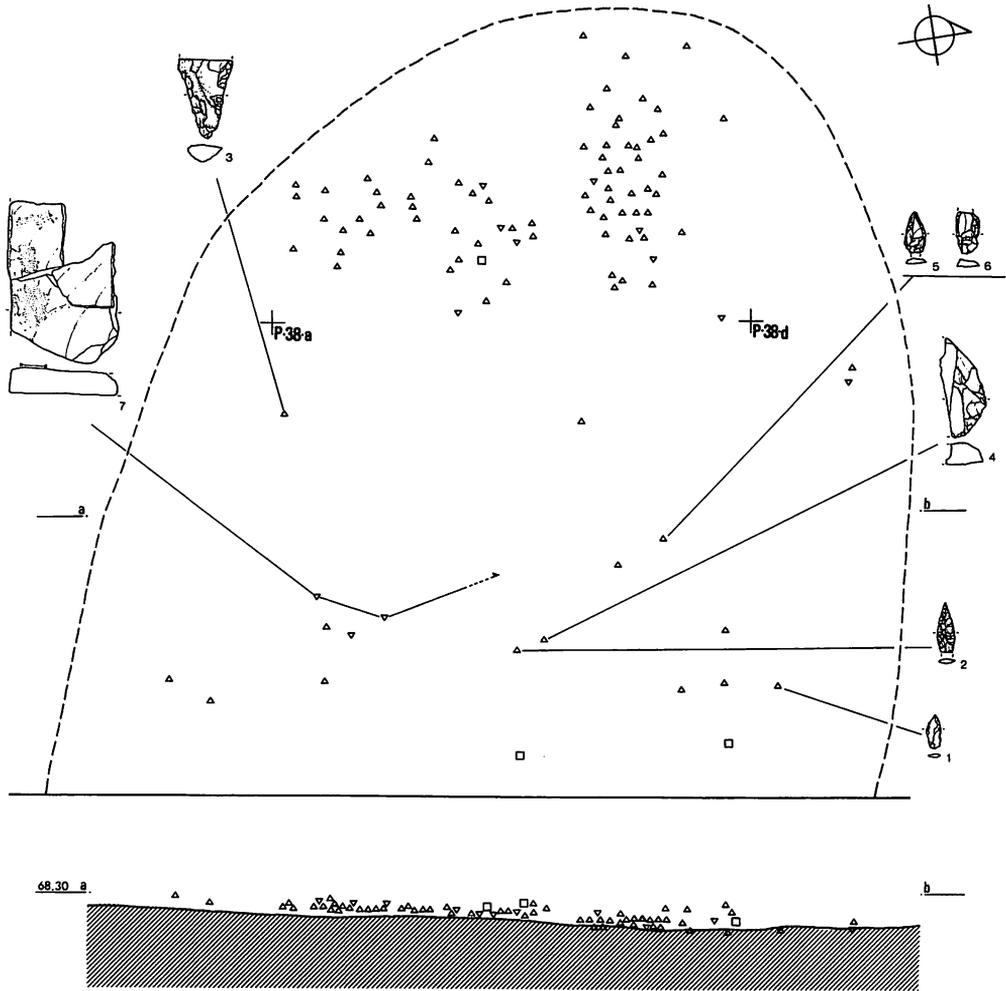
時期：縄文時代早期後半(Ib4類)である。



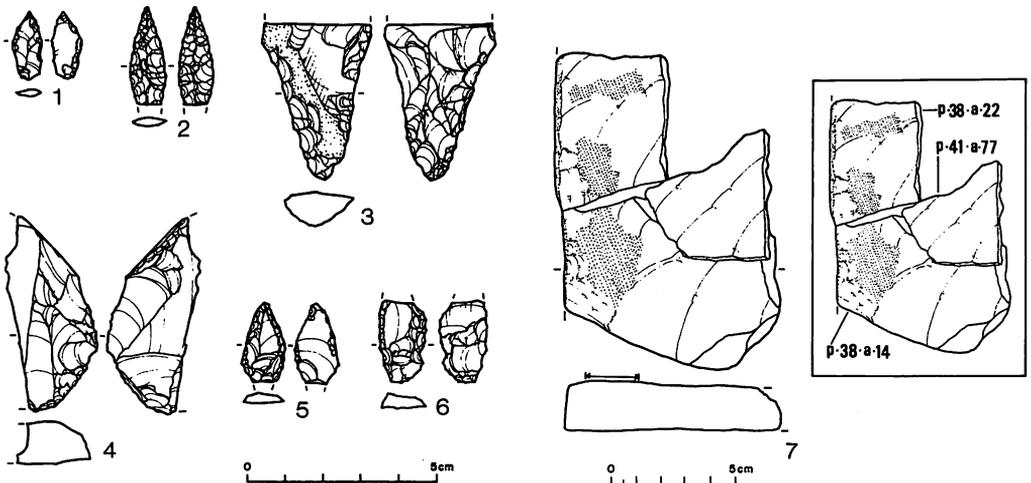
図IV-7-49 遺物集中4の分布



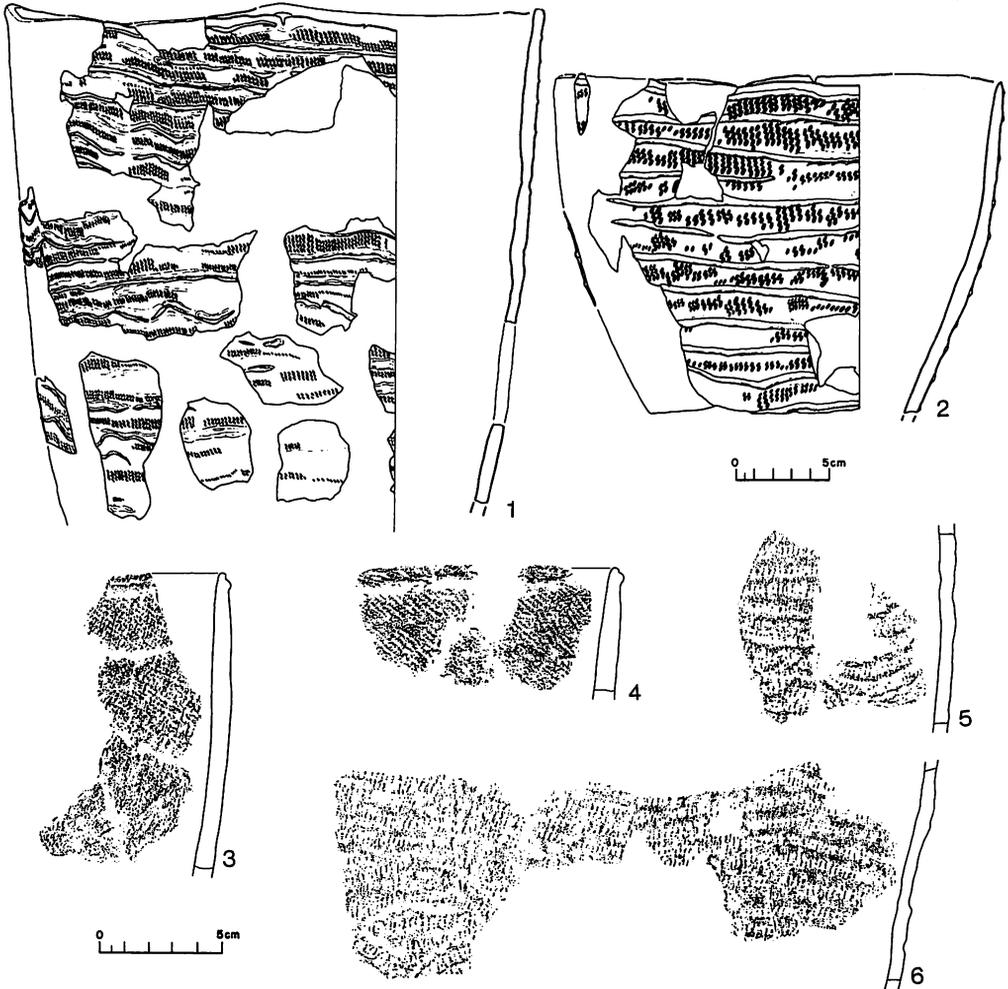
図IV-7-50 遺物集中4の土器分布



遺物集中4の石器分布



図IV-7-51 遺物集中4の石器



図IV-7-52 遺物集中4の土器

遺物集中5

位置：P-39-b・c・d、P-40-a・b、H-15の北側、北の沢に面した平坦面に位置する。

規模：遺物の広がりには南北5m、東西3mで、垂直分布は20cmの厚さがある。

遺物出土状態：総遺物点数は347点で、その内訳は土器320点、剥片石器2点、礫石器11点、フリック・チップ14点である。土器は小破片のものが多く、遺物集中1西側の遺存状態と類似している。黒曜石のフリック・チップは北側に偏っているが、密度は希薄である。

遺物(土器)：1~4は同一個体片。胎土には石英粒が混入している。文様は隆起線間にLR斜行縄文が施されている。Ib4類土器。

(石器)：9は先端部を欠損した柳葉形の石鏃。10はスクレイパー。11はすり石。石質は9が黒曜石、11が頁岩、12が緑色泥岩である。

時期：縄文時代早期後半(Ib4類)である。

遺物集中6

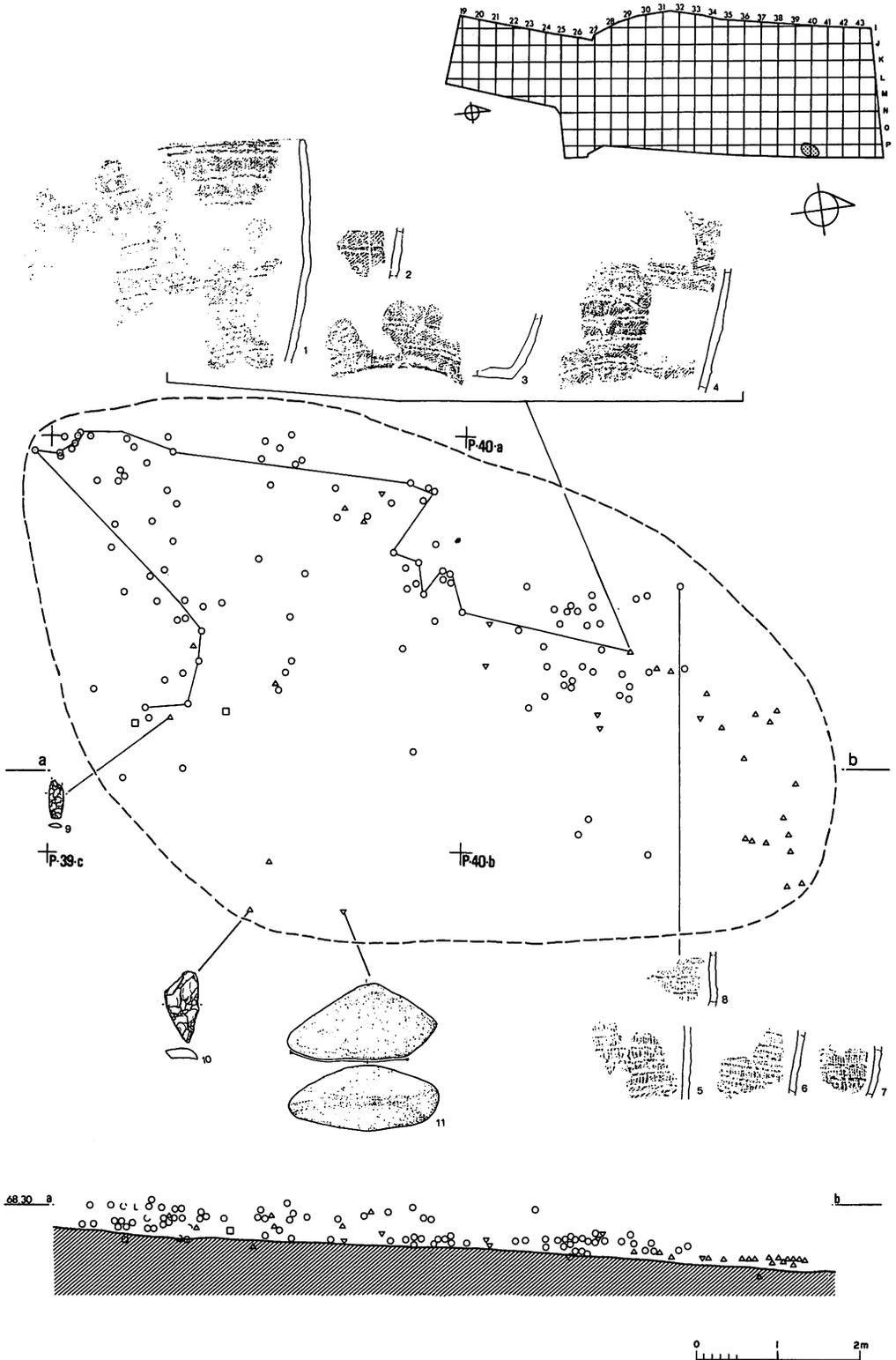
位置：N-42-C、O-40-d、O-41-a・b・c・d、O-42-a・b、P-40-c・d、P-41-a・b、北の沢内に位置する。

規模：東と西側は未発掘区にまたがると考えられる。今回の調査で確認された遺物の広がりには南北8m、東西20mで、垂直分布は沢傾斜面で20cm、沢底で69cmの厚さがある。

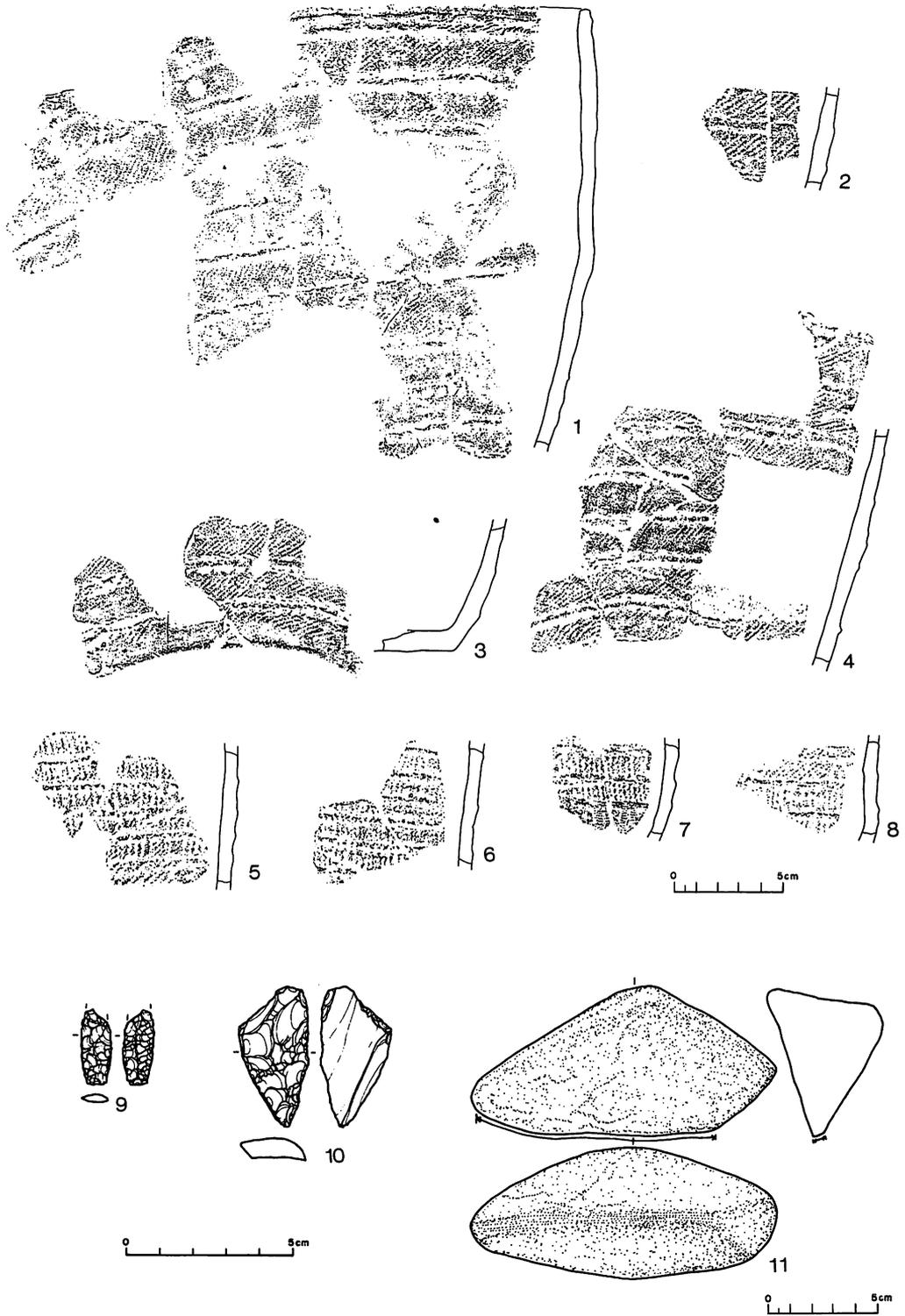
遺物出土状態：北の沢内のI~IV層では擦文土器、前期および早期の縄文土器、そのほか石器類が出土したが、量的に少なく平面的な遺物の広がりにはみられなかった。これに対してV層から泥炭層までは沢南側の肩口から沢底の斜面に沿うように土器、石器が検出された。総遺物点数は1,934点で、層別にみるとV層、VI+VII層、青灰色粘質土層、I層、泥炭層の順に361点、434点、811点、297点、24点であった。青灰色粘質土層から出土したものが最も多いが、土器はすべてIb4類土器に相当するもので、接合も層にかかわらずみられることから、これらの遺物分布を遺物集中6として取り扱うことにした。泥炭はすべて採集し水洗・乾燥を終え、現在は種子、遺物などの抽出作業を継続中である。

接合：土器は住居跡や集中から出土した遺物と接合または同一個体と考えられるものがある。石器では砥石にはかの集中の遺物と接合するものがある。(図IV-7-51の7)

遺物(土器)：1は口径28.7cm、器高29.8cmをはかる。器形は口縁部から直線的に底部にすぼまる。隆起線間には胴部上半ではLR斜行縄文が、下半でLRとRL斜行縄文が交互に施されている。2は口径29.1cm、現高30.2cmをはかる。口唇部を欠損する。器形は1に比べ緩やかな曲線を描いて底部に移行している。隆起線は2または3条おきに波状に貼り付けられ、RL斜行縄文が施されている。3は口径25.2cm、器高26.3cmをはかる。口縁部は4個の波状をなすもので、器形の傾きは直線的である。口縁部から順に、横走する隆起線と短縄文の組合せと、直線または曲線状の隆起線と絡条体圧痕文の組合せが交互に文様帯を構成している。この土器は隆起線と絡条体圧痕文が施される底部がH-12覆土から、それより上半部は本集中から出土



図IV-7-53 遺物集中5の分布



図IV-7-54 遺物集中5の土器・石器

したものである(図IV-7-19)。4は現高10.4cmをはかる底部。隆起線間にはRL短縄文が施されている。5は口径25.3cmをはかる。破片が少ないため明らかではないが口縁部は4個の弱い波頂をもつものと考えられる。胴部上半の文様モチーフは3と同じで、違いは隆起線が絡条体圧痕文に、絡条体圧痕文が短縄文にそれぞれ置き換えられたものとみなしえる。6~14は同一個体である。文様は隆起線間に結束羽状縄文が施されている。これはイ層と泥炭層から出土したものが接合している。15~21は絡条体圧痕文が施されるもの。Ib4類土器。

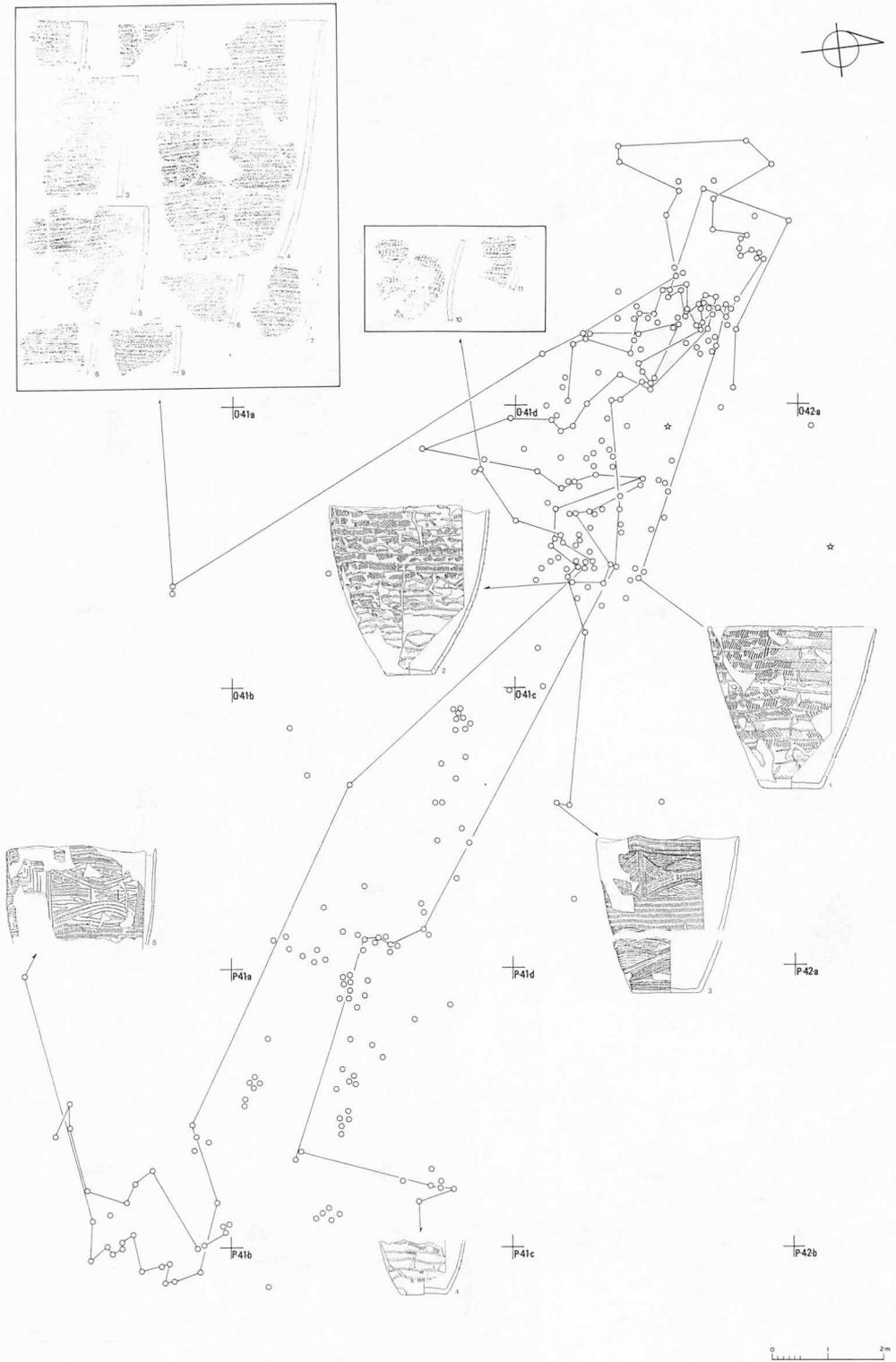
(石器)：1~8は柳葉形の石鏃。4、5、7は火熱を受けている。9~12は三角形の石鏃。11、12は側縁がやや脹らむ。13は槍先・ナイフ。14は石錐。柱状原石を利用している。15~16はつまみ付きナイフ。19、20、24は石斧。21は擦り切り痕がある石斧未製品。25~28はたたき石。29~31はすり石。32は砥石である。石質は1~16が黒曜石、17が頁岩、18が珪岩、19~21が蛇紋岩、24が片岩、25~31が安山岩、32が砂岩である。22、23は土製円盤。いずれもIb4類土器を利用したもの。23は胎土、文様の特徵から遺物集中2から出土したもの(図IV-7-41の7~14)と同一個体の可能性がある。

時期：縄文時代早期後半(Ib4類土器)である。

IV 遺構と遺物

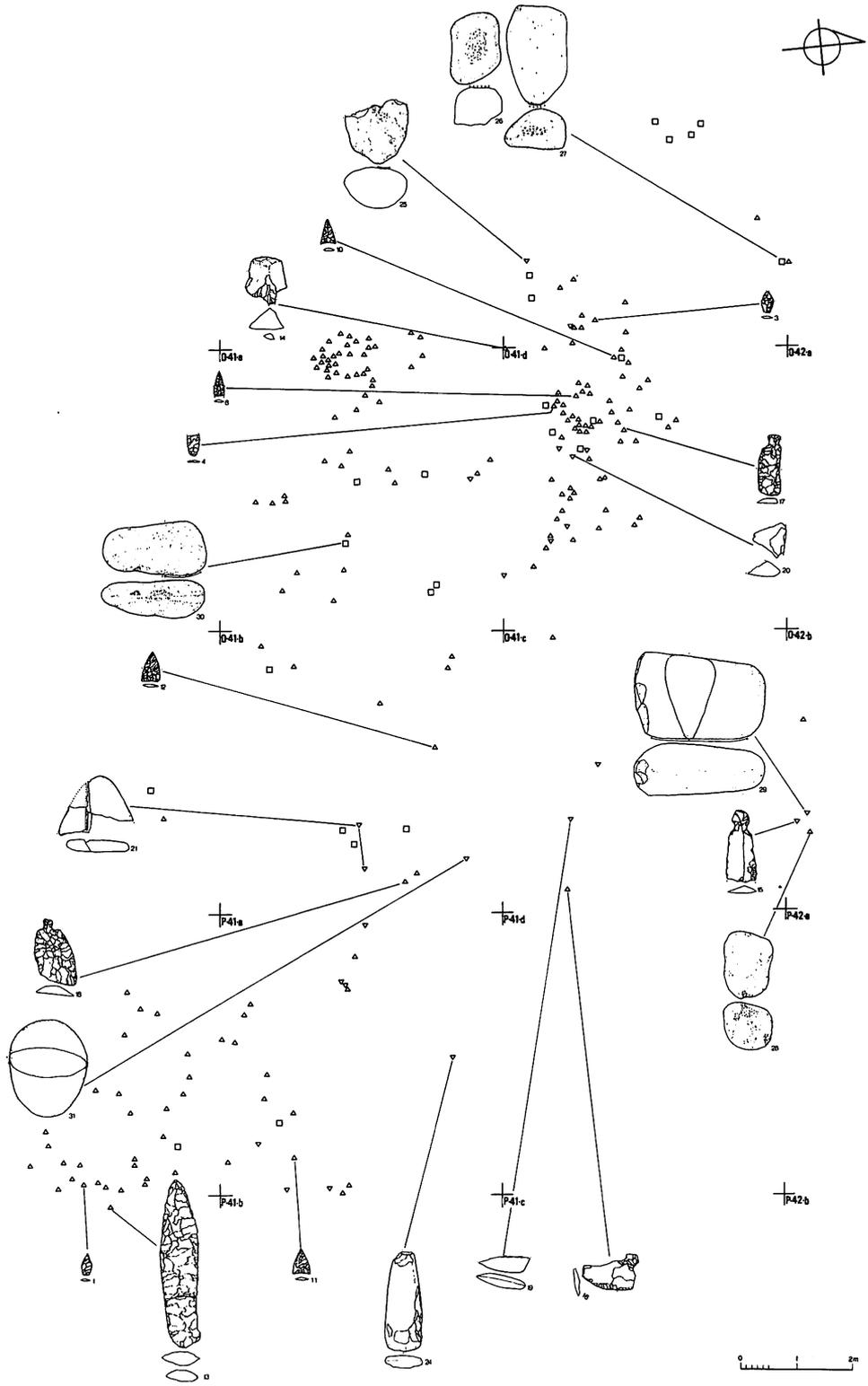


図IV-7-55 遺物集中6の分布

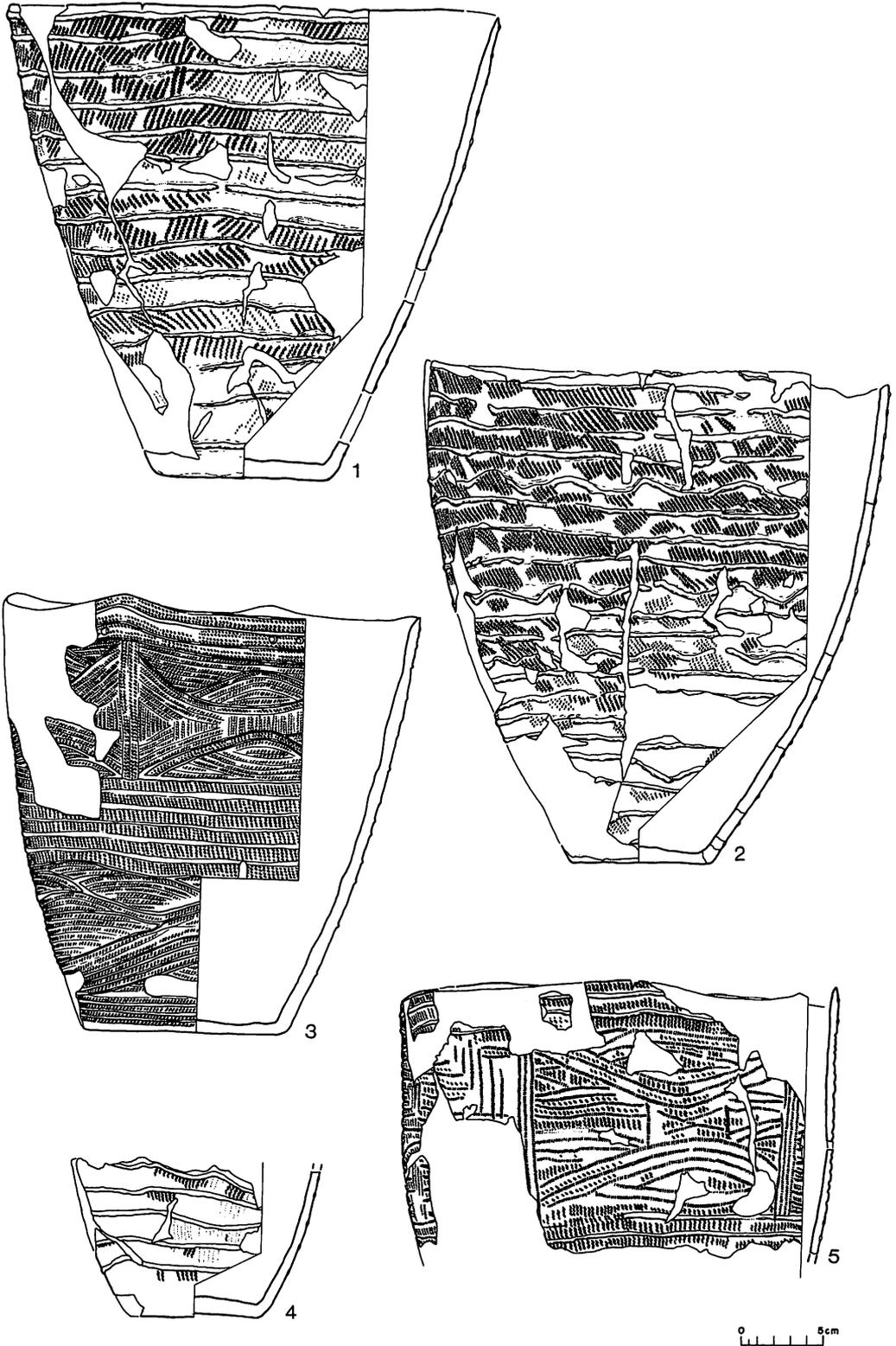


図IV-7-56 遺物集中6の土器分布

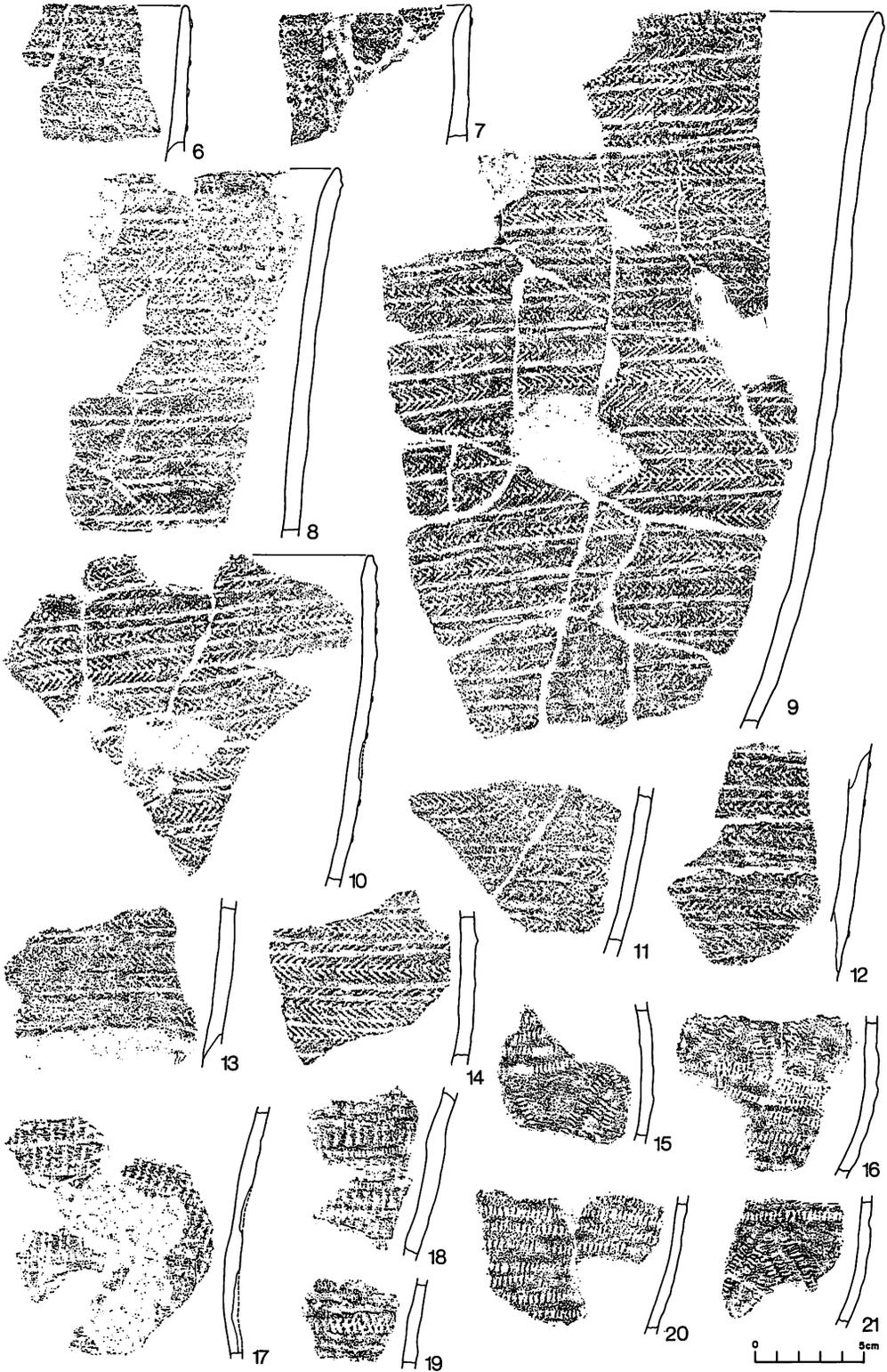
IV 遺構と遺物



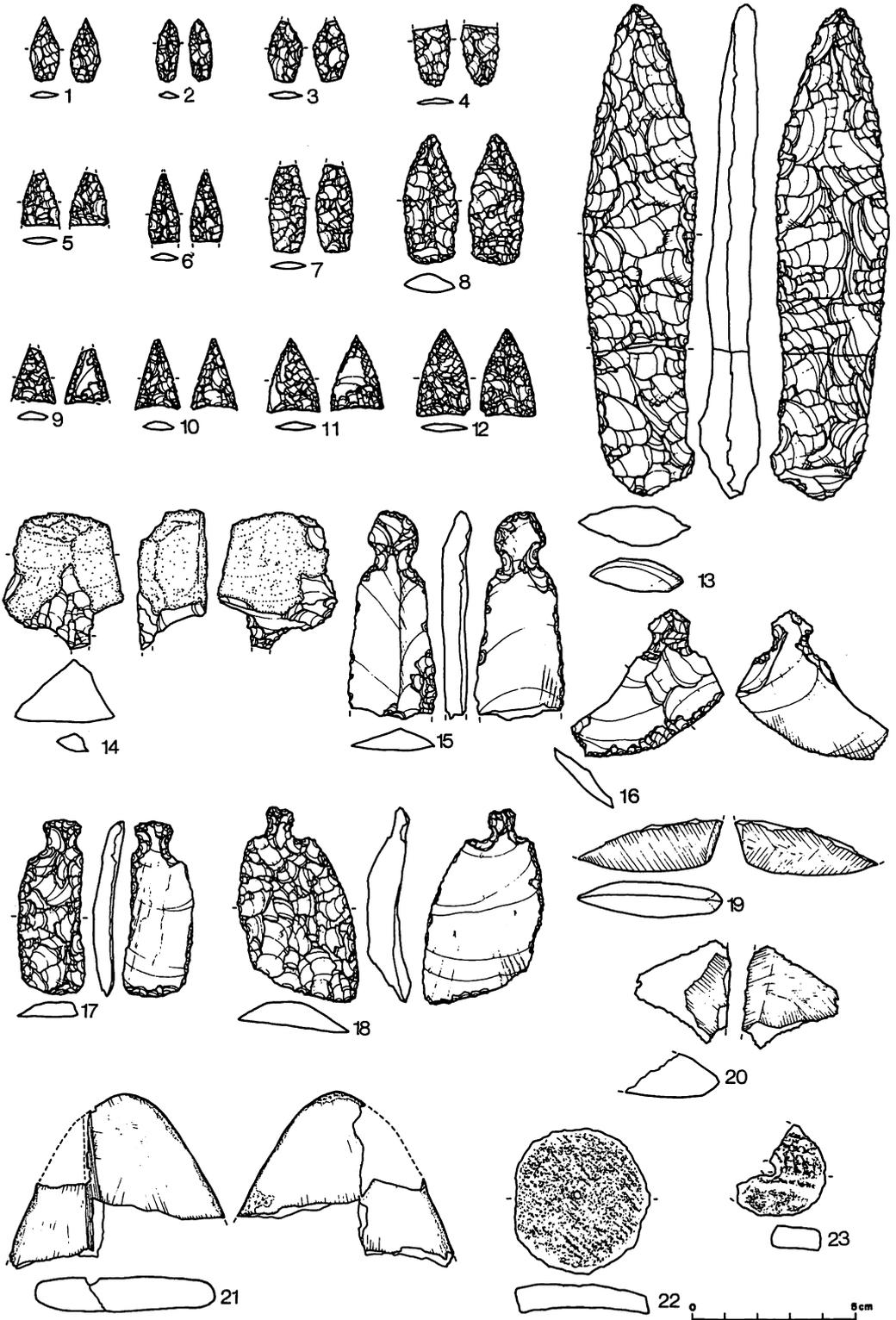
図IV-7-57 遺物集中6の石器分布



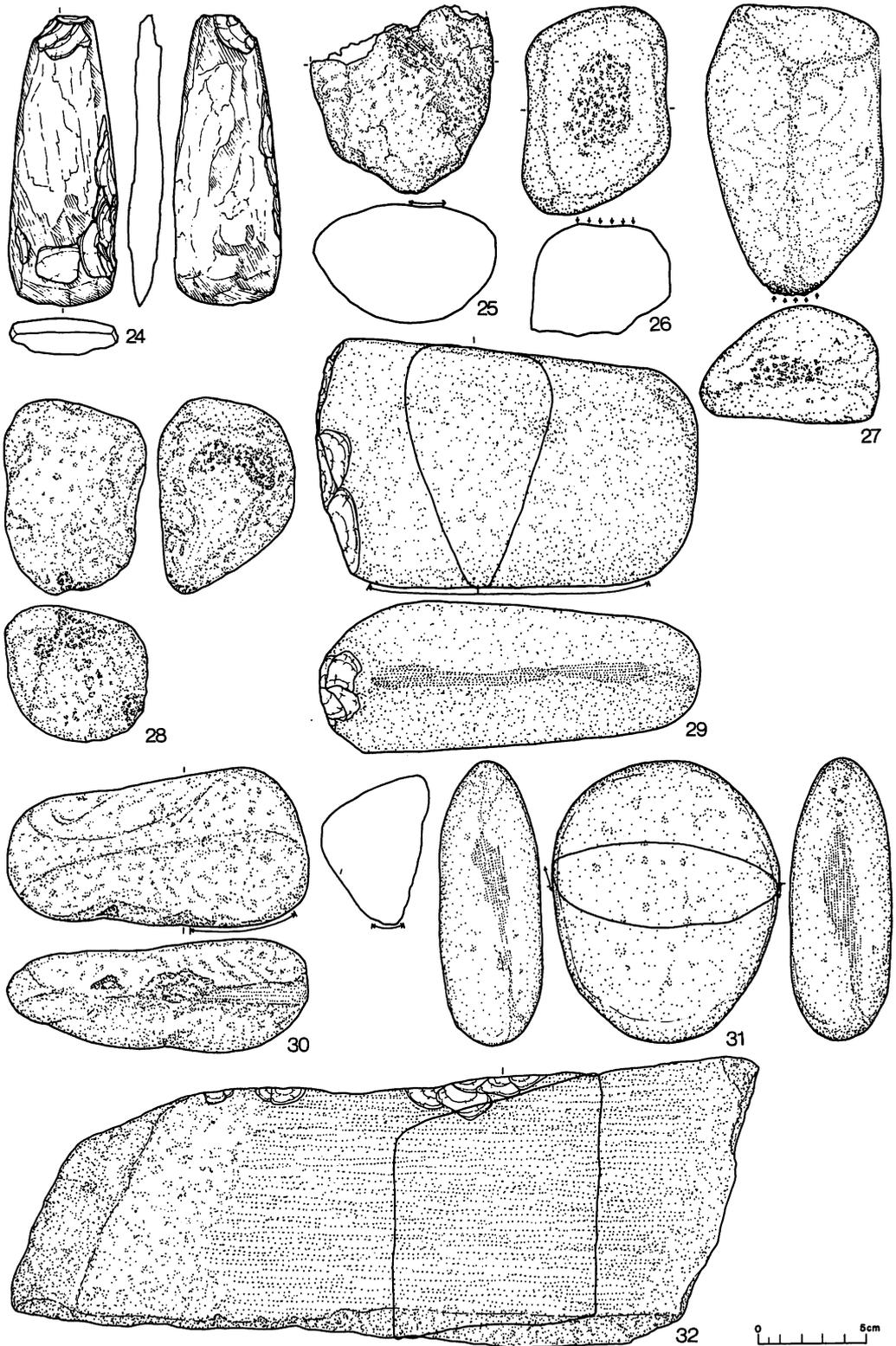
図IV-7-58 遺物集中6の土器 (その1)



図IV-7-59 遺物集中6の土器 (その2)



図IV-7-60 遺物集中6の石器 (その1)



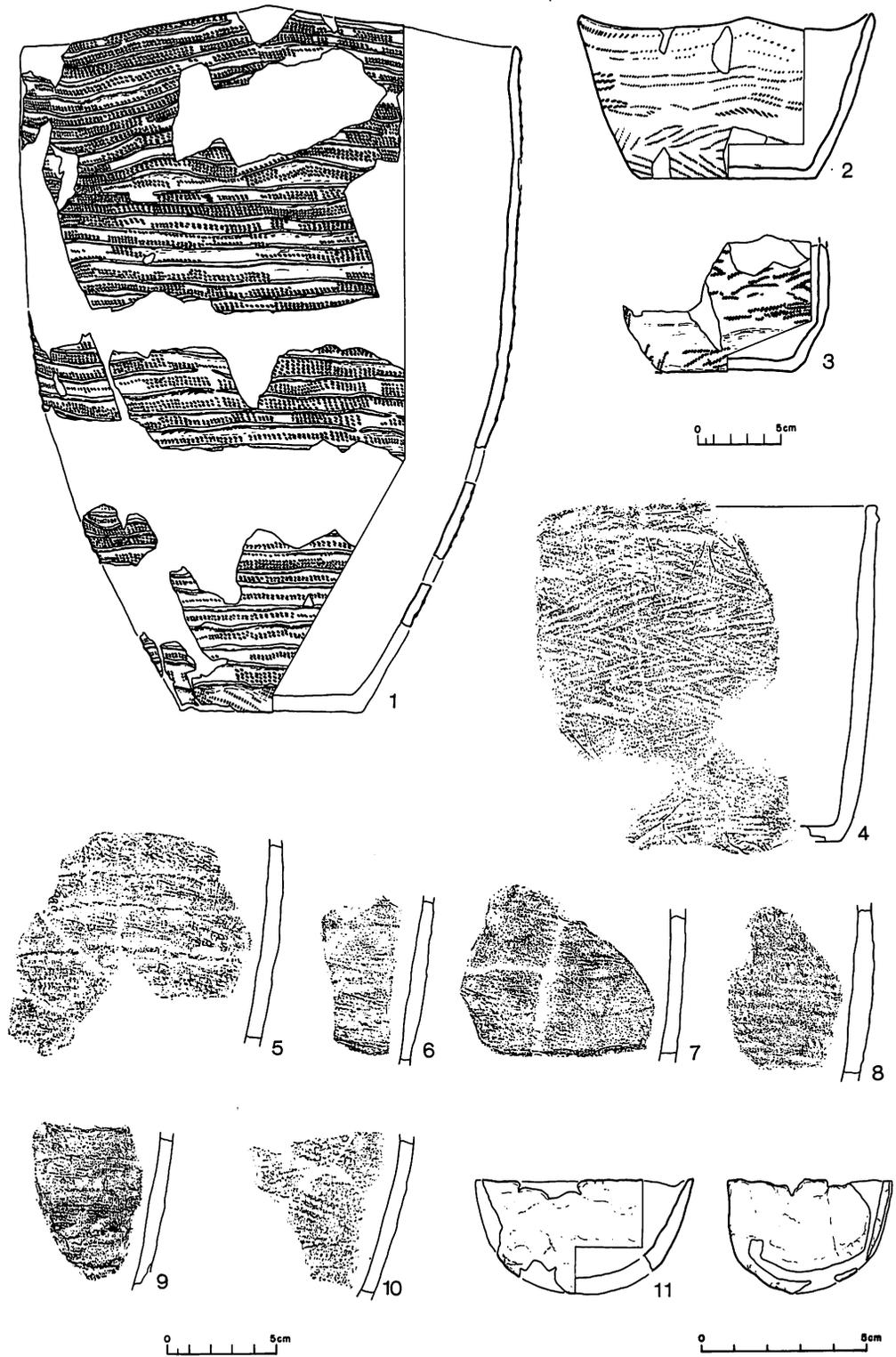
図IV-7-61 遺物集中6の石器 (その2)

V層の土器

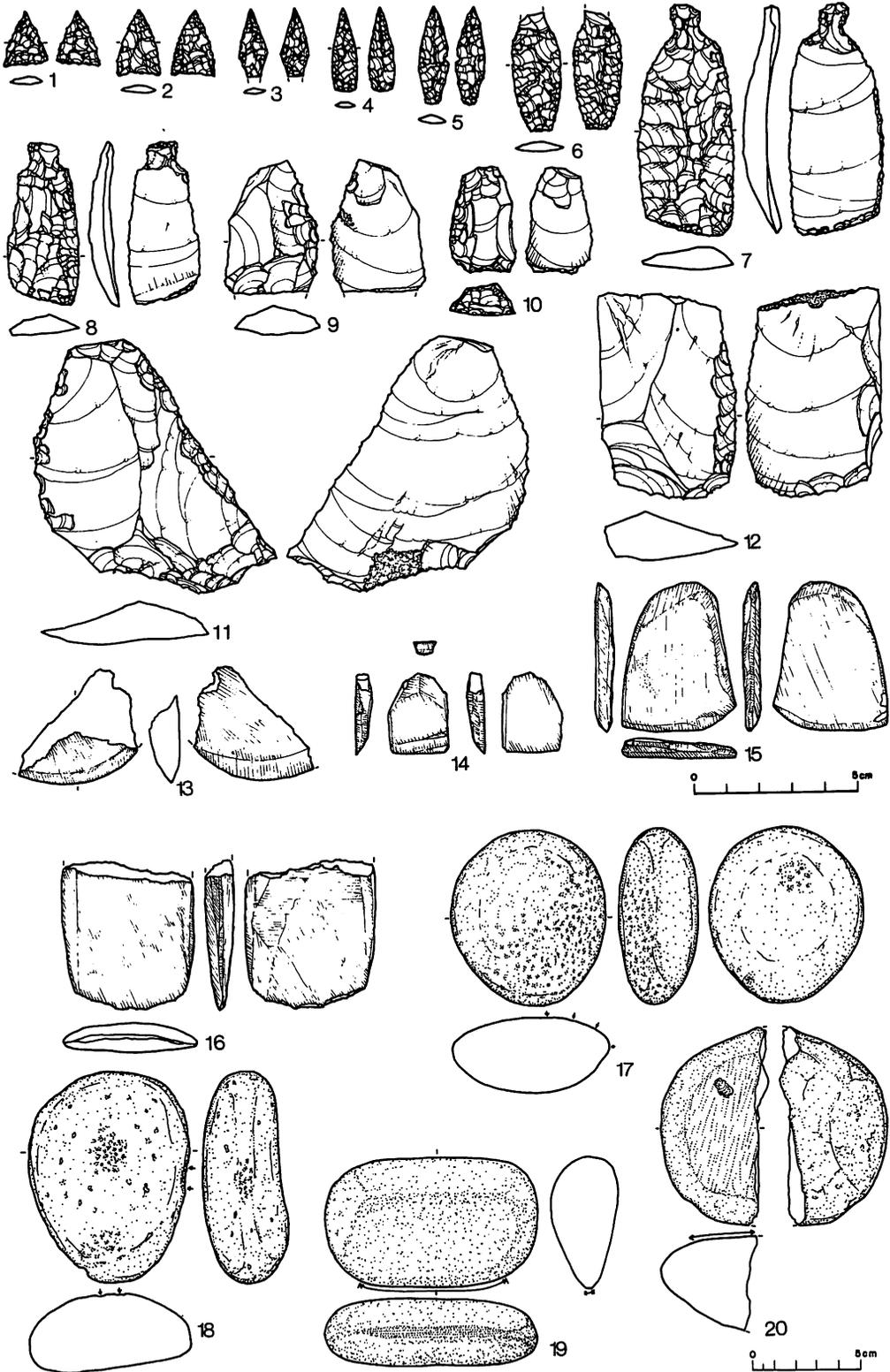
1は口径32.3cm、器高41.7cm(いずれも推定)をはかる。口縁は緩やかな2個の波状がある。横走隆起線間には回転縄文が施されている。2は口径17cm、器高9.7cmをはかる浅鉢形土器。底部付近に羽状の捺糸文が施されている。3は現高8.1cmをはかる。器形は底部から3cmほど上位で直立している。4は口縁部直下に隆起線を1条めぐらせている。胴部には羽状の捺糸文が施されている。5~7、9は微隆起線間に横位の捺糸文が施されている。11はミニチュア土器。1はIb4類土器で、このほかはIb5類土器である。

V層の石器

1、2は三角形鏃。3は五角形鏃。4~6は柳葉形鏃。7、8は片面全面加工のつまみ付きナイフ。13~16は石斧。14は石のみと称されるもの。17、18はたたき石。19、20はすり石。石質は1~6が黒曜石、7~9、11が珪岩、12、17~20が安山岩、13、14、16が蛇紋岩、15が緑色泥岩である。



図IV-7-62 V層 包含層の土器



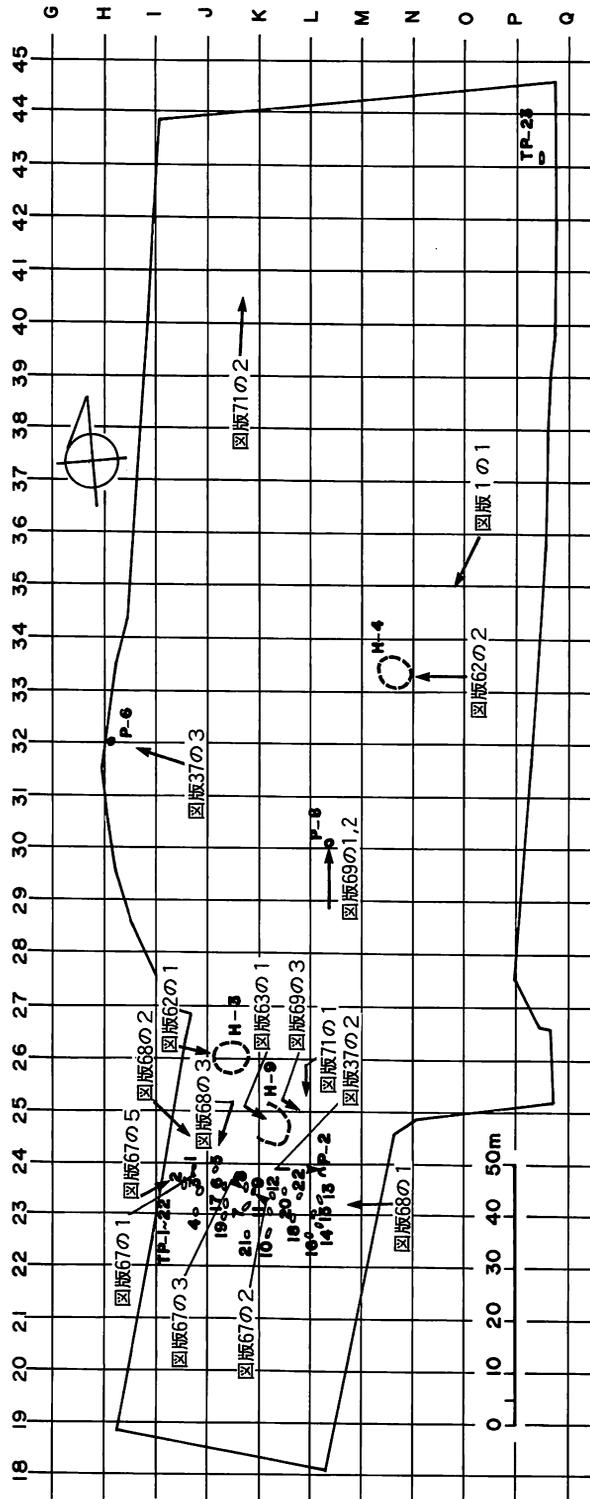
図IV-7-63 V層 包含層の石器

8 III層・IV層の遺構と遺物

III層とIV層とは土層の区分としては分けられるが、遺構・遺物の検出状況からは、両者を分離してとらえることが不適切なところがあったので、ここでは一括して説明する。

III層・IV層は、農耕による削平を免れたところによく残っている。縄文時代前期～中期と考えられるIII層・IV層の遺構の分布状態は、図IV-8-1に示したとおりである。縄文時代前期～中期の地形の大略は、図IV-1-1に近いものであったと考えられる。この地形図と土層の堆積状況から、遺跡の立地について、次のように理解できる。

北の沢・中の沢・南の沢は、東西に走る凹地であった。この3本の沢の幅は、北からそれぞれ10m・15m・40mで、石狩川に近づくにつれ広がっている。沢と沢の間は、南の沢と石狩川主流との間を含めて、微高地をなしていた。住居跡は南の沢に2か所(H-3・9)、中の沢に1か所(H-4)検出されたが、いずれも凹地部分にあたる。南地区で検出された22のTピット



図IV-8-1 III層・IV層の遺構位置と写真撮影方向

(TP-1~22)は、南の沢と石狩川本流との間の微高地にある。P-43区で検出されたTピット(TP-23)は、北の沢の北側肩部の北の沢を見下す場所に位置している。

南の沢の堆積土を見るかぎりでは、石狩川の洪水は、縄文時代早期ほどに大きく影響することはなかったらしい。流路の移動等があったのだろう。

次のようなC₁₄年代測定値が、得られている。

南の沢(H-9) 5060±35 BP (KSU-1847)

中の沢(H-4) 5490±35 BP (KSU-1688)

北の沢 4620±40 BP (KSU-1844) [I-42-b区 III層]

南の沢のIV層最上部にある住居跡H-9は、縄文時代中期前半の押型文平底土器の時期であり、H-3もほぼ同じ頃のものと考えられる。H-9は、その周辺から多くの土器・石器が出土している。中の沢にある住居跡H-4は、土層や周辺の遺物から判断すると、南の沢のものよりいくぶん古い時期になろう。

南地区のTピットのなかには、掘り込まれた土層が縄文時代中期前半の押型文平底土器の出土する面よりも明らかに上位であることが確かめられたものがある(TP-1・5・9)。Tピットの形態・立地に関しては、動物生態学的な観点からの評価を、佐藤孝則氏にお願いした(V章346ページ)。

道路地区にあった「遺物集中7」と呼ぶものは、耕地造成時の削平を免れたところにあたり、縄文時代中期前半の押型文平底土器の時期のものである。

包含層の土器は、沢の中などに点々と分布するものを、小さなまとまりごとに示した。このうち1~35の東釧路IV式土器は、北の沢の斜面から底面にわたってII層~V層から出土したものである。しかし、この東釧路IV式土器が出土した北の沢西端部では、最近のゴミ穴のために連続する土層の追跡が困難になり、さらに湧水もあったので、出土層位を明確にすることはできなかった。これとほぼ同じ様な状況で出土した77~83は、縄文時代前期の土器である。

36~37は、中の沢と南の沢との間にあって、住居跡や遺物集中には含まれなかった押し引き文土器、押型文土器、縄文土器などである。74~104は北の沢周辺から出土したものである。包含層の石器は、点在して出土したものである。

H-3

位置：J-25-c・d、J-26-a・b 西地区の南側、南の沢の北傾斜に位置している。
標高は66.00 m～66.30 mである。

規模：(7.08 m)×(5.80 m)／(6.70 m)×(5.46 m) 深さ0.4 m

平面形：五角形状？

床面積：33.2 m²

確認・調査：西地区の土層を観察するため、JラインとKラインのほぼ中間に南北方向のトレンチを掘ったところ、壁面に4個の小ピット(HP-1、HP-10、HP-9、HP-8)が検出された。また第Ⅶ層を掘り込んだ淡黄褐色土(土層図 11)の汚れた土が見られたので住居跡を想定し、調査をおこなった。Jライン、26ラインに沿って壁の立ちあがりを確認するため、それぞれに小トレンチを設定する。東・北・南側は不明瞭ではあるが、壁と思われる立ちあがりを確認することができる。しかし西壁の立ちあがり確認できなかった。第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層をそれぞれ掘り下げたところ、長形状(約7.0 m×5.0 m)に広がる黄色砂が検出された。この薄く広がる黄色砂を目途におおよその平面形の輪郭を想定した。

覆土：東壁側はⅣ層と黄色砂の間に粗い砂が10 cm～15 cmほど堆積し、黄色砂の下には暗黄色砂質土が10 cm～15 cmほど堆積している。その下には黄色土の混入した汚れた淡黄褐色土が約10 cmほど堆積し、壁際には三角堆積状の土も見られた。ほかに第Ⅳ層の下には黄色砂か粗い砂があり、その下には淡黄褐色土が約10 cmほど堆積している。壁際(西壁を除き)には、わずかに壁崩落土の三角堆積がある。掘り込み面は第Ⅳ層中か上面と考えられる。

床：第Ⅶ層を掘り込んでつくられている。中央部には礫の露出部分があり、やや凹凸がある。

壁：東壁は急傾斜で立ちあがるが、ほかはゆるやかである。断面は皿状を呈している。東壁がもっとも深く、約40 cmである。

炉跡：焼土、炭化物は検出されなかった。しかし、南北方向に入れた土層観察用に掘ったトレンチが本住居跡のほぼ中央部分に当たっているため、その際に破壊された可能性もある。

付属ピット：本住居跡内外より35個の小ピットが検出された。このうち東壁から南壁にかけての6個(HP-25、HP-26、HP-27、HP-28、HP-29、HP-30)は内側に傾くものである。そのほかの小ピットはすべて直立し、先端部が細く杭状である。ほとんどの小ピットが深さ10 cm内外で、覆土は淡褐色である。規則的な配列は見られず、柱穴とみなされるものはない。

遺物：覆土、床面から遺物は出土していない。

時期：時期を決定し得る遺物は出土していないが、①掘り込み面が第Ⅳ層中からかその上面と考えられること、②本住居跡の東側の第Ⅲ層及び周辺の第Ⅳ層中より押型文平底土器がややまとまって出土していること、などから考えられると、この土器を伴う時期を想定することができる。

H-4

位置：M-33-a・b・c・d 東地区のほぼ中央部、中の沢の北側斜面上に位置している。

標高は67.14 m～67.70 mである。

規模：(6.50 m×4.60 m) (推定)

平面形：長円形 (推定)

確認・調査：M-33-a・b・c・dの包含層調査中、第Ⅶ層上面まで掘り下げたところ、M-33-bで円礫や軽石状の礫がかたまっていた。周辺ではこのような出土状況は見られず、流れ込みではなく、持ち込まれた可能性が考えられる。また炭化物の堆積も確認されたため、生活面を想定して調査をおこなった。礫、炭化物の周辺を精査したところ、これらを取りかこむような小ピットが検出されたため、住居跡と判断した。

床：第Ⅶ層上にあり、北から南へゆるやかに傾斜している。わずかに凹凸がある。

壁：掘り込み面、壁の立ちあがりは不明である。

炉跡：焼土などは検出されていない。床面の南寄りの低いところに約0.7 m×0.5 m、深さ約20 cmほどの浅い落ち込みがあり、その覆土に多量の炭化物が含まれていた。とくに土層図4層には多量に含まれていた。この炭化物のC₁₄年代測定値は、5490±35 BP(KSU-1668)である。

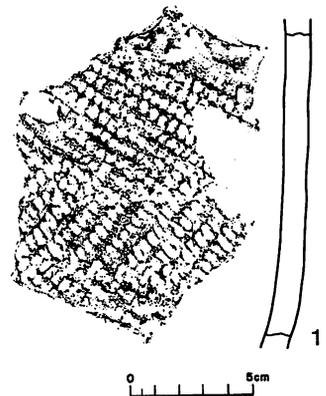
付属ピット：小ピットは13個検出された。HP-7、HP-8、HP-9は浅いためはっきりしないが、そのほかの小ピットはすべて内側に傾いている。覆土は暗灰褐色土で、第Ⅶ層の砂が混入している。

遺物出土状況：出土遺物総数は298点で、その内訳は土器2点、石器など296点である。土器はHP-12の覆土中から出土している。炭化物の周辺及び東側から礫が102点出土し、炭化物の混入していた落ち込中からフレイク・チップ類が194点出土している。

遺物：図IV-8-4の1は胴部破片で、2種の原体を使用した羽状縄文が施文されている。胎土は緻密で堅い。胎土・内・外面の色調は暗黄灰色で、非常に堅く、焼成は良好である。東釧路Ⅲ式に比定される。礫は最大のがこぶし大で、ほとんどが3 cm～5 cm大の軽石状のものである。すべて床面から出土し、人為的に持ち込まれたものと推定される。

時期：時期を決定し得るものはない。ただHP-12覆土から出土した土器片や周辺より同様の土器が出土していることから考えると、縄文時代早期後半か、それより新しい時期を想定することができるだろう。

平面形、規模、また掘り込み面、壁の立ちあがりなどは不明であるが、小ピットの配列状況から見て、ほぼ東西に長軸方向をもつ長円形のプランを推定できる。また床面は沢の斜面をそのまま利用していることから考えると、短期間の生活跡と考えられる。



図IV-8-4 住居跡 H-4の土器

IV 遺構と遺物

H-9

位置：J-24-c、K-24-c・d、K-25-a・b 排水溝地区の南西側、南から北へゆるやかに傾斜する斜面上に位置している。標高は66.30m~66.70mである。

規模：不明

平面形：不明

確認・調査：K-24-d、K-25-aの包含層調査中、第Ⅲ層下層中（暗黄褐色土）から土器片、石器などが多数出土した。J-24-c、K-24-c、K-25-bも遺構を考慮しつつ第Ⅳ層上面まで掘り下げる。K-25-b周辺では第Ⅲ層下層中に炭化物が混入し、第Ⅳ層上には粘質の汚れた土も見られた。また第Ⅳ層上面から焼土が6か所検出されたため、住居跡として調査をおこなう。

床：第Ⅳ層上面が床面と考えられるが、第Ⅳ層を若干掘り込んでいる可能性もある。南から北にゆるやかに傾斜しており、25ライン付近よりほぼ平坦になっている。

壁：壁の立ちあがりは検出されなかった。

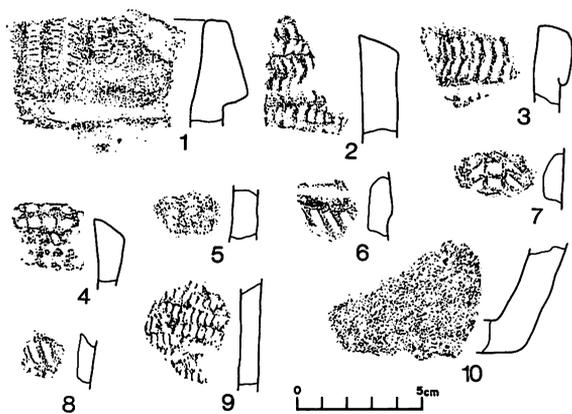
炉跡：6個の地床炉が検出されている。6個の焼土はすべて第Ⅳ層上面にあり、わずかに凹んでいる。ほぼ同一時期に使用されたものと考えられる。HF-2周辺の炭化物のC₁₄年代測定値は、5060±35BP（KSU-1847）である。

付属ピット：柱穴状の小ピットは検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物総数は1,348点で、その内訳は土器が27点、石器などが1,321点である。このうち床面と焼土中から取り上げたのは、土器が16点、石器などが855点である。出土遺物は石器などが大半を占め、とくに5cm~10cm大の礫が全体の34%を占めている。これらの礫はあるまとまりを思わせる状態ではなく、第Ⅲ層下層から床面まで、平均的に出土しており、ほかの住居跡では見られない出土状況を見せている。またフレイク・チップは全体の53%を占め、HF-1、HF-3、HF-5、HF-6にかこまれた範囲にほとんど集中している。土器は本住居跡の範囲としたところからは27点出土しただけである。これらはすべて押型文平底土器

である。本住居跡の北西側の第Ⅲ層と第Ⅳ層上層より多量の押型文平底土器が出土している。ここは本住居跡の床面からみると若干凹地になっており、本住居跡と何らかの関連性が想定される。しかしながら本住居跡、土器集中出土地区の西・東側は調査区外であるため、全体的な状況は把握できなかった。

遺物：床面と焼土のなかから出土したものである。1の口縁部は、平た



図IV-8-5 住居跡 H-9の土器



図IV—8—7 住居跡 H—9とその周辺の土器分布

い口唇で口唇の下約3 cmまで外側が厚くなる。文様は、幅約5 mm、長さ約25 mmの縦長のものに4 mm間隔の横線があり梯子状文と呼ばれる押し型文である。胎土には、大きなもので径約7 mmの礫を含む。2は内面外面および傾斜する口唇にも同一の押し引き文が付された口縁部である。3は、折り返し状の肥厚帯のある口縁部である。口唇部の文様は、風化剥落したのか明らかではない。外面には押し引き文があるが、内面の押し引き文様は細い痕跡があるに過ぎない。4の内面は明らかでないが、外面および傾斜する口唇には押し引き文がある。5は胎土、焼成が1に類似している文様不明の胴部である。6~8はともに内面を欠く小破片であるが、胎土、焼成、文様の矢羽根状押し型文が類似しており、同一個体と考えられる。7には矢羽根状押し型文の間に長方形の押し型がある。9は胎土に5 mm程の礫を多く含む、縄文のある胴部破片である。10は平底になる底部であるが、表面の剥落が著しくて、その文様は明らかでない。

時期：床面、HF—1出土の土器及び周辺出土の土器は、押し型文平底土器であり、縄文時代中期前半のものであろうと考えられる。

周辺の遺物：土器（図IV—8—9・10・11）住居跡H—9周辺の土器の出土状態は、図IV—8—7

のとおりである。押型文土器、押し引き文土器、縄文土器がある。

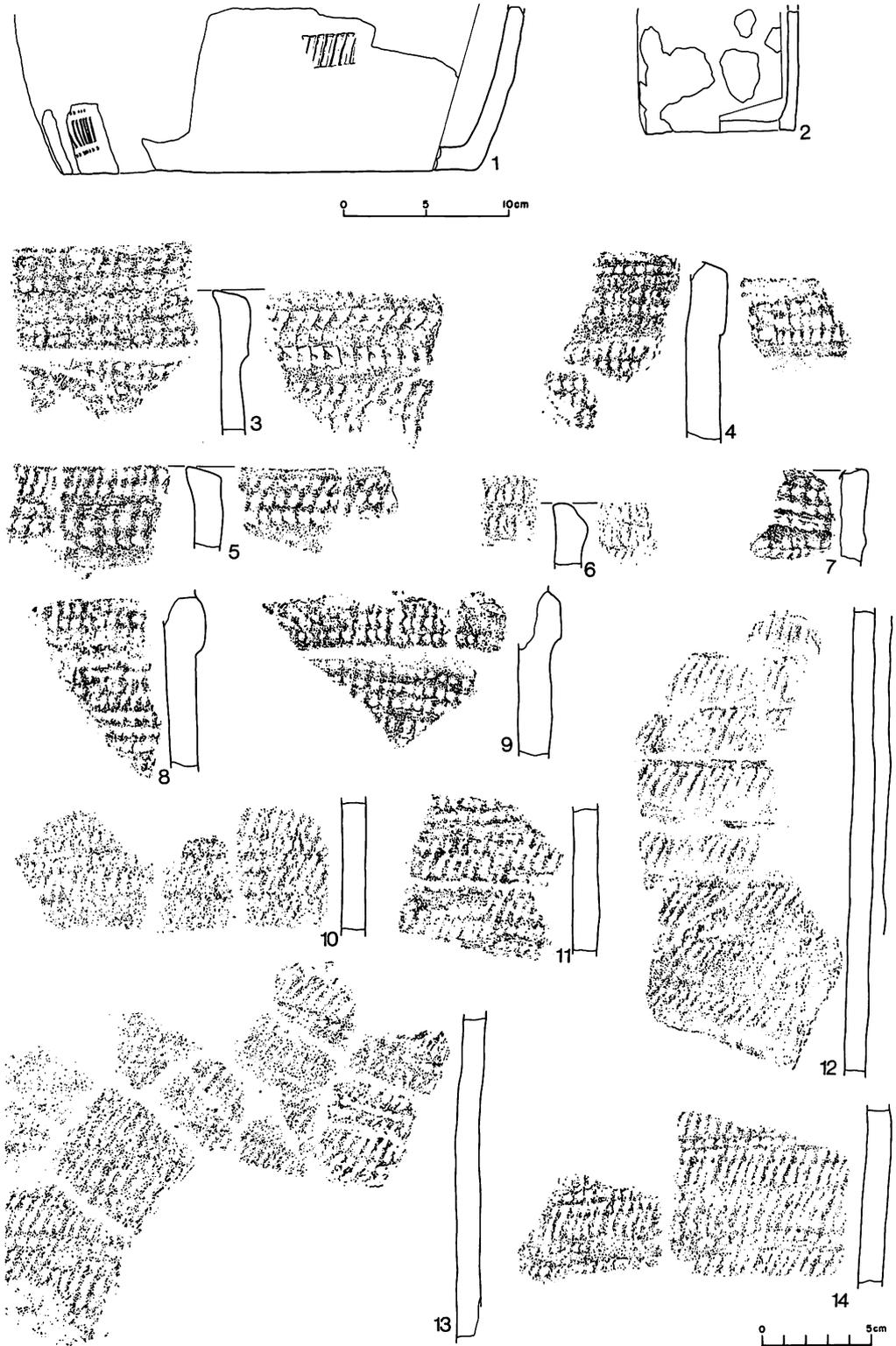
1は径25cmの平底である。表面剝落のために文様の全体は不明瞭であるが、約3cm幅の押し引き文がある。2は無文土器。径9cmの平底である。3は口唇が傾斜し、肥厚帯のある口縁部である。内面、外面および口唇に押し引き文がある。明瞭に残る内面の押し引き文は、幅約25mmのなかに5点が連なったものである。4は、わずかな肥厚帯のある口縁部である。口唇内側を欠いているが、内面、外面および口唇に押し引き文がある。5は3と類似した断面をなす口縁部である。内面の押し引き文は、幅約20mmのなかに3点がある。6は内面、外面および傾斜する口唇に押し引き文のある口縁部である。7～9は、肥厚帯のある口縁部近くの破片で、胎土、焼成、押し引き文が類似しており、同一個体とみなされる。

11～57は、押し引き文の胴部である。押し引き文には幅の広狭、施文具に由来する点と線の組み合わせなど、それぞれに特色がある。58・59は押し引き文のある平底である。

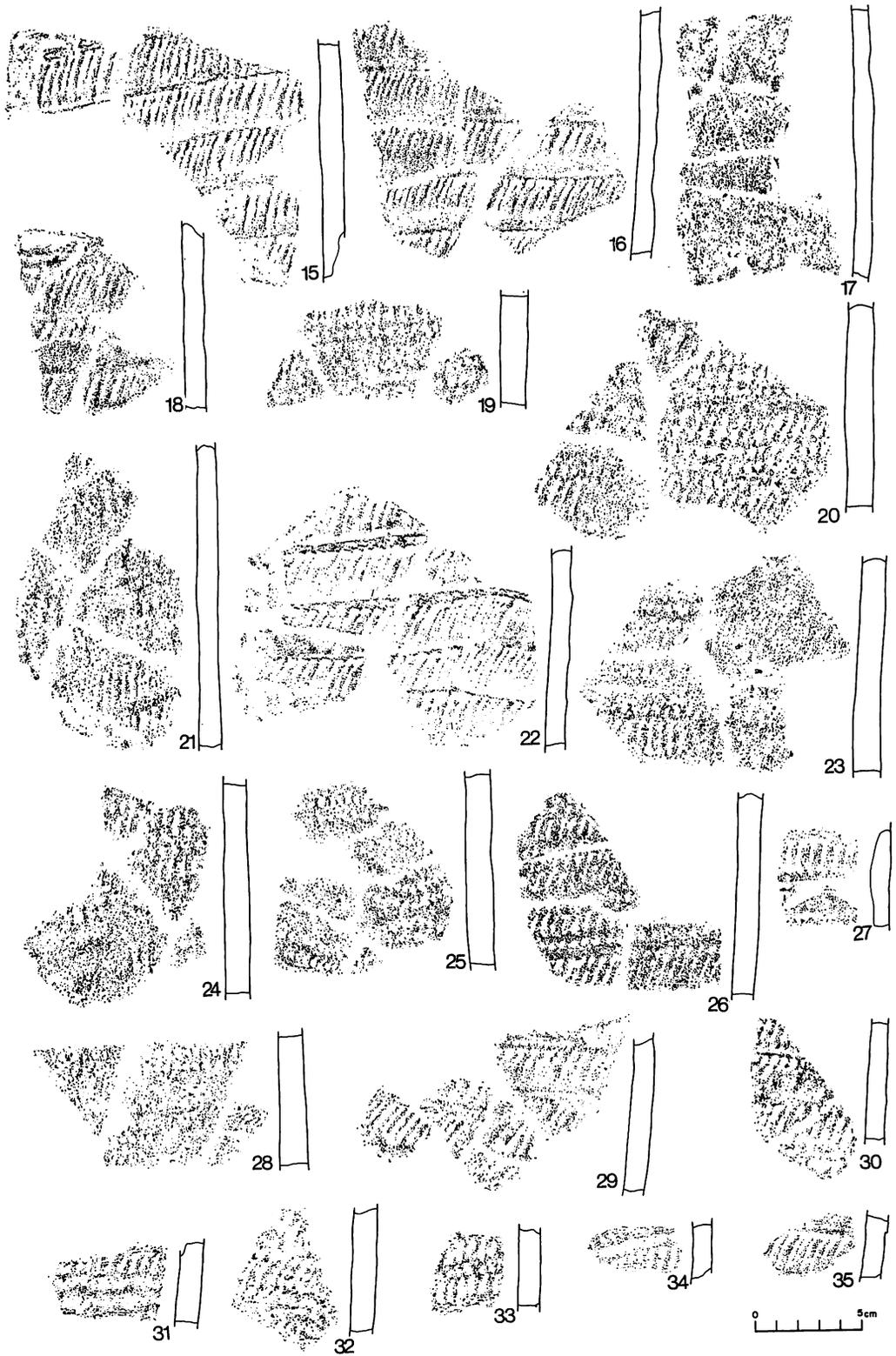
60は幅約2mm、長さ約10mmの矩形を単位とする押型文である。61～69には縄文がある。62～69は、胎土、焼成、結束羽状縄文が類似しており、同一個体かと考えられる。67・69の肥厚帯上には、絡条体圧痕文がある。

石器（図IV—8—12・13・14・15）石器の出土状態は図IV—8—8のとおりである。1～7は石鏃である。IA5と分類した茎をもつものが多い。8・9は槍先・ナイフである。11～16は、つまみ付きナイフである。III A 3と分類した二次加工が周辺に施されるものが多い。17～23は、スクレイパーである。25～29は石斧である。片岩を素材とし、打ち欠きによる整形のあと研磨によって仕上げたものが多い。30～40はたたき石である。扁平な礫の側縁や腹背をたたいたものである。41～43のすり石は、円礫状で、擦り面が曲面のものである。44は平坦面に広く擦り面が見られる石皿である。45～48は、板状の砥石に分類した。49は礫表皮を多く残す石核である。

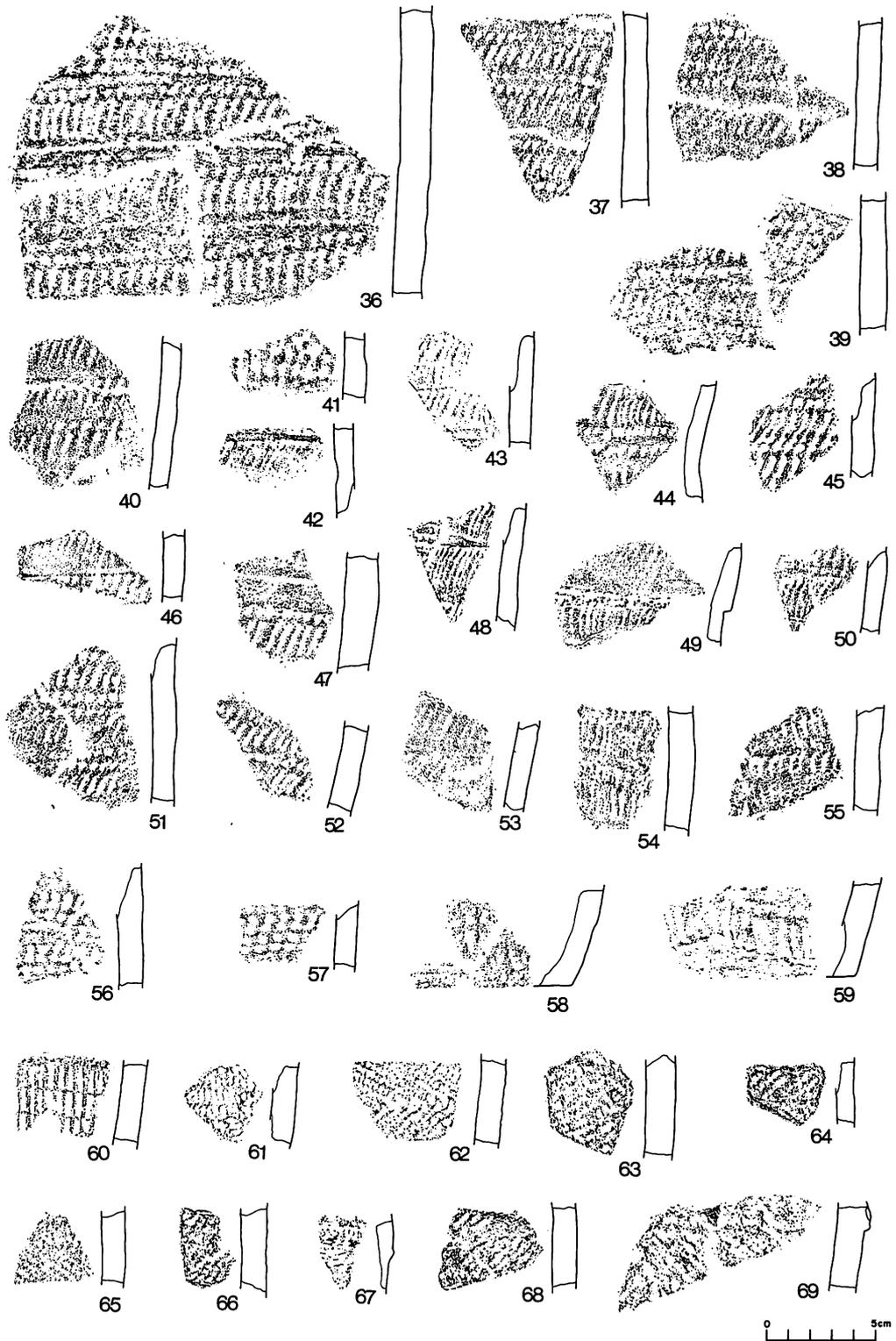
IV 遺構と遺物



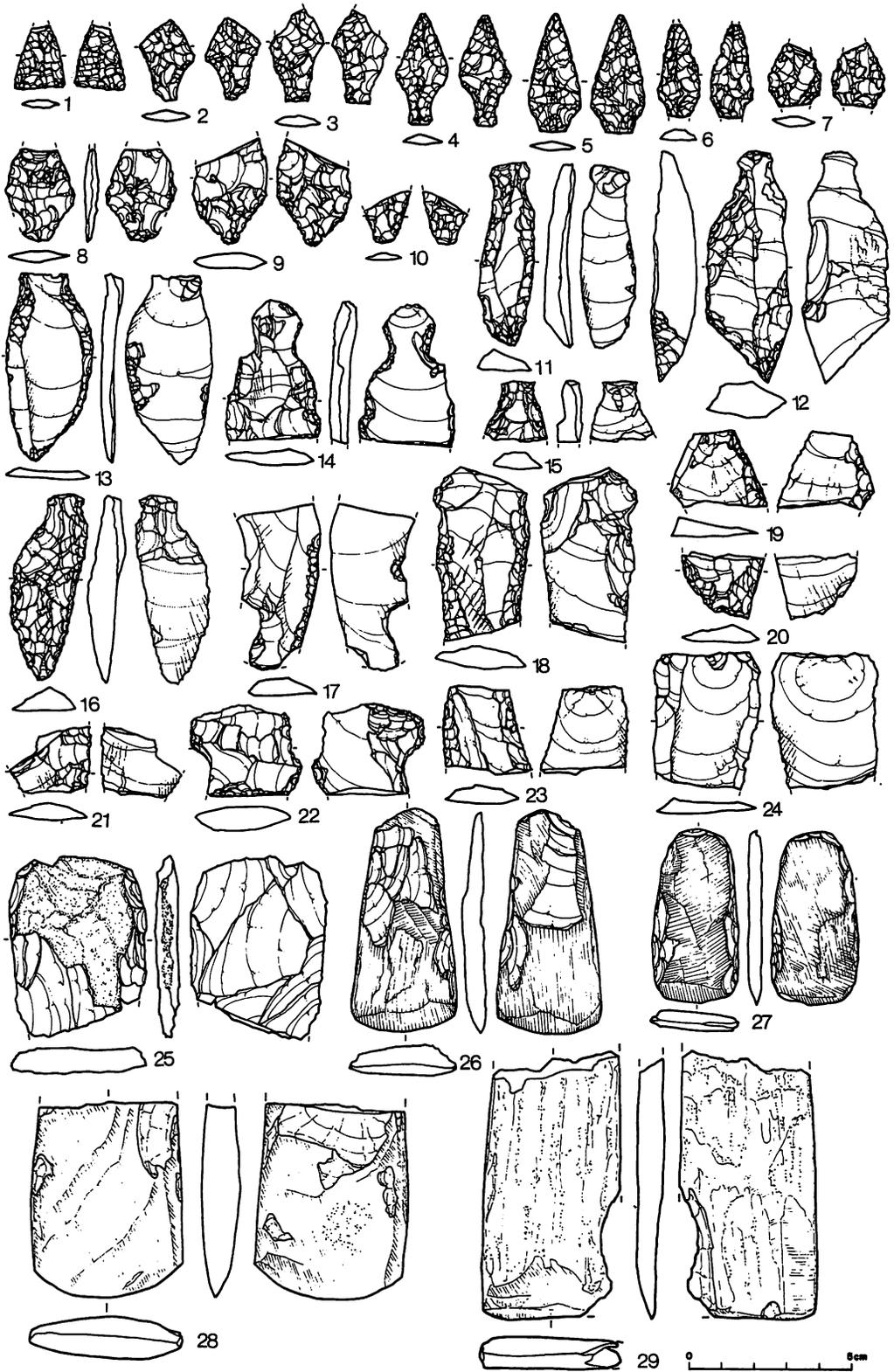
図IV-8-9 住居跡 H-9とその周辺の土器 (その1)



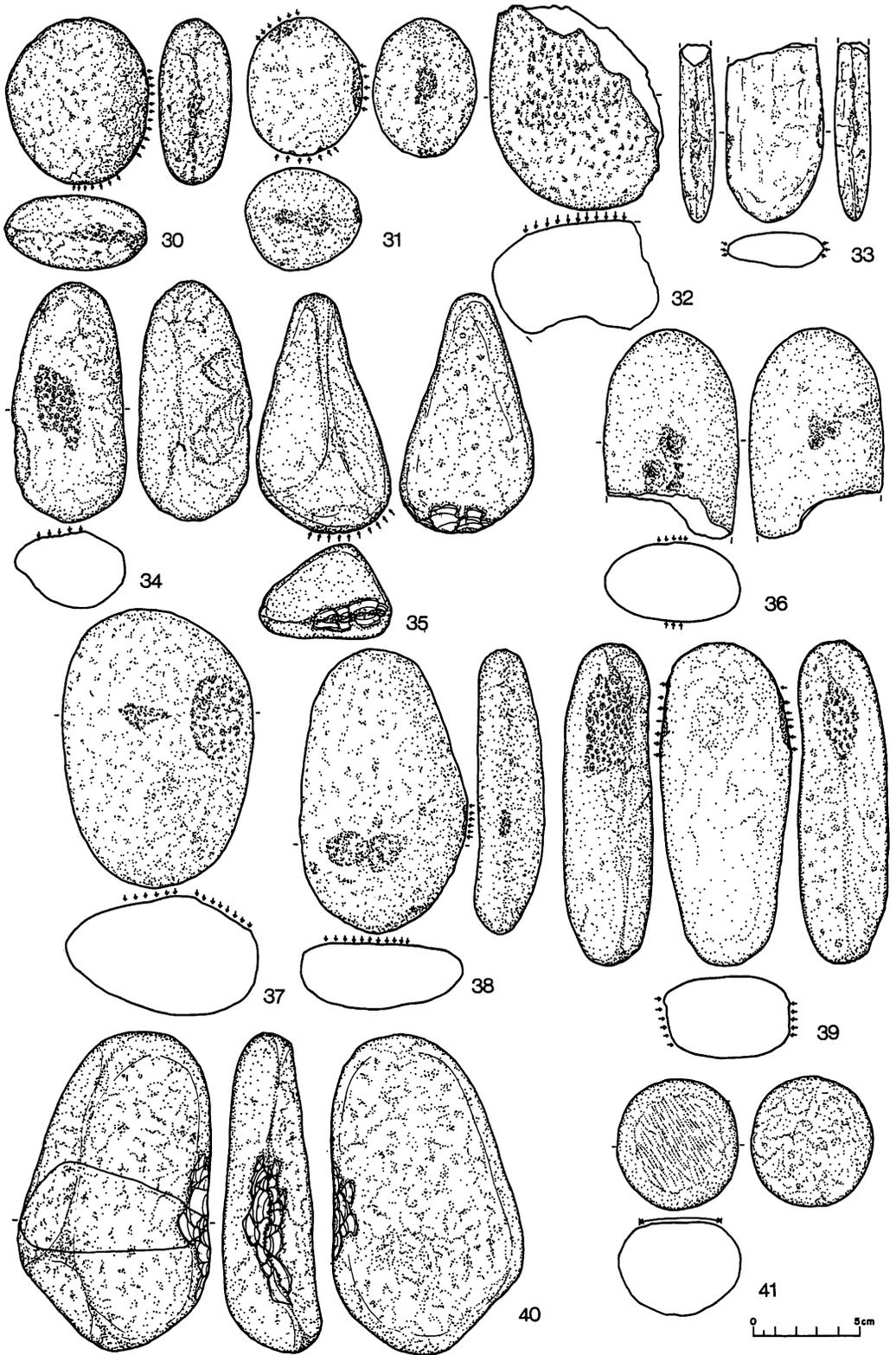
図IV-8-10 住居跡 H-9とその周辺の土器 (その2)



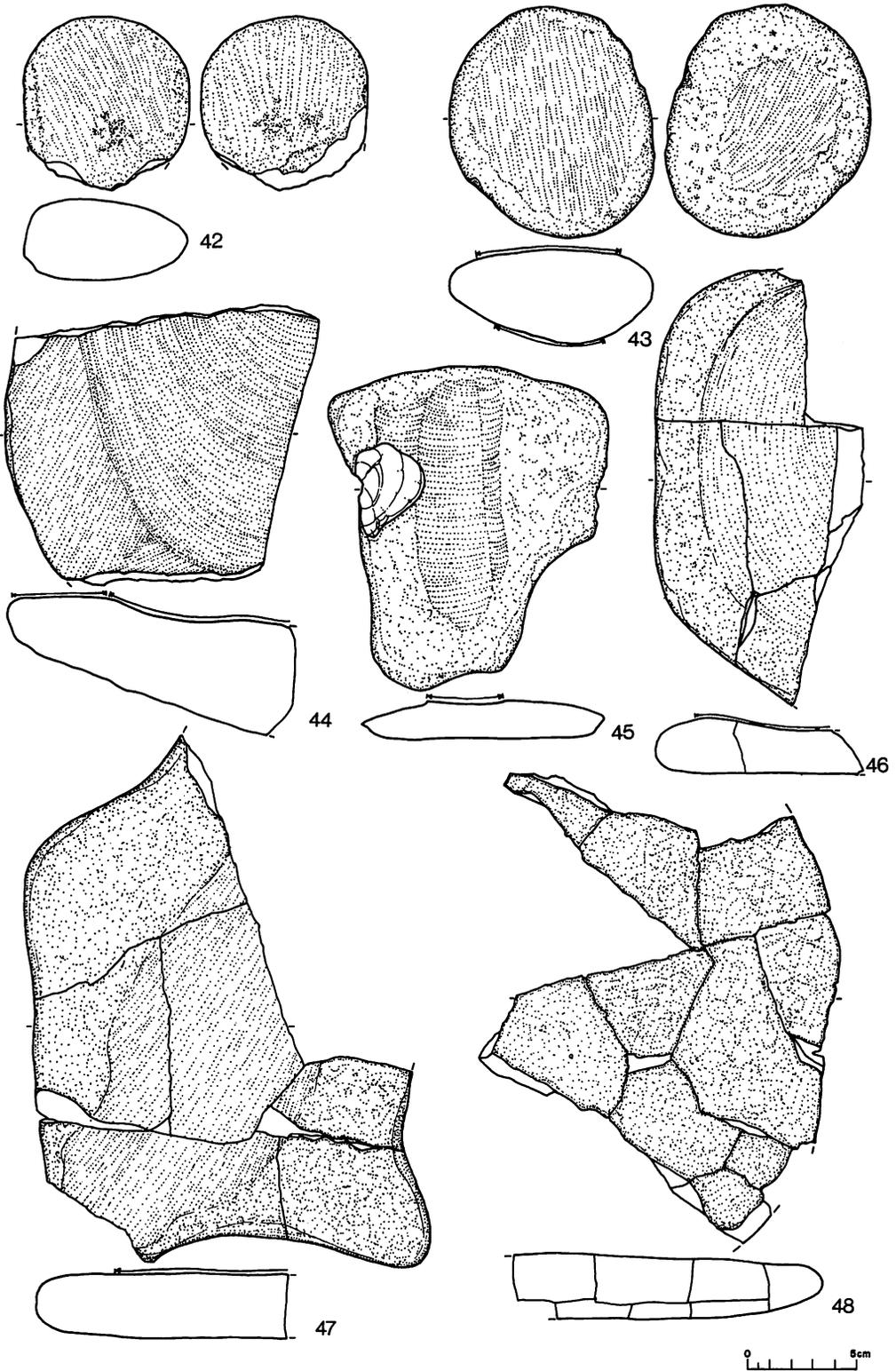
図IV-8-11 住居跡 H-9とその周辺の土器 (その3)



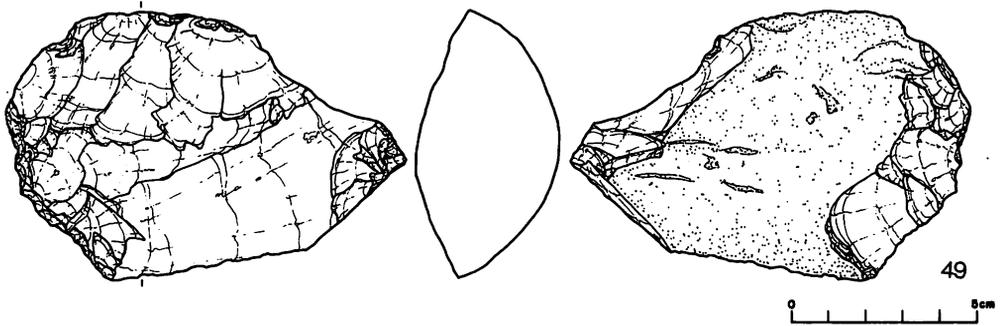
図IV-8-12 住居跡 H-9とその周辺の石器 (その1)



図IV-8-13 住居跡 H-9とその周辺の石器 (その2)



図IV-8-14 住居跡 H-9とその周辺の石器 (その3)



図IV-8-15 住居跡 H-9とその周辺の石器 (その4)

Tピット (図IV-8-19~27)

Tピットは南地区から22個、東地区北端近くから1個が検出された。東地区北端近くのTP-23は、南地区のものから北北東へ約200mほど離れたところである。すべて細長い溝状のものである。造田施工や耕作により上部削平を受けているものが多いと考えられるが、南地区のTP-1は、Ⅲ層の上半部からの掘り込みを確認できた。明確な図示はしなかったが、TP-5・9は縄文時代中期前半の押型文平底土器の出土する面よりも上位の面から掘り込まれたものとみなされる。

個々のTピットの規模・形態等は、表に示した。南地区の22個についての、立地・規模・形態・配列等は以下のとおりである。

<立地>

南地区のTピットは、石狩川の右岸段丘上、現在の流路からは直線距離で約50mほど離れた場所にある(図IV-1-1)。南の沢の南側にある微高地の北側斜面、標高66.18~66.6mである(図IV-8-18)。22個すべてが、微高地の尾根から北側斜面にかけての幅15mの範囲にある。

<規模>

今回検出したTピットは、概して小さい。壙底の長さは最大2.15m(TP-18)、最小1.1m(TP-5)で、1.5m前後のものが多い。壙底の幅は、最大0.52m(TP-3)、最小0.11m(TP-9・19)で、0.2m前後のものが多い。壙底の長幅比が5:1よりも大きな細長い形態がほとんどである。

深さ(確認最大深)は、最大1.15m(TP-17)、最小0.41m(TP-20)で、0.8m前後のものが多い。微高地の尾根近くに位置しているTP-17・18・19などは、上部削平を受けていると考えられるにもかかわらず、深いほうのグループである。浅いほうのグループは、TP-8・14・16・20・22などの0.6mよりも浅いものである。

<形態>

ここでは長軸の断面形態に注目し、以下の2点から分類した。

①：地形の傾斜方向と墳底の傾斜方向の関係

- I：地形の傾斜方向に関係なく、墳底がほぼ水平なもの
- II：地形の傾斜方向と墳底の傾斜方向が同方向のもの
- III：地形の傾斜方向と墳底の傾斜方向が逆方向のもの

②：壁の立ち上がりについて

- A：壁の立ち上がりが、ほぼ垂直か、広がるもの
- B：斜面の上方向だけがえぐられるもの
- C：斜面の下方向だけがえぐられるもの
- D：両側ともえぐられるもの

前者の分類を適用すると、Iタイプが8例、IIタイプが3例、IIIタイプが10例である。後者の分類では、Aタイプが4、Bタイプが11例、Cタイプが2例、Dタイプが4例でBタイプが、全体の過半数を占めている。①、②の組み合わせで見ると、TP-4・10・13・19に典型的に見られるようにIII Bタイプがもっとも多い。

<長軸方向>

Tピットの長軸方向は、斜面の傾斜方向に沿うものと、傾斜方向に直行するものとに分けられる。大部分は前者で長軸は南北方向であり、後者は分布の東南隅に位置するTP-14・16の2個のみである。

<配列>

立地の項でも述べたように、Tピットは尾根から北側斜面にかけての幅15m程のなかにある。これは大まかに見ると、東西方向の列としてとらえられ、さらに詳細に見ると、尾根上のもので1列、斜面のもので2列の計3列からなっている。

尾根上の列にあるTP-4・10・19・21は、断面形態がIII Bタイプであり、中間の列にあるTP-3・11・17・18は、墳底規模が大きなものである。これらは列をなすととらえたTピットの形態が類似しているものである。形態の類似で列を想定すると、I AタイプであるTP-1・6・7の列は、東西方向のものとはいくぶん交差するものになる。

<土層>

覆土は、灰色砂質土・黄色シルト質土や茶褐色から暗茶褐色の腐植土である。なかにはTP-17・21のように、灰色砂質土が鉄分の沈着によるものか、赤色化し硬化しているものも見られた。

TP-10で、長軸方向での覆土堆積状況を観察したところ、埋積土は斜面の下側の墳口から流れ込んだ様子であった(図IV-8-22)。TP-1の土器出土状況も、斜面の下側墳口から流れ込んだ様子であり(図IV-8-26)、図示はしなかったがTP-13の炭化物の出土状況も類似したものであった。このような観察結果は、石狩川の増水時における南の沢での水流が、Tピットの埋没に影響を及ぼしたことを示唆するものといえる。

<出土遺物> (図IV-8-27)

IV 遺構と遺物

TP-1の覆土から1個体分の土器が出土した。口唇部に折り返したようなタガ状の肥厚帯をもつ、推定口径20cmの口縁部である。器面には、結束羽状縄文がみられ、同一原体による縄文が肥厚帯および口唇まで施されている。胎土には多量の細砂粒を含む。内面の調整は丁寧ではないが、器形や文様から判断すると、円筒土器上層式の仲間かと考えられる。

TP-19の覆土からも、羽状縄文のある土器が出土した。TP-8の覆土からは、片岩製の石斧末製品の破片かと考えられるものが出土した。

TP-23

位置：P-43-b

規模：1.58m×1.50m/0.50m×0.33m/0.79m

平面形：楕円形

調査・確認：昭和63年度の調査で検出されたTピットはこの1個のみである。調査区北部にある沢の北側縁辺の北東部で、Ⅶ層に相当すると思われる黄褐色粘質土層上面で検出された。

壁：ピット西側の壁中位より上部が崩落している。ほかの部分は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土：上位はⅢ層と思われる黒色土で、中位から下位は暗黄褐色粘質土から成る。

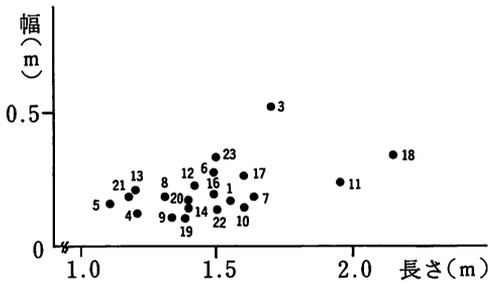
掘込み面：耕作によりピット上部が削平を受けているが、覆土からみてⅢ層と考えられる。

遺物：出土していない。

時期：覆土にⅢ層が入っていること、南地区のT-ピットと形態が類似していることから、縄文時代中期と思われる。

	調査区	規模 (m)			長軸方向	形態	遺物
		壙口(長さ×幅)	壙底(長さ×幅)	最大深			
T P-	1 I-23-a	— × 0.50	1.55 × 0.17	0.89	N-23°-E	I A	土器(40点同一個体) 石斧片 1点 石斧 1点 黒曜石、フレイク 1点 (炭化物) たたき石 1点 石斧未製品 1点 土器片 1点
	2 I-23-c	(1.83 × 0.67)	(1.76 × 0.30)	0.80	N-10°-E	—	
	3 "	2.01 × 0.75	1.70 × 0.52	0.70	N-32°-E	III C	
	4 I-22-c, I-23-b	1.25 × 0.25	1.21 × 0.13	0.84	N-10°-E	III B	
	5 J-23-d	1.25 × 0.28	1.11 × 0.17	0.70	N-32°-E	"	
	6 J-23-a-d	1.56 × 0.48	1.49 × 0.28	0.83	N-23°-E	I A	
	7 J-23-b	1.86 × 0.40	1.64 × 0.19	0.77	N-39°-E	"	
	8 J-23-b-c	1.47 × 0.29	1.31 × 0.19	0.58	N-19°-E	II A	
	9 "	1.22 × 0.33	1.33 × 0.11	0.80	N-16°-E	III B	
	10 K-22-d	1.44 × 0.26	1.60 × 0.15	0.70	N-21°-E	"	
	11 K-23-a	2.26 × 0.48	1.95 × 0.24	0.68	N-20°-E	III C	
	12 "	1.35 × 0.52	1.42 × 0.23	0.64	N-3°-E	III D	
	13 L-23-a	1.29 × 0.28	1.20 × 0.21	0.65	N-12°-W	I B	
	14 L-22-d	1.43 × 0.23	1.40 × 0.15	0.41	N-52°-W	III B	
	15 L-22-d, L-23-a	— × 0.55	— × 0.24	0.76	N-15°-E	I	
	16 K-22-c, L-22-d	1.51 × 0.40	1.49 × 0.20	0.54	N-65°-W	I B	
	17 J-23-a	1.62 × 0.94	1.60 × 0.27	1.15	N-7°-E	I D	
	18 K-22-c, K-23-b	2.00 × 0.60	2.15 × 0.34	1.02	N-10°-E	II B	
	19 J-22-d, J-23-a	1.39 × 0.65	1.39 × 0.11	0.93	N-22°-E	III B	
	20 K-23-b-c	1.42 × 0.26	1.40 × 0.17	0.41	N-10°-E	II B	
	21 J-22-c	1.27 × 0.45	1.18 × 0.19	0.75	N-7°-E	III B	
	22 K-23-b	1.43 × 0.45	1.50 × 0.14	0.46	N-27°-E	I D	
	23 P-43-b	1.58 × 0.50	1.50 × 0.33	0.79	N-5°-W	I D	

規模

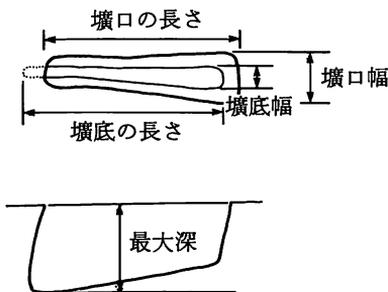


形態

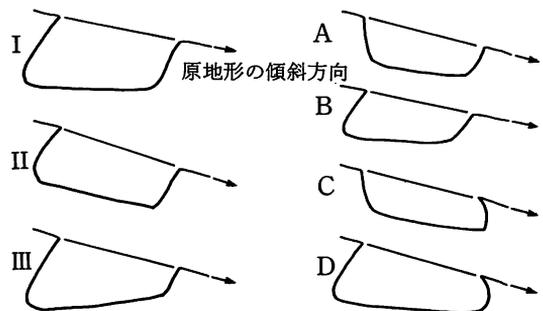
	A	B	C	D	
I	3	2		3	8
II	1	2			3
III		7	2	1	10
	4	11	2	4	

図IV-8-16 Tピットの規模グラフ

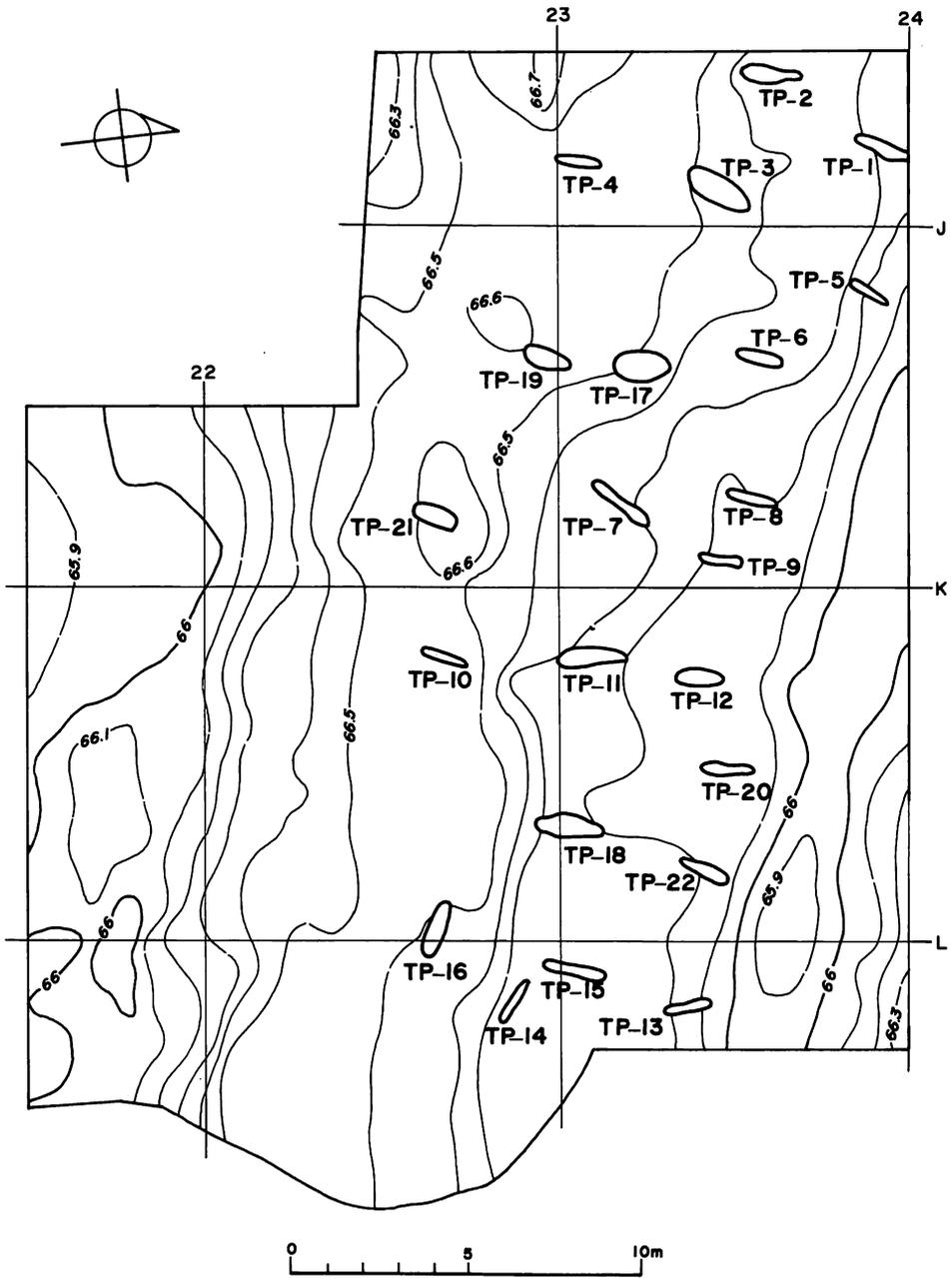
模式図



形態模式図

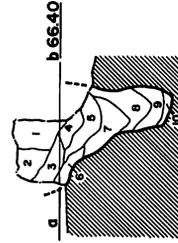
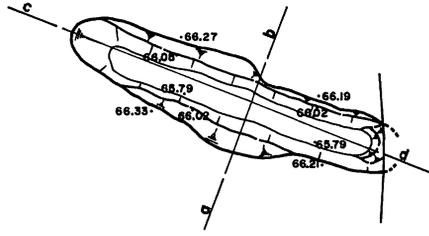


図IV-8-17 Tピットの形態模式図

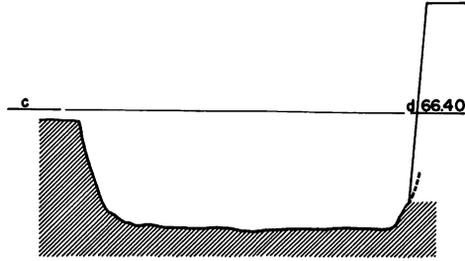


図IV-8-18 Tピットの位置 (南地区)

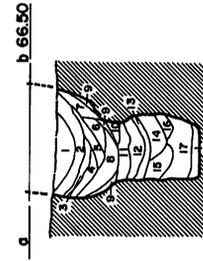
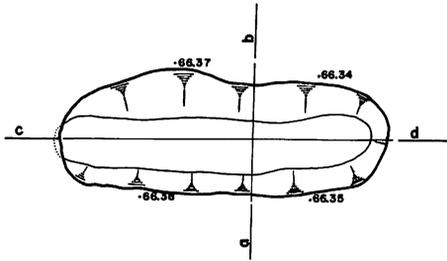
TP-1



- 層位
1. 黒色土(堅く、しまる)
 2. 茶褐色土
 3. 灰白色土(砂質)
 4. = 2
 - 5, 6, 7. 茶褐色土(黒色腐植土が随々多くなる)
 8. 暗茶褐色土
 9. 黄色土(粘質)
 10. = 8



TP-2

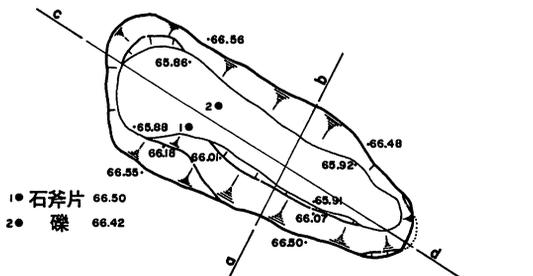


- 層位
1. 暗茶褐色土(砂質土が多く入る)
 2. 腐植化の進んでいる暗茶褐色土
 3. 茶褐色土(砂質)
 4. 腐植化の強い暗茶褐色土
 5. = 3
 6. 腐植化の強い黒色土
 7. 茶褐色土
 8. 暗茶褐色土
 9. 黄色土(粘質)
 10. 青灰色土(砂質)
 11. 粘質土と砂質土が同量に混合する褐色土
 12. 暗茶褐色土(砂質)
 13. 茶褐色土(粘質)
 14. = 12
 15. = 9
 16. やや異味をもつ黄色土(粘質)
 17. 暗青灰色土(砂質、ロームブロックが若干入る)
 18. 墳底にたまる暗茶褐色土(粘質)

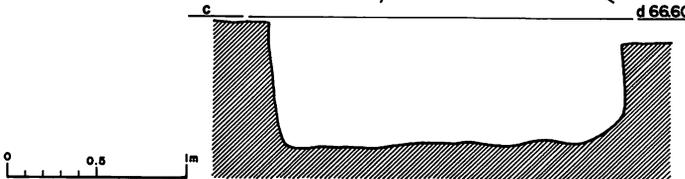


TP-3

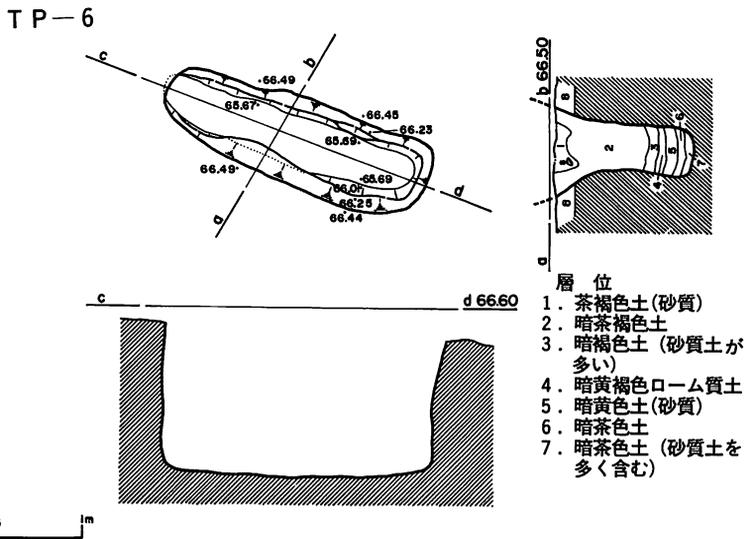
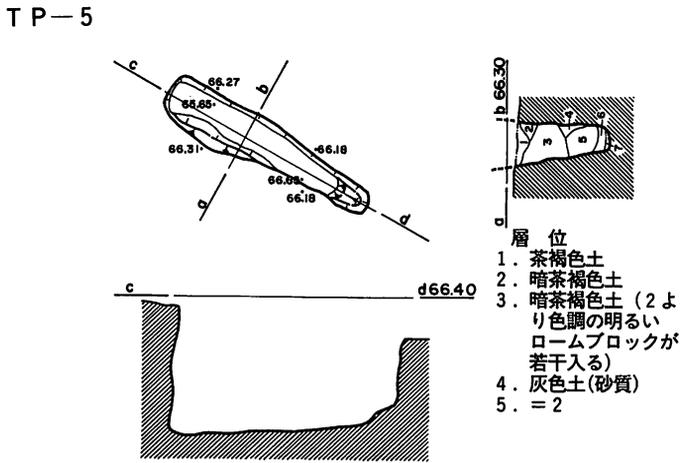
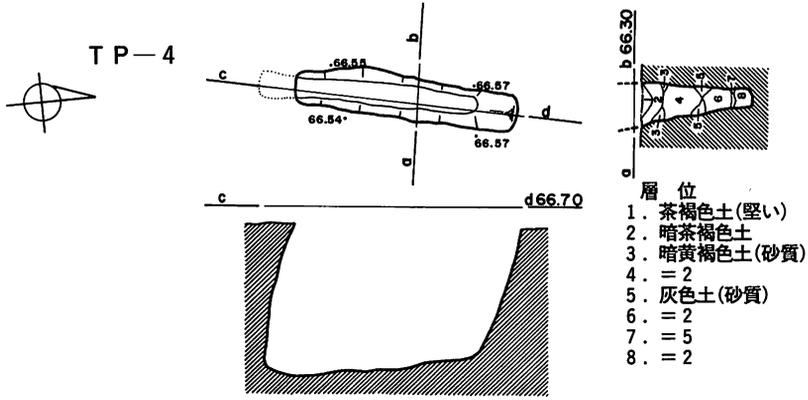
- 層位
1. 褐色土(腐植土が多く、砂質土を若干含む)
 2. 明茶褐色土(4, 7に近いが、腐植土が多い)
 3. = 1
 4. 灰色土(砂質、茶褐色土の腐植土が少量混入する)
 5. 暗茶褐色土(腐植土と砂質土の混合して、腐植土が多い)
 6. 灰色土(砂質)
 7. = 4



- 層位
8. 暗茶褐色土で1~5の中間
 9. = 6
 10. 黄褐色ローム質土
 11. = 8
 12. 暗青灰色土(砂質)
 13. 明茶褐色土
 14. 黄褐色ローム質土(若干砂質土を含む)
 15. = 4
 16. = 6
 17. = 12
 18. 墳底にたまる褐色の腐植土を主体とする暗茶褐色土(粘質)

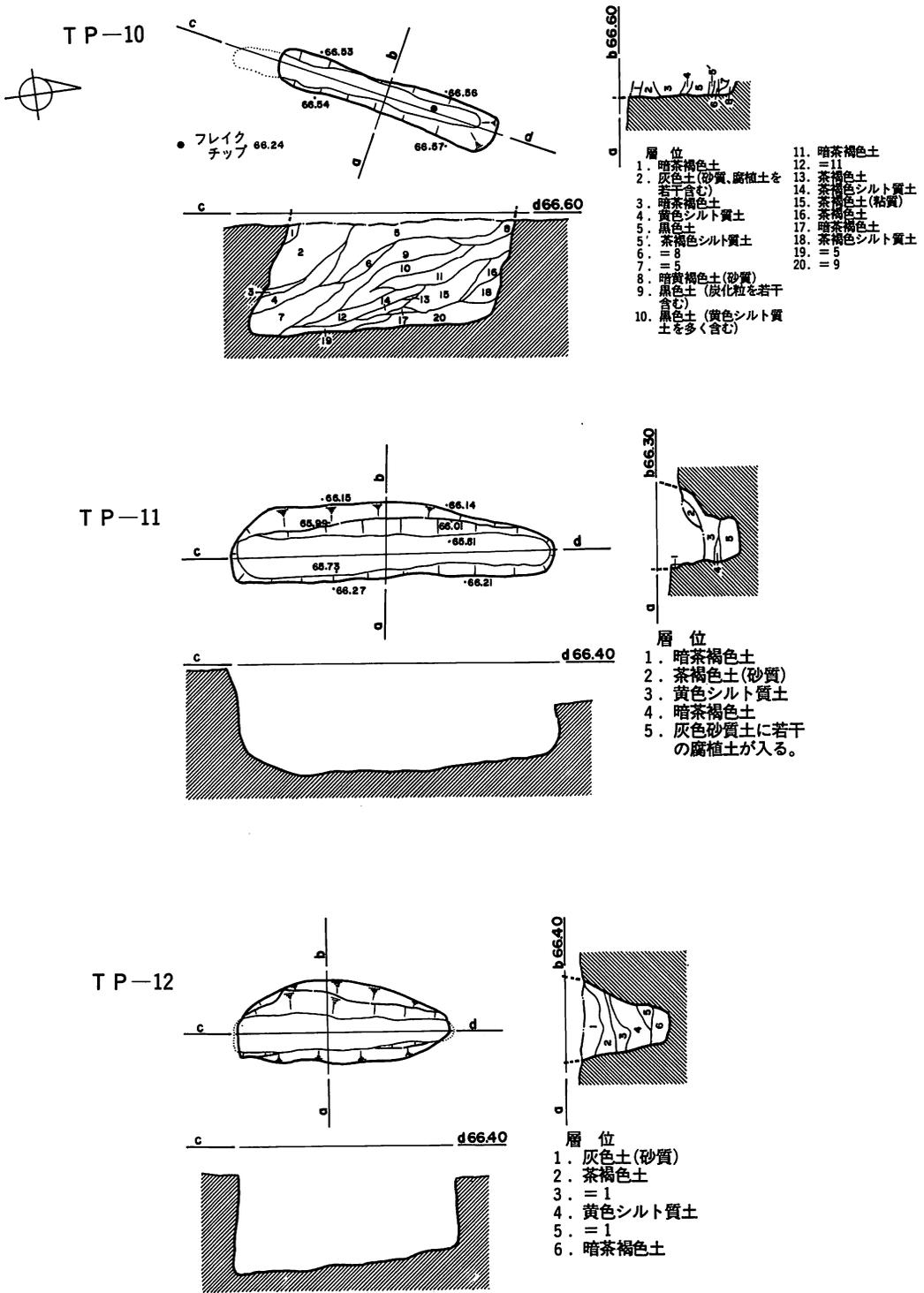


図IV-8-19 TP-1・2・3



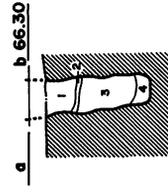
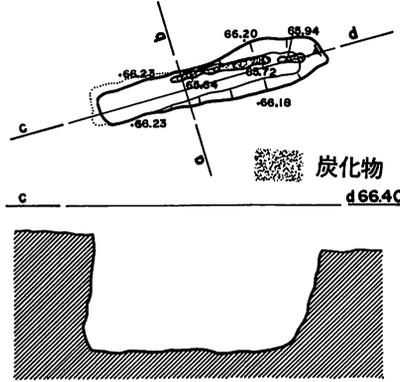
図IV-8-20 TP-4・5・6

IV 遺構と遺物



図IV-8-22 TP-10・11・12

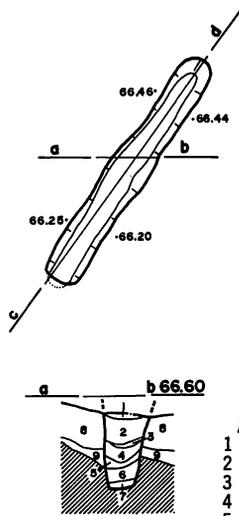
TP-13



層位

1. 茶褐色土 (炭化粒を若干含む、シルト質土が多く入る)
2. 黒色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗茶褐色土 (3よりやや色調が暗い、炭化物を多く含む)

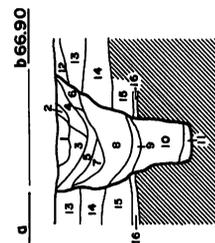
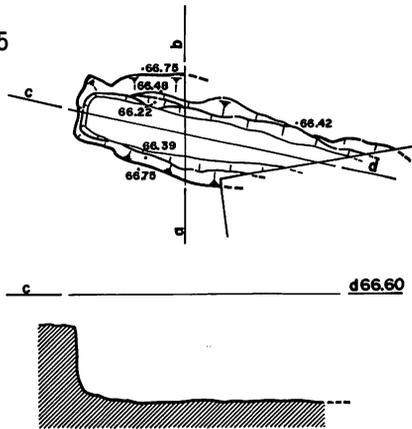
TP-14



層位

1. 暗茶褐色土 (砂質)
2. 灰色土 (砂質、黒色腐植土を含む)
3. 黄色シルト質土
4. 黒色土
5. = 3
6. 灰色土 (砂質)
7. 黒味を帯びた灰色土 (砂質)

TP-15



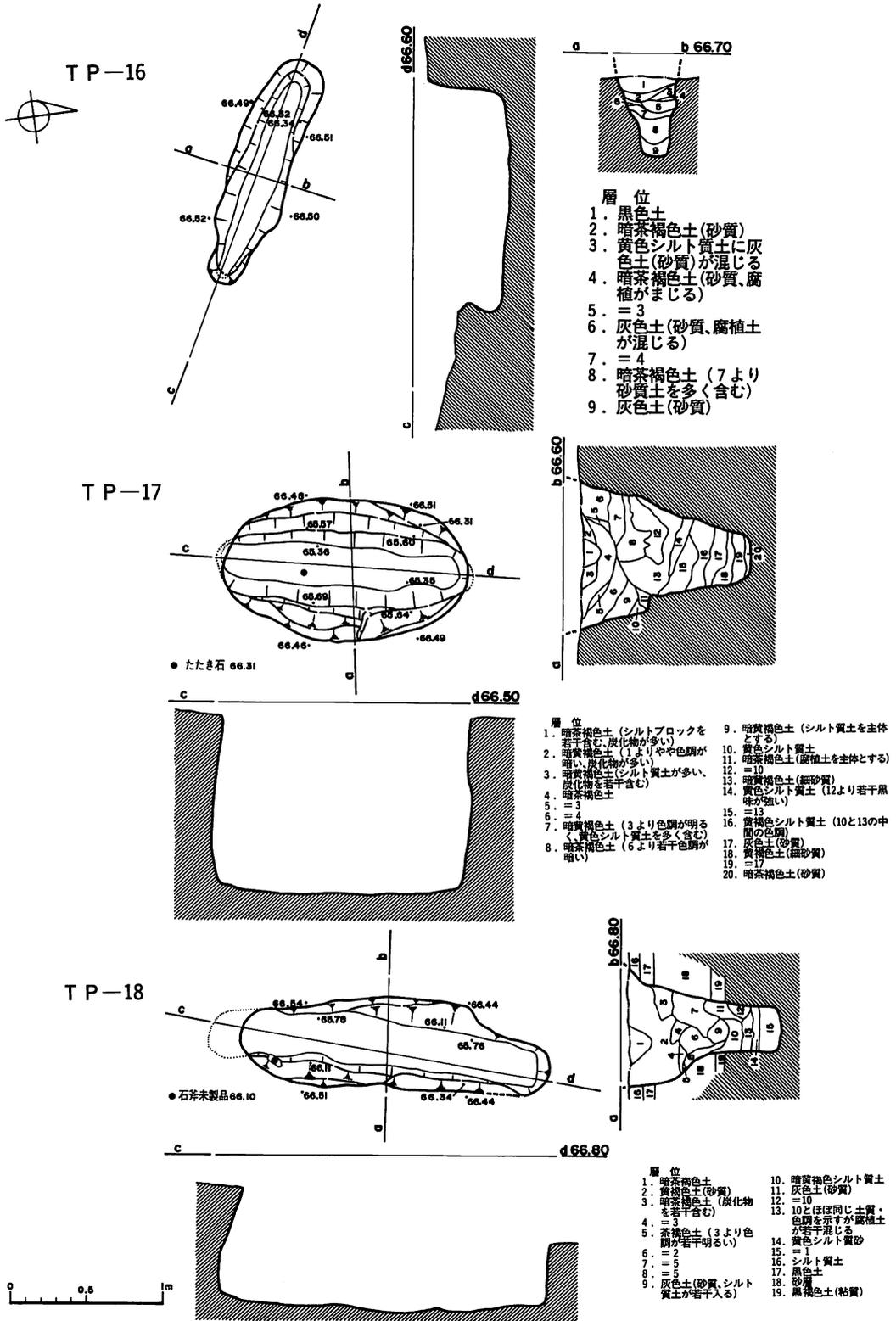
層位

1. 暗茶褐色土
2. 黄褐色土 (砂質)
3. 暗黄褐色土 (砂質)
4. 黒色土 (腐植土、黄色シルト質土が若干入る)
5. 茶褐色土 (炭化粒が若干入る)
6. = 4
7. = 3
8. = 5 (5より腐植土が多く入る)
9. = 2
10. = 1
11. 褐色シルト質土
12. 黒色土
13. 茶褐色土
14. 茶褐色土 (砂質)
15. 暗茶褐色土
16. 黒褐色土 (粘質)

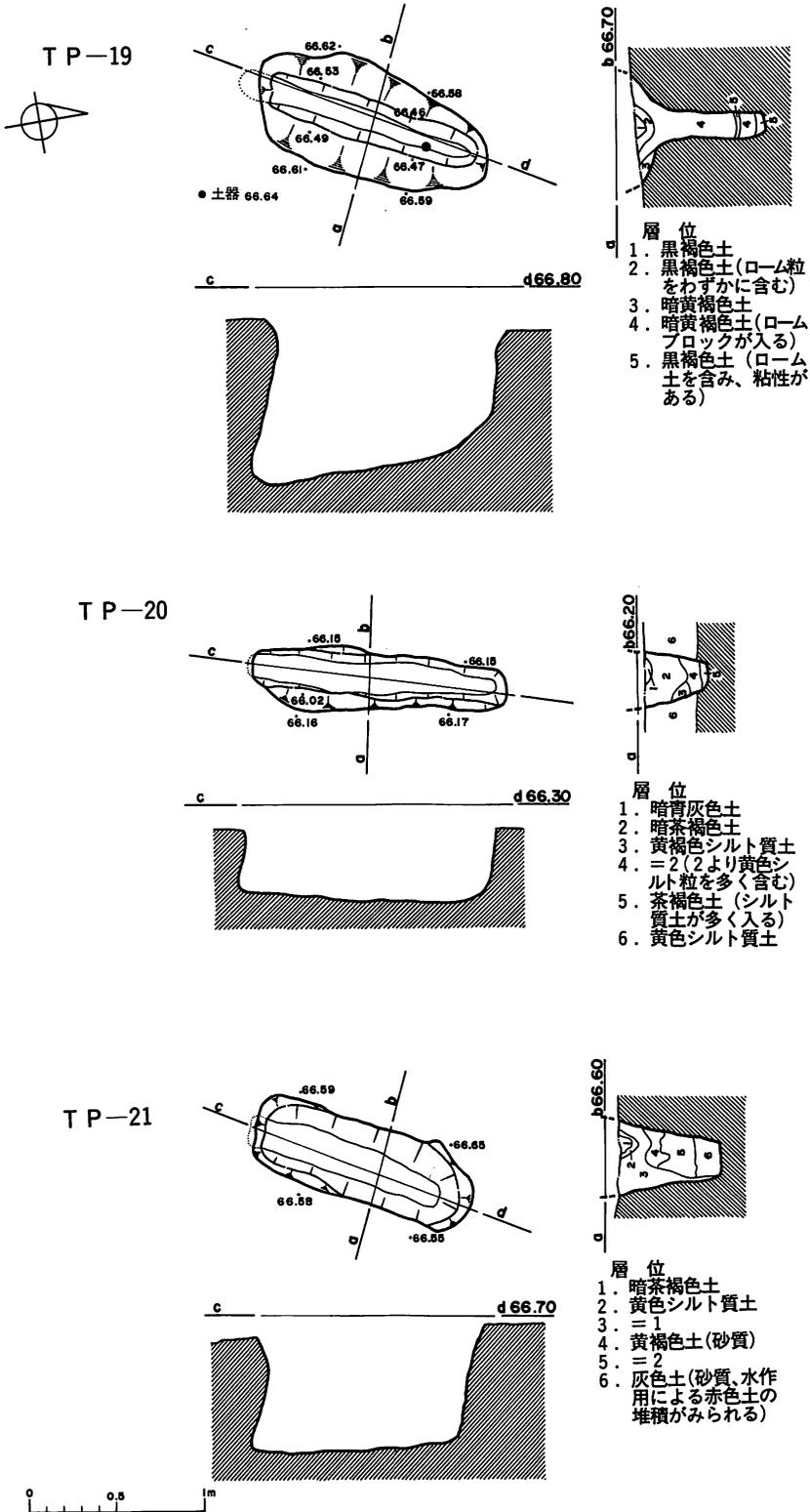


図IV-8-23 TP-13・14・15

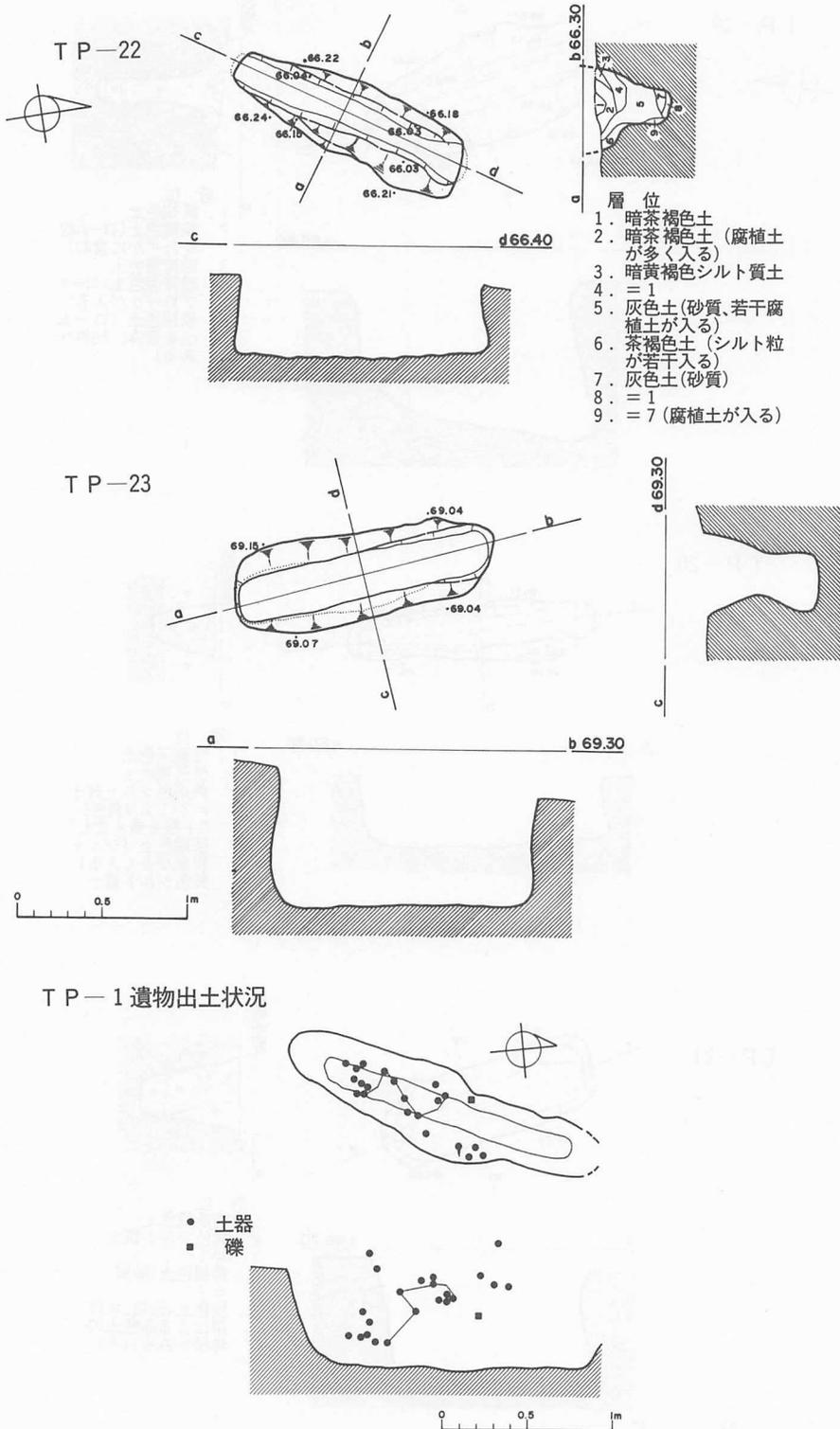
IV 遺構と遺物



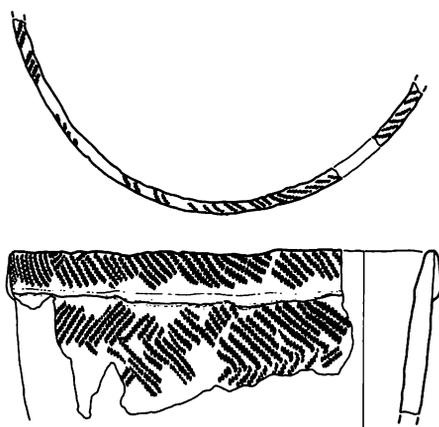
図IV-8-24 TP-16・17・18



図IV-8-25 TP-19・20・21

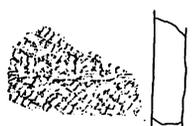


図IV-8-26 TP-22・23とTP-1遺物出土状況

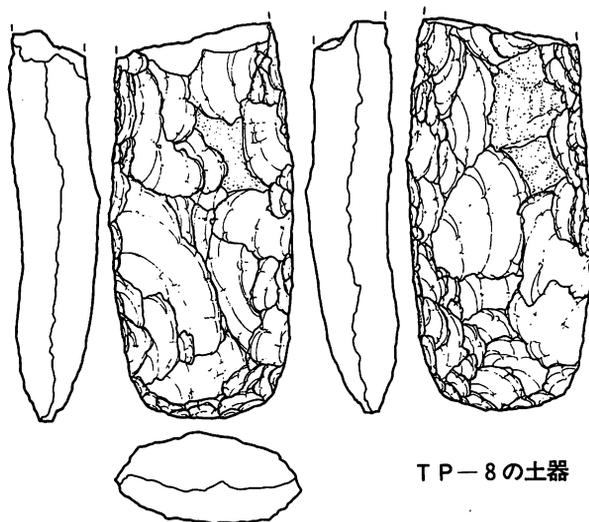


0 5 10cm

TP-1の土器



TP-19の土器

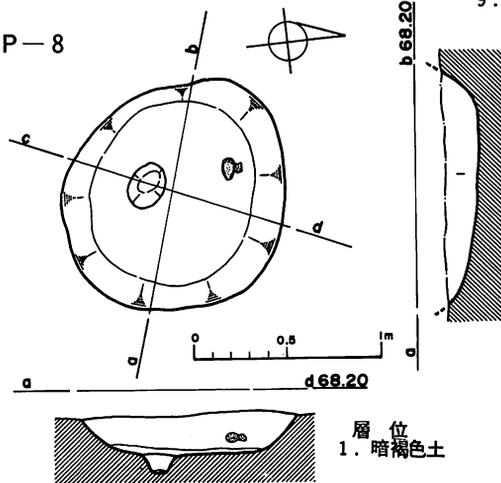
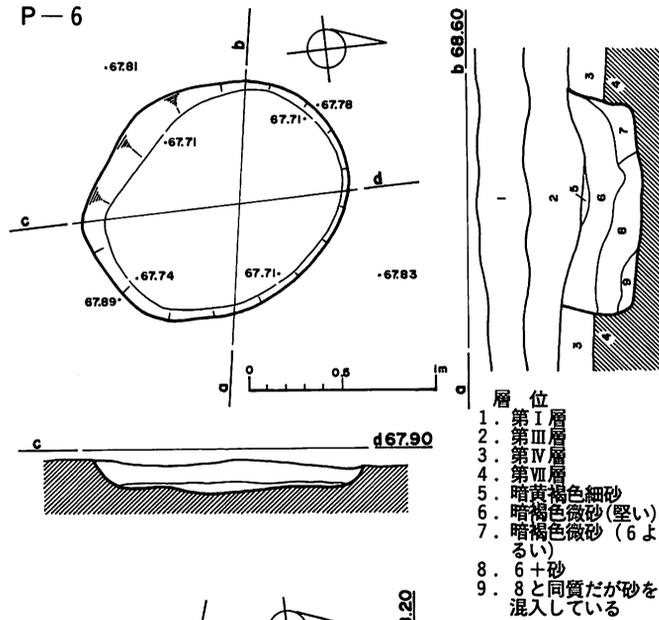
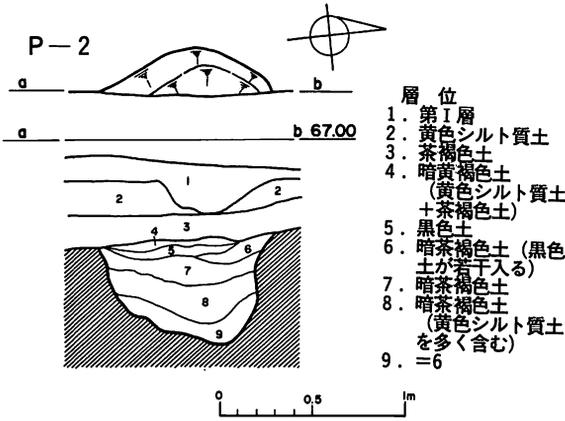


TP-8の土器

0 5 10cm

図IV-8-27 Tピットの出土遺物

IV 遺構と遺物



図IV-8-28 土壌 P-2・6・8

P-2

位置：L-23-d

規模・平面形：不明

南地区の東壁の土層観察中、黒色土から茶褐色土の落ち込みとして確認された。調査区内では、この土壌の一部が第V層上面で確認し得たのみである。覆土は暗茶褐色土が主体で、黒色土の腐植土と黄色シルトの混合具合いで分層した。掘り込み面は第III層中上位の腐植化のかなり進んだ暗茶褐色土層である。遺物は出土していない。時期・用途・性格などは不明である。

P-6

位置：H-31-d、H-32-a

規模：(1.40 m) × (1.22 m) / 1.30 m × 1.0 m 深さ 0.32 m

平面形：長円形

第IV層上面で検出する。坑底は第VII層を掘り込んでつくられており、平坦で堅い。壁はほぼ垂直に立ちあがっている。覆土は砂質土で、自然堆積状のものである。掘り込み面はIV層上面である。遺物は出土せず、時期・用途・性格は不明である。

P-8

位置：P-39-a

規模：(1.32 m) × (1.15

m)／1.0 m×0.88 深さ 0.19 m

平面形：長円形

第Ⅳ層上面で検出する。覆土は暗褐色土であり、Ⅲ層からの掘り込みである。墳底はⅦ層まで達しており、平坦である。中央やや西よりに小ピットがあるがP-8との先後関係は、あきらかでない。人為的な掘りこみと考えられるが、礫2点が出土したのみで、時期・用途・性格は不明である。

焼 土

Ⅲ層の焼土は、調査区北西部のJ-41グリッドから1か所確認され、焼土中から遺物は検出されていない。

時期は、焼土の確認された層から縄文時代前期と中期の遺物が出土していることから見て、これらの時期と思われるが、特定できなかった。

遺物集中7

位置：L-28-a・b・c・d

規模：遺物の広がり南北、東西とも4mで垂直分布は80cmの厚さがある。

遺物出土状態：総遺物点数は500点で、その内訳は土器213点、剥片石器5点、礫石器34点、フレイク・チップ23点、礫225点である。垂直分布をみると中央部が厚い。

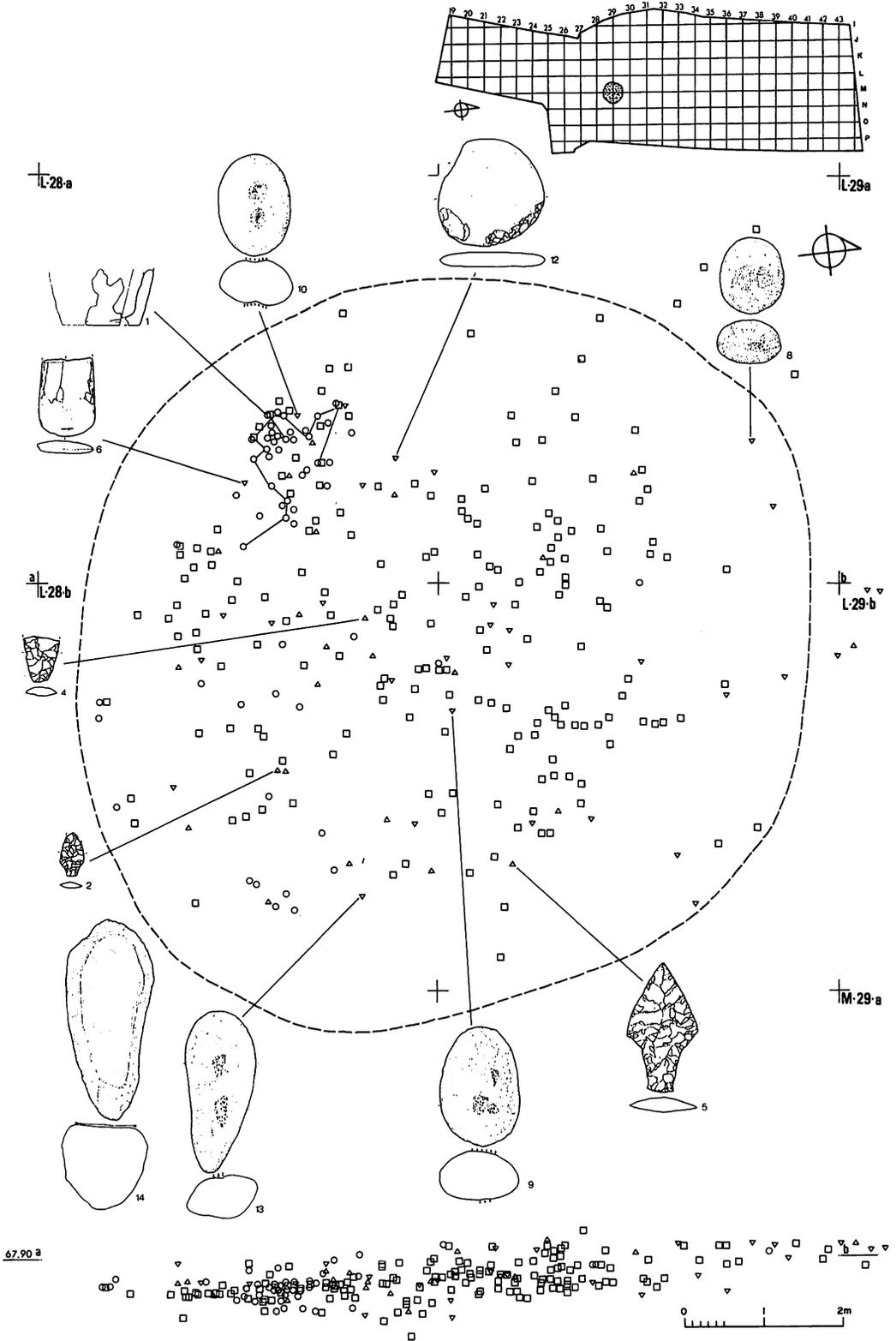
接合：砥石にH-9周辺から出土した遺物と接合するものがある(図Ⅳ-8-14・17)。

遺物(土器)：1は無文の底部破片。胎土には砂粒が含まれる。Ⅲa1類土器。

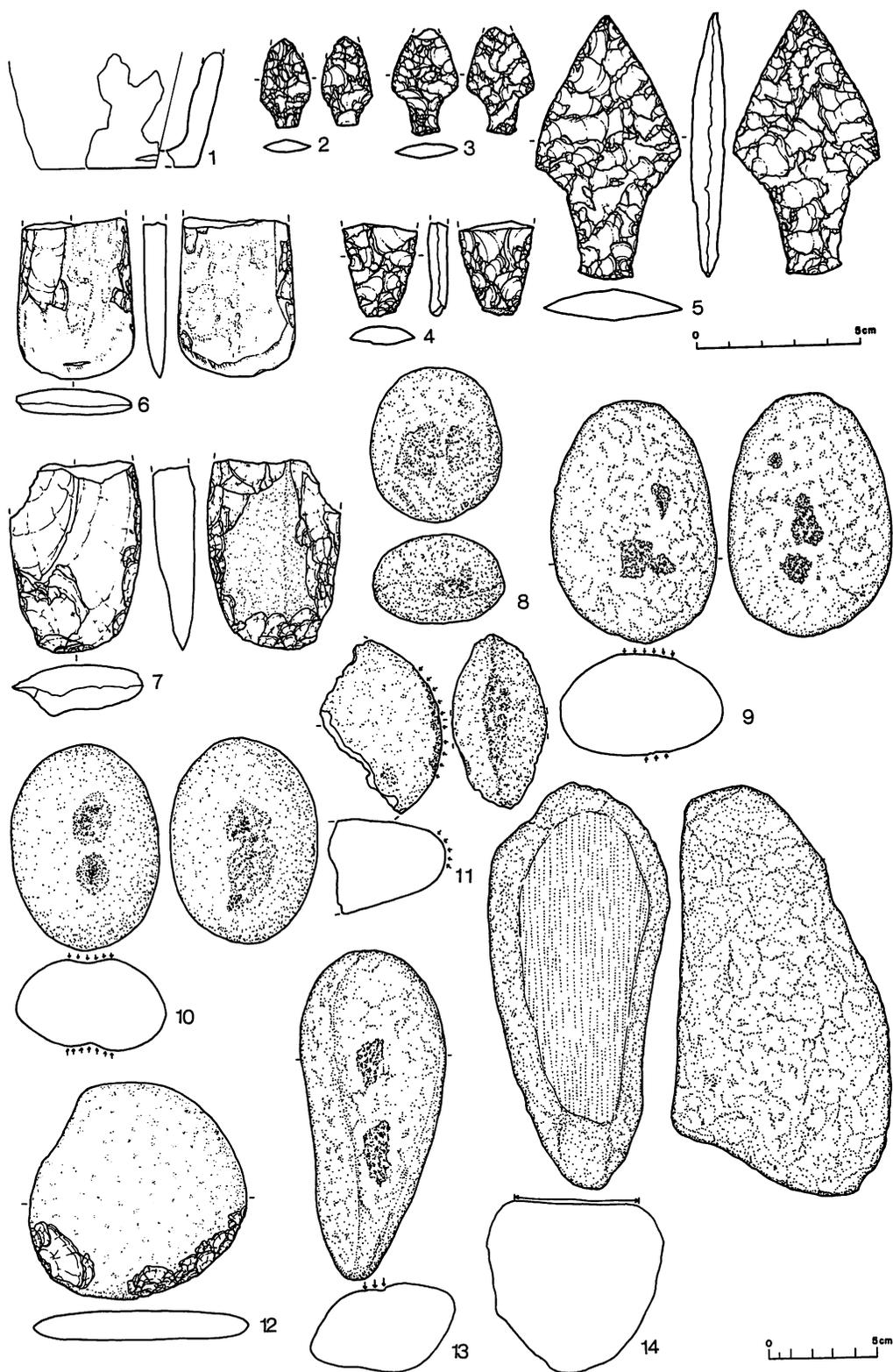
(石器)：2、3は有茎の石鏃。4、5は槍先・ナイフ。3、5は基端部側縁が小さく突出している。6、7は石斧。8～13はたたき石。このうち10、13はくぼみ石と称されるものである。14は砥石。石質は2～4が黒曜石、5、6が片岩、8～14が安山岩である。

時期：縄文時代中期(Ⅲa1類)と考えられる。

IV 遺構と遺物



図IV—8—29 遺物集中7の分布



図IV-8-30 遺物集中7の土器・石器

包含層の土器 (図IV—8—31・32・33)

1~35 は、北の沢から出土した縄文時代早期後半の東釧路IV式土器である。これらの土器の出土層位がII層~V層と明記してあるにもかかわらず、ここに図示したのは、すでに述べたように、遺物取り上げの後、土層区分の解釈に変更が生じたことと、明らかに同一個体であるものが別々の層位にあったことが判明したことによる。

1~9 は、直立する口縁部である。1・2・4・5・6・8・9には口唇にも縄の圧痕がある。1は縄端圧痕文と撚糸文である。2・6は同一個体で、縄端圧痕文と、撚りの異なる二本の縄を軸に巻いて回転した文様とがある。これと同じである撚りの異なる二本の縄を軸に巻いて回転したものは3のほかにも多くある(10・11・12・13・15・17・18・19・21・22・25・29)。これらとは異なり、同じ撚りの縄を軸に巻いて回転した文様のものは、同一個体である7・8・9のほか4・5・14・16・24・30・31・32・33・34である。

20・23は同一個体で、自縄自巻の原体かと考えられる文様である。26は2段RLの縄線文の上下に、同じ撚りの縄を軸に巻いて回転した文様がある。27は1とほぼ同じ撚糸文である。28は縄端による刺突連点である。35は20・23と類似した文様である。

36~73は、中の沢と南の沢との間にあった押型文土器、押し引き文土器、縄文土器などである。36は底径14cmの矢羽根状押型文土器で、矢羽根の幅は4cmである。42はこれと同一個体かと考えられる矢羽根状押型文である。

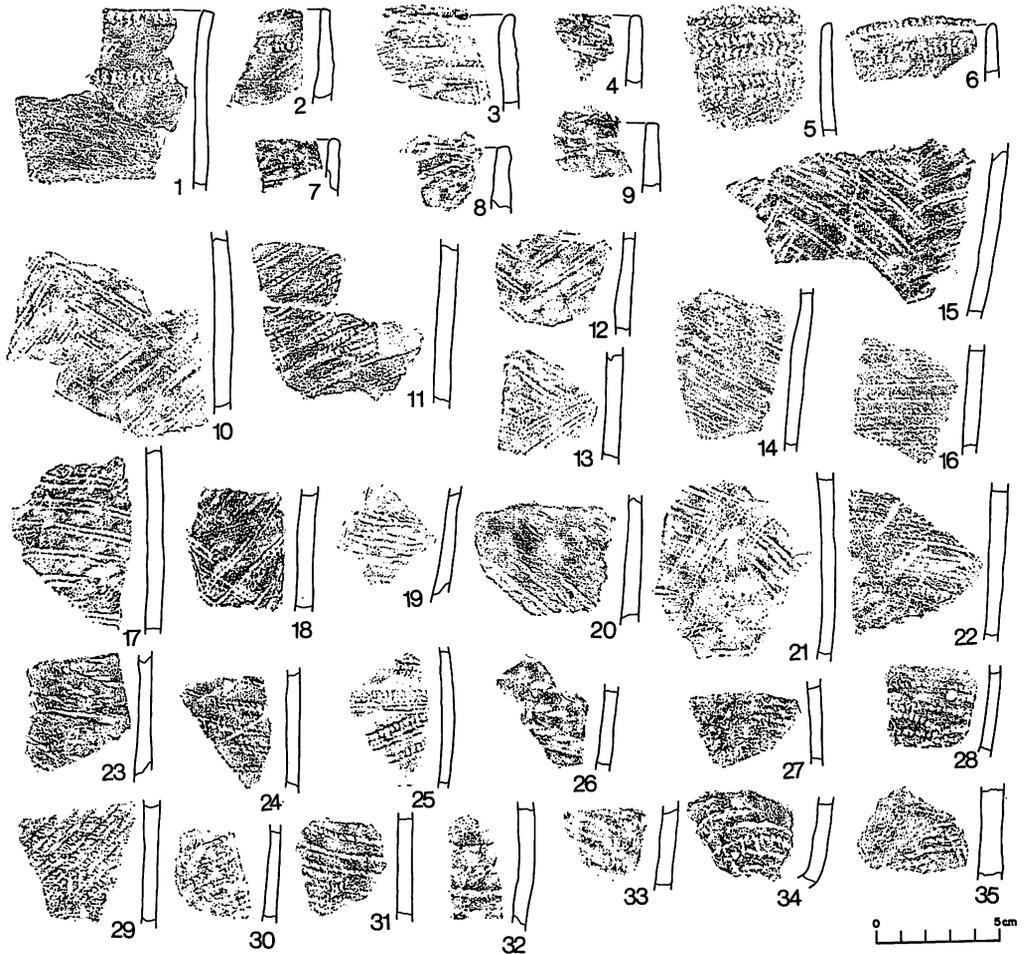
37~41、43~47は押し引き文である。押し引きはその幅の広狭、押し深浅により、それぞれに特色のある文様になっている。47は平底と見なせる底部で、幅約15mmの押し引き文がある。48は平底の底部である。

49~64、66、71~73は縄文のあるもの。50は肥厚した平たい口唇にも縄文がある。52~55には絡条体圧痕文がある。55の絡条体圧痕文は、円く輪をなしており馬蹄形圧痕様になっている。結束羽状縄文と絡条体圧痕文から判断すると、これらの縄文土器は、縄文時代中期前半の円筒土器上層式に相当する。

74~104は北の沢周辺から出土したものである。74は、沢のなかから出土した山形の突起をもつ無文土器である。口唇直下に幅5mm前後の凹線が巡っている。器形、文様などがこれに類似する土器は見当たらないが、出土した土層から判断して縄文時代前期のものと考えられる。75は緩い網目状撚糸文、76は撚り戻したかのような緩い斜行縄文である。

77~83は胎土に繊維を含む縄文尖底土器の同一個体である。77は口縁部、そのほかは斜行縄文の胴部である。表面が艶やかでなめらかなのは、多くの滑石を含むからであろう。

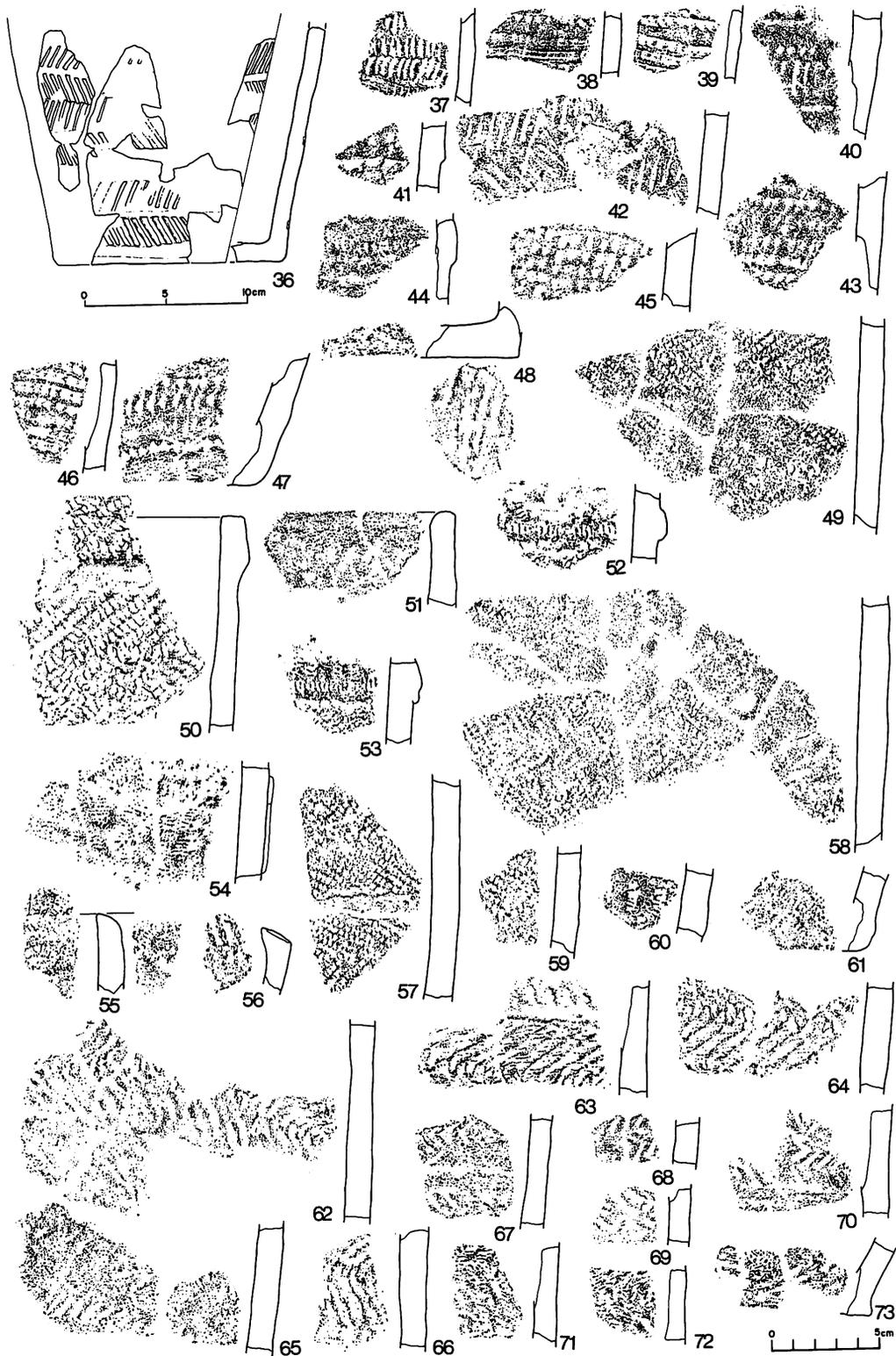
84~88は、口縁部に押し引き文がある。この押し引き文と外側からの刺突孔とをあわせると、北筒式土器に含められる。89には2種の押し引き文がある。91~96は斜行縄文であり、このうち91・95には押し引き文がある。97は羽状縄文である。99~104は、76と同じような緩い斜行縄文がある。101~104は表面が艶やかでなめらかである。104は胎土に繊維を含む、いくぶん上がりぎみの平底である。底部は外側に張り出し、内側には円形の高まりがある。



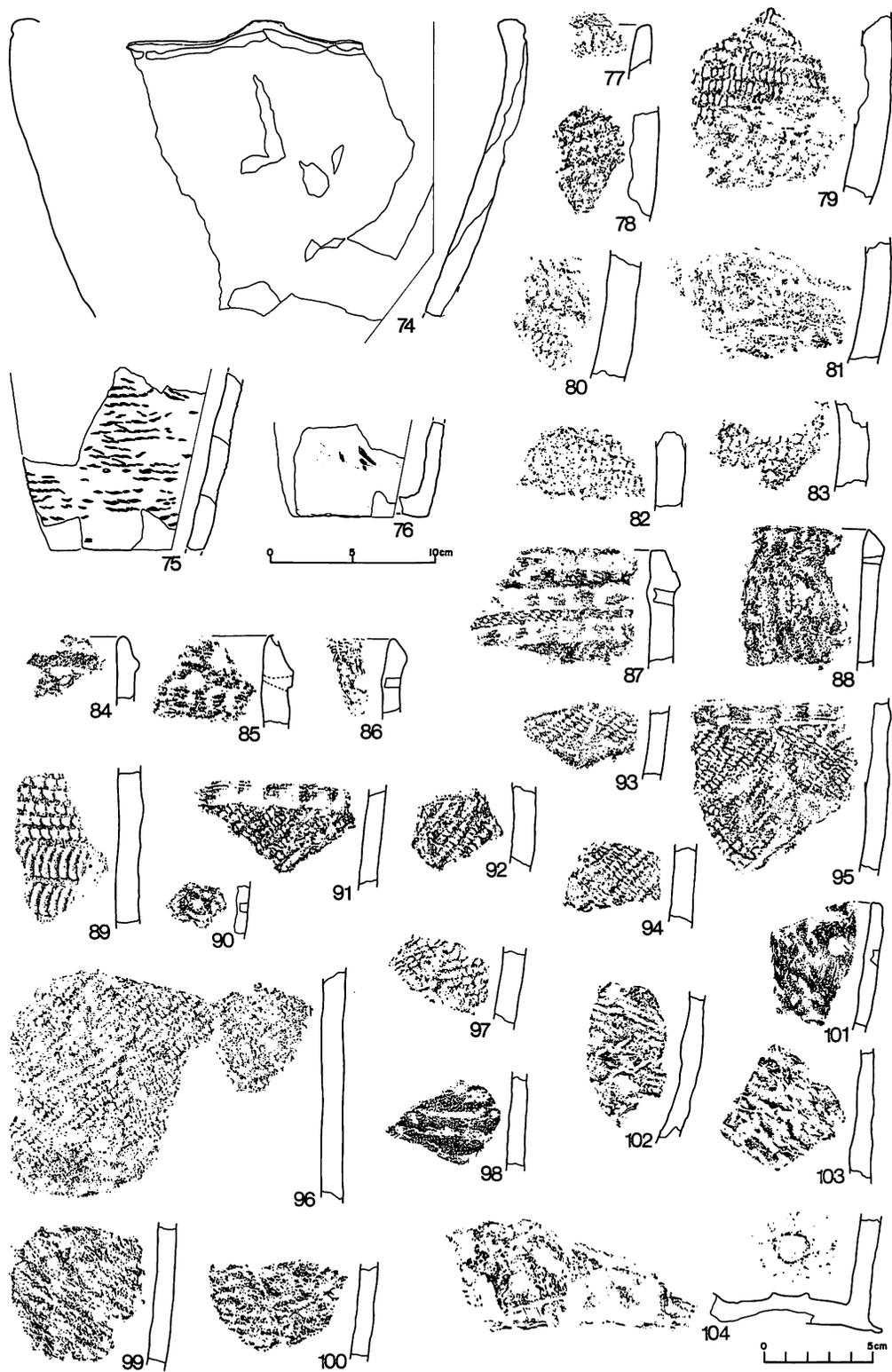
図IV—8—31 III層・IV層 包含層の土器（その1）

包含層の石器(図IV—8—34・35)：1～10は石鏃である。18は全面磨製の石斧である。20～23のたたき石は、円礫を使ったものである。24・25は、断面が三角形になる擦り石である。26は扁平な円礫をたたき石や擦り石に使ったものである。28は全体的に整形された石皿である。29は蛇紋岩の薄片を全体的に研磨したものである。

I—42—b区(北の沢の中、III層)で出土した木炭のC₁₄年代測定値は4620±40 BP (KSU—1844)である。

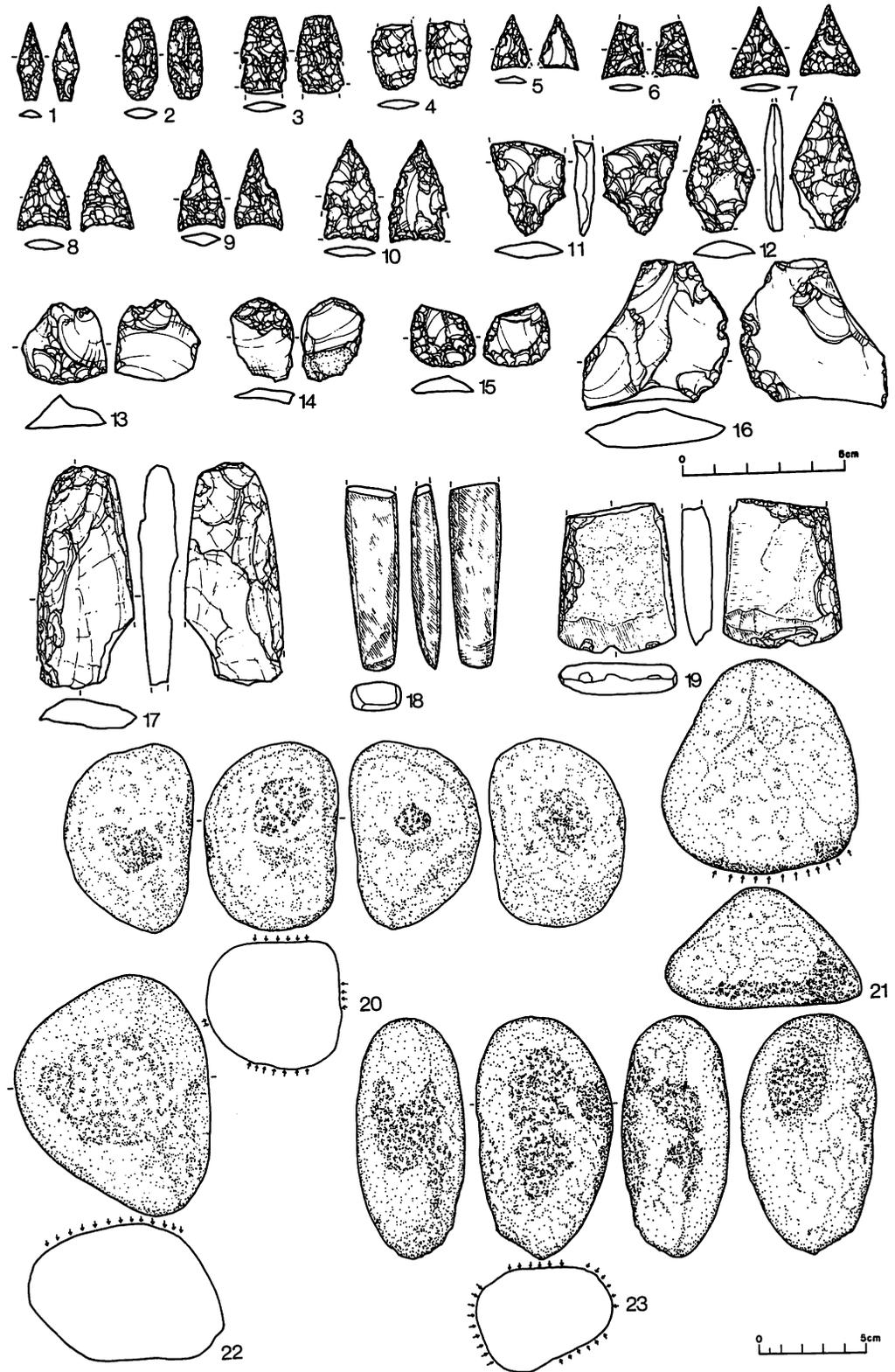


図IV-8-32 III層・IV層 包含層の土器 (その2)

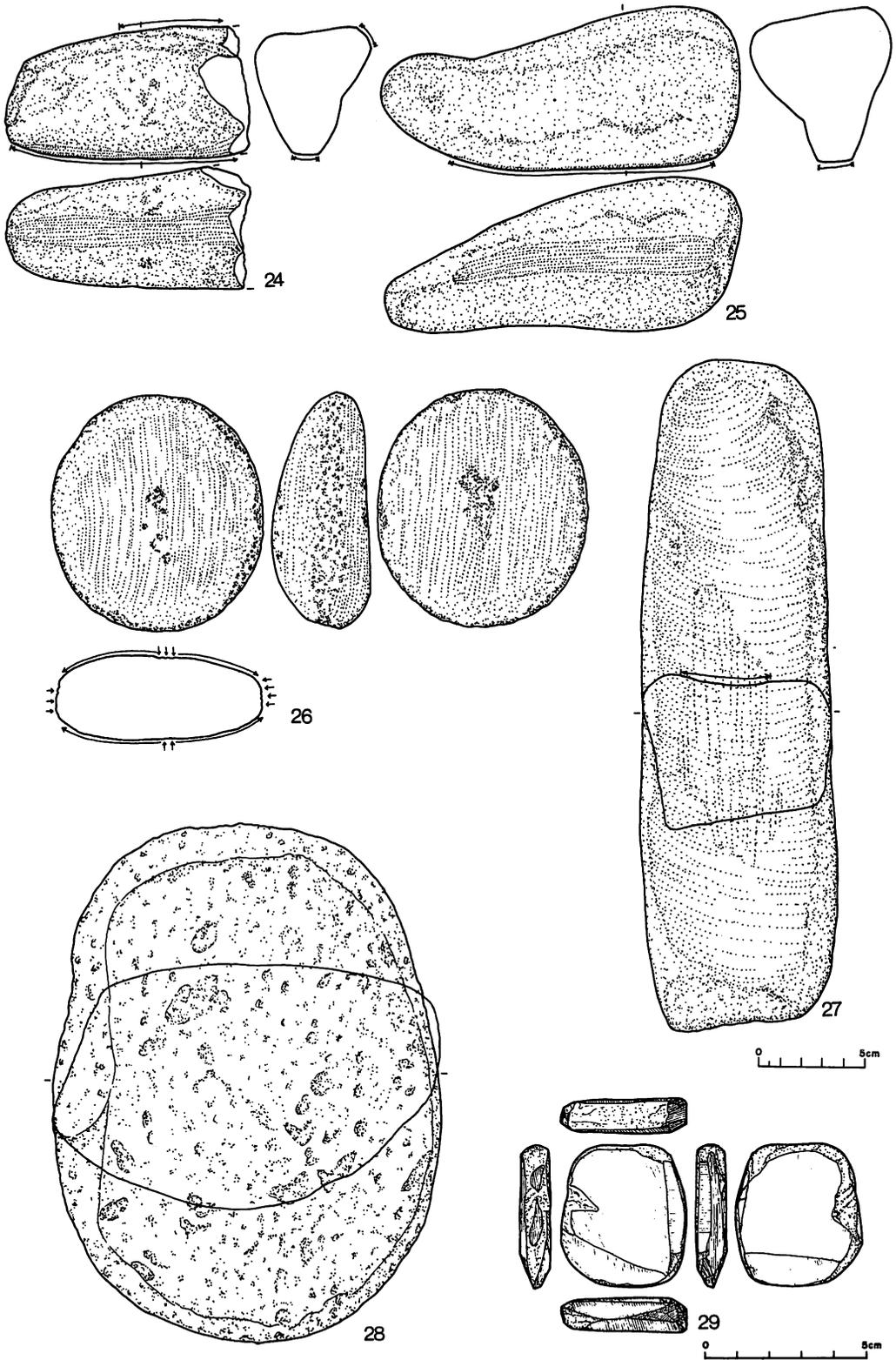


図IV-8-33 III層・IV層 包含層の土器 (その3)

IV 遺構と遺物



図IV-8-34 III層・IV層 包含層の石器 (その1)



図IV—8—35 III層・IV層 包含層の石器 (その2)

9 I層・II層の遺構と遺物

II層の遺構・遺物は耕作による削平をまぬかれたところから検出された。焼土は北の沢の凹地に位置している(図IV-9-1)。

焼土(図IV-9-2・3)

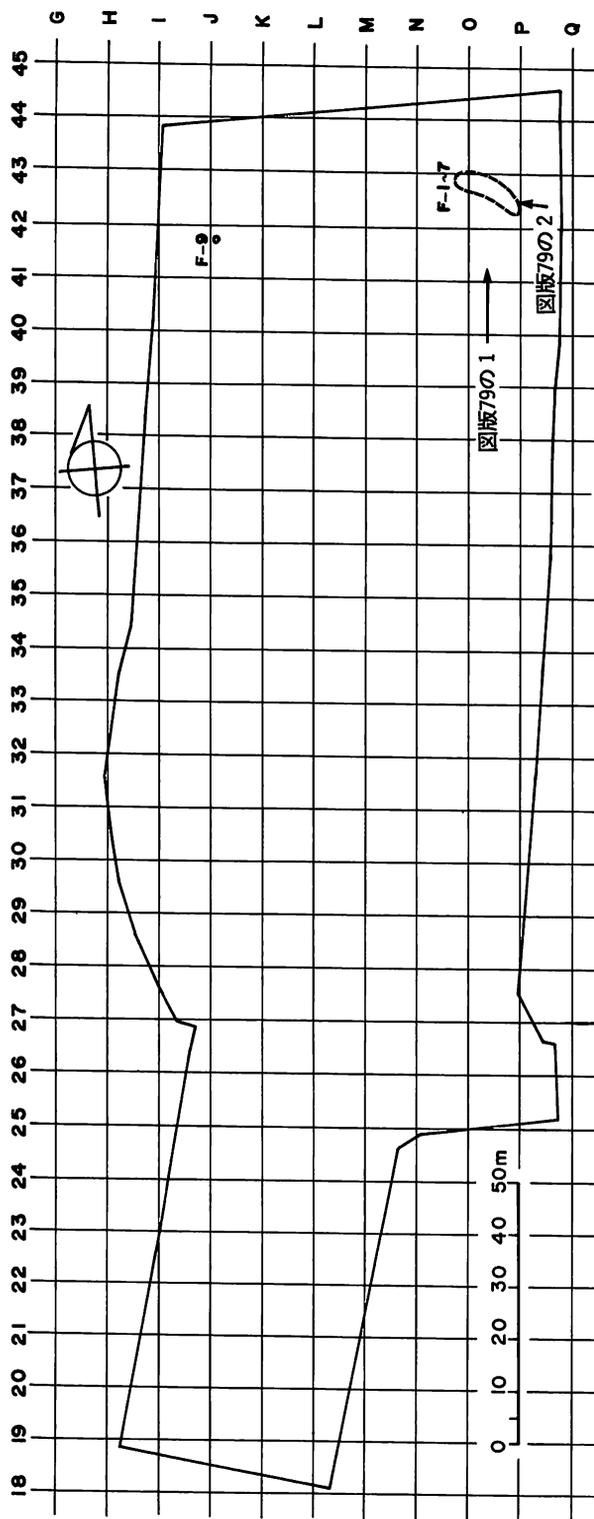
II層の焼土は、調査区北東部のO・P-41・42区に群を成して確認された。これらの焼土は、いくつかのスポット状に存在するものと、それらを取り巻く様に存在する焼土の混じった黒色土とに分けられる。断面は、他の層で確認された焼土と違い、不規則な断面を呈する。このことからみて人為的なものとは考えにくい。

遺物は、わずかな炭化物だけでほかには検出されていない。

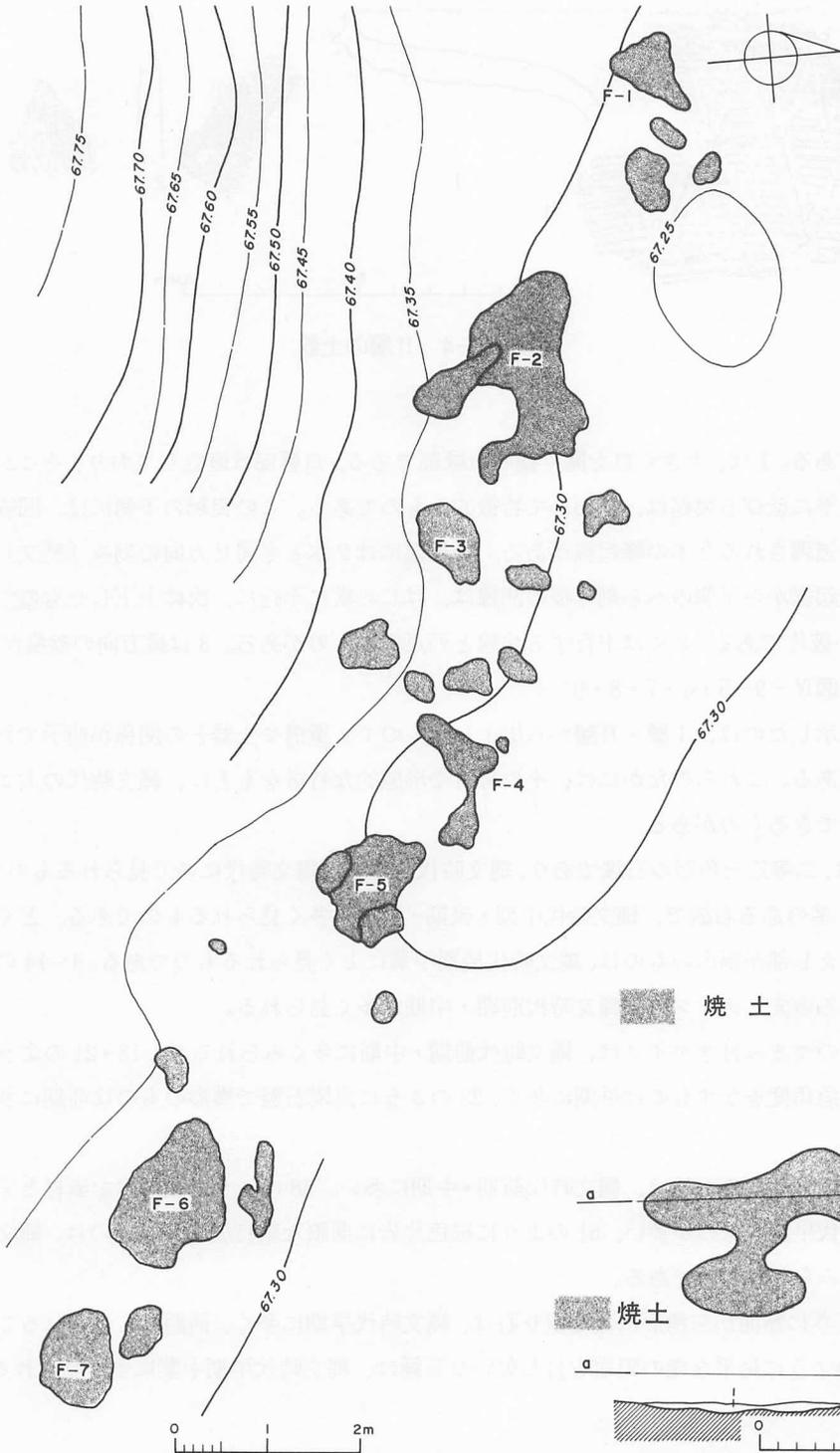
時期は、III層から縄文時代中期の遺物が出土しており、また焼土群より上のレベルで擦文時代の土器片が数点出土している。このことから、縄文時代中期から擦文時代までの間に形成されたものと考えられる。

土器(図IV-9-4)

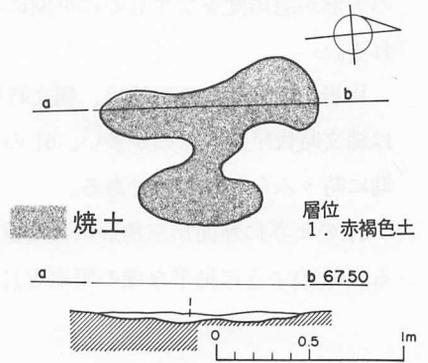
II層から縄文時代の土器も出土しているが、ここを本来的な包含層とするのは、擦文



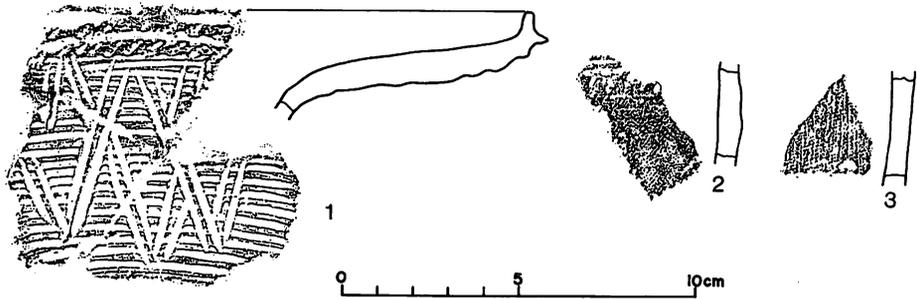
図IV-9-1 II層の遺構位置と写真撮影方向



図IV-9-2 焼土 F-1~7



図IV-9-3 焼土 F-9



図IV-9-4 II層の土器

式土器である。1は、大きく口を開く甕の口縁部である。口唇部は直立しており、そこから外側にはほぼ水平に延びる突起は、きわめて特徴的なものである。この突起の下側には、凹線によりいくぶん強調される2本の隆起線がある。隆起線には2本とも同じ方向の刻み（刻文）がみられる。隆起線から下側のへら刻み様の凹線は、はじめ横に平行に、次に上下したものである。2・3は小破片である。2には平行する沈線と列点様のものがある。3は縦方向の擦痕がある。

石器（図IV-9-5・6・7・8・9）

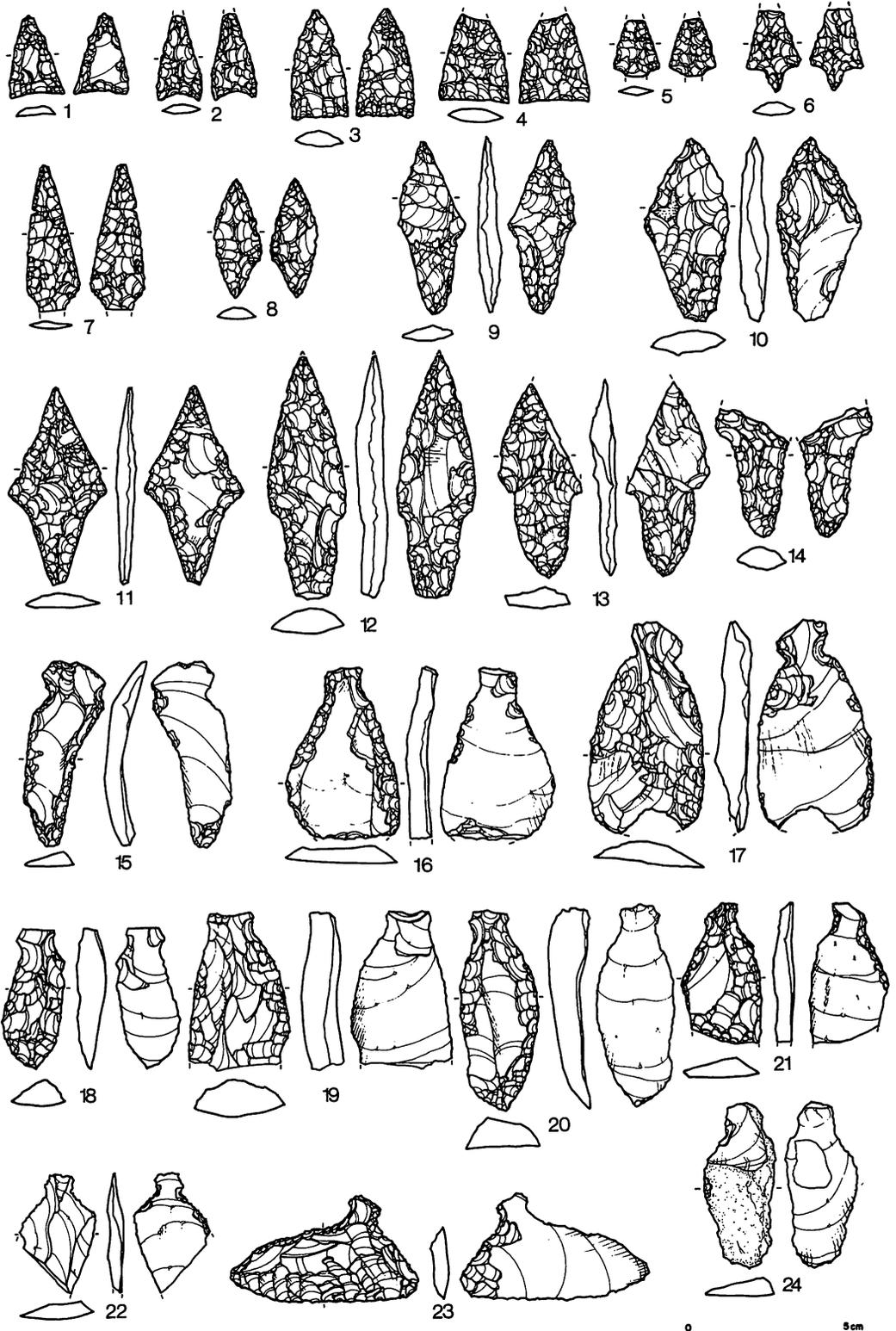
ここに示したのは、I層・II層から出土したもので、遺構や土器との関係が明示できなかったものである。これらのなかには、その材質や形態的な特徴をもとに、縄文時代の大きな時期を推定できるものがある。

1~4は、二等辺三角形の石鏃であり、縄文時代前期と続縄文時代に多く見られるものである。5~8は、茎のある石鏃で、縄文時代中期・後期・晩期に多く見られるものである。とくに6のようにかえし部が幅広のものは、縄文時代後期中葉によく見られるものである。9~14の明瞭な茎部のある槍先・ナイフは、縄文時代前期・中期に多く見られる。

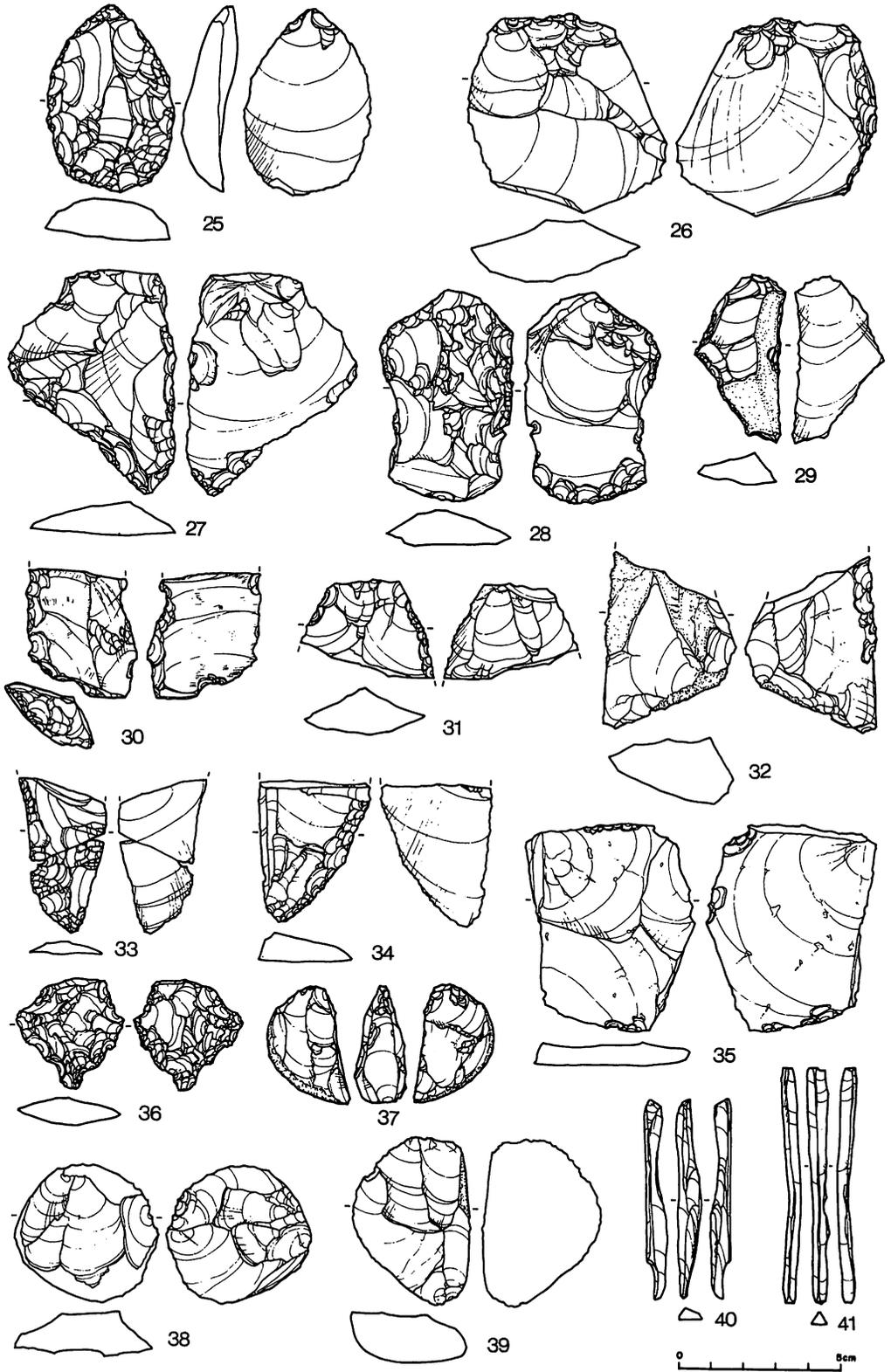
珪岩製のつまみ付きナイフは、縄文時代前期・中期に多くみられるが、18・21のように一方の刃部が急角度をなすものは早期に多く、23のように黒曜石製で横形のものは前期に多くみられる。

片岩を素材にする石斧は、縄文時代前期・中期に多い。58のような蛇紋岩を素材とする石斧は縄文時代早期のものが多い。61のように緑色片岩に明瞭な敲打痕を残すものは、縄文時代後期に時々みられるものである。

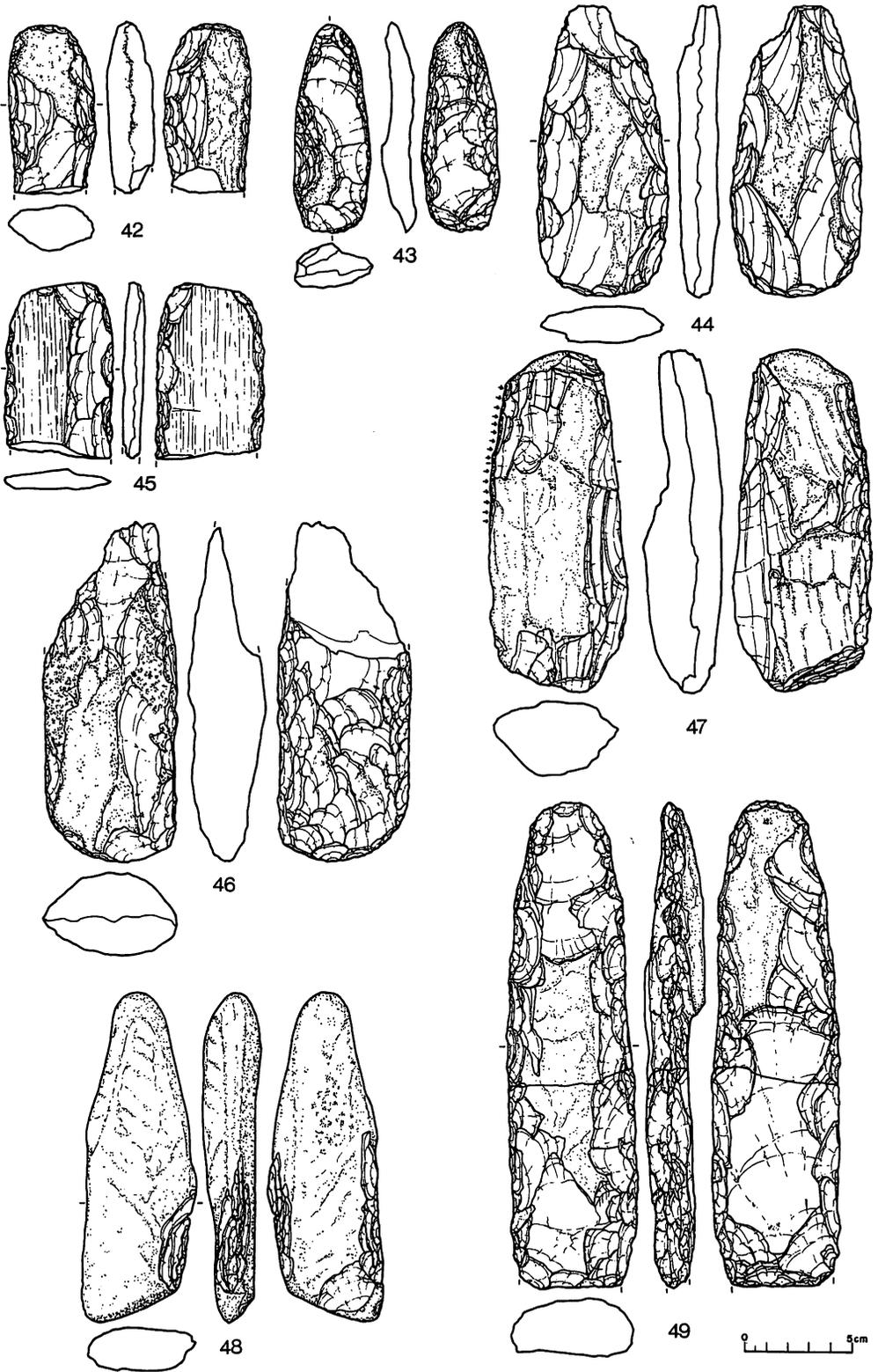
67のように断面が三角形になる擦り石は、縄文時代早期に多く、前期にも見られることがある。68のように扁平な礫の両端を打ち欠いた石錘は、縄文時代早期中葉に多く見られる。



図IV—9—5 I層・II層 包含層の石器 (その1)

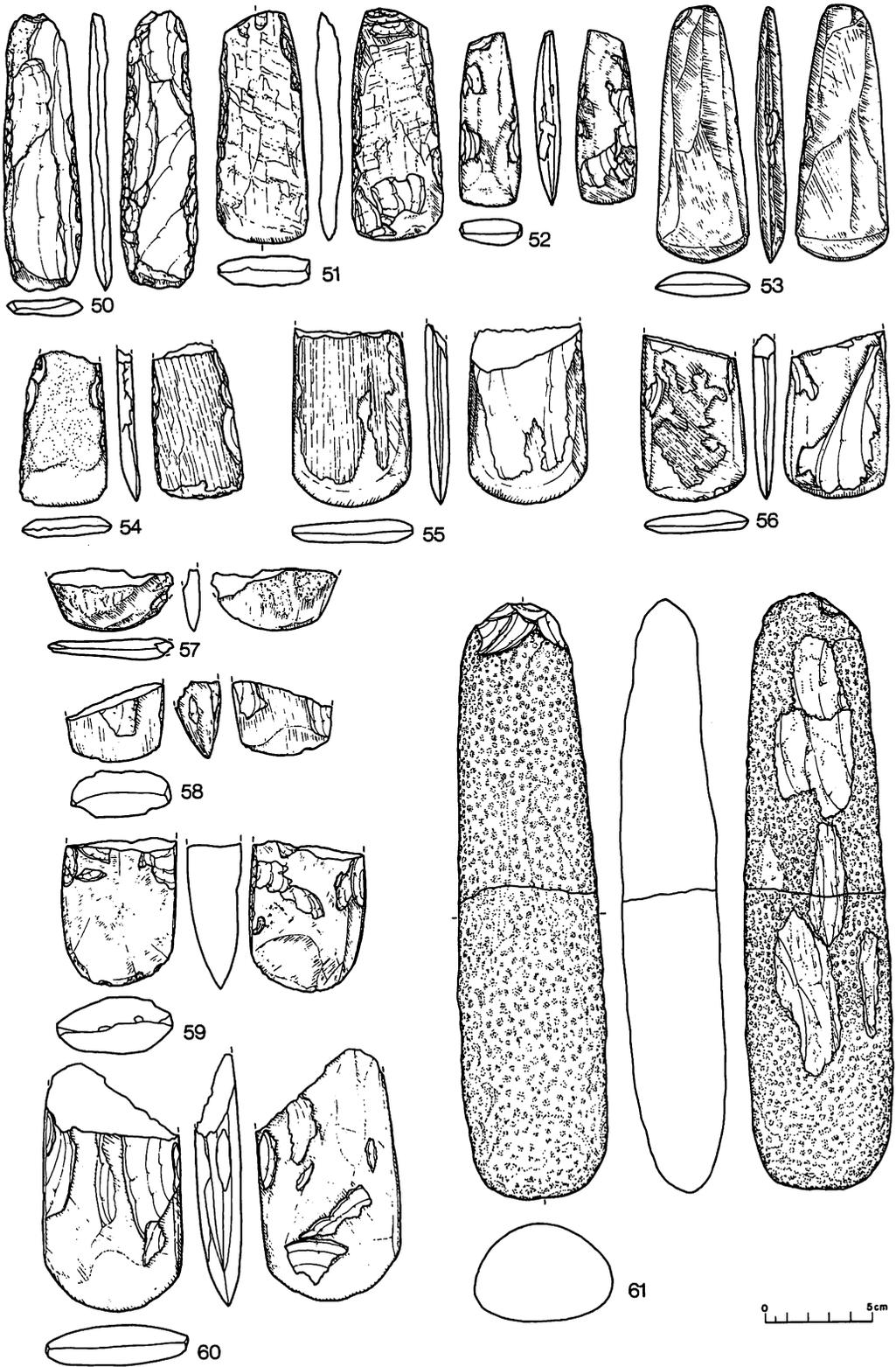


図IV-9-6 I層・II層 包含層の石器 (その2)

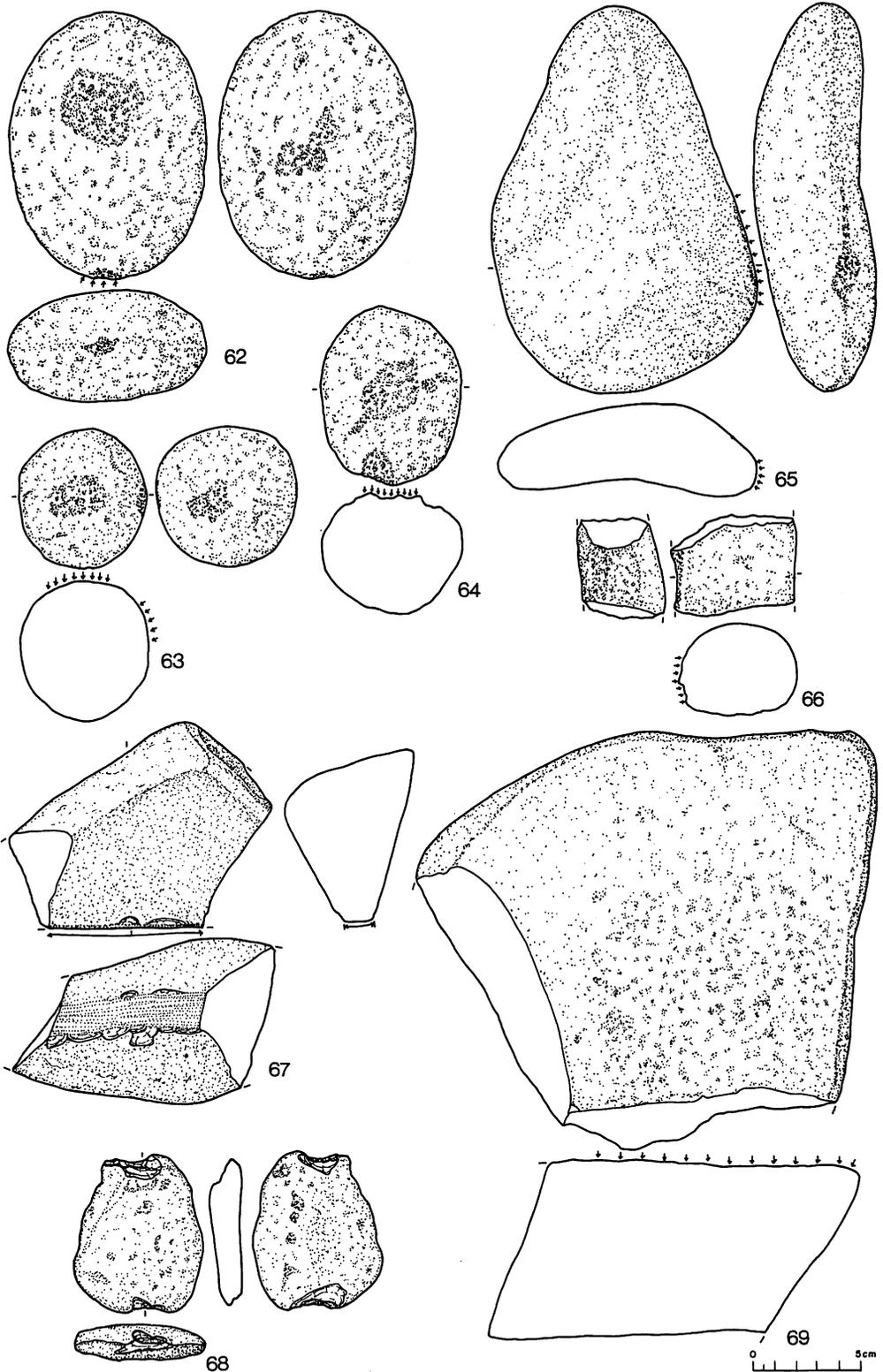


図IV-9-7 I層・II層 包含層の石器 (その3)

IV 遺構と遺物



図IV-9-8 I層・II層 包含層の石器 (その4)



図IV-9-9 I層・II層 包含層の石器 (その5)

IV 遺構と遺物

遺構一覽

早：早期 前：前期 中：中期 擦：擦文 石：石器・礫石器 剝：剝片

遺構	発掘区	平面形	規模				土器		石器		検出層位	
			確認面(m)	床面(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	床面	覆土	床面	覆土		
H-1	N-34-a・b・c・d	—	—	—	—	—	—	早：21	—	石：6 剝：9803 礫：32	第V層中	
H-2	N-33-b・c O-33-a・d	長円形	4.20×3.50	—	0.36	11.4	—	—	—	剝：2 礫：2	第V層中	
H-3	J-25-c・d J-26-a・b	五角形?	7.08×5.8	6.70×5.46	0.15~0.4	33.2	—	—	—	—	第IV層中	
H-4	M-33-a・b・c・d	—	—	—	—	—	—	早：2	—	剝：194 礫：102	第IV層上面	
H-6	K-28-b・c L-28-a・b	—	—	—	—	—	—	早：95	—	石：1 剝：38 礫：10	第IV層中 (I層下)	
H-7	H-31-c・d H-32-a・d	—	—	—	—	—	早：101 余	早：17	—	石：3 剝：935 礫：1	第IV層中 (I層下)	
H-8	I-40-a・b・c・d	円形	3.20×2.90	2.88×2.55	0.3	5.7	—	早：77	—	剝：2 礫：1	第VI層上面	
H-9	J-24-c K-24-c・d K-25-a・b	—	—	—	—	—	中：16	中：11	—	石：95 剝：423 礫：336	石：50 剝：295 礫：121	第IV層上面
H-10	N-39-b・c O-39-a・b	隅丸長方形	5.40×4.41	5.30×3.86	0.31	18.3	早：1	早：19	—	石：22 剝：86 礫：4	石：9 剝：1 礫：4	第VI層上面
H-11	N-40-b・c	隅丸長方形	6.0×4.5	—	0.18	11.7	早：9	—	—	石：7 剝：3789 礫：2	石：56 剝：1065 礫：1	第VI層上面
H-12	N-39-c・d N-40-a・b	隅丸長方形	5.75×4.80	5.50×4.50	0.28	21.0	早：3	早：323	—	石：1 剝：96 礫：1	石：34 剝：15 礫：1	第V層上面
H-13	N-38-c・d N-39-a・b	隅丸長方形	7.58×5.50	7.11×5.05	0.31	31.3	—	早：59	—	—	石：7 剝：4 礫：7	第V層上面
H-14	O-38-c・d O-39-a・b	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H-15	O-39-b・c P-38-d	隅丸長方形	3.20×2.90	2.88×2.55	0.30	30.1	—	早：256	—	石：3	石：52 剝：55 礫：10	第VI層上面
H-16	O-29-c・d O-30-a・b・c・d	—	—	—	—	—	早：50	—	—	石：9 剝：13 礫：16	—	第IV層中 (II層下)
H-17	O-35-c, O-36-a P-35-d, P-36-a	—	—	—	—	—	—	早：15	—	—	石：10	第V層中
P-1	M-34-a	隅丸長方形	1.40×1.20	0.95×0.72	0.36	0.65	—	—	—	—	—	第VI層上面
P-2	L-23-d	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	第V層上面
P-5	H-31-c	長円形	0.95×0.68	—	0.61	—	—	—	—	—	—	第IV層上面
P-6	H-31-d, H-32-a	長円形	1.40×1.22	1.30×1.0	0.32	1.1	—	—	—	—	—	第IV層上面
P-7	H-32-b・c	隅丸長方形	2.55×2.18	2.30×2.0	0.20	3.9	—	—	—	—	—	第IV層上面
P-8	P-39-a	長円形	1.32×1.15	1.0×0.88	0.19	0.7	—	—	—	—	石：2	第VI層上面

Tピットの計測値

遺構	調査区	規		模	長軸方向	形態	遺物
		開口(m) (長さ×幅)	竪底(m) (長さ×幅)	最大深(m)			
TP-1	I-23-a	— × 0.50	1.55 × 0.17	0.89	N-23°-E	I A	土器 (40点, 同一個体)
TP-2	I-23-c	(1.83 × 0.67)	(1.76 × 0.30)	0.80	N-10°-E	—	
TP-3	I-23-c	2.01 × 0.75	1.70 × 0.52	0.70	N-32°-E	III C	石斧片 (1点)
TP-4	I-22-c, I-23-b	1.25 × 0.25	1.21 × 0.13	0.84	N-10°-E	III B	
TP-5	J-23-d	1.25 × 0.28	1.11 × 0.17	0.70	N-32°-E	III B	石斧 (1点)
TP-6	J-23-a・d	1.56 × 0.48	1.49 × 0.28	0.83	N-23°-E	I A	
TP-7	J-23-b	1.86 × 0.40	1.64 × 0.19	0.77	N-39°-E	I A	石斧 (1点)
TP-8	J-23-b・c	1.47 × 0.29	1.31 × 0.19	0.58	N-19°-E	II A	
TP-9	J-23-b・c	1.22 × 0.33	1.33 × 0.11	0.80	N-16°-E	III B	黒曜石フレイク (1点)
TP-10	K-22-d	1.44 × 0.26	1.60 × 0.15	0.70	N-21°-E	III B	
TP-11	K-23-a	2.26 × 0.48	1.95 × 0.24	0.68	N-20°-E	III C	(炭化物)
TP-12	K-23-a	1.35 × 0.52	1.42 × 0.23	0.64	N-3°-E	III D	
TP-13	L-23-a	1.29 × 0.28	1.20 × 0.21	0.65	N-12°-W	I B	(炭化物)
TP-14	L-22-d	1.43 × 0.23	1.40 × 0.15	0.41	N-52°-W	III B	
TP-15	L-22-d, L-23-a	— × 0.55	— × 0.24	0.76	N-15°-E	I	たたき石 (1点)
TP-16	K-22-c, L-22-d	1.51 × 0.40	1.49 × 0.20	0.54	N-65°-W	I B	
TP-17	J-23-a	1.62 × 0.94	1.60 × 0.27	1.15	N-7°-E	I D	石斧未製品 (1点)
TP-18	K-22-c, K-23-b	2.00 × 0.60	2.15 × 0.34	1.02	N-20°-E	II B	
TP-19	J-22-d, J-23-a	1.39 × 0.65	1.39 × 0.11	0.93	N-22°-E	III B	土器片 (1点)
TP-20	K-23-b・c	1.42 × 0.26	1.40 × 0.17	0.41	N-10°-E	II B	
TP-21	J-22-c	1.27 × 0.45	1.18 × 0.19	0.75	N-7°-E	III B	土器片 (1点)
TP-22	K-23-b	1.43 × 0.45	1.50 × 0.14	0.46	N-27°-E	I D	
TP-23	P-43-b	1.58 × 0.50	1.50 × 0.33	0.79	N-5°-W	I D	

VIII層 (砂礫層) の土器

挿	図	番号	出土区	層位	分類	接合・同一個体分布状況	挿	図	番号	出土区	層位	分類	接合・同一個体分布状況
IV-2-3	1	O-38-c	砂礫層	I b-1			IV-2-4	25	O-34-c	礫層	I a		
"	2	O-33-d	礫層	"			"	26	O-34-d	"	"		
"	3	I-37-b	"	"			"	27	O-33-c	"	"		
"	4	O-33-c	"	"			"	28	I-37-b	"	"		
"	5	O-33-d	"	"			"	29	I-37-b	"	"		
"	6	I-38-c	"	"			"	30	O-34-b	"	"		
"	7	O-33-d	"	"			"	31	O-34-d	"	"		
"	8	O-32-c	"	"			"	32	I-37-c	"	"		
"	9	O-33-a	"	"			"	33	N-33-c	"	"		
"	10	J-37-a	"	"			"	34	O-34-a	"	"		
"	11	O-34-b	"	"			"	35	O-33-c	"	"		
"	12	O-34-d	"	"			"	36	O-34-c	"	"		
"	13	O-33-b	"	"			"	37	O-39-b	砂礫層	"		
"	14	O-32-d	"	"			"	38	J-37-a	礫層	"		
"	15	O-33-d	"	"			"	39	O-34-c	"	"		
"	16	O-39-a	砂礫層	"			"	40	O-33-d	"	"		
"	17	O-34-c	礫層	I a			"	41	J-37-d	"	"		
"	18	O-34-d	"	"			"	42	J-37-a	"	"		
"	19	N-33-c	"	"			"	43	J-37-a	"	"		
"	20	J-37-d	"	"			"	44	O-34-b	"	"		
"	21	O-34-d	"	"			"	45	O-33-d	"	"		
"	22	O-34-d	"	"			"	46	N-34-b	"	"		
"	23	O-34-a	"	"			"	47	N-34-b	"	"		
"	24	O-34-a	"	"									

IV 遺構と遺物

VIII層（砂礫層）の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-2-5	1	J-37-d	3	スクレイパー	III B 9	3.0×1.9×0.3	3.0	黒礫石	VII		
"	2	O-34-a	—	"	"	3.0×2.1×0.6	4.2	"	"		
"	3	O-33-b	—	"	"	3.0×2.0×0.8	5.9	"	"		
"	4	I-37-b	2	"	"	4.2×3.8×0.5	5.7	"	"		
"	5	O-38-d	—	"	"	4.1×1.6×0.3	2.3	"	"		
"	6	O-33-d	—	"	"	4.3×1.8×0.5	3.8	"	"		
"	7	O-32-d	—	"	"	7.0×1.8×1.1	14.3	"	"		
"	8	N-34-b	—	"	"	6.7×2.5×0.8	15.8	"	"		
"	9	O-34-d	—	"	"	6.5×4.7×1.3	40.9	"	"		
"	10	J-37-a	4	剥 片	IX B	6.1×5.7×1.5	36.4	安山岩	"		

八層の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-3-3	1	N-27-a・37	ハ	I b-4	すべて同一個体	IV-3-3	9	N-27-a・37	ハ	I b-4	
"	2	37	ハ	"		"	10	5	ハ	"	
"	3	37	ハ	"		"	11	2・8・23・29	ハ	"	
"	4	37	ハ	"		"	12	4・6・31	ハ	"	
"	5	37	ハ	"		"	13	13・15・37	ハ	"	
"	6	37	ハ	"		"	14	25・37	ハ	"	
"	7	37	ハ	"		"	15	15・37	ハ	"	
"	8	15・37	ハ	"							

H-16の実測土器

挿 図	番号	発掘区	層位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-4-4	1	P-35-d	床	8.9	6.2	14.2	I b 4	50		

H-16の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-4-4	1	12	槍 先	I B 9	7.0 × 4.1 × 1.4	32.3	黒礫石	床		
"	2	16	スクレイパー	III B 3	(6.0) × 3.4 × 2.2	(40.5)	"	"		
"	3		石 斧	IV A 8	9.0 × 3.0 × 0.7	32.2	蛇紋岩	"		
"	4	21	"	"	(3.1) × 4.1 × 0.9	(19.5)	片 岩	"		
"	5	7	す り 石	VIA 1	(9.0) × 8.1 × 6.9	(572)	安山岩	"		
"	6	17	"	"	15.6 × 6.5 × 5.2	621	砂 岩	"		
IV-4-5	7	19	石 皿	VIB 1	(23.0) × (11.8) × 7.9	(2,500)	"	"		
"	8	9	"	"	30.8 × 30.7 × 6.1	6,600	"	"		

口層の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-4-8	1	O-26-c・1	口層焼土	(17.2)	(10.1)	(26.4)	I b 4	45	O-26-c・8・13, P-26-d・1	
"	2	M-29-c・3	口層下礫直上	34.3	—	(26.2)	"	78	M-29-c・2	
"	3	M-30-c・④	礫層直上	26.5~28.0	—	(30.5)	"	87	M-30-c・5~8, N-29-b・1 N-30-d・2・13	
"	4	M-29-d	口 層	25.0	—	(15.6)	"	24		

口層の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 状 況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 状 況	
IV-4-8	5	O-27-b・39	□ 層 下	I b 3	1	IV-4-8	8	K-30-a・2	□ 層下礫直上	〃	3	K-30-a・2
〃	6	O-27-a・14	〃	I b 4	1	〃	9	K-30-a・1	〃	〃	1	〃
〃	7	L-29-a	〃	〃	1	〃	10	N-29-a・1	〃	〃	3	N-29-a・1

ロ・八層の石器

挿 図	番号	発 掘 区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接 合 状 況	備 考
IV-4-9	1	O-27-d	3	スクレイパー	III B 9	2.7 × 1.9 × 0.6	2.6	黒曜石	□		□ 層下位
〃	2	〃	4	〃	〃	2.8 × 2.0 × 6.0	3.4	〃	〃		〃
〃	3	〃	2	〃	〃	(2.1) × (1.6) × 0.4	(1.5)	〃	〃		〃
〃	4	N-27-b	14	〃	III B 8	(2.9) × (1.3) × 0.4	(1.6)	〃	ハ		ハ層下黒茶色粗砂直上
〃	5	〃	13	〃	〃	7.0 × 2.6 × 1.1	20.7	〃	〃		〃
〃	6	O-27-b	25	石 斧	IV A 3	8.9 × (8.7) × 2.4	(278.1)	緑色片岩	□		□ 層下位
〃	7	〃	32	た た き 石	VA 4	10.4 × 9.2 × 5.9	749	安山岩	〃		〃
〃	8	〃	30	〃	〃	11.5 × 9.1 × 7.2	994	〃	〃		〃
〃	9	O-26-C	9	〃	VA 1	17.6 × 6.4 × 4.4	570	〃	〃		O-27-a・ □ 層下7
〃	10	O-27-a	11	石 皿	VIB 1	(16.0) × (15.4) × 3.4	(800)	砂 岩	〃		O-27-a・ □ 層下13
IV-4-10	11	M-29-d	10	〃	〃	49.0 × 35.5 × 14.2	27,500	〃	〃		〃

H-6の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接 合 状 況	備 考
IV-5-3	1	33	石 斧	IV A 8	18.5 × 8.9 × 3.7	860	緑色泥岩	床		

H-7の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高			
IV-5-6	1	H-7	床	28.3	16.0	31.0	I b 4	125	H-7 HP-1, H-32-b・1・6・9 I-32-d・4, H-32-c・2
〃	2	114	床	—	10.0	(15.0)	〃	30	I-32-a・2・3, H-32-b・9 H-32-c・1
〃	3	I-32-d・3	イ	32.2	—	(21.5)	〃	107	I-32-d・3・4, I-33-a・1~4

H-7の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接 合 状 況	備 考
IV-5-6	1	—	石 鏃	IA 8	(2.3) × 1.8 × 0.3	1.2	黒曜石	床		フレイク 集中
〃	2	58	石 錐	II A 1	3.6 × 1.5 × 0.8	4.1	頁 岩	〃		
〃	3	57	スクレイパー	III B 3	2.1 × 1.8 × 0.9	2.7	黒曜石	〃		
〃	4	—	〃	〃	(1.8) × 2.3 × 0.8	(3.2)	〃	〃		焼土直上
〃	5	5	フ レ イ ク	IX B	3.0 × 2.4 × 0.4	3.0	〃	〃	} 接 合	
〃	6	5	〃	〃	3.0 × 1.6 × 0.7	2.6	〃	〃		
〃	7	5	た た き 石	VA 1	6.2 × 3.0 × 2.3	57.0	安山岩	〃		

IV 遺構と遺物

イ層の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-5-10	1	M-29-a	1	石 鏃	IA2a	2.7 × 0.9 × 0.3	0.8	黒曜石	イ		イ層下
"	2	N-41-c	121	"	IA 8	(0.4) × 1.0 × 0.2	(0.2)	"	"		
"	3	N-32-c	1	つまみ付きナイフ	III A 1	4.9 × 3.1 × 0.6	7.8	珪 岩	"		
"	4	J-35-d	3	"	"	5.8 × 2.7 × 0.6	9.0	"	"		イ層下
"	5	N-27-d	3	スクレイパー	III B 9	6.5 × 5.2 × 2.2	90.0	安山岩	"		
"	6	M-28-a	1	"	"	6.1 × 6.0 × 2.0	101.0	"	"		
"	7	"	8	"	"	11.3 × 8.1 × 1.7	130.6	"	"		
"	8	O-27-d	1	石 核	IXA	11.0 × 7.5 × 3.6	350.2	"	"		
IV-5-11	9	I-30-b	—	す り 石	VIA 1	10.5 × 6.1 × 4.2	321.9	"	"		
"	10	I-32-d	1	砥 石	VII B 2	20.7 × 14.9 × 3.8	1,485	砂 岩	"		
"	11	N-28-a	11	"	"	21.2 × (16.8) × 4.6	2,130	"	"		
"	12	"	3	石 皿	VII B 1	43.5 × 31.3 × 9.7	13,900	"	"		

VI・VII層（洪水砂層）の土器

挿 図	番号	発掘区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	発掘区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-6-2	1	N-30-c	VI粗 砂	I b 2		IV-6-2	28	I-32-c	VII下粗砂	I b 3	
"	2	N-31-d	VII	"		"	29	H-34-b	VII上粗砂	"	
"	3	N-32-a	VII	"		"	30	I-30-a	VII	"	
"	4	J-33-b	VI 上	"		"	31	N-29-b	VII粗 砂	"	
"	5	N-29-b	VII粗 砂	I b 3		"	32	L-30-a	VII	"	
"	6	H-36-b	VII 中	"		"	33	I-32-c	VII上 砂	"	
"	7	N-30-c	VI粗 砂	"		"	34	H-33-c	VII上粗砂	"	
"	8	N-29-b	VII粗 砂	"		IV-6-3	35	O-41-b	VII	I b 4	
"	9	O-27-b	VII粗 砂	"		"	36	O-41-b	VII	"	
"	10	J-30-d	VII上粗砂	"		"	37	J-35-b	VII上粗砂	"	
"	11	H-34-b	VII上粗砂	"		"	38	O-41-d	VII	"	
"	12	L-29-b	VII	"		"	39	O-41-d	VII	"	
"	13	L-30-a	VII	"		"	40	O-41-d	VII	"	
"	14	O-29-d	VI粗 砂	"		"	41	O-41-b	VII	"	
"	15	I-34-d	VII粗 砂	"		"	42	L-29-b	VII	"	
"	16	H-31-c	VII 上	"		"	43	L-29-b	VII	"	
"	17	H-30-b	VII	"		"	44	M-28-c	VII 下	"	
"	18	I-32-b	VII下粗砂	"		"	45	L-30-a	VII	"	
"	19	L-29-a	VII	"		"	46	I-35-b	VII上粗砂	I b 5	
"	20	O-27-b	VII粗 砂	"		"	47	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	21	L-27-b	VII粗 砂	"		"	48	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	22	N-30-c	VI粗 砂	"		"	49	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	23	J-31-a	VII 下	"		"	50	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	24	L-29-a	VII	"		"	51	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	25	L-29-b	VII	"		"	52	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	26	L-29-c	VII	"		"	53	I-35-b	VII上粗砂	"	
"	27	L-27-c	VII	"		"	54	I-35-b	VII上粗砂	"	

VI・VII層（洪水砂層）の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-6-4	1	I-34-b	1	石 鏃	IA 8	(2.1) × 1.0 × 0.3	(0.6)	黒曜石	VII上		粗砂層
"	2	L-28-b	—	スクレイパー	III B 9	(3.0) × 1.7 × 0.8	(6.1)	"	"		
"	3	O-28-c	1	"	"	6.6 × 4.4 × 1.8	58.7	安山岩	VI		粗砂層
"	4	O-29-c	1	"	"	12.8 × 5.5 × 1.8	78.0	"	VI		"
"	5	P-41-a	—	砥 石	VII B 9	3.6 × 3.3 × 2.5	40.0	砂 岩	VII		

H-1の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-2	1	N-33-d・16	V	16.6	8.4	20.4	I b 2	52	N-33-d・16~44, 69・70・73~77	

H-1の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況
IV-7-2	2	O-34-a・5	V	I b 2	4	O-34-a・2	IV-7-2	4	N-33-d	V	I b 2	6	
"	3	N-34-d	"	"	1								

H-1の石器

挿 図	番号	発 掘 区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接 合 状 況	備 考
IV-7-5	1	H-34-a	10	石 鏃	IA 8	(1.4)×1.3×0.3	(0.4)	黒 曜 石	V		
"	2	"	213	"	"	(1.6)×1.2×0.2	(0.4)	"	"		
"	3	N-33-d	60	槍先・ナイフ	I B 2	5.7×2.8×0.8	12.0	"	"		
"	4	"	5	スクレイパー	III B 3	4.4×1.7×0.6	5.5	珪質頁岩	"		
"	5	"	57	"	III B 9	(5.2)×3.7×1.0	(16.1)	黒 曜 石	"		
"	6	N-34-a	36	"	"	(2.6)×(3.5)×1.3	(13.0)	"	"		
"	7	"	49	フ レ イ ク	IX B	4.8×3.5×1.7	23.5	"	"		
"	8	N-33-d	66	た た き 石	VA 4	6.4×5.7×5.3	246.9	安 山 岩	"		
"	9	N-34-a	54	す り 石	VIA 9	13.2×9.7×5.1	955	"	"		
"	10	"	53	台 石	VB 1	24.0×19.5×8.8	6,500	"	"		

H-8の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況
IV-7-8	1	6	3	I b 4	1	} 遺物集中1と接合	IV-7-8	3	36	3	I b 4	1	I-40-b・23 H-8-21・26・33・43
"	2	31	3	"	1		"	4	21	1	"	9	

H-10の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破 片 数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-9	1	N-39-b・57	2	31.2	11.5	30.5	I b 4	82	N-39-b 58・61~66・68・69・74 O-37-d 32・35・36・57 N-37-c 92, O-38-a 7~10	

H-10の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接 合 状 況	備 考
IV-7-12	1	23	つまみ付きナイフ	III A 3	6.1×4.0×0.7	11.8	頁 岩	床		
"	2	16	スクレイパー	III B 9	3.2×4.1×0.7	5.8	黒 曜 石	"		
"	3	12	"	"	(5.6)×3.6×0.7	(10.3)	"	"		
"	4	—	"	"	5.7×3.5×1.1	17.0	"	3		
"	5	—	石 核	IX A	6.1×3.4×3.3	53.5	"	1		
"	6	22	た た き 石	VA 9	11.8×9.3×3.6	594	安 山 岩	3		
"	7	15	す り 石	VIA 2	(16.4)×10.2×4.1	(955)	"	"		
"	8	24	"	VIA 1	15.3×6.9×3.6	500	輝 緑 岩	"		
"	9	14	"	VIA 5	10.9×9.0×5.0	717	安 山 岩	4		
IV-7-13	10	26	石 皿	VIB 1	38.5×23.3×9.1	9,500	砂 岩	3		
"	11	10	"	"	25.4×16.1×7.3	3,470	"	"		
"	12	20	"	"	(50.5)×(44.0)×(12.1)	(21,500)	"	床		

IV 遺構と遺物

H-11の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-14	1	1	V	30.6	—	(21.2)	I b 4	90	H-11, 7・11・12	
"	2	2	V	16.0	9.3	12.5	"	7		

H-11の土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	分 類	接 合 破片数	接 合 状 況
IV-7-14	3	17	V	I b 4	13	O-41-b・70・71・73・74 P-40-d・69

H-11の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接 合 状 況	備 考
IV-7-17	1	20	石 鏃	IA2a	2.4 × 0.9 × 0.2	0.4	黒曜石	5	P-38-d V層25 O-38-b V層44	HF-1土壌 水洗により検出 " "
"	2		"	"	2.9 × 1.2 × 0.3	1.0	"	"		
"	3		"	IA 8	(1.7) × 1.0 × 0.4	(0.2)	"	"		
"	4		"	"	(1.2) × (1.1) × 0.3	(0.2)	"	"		
"	5	27	スクレイパー	III B 9	(3.0) × (2.4) × 0.8	(3.9)	"	床		
"	6	6	砥 石	VII B 9	6.2 × 5.1 × 3.2	90	砂 岩	4		
"	7	5	た た き 石	VA 1	16.6 × 10.0 × 7.3	1,490	安山岩	5		
"	8	23	砥 石	VII B 2	(38.3) × (13.4) × 2.9	(1,820)	砂 岩	床		

H-12の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-20	1	12	4	28.4	10.5	38.2	I b 4	83	H-8, 29~31・35・36	
"	2		フク土	25.2	12.3	26.3	"	104		
"	3	28	IV	(28.2)	(27.2)	(8.2)	"	44		

H-12の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接 合 状 況	備 考
IV-7-21	1	—	石 鏃	IA2a	(1.6) × 0.9 × 0.3	(0.5)	黒曜石	9	HF-1内 "	
"	2	—	"	"	(2.2) × 1.1 × 0.3	(0.8)	"	6		
"	3	43	"	"	(2.4) × 1.0 × 0.3	(0.8)	"	床		
"	4	42	つまみ付きナイフ	III A 1	3.4 × 1.9 × 0.5	4.1	珪 岩	4		
"	5	11	スクレイパー	III B 9	3.5 × (2.5) × 0.6	(3.8)	黒曜石	"		
"	6	33	た た き 石	VA 2	(10.1) × 8.5 × 5.5	(658)	安山岩	6		
"	7	45	す り 石	VIA 5	11.4 × 8.1 × 4.1	566	"	4		
"	8	24	石 皿	VIB 1	25.7 × 19.5 × 8.1	4,270	砂 岩	床		
"	9	27	礫	XB	28.5 × 6.6 × 1.5	494	片 岩	"		

H-13の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-22	1	28	3	(12.4)	6.4	11.4	I b 4	18		

H-13の土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	分類	接合 破片数	接 合 状 況	挿 図	番号	遺物番号	層位	分類	接合 破片数	接 合 状 況
IV-7-22	2	8	3	I b 4	2	H-13, 7	IV-7-22	4	13	1	I b 4	1	H-11, 27
"	3	26	"	"	1		"	5	28	3	"	4	

H-13の石器

挿 図	番号	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接 合 状 況	備 考
IV-7-22	6	10	スクレイパー	III B 9	4.0×3.1×0.9	9.9	黒曜石	4	P-38-d V層1 N-37-c V層59 N-38-b V層25	
"	7	4	たたき石	VA 9	8.6×7.3×4.6	395.3	安山岩	"		
"	8	12	すり石	VIA 5	11.9×9.5×5.4	742	"	3		
"	9	14	砥 石	VII B 2	14.7×10.8×3.4	536	砂 岩	4		
"	10	15	石 皿	VII B 1	10.7×9.8×3.4	485.2	"	"		

H-15の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-26	1	P-39-a・22	V	(23.7)	—	(24.7)	I b 4	79	P-39-a 24・27・29・30~35・38	
"	2	P-39-a・28	"	(19.7)	(9.6)	(10.7)	"	34		

H-15の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接 合 状 況	備 考
IV-7-29	1	P-39-a	20	石 錐	II A 1	4.3 × 1.8 × 0.6	4.2	黒曜石	7	P-39-a・15層16 P-39-a・15層22 O-39-b・15層14	
"	2	"	19	"	II A 2	(5.5) × 1.7 × 1.9	(9.8)	"	"		
"	3	"	18	つまみ付きナイフ	III A 1	4.1 × 2.5 × 0.4	5.9	珪 岩	"		
"	4	P-38-c	35	スクレイパー	III B 9	6.7 × (2.8) × 1.1	(28.4)	黒曜石	"		
"	5	P-39-a	14	"	"	(4.3) × 3.7 × 0.9	(12.6)	"	"		
"	6	O-39-b	12	"	"	4.5 × 2.6 × 0.4	5.4	"	"		
"	7	"	11	石 核	IX A	3.0 × 2.8 × 2.3	20.6	"	"		
"	8	P-39-a	HP-1・1	石 斧	IVA 8	(25.3) × 9.4 × 3.2	(992)	蛇紋岩	15		
"	9	P-37-a	1	"	"	(3.3) × 6.3 × 1.4	(30.1)	"	7		
IV-7-30	10	P-39-a	9	たたき石	VA 2	10.3 × 6.9 × 4.2	391.9	安山岩	6		
"	11	P-38-d	22	すり石	VIA 5	11.3 × 9.8 × 3.0	556	蛇紋岩	4		
"	12	P-39-a	2	"	"	11.2 × 8.5 × 5.6	696	泥 岩	15		
"	13	P-38-d	33	砥 石	VII B 2	(11.0) × (10.7) × 4.4	(674.8)	砂 岩	4		
"	14	P-39-a	25	"	"	(11.5) × (11.8) × 4.8	(844.2)	"	7		
"	15	"	15	"	VII B 9	(16.0) × 11.7 × 9.8	(1,665)	"	6		

H-17の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-32	1	P-35-d・1	V	—	9.4	(9.5)	I b 4	26	P-35-d 5・6・8, O-35-b 1	

IV 遺構と遺物

H-17の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-7-32	2	O-35-b	2	スクレイパー	III B 8	(3.5)×(3.2)×0.6	(8.8)	黒曜石	V		
"	3	P-35-d	11	石 斧	IVA 8	21.8 × 8.6 × 2.9	635	蛇紋岩	"		
"	4	P-35-a	1	す り 石	VIA 5	11.4 × 5.8 × 3.6	3,002	"	"		
"	5	P-35-d	12	"	VIA 5	10.6 × 9.8 × 5.1	743	砂 岩	"		
"	6	"	14	"	"	11.8 × 9.6 × 4.2	642	安山岩	"		
IV-7-33	7	"	13	砥 石	VII B 2	(27.5)×(20.8)×3.5	2,810	砂 岩	"		

遺物集中1の土器

挿 図	番号	遺物番号	分 類	接 合 数 破片数	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	分 類	接 合 数 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-36	1	I-40-a・109	I b 4	2	I-40-a・6, 33, 57, 78, 80, 84, 109, 123	IV-7-36	12	I-39-d・10	I b 4	4	I-40-a・92
"	2	I-40-a・48	"	2		"	13	I-40-a・45	"	4	
"	3	I-40-a・17	"	1		"	14	I-40-a・65	"	4	I-40-a・70, 85
"	4	I-40-a・92	"	4		"	15	I-40-a・63	"	4	I-40-a・82, 87
"	5	I-40-b・59	"	1		"	16	I-38-b・33	"	6	I-38-b・36
"	6	I-40-b・17	"	1		"	17	I-38-c・91	"	3	
"	7	I-40-a・60	"	20		"	18	I-40-a・26	"	4	
"	8	I-40-a・71	"	3		"	19	I-40-a・34	"	9	I-40-a・31, 35, 50, 62, 89, I-40-d・11
"	9	I-40-a・81	"	2		"	20	I-40-b・34	"	8	I-40-b・63
"	10	I-40-a・81	"	8		"	21	I-40-b・63	"	33	H-8・35, 36
"	11	I-40-a・42	"	7		"	22	I-40-a・32	"	2	I-39-a・3

遺物集中1の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-7-37	1	I-40-a	124	つまみ付きナイフ	III A 1	3.4 × 1.6 × 0.5	3.2	珪 岩	V		
"	2	J-41-a		スクレイパー	III B 9	2.9 × 2.0 × 0.5	2.2	黒曜石	"		
"	3	I-40-b	28	"	"	3.0 × 2.2 × 0.5	2.8	"	IV		
"	4	"	5	"	"	8.1 × 1.8 × 0.6	9.8	"	V		
"	5	"	38	す り 石	VIA 5	10.9 × 9.8 × 4.4	603.0	安山岩	"		
"	6	J-40-a	5	"	VIA 1	18.0 × 9.7 × 5.7	992.0	"	"		
"	7	I-40-b		"	"	(9.3) × 5.4 × 5.0	(348.1)	砂 岩	"		
"	8	I-39-d		"	"	11.8 × 9.1 × 5.3	576	"	"		
"	9	I-40-b	43	砥 石	VII B 2	(16.3)×(6.4)×2.7	(378.0)	"	"		
"	10	I-40-a	99	"	"	(19.0)×13.8×5.3	(2,071)	"	"		
IV-7-38	11	I-40-b	57	"	"	(29.7)×17.3×9.2	(6,500)	"	"		

遺物集中2の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 数 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-40	1	I-38-c・1	V	35.9	—	(31.8)	I b 4	78	I-38-C・2, 3, 4, J-38-d・1~6, 10~15, 17, 18, 25, 31	

遺物集中2の土器

挿	図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況	挿	図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-41		1	I-38-c・17	I b 4	1		IV-7-41	10	I-38-c・65	I b 4	6	J-38-d・22	
"		2	I-38-c・18	"	2		"	11	I-38-c・1	"	3	7~14は同一個体	
"		3	I-38-c・27	"	5	I-38-c・18, 22, 23	"	12	J-38-d・19	"	1		
"		4	I-38-c・23	"	11	I-38-c・12, 18, 19	"	13	I-38-c・69	"			
"		5	I-38-c・75	"	9	I-38-c・65, 69	"	14	I-38-c・17	"			
"		6	I-38-c・15	"	4	I-38-c・17, 23	"	15	J-39-a・3	"		I-39-b・1 J-39-a・4, 29	
"		7	I-38-c・76	"	4	I-38-c・69, 75	"	16	I-38-c・65	"		15, 16は同一個体	
"		8	I-38-c・17	"	6	I-38-c・31	"	17	I-38-c・1	"		J-38-d・22	
"		9	I-39-b・1	"	8	I-39-b・29, J-39-a・3, 4	"	18	J-38-d・19	"			

遺物集中2の石器

挿	図	番号	発掘区	遺物番号	名称	分類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石質	層位	接合状況	備考
IV-7-41		19	J-39-a	42	石 鉄	IA 8	(1.8)×(1.0)×0.2	(0.5)	黒曜石	V		
"		20	I-38-c		"	"	(2.3)×1.5×0.3	(0.8)	"	"		
"		21	J-39-a	31	スクレイパー	III B 9	7.4×3.2×0.6	16.5	"	"		
"		22	I-38-c	20	"	III B 8	(3.2)×4.0×1.3	15.9	"	"		
"		23	"	32	"	"	(2.1)×(2.9)×0.5	(3.1)	"	"		

遺物集中3の実測土器

挿	図	番号	遺物番号	層位	大 き さ (cm)			分類	接合 破片数	接 合 状 況	備考
					口 径	底 径	器 高				
IV-7-45		1	N-37-C・107	V	21.4 23.3	11.5	33.6	I b 4	44	N-37-C・190, 195, 210, 215, 217, 230	脂肪酸 分析
"		2	N-38-b・33	V	22.6	—	17.8	"	82	N-38-b・15	
"		3	N-37-c・62	V	17.8	8.4	15.7	"	16	N-37-c・69, O-37-d・47 O-38-a・1, 3	
"		4	N-37-c・5	V	(23.1)	(10.7)	(20.8)	"	48	N-37-c・7, 33, 109, 195, 234, 240, 241, 254	脂肪酸 分析
"		5	N-37-c・75	V	15.9	7.2	14.7	"	25	N-37-c・78, 82, 85, 140, 142, 219	
"		6	N-37-C・183	V	—	(7.1)	(7.2)	"	8	N-37-c・222	

遺物集中3の土器

挿	図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況	挿	図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-46		7	N-37-c・108	I b 4	5		IV-7-46	17	N-37-c・85	I b 4	2		
"		8	O-37-d・15	"	8	O-37-d・7	"	18	N-37-c・93	"	3		
"		9	O-37-d・45	"	5	N-38-c・3, 5	IV-7-47	19	N-37-c・134	I b 3	2		
"		10	O-38-a・2	"	4	N-37-c・105, O-37-d・33	"	20	N-37-d・9	I b 4	2	N-37-c・22	
"		11	N-37-c・91	"	9	N-37-c・42	"	21	N-37-c・156	"	4	N-37-c・87, 172	
"		12	N-37-c・97	"	18	N-37-c・36, 95, 180, 185, 193, 257	"	22	N-37-c・101	"	3	N-37-c・166, 232	
"		13	N-37-c・94	"	4	O-37-d・47	"	23	N-37-c・134	"	2	N-37-c・133	
"		14	N-37-c・93	"	3		"	24	N-37-c・48	"	7		
"		15	N-37-c・185	"	18	N-37-c・36, 95, 97, 135, 192, 193, 257, O-37-d・15	"	25	N-37-c・81	"	20	N-37-c・82, 161, 165, 171, 229, 235	
"		16	N-37-c・93	"	1								

IV 遺構と遺物

遺物集中3の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接合状況	備 考
IV-7-48	1	N-38-b	—	石 鎌	IA2a	2.3×(0.7)×0.2	(0.3)	黒曜石	V		
"	2	N-37-c	194	"	"	2.1×0.9×0.2	0.4	"	"		被熱白化
"	3	O-37-a	17	"	"	2.2×0.9×0.2	0.4	"	"		
"	4	N-37-c	147	"	"	2.5×1.0×0.3	0.7	"	"		被熱白化
"	5	O-37-d	43	"	"	2.5×1.1×0.3	0.6	"	"		
"	6	N-37-c	41	"	"	(2.0)×1.2×0.3	(0.6)	"	"		
"	7	O-37-a	7	つまみ付きナイフ	III A 1	3.5×2.3×0.5	3.7	"	"		
"	8	"	14	"	"	(3.9)×(3.3)×0.5	5.0	珪 岩	"		
"	9	N-37-c	35	"	III A 3	(4.2)×2.2×0.7	(7.1)	黒曜石	"		
"	10	"	70	"	"	(3.3)×(2.4)×0.5	(2.2)	珪 岩	"		
"	11	"	72	"	III A 1	(2.2)×1.8×(0.6)	(2.7)	"	"		
"	12	"	51	"	III A 8	(2.4)×1.9×0.5	(2.6)	"	"		
"	13	"	237	"	"	(2.4)×2.0×0.6	(3.2)	"	"		
"	14	N-37-b	10	"	"	(3.0)×2.7×0.4	3.9	"	"		
"	15	O-37-d	18	スクレイパー	III B 9	3.1×3.7×0.7	7.0	黒曜石	"		
"	16	N-37-c	22	"	"	5.0×2.7×1.2	11.6	"	"		
"	17	O-37-a	8	石 斧	IV A 8	(3.1)×(4.2)×2.8	(22.0)	蛇紋岩	"	N-37-c・ V層41	
"	18	N-37-c	1	"	"	4.4×2.5×0.8	10.1	緑色泥岩	"		
"	19	O-37-a	10	す り 石	VIA 5	10.6×(6.4)×4.3	(295.1)	安山岩	"		
"	20	N-37-c	59	砥 石	VII B 2	10.7×9.8×3.4	485.2	砂 岩	"	P-38-d・1 N-38-b・25 H-13・15	

遺物集中4の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層位	接合状況	備 考
IV-7-51	1	P-38-d	4	石 鎌	IA 8	1.8×0.7×0.2	0.4	黒曜石	V		
"	2	P-38-a	29	"	IA2a	(2.6)×0.9×0.3	(0.5)	"	"		
"	3	"	11	槍先・ナイフ	IB 2	(4.0)×2.9×1.2	(9.4)	"	"		
"	4	"	81	スクレイパー	III B 8	5.2×(2.4)×1.2	(11.7)	"	"		
"	5	"	72	"	"	(2.1)×1.2×0.3	(0.7)	"	"		
"	6	"	72	"	"	(2.1)×1.2×0.5	(1.5)	"	"		
"	7	"	22	砥 石	VII B 2	(12.7)×(8.7)×(2.0)	(277.3)	砂岩	"	P-41-a1層77 P-38-a5層14	

遺物集中4の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-52	1	P-38-a・21	V	28.9	—	(27.6)	I b 4	58	P-38-a・24, 41~43, 49, 65, 67, 69, 74~76, 80~82	
"	2	P-38-a・23	V	23.5	—	(12.7)	"	38	P-38-a・29, 31, 32, 34, 38, 52, 59, 79, 80, 81, 88	

遺物集中4の土器

挿 図	番号	遺物番号	分 類	接 合 破片数	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	分 類	接 合 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-52	3	P-38-a・58	I b 4	4	P-38-a・55, 57	IV-7-52	5	P-38-a・37	I b 4	5	P-37-a・36, 37
"	4	P-38-d・54	"	4	P-38-a・57, 58, 59	"	6	P-38-a・18	"	7	P-38-a・18, 37, 38, 40, 79, 77

遺物集中5の土器

挿 図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-54	1	P-39-d・56	I b 4	20	P-39-d・47, 72	IV-7-54	5	P-40-a	I b 4	4	
"	2	P-41-a・54	"	2		"	6	P-40-a	"	3	
"	3	P-39-d・61	"	10	O-39-d・19, 20, 60, 63, 67 P-40-a・5	"	7	P-40-a	"	3	
"	4	P-39-d・37	"	12	P-39-d・77	"	8	P-40-a・8	"	2	

遺物集中5の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-7-54	9	P-39-c	66	石 鏃	IA2a	(2.3)×0.9×0.2	0.5	黒 曜 石	V		
"	10	P-39-c	3	ス ク レ イ バ ー	III B 8	4.3×2.1×0.6	5.8	頁 岩	VI		
"	11	O-39-c	2	す り 石	VA 1	13.8×6.5×6.0	614	緑 色 泥 岩	"		

遺物集中6の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分類	接合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-58	1	N-41-c・88	青灰色粘質土	28.7	10.5	29.8	I b 4	43	N-41-c	
"	2	O-41-d・53	イ	(29.1)	(10.6)	(30.2)	"	78	O-41-d・53, 54, 134, 135, 141, 144, 148	
"	3	H-12-フク土	VI	25.2	12.3	26.3	"	101	H-12-14, N-40-b・15, N-41-c・28, 32, 36, 46, 59, 63, 92, 95, 97~100, 115~117, 120, O-41-a・48, 65, O-41-c・29, 30, O-41-d・3, 8, 9, 11, 28, 45, 50, 57, 60, 63, 87, 118, 131, 132	
"	4	P-41-a・60	青灰色粘質土	(19.8)	13.6	(10.4)	"	33	P-41-a・60, 63, 64, 76	
"	5	P-40-d・67	V	(25.3)	(23.4)	(17.9)	"	60	P-38-不明, P-40-c・4, 7, 8, 10, 12, 13, 15, 18, 19, P-40-d・67, 88, 91, P-41-a・ 灰底, P-45-c・17	

遺物集中6の土器

挿 図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	分類	接合 破片数	接合・同一個体分布状況
IV-7-59	1	O-41-b・57	I b 4	54	O-41-b・56, 57, 87	IV-7-59	9	O-41-d・141	I b 4	1	
"	2	N-41-c・70	"	4	N-41-c・70, 106, 126	"	10	O-41-d・42	"	7	O-41-d・10 O-41-a・53, 54, 57
"	3	N-41-c・12	"	7	N-41-c・12, 14, 21, 29, 30, 32	"	11	O-41-a・53	"	2	O-41-a・57
"	4	N-41-c・11	"	22	N-41-c・11, 15, 31, 40, 57, 105, 124, 125, 126	"	12	O-41-a・36	"	1	
"	5	N-41-c・61	"	8	N-41-c・61, 72, 73, 109	"	13	N-41-c・120	"	1	
"	6	O-40-d・13	"	2	O-40-d・13, 14	"	14	N-41-c・110	"	3	
"	7	N-41-c・111	"	3	N-41-c, 111, 114	"	15	O-41-d・44	"	2	O-41-d・144
"	8	N-41-c・6	"	1	8, 9, 10は同一個体	"	16	N-41-c・58	"	2	

IV 遺構と遺物

遺物集中6の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-7-60	1	P-41-a	—	石 鏃	IA2a	(1.6)×1.2×0.2	(0.4)	黒曜石	VII		被熱白化
"	2	O-41-d	109	"	"	(2.1)×0.9×0.2	(0.4)	"	"		被熱白化
"	3	P-41-a	—	"	"	2.7×1.1×0.2	0.9	"	"		被熱白化
"	4	P-41-a	—	"	"	3.9×1.7×0.6	3.3	"	青灰色 粘質土		
"	5	P-40-d	93	"	"	2.0×0.9×0.2	0.3	"	V		
"	6	P-41-a	—	"	"	1.9×(0.7)×0.2	(0.4)	"	VII		沢 底
"	7	N-41-c	69	"	"	1.9×1.0×0.2	0.4	"	"		
"	8	O-41-d	49	"	"	(1.8)×1.1×0.2	(0.5)	"	V		被熱白化
"	9	P-41-a	—	"	IA3	(1.7)×1.3×0.2	(0.4)	"	VII		
"	10	O-41-d	64	"	"	2.2×1.4×0.3	0.5	"	V		
"	11	P-41-a	13	"	"	2.3×2.1×0.2	0.6	"	"		
"	12	O-41-b	71	"	"	2.7×1.6×0.2	0.9	"	I		
"	13	P-40-c	9	槍先・ナイフ	IB2	15.0×3.5×1.7	72.6	"	V	P-40-c V層11	
"	14	N-41-c	17	石 鏃	IIA1	(4.2)×3.7×2.1	(26.0)	"	"		
"	15	N-42-b	5	つまみ付きナイフ	IIIA3	6.3×2.7×0.6	10.1	"	I		
"	16	O-41-c	31	"	"	4.5×4.5×0.5	6.3	"	V		
"	17	O-41-d	144	"	IIIA1	5.3×2.0×0.4	6.1	頁 岩	I		
"	18	O-41-b	66	"	"	7.0×3.7×0.9	17.6	珪 岩	VII		
"	19	O-41-c	32	石 斧	IVA8	(4.4)×(1.6)×1.0	(6.9)	蛇 紋 岩	"		
"	20	O-41-d	53	"	"	(3.1)×(2.9)×1.4	(11.1)	"	V		
"	21	O-41-b	64	"	"	(5.4)×6.5×1.1	(38.4)	"	VII	O-41-b I層61	
"	22	O-42-a	22	土 製 品	—	4.5×4.0×0.8	16.9	"	I		
"	23	O-41-d	155	"	—	2.8×(2.6)×0.7	(4.5)	"	"		
IV-7-61	24	P-41-a	30	石 斧	IVA3	13.4×5.0×1.6	149.1	片 岩	V		
"	25	N-41-c	23	た た き 石	IVA3	(8.6)×8.3×5.4	(437.2)	安 山 岩	"		
"	26	N-41-c	129	"	"	9.5×6.9×5.4	496.6	"	青灰色 粘質土		
"	27	"	129	"	IVA9	13.3×8.2×5.1	685	"	"		
"	28	N-42-b	4	"	VA3	9.0×5.5×6.2	508	"	I		
"	29	"	6	す り 石	VIA1	17.4×11.5×6.8	1,790	"	"		
"	30	O-41-a	37	"	"	13.8×7.2×6.1	608	"	V		
"	31	O-41-b	67	"	VIA2	13.0×10.4×4.0	810	"	VII		
"	32	O-41-b	30	砥 石	VII B3	34.1×13.7×9.5	5,100	砂 岩	V		

V層の実測土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	大 き さ (cm)			分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	備 考
				口 径	底 径	器 高				
IV-7-62	1	N-39-b・10	V	(32.3)	10.9	41.7	I b 4	127	N-39-b・11・13・14・17・23・24・27・29・ 30~32・44~46・48~50・53・54・56, N-38-c・ 21・41	
"	2	O-36-a・6	"	17.0	10.5	9.7	I b 5	18	O-36-a・9, O-36-d・14・15	
"	3	N-36-b・7	"	—	(9.4)	(8.1)	"	15	N-36-b・8・9・11・21・25・26	

V層の土器

挿 図	番号	遺物番号	層位	分 類	接 合 破片数	接 合 状 況	挿 図	番号	遺物番号	層位	分 類	接 合 破片数	接 合 状 況
IV-7-62	4	N-36-b・1	V	I b 5	9	N-36-b・89	IV-7-62	8	O-36-d・1	V	I b 5	1	
"	5	O-36-b・20	"	"	3	O-36-d・28	"	9	O-36-d・10	"	"	1	
"	6	O-36-d・19	"	"	1		"	10	O-40-d・10	"	"	4	
"	7	O-37-a・11	"	"	3	O-37-a・18 O-37-d・65	"	11	O-36-a	"	"	14	

V層の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-7-63	1	I-41-d	54	石 鏃	IA3	1.1×1.3×0.3	0.4	黒曜石	V		
"	2	J-33-a	—	"	"	2.0×1.3×0.2	0.4	"	"		
"	3	P-36-a	2	"	IA2b	(2.0)×0.9×0.2	(0.2)	"	"		
"	4	N-36-c	23	"	IA2a	2.4×0.8×0.2	0.4	"	"		
"	5	N-37-b	4	"	"	2.9×1.0×0.3	0.6	"	"		
"	6	H-38-b	3	"	"	(3.6)×1.5×0.3	(1.5)	"	"		
"	7	N-38-c	9	つまみ付きナイフ	III A1	6.9×2.9×0.7	15.0	珪 岩	"		
"	8	O-36-d	31	"	"	4.8×2.2×0.6	7.2	"	"		
"	9	O-36-d	38	スクレイパー	III B8	(4.0)×2.9×1.3	(12.1)	"	"		
"	10	J-41-d	—	"	III B3	3.2×2.0×0.8	5.4	黒曜石	"		
"	11	O-36-d	37	"	III B9	7.5×7.3×1.4	66.0	珪 岩	"		
"	12	I-41-d	38	"	"	6.2×4.0×1.4	42.3	安山岩	"		
"	13	P-37-a	1	石 斧	IVA8	(3.4)×3.6×0.9	(9.2)	蛇紋岩	"		
"	14	N-37-b	5	石 の み	IVB1	2.4×1.8×0.5	3.3	"	"		
"	15	O-36-d	2	石 斧	IVA5	4.4×3.5×0.5	11.8	緑色泥岩	"		
"	16	I-41-c	74	"	"	(6.8)×6.0×1.3	(71.6)	蛇紋岩	"		
"	17	N-36-c	10	た た き 石	VA3	7.9×7.1×3.6	239.8	安山岩	"		
"	18	L-28-b	80	"	"	9.6×7.5×3.6	361	"	"		
"	19	I-41-d	36	す り 石	VIA2	9.8×6.0×3.1	282.3	"	"		
"	20	N-40-c	5	"	VIA5	9.0×(4.9)×4.3	(216.0)	"	"		

H-4の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合 破片数	接合状況
IV-8-4	1	—	HP-12内	I b 2	2	

H-9の土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-8-5	1	H-9-7	HF-2上	IIIa-1		IV-8-5	6	H-3-102	床 上	IIIa-1	
"	2	H-9-83	床 上	IIIa-1		"	7	K-25-b・253	III	IIIa-1	
"	3	H-9-21	F-3焼土直上	IIIa-1		"	8	H-9-166	床 上	IIIa-1	
"	4	H-9-214	床 上	IIIa-1		"	9	H-9	III 下	IIIa-2	
"	5	H-9-8	III 下	IIIa-1		"	10	H-9-168	床 上	IIIa-1	

IV 遺構と遺物

H-9 周辺の土器

挿 図	番号	発掘区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	発掘区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-8-9	1	K-25-b	III	III a-1		IV-8-11	36	K-25-b	III	III a-1	
"	2	K-25-b	III	"		"	37	K-25-b	III	"	
"	3	H ⁹ HF-1	直 上	"		"	38	K-25-b	III	"	
"	4	K-25-b	III	"		"	39	K-25-b	III	"	
"	5	K-26-b	III	"		"	40	K-25-b	III	"	
"	6	K-25-a	III	"		"	41	K-25-b	III 下	"	
"	7	K-25-b	III	"		"	42	K-25-b	III	"	
"	8	K-25-b	III	"		"	43	K-25-b	III	"	
"	9	K-25-b	III	"		"	44	K-25-b	III	"	
"	10	K-25-b	III	"		"	45	K-25-b	III	"	
"	11	K-25-b	III	"		"	46	K-25-b	III	"	III下
"	12	K-25-b	III	"	IV上	"	47	K-25-b	III	"	
"	13	K-25-b	III	"		"	48	K-25-b	III	"	
"	14	K-25-b	IV 上	"		"	49	K-25-b	IV 直上	"	
IV-8-10	15	K-25-b	III 上	"	III下, IV上	"	50	K-25-b	III	"	
"	16	K-25-b	III	"		"	51	K-25-b	III	"	
"	17	K-25-b	III	"		"	52	K-25-b	III	"	
"	18	K-25-b	III	"		"	53	K-25-b	III	"	
"	19	K-25-b	III	"		"	54	K-25-b	III 下	"	
"	20	K-25-b	III	"		"	55	L-26-b	I	"	
"	21	K-25-b	III	"		"	56	I-25-c	III	"	
"	22	K-25-b	III	"		"	57	I-25-c	III	"	
"	23	K-25-b	III	"		"	58	K-25-b	III	"	
"	24	K-25-b	III	"		"	59	K-24-c	III 下	"	
"	25	K-25-b	III	"		"	60	K-24-c	IV 上	"	
"	26	K-25-b	III	"		"	61	K-24-c	III 下	III a-2	
"	27	K-25-b	III	"		"	62	L-25-d	III 下	"	
"	28	K-25-b	III	"		"	63	K-25-c	III	"	
"	29	K-25-b	III	"	IV?上	"	64	K-25-c	III 下	"	
"	30	K-25-b	III	"	III下	"	65	K-25-c	III 下	"	
"	31	K-25-b	III	"		"	66	K-25-c	III	"	
"	32	K-25-b	III	"		"	67	K-25-d	?	"	
"	33	K-25-b	III	"		"	68	L-25-d	III 下	"	
"	34	K-25-c	III	"		"	69	K-25-c	III	"	
"	35	K-25-b	III	"							

H-9とその周辺の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	層位	接合状況	備 考
IV-8-12	1	K-25-a	249	石 鏃	IA 3	2.9 × 1.5 × 2.0	0.6	黒曜石	IV		
"	2	H-9	95	"	IA 5	2.4 × 1.7 × 0.3	1.0	"	Ⅲ下		
"	3	"	"	"	IA 5	(2.8) × 1.6 × 0.3	(1.2)	"	HF-1		
"	4	"	212	"	IA 5	3.3 × 1.6 × 0.3	1.2	"	床		
"	5	K-24-c	96	"	IA 5	3.5 × 1.6 × 0.3	1.5	"	Ⅲ下		
"	6	K-24-d	104	"	IA 5	2.8 × 1.3 × 0.3	1.2	"	IV		
"	7	J-24-c	2	"	IA 5	(1.9) × 1.6 × 0.3	(1.3)	"	"		
"	8	K-24-c	112	槍先・ナイフ	IIA 2	(2.8) × 2.1 × 0.4	(1.8)	"	Ⅲ		
"	9	H-9	"	"	IIA 2	(3.2) × 2.3 × 0.4	(3.3)	"	Ⅲ下		覆 土
"	10	K-24-d	110	石 鏃	IA 8	(1.6) × 1.4 × 0.2	(0.4)	"	IV		
"	11	"	66	つまみ付きナイフ	III A 3	5.5 × 1.7 × 0.7	6.4	珪 岩	"		
"	12	K-24-b	65	"	III A 3	7.0 × 2.6 × 1.1	19.0	"	"		
"	13	"	67	"	III A 3	6.6 × 2.7 × 0.3	6.0	"	"		
"	14	K-24-d	188	"	III A 3	4.2 × 2.9 × 0.5	7.2	黒曜石	"		
"	15	"	60	"	III A 3	1.9 × (1.8) × 0.7	(2.3)	珪 岩	"		
"	16	K-24-a	37	"	III A 2	5.6 × 2.3 × 0.8	9.0	黒曜石	"		
"	17	K-25-c	97	スクレイパー	III B 9	(5.0) × 2.6 × 0.5	(7.2)	珪 岩	Ⅲ下		
"	18	K-24-c	286	"	III B 9	5.3 × 2.9 × 1.3	20.0	"	IV		
"	19	H-9	179	"	III B 8	3.0 × (2.3) × 0.6	(4.3)	"	床		直 上
"	20	K-24-d	123	"	III B 8	2.5 × (2.0) × 0.5	(2.8)	"	IV		
"	21	K-24-d	79	"	III B 8	(2.4) × (2.1) × 0.5	(2.6)	"	"		
"	22	K-24-a	28	"	III B 9	3.3 × 2.7 × 0.8	9.0	黒曜石	"		直 上
"	23	H-9	97	"	III B 9	(2.6) × 2.6 × 0.6	(5.2)	珪 岩	床		"
"	24	"	125	フ レ イ ク	IX B	(4.0) × 3.3 × 0.5	(7.4)	"	"		"
"	25	"	282	石 斧	IVA 8	(5.4) × 4.2 × 0.8	(25.7)	泥 岩	"		
"	26	K-24-c	295	"	IVA 3	6.7 × 3.2 × 0.8	23.7	片 岩	IV		
"	27	"	273	"	IVA 3	5.2 × 2.6 × 0.4	10.4	"	IV		直 上
"	28	K-25-a	67	"	IVA 3	(5.9) × 4.5 × 1.2	(58.1)	"	Ⅲ		
"	29	K-25-c	12	"	IVA 3	(8.1) × 4.1 × 0.8	(49.8)	"	"		
IV-8-13	30	K-24-d	113	た た き 石	VA 2	7.6 × 6.5 × 3.4	241.0	安山岩	IV		
"	31	K-24-c	63	"	VA 2	6.4 × 5.3 × 4.7	181.9	"	Ⅲ下		
"	32	"	232	"	VA 3	(9.3) × (0.8) × (4.9)	(430.9)	"	IV		直 上
"	33	K-25-b	401	"	VA 2	(8.2) × 4.5 × 1.6	(99.3)	緑色片岩	Ⅲ下		
"	34	K-24-c	277	"	VA 3	11.0 × 5.3 × 3.6	282.4	安山岩	IV		直 上
"	35	K-24-d	62	た た き 石	VA 1	11.0 × 6.2 × 3.7	276.8	"	IV		直 上
"	36	K-25-b	131	"	VA 3	(9.6) × 6.3 × 3.6	(294.2)	"	Ⅲ		
"	37	"	21	"	VA 3	12.8 × 8.9 × 5.6	845	"	"		
"	38	K-24-d	20	"	VA 3	13.0 × 7.8 × 3.0	412.6	"	"		
"	39	L-24-a	"	"	VA 2	14.8 × 6.2 × 3.9	543	"	IV		直 上
"	40	K-24-a	10	"	VA 2	14.8 × 9.0 × 4.1	655	"	"		"
"	41	K-24-d	118	す り 石	VIA 5	6.1 × 5.7 × 4.3	202.4	"	"		"
"	42	K-24-c	43	"	VIA 5	(7.7) × 7.5 × 3.7	(302.5)	"	Ⅲ下		
"	43	K-24-a	54	"	VIA 5	10.4 × 9.3 × 4.3	526	"	IV		
"	44	H-9	295	石 皿	VIB 1	(12.3) × (16.5) × 5.0	(1,086)	砂 岩	床		
"	45	K-24-c	24	砥 石	VIB 2	16.5 × 12.7 × 1.7	444	"	Ⅲ下		
"	46	K-25-b	171	"	VIB 2	19.5 × (9.5) × 2.5	598	"	"		
"	47	H-9	238	"	VIB 2	23.5 × (18.5) × 3.0	1,645	"	床		H-9・床256 K-24-c・Ⅲ下106 L-28-b・Ⅲ層30 L-28-c・Ⅲ層60
"	48	H-9	209	"	VIB 2	(21.0) × (16.3) × 3.0	834	"	"		H-9・床147 " 180 " 183 K-24-c・Ⅲ下194 K-24-d・Ⅳ上56 " 59 " 85 " 145 " 150 K-24-c・Ⅲ下195 K-25-c・Ⅲ層14
"	49	K-25-b	98	石 核	IXA	10.7 × 7.0 × 3.9	295.4	安山岩	Ⅲ		

IV 遺構と遺物

Tピットの土器

挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	遺物番号	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-8-27	1	TP-1	覆 土	Ⅲa-2	すべて同一個体	IV-8-27	2	TP-19	覆 土	Ⅲa-2	

遺物集中7の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-8-30	2	L-28-b	37	石 鉄	IA 5	(2.7)×1.5×0.4	(1.2)	黒曜石	Ⅲ		
"	3	L-29-a	1	"	"	(3.2)×2.0×0.4	(1.9)	"	"		
"	4	L-28-b	4	槍先・ナイフ	ⅡB 1	(2.8)×2.3×0.5	(3.7)	"	"		
"	5	L-28-c	6	"	ⅡB 8	7.9×4.4×0.9	20.8	"	"		
"	6	L-28-a	24	石 斧	IVA 5	(7.3)×5.3×1.0	(68.6)	片 岩	"		
"	7	L-29-a	9	"	IVA 3	(8.8)×6.0×1.9	(139.0)	"	"		
"	8	L-28-d	5	た た き 石	VA 3	7.1×6.0×3.8	211.4	安山岩	"		
"	9	L-28-c	71	"	"	10.8×7.5×4.5	494.9	"	Ⅳ		
"	10	L-28-a	9	"	"	9.4×6.8×4.1	378.4	"	Ⅲ		
"	11	L-29-b	6	"	VA 8	(7.9)×(5.5)×4.4	(134.9)	"	"		
"	12	L-28-a	46	"	VA 2	10.0×10.0×1.3	324.6	"	"		
"	13	L-28-b	76	"	VA 3	15.0×6.7×5.0	616	"	Ⅳ		
"	14	L-28-b	72	砥 石	ⅦB 9	18.5×10.0×7.4	1,660	"	"		

III・IV層の土器

挿	図	番号	出土区	層	位	分類	接合・同一個体分布状況	挿	図	番号	出土区	層	位	分類	接合・同一個体分布状況
IV-8-31		1	I-41-b	V	層	I b-5		IV-8-32		53	K-26-a	IV	層		
"		2	I-42-b	II	層	"		"		54	L-25-d	III	下層		
"		3	I-42-b	II	層	"		"		55	I-25-c	III	層		
"		4	J-41-d	V	層	"		"		56	I-25-b	III	層		
"		5	I-42-b	II	層	"		"		57	K-26-a	IV	層	III a-2	
"		6	I-42-b	II	層	"		"		58	K-26-a	IV	層	"	
"		7	J-41-d	V	層	"		"		59	K-26-a	IV	層	"	
"		8	I-41-d	V	層	"		"		60	K-26-a	IV	層	"	
"		9	I-42-b	II	層	"		"		61	I-25-c	IV	層	"	
"		10	I-42-b	III	層	"		"		62	L-29-d	III	層	"	
"		11	I-42-b	II	層	"		"		63	L-29-d	III	層	"	
"		12	J-41-d	V	層	"		"		64	L-29-d	III	層	"	
"		13	I-41-c	V	層	"		"		65	L-29-a	III	層	"	
"		14	J-42-a	V	層	"		"		66	L-29-a	III	層	"	
"		15	I-42-b	II	層	"		"		67	L-29-a	III	層	"	
"		16	J-42-a	V	層	"		"		68	L-29-a	III	層	"	
"		17	I-41-c	V	層	"		"		69	L-29-a	III	層	"	
"		18	J-41-d	II	層	"		"		70	L-29-a	III	層	"	
"		19	J-42-a	V	層	"		"		71	L-29-d	III	層	"	
"		20	I-41-d	V	層	"		"		72	L-29-d	III	層	"	
"		21	I-42-b	II	層	"		"		73	L-29-a	III	層	"	
"		22	J-42-a	V	層	"		IV-8-33		74	O-41-b	II	層	II a	0-41-b・III, 0-41-c・V 0-41-b・IV
"		23	I-41-d	V	層	"		"		75	I-41-c	II	層	III b	J-41-d・II
"		24	J-42-a	V	層	"		"		76	I-39-c	II	層	"	
"		25	I-42-a	II	層	"		"		77	I-41-d	V	層	II a-2	
"		26	J-41-d	V	層	"		"		78	I-41-d	V	層	"	
"		27	J-41-d	V	層	"		"		79	I-41-d	V	層	"	
"		28	I-41-d	V	層	"		"		80	I-41-d	III	層	"	
"		29	I-41-c	II	層	"		"		81	I-41-d	III	層	"	
"		30	J-40-d	II	層	"		"		82	I-41-d	III	層	"	
"		31	I-42-b	II	層	"		"		83	I-41-d	V	層	"	
"		32	I-41-d	V	層	"		"		84	I-42-a	耕作土		III b	
"		33	I-41-d	V	層	"		"		85	I-40-c	I	層	"	
"		34	I-41-d	V	層	"		"		86	I-41-d	II	層	"	
"		35	N-26-c	IV	層	"		"		87	H-32-a	耕作土		"	
IV-8-32		36	J-26-b	III	層	III a-1	J-26-b・IV	"		88	J-41-b	II	層	"	
"		37	M-27-b	III	層	"		"		89	J-40-d	II	層	III a-1	
"		38	N-30-b	III	層	"		"		90	K-24-c	IV	層	III b	
"		39	N-30-c	III	層	"		"		91	I-37-c	II	層	"	
"		40	L-23-d	III	層	"		"		92	I-42-a	II	層	"	
"		41	J-26-c	II	層	"		"		93	J-39-d	II	層	"	
"		42	J-26-b	IV	層	"	J-25-c・IV	"		94	J-41-a	II	層	"	
"		43	K-26-b	III	層	"		"		95	I-41-c	II	層	"	
"		44	K-25-b	III	層	"		"		96	J-41-a	II	層	"	J-41-d・II
"		45	J-26-c	II	層	"		"		97	L-29-a	III	層	"	
"		46	N-30-c	III	層	"		"		98	I-42-a	II	層	"	
"		47	L-26-b	III	層	"		"		99	I-39-c	II	層	"	
"		48	J-25-d	III	層	"		"		100	J-41-d	II	層	"	
"		49	K-26-a	IV	層	III a-2	K-25-d・IV, III M-26-c・IV M-24-c・III	"		101	N-41-c	V	層	"	
"		50	M-26-c	III	層	"		"		102	J-40-a	II	層	"	
"		51	J-26-c	II	層	"	J-26-c・III	"		103	J-41-a	II	層	"	
"		52	K-26-a	IV	層	"		"		104	J-41-a	II	層	"	J-41-a・III

IV 遺構と遺物

III・IV層の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-8-34	1	H-39-b	1	石 鏃	IA:2a	2.3 × 0.8 × 0.2	0.3	黒曜石	III		
"	2	O-41-b	36	"	IA 2	2.4 × 1.0 × 0.3	0.8	"	"		
"	3	H-38-b	4	"	IA 2	(2.3)×(1.3)×0.3	(1.1)	"	"		
"	4	P-40-c	6	"	IA 2	(2.0)×1.3×0.3	(0.9)	"	IV		
"	5	P-41-a	8	"	IA 3	(1.6)×(1.1)×0.2	(0.2)	"	"		
"	6	P-41-d	4	"	IA 3	(1.7)×(1.3)×0.2	(0.4)	"	"		
"	7	L-31-d	1	"	IA 3	2.1 × 1.8 × 0.2	0.5	"	III		
"	8	J-26-c		"	IA 3	2.2 × 1.6 × 0.3	0.8	"	IV下		
"	9	L-30-a	1	"	IA 3	2.4 × 1.4 × 0.4	0.8	"	III		
"	10	H-38-b	5	"	IA 3	3.1 × (1.7) × 0.3	(1.4)	"	"		
"	11	N-41-c	20	槍先・ナイフ	IB 2	(2.8)×2.2×0.5	(3.5)	"	"		
"	12	K-30-c	1	"	IB 2	(3.8)×(2.0)×0.5	(3.9)	"	"		
"	13	N-40-c	6	スクレイパー	III B 9	2.6 × 2.4 × 0.9	3.8	"	"		
"	14	I-38-c		"	III B 9	2.5 × 1.9 × 0.3	1.8	"	"		
"	15	O-41-a	50	"	III B 2	1.9 × 1.9 × 0.5	1.9	"	"		
"	16	O-39-b	1	"	III B 9	(4.5)×4.4×1.2	(24.0)	"	"		
"	17	P-41-b	1	石 斧	IVA 3	(10.1)×(4.4)×1.6	(112.0)	片 岩	"		
"	18	I-25-d	20	"	IVA 5	(8.4)×1.4×1.3	(46.6)	緑色泥岩	"		
"	19	O-41-a	49	"	IVA 3	(6.9)×5.4×1.4	(84.2)	"	"		
"	20	O-36-c	2	た た き 石	VA 3	8.5 × 6.0 × 6.8	435.9	安山岩	"		
"	21	N-41-c	42	"	VA 2	9.7 × 9.1 × 5.6	496.1	砂 岩	IV		
"	22	O-36-c	2	"	VA 3	11.0 × 9.0 × 6.3	794.0	安山岩	III		
"	23	N-42-b	3	"	VA 3	11.1 × 6.1 × 4.9	480.2	"	IV		
IV-8-35	24	L-31-b	2	す り 石	VIA 1	(11.4)×6.5×5.2	(492.6)	"	III		
"	25	O-41-b	16	"	VIA 1	16.6 × 7.4 × 6.9	902	"	"		
"	26	N-41-b	20	"	VIA 5	10.8 × 10.3 × 4.2	603	砂 岩	"		たたき痕あり
"	27	J-41-d		台 石	VB 1	23.7 × 18.0 × 11.4	3,770	凝灰岩	"		
"	28	I-35-a	6	石 皿	VIB 1	30.6 × 9.2 × 7.1	2,975	砂 岩	"		
"	29	H-34-b		石 製 品		4.3 × 3.8 × 0.9	29.2	蛇紋岩	"		

II層の土器

挿 図	番号	出土区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況	挿 図	番号	出土区	層 位	分 類	接合・同一個体分布状況
IV-9-4	1	O-41-c	II	IV		IV-9-4	3	H-31-c	耕作土	IV	
"	2	N-42-c	II	IV							

I・II層の石器

挿 図	番号	発掘区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-9-5	1	O-42-d		石 鏃	IA3	2.5 × 1.7 × 0.2	1.0	黒曜石	II		
"	2	O-37-b		"	IA3	(2.6) × 1.4 × 0.3	(0.9)	"	I		
"	3	O-42-d		"	IA3	3.4 × 1.8 × 0.4	2.2	"	II		
"	4	O-42-a	1	"	IA3	(2.7) × 2.1 × 0.4	(2.5)	"	I		
"	5	I-41-c		"	IA5	(1.7) × 0.9 × 0.3	(0.7)	"	II		
"	6	O-42-a	3	"	IA5	(2.5) × 1.6 × 0.4	(1.1)	"	II		
"	7	M-26-a		"	IA5	(4.4) × 1.6 × 0.4	(2.0)	"	"	3点接合	
"	8	J-41-d		"	IA4	3.6 × 1.4 × 0.4	1.6	"	"		
"	9	I-42-a	4	石 槍	IB1	5.2 × 2.1 × 0.6	4.8	"	"		
"	10	I-41-b	15	"	IB1	5.6 × 2.7 × 0.8	9.4	"	"		
"	11	I-39-c	2	"	IB1	(6.1) × 3.0 × 0.5	(5.6)	"	I		
"	12	K-25-c	2	"	IB1	(7.4) × 2.4 × 0.8	(12.7)	"	II		
"	13	O-41-c	16	"	IB1	(5.9) × 2.6 × 0.8	(7.1)	"	"	O-41-c・ II層17	
"	14	J-41-d		"	IB1	(3.9) × (2.2) × 0.7	(4.4)	"	"		
"	15	I-37-d		つまみ付きナイフ	III A3	5.7 × 2.5 × 0.6	6.6	頁 岩	I		
"	16	L-26-a	1	"	III A3	(5.3) × 3.5 × 0.6	(11.1)	珪 岩	"		
"	17	P-26-d		"	III A2	(6.5) × 3.6 × 0.8	(15.7)	黒曜石	"		
"	18	K-27-c		"	III A1	4.3 × 1.8 × 0.8	5.8	"	"		
"	19	M-26-a		"	III A3	(4.8) × 3.1 × 1.1	(18.4)	珪 岩	II		
"	20	O-41-c	12	"	III A3	6.1 × 2.4 × 1.2	15.4	"	"		
"	21	P-32-a		"	III A3	(4.3) × 2.4 × 0.6	(6.2)	"	"		
"	22	M-29-a		"	III A9	(3.6) × 2.3 × 0.5	(3.4)	"	"		
"	23	M-32-c		"	III A5	3.3 × 5.7 × 0.7	9.5	黒曜石	"		
"	24	O-38-d		"	III A9	5.1 × 2.2 × 0.6	6.3	珪 岩	"		
IV-9-6	25	J-26-b	5	スクレイパー	III B9	5.6 × 3.8 × 1.1	26.8	黒曜石	"		
"	26	I-42-b	41	"	III B9	6.0 × 6.0 × 1.7	45.0	"	"		
"	27	H-35-c	2	"	III B9	6.7 × 5.0 × 1.4	40.8	"	"		
"	28	P-38-d		"	III B9	6.4 × 4.1 × 1.0	27.7	"	I		
"	29	I-41-c	5	"	III B9	4.1 × 2.7 × 1.0	9.7	"	II		
"	30	H-31-c		"	III B9	(3.8) × 3.4 × 1.4	(16.2)	"	I		
"	31	I-42-a	14	"	III B9	(2.9) × 4.1 × 1.5	(13.9)	"	II		
"	32	H-35-b	1	"	III B9	(5.3) × 4.0 × 2.1	(35.5)	"	"		
"	33	O-38-d		"	III B9	(4.7) × 2.7 × 0.4	(4.8)	"	"		
"	34	I-41-c	44	"	III B9	(4.3) × 3.4 × 0.9	(11.5)	"	"		
"	35	I-40-a	21	"	III B9	6.3 × 5.2 × 0.8	33.3	安山岩	"		
"	36	I-42-b		"	III B9	3.3 × 3.3 × 0.8	7.8	黒曜石	I		
"	37	H-31-c		石 核	IXA	3.5 × 2.5 × 1.4	12.7	"	"		
"	38	I-41-C	1	"	IXA	4.1 × 4.8 × 1.5	28.2	"	II		
"	39	I-41-c	3	"	IXA	5.0 × 3.6 × 1.4	30.3	"	"		
"	40	L-39-c	3	石 製品		6.0 × 0.6 × 0.6	2.0	"	"		
"	41	L-39-c	4	"		7.1 × 0.7 × 0.5	1.8	"	"		
IV-9-7	42	I-43-b		石 斧	IVA8	(7.6) × 3.9 × 2.1	(94.8)	片 岩	I		
"	43	J-32-c		"	IVA8	9.5 × 3.6 × 1.3	61.0	"	"		
"	44	I-42-b		"	IVA8	13.0 × 5.9 × 1.9	204.6	"	"		
"	45	I-34-d		"	IVA8	(8.0) × 4.9 × 1.0	(52.0)	"	II		
"	46	H-31-c		"	IVA8	(15.4) × 6.1 × 3.5	(399.3)	"	I		
"	47	I-36-c		"	IVA8	15.4 × 6.2 × 3.5	456.9	"	"		
"	48	J-32-c		"	IVA8	14.9 × 5.3 × 2.4	260.8	"	"		
"	49	J-41-d		"	IVA8	22.0 × 5.4 × 2.8	(438.8)	"	II		
IV-9-8	50	I-42-b	43	"	IVA3	12.6 × 3.6 × 0.7	53.9	"	"		
"	51	J-39-d		"	IVA3	10.6 × 4.2 × 1.1	89.6	"	"		
"	52	K-19-a		"	IVA3	7.9 × 2.8 × 1.2	44.6	"	"		

IV 遺構と遺物

I・II層の石器

挿 図	番号	発 掘 区	遺物番号	名 称	分 類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ(g)	石 質	層 位	接合状況	備 考
IV-9-8	53	I-42-a	6	石 斧	IVA 5	11.5 × 4.3 × 1.1	98.4	片 岩	II		
"	54	H-29-b		"	IVA 3	(7.1) × 4.0 × 0.8	(41.9)	"	I		
"	55	M-29-a		"	IVA 5	(8.2) × 5.4 × 0.9	(81.2)	"	II		
"	56	M-29-b		"	IVA 5	(7.7) × 4.8 × 1.0	(62.6)	"	I		
"	57	H-31-d		"	IVA 3	(5.8) × (2.8) × 0.9	(18.2)	"	"		
"	58	I-41-C	19	"	IVA 3	(3.5) × 4.6 × 2.1	(38.0)	蛇 紋 岩	II		
"	59	I-42-d		"	IVA 5	(7.8) × 5.3 × 2.5	(133.8)	緑色片岩	I		
"	60	O-28-a		"	IVA 3	(11.4) × 6.5 × 1.9	(204.4)	片 岩	"		
"	61	J-33-a		"	IVA 2	27.2 × 6.7 × 4.3	1,403	緑色片岩	II		
IV-9-9	62	P-36-a		た た き 石	VA 3	12.0 × 8.9 × 4.2	570	安 山 岩	I		
"	63	N-42-b	1	"	VA 4	17.3 × 12.0 × 4.3	1,122	"	"		
"	64	I-41-d	27	"	VA 4	6.3 × 5.8 × 6.3	317.4	"	II		
"	65	J-42-a		"	VA 2	8.1 × 6.4 × 3.5	294.2	"	"		
"	66	L-25-d		"	VA 2	5.8 × (4.5) × 4.1	(163.0)	"	I		
"	67	I-42-a	13	す り 石	VIA 1	(12.1) × 9.4 × 5.2	(744.0)	緑色泥岩	II		
"	68	O-41-b	12	石 錘	VIA 2	7.2 × 5.9 × 1.4	75.5	安 山 岩	"		
"	69	I-42-a	9	石 皿	VIB 1	(21.2) × (13.8) × (8.1)	(3,970)	"	"		

写 真 图 版



1. 包含層 調査状況



2. 包含層 調査状況



1. 遺構調査状況



2. 遺構調査状況



3. 遺構調査状況



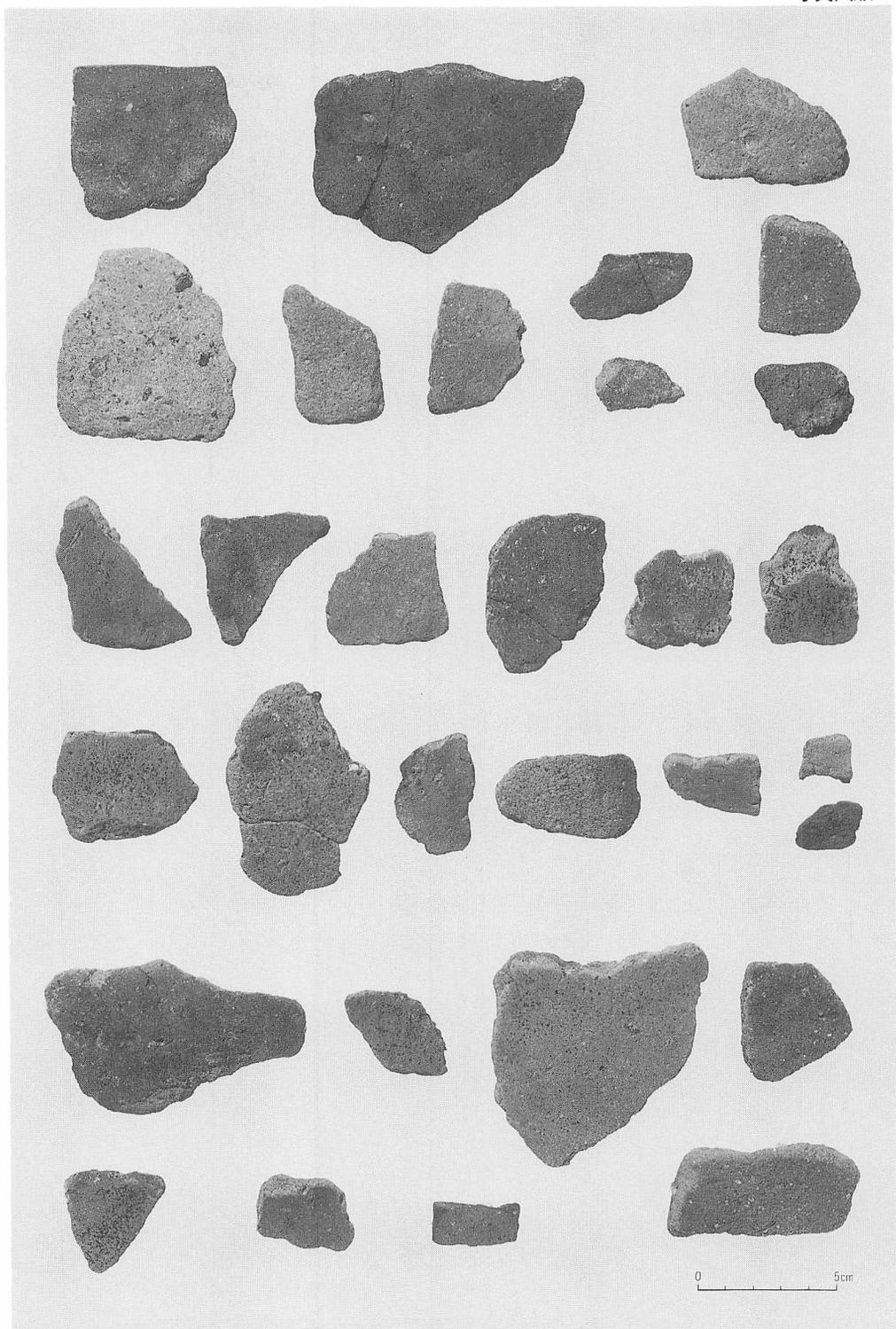
1. 礫層調査状況



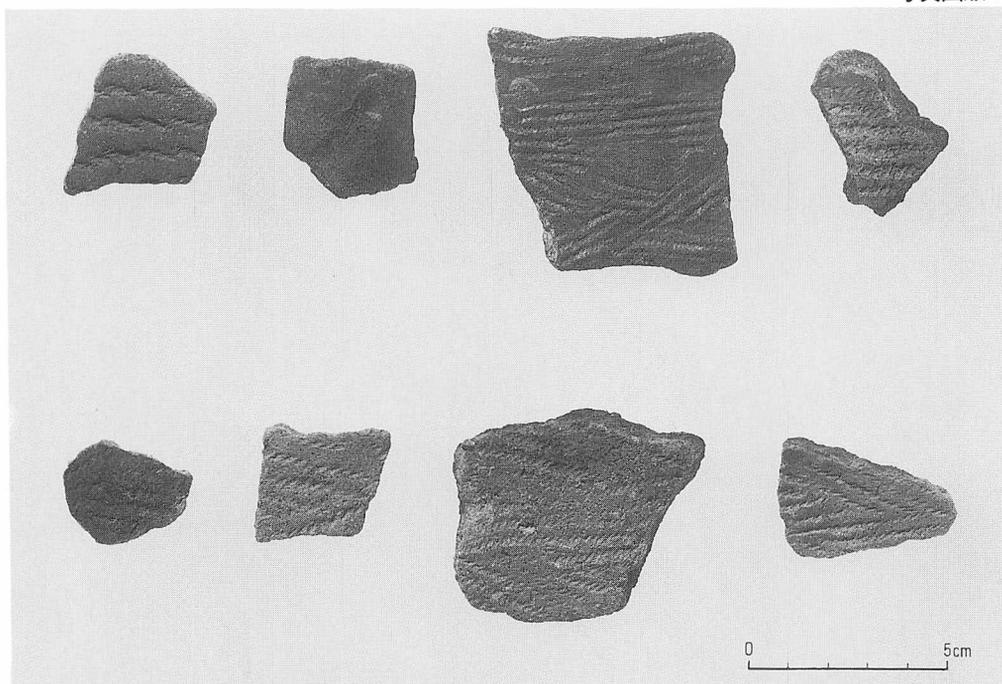
2. 礫層調査状況



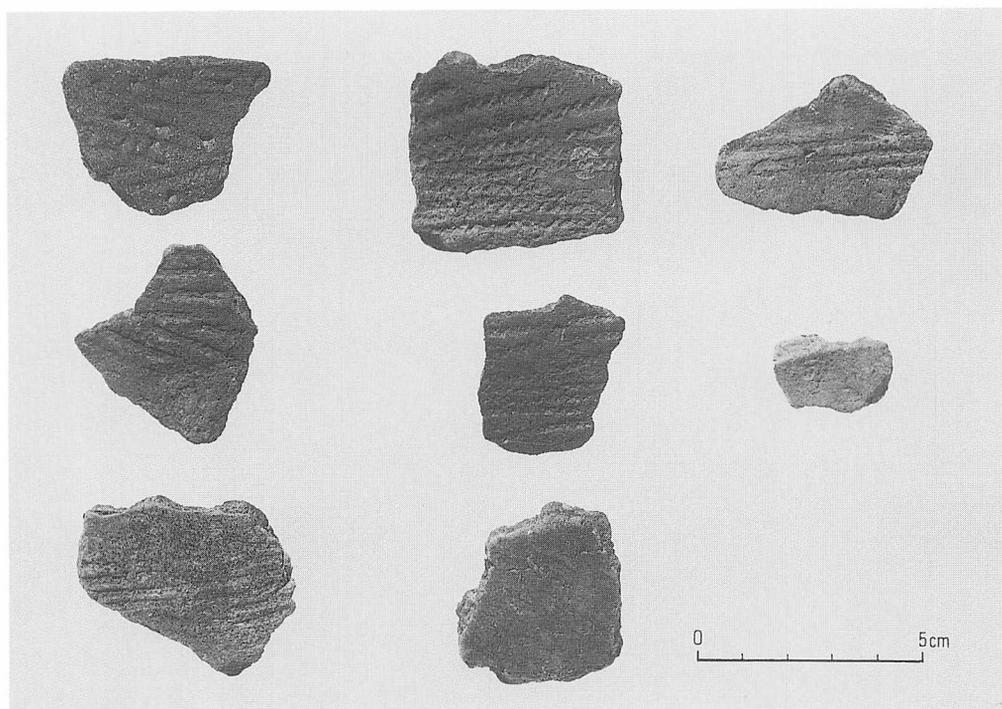
3. 礫層遺物出土状況



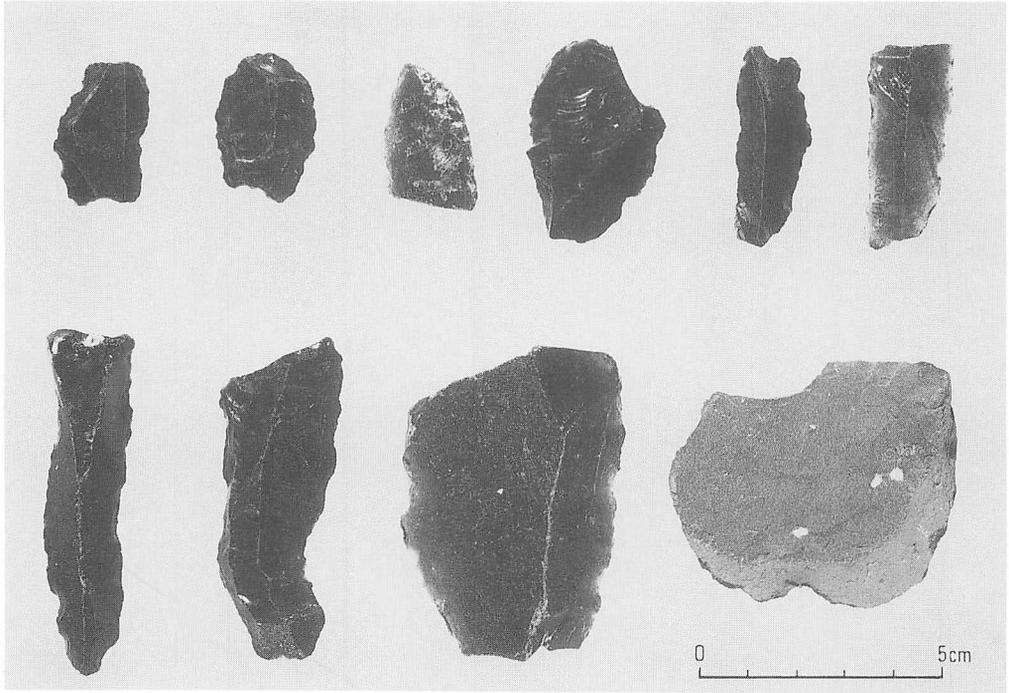
1. 砂礫層 出土の土器



1. 砂礫層 出土の土器



2. 砂礫層 出土の土器



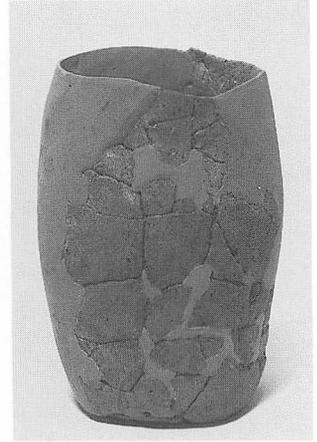
1. 砂礫層 出土の石器



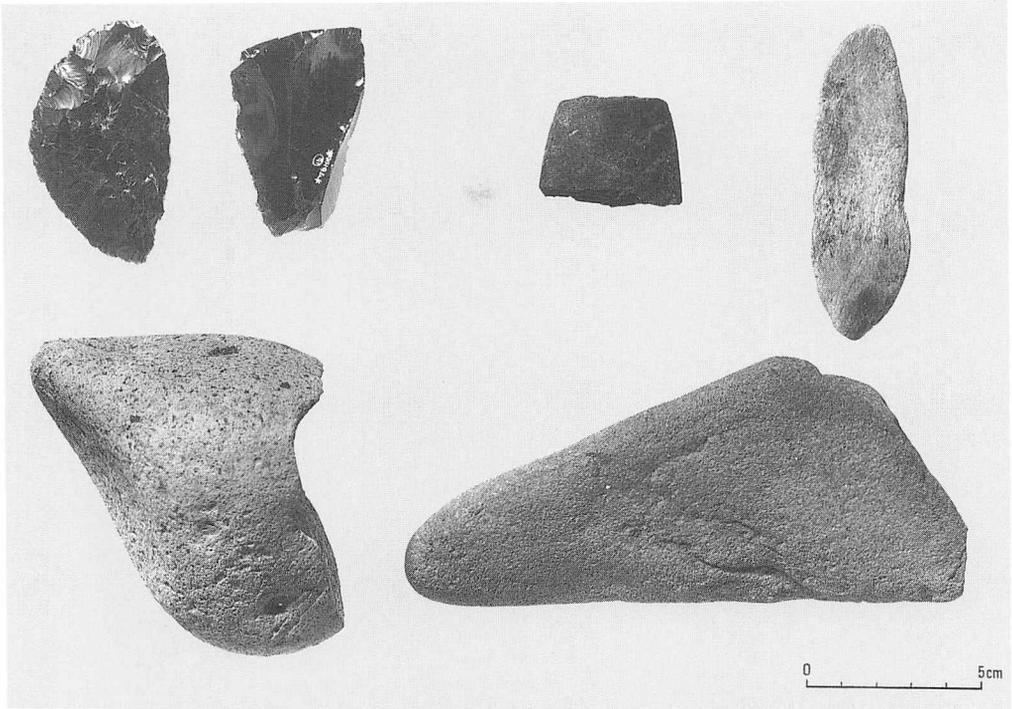
2. ハ層の調査状況



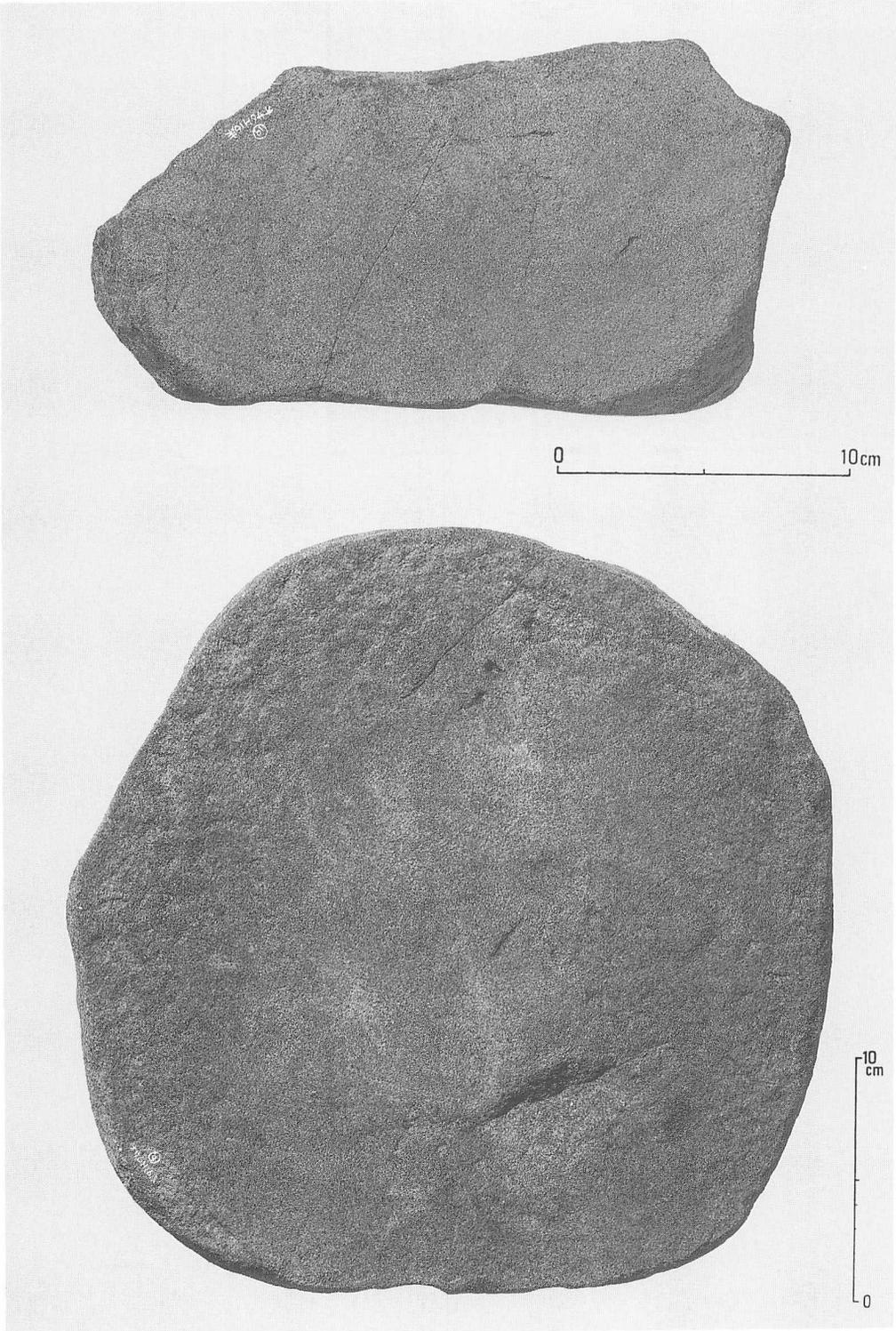
1. H-16 完 掘



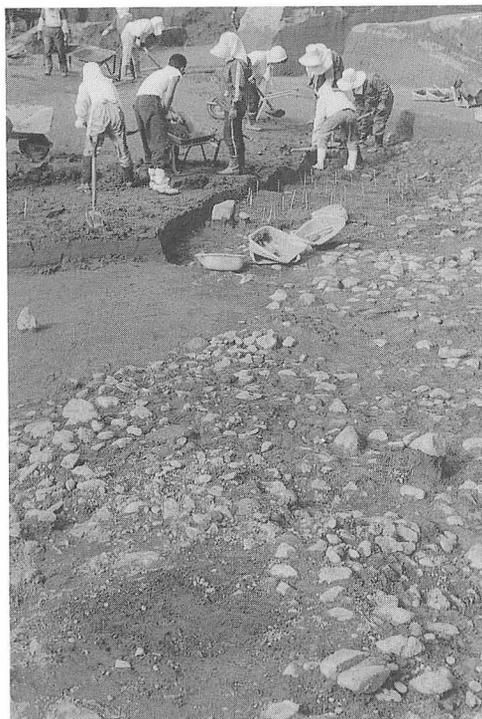
2. H-16 出土の土器



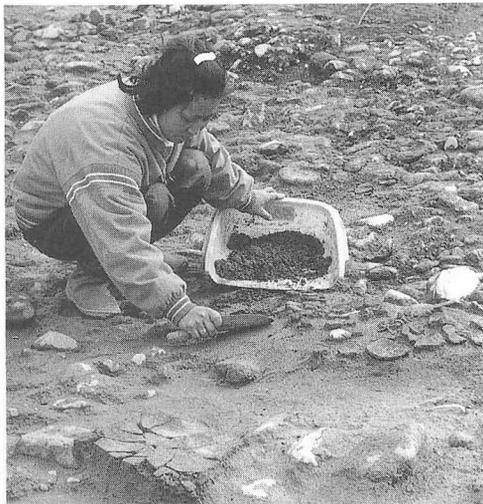
3. H-16 出土の石器



1. H-16 出土の石器



1. 口層の調査状況



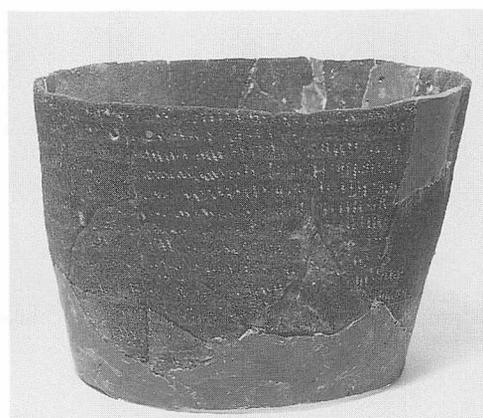
2. 口層の調査状況



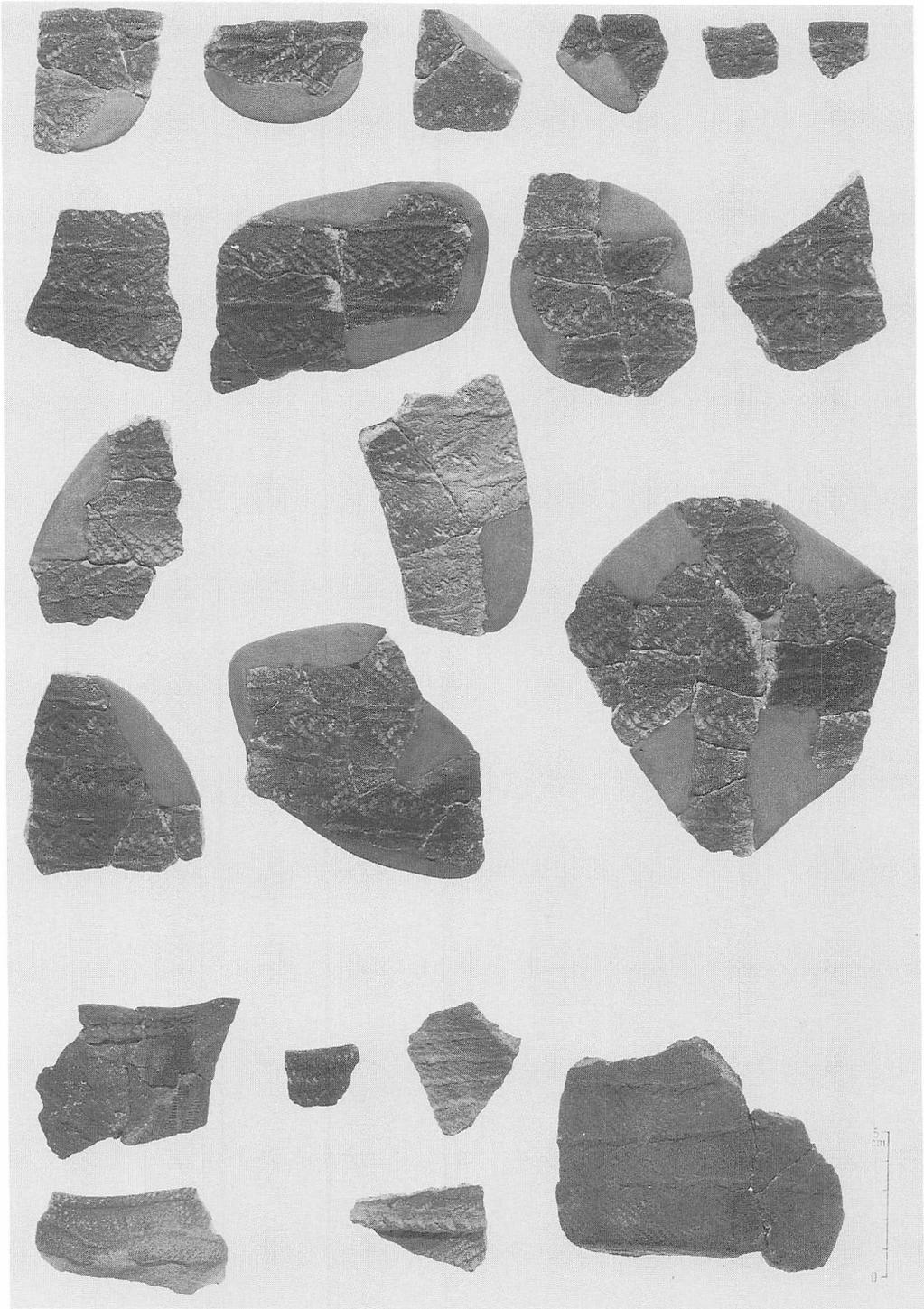
3. 口層 出土の土器



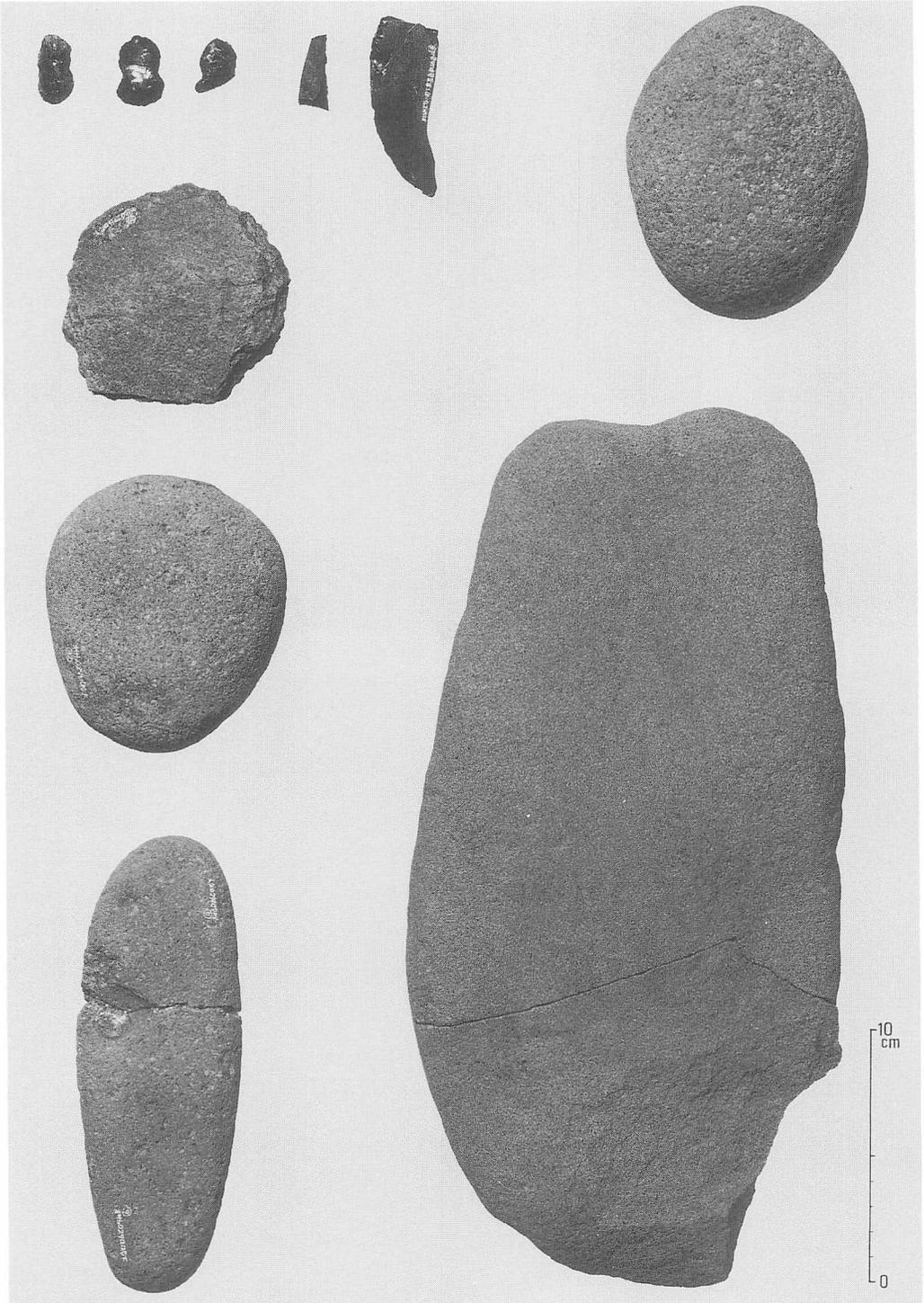
4. 口層 出土の土器



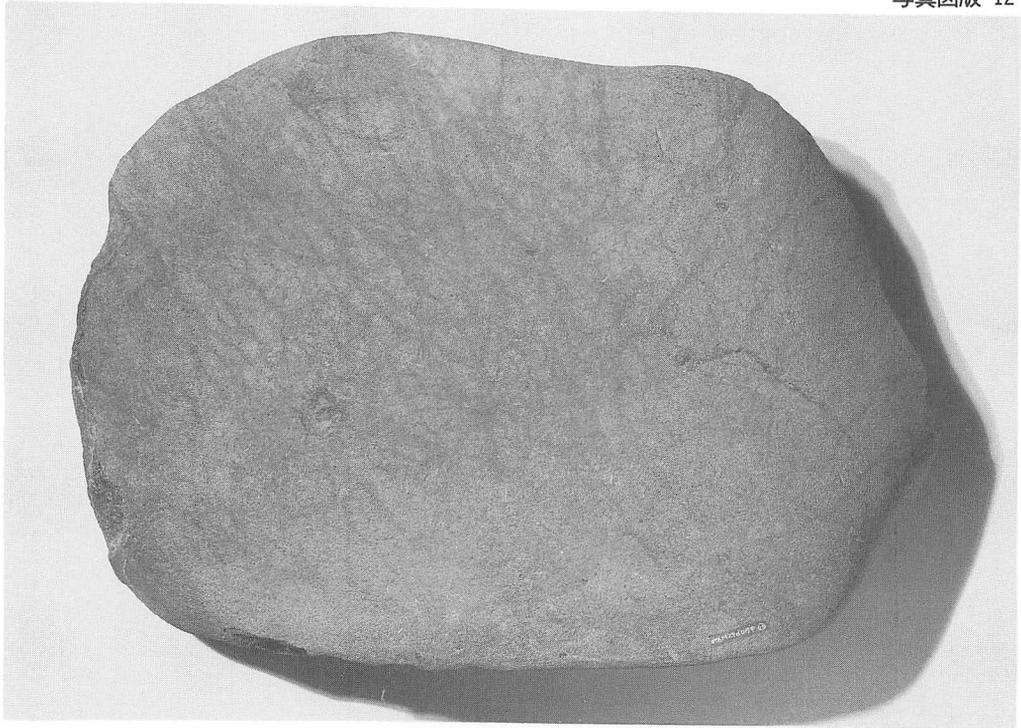
5. 口層 出土の土器



1. 八層(上)・口層(下)出土の土器



1. 口層・八層 出土の石器



1. 口層 出土の石器



2. 口層の調査状況



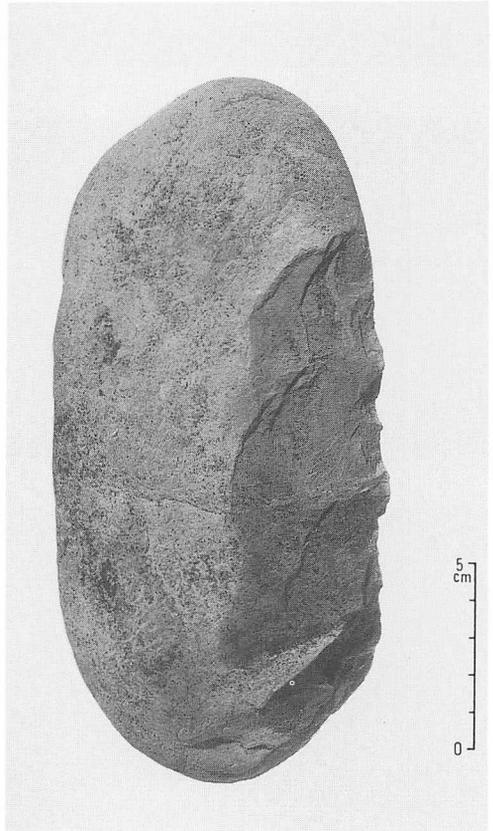
1. H-6 遺物出土状況



2. H-6 完掘



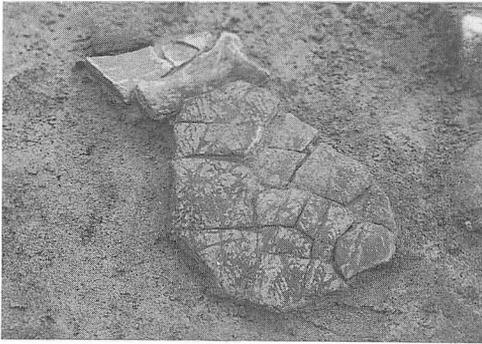
3. H-6 出土の土器



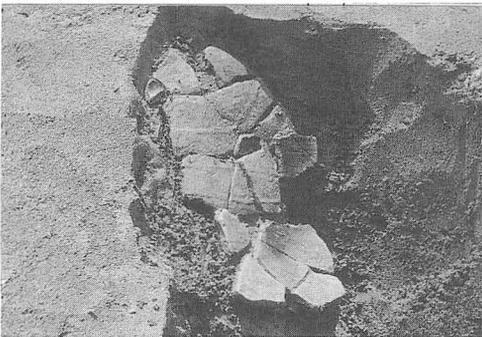
4. H-6 出土の石器



1. H-7 調査状況



2. H-7 土器出土状況



3. H-7 土器出土状況



4. H-7 土器出土状況



1. H-7 遺物出土状況



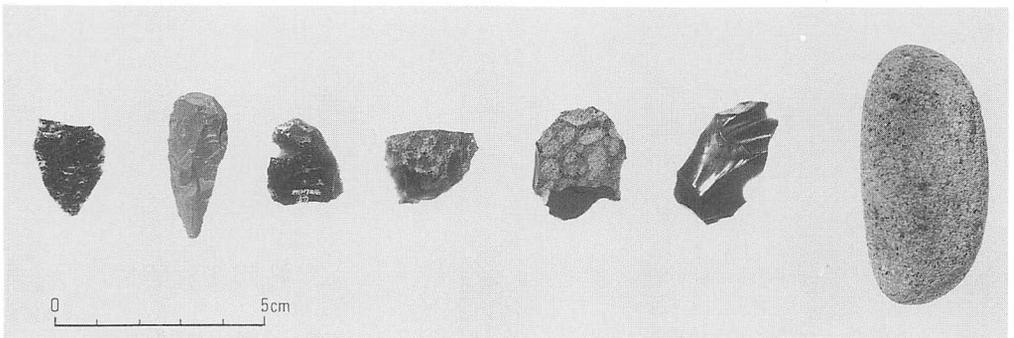
2. H-7 出土の土器



3. H-7 出土の土器



4. H-7 出土の土器



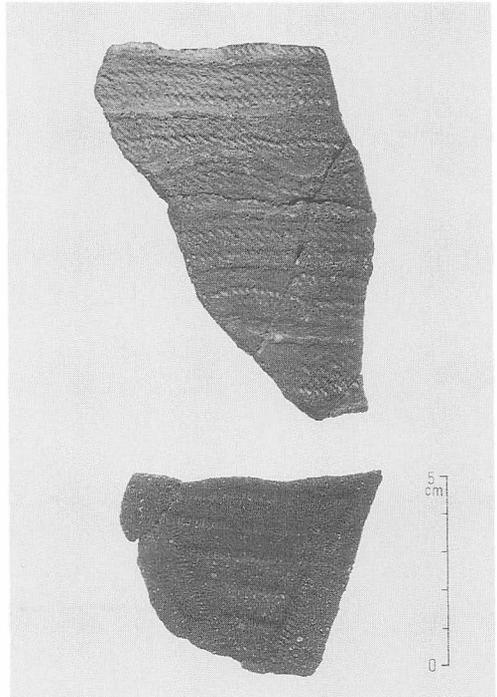
5. H-7 出土の石器



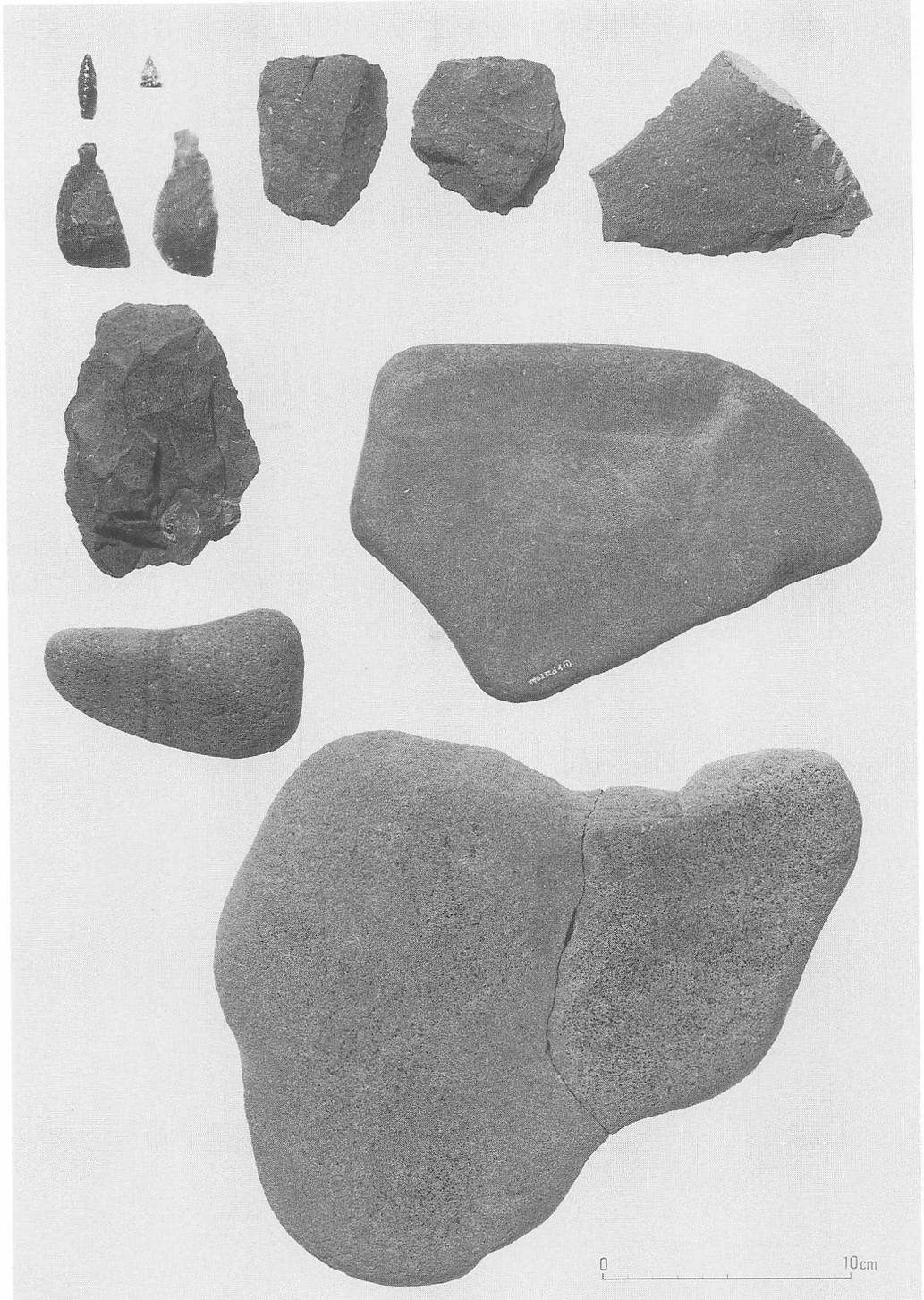
1. イ層の調査状況



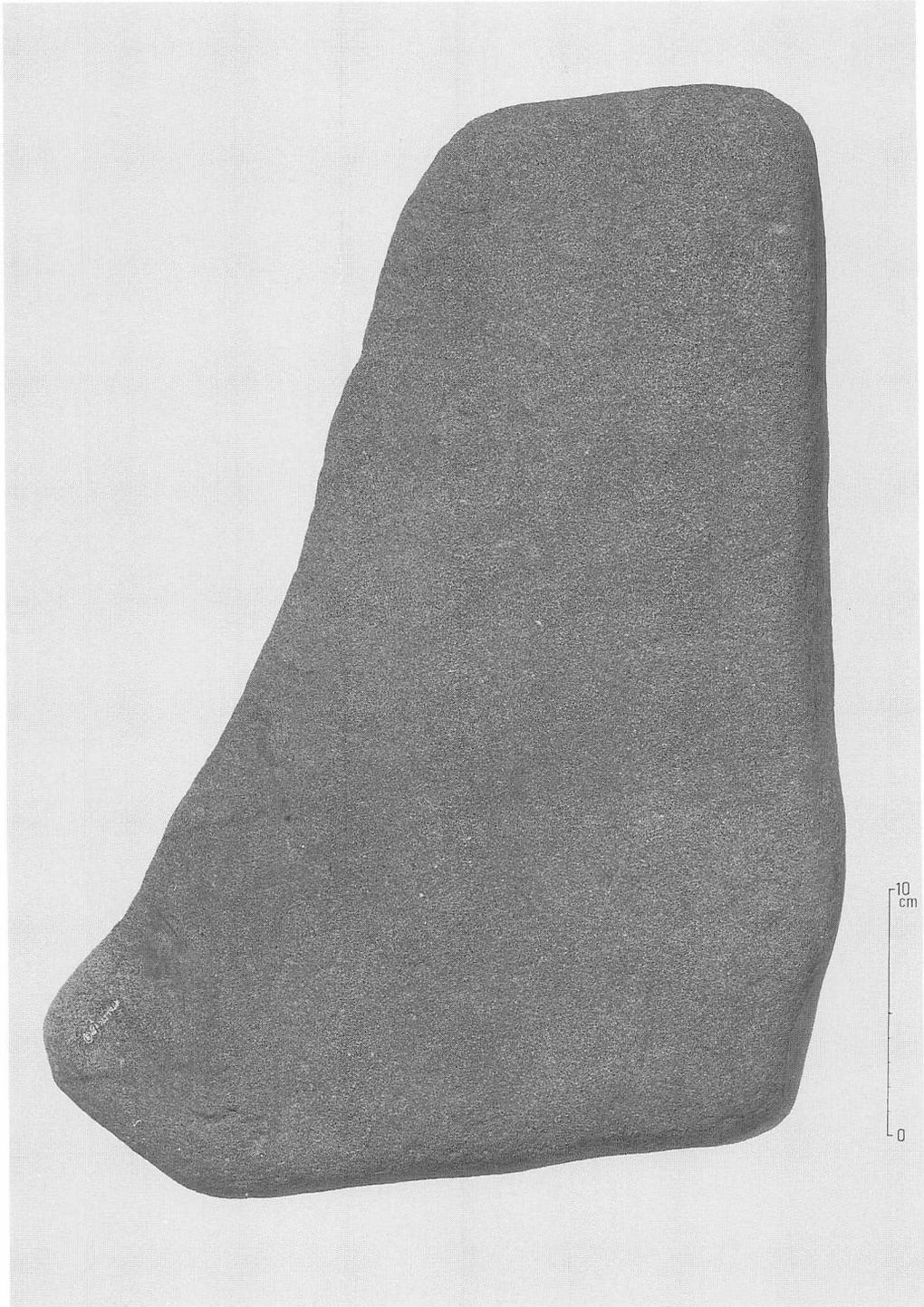
2. 口層 出土の土器



3. イ層 出土の土器



1. イ層 出土の石器



1. イ層 出土の石器



1. I・J-31 VII層中流水・渦巻模様



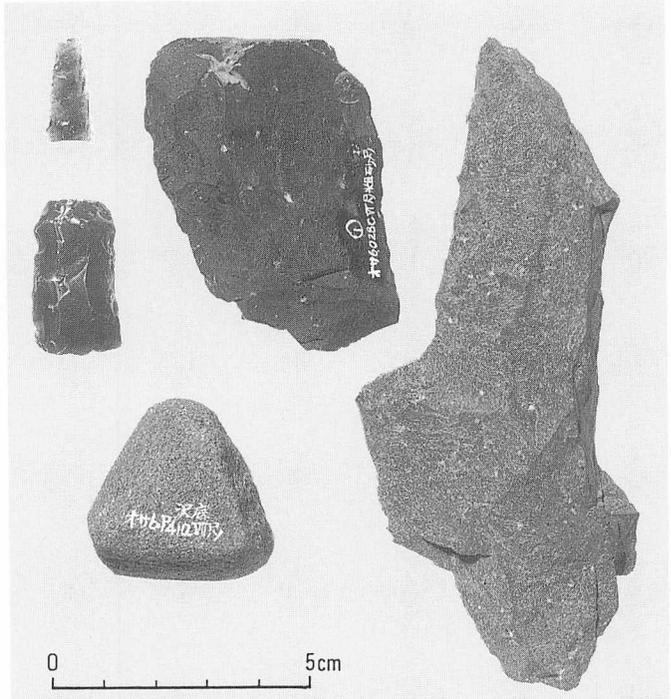
2. J-30 VII層の流水・渦巻模様



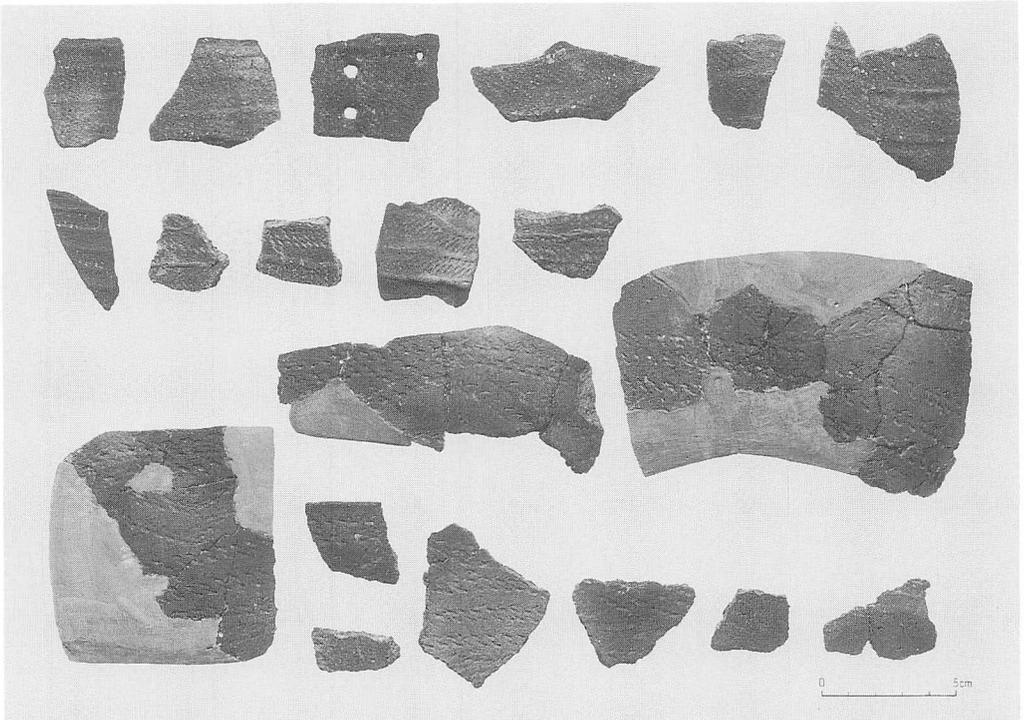
1. VII層 土器出土状況



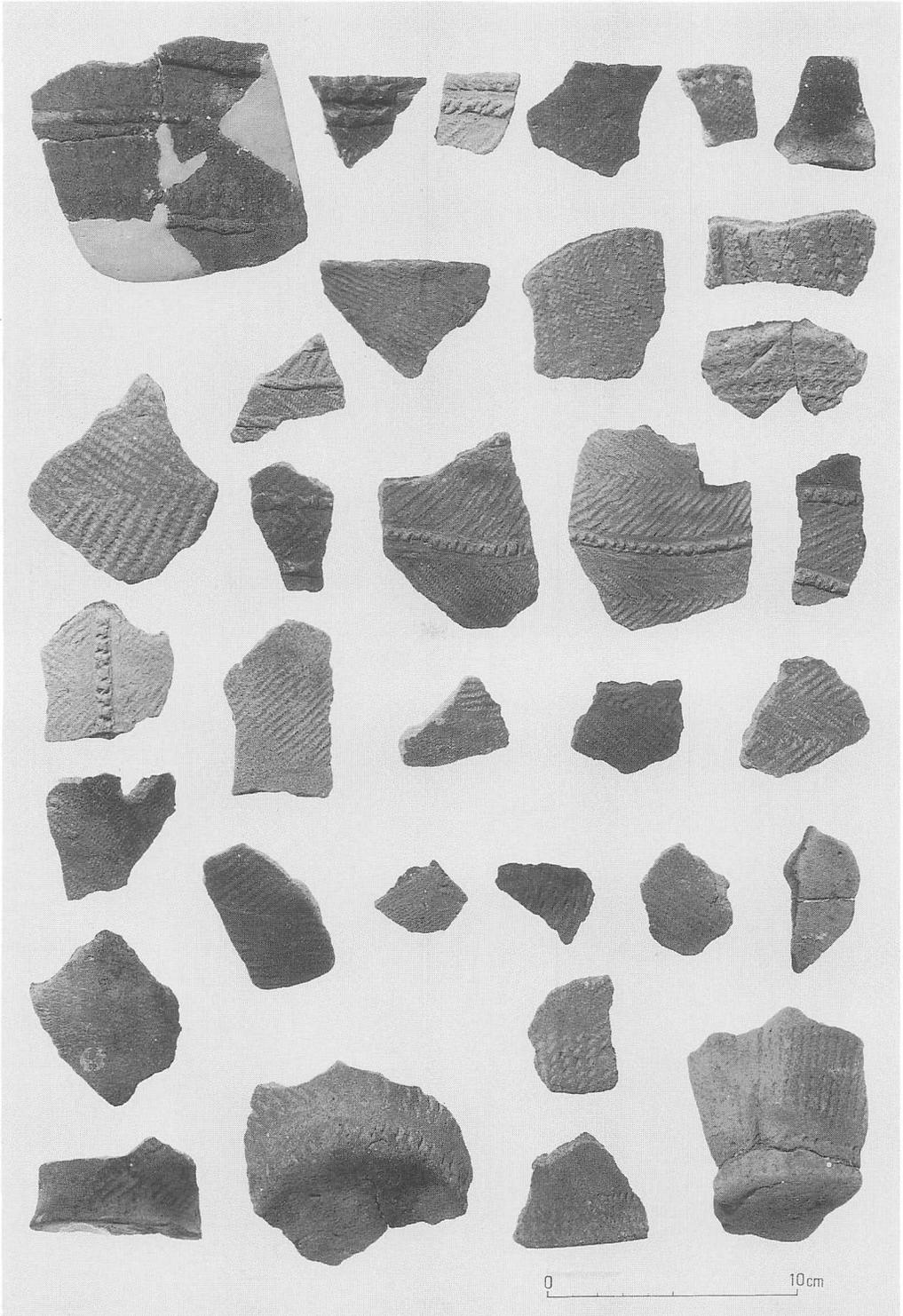
2. VII層 出土の土器



3. VII層 出土の石器



4. VII層 出土の土器



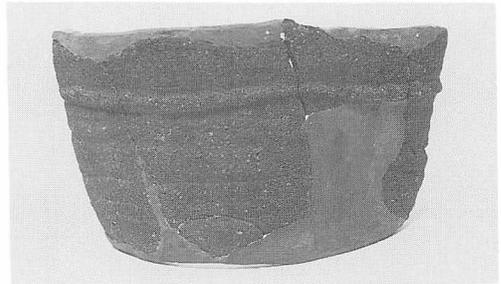
1. VI層・VII層 出土の土器



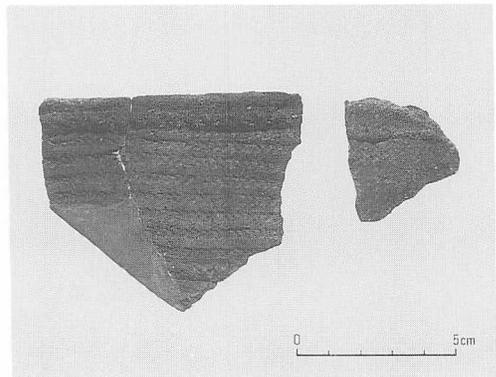
1. H-1・2 調査状況



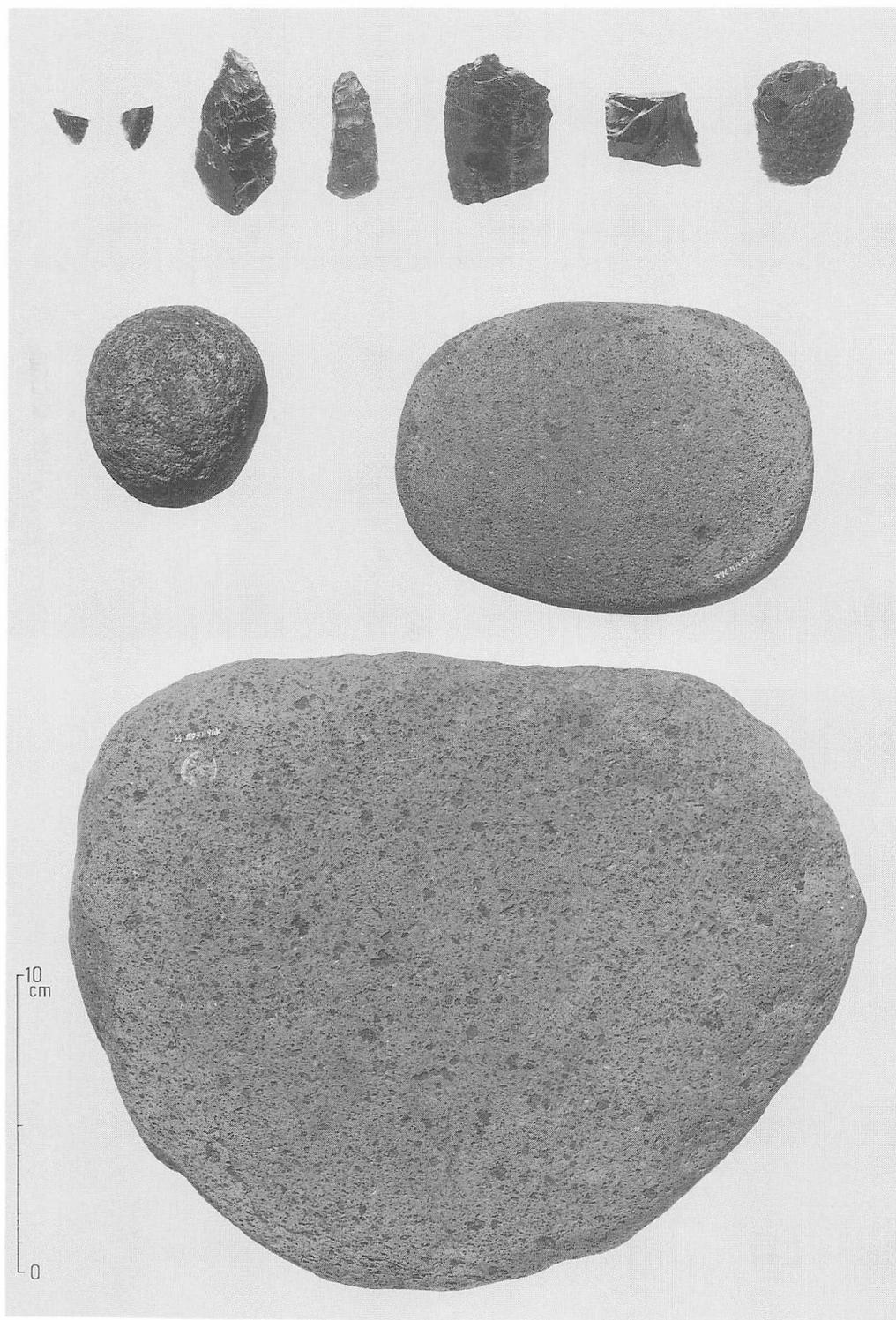
2. H-1 出土の土器



3. H-1 出土の土器



4. H-1 出土の土器



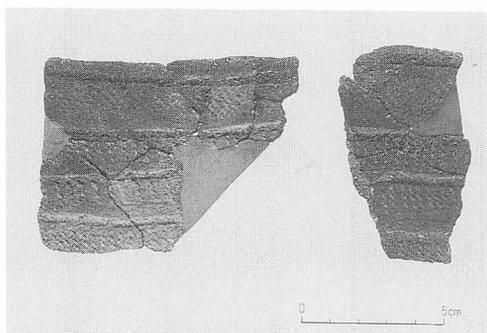
1. H-1 出土の石器



1. H-8 完 掘



2. H-8 遺物出土状況



3. H-8 出土の土器



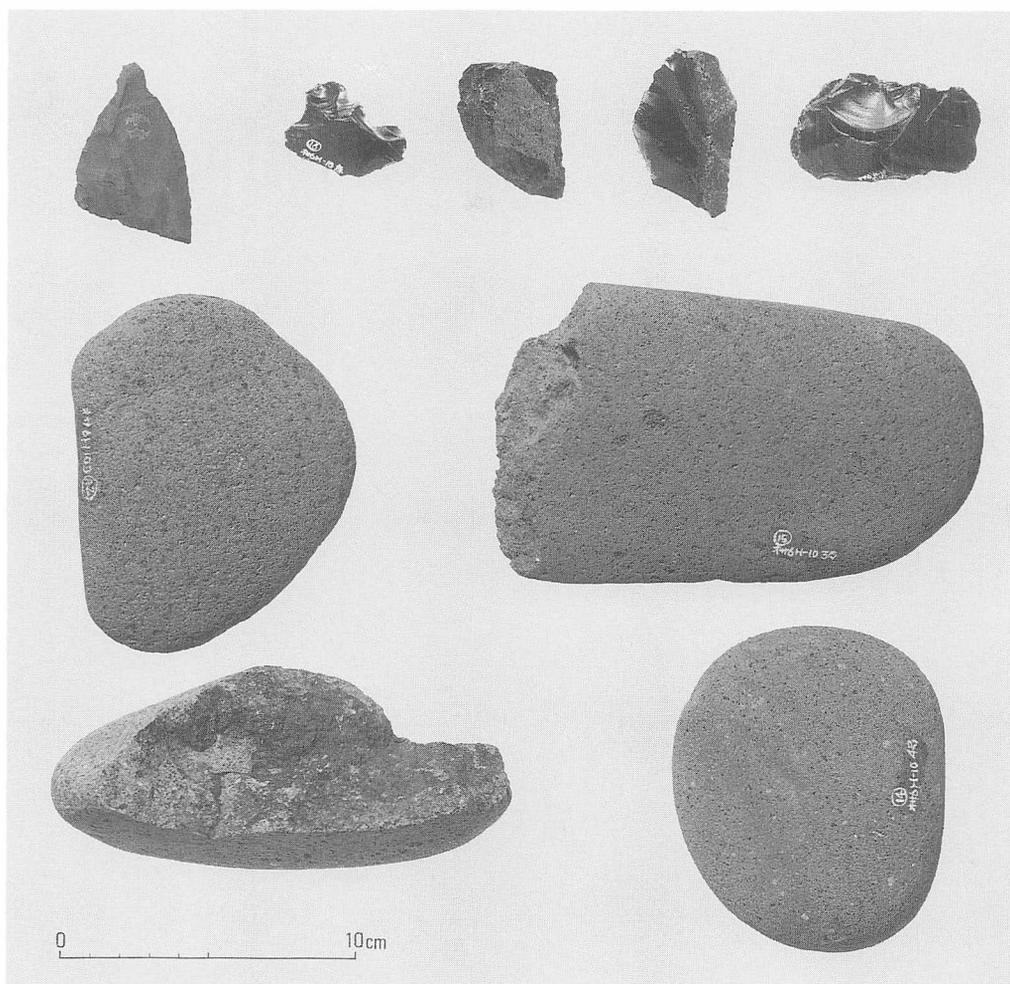
4. H-8 出土の土器



1. H-10 調査状況



2. H-10 出土の土器



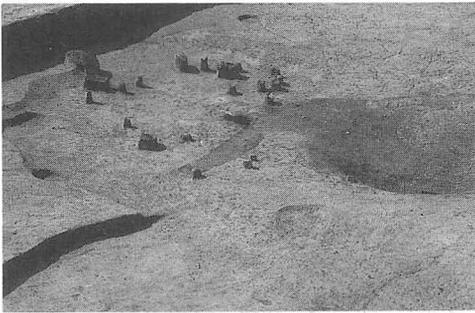
3. H-10 出土の石器



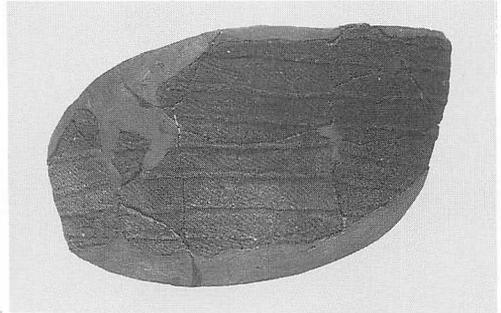
1. H-10 出土の石器



1. H-11 遺物出土状況



2. H-11 遺物出土状況



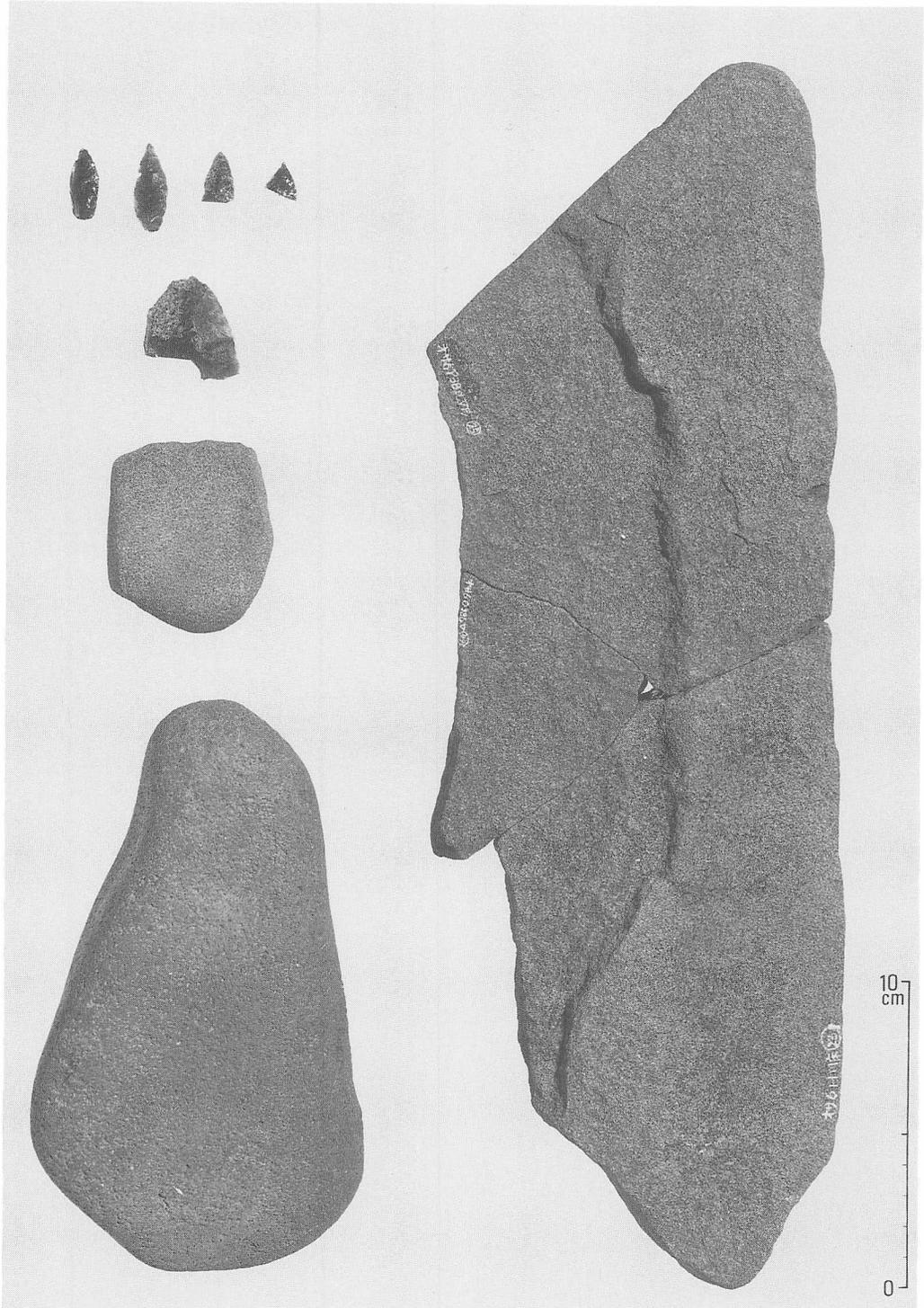
4. H-11 出土の土器



3. H-11 出土の土器



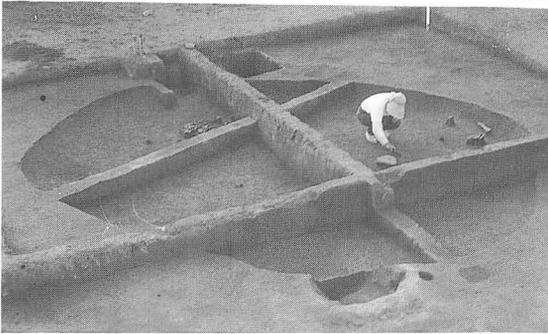
5. H-11 出土の土器



1. H-11 出土の石器



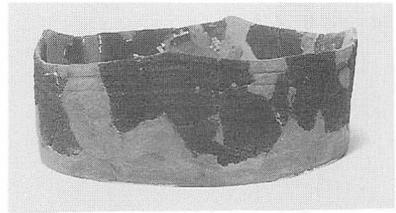
1. H-12 調査状況



2. H-12 調査状況



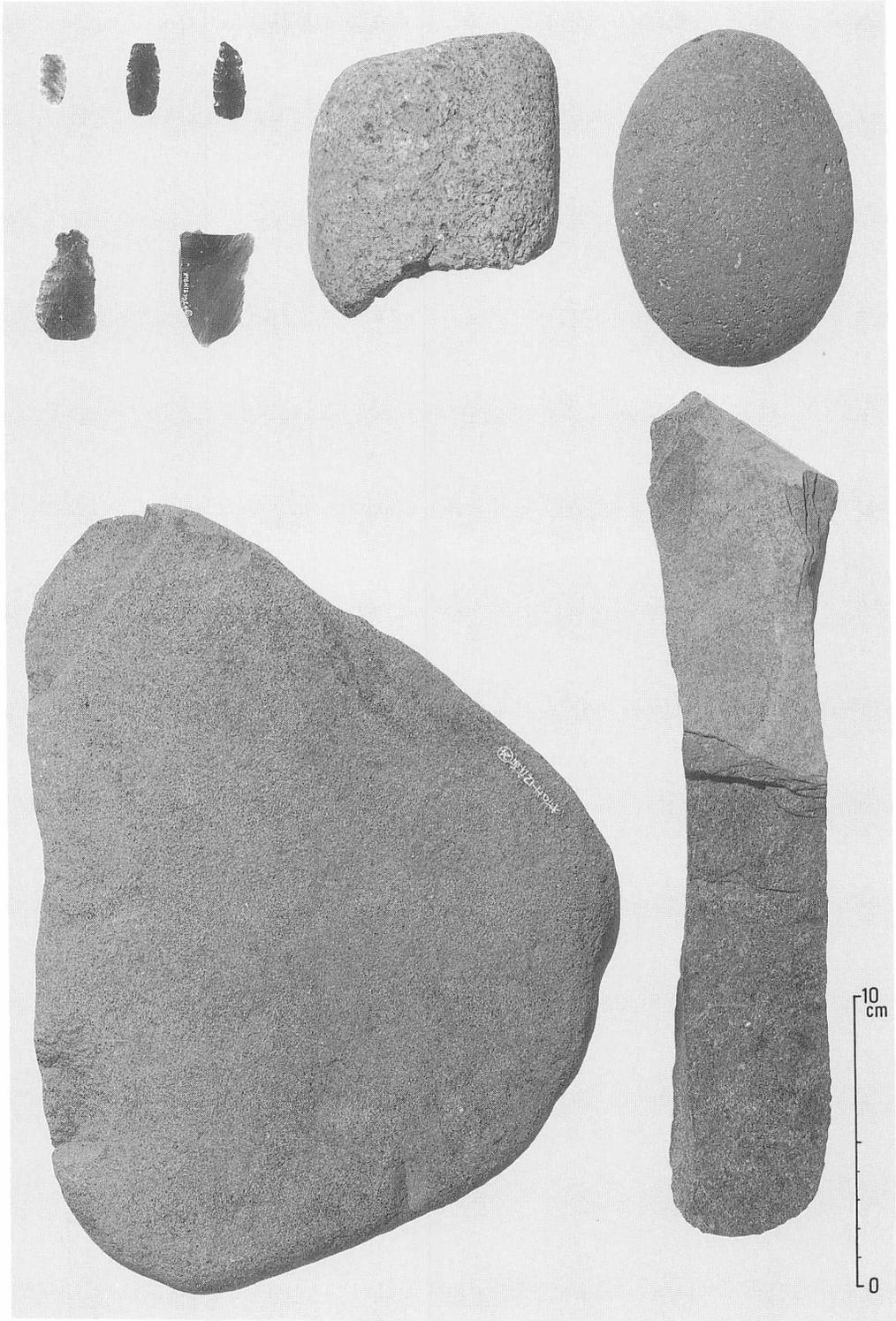
3. H-12 遺物出土状況



4. H-12 出土の土器



5. H-12 出土の土器



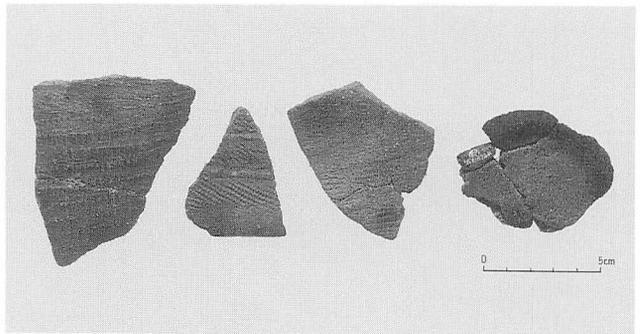
1. H-12 出土の石器



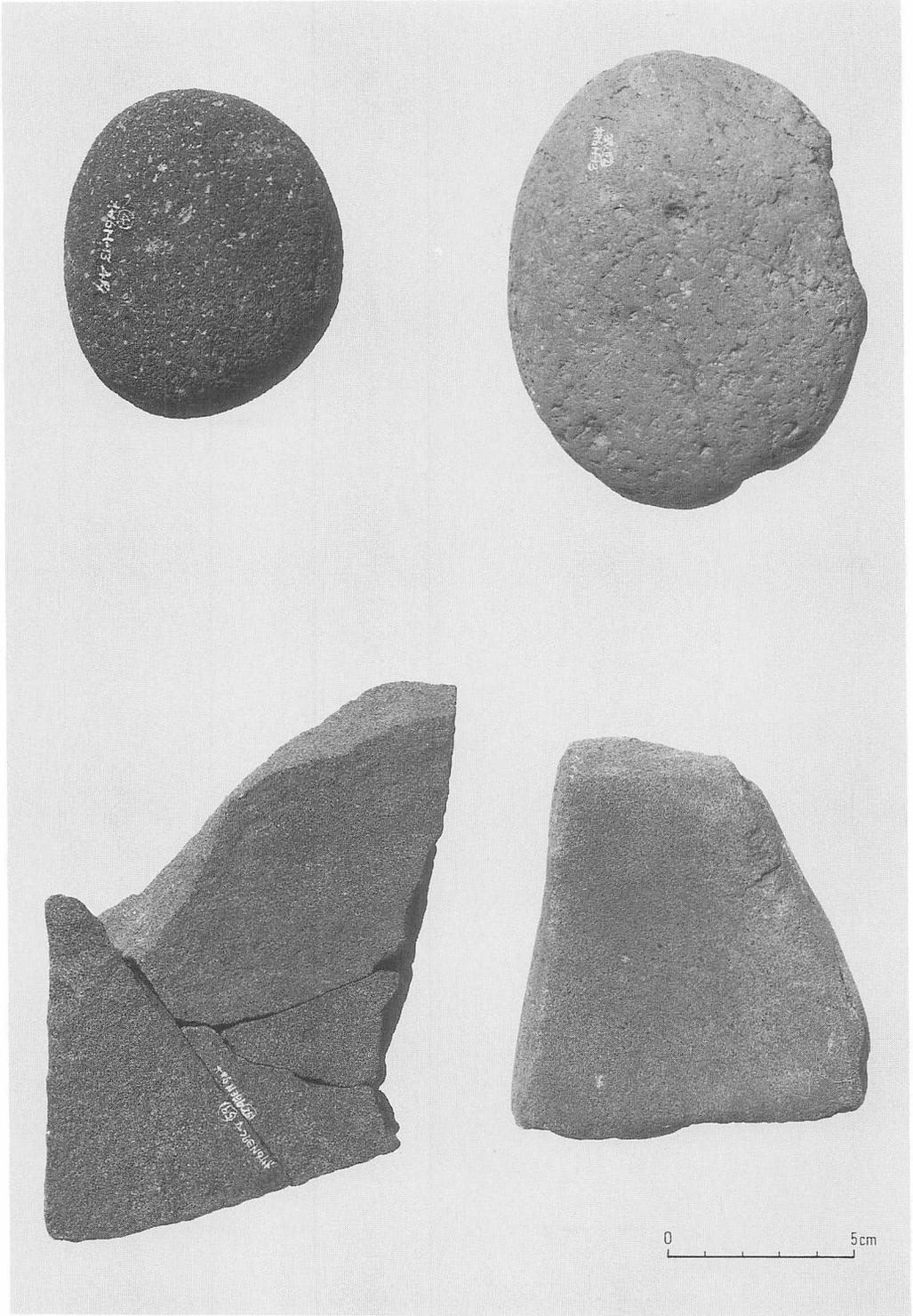
1. H-13 完 掘



2. H-13 出土の土器



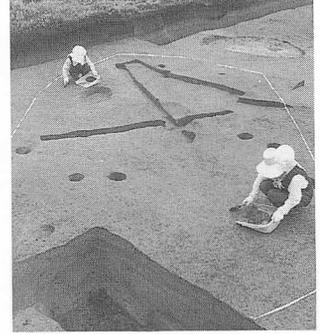
3. H-13 出土の土器



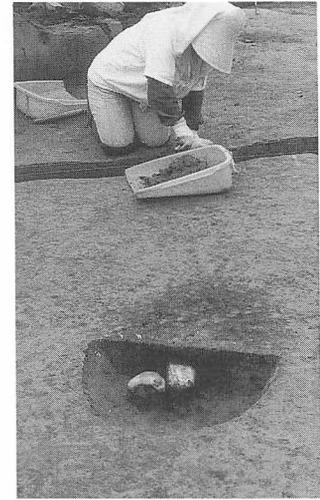
1. H-13 出土の石器



2. H-15 調査状況



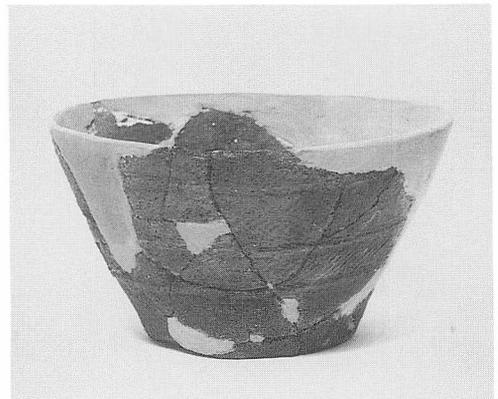
1. H-15 完掘



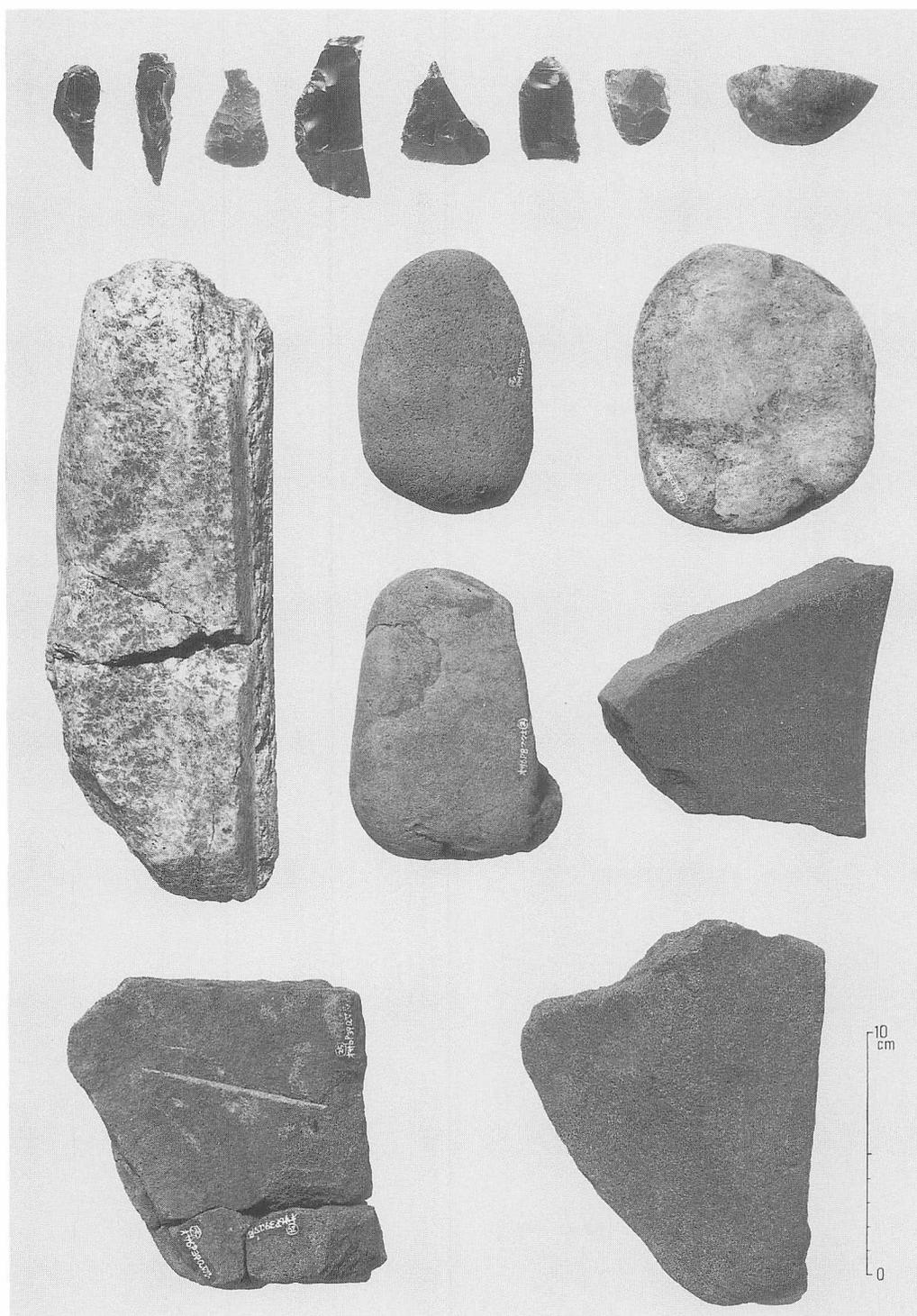
3. HP-1 遺物出土状況



4. H-15 出土の土器



5. H-15 出土の土器



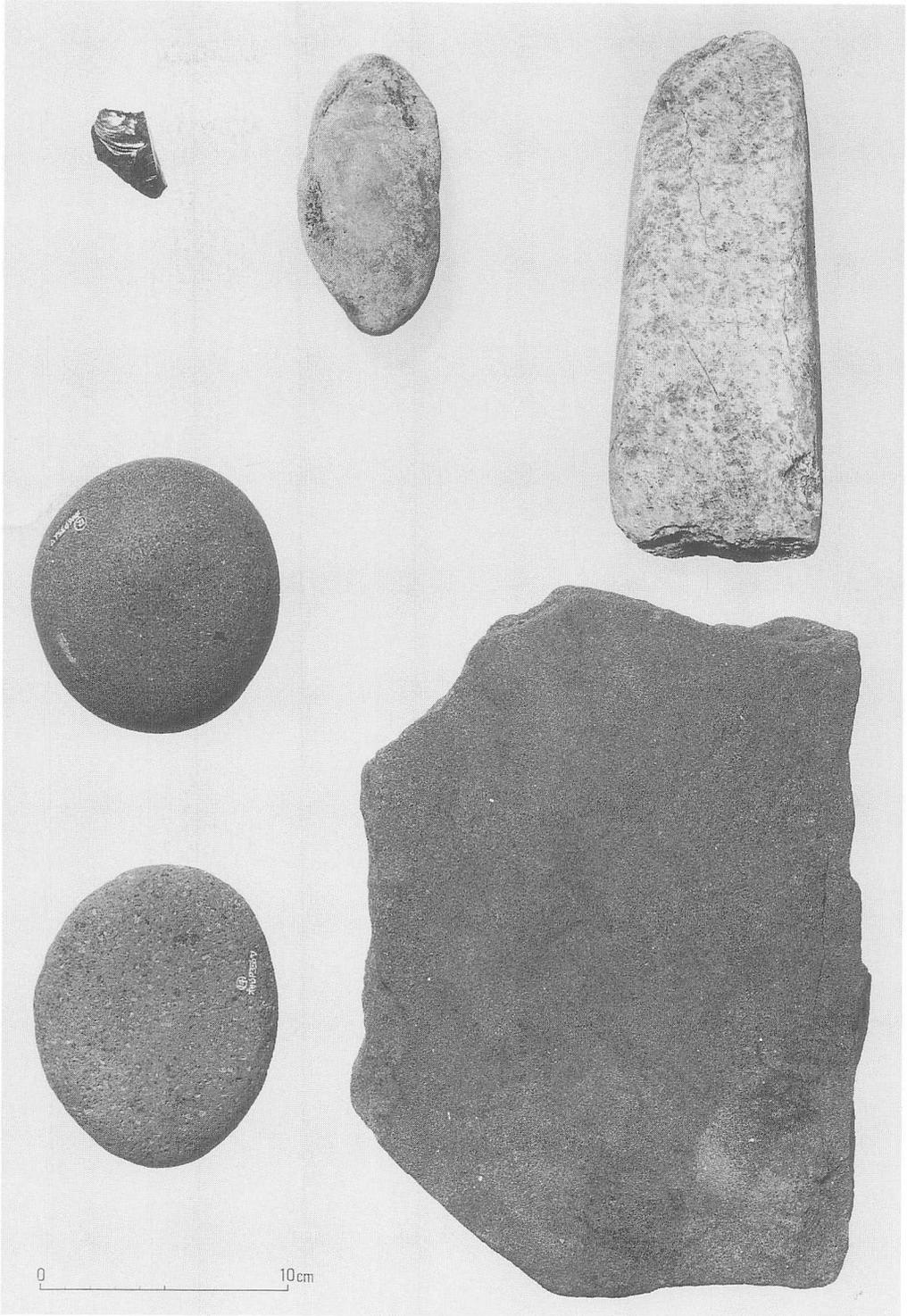
1. H-15 出土の石器



2. H-17 遺物出土状況



3. H-17 出土の土器



1. H-17 出土の石器



1. P-1 完 掘



2. P-2 セクション・完掘



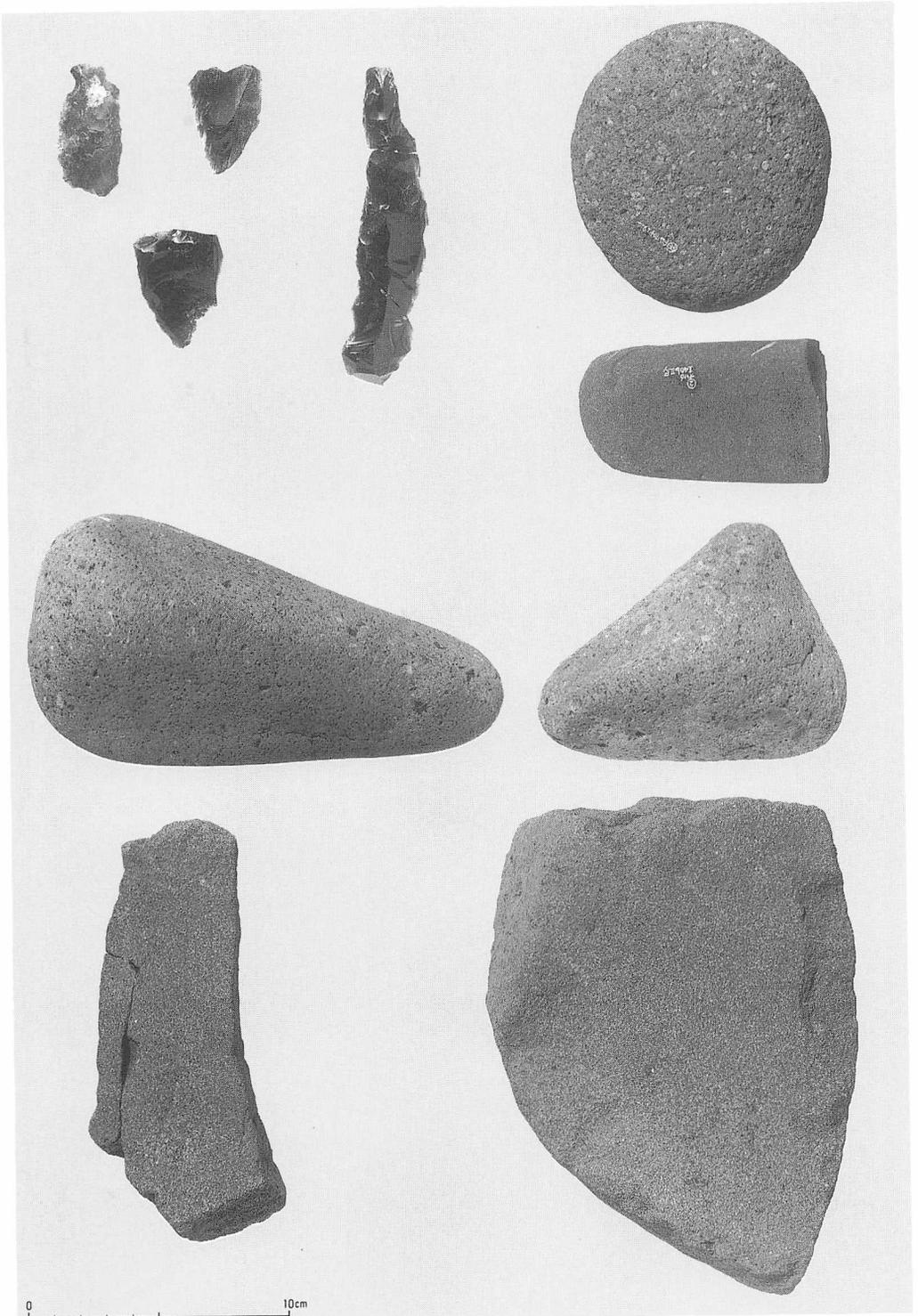
3. P-5・6 完 掘



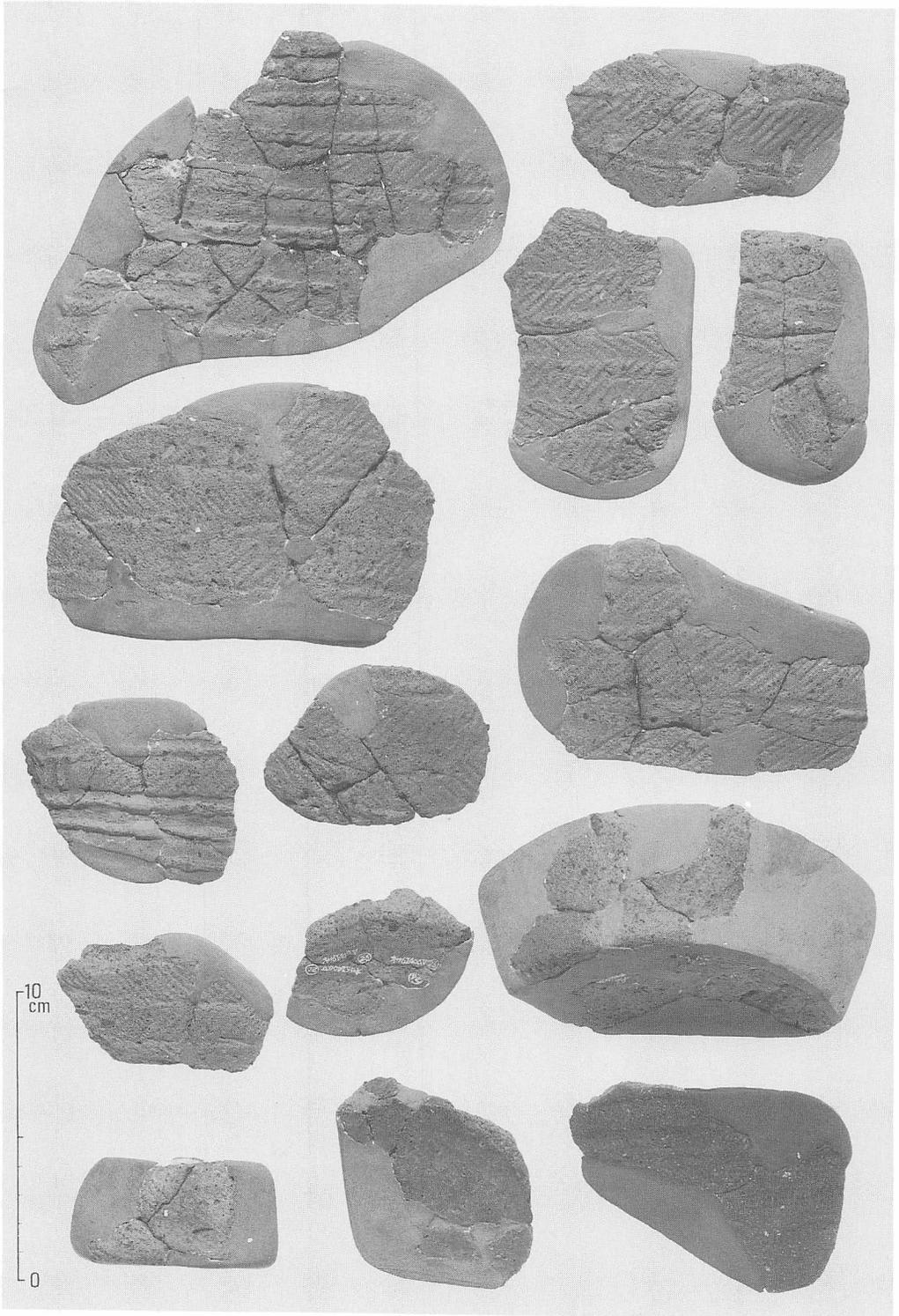
1. 遺物集中① 調査状況



2. 遺物集中① 出土の石器



1. 遺物集中① 出土の石器



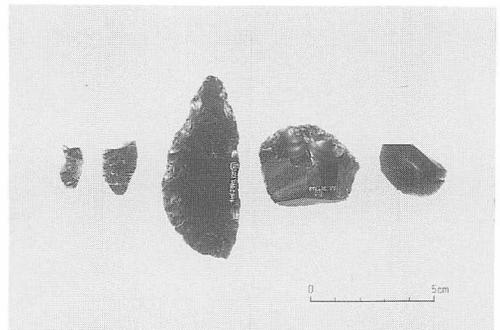
1. 遺物集中① 出土の土器



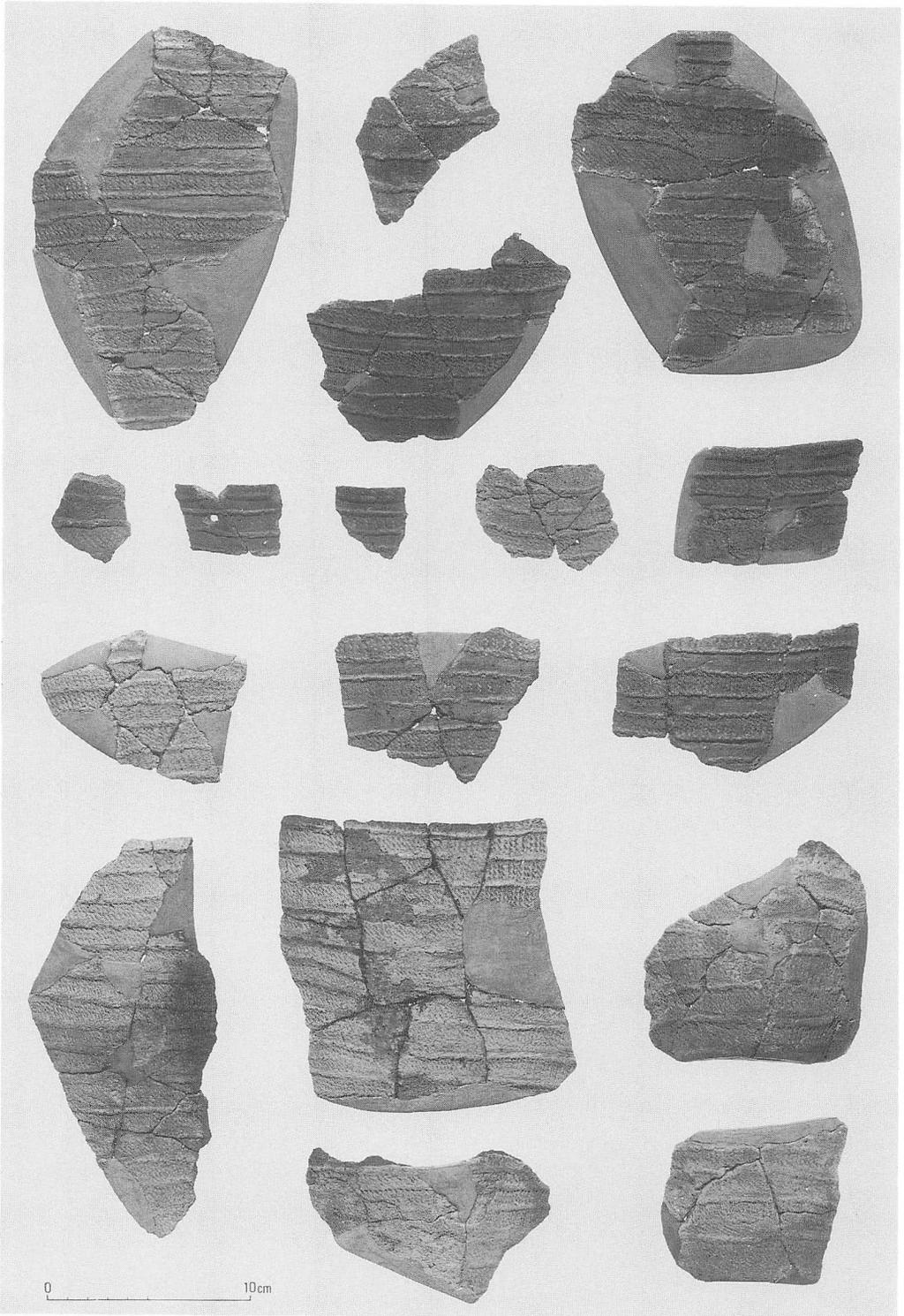
1. 遺物集中② 調査状況



2. 遺物集中② 出土の土器



3. 遺物集中② 出土の石器



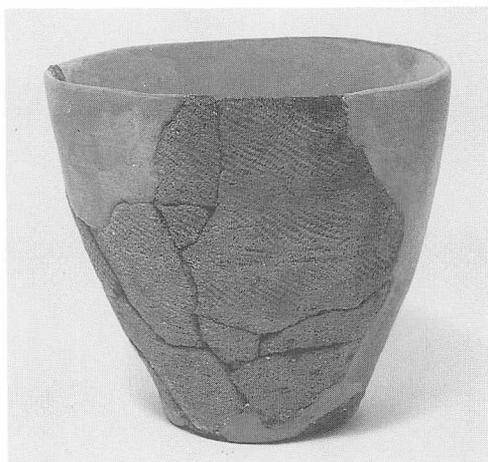
1. 遺物集中② 出土の土器



2. 遺物集中③ 遺物出土状況



1. 遺物集中③ 出土の土器



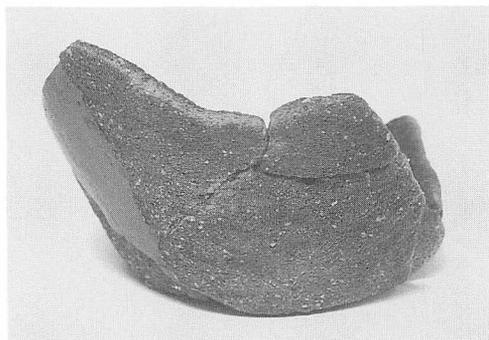
3. 遺物集中③ 出土の土器



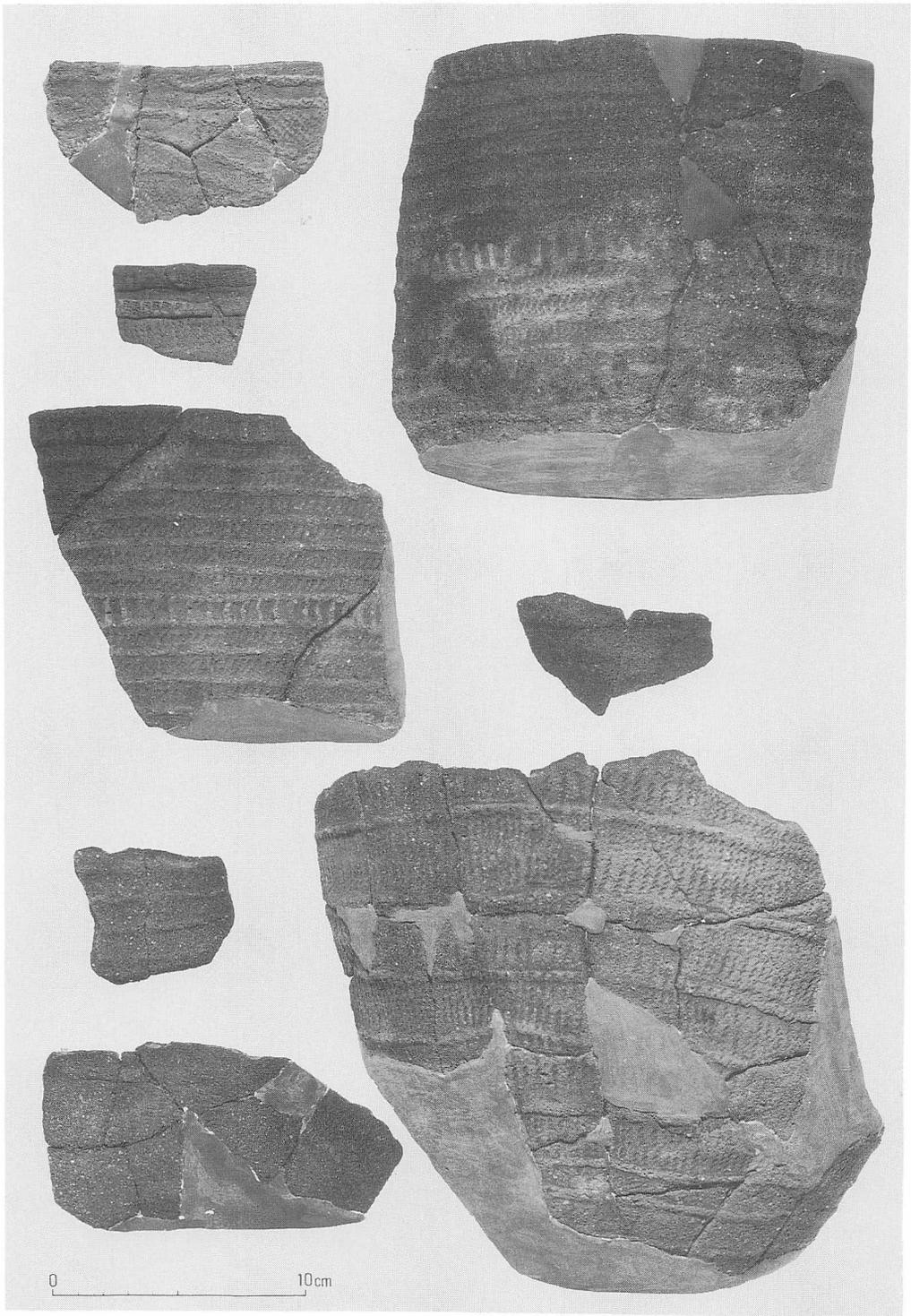
2. 遺物集中③ 出土の土器



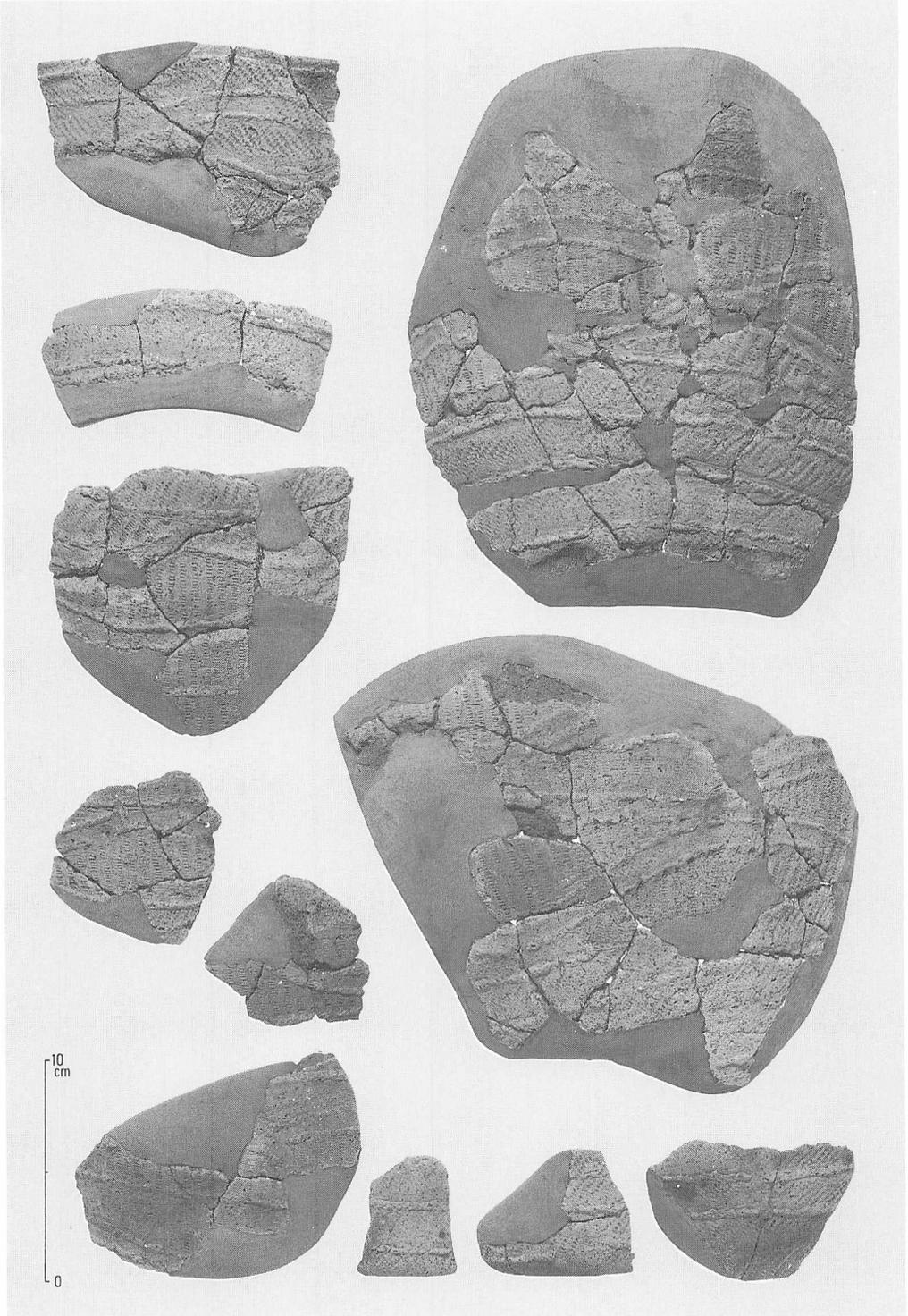
4. 遺物集中③ 出土の土器



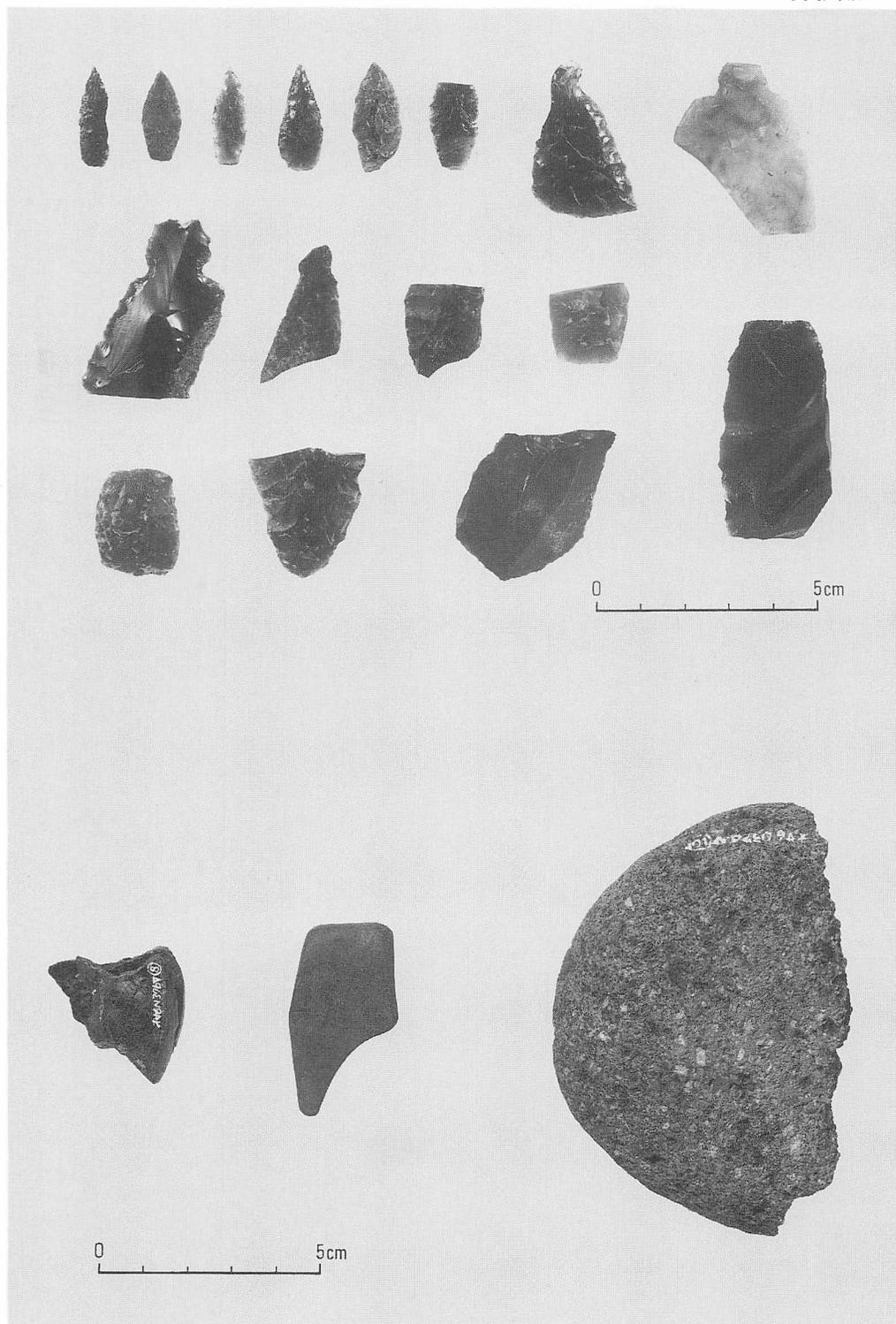
5. 遺物集中③ 出土の土器



1. 遺物集中③ 出土の土器



1. 遺物集中③ 出土の土器



1. 遺物集中③ 出土の石器



1. 遺物集中④ 調査状況



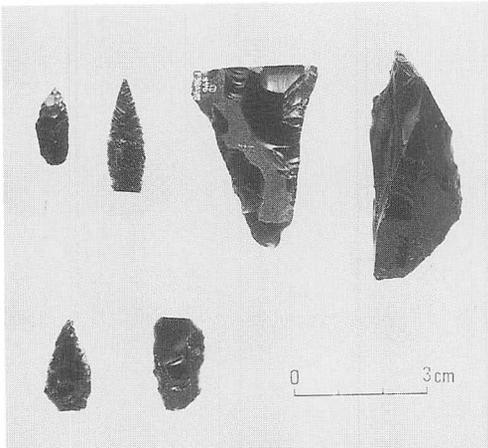
2. 遺物集中④ 調査状況



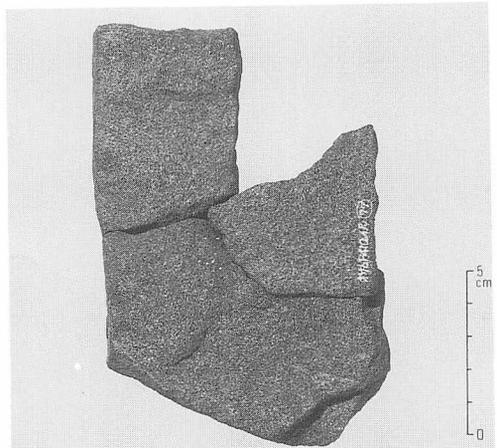
3. 遺物集中④ 出土の土器



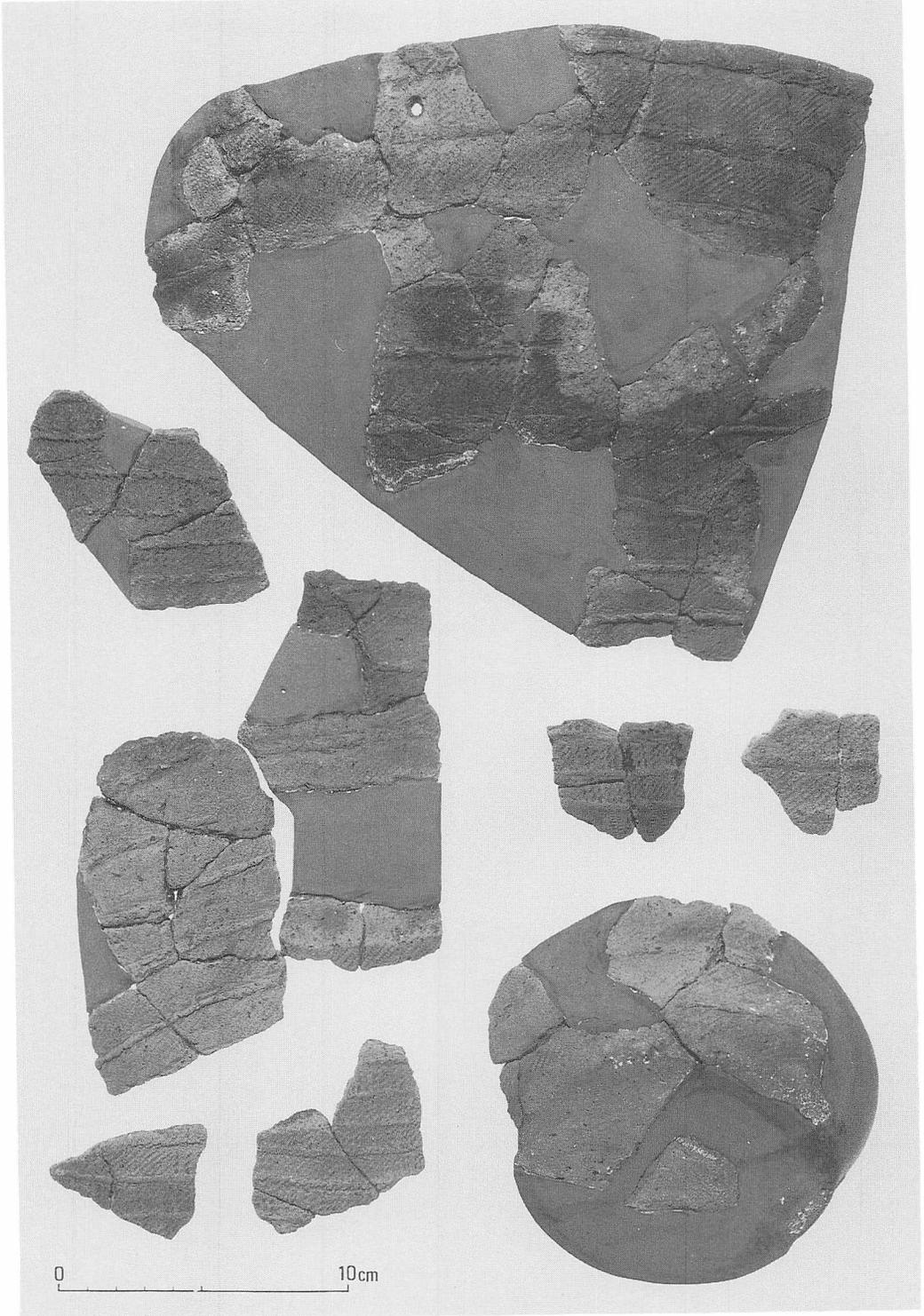
5. 遺物集中④ 出土の土器



4. 遺物集中④ 出土の石器



6. 遺物集中④ 出土の石器



遺物集中⑤ 出土の土器



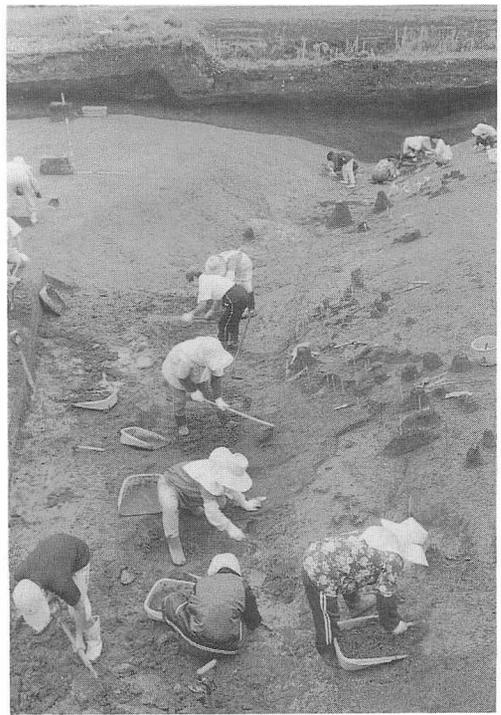
1. 遺物集中⑥ 調査状況



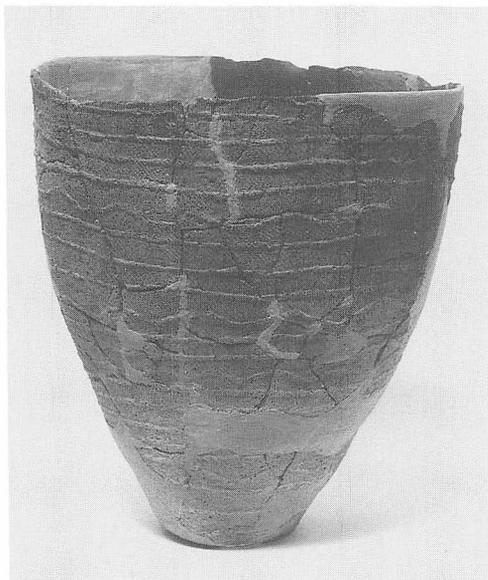
2. 調査状況



3. クルミ出土状況



4. 遺物集中⑥ 調査状況



1. 遺物集中⑥ 出土の土器



3. 遺物集中⑥ 出土の土器



2. 遺物集中⑥ 出土の土器



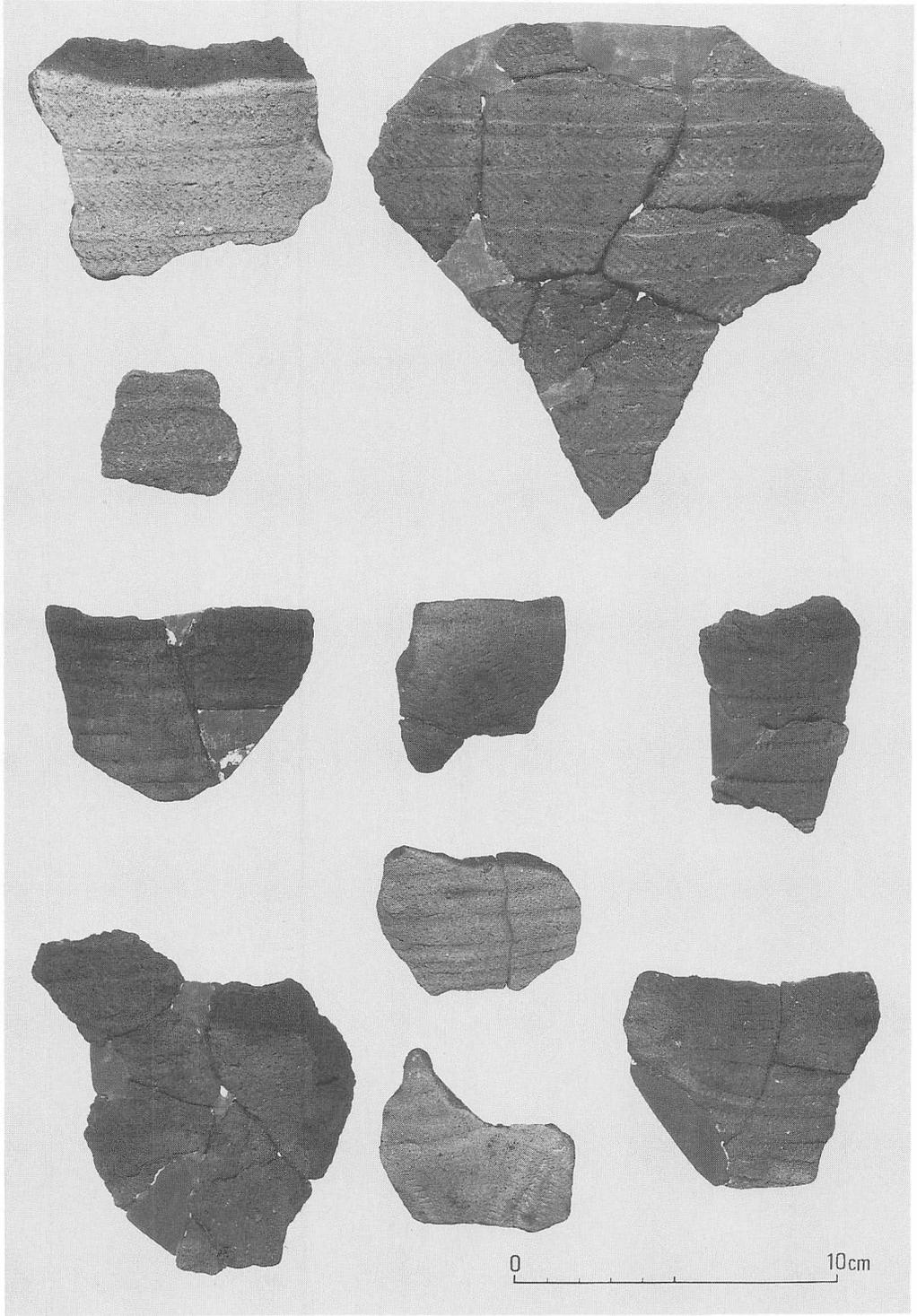
4. 遺物集中⑥ 出土の土器



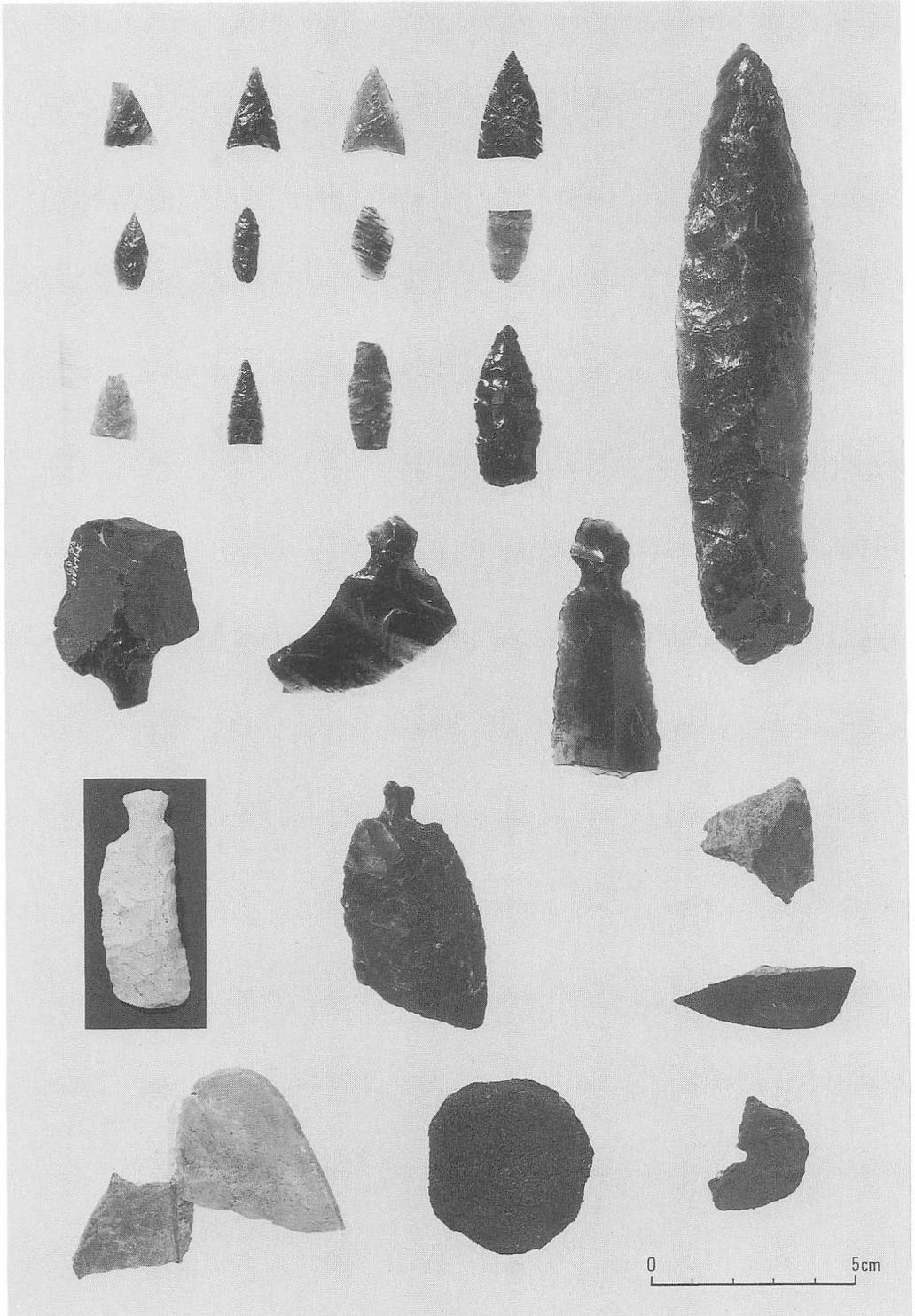
5. 遺物集中⑥ 出土の土器



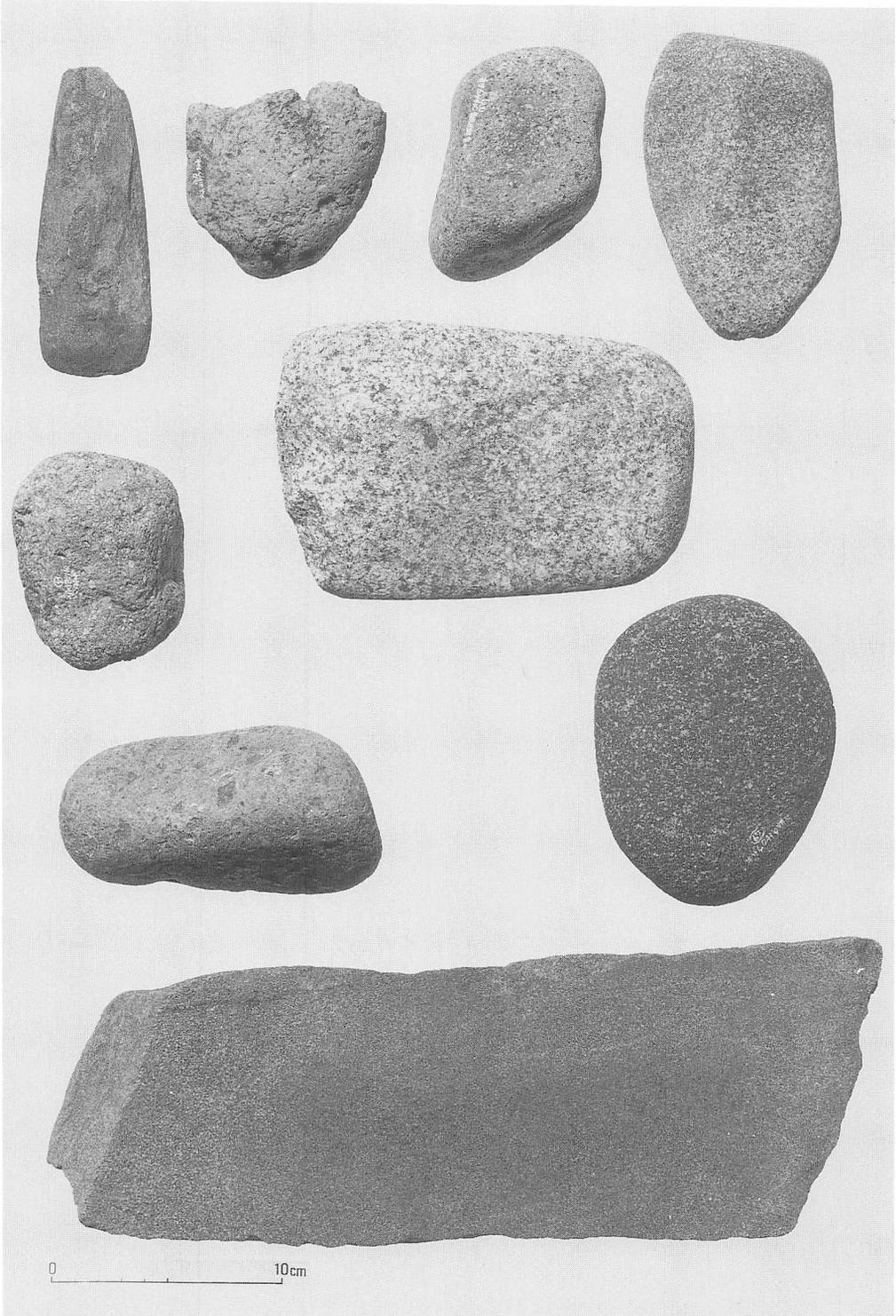
1. 遺物集中⑥ 出土の土器



1. 遺物集中⑥ 出土の土器



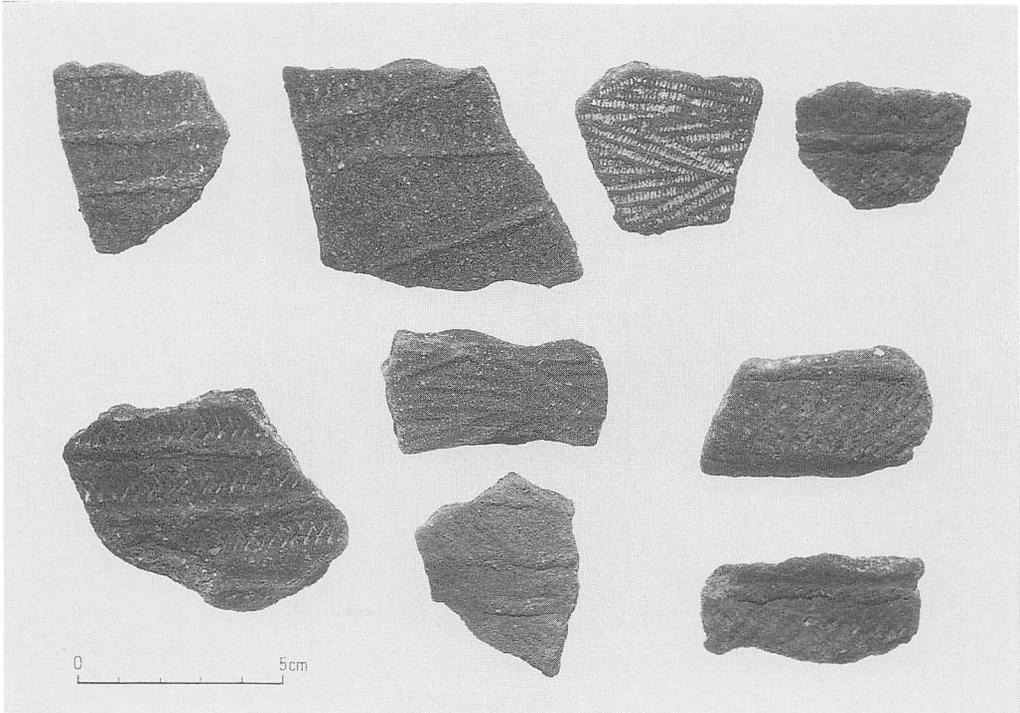
1. 遺物集中⑥ 出土の石器



1. 遺物集中⑥ 出土の石器



1. 泥炭層の調査状況



2. 泥炭層 出土の土器



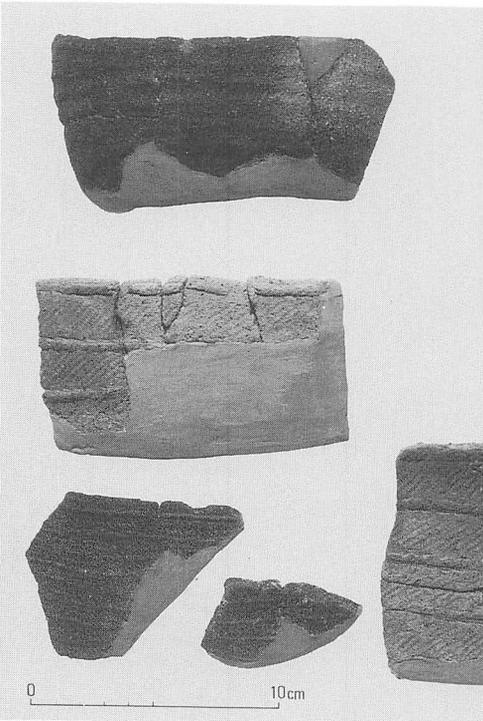
1. V層 出土の土器



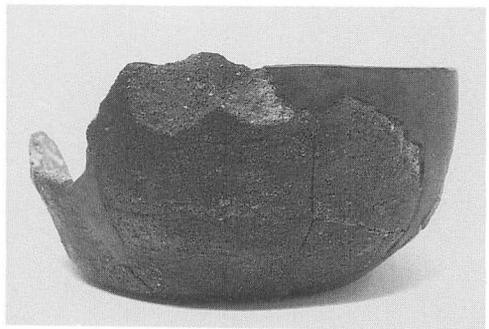
2. V層 出土の土器



3. V層 出土の土器



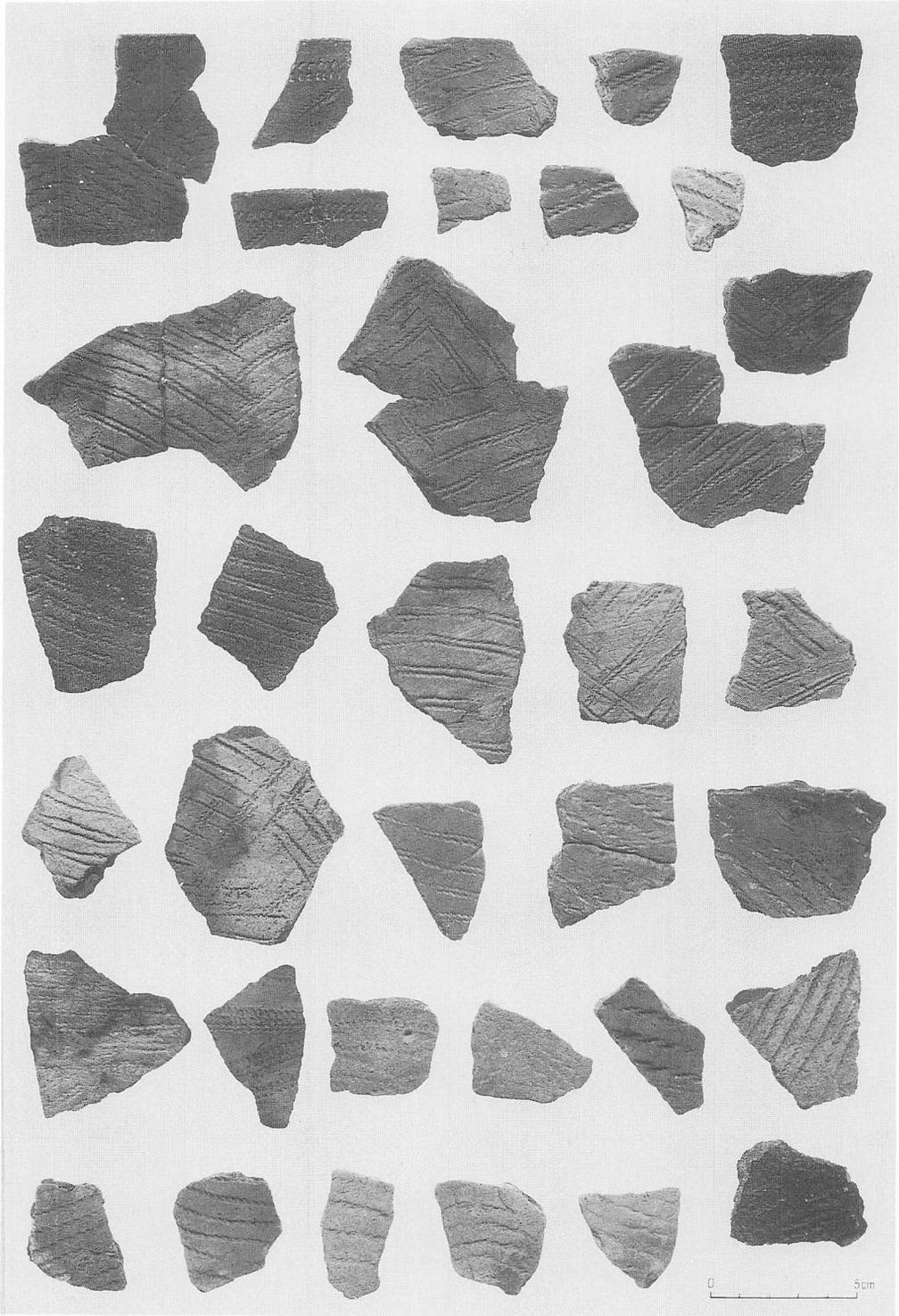
5. V層 出土の土器



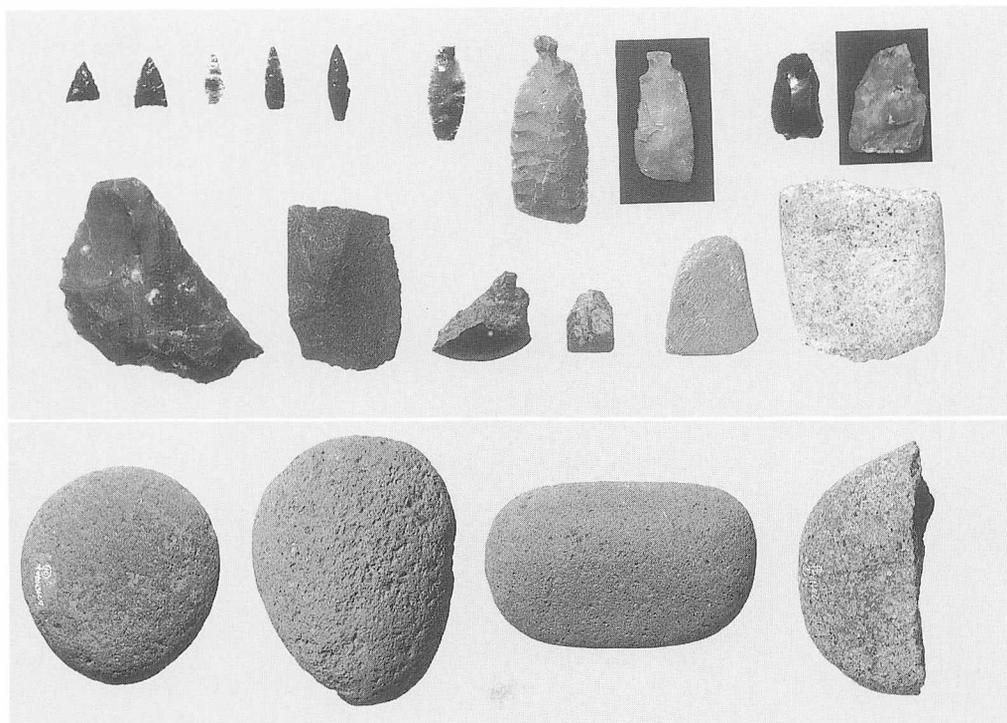
4. V層 出土の土器



1. V層 出土の土器



1. III層・IV層出土の土器



1. V層 出土の石器



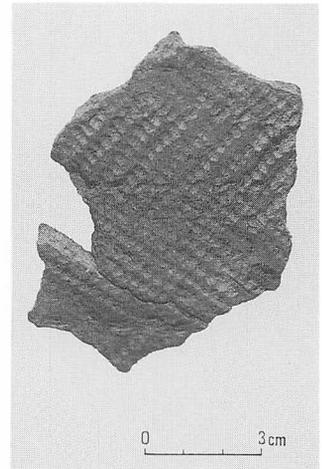
2. V層 調査状況



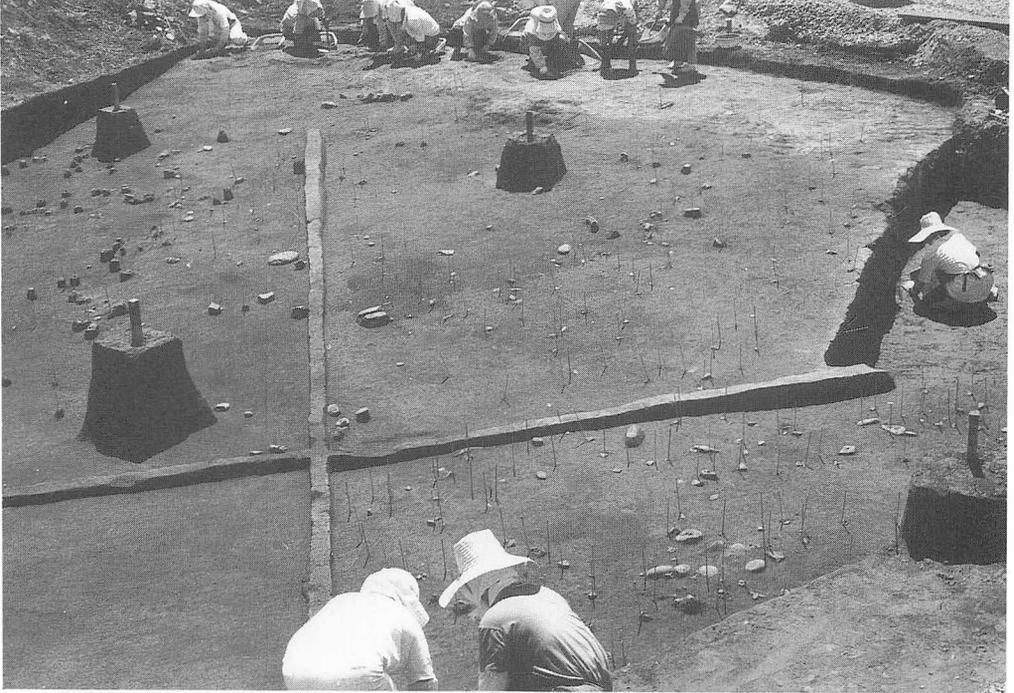
1. H-3 調査状況



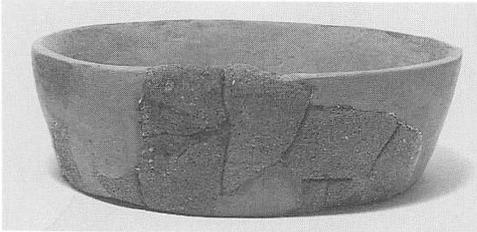
2. H-4 調査状況



3. H-4 出土の土器



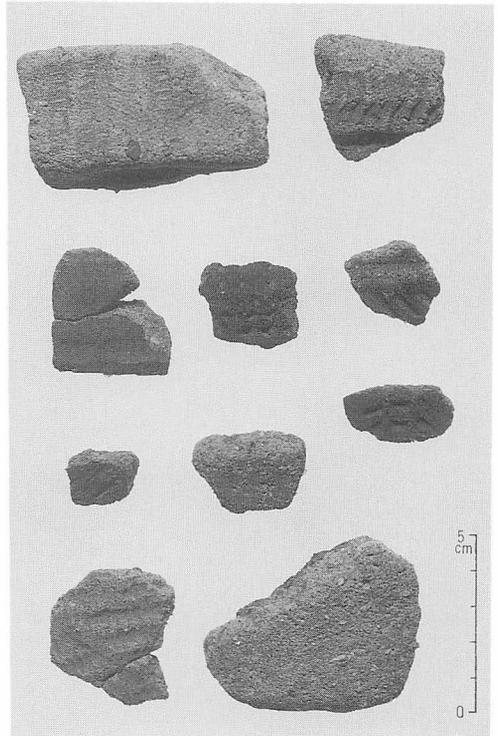
1. H-9 とその周辺の調査状況



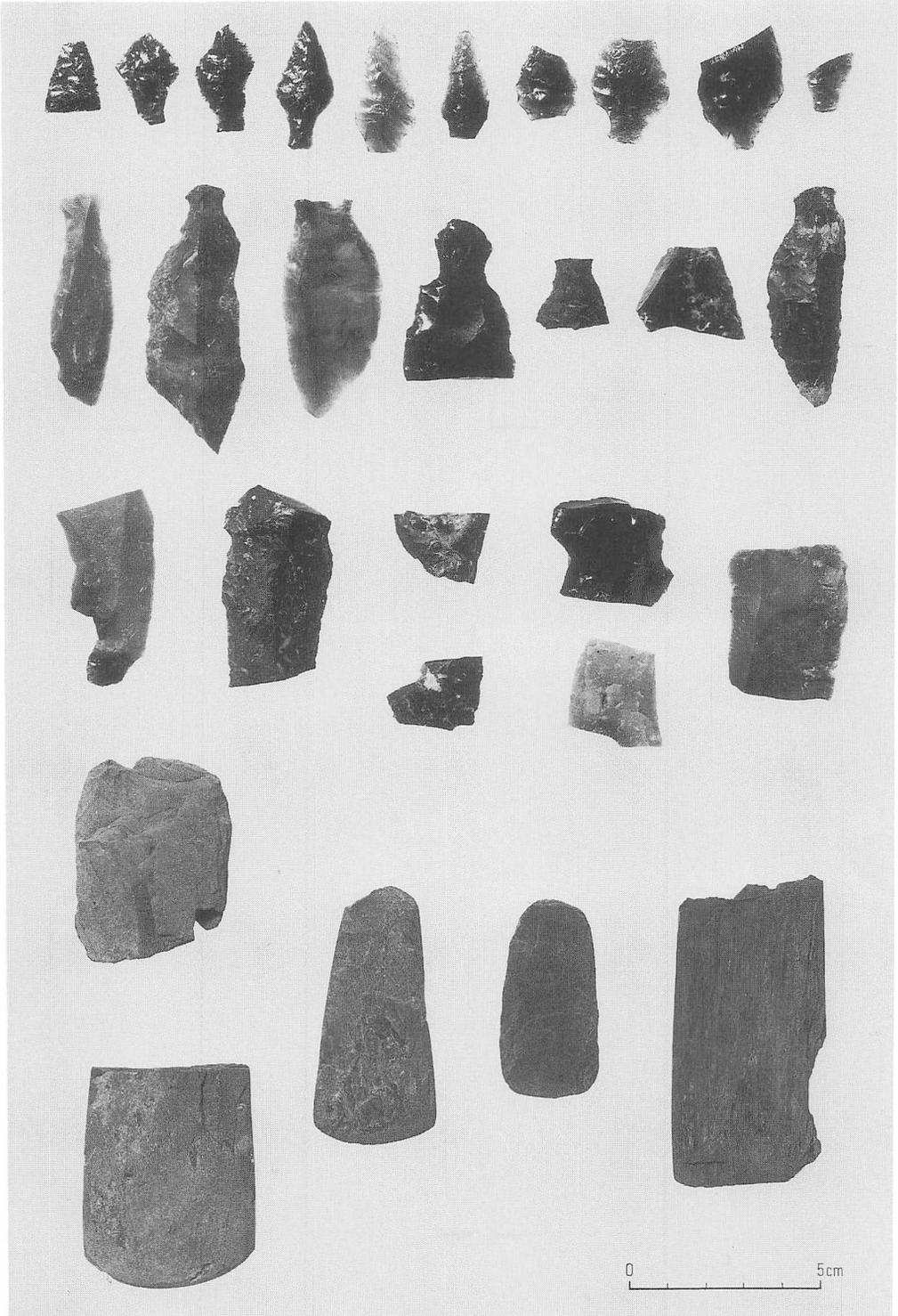
2. H-9 出土の土器



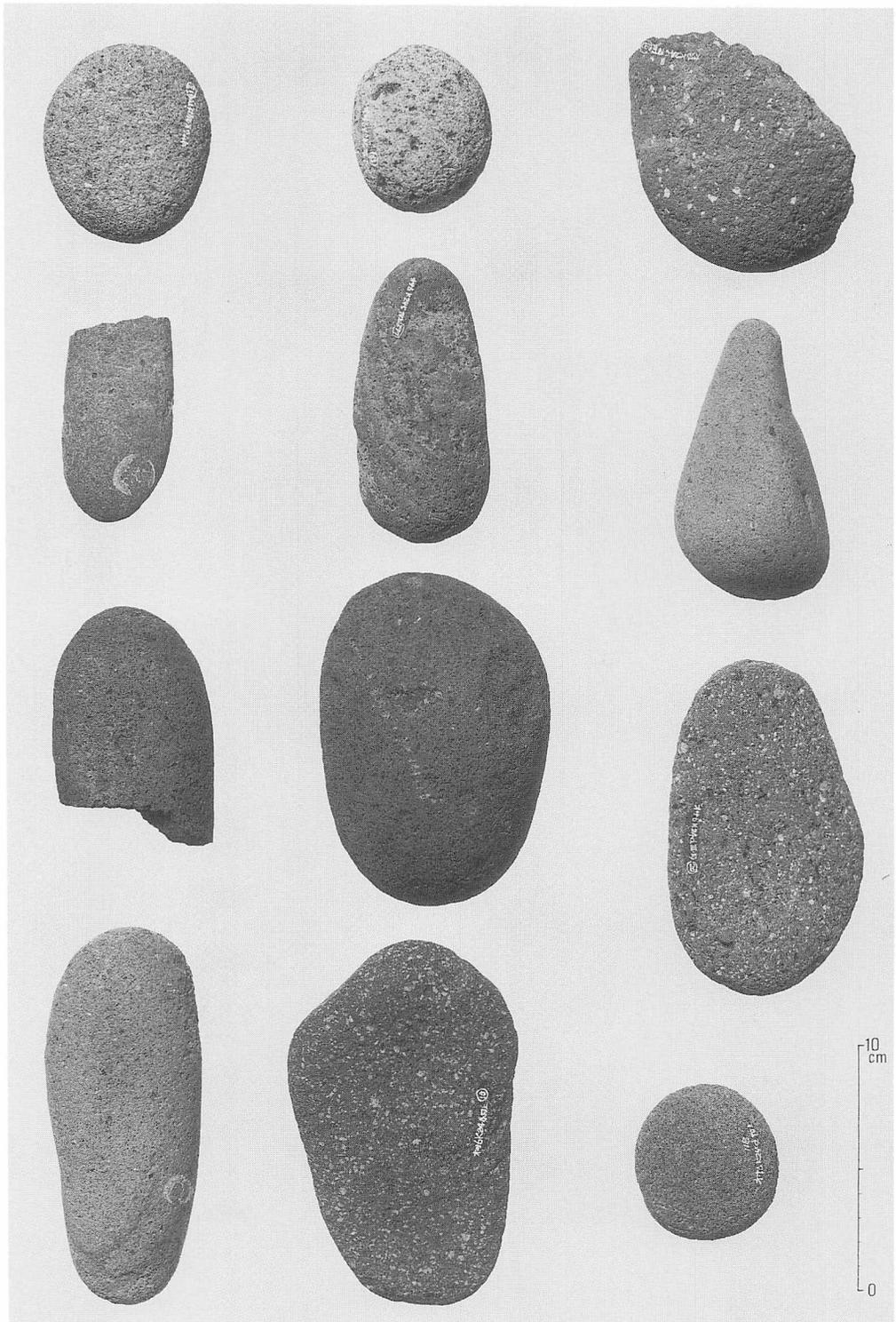
3. H-9 出土の土器



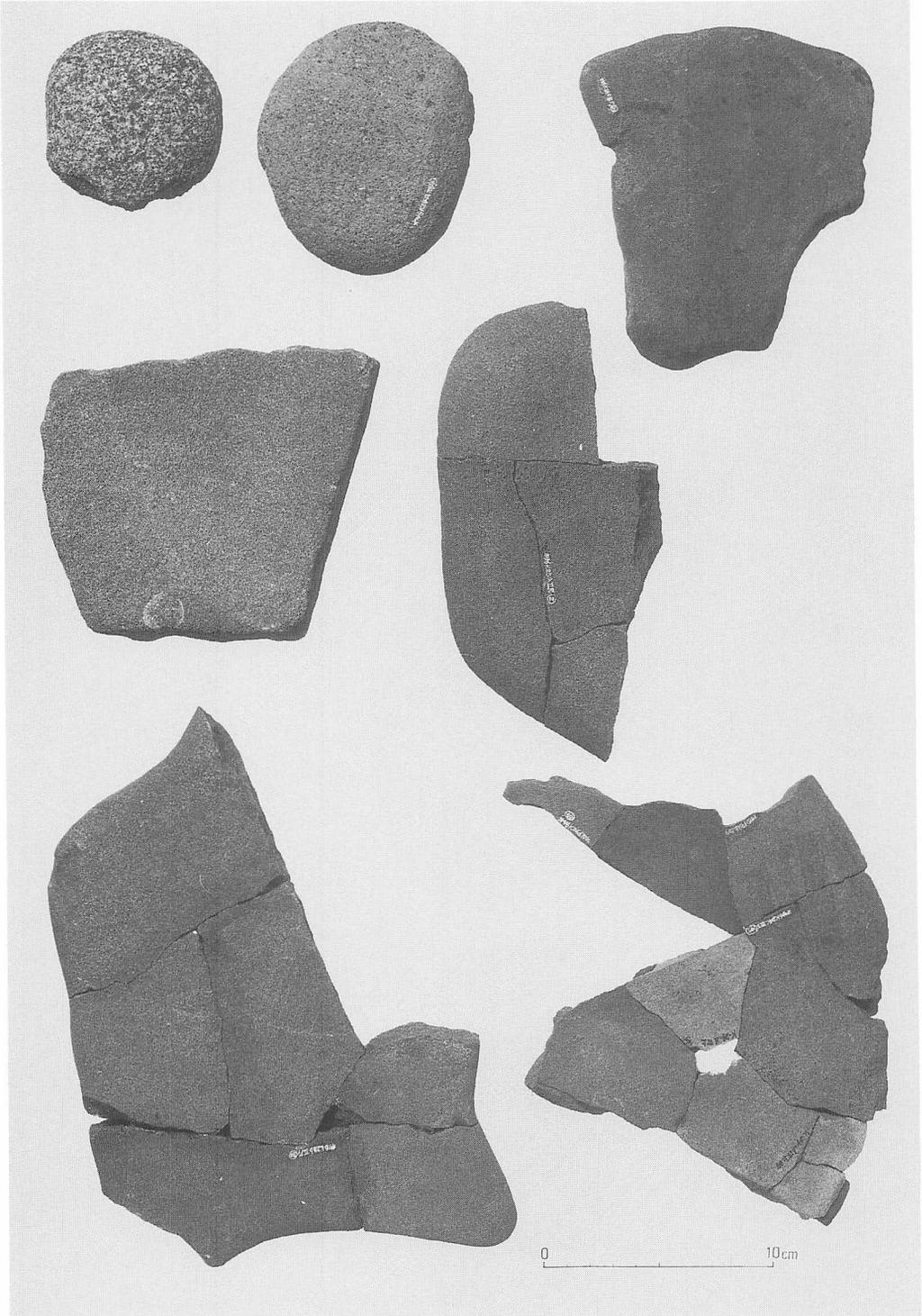
4. H-9 出土の土器



1. H-9 とその周辺出土の石器



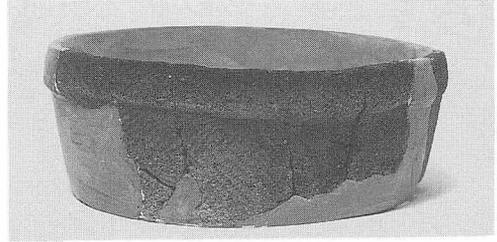
1. H-9とその周辺出土の石器



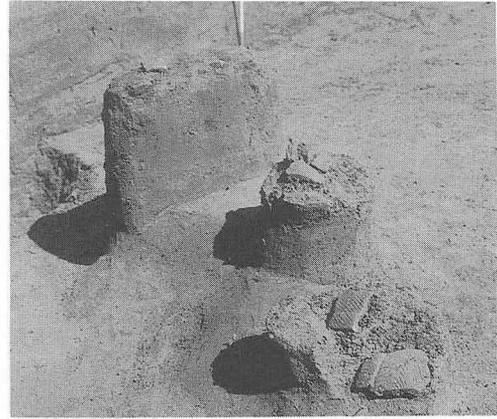
1. H-9 とその周辺出土の石器



1. TP-1 セクション



4. TP-1 出土の土器



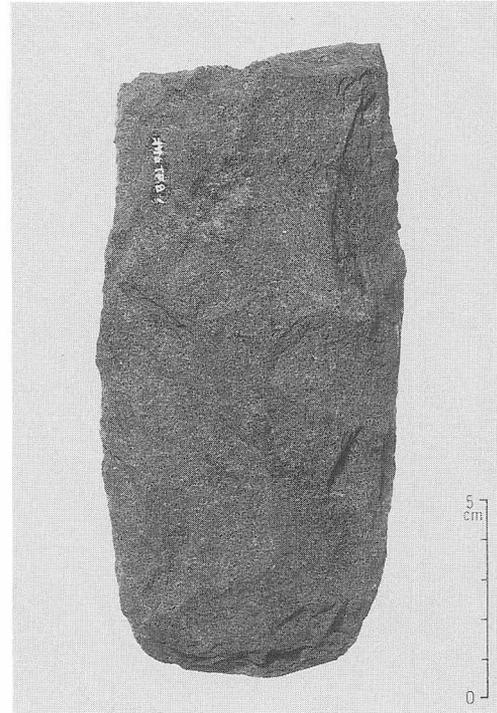
5. TP-1 遺物出土状況



2. TP-1 確認状況



3. TP-8 遺物出土状況



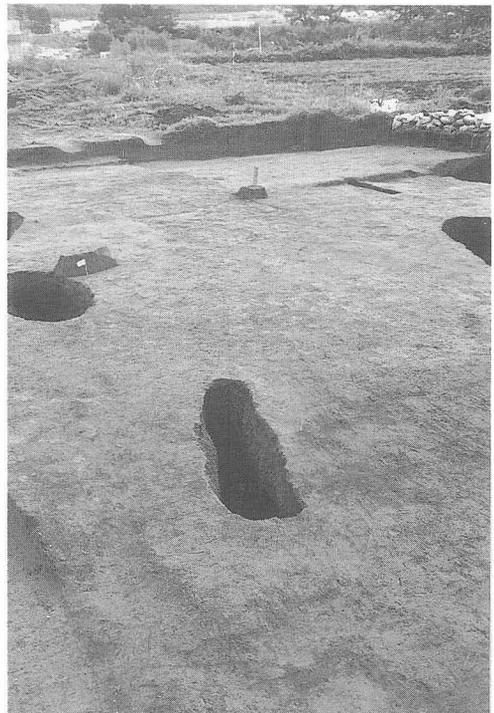
6. TP-8 出土の石器



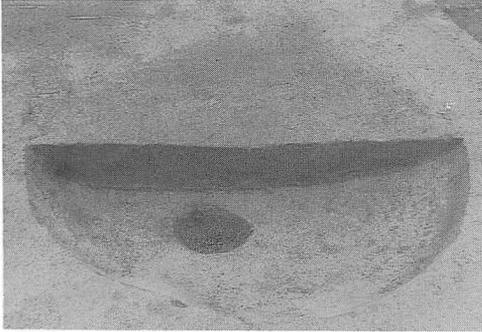
1. Tピット 調査状況



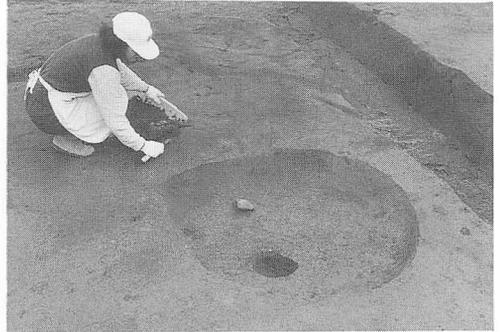
2. Tピット 完掘



3. Tピット 完掘



1. P-8 セクション



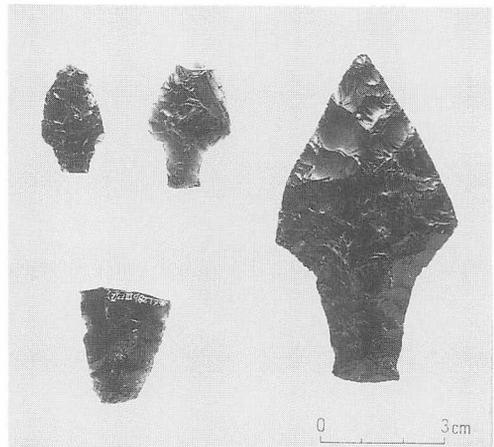
2. P-8 完掘



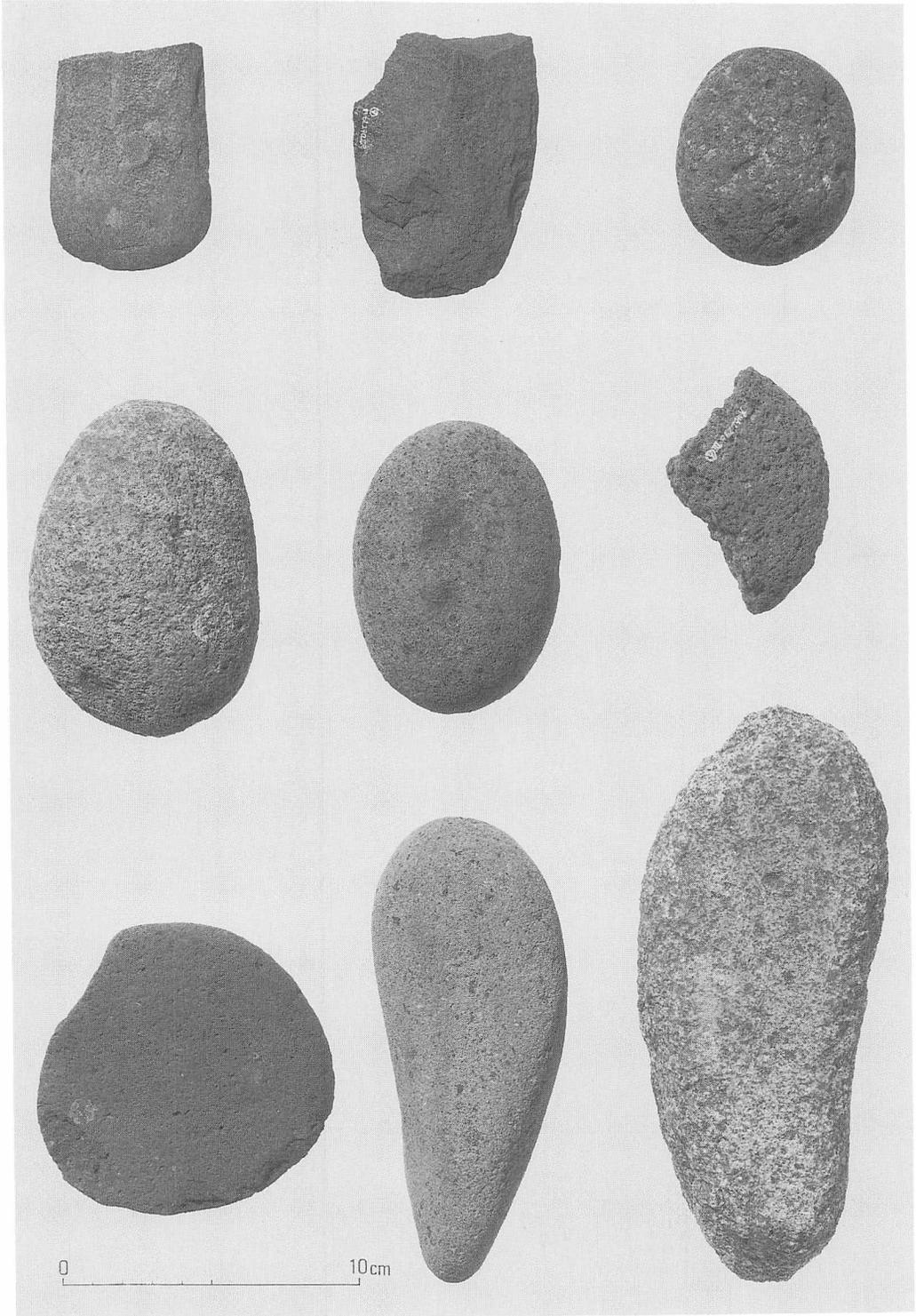
3. 遺物集中⑦ 調査状況



4. 遺物集中⑦ 出土の土器



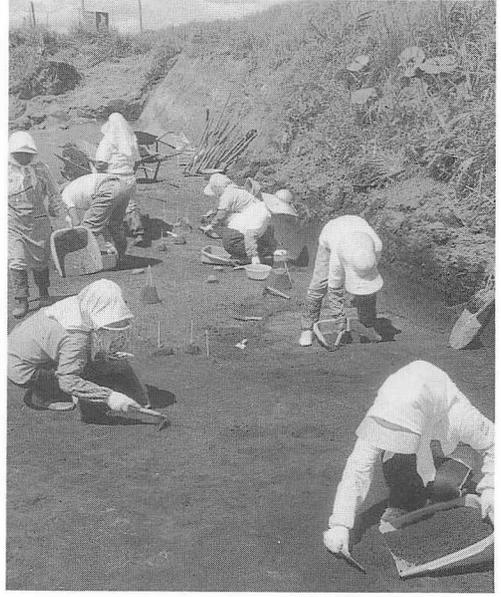
5. 遺物集中⑦ 出土の石器



1. 遺物集中⑦ 出土の石器



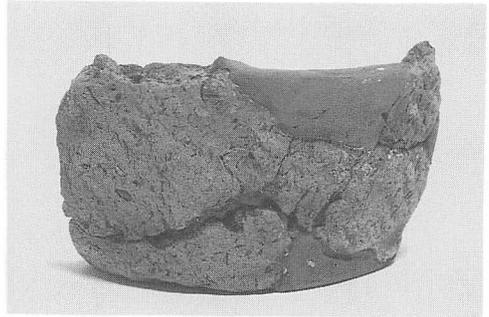
1. III層 調査状況



2. III層 調査状況



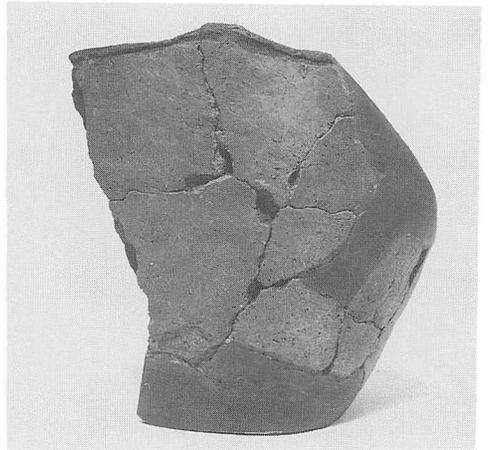
3. III層 出土の土器



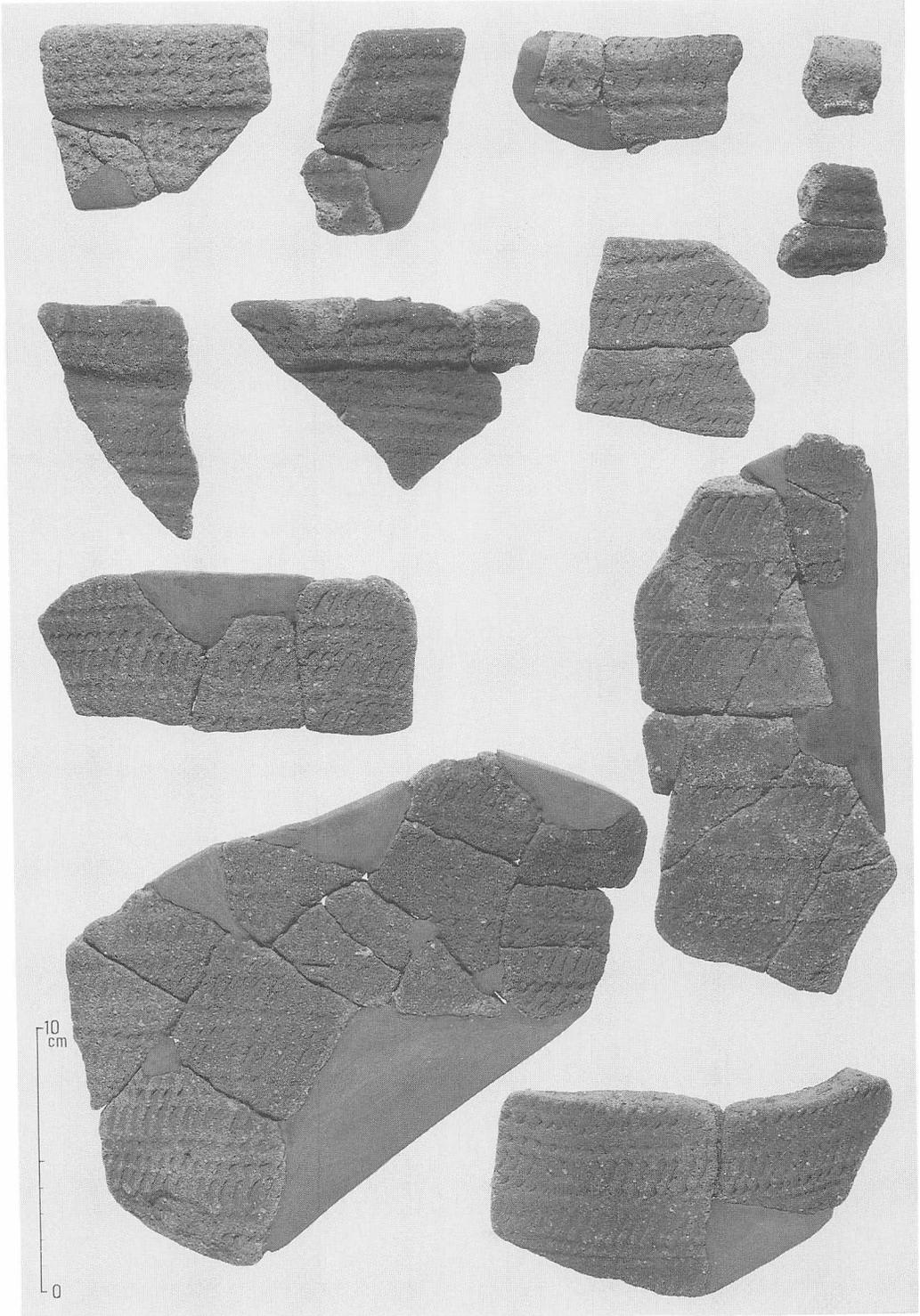
4. III層 出土の土器



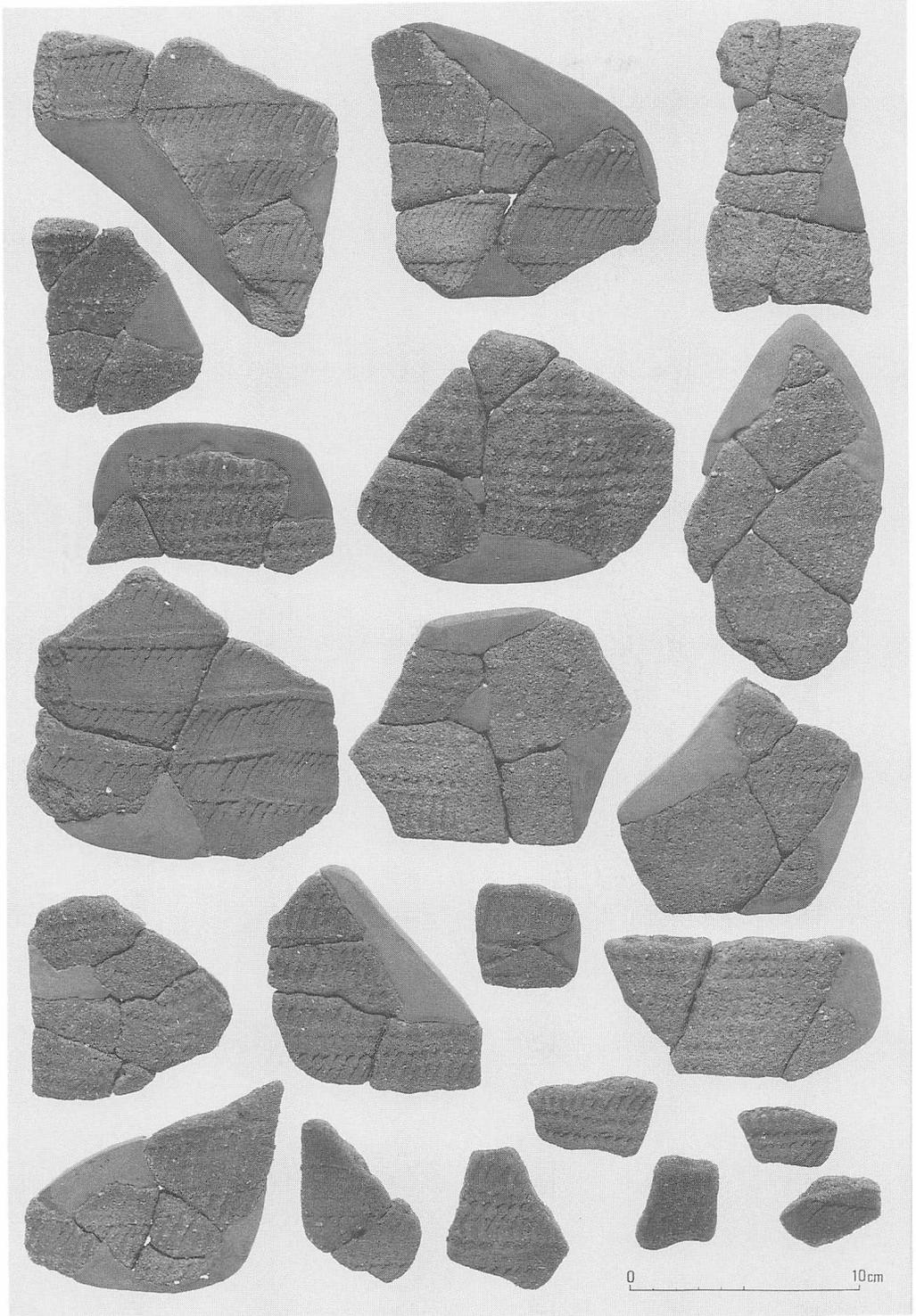
5. IV層 出土の土器



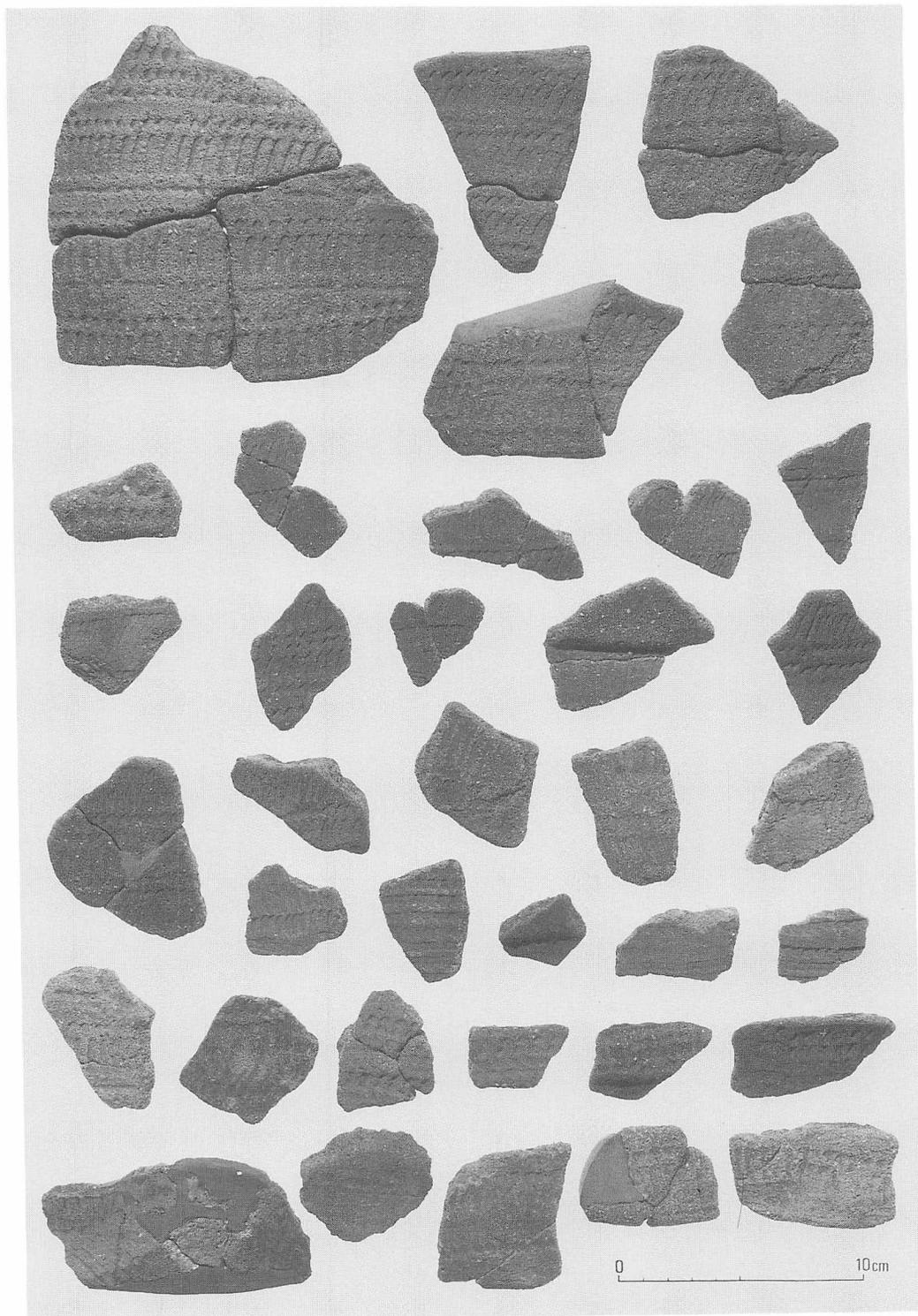
6. IV層 出土の土器



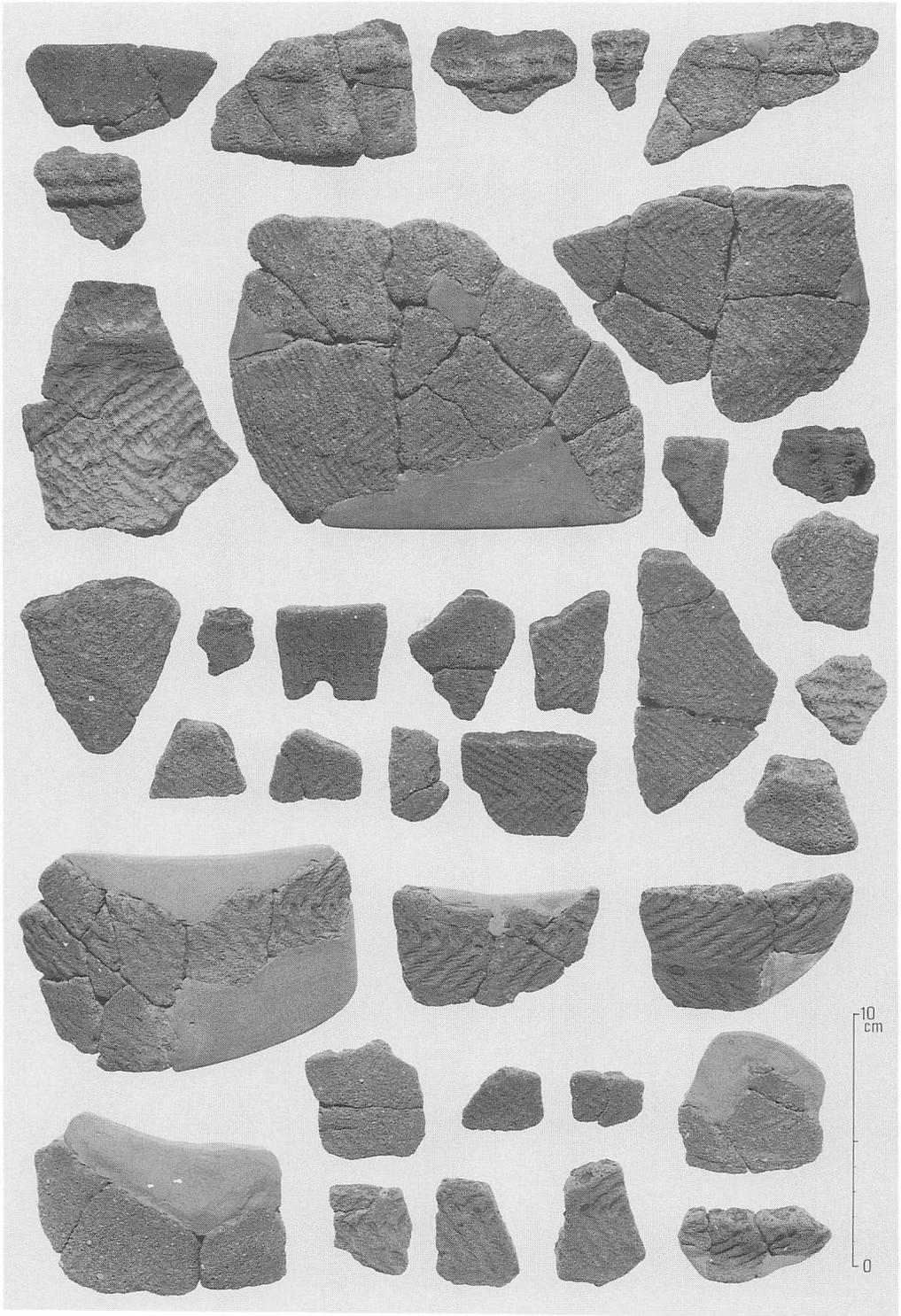
1. III層・IV層 出土の土器



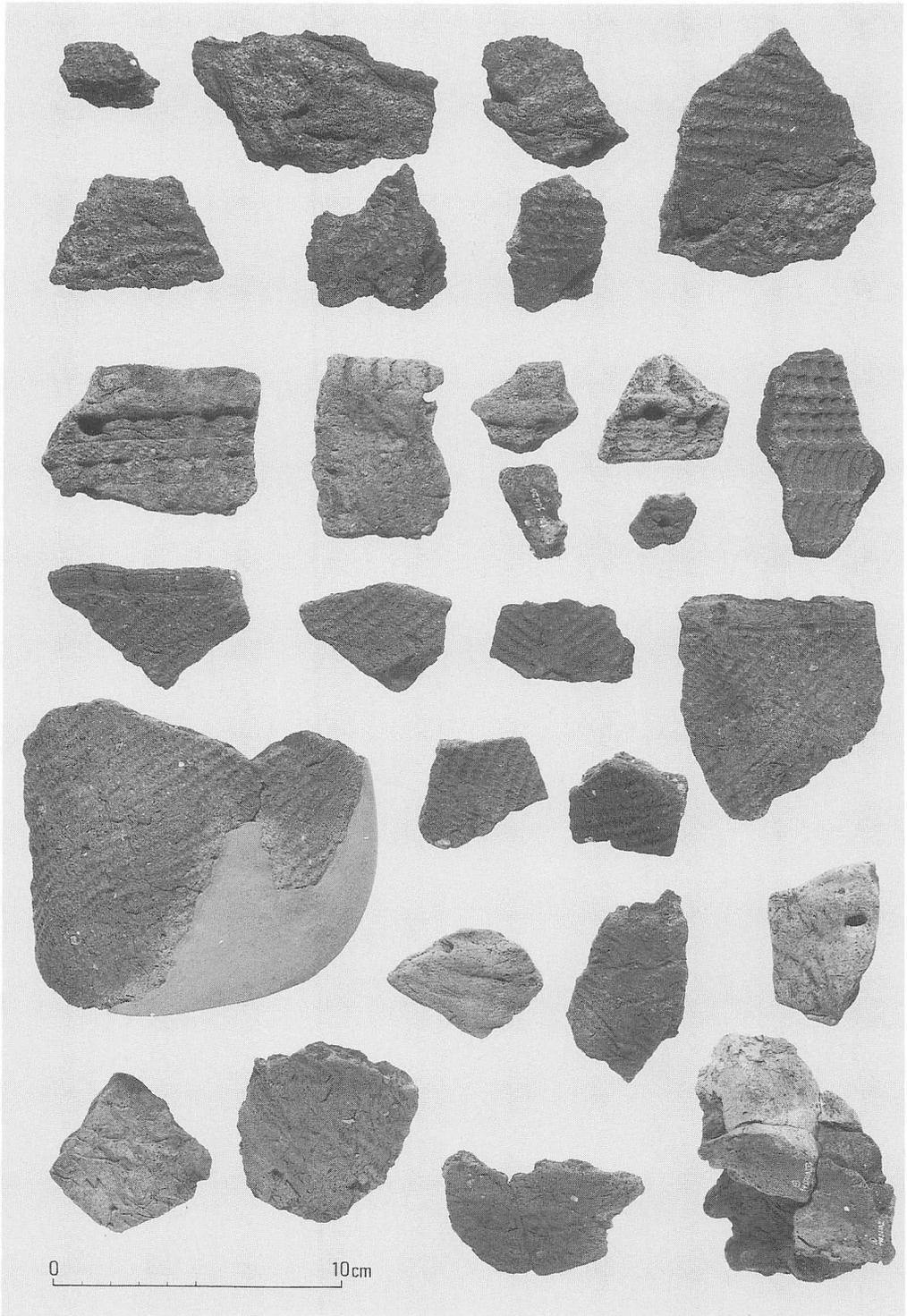
1. III層・IV層 出土の土器



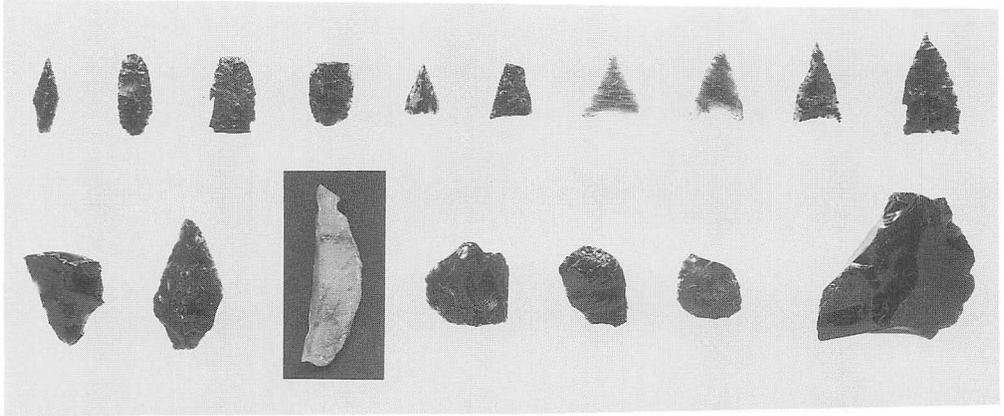
1. III層・IV層 出土の土器



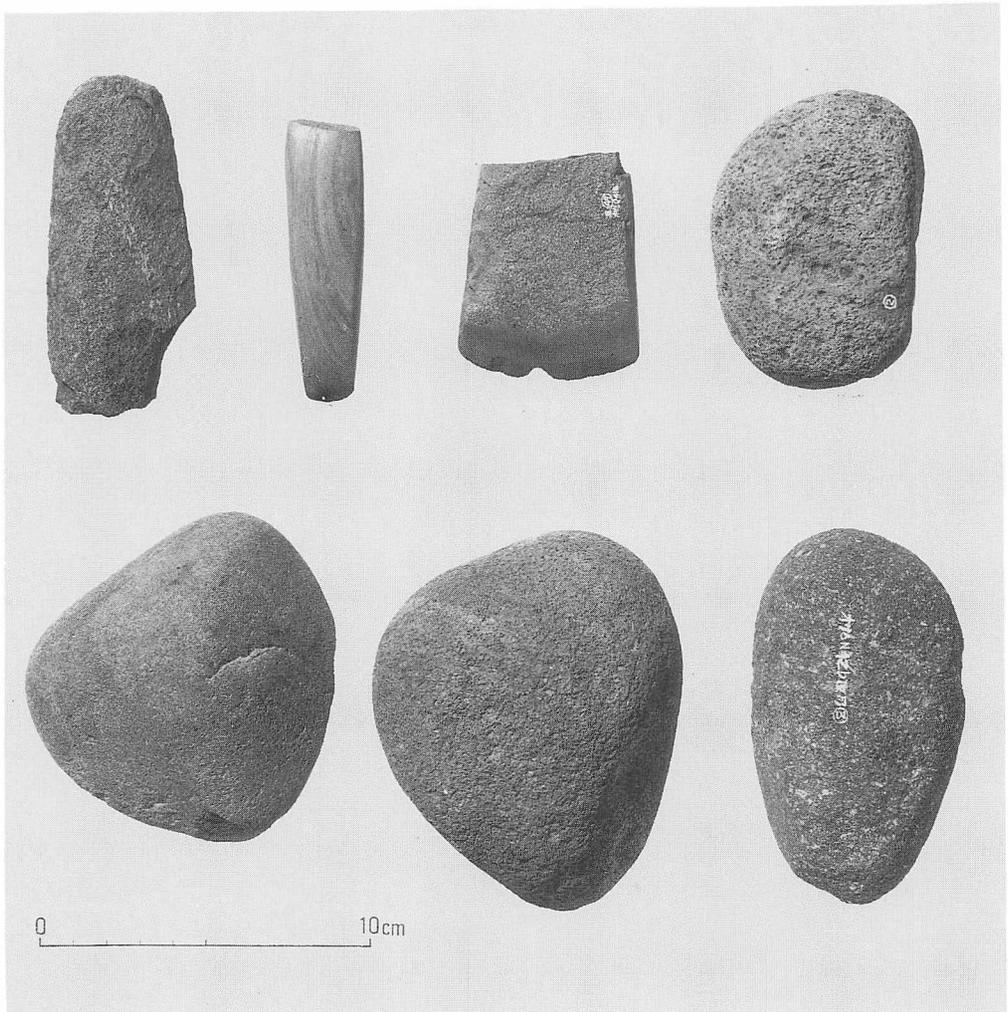
1. III層・IV層 出土の土器



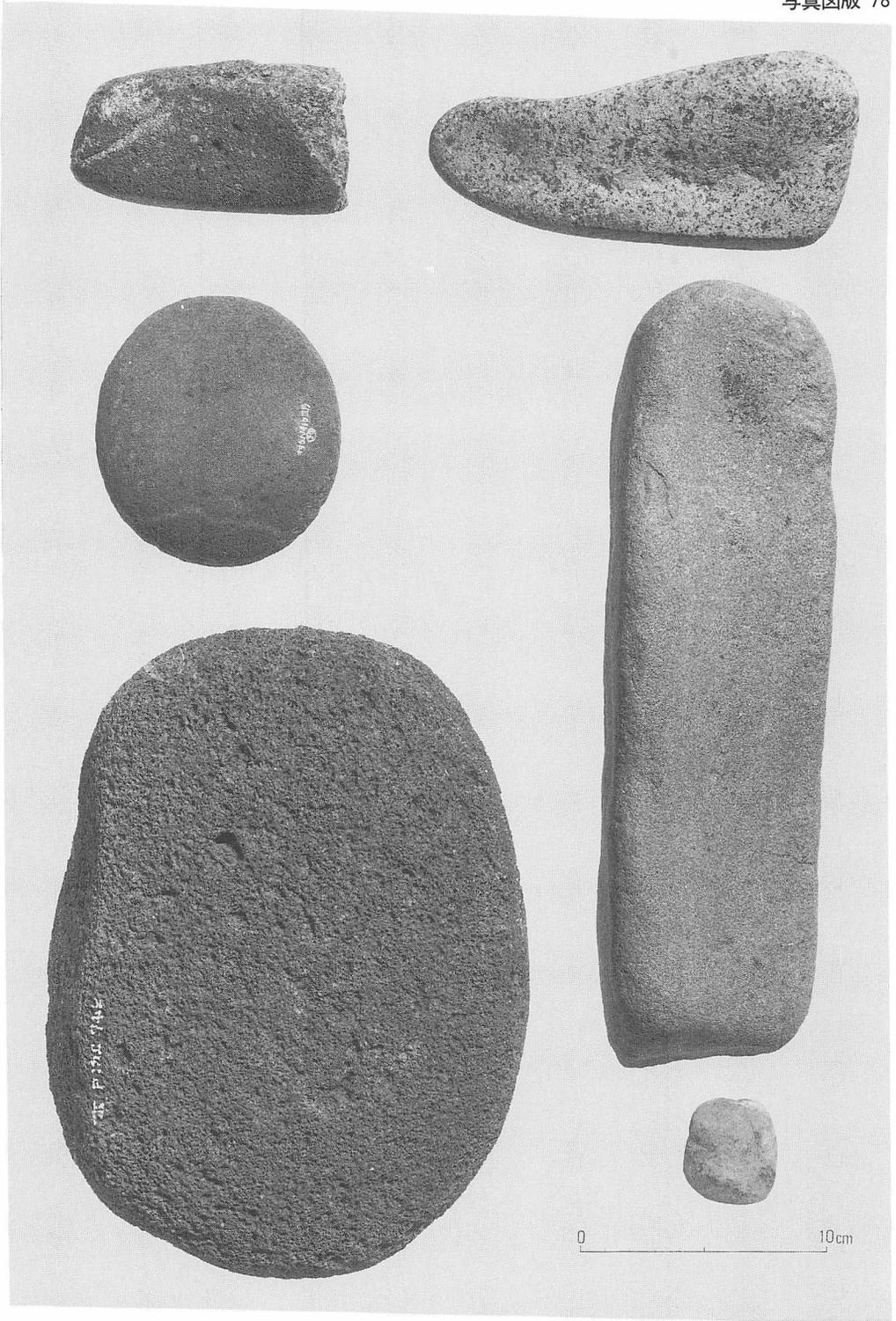
1. III層・IV層 出土の土器



1. III層・IV層 出土の石器



2. III層・IV層 出土の石器



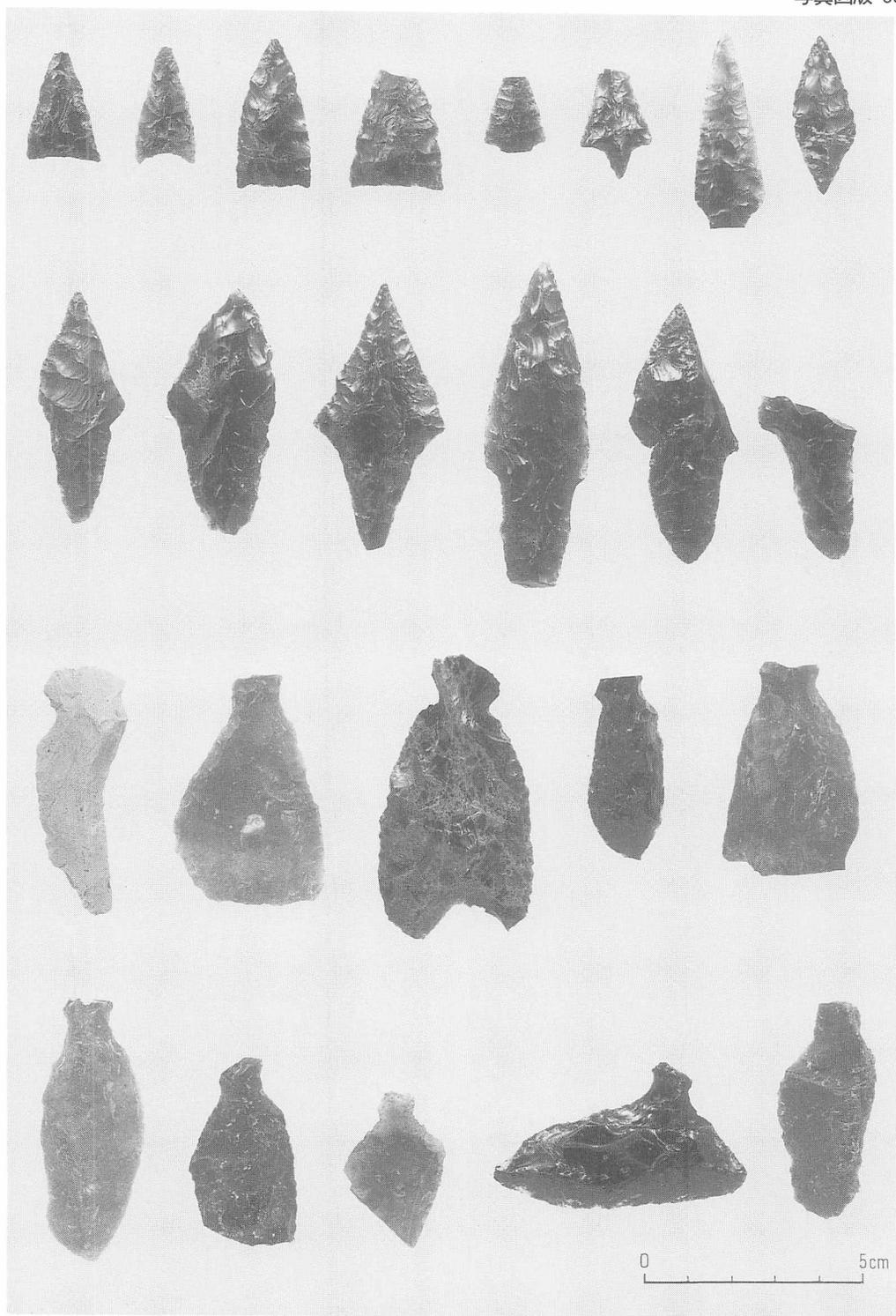
1. III層・IV層 出土の石器



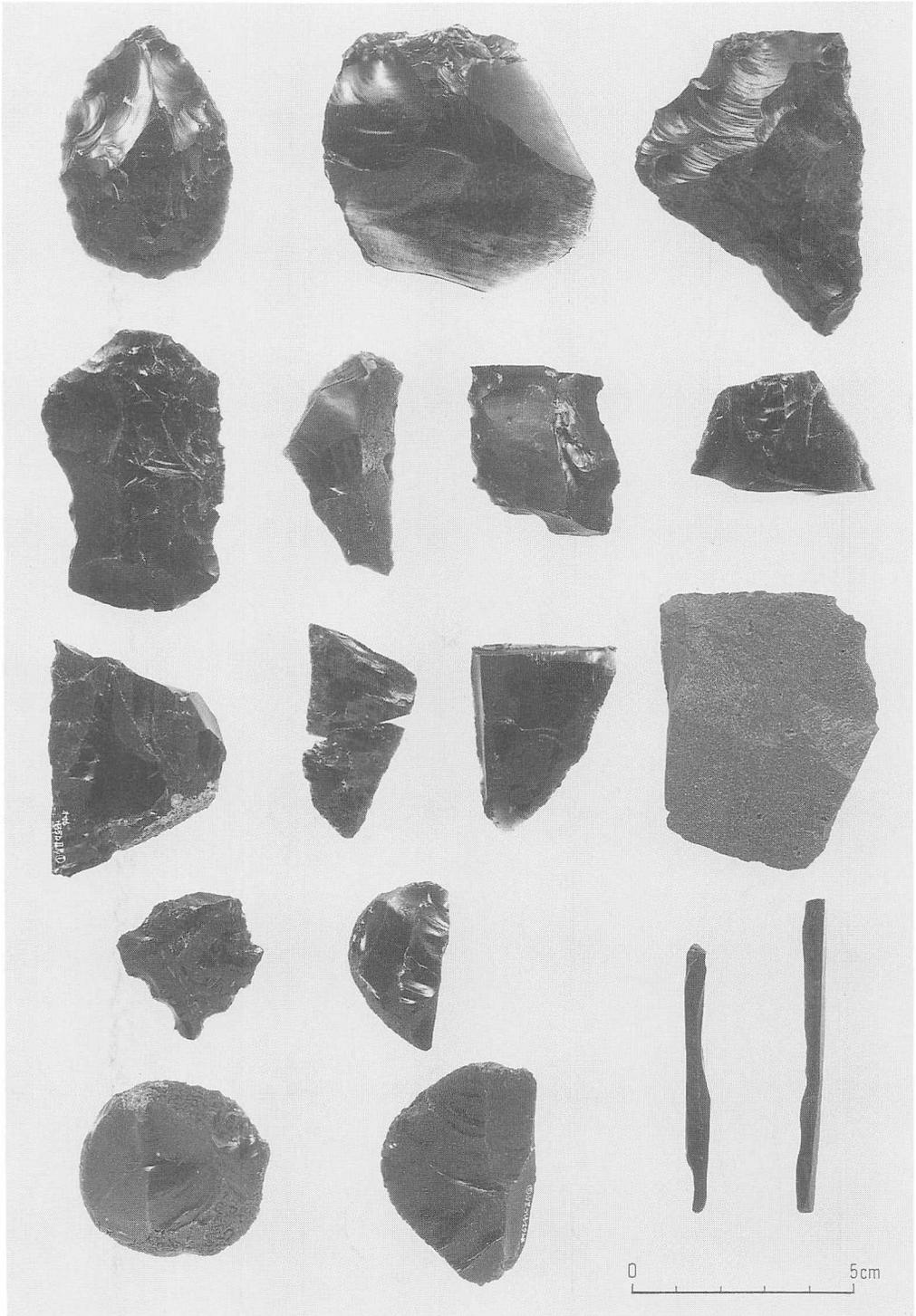
2. II層 焼土確認状況



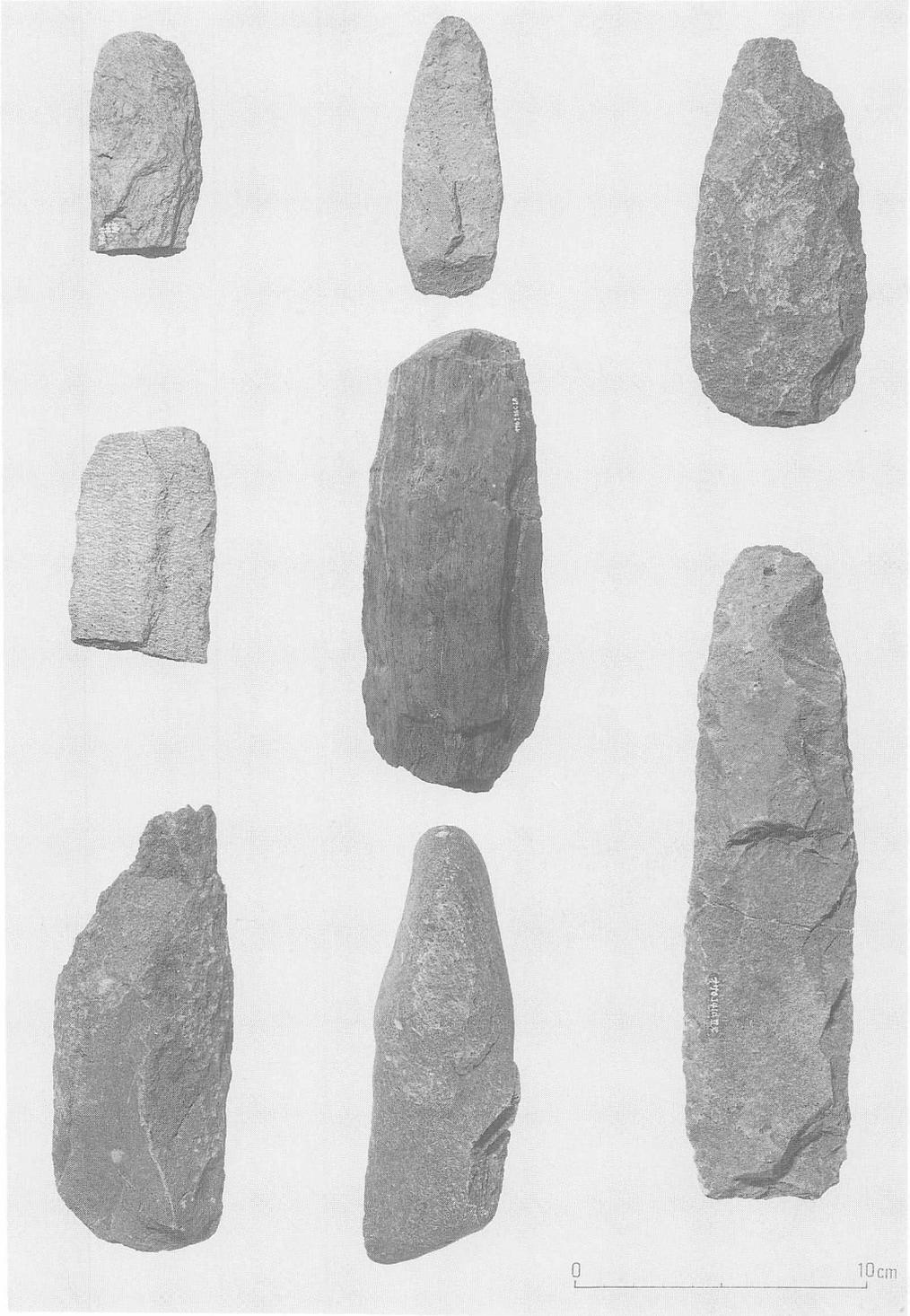
3. I層・II層 出土の土器



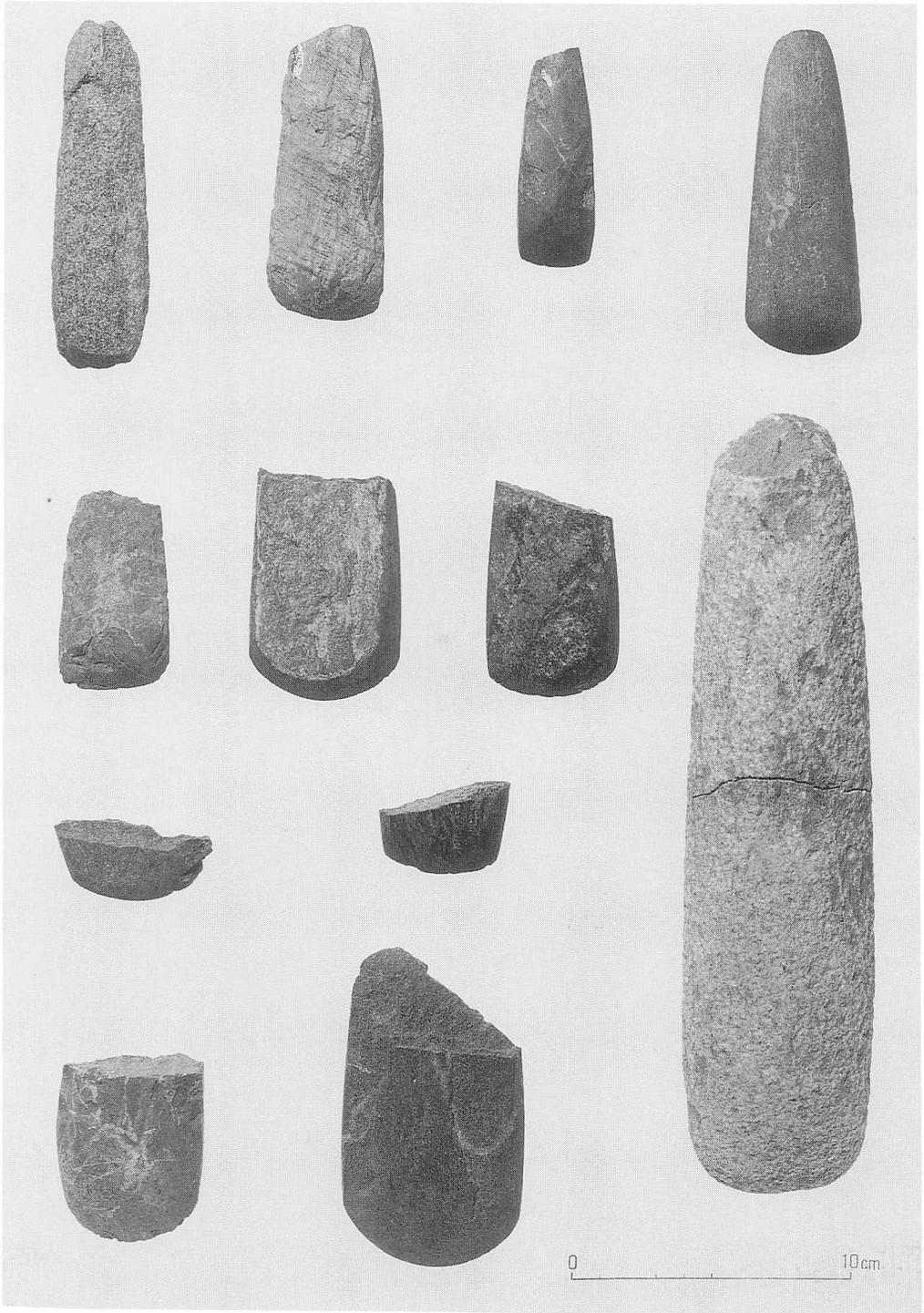
1. I層・II層 出土の石器



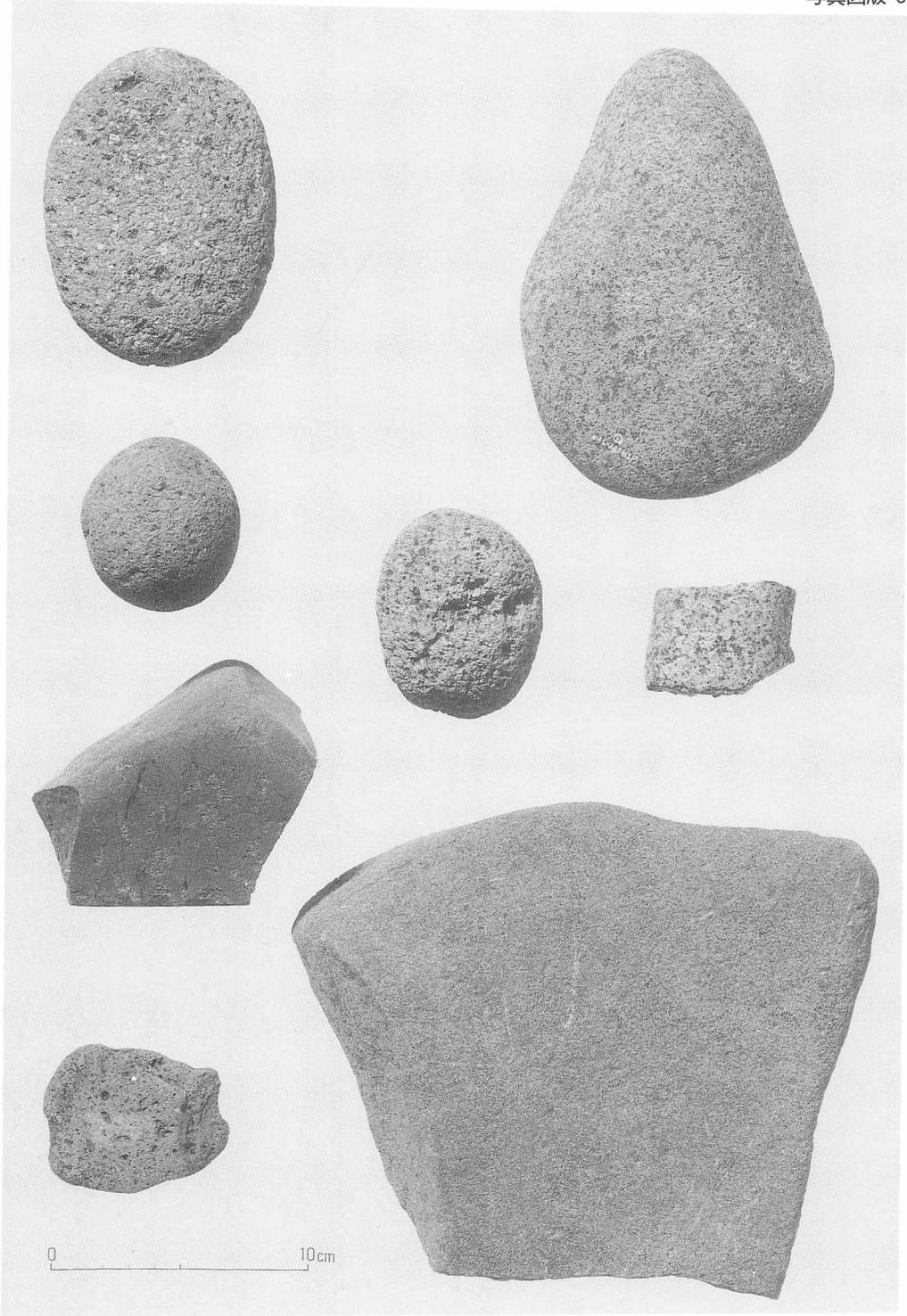
1. I層・II層 出土の石器



1. I層・II層 出土の石器



1. I層・II層 出土の石器



1. I層・II層 出土の石器

V 成果と問題点

1. 旧河道跡の埋積土から産出した花粉・孢子について

山田 悟郎

1 試料および試料の処理方法

1) 試料

試料は納内6丁目付近遺跡の発掘に際して見つかった、旧河道跡を埋積した腐植土が混じった泥炭(8、13、16層)、および上位に堆積したV層の黒色腐植土、III層の淡黒褐色腐植土から採取されたものである。泥炭質土は8層が黒色で、13層が黒褐色、16層が暗褐色を呈する(47ページ参照)。III層ではIII-1~3の3点が、V層からはV-上、中、下の3点が、泥炭質土からはそれぞれ各1点の試料が採取された。

泥炭質土は河川から切り離されて水溜りとなっていた河道跡に泥炭が堆積する間に周囲から腐植土が流れ込んで堆積したもので、III、V層は水域が乾燥した後の窪地に土壌が流れ込んで堆積したものであろう。泥炭質土からIII層までは何れも縄文時代早期の遺物包含層になっており、泥炭質土からは数多くの植物質の食物残渣が検出されている。

2) 試料の処理方法

試料の処理にあたって、泥炭質土については土壌100gを、腐植土については土壌500gをビーカーに取り、下記の順に化学・物理処理を行なってプレパラートを作成した。

アルカリ処理—水洗—比重分離—水洗—アセトリシス処理—水洗—フッ化水素酸処理—水洗

検鏡にあたっては通常400倍で行い、微細構造の観察にあたっては1,000倍で行なった。同定、計数にあたっては、樹木花粉を200個以上数えるまでに出現した花粉・孢子を無作為に同定し計数するよう努めたが、樹木花粉を200個以上数えることができた試料は泥炭質土3点のみで、上位の腐植土で200個を数える試料はなかった。したがって、各試料から出現した花粉・孢子の出現数を一覧表にして示した。また、泥炭質土から産出した花粉については、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉・孢子については総花粉・孢子数を基数とした百分率で出現率を算出して花粉ダイヤグラムに表示した。

2 出現した花粉・孢子

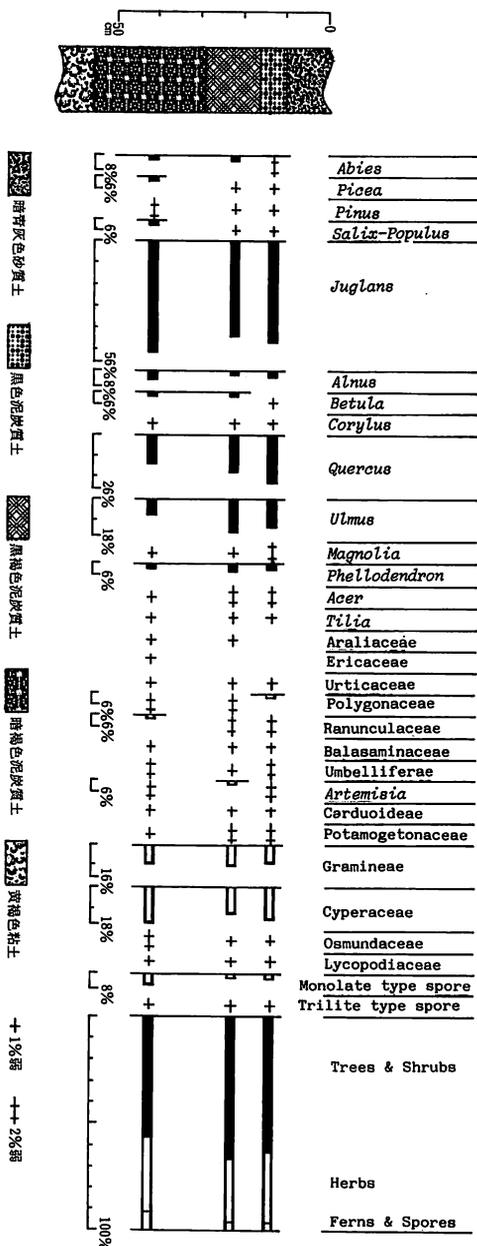
9点の試料から18属2科の樹木花粉と、1属13科の草本花粉、2科の孢子、2種類の形態分類孢子が検出された。

泥炭質土では落葉広葉樹の *Juglans* (クルミ属)、*Salix-Populus* (ヤナギ属—ハコヤナギ属)、

V 成果と問題点

Alnus(ハンノキ属)、*Betula*(カバノキ属)、*Quercus*(コナラ亜属)、*Ulmus*(ニレ属)、*Phellodendron*(キハダ属)、*Acer*(カエデ属)と針葉樹の*Abies*(モミ属)、*Picea*(トウヒ属)、草本・胞子のGramineae(イネ科)、Cyperaceae(カヤツリグサ科)、Polygonaceae(タデ科)、Ranunculaceae(キンポウゲ科)、Umbelliferae(セリ科)、*Artemisia*(ヨモギ属)、Potamogetonaceae(ヒルムシロ科)、Monolate type spore(シダ類)からなる花粉構成で、樹木では*Juglans*が優占し、草本・胞子ではGramineae、Cyperaceaeが優勢である。泥炭質土の厚さは約40cmほどであるが3点の試料では花粉構成に大きな変化は見られない。なお、8層と13層からは各1粒であるが高層湿原などに多く見られるEricaceae(ツツジ科)が出現しているほか、水域に分布するPotamogetonaceaeが連続して出現する。このほかに、*Corylus*(ハシバミ属)、Balasaminaceae(ツリフネソウ科)、Typhaceae(ガマ科)も僅かではあるが出現している。

上位2層の腐植土では出現した花粉の種類・数が減少する。V層の中、下部では*Juglans*が下位より減少するが依然多く出現し、落葉広葉樹の*Juglans*、*Alnus*、*Quercus*、*Ulmus*、*Phellodendron*、*Acer*、*Betula*、*Abies*と草本・胞子のPolygonaceae、Ranunculaceae、Umbelliferae、*Artemisia*、Carduoideae、Cichorioideae(タンポポ亜科)、Gramineae、Cyperaceae、Monolate type sporeからなる花粉構成を示す。樹木では*Juglans*、*Alnus*、*Quercus*、*Ulmus*が優勢で、草本・胞子では*Artemisia*、Gramineae、Cyperaceae、Monolate type sporeが優勢である。*Alnus*は下位より僅かに増加し、*Juglans*、*Quercus*、*Ulmus*が減少している。Potamogetonaceaeは出現しなくなり、Urticaceae(イラクサ科)



は下部でのみ出現するだけである。

Ⅲ層で出現する樹木花粉は *Juglans*、*Alnus*、*Betula*、*Quercus*、*Ulmus* のみである。草本・胞子では Polygonaceae、Ranunculaceae、Umbelliferae、*Artemisia*、Carduoideae、Gramineae、Cyperaceae、Osmundaceae（ゼンマイ科）、Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科）、Monolate type spore が出現する。花粉の種類・数が減っている中での *Artemisia* の増加が特徴的である。

3 旧河道周辺の植生について

住居址の分布から、縄文時代早期の住居が旧河道の水溜りに面して構築され、先史時代の人々が河川跡の水域を中心に生活していた様子を窺い知ることができる。泥炭質土から出現した花粉・胞子の構成から、当時水域周囲にはオニグルミが主となった落葉広葉樹林が分布していたことが推定される。水域近くの適潤地にはクルミ属（オニグルミ）が主となり、ハンノキ属（ハンノキ）、ヤナギ—ハコヤナギ属（エゾヤナギ、エゾノカワヤナギ、ドロノキほか）が混生した林が分布し、幾分乾燥した場所にはカバノキ属（シラカンバ）、コナラ亜属（ミズナラ）、ニレ属（ハルニレ）、キハダ属（キハダ）、カエデ属（ハウチワカエデ、イタヤカエデほか）の樹木が分布していた。

一方、水域および水際にはヒルムシロ科（ヒルムシロ、フトヒルムシロほか）、カヤツリグサ科（エゾアブラガヤほか）、イネ科（ヨシ）、ガマ科（ガマ）、タデ科（インミカワ、ミゾソバほか）、イラクサ科（イラクサほか）、ツリフネソウ科（キツリフネ）の草本が生育し、住居が構築されていた高まりの、日あたりの良い荒地や住居の周りには、陽地性のタデ科（オオイタドリ）、キンボウゲ科（カラマツソウ、アキカラマツ）、セリ科（エゾニユウ、ヤブジラミほか）、ヨモギ属（オオヨモギ）、キク亜科（アキタブキ、チシマアザミ、ヨブスマソウほか）、タンポポ科（コウゾリナほか）、イネ科（ススキ、エノコログサ、イヌビエほか）、ゼンマイ科（ゼンマイ、ヤマドリゼンマイなど）、シダ類（オシダ、メシダほか）が分布していた。

旧河道跡地周辺に分布していたと推定したオニグルミ林は、かつては北海道各地の沖積地と台地の間に分布していたハンノキ—オニグルミ林とはほぼ同様な構成の林である。しかし、農地開発が進むにつれこれらの林は伐採されて、現在ではほとんど見ることができなくなっている。

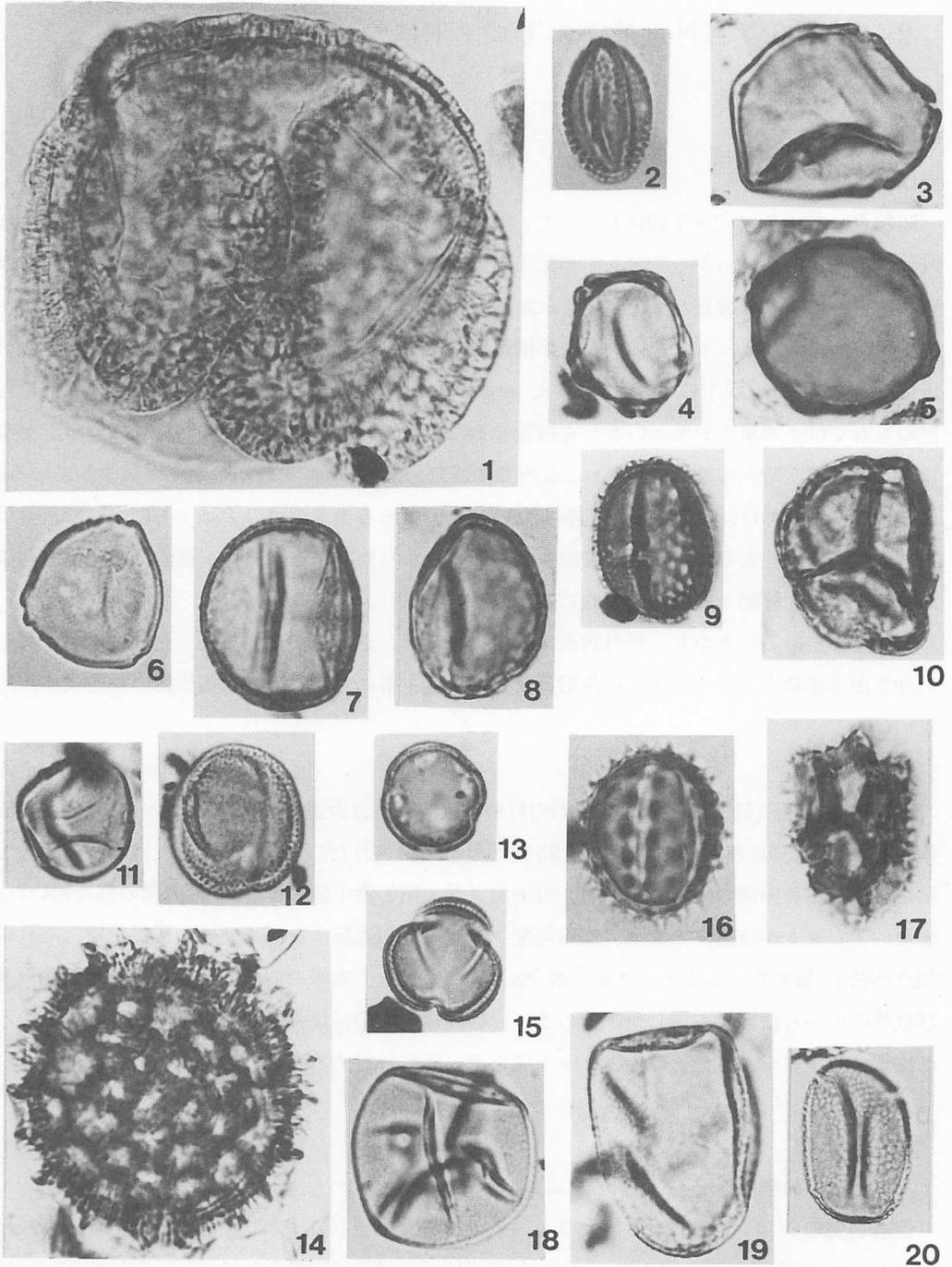
さて、住居や遺跡の生活空間はオニグルミ林や隣接したハルニレ、ミズナラ林を伐採してつくられたのであろう。これらの林は、構造材や薪炭材を供給しただけではなく、食料資源の供給源でもあった。筆者が発掘現場で見た泥炭質土から産出した植物遺体には、脂肪に富んだ種子が食用とされた多量のオニグルミの内果皮および破片、子葉を食用するために割かれたコナラ亜属の堅果皮、果実が食用となるキハダ、ブドウ属、マタタビ属、エゾニワトコなどの種子があった。サルナシ属、ブドウ属、エゾニワトコなどの花粉は検出されなかったが、エゾニワトコは別として、これらの蔓性樹木は上記の森林内に分布するものである。オニグルミは樹木花粉の大半を占めるほか、ドングリが実るミズナラ、果実が食用となるキハダの花粉も多く出現していて、林の中でも樹木数が多かったと考えられる。やはり堅果が食用となるハンバミ属

の花粉も僅かに出現している。これらの樹木が遺跡が造られる以前から多かったのか、遺跡が造られ有用な樹木が伐採から免れて多くなっていたかについては推測の域をでない。

水域はV層の腐植土が堆積する頃には乾燥したが、旧河道跡は窪地として残っていた。オニグルミ林はIV層の堆積が終わる頃まで残っていたが、III層の腐植土が堆積する頃には乾燥が進み、オニグルミ、ハンノキ、シラカンバ、ミズナラなどが混生した林になっていた。この頃にはオオイトドリ、アキカラマツ、オオヨモギ、キク亜科、イネ科からなる陽地性の草本群落が茂るようになっていたと推定される。

旧河川跡堆積物から産出した花粉・孢子

	III-1	III-3	III-4	V上	V中	V下	8	13	16
<i>Abies</i>	—	—	—	1	3	2	4	8	5
<i>Picea</i>	—	—	—	—	2	1	2	2	6
<i>Pinus</i>	—	—	—	—	—	1	1	1	3
<i>Salix-Populus</i>	—	—	—	—	—	1	2	3	5
<i>Juglans</i>	2	9	1	22	34	39	109	97	113
<i>Alnus</i>	5	2	1	1	14	10	8	6	12
<i>Betula</i>	1	1	1	—	2	1	2	6	6
<i>Carpinus</i>	—	—	—	—	1	2	—	—	—
<i>Corylus</i>	—	—	—	—	—	—	1	2	1
<i>Quercus</i>	2	2	—	3	13	23	54	40	31
<i>Ulmus</i>	2	5	2	2	8	10	34	36	18
<i>Magnolia</i>	—	—	—	—	—	1	3	2	2
<i>Sorbus-Prunus</i>	—	—	—	—	—	—	—	2	1
<i>Phellodendron</i>	—	—	—	—	3	5	9	9	8
<i>Euonymus</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	1
<i>Acer</i>	—	—	—	—	1	3	3	4	2
<i>Tilia</i>	—	—	—	—	1	—	1	1	1
Araliaceae	—	—	—	—	—	—	—	1	1
<i>Fraxinus</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Ericaceae	—	—	—	—	—	—	1	—	2
Urticaceae	—	—	—	—	—	1	3	1	2
Polygonaceae	3	2	3	1	8	5	8	4	6
Caryophyllaceae	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Ranunculaceae	5	3	12	—	1	4	5	5	8
Rosaceae	—	—	—	—	—	1	—	—	1
Balasaminaceae	—	—	—	—	—	—	1	2	1
Umbelliferae	1	1	—	1	1	3	4	2	4
<i>Artemisia</i>	15	39	13	1	12	4	4	10	6
Carduoideae	6	12	1	1	6	2	2	1	3
Cichorioideae	—	—	—	—	1	4	1	—	1
Potamogetonaceae	—	—	—	—	—	—	6	6	1
Typhaceae	—	—	—	—	—	1	2	—	—
Gramineae	9	15	17	8	36	28	35	36	38
Cyperaceae	1	2	2	3	11	34	48	29	68
Osmundaceae	—	1	1	—	1	4	3	3	6
Lycopodiaceae	—	1	—	—	—	2	1	1	2
Monolate type spore	5	3	3	2	16	2	8	8	24
Trilite type spore	—	—	—	—	2	1	1	1	1
合計 (個)	57	98	57	26	177	195	366	330	391



産出した主な花粉・孢子

1 *Abies* 8層、 2 *Salix-Populus* 16層、 3 *Juglans* 16層、 4 *Alnus* 16層、 5 *Carpinus* V層下、 6 *Corylus* 13層、 7 *Quercus* 16層、 8 *Ulmus* 16層、 9 *Phellodendron* 8層、 10 Ericaceae 16層、 11 Urticaceae 8層、 12 Polygonaceae 8層、 13 Ranunculaceae III-4層、 14 Polygonaceae 8層、 15 *Artemisia* III-3層、 16 Carduoideae V層中、 17 Cichorioideae V層下、 18 Gramineae 16層、 19 Cyperaceae 16層、 20 Balasaminaceae 13層 (倍率は×750)

2. 納内6丁目付近遺跡のTピットについて

帯広百年記念館 佐藤孝則

はじめに

昭和62、63年度の2ヶ年間にわたって、深川市の納内6丁目付近遺跡で発掘調査がおこなわれた。そのさい、いわゆるTピットが深川市内の遺跡では初めて、また道北地方では旭川市の忠和2遺跡につぐ2番目として発見された。

Tピットは溝状ピットともいい、動物捕獲用の落とし穴、とりわけ当時生息していたニホンジカ *Cervus nippon* (現生のエゾシカ *C. n. yesoensis* と体型はほとんど同じか、それより少し大型のもの：以下で単にシカという) を捕獲するための“わな”の一つと考えられている。そのほとんどは縄文時代中期に構築され、道内では道央、道南地域にそれらの発見が集中している。

そこで、本稿では、道北地域では数少ない発見例である当該遺跡のTピットについて、落とし穴としての有効性とその可能性を動物生態学的視点から検討する。特に、積雪期と非積雪期におけるシカの大移動との関連を中心に検証する。

本稿をまとめるにあたり、野外調査や資料提供など、さまざまな面で便宜を図っていただいた(財)北海道埋蔵文化財センターの西田茂文化財保護主事に対し、深甚なる感謝の意を表す。

分析材料

Tピットは昭和62、63年に深川市納内町の納内6丁目付近遺跡で発掘されたものを用い、62年のもの22基、63年のもの1基の計23基が分析に供された。分析にあたっては本報の前段で示されている計測値の中から長軸値、短軸値(最大値と最小値の平均)、最大深の値を用いた。また、Tピットが位置する標高、傾斜勾配、Tピットと近接する河川までの最短距離、それに調査・発掘面積に対するTピット数(数/ha)についても、本報の前段で示されている計測値及び数値の中から抜粋・引用した。そのさい、標高は平均値、傾斜勾配は標高の一番高いところに位置するTピットと最低位のTピット間との、距離に対する高さの割合で示した。

結 果

1. Tピットの形態

佐藤(1986)が用いた基準によってTピットを分類すると、A₁型はなく、底部短軸長が7cm以上20cm未満のB₁型が16基、20cm以上34cm未満のC₁型ものが6基、そして34cm以上のD₁型ものが1基であった(図1)。また、底部にさらに小ピットがみられるTピットは確認されなかった。そこで、タイプ別長軸長、短軸長、深さに対する分析資料数(N)、平均値(\bar{x})、標準偏差値(SD)を以下に示す(表1)。

B₁型のもは、開口部の長軸長の平均が 139.9 ± 16.20 (標準偏差値を示す。以下同じ)cmで、

短軸長は 30.5 ± 9.40 cm であった。また底部での長軸長は 138.2 ± 15.93 cm、短軸長は 13.9 ± 2.91 cm で、深さは 68.3 ± 16.47 cm であった。

C₁ 型のは、開口部の長軸長は平均が 180.8 ± 27.95 cm、短軸長は 49.8 ± 17.22 cm、底部の長軸長は 174.2 ± 26.54 cm、短軸長は 24.8 ± 3.37 cm で、深さは 87.8 ± 17.29 cm であった。

D₁ 型のは、開口部の長軸長は 201 cm、短軸長は 57.5 cm、底部の長軸長は 170 cm、短軸長は 36 cm で、深さは 70 cm であった。

2. Tピットの構築環境

石狩川は上川盆地西端の神居古潭の溪谷を急流となって西へ下り、蛇行して大きく北西へ向きを変え、流れが緩やかになったあたりに中洲を形成している。Tピットの 23 基は中洲北側の石狩川右岸で発見され、そのうちの 22 基は川岸から北へ最短距離で約 70 m 離れた場所、残りの 1 基は最短距離で約 280 m 離れたところに位置していた。これらが位置する標高は、前者 22 基の平均は 66.5 ± 0.14 (SD)m、後者は 69.3 m であり、その傾斜勾配は前者が 6%、後者が 0% であった。また、調査・発掘面積に対する Tピットの確認基数（密度）は約 23 であった。

考 察

1. Tピットの形態的特徴

当該遺跡で発見された Tピットの底部長軸長の平均は、B₁ 型が 138.2 cm、C₁ 型が 174.2 cm で、二つのタイプとも 200 cm 以下であった。この結果は、道内の代表的な遺跡で発見れた Tピットの底部長軸長と比較すると（佐藤、1986）、12 遺跡中「函館空港第 4 地点遺跡」「吉井の沢 1 遺跡」「S 267・268 遺跡」「美々 5 遺跡」「柏原 16 遺跡」「厚真 7 遺跡」「駒場 7 遺跡」「旭町 1 遺跡」「開成 1 遺跡」「茅沼遺跡」「宮本遺跡」の 11 遺跡すべては平均 200 cm 以上であった。しかし、同じ石狩川に近接する旭川市「忠和 2 遺跡」では B₁ 型が 74.5 cm、C₁ 型が 135 cm で二つのタイプとも当該遺跡同様、200 cm 以下であった。これは充分に、両遺跡の底部長軸長が他の遺跡のものより短い、といえよう。

また、両遺跡と他の遺跡を単純に比較できないが、深さにおいても両遺跡の B₁ 型が 62.0～68.3 cm の範囲であるのに対し、他の遺跡は 86.3～156.5 cm、C₁ 型でも両遺跡が 65.0～87.8 cm に対し、他の遺跡は 84.2～171.5 cm というように、少なくとも 12 遺跡の結果と比較する限りにおいて、両遺跡は道内でも特異な形態をもつ Tピットといえる。ただ、長軸長や深さが特異な Tピットであっても、目的に応じた捕獲をする限りにおいて、充分にそれらは機能するはずである。いずれにせよ、吉井の沢 1 遺跡の Tピットも下流部とはいえ石狩川沿いにあるため、忠和 2 遺跡と当該遺跡との関連性も含めた石狩川水系の Tピット群について、今後さらに比較・検討する必要があるだろう。

2. Tピットの構築状況

① 立地環境

当該遺跡で発見された Tピット群は、石狩川右岸の川岸から 70～280 m 離れた位置にあり、

標高は66~70 m、傾斜勾配は0~6%、そして密度は約23であった。これらは、Tピットが確認された道内12ヶ所の遺跡での結果(佐藤、1986)とほとんど同じであった。これは、Tピット群が構築された場所は、他の遺跡で確認されたように、当時のシカが移動のさいによく利用する場所といえる。また、川には中洲が形成されているため、川の水深は比較的浅く、シカの渡渉場所としては最適地となっている。

② 配列と有効性

当該遺跡で発見された23基のうち22基のTピット群は、比較的規則性をもった配列になっているが、それは立地する地形が同じような状況にあり、当時生育していた樹木の配置等との関連によるため、結果として規則性をもったに過ぎないと考えられる。

川岸から70 mあまり離れた22基のTピット群をみると、それらの長軸は川の流れに対してほとんど直角にのびている。これは、このうちの約73% (16例)が前肢骨折用(B₁型)であるように、川の流れに沿って追われてきたシカを捕獲する目的であれば、十分に機能する。地形状況からみると、右岸の川下または川上からきたシカが左岸へ渡るときか、あるいはその逆方向へ向かうときに捕獲したものと考えられるが、むしろ、前者の川下からきたシカの前肢を骨折させた後に川を渡らせたほうが、動きを制限されたシカを捕獲しやすく、より効果的と思われる(図2)。川を挟んだ対岸で発掘がおこなわれた内園2遺跡(北海道埋文、1988)では全くTピットが発見されなかったことを考えると、やはりこの仮説は正当と思われる。

また23基のTピットのうち1基は少し離れた場所にあったが、これはC₁型であるため、追われて北へ逃げたシカを生捕るためであれば落とし穴として十分に機能する。しかし、発見例が少ないため詳しい結論は出せないが、当該遺跡付近の中洲だけでなく、別の中洲を利用して川を渡ろうとしたシカを捕獲するためのTピットとも考えられるため、この1基が発見された周辺の更なる調査が期待される。

以上のように、これらのTピット群は、立地環境やシカの行動及び生態学的観点からみても、当時のシカを捕獲するための落とし穴と考えたほうが妥当であろう。さらにそれらを有効に利用するためには、佐藤(1986)が指摘するように、春から夏にかけて構築し、初秋から初冬にかけて利用したほうがより効果的である。それはまさに、発情期のシカがハレムを形成する初秋から、越冬を目的に積雪量の少ない地域へ移動を始める初冬の時期と一致する。

3. シカの季節的移動との関連性

石狩川は当該遺跡の周囲を蛇行し、Tピット群に最も近いところで比較的大きな中洲を形成している(図2)。このあたりは石狩川が上川盆地から平坦な平野部へ流れ出た地域で、急激な流れによって一方の川岸が削られ崖のようになっている(写真1)。そのため削られた崖の砂れきによって中洲が形成され、川幅も広がった結果、その近辺の水深は比較的周辺部より浅くなったものと思われる。また、兩岸にはきり立った崖はなく、川岸の高さは水面の高さに接近しているため、シカにとっては渡渉しやすい場所になっている。

シカの季節的移動を調査した犬飼(1952)は、昭和8年に十勝アイヌ(54歳)から以下の内

容を聴き取った。「石狩国の北部や天塩方面にいた鹿は秋になると幾つかの群が集まって大群になり、徐々に石狩川の支流である空知川（ユクツウラシベツ）のほとりをさかのぼって来て十月終りには今の幾寅附近に達し、そこから一部は美瑛方面に折れて、上川地方から来た群と合流して、中央山系の最低鞍部に当るオプタテシケ山の北の麓でシュマヌプリ山との間から国境を越え、多くは十勝の音更の奥のナイタイを下って十勝平原にでた」。また、別の十勝アイヌ(55歳)からも同年に以下の内容を聴き取った。「空知川をさかのぼった群の他の一部は現在の落合辺を通過して更に水源地に至り、狩勝を越えて十勝に出て、昔トマムと云われた所に集った。更に一部の鹿は日高山脈の西部の低い山嶺を越えて沙流川の上流から日高に入った」という。そして雪が解け始める春になると、再び同じ道に戻っていったという。

簡単にまとめると、道北地方にいるシカは、秋になると石狩川を渡ってその支流である空知川の川筋をのぼり、現在の幾寅あたりに集まる。そしてそこから、①美瑛方面へ向かって上川盆地から来た一団と合流してオプタテシケ山（標高2,052 m）とトムラウシ山（同2,141 m）間の鞍部を越えて十勝へ入るグループ、それに②落合を通過して狩勝峠へ向かい、一気に十勝へ入るグループ、さらに③落合からトマムを抜けて沙流川に入り、日高地方へ向かうグループに分かれたという。いずれにしても、秋になると道北の雨竜川を下って来たシカはどこかで石狩川を渡り、空知川の川筋へと移動をしたはずである。彼らは人間や天敵のオオカミが群れをなす平野を嫌って山麓沿いに移動する。しかし、神居古潭の激流を渡ってまで石狩川左岸へは行こうとしないため、結局、その川下の当該遺跡周辺の浅瀬を渡って左岸へ行くことになる。そして渡渉したシカは、神居山（標高799 m）とイルムケツ山（同865 m）の谷間を流れる内大部川の川筋をのぼり（写真2）、新城峠を過ぎてパンケ幌内川を下って空知川に合流したものと考えられる。

アイヌ時代にはシカは季節的な移動を繰り返し、決まった道を往復していた。同様に、縄文時代中期においても、シカの季節的な移動は毎年おこなわれていたと考えられる。これらから類推すると、当該遺跡で発見されたTピットは、初秋から初冬にかけての移動時期に、石狩川右岸の川下からやってきたシカの前肢を骨折させる目的で使われたわなの一つ、落とし穴であったと考えられる。しかしこの落とし穴を使った狩猟法は、佐藤（1986）が指摘するように、当時としてもマイナーな方法の一つであったと思われる。

引用文献

- 犬飼 哲夫(1952)「北海道の鹿とその興亡」『北方文化研究、7』
 佐藤 孝則(1986)「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北海道考古学、22』
 北海道埋蔵文化財センター(1988)「深川市内園2遺跡—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一」『北埋調報、51』

表1 タイプ別Tピットの長軸長、短軸長、深さの比較（ただし、Nは分析資料数、 \bar{x} は平均値（単位はcm）、SDは標準偏差値を示す）

	B ₁ 型			C ₁ 型			D ₁ 型			
	N	\bar{x}	SD	N	\bar{x}	SD	N	\bar{x}	SD	
長軸長	開口部	14	139.9	16.20	6	180.8	27.95	1	201	—
	底部	15	138.2	15.93	6	174.2	26.54	1	170	—
短軸長	開口部	16	30.5	9.40	6	49.8	17.22	1	57.5	—
	底部	16	13.9	2.91	6	24.8	3.37	1	36	—
深さ	16	68.3	16.47	6	87.8	17.29	1	70	—	

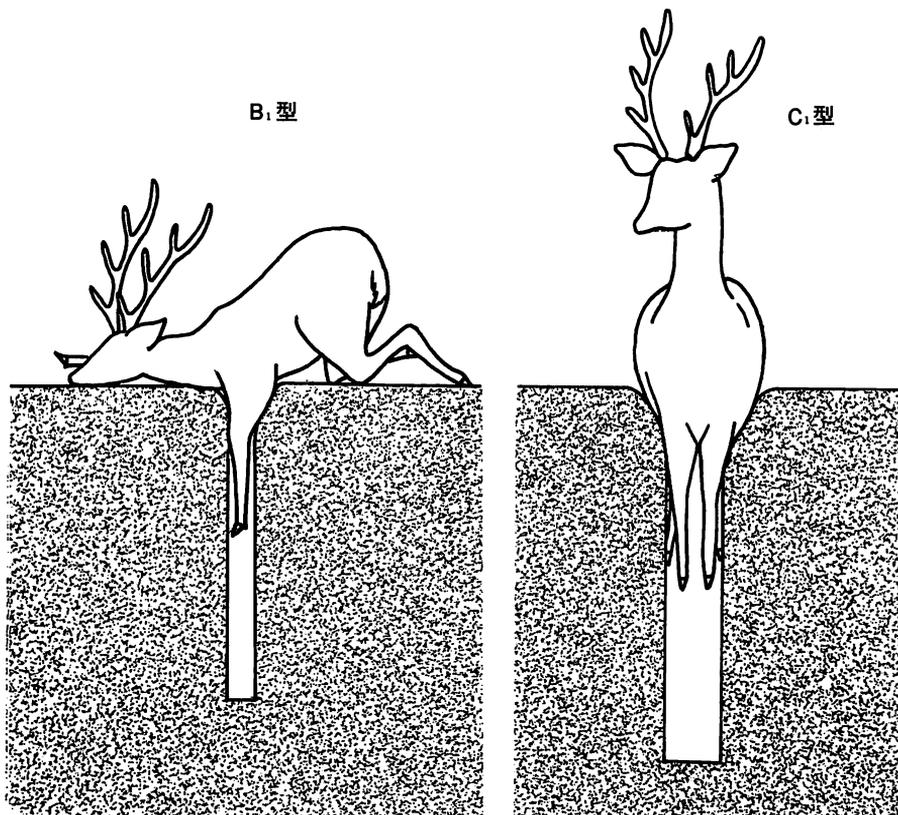


図1 シカがTピットに落ちた場合の模式図（佐藤、1986より一部変更して引用）

左図：B₁型Tピットに左前肢が落ち、骨折したところ

右図：C₁型Tピットに前・後肢が落ち、身動きが制限されたところ

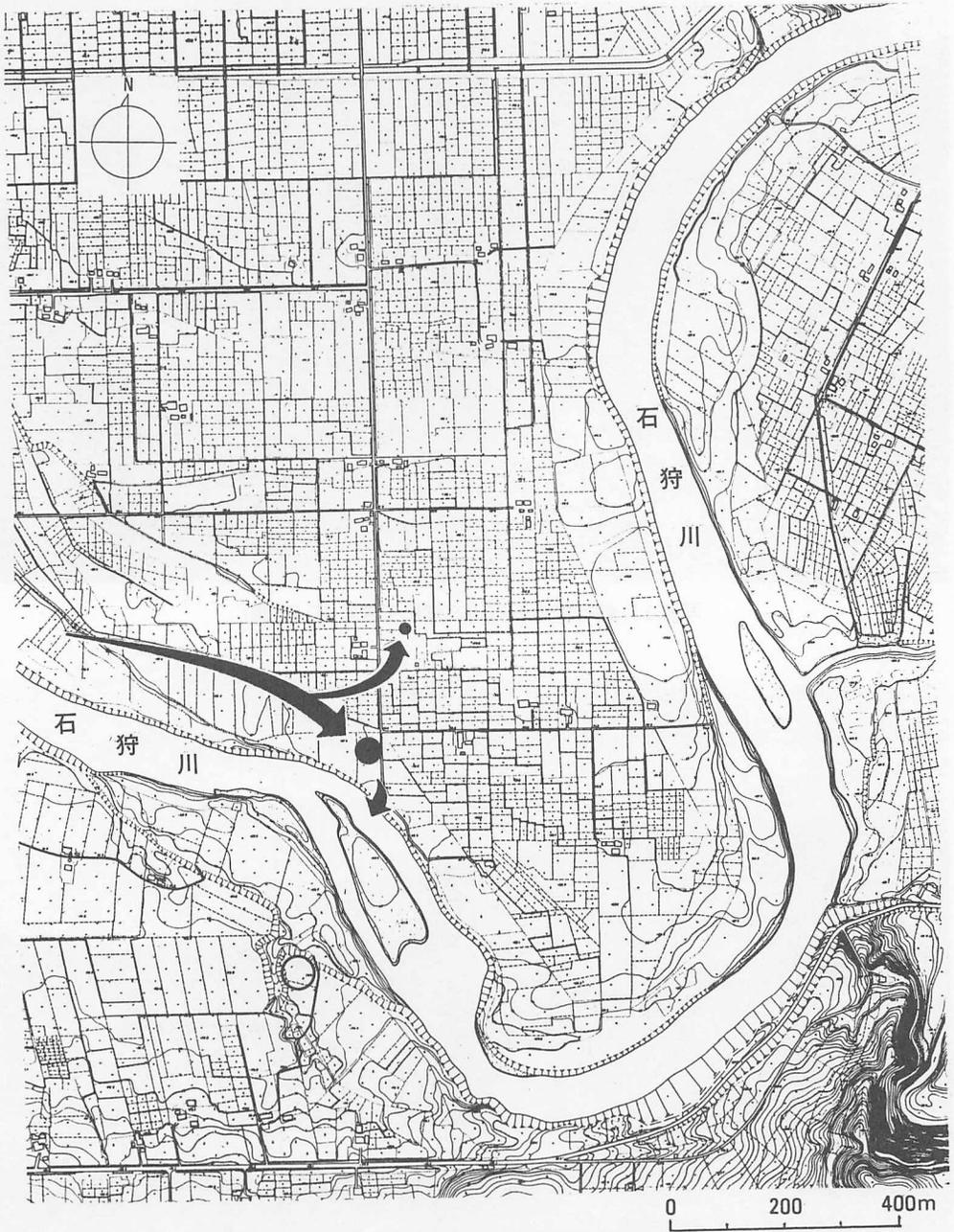


図2 Tピット発見地点（黒丸の大・小）及び捕獲時のシカの予想移動経路
 白抜き丸印は内園2遺跡を示す



写真1 蛇行する石狩川左岸にできた崖（右側）



写真2 シカが大移動に使ったと思われる神居山(左)とイルムケップ山(右)との谷間

3. 納内6丁目付近遺跡から出土した 土器に残存する脂肪の分析

北海道測量図工社総合科学研究所 福島道広、中野寛子、長田正宏
帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男

すべての動植物は体内に脂肪を持っており、それを構成する脂肪酸とステロールの化学組成は種によって異なる。最近、この脂肪は千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁽¹⁾。従って、考古学資料に遺存する脂肪の化学組成を現生の動植物のそれと照合すれば、脂肪の持主を特定することは可能となる。われわれはこの化学分析法を残存脂肪分析法とよんでいる。この手法は、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物種を実証し、空白となっている原始古代の生活環境の復原を可能にすると考えられる。

この“残存脂肪分析法”を遺跡土器に適用し、そこに残存する脂肪を分析して土器の性格を解明しようとした。

1 土器および土壌試料

納内6丁目付近遺跡は縄文時代早期～中期と推定されている。土器および土壌試料採取地点を図1に示す。試料No.1はN-37-C区5層から出土した下向き土器底部であり、試料No.2およびNo.3は土器試料No.1の中の土壌試料および直下の土壌試料である。試料No.4はN-37-C区5層から出土した上向き土器口縁部であり、試料No.5は、その直下の土壌試料である。それぞれの試料はヒト手に触れないように、アルコール消毒した移植ゴテを用いて採取を行った。採取後、試料はアルミ箔に包まれ分析まで冷凍庫で保存された。

2 残存脂肪の抽出

土器および土壌試料65～416gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理する。この操作を3回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量を加えて、クロロホルム層と水層に分配し下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出量は0.0008～0.0199%、平均0.0052%で全国各地の遺跡群から分離された残存脂肪の平均0.02%⁽²⁾と比較して0.25倍低かったが、分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロール、ステロールエステルの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3 残存脂肪の脂肪酸組成

土器および土壌試料の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃で2時間封管中で分解。メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノール-エチルエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽³⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から14種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)など11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料No.1の下向き土器底部試料の主要な脂肪酸組成はパルミチン酸で、約35%分布していた。次いで、オレイン酸約13%およびリノール酸約15%と高等動物の肉等を示す脂肪酸パターンであった(図2)。また高等動物の臓器、血液、神経組織などに特徴的に見られるベヘン酸およびリグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸も約13%占めており、動物油脂の付着を示唆した。試料No.2の土器内土壌試料およびNo.3の土器直下土壌試料ではパルミチン酸の他に不飽和脂肪酸であるオレイン酸が高く約30%前後分布していた(図2)。このことから植物腐植および植物系の脂肪がかなり多量に混入していることがわかった。試料No.4の上向き土器口縁部試料では、試料No.1と同様パルミチン酸が53.4%と主成分となり、次いで、ステアリン酸が18.6%占めていた(図2)。高級飽和脂肪酸は約11%分布し、動物油脂の付着が考えられる。試料No.5の土器下土壌試料ではパルミチン酸の他にパルミトレイン酸が23.8%占めていた(図2)。パルミチン酸が主成分の1つを占める脂肪酸組成は動植物にはまれにしか存在しないため、植物由来の不飽和脂肪酸であるオレイン酸、リノール酸およびリノレイン酸の分解産物であろうと推測される。土器試料ごとに脂肪酸組成パターンに多少の差が観察されるのは、付着した動植物油脂が異なることを示唆している。

4 残存脂肪のステロール組成

土器および土壌試料の残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から5~13種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど5種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析で同定した。

試料No.1で動物に特徴的に有するコレステロールが約14%と比較的高い割合で分布し、植物に特徴的に有するシトステロールは約25%占めていた(図3)。このことから、試料No.1に

は植物性油脂の他に動物性油脂が多量に付着していることがわかった。試料 No. 2 および No. 3 ではコレステロールが約 2~5%、シトステロールが約 46~73% 分布し (図 3) 植物腐植土のステロールパターンを示した。試料 No. 4 ではコレステロールが約 6%、シトステロール約 6% と他のステロールに比べ低い割合でしか分布していなかったが、動物油脂の存在を認めた。試料 No. 5 ではコレステロールが約 4%、シトステロールが約 55% 占め、植物系の脂肪が分布していた。また、微生物に特徴的に有するエルゴステロールは試料 No. 1、No. 3 および No. 4 で約 17~26% と比較的高く分布することから、カビ、酵母等の微生物が多く増殖していたと推定される。このことから、土器内には澱粉質のものも多く付着していたと推測される。一般に、動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロール比の指標値は 0.6 以上である⁽²⁾。従って、表 2 に見られるように、試料 No. 1 および No. 4 の土器片試料はステロール比がそれぞれ、0.567 および 1.080 となることからこの土器には、動物油脂の付着が示唆された。土壌試料である No. 2、No. 3 および No. 5 では分布比が 0.031~0.107 と非常に低く、植物腐植土を示唆する値を示した。これらの成績の先の脂肪酸分析の成績とよく一致していた。

5 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に現生各種動物植物および遺跡出土獣骨脂肪^(4,5) との類似度とも比較して、動植物種の特定を試みた。

土器および土壌の脂肪酸組成の類似度を相関行列距離で表した樹状構造図を図 4 に示す。下向き土器底部試料 No. 1 および土壌試料 No. 2、No. 3 はアカハラ、ツグミ、キジ、カワラヒワなどの野鳥、エゾシカおよびイルカなど少量の海獣の脂肪が付着しており、上向き土器口縁部試料 No. 4 は、ゴンドウクジラ、イワシなどの海産動物油脂の付着した可能性がある。

クラスター分析の成績から、納内 6 丁目付近遺跡出土土器片試料には、数種類の動物脂肪の混入が推測された。そこで、クラスター分析から導き出された数種の動物種のうち、行列距離の短い動物種の脂肪酸組成に基づいて、誤差の 2 剰和で最も小さくなるような動物種の組合せをラグランジェの未定係数法を用いて算出し、その分布割合を求めた⁽⁶⁾。

表 3 は土器片試料 No. 1 の動物油脂の分布割合を求めたものである。試料 No. 1 の分析値は、土器に付着する動物が三ツ谷貝塚エゾシカ油 1.1%⁽⁶⁾、現生ツグミ 0.3%、現生カワラヒワ 31.2%、現生アカハラ 4.0%、現生キジ 36.0%⁽⁴⁾ および南有珠遺跡イルカ油 27.4%⁽⁵⁾ の分布割合であるとき、計算上分析値に最も誤差なく近似することを示している。同様に土器片試料 No. 4 では現生ゴンドウクジラ 12.4%、現生カタクチイワシ 87.6% 分布していた (表 4)。以上ラグランジェ未定係数法から求められた土器片試料に残存する動物脂肪の分布割合の結果から、土器片試料 No. 1 はカワラヒワ、キジ等野鳥油脂で 71.5%、イルカ等の海獣油脂が 27.4% となり、これに哺乳動物のエゾシカ等がわずかに混じていたことになり、野鳥油脂および海獣油脂を多く付着していたことを示唆している。土器片試料 No. 4 は海産動物であるゴンドウクジラ、カ

タクチイワシ等の魚油が付着していた。特に、カタクチイワシ等魚介類は87.6%となり、油脂の大部分を占めていた。

6 総 括

納内6丁目付近遺跡から出土した土器片2試料中、試料No.1はパルミチン酸、リノール酸が多く哺乳動物、野鳥油脂に近く、No.4はパルミチン酸、ステアリン酸の他に海産動物に特異的に見られるアラキドン酸、イワシ酸、ニシン酸などの高度不飽和脂肪酸から誘導されたと推測されるアラキジン酸、ベヘン酸およびリグノセリン酸が多く分布し、魚介類油脂に近い特徴が見られた。このことは、土器の用途の違いを示唆している。その他の土器3試料はそれぞれの土器片に付着していた脂肪酸と植物腐植を示す脂肪酸が混じり合っていた。ステロール分析の結果からステロール分布比をみると土器片2試料ともステロール比0.567~1.080と分布していたことから、土器には主として野鳥、魚介類などの動物油を使用していたと推定される。また微生物に特徴的なエルゴステロールも多く分布しており、土器内に澱粉質のものも多く付着していたと推測される。また土器に残存する動物脂肪の分布割合は、野鳥油脂と海獣油脂をもつ土器、魚介類油脂だけをもつ土器の2形態に分類されることから、土器は用途に応じて、動物種を使い分け、そこに澱粉質の多い木の実などを入れて調理したものと推定される。しかし、納内6丁目付近遺跡は内陸に位置し、魚介類としては海魚より川魚の可能性も推測される。従って、脂肪酸分析からだけでは魚介類の種別を特定することは多少問題が残る。今後、免疫学的手法を取り入れて動物種の認定を行う必要がある。

参 考 文 献

- (1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)、1984、pp 124.
- (2) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp 40.
- (3) M. Nakano and W. Fischer：「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z. Physiol. Chem.』、358巻、1977、pp 1439.
- (4) 中野益男、福島道広、中野寛子、中岡利泰、根岸 孝：「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境—とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定(第7報)」、『日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨』、1987、pp 15.
- (5) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石製品に残存する脂肪分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所、第3集、1987、pp 191.
- (6) 大地羊三：「電子計算機の手法とその応用」、『土木工学大成』、第4巻、東京、森北出版、1970.

表1 納内6丁目付近遺跡の埋設土器試料および土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試料名	湿重量 (g)	全脂質 (mg)	抽出率 (%)
No. 1	下向きの土器底部土器片	278.02	7.2	0.0026
No. 2	下向きの土器内土壌	413.06	6.3	0.0015
No. 3	下向きの土器直下土壌	339.85	3.5	0.0010
No. 4	上向きの土器口縁部土器片	64.76	12.9	0.0199
No. 5	上向きの土器直下土壌	415.70	3.3	0.0008

表2 土器片および土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール (%)	シトステロール (%)	コレステロール/ シトステロール
No. 1	14.07	24.83	0.5670
No. 2	2.28	73.33	0.0310
No. 3	4.94	46.35	0.1070
No. 4	6.33	5.86	1.0800
No. 5	4.48	55.33	0.0810

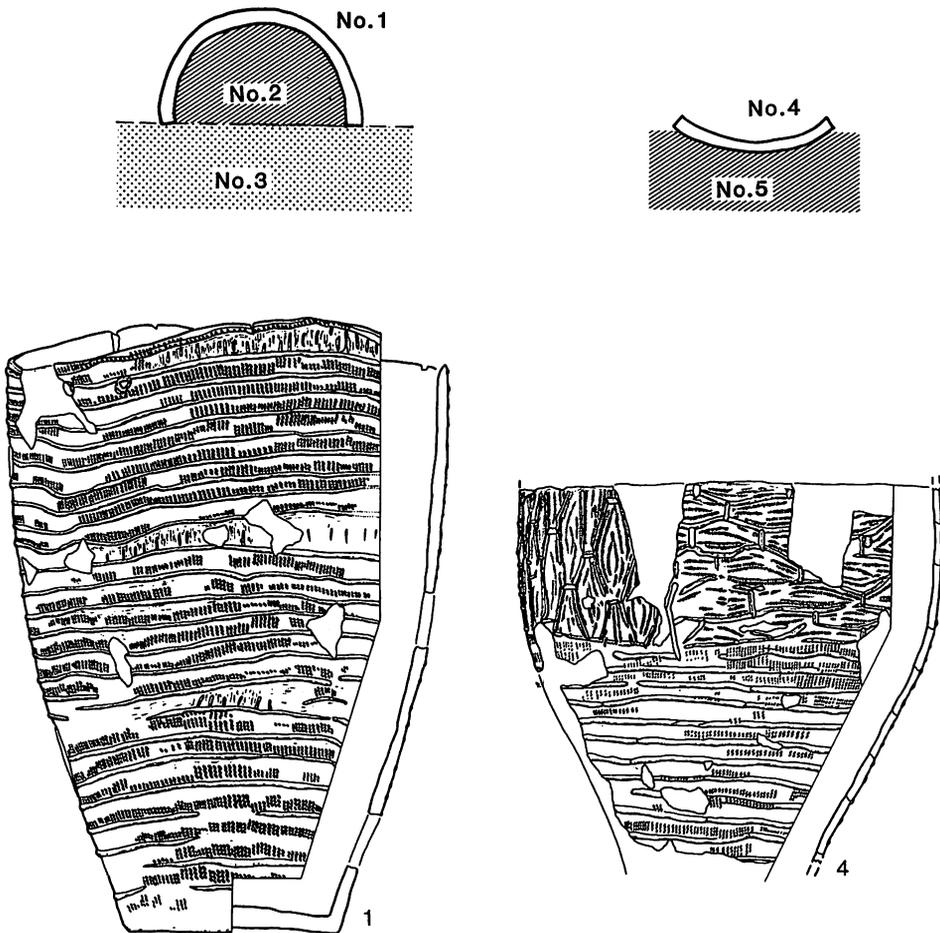


図1 土器片と土壌試料採取状況および土器復元図 (遺物集中3のもの、155ページ参照)

V 成果と問題点

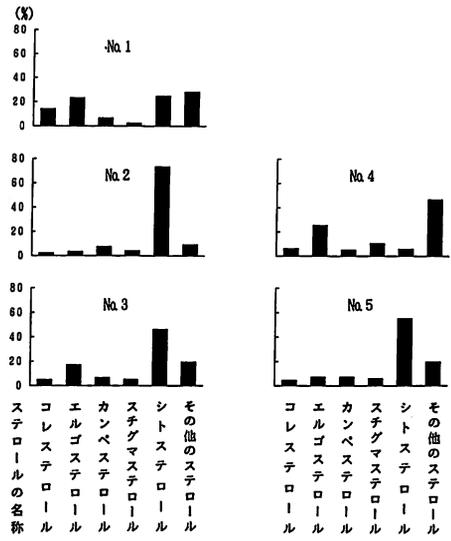
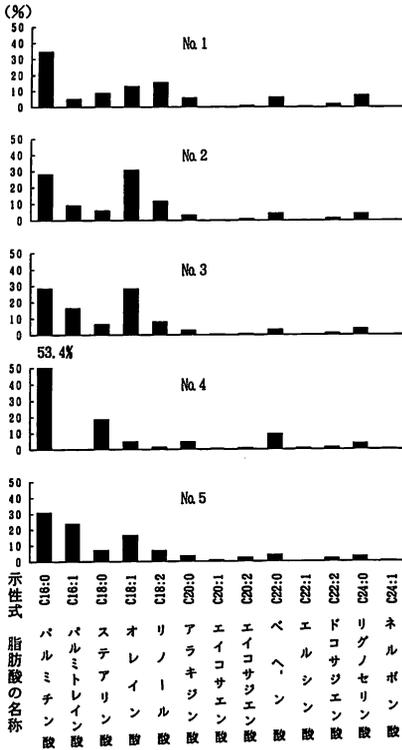


図2 土器片および土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

図3 土器片および土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

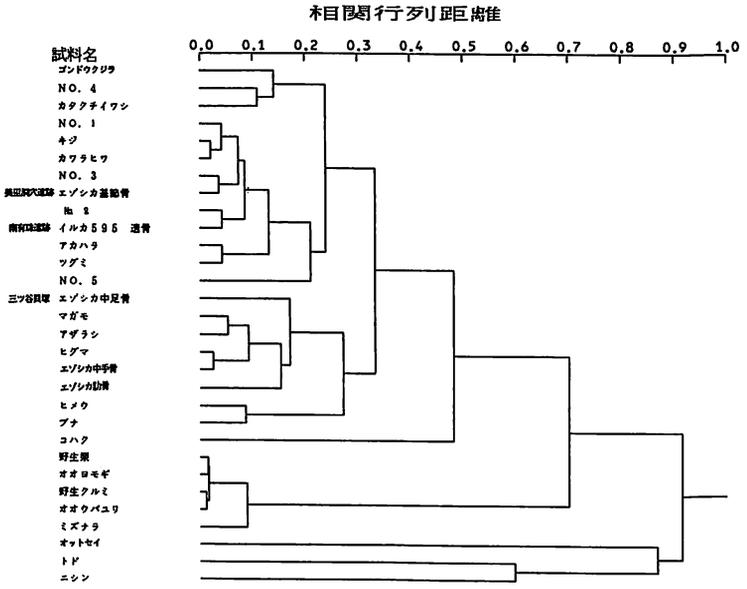


図4 土器片、土壌、遺跡獣骨および現生動物油脂の脂肪酸組成樹状構造図

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第55集

深川市 納内6丁目付近遺跡

平成元年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 興国印刷株式会社
〒063 札幌市西区手稲東3南1丁目
TEL (011) 665-4155

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て増刷したものです。